真・恋姫†無双　～戦乱を駆ける狼達～

シャドウウルフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双　～戦乱を駆ける狼達～

【Ｎコード】
Ｎ２８３４Ｑ

【作者名】
シャドウウルフ

【あらすじ】
１人はある男の暴挙を阻止するために、１人は友を影から支えるために、１人はある男を殺すために、１人は自分の居場所を奪った者に復讐するために、１人は自らの望みを叶えるために、２人は自分達を救ってくれた恩に報いるために、剣を取り、戦い、殺しあった……だがそれは、ほんの序章にすぎなかった……

初めて読む方は本編を読む前に必ず目を通してください（前書き）

ただの忠告文です。
本編を読む前に必ず読んでください。

初めて読む方は本編を読む前に必ず目を通してください

まず始めに、この小説は文才の無い作者の妄想、ご都合主義、厨二病くさい設定によって構成された、主人公がチート仕様の原作ブレイクの駄文小説にして処女作です。

その手の作品が嫌いだったり、苦手な方は今すぐに戻るをクリックしてください。

逆に、その手の作品でもぜんぜんＯＫ、原作ブレイク大いに結構、むしろもっとやれと言う肯定派の方はこのまま本編にお進みください。

なお、作者はリアルが多忙な身である上に文才が無い人間です。ですので、定期的更新はほとんど無理に等しいです。だからって書かない訳ではありません。そこを誤解せぬようお願いします。

定期的更新ができない作者の作品なら読みたくないと言う方は戻るをクリックしてください。

そんな作者の作品でも大丈夫と言う心の広〜い読者さんはどうぞ本編にお進みください。

こんなダメダメ作者が書いた駄文小説ですが、少しでも多くの方に読んでもらい、生温かい目で見守ってくれれば嬉しい限りです。

なお、メッセージ、感想などの返事に関しては余裕があればできる限り書こうと思います。

※とある理由により、以前とは書き方を変えたのですが、まだ今の書き方が手に馴染んでいないのと、試行錯誤を重ねているせいで、かなーり拙い文章になっています。読む際はご注意ください。

第1話　開かれる外史の扉（前書き）

最初に謝っときます。サーセン…（涙）
1話からメッチャ長い話になってしまった…
どうしてこうなった…オレの書き方が悪いのか…

第1話　開かれる外史の扉

この世界は高度な叡智や科学、魔法によって発展した平行世界。

我々の知る現代世界と平行して存在するこの別世界で、新たなる外史の突端の扉が今、開かれる……

……

……

…

ここは、この世界の中心に存在する都市『叡智の城（ヴァイスハイト）』。

そして、城の最上階、制御室内で対峙する七人の人影。

この城の全機能を制御していると思われる大型端末の前に佇む三人の人影。

対して、部屋の出入り口の前で佇む四人の人影。

この制御室と呼ぶにはあまりにも広い無機質な空間で、今にも殺し合いが始まりそうな、いや、正確には確実に殺し合いが始まる緊迫した空気が部屋に張り詰めている。

「影狼（かげろう）。どうあっても私の考えを理解するつもりは無いと言うのか？」

「……」

三人組の中央に立つ漆黒の長髪の男が対峙する、影狼と呼ばれる赤毛の男に問いかけるが、彼は黙って中央の男を殺気の籠もった視線で睨みつけるだけだった。

「黒狼（こくろう）。裏切り者の影狼を今更引き戻して何になるってんだ？　だいたい、『五色狼（ごしきろう）を裏切る者には死の制裁を』、そう言ってたのはテメェだろうが。だから、早くオレにアイツを殺させろよ……」

「僕も同感だね。話なんかしても時間を無駄にするだけだよ。それにしても、君みたいな殺人狂と意見が合うなんてね。明日は槍でも降ってくるんじゃないの？」

「んだとぉ！？　テメェ……オレをバカにしてんのかっ！！　テメェも影狼と一緒にブッ殺されてぇのか！！」

「何だい？　殺る気なら相手になってやるよ……？」

黒狼と呼ばれる男の左右に立つ二人の、紺色の頭髪で右頬に刀傷がある眼つきの悪い男が口を挟み、茶色の長髪で前髪で左眼が隠れた男もそれに同意するも余計な一言が原因で睨み合いに発展する。

「金狼（きんろう）、銀狼（ぎんろう）、一度しか言わん。お前達は黙っていろ……」

「うっ……すみません」

「グッ……チッ！」

黒狼が禍々しい殺気を放ち二人の男、金狼と銀狼を黙らせる。

「さて、影狼……もう一度言おう。今からでも遅くはない。考え直すんだ。なんなら、そこに一緒に居る白狼（はくろう）と戦闘獣人（バイオロイド）の姉妹共々裏切りの件は帳消しにしてやるぞ」

「おやおや、貴方にしては珍しく随分と寛大な処置をなさるのですねぇ……どういう風の吹き回しですか？」

黒狼の問いに影狼の隣に立つ白狼と呼ばれる銀髪の女性が答える。

「私はお前達二人の能力を高く評価しているつもりだ。それに、この先の事を考えるとやはりお前達二人の力は必要不可欠なのだよ……」

「ふむ……」

「……」

白狼は顎に手を当て考える素振りをするが、影狼は相変わらず黙って黒狼を睨みつけたままである。

「お前達も知っているだろう。この世界が一度滅びかかった事を……」

「『滅びの日（デストラクション）』の事ですね……」

「そうだ……あの原因不明の大陸変動のおかげで世界の人口の半数以上が死に絶えた……」

「そして、その災害から数日後に現在の大陸の中央部に有った山岳部が突如崩れ落ちて『叡智の城（ヴァイスハイト）』が出現した……でしたよね？」

「そうだ……」

「そして、生き残った人々はこの大都市から得た知識と技術を使い何とか自立した生活ができるレベルにまで回復、そのまま発展をして今の世の中を形作った。確か魔法の概念も此処から得たんですね」

「ああ……だが、それでは終わらなかった。それは……」

「『叡智の城（ヴァイスハイト）』の存在が世界を東西に二分し争うきっかけ…つまり、戦争を引き起こす火種となってしまった……だろ？　黒狼……」

それまで終始黙っていた影狼が黒狼の代わりに続きを答える。

「そうだ……愚かにも東と西の指導者はこの『叡智の城（ヴァイスハイト）』を独占しようとせんがために戦争を始めた。おかげで世界は疲弊し再び滅び

の一途を辿っている始末……実に愚かしい話だ……」

「フッ……この戦争の片棒を担いでた人間が言う台詞じゃないでしょ。それは……」

静かに答える黒狼に対し白狼は冷ややかな視線を向け返答する。

「同感だな……この世界が滅んでいる一番の原因はオレ達自身なんだ。貴様にそんな台詞を言う資格は無いと思うぞ……違うか？　黒狼……」

影狼は冷静に黒狼に問いかける。

「フッ……確かにそうかもしれんな。だが、それも、もう終わる……私がこの都市の力を使って本当の意味でこの戦争を終わらせるのさ……私は東にも西にも世の統治を任せるつもりは無いんでな……」

「そのために世界をもう一度滅ぼす……貴様、第二の『滅びの日（デストラクション）』でも引き起こすつもりか？」

「影狼、この世界が腐敗と混沌に満ち溢れ最早救いようが無い事ぐらいお前も理解出来てるだろう？」

「……」

影狼は再び黙り込み、黒狼の言葉に耳を傾けるが、黒狼の説得にウンザリしてきたのか、視線を部屋の壁に逸らしている。

「植物と同じさ。根が腐り朽ち果てていてはどうしようもない。新しい植物に植え替えるしかない。それと同じように、この世界もゼロからやり直す必要があるのだよ」

「だからもう一度世界を滅ぼして、今居る人間を根絶やしにすると……？」

黒狼は白狼の問いを嘲笑うかのように軽く鼻を鳴らして返答する。

「フッ……違うな。根絶やすのではない。優れた人間を選定するためにふるいに掛けるのさ……」

「何だと……どういう意味だ？」

影狼は黒狼に視線を戻し、問いかける。

「全ての人間を滅ぼして世界を再生しても意味が無いだろ。だからと言って愚者を新世界に迎え入れるほど私は愚かではない。私が必要とするのは優れた人種のみだ」

「なるほど……今の地上を苛酷な環境にして、その環境下で生き延びた人間だけを保護する。そして、滅ぼした世界の再生を行なうと

……そう言う事ですか？」

白狼の問いに、黒狼は静かにうなずいて返答する。

「大まかに言えばそうなるな……」

「だから西軍を裏切ったのか？　此処を占領するために……」

「裏切る？　何を寝ぼけた事を言っているのだ？　私は端から西軍に忠誠など誓っていなかったさ。初めからこうする事が目的だったのだからな」

影狼の問いに黒狼は冷笑を浮かべながら答える。

「西軍の上層部の連中は、自分たちが五色狼を組織したと思い込んでいるようだがそれは違う。五色狼は私が独自に組織した私の部隊なのだよ。故に連中に従う道理など初めから無かったのさ。ただ、利用するために身を置いていた。そして、これ以上利用する必要性が無くなっただけだ……」

黒狼は淡々と言葉を発し、影狼と白狼は黙って聞くが、恐らく何を言った所で結果は変わらない。
そして、その事は黒狼自身も理解してるのだろうが、それでも彼は続ける。

「さて、下らん話はここまでだ。……影狼、今一度問う。私の元に戻ってくるのだ……」

黒狼が手を差し伸べ問いかける。

「白狼……」

「私はいつでも構いませんよ」

白狼は影狼の問いに落ち着いた口調で答える。

「奈々瑠（ななる）、臥々瑠（ががる）……お前達もいけるか……」

それまで、終始無言だった二人の黒色の長髪の少女の奈々瑠、茶髪の単発の少女の臥々瑠に影狼が問いかける。

「はい、兄さん」

「うん！いつでも大丈夫だよ！！」

「そうか……」

影狼は微笑みながらやさしく二人の頭を撫でる。そして、黒狼に向き直り一歩前に進み出る。

「黒狼……何度言われてもオレの答えは変わらん……」

「……」

「貴様はオレが何のためにここに来たか理解しているのか？」

「私を止めるためじゃないのか？」

影狼は黒狼の返答に冷酷な笑みを浮かべる。そして刀に手をかけ答えた。

「違うな。貴様を止めるために来たのではない……貴様を……殺すために来たんだよ！！！　起動せよ！！『叢雲（むらくも）』！！！」

影狼が己の魔力を解放し『神器（ディバイン・アームズ）』を起動させる。

「まあ、そんな訳ですので、お手柔らかに頼みますよ。さて、仕事の時間ですよ……『双龍（そうりゅう）』！！」

白狼が腰の左右に下げてた剣を抜き、互いの柄を繋ぎ合わせて前後に刃のついた一本の長剣にして、影狼と同じく戦闘態勢にはいる。

「だから言ったじゃないか黒狼。話なんかしても時間の無駄だって」

「……」

金狼が話しかけるが黒狼は黙っているだけだった、が……なぜか黒狼は笑みを浮かべていた。
まるで、こうなる事を望んでいたかのように。

（ん？　笑ってる？　なんで？）

金狼はなぜ黒狼が笑っているのか疑問に思ったが、銀狼の下品な笑い声で現実に引き戻される。

「ヒャハハハハハ！　いいぜ！　オレはこの時が来るのを待ってたんだ！！　これで影狼（アイツ）と本気の殺し合いができるってもんだぜ！！！」

「ハア……君は随分と楽しそうだねぇ……」

金狼はこの状況にすっかりハイになってる銀狼に呆れ果てた視線を向けるが、当の本人も口の端を三日月のように吊り上げながら白狼に殺気の籠った視線を向けながら続ける。

「まあ、僕も最初から殺るつもりだったから構わないけどさ……」

「オイ、金狼……影狼はオレの獲物だ。手出ししたらテメェも殺すからな……」

「勝手にしなよ……そっちこそ僕の邪魔をしないでくれよ」

「さあ……起きやがれ!!　『村正（むらまさ）』!!　楽しい殺し合いの始まりだぜ!!!」

「じゃあ、殺ろうか……『ゲイボルク』」

銀狼が腰に下げてた刀を抜刀し、金狼は背に背負っていた細身の深紅の槍を構え臨戦態勢に入る。

「影狼!!　今日こそハッキリさせてやるぜ!!　どっちが上で、どっちが下かをなぁ!!!」

銀狼が影狼に村正を突きつけながら吼える。

「チッ!　相変わらずウゼェ野郎だ。奴に構ってる暇は無いってのに……」

影狼が苛立ちの表情を浮かべ銀狼に視線を向ける。

「兄さん。あのバカの相手は私と臥々瑠に任せてください」

「そうそう、あんな奴、兄さんが相手をするまでも無いよ。アタシと奈々瑠で十分だよ」

「二人とも大丈夫か？　奴の村正の能力が厄介なものだって事は知ってるだろ？」

影狼は奈々瑠達に心配げな視線を向けながら聞くが、奈々瑠達は余裕の表情である。

「問題ありませんよ。あのバカに村正の力を最大限まで引き出すことなんて出来やしませんから」

「だから安心して」

「……分かった」

「なら、金狼の相手は私に任せてもらいましょうか。どうせ彼の目的は私なんですから」

「白狼……」

「ん？　何です？」

「……死ぬなよ」

「貴方もね……」

「奈々瑠、臥々瑠、お前達もだぞ……」

「ええ、分かってます」

「アタシ達のことなら心配ないよ、兄さん」

「フッ、そうか……」

影狼は三人の台詞を聞いて安心したのか表情から苛立ちが消える。
そして、改めて黒狼に向き直る。

「よし……いくぞぉ！！　お前達！！」

「ええっ！！」

「はい！！」

「うん！！」

影狼が三人に号令をかけ、黒狼に向かってダッと走り出す。

「コラァ！！　影狼！！　オレを無視してんじゃねぇ！！！　テメェの相手はオレだと言って……うおっ！？」

銀狼が影狼の行く手を阻もうとしたが、二人の少女の刃が襲い掛かって来たため間一髪でそれをかわし、その場にビュンッと空を斬る音が響いた。

「どこに行くつもり？　貴方の相手は私達で十分でしょ？」

「そうそう。兄さんの邪魔はさせないよ！！」

「『叡智の城（ヴァイスハイト）』で創られた戦闘獣人（バイオロイド）如きが、オレに盾突こうってのかぁ？」

銀狼が殺気の籠もった眼つきで二人を睨みつける。
それに応じるように二人も黙ったまま自分達専用の二本組みの小太刀を構え銀狼を睨み返す。

「おいおい。まさか、その『模造兵器（イミテーション・アームズ）』でオレと殺り合うつもりじゃねぇだろうなぁ？」

「そのまさか……だけど？」

臥々瑠が余裕たっぷりの表情で答える。

「やめときな。お前らが強い事はオレだって知ってるさ。だがなぁ、

どんなに強いお前らでもオレには勝てねぇよ。その模造品が神器（オリジナル）に敵うわけないだろ……」

「あらあら、村正をろくに使いこなせてないバカにそんな事言われるなんて心外ね」

奈々瑠がいかにもバカにしたような表情を向けながら銀狼に言い返し、その言葉が癇に障ったのか、銀狼の眼つきがスゥッと細まる。

「ああ？　おい……テメェ、今、何て言った……」

「ん？　貴方、頭だけじゃなく耳も悪くなったの？」

奈々瑠はあくまでもバカにした態度をやめずに続ける。その態度に銀狼は次第に苛立ちはじめ、左手を何度も握ったり開いたりを繰り返し始める。

「テメェ……」

「仕方ないわね。頭と耳の悪い貴方のためにもう一度言ってあげるわ。……『村正をろくに使いこなせてないバカ』って言ったんだけど？　それとも、村正に使われてる大バカと言うべきだったかしら？」

「んだとぉ！？　このクソガキがぁ！！！」

奈々瑠の挑発に銀狼が激昂する。

（うわ～～、銀狼の奴、間違いなく切れてるよ。相変わらず単純な奴だなぁ。それにしても、奈々瑠も相変わらず口が悪いや…）

「上等だぁ！！　ウォーミングアップも兼ねてお前らから先にブチ殺してやる！！！」

銀狼が殺意をむき出しにして、標的を奈々瑠達に切り替え、村正を構える。

「奈々瑠、いくら注意をこっちに向けるためとはいえ、少しやり過ぎたんじゃないの？　銀狼の奴マジ切れしてるんだけど……」

「問題ないわよ。何、怖じ気づいだの？　臥々瑠……」

「そうじゃないけど……あの状態の銀狼の相手は面倒だって思ってさ……」

「文句を言わないの。アイツに兄さんの邪魔をさせる訳にはいかないんだから。それに、私達二人ならあんな奴の相手なんか余裕でしょ」

「うん、そうだったね……じゃあ、さっさと終わらせようか！」

「ええ！！」

「何ゴチャゴチャ話なんかしてんだぁ！！　余裕かましてんじゃねえええええ！！！！！」

痺れをきらした銀狼が二人に向かって村正を振りかぶりながら突進する。

「来るわよ！！　臥々瑠！！」

「うん！！　行くよ、奈々瑠！！」

「「はあああああああ！！！！」」

対する二人も銀狼を迎え撃つため走り出す。

……

……

…

一方、白狼と金狼は……

「あ～あ、銀狼の奴、頭に血が上ってあんな安っぽい挑発にすっかり乗せられてるよ……」

「フッ、彼の短絡的な思考は相変わらずのようですね……」

二人は銀狼達のやり取りを見て金狼は呆れた視線を向け、対する白狼は小バカにした視線を向けていた。

「では、こちらも始めるとしますか……ねっ！！」

白狼が瞬時に間合いを詰め、刹那の横薙ぎの一撃を金狼の首に目掛けて放つ、が……

「フッ！！！」

金狼は持っていた槍でその一撃を捌き、その場にキィンッと軽快な金属音が響く。

「チッ！」

白狼は苛立たしく舌打ちをし、反撃されないように素早くバックステップをして間合いを開いた。

「危ないじゃないか白狼。当たったら首が地面に落ちてるところだったよ……僕を殺すつもりかい？」

「ええ、そうですよ。殺すつもりで仕掛けたんですから……」

金狼の台詞に対し白狼が冷めた視線を向け返答する。

「おいおい、酷い事言うなぁ～。僕のこと殺したくなるほど嫌いなのかい？」

金狼はワザとらしく悲しげな表情をして白狼に聞くが、彼女は表情一つ変えずに淡々と続ける。

「ええ、大嫌いですよ……貴方が私に対して殺したくなる程の嫌悪感を抱いてるようにね……」

「あれ？　ばれてたんだ？」

「当然でしょ。あれだけ私に敵意を向けていたんですから。気付かないほうがどうかしてますよ…」

「そうか……なら、ひょっとして、まだ君が五色狼に居た頃事故を装って君を何度も殺そうとした事も……」

「当然、知ってますよ……」

「そうかぁ、全部ばれてたのか……なら、これ以上無理に語らう必要も無いか……」

「そうしてくれると有り難いですね。貴方と話をしてるだけで反吐が出ますから……」

「フッフッフ……アハハハハハハ！！！」

金狼は突如、左手で額を抑え、上体を後ろに逸らして心底楽しそうに笑い声を上げる。

「何です？　突然大声で笑い出したりして……とうとう頭がおかしくなりましたか？」

「いや、うれしくて、つい。君が裏切り者になってくれたおかげで僕は堂々と君を殺す事ができるんだからね！！」

金狼が狂気の笑みを浮かべ白狼に対し殺意をむき出す。

「白狼、僕が君を殺そうとしてた理由を教えてあげようか？」

「結構です。ある程度の見当はついてますから……」

「へえ～、そうなの？　なら聞かせてくれないかな……」

「私の持つ戦略家としての知識が貴方の持つ戦略家としての知識より勝ってる点……これが気に入らないんでしょう？　違いますか？」

「クックックッ……そうだよ！　正解だよ！！　白狼！！！」

金狼が狂気の笑みを浮かべたまま、手を叩いて称賛する。

「君が五色狼に来てから僕は戦略家としての居場所を失ってしまった！！　おかげで戦略家としてではなく、戦闘要員として戦場に駆り出される機会が大幅に増えてしまった！！　だから、君が目障りな存在だったんだよ！！」

「そう言ってるわりには『前線で銀狼と一緒に派手に暴れていた』、と言う話を結構聞いた事があるんですが……」

「別に戦う事自体は嫌いだったわけじゃない……。素質が有ったし、自衛のためにもと思い神器（ディバイン・アームズ）を手にしたんだ。だが、僕は銀狼と違って戦場で暴れる事に生き甲斐を感じてるわけじゃない！！　戦略家として敵と知識を競い合う事に生き甲斐を感じていたんだ！！」

「で、私がそれを奪ったと……そう言いたいのですか？」

「フッ、好敵手の存在はむしろ歓迎していたさ。だが、白狼……君は優秀すぎたんだよ。君は僕の一歩先どころか十歩先を行く天才だ。僕がどう足掻いたって知識で敵うわけがない……僕は必死になって考えたよ……。そして、ある一つの結論に至った。それは……」

「私を殺すこと……ですか？」

「そうさ！！　知識で勝てないのなら力で勝てばいい！！　至極単純な結論さ！！　この世界では最後に生き残った者こそが優秀なん

だよ！！！」

「やれやれ、結局貴方も銀狼と同類だったわけですか……」

「僕をあんな殺人狂と一緒にしないでくれないか……僕はアイツと違って人を殺すことに快感を覚える輩じゃないんでね……」

「おや？　それは失礼……なら、決着をつけましょうか。正直、貴方に付け狙われるのにもウンザリしていたので……」

「望むところだ……」

互いに武器を構えながらじりじりと間合いを詰め、睨み合う白狼と金狼。
お互い黙り睨み合っていたが、痺れをきらしたのか、金狼が白狼に向かって走り出す。

「白狼ーーーー！！　今日こそ死ねぇぇぇぇぇえ！！！」

それに、呼応するように白狼も金狼に向かって突進する。

「フン！　その台詞、そっくりそのまま貴方に返してあげますよっ！！」

「「うおおおおおおお！！」」

……

……

…

そして、影狼と黒狼は……双方ともに対峙したまま黙り睨み合っていたが、黒狼が口を開いた。

「あくまでも私の邪魔をするつもりなのか？　影狼……」

影狼は何も言わない。

「やめるのなら今からでも遅くはないぞ……」

「くどいぞ……」

影狼は苛立ち交じりに返答する。

「残念だよ……お前なら私の考えを理解してくれると思っていたのだがな……」

「まったく理解してないわけじゃない……世界を変えたい思いはオレも同じだ……」

「なら、なぜ私の……」

「貴様のやり方では意味が無いからだ……。オレは、世界を滅ぼし再生するなんて危険な選択をするつもりはない！！」

影狼は黒狼の言葉を遮るように怒鳴り散らす。
その態度を見た黒狼は、再び冷笑しながら口を開く。

「クックック……この世界に、そして、この腐りきった世の中を構築したクズどもに対して復讐したい一心で神器（ディバイン・アームズ）を手にした奴が言う台詞とは思えんな……」

「それは自分でも理解してるさ……だからと言って貴様の考えに賛同する理由にもならん！！」

「では、どうあっても……」

「オレの答えは変わらないと言ったはずだ！！　黒狼……貴様を殺す！！！」

影狼はそう言って居合いの構えを取り戦闘態勢に入る。

「私の邪魔をすると言うのなら……貴様は死ぬしかないな……」

黒狼はそう言いながら自分の目の前に右手をかざします。そして……

「来い……『魔王剣（ディスキャリバー）』！！」

黒狼がそう言った瞬間、黒狼の目の前に刀身が血のように真っ赤な剣が現れる。黒狼はそれを手に取り同じく戦闘態勢に入る。

「さあ、来るがいい。影狼……」

「……フッ！！」

影狼の姿がまるで雲のように霧散して黒狼の前から消える……が、次の瞬間。

「死ね！！」

突如、黒狼の背後に姿を現し胴に渾身の横薙ぎの一太刀を浴びせるが……

「フンッ！！」

黒狼は素早く反応し、持っていた剣で難なくそれを受け止め、そのまま鍔迫り合いへ持ち込む。

「今のが『霧散する雲（ヴォルケ・フェアシュヴィンデット）』か……相変わらず恐ろしい攻撃をしてくる奴だな……」

「ハッ！　いとも簡単に受け止めた奴がよく言うぜ……オレが背後から現れる事も読んでたんだろ！！」

「さあ？　どうだろうな……？」

双方一歩も引かない様子で剣を押し合い、ギリギリと金属の擦れ合う音が響くが、次第に力の均衡が崩れ、黒狼が優勢になり、影狼が押し返され始めた。

「クッ……！」

「フッ……フンッ！！」

黒狼が一気に力を籠め影狼を押しのける。

「グッ！？」

黒狼に押し負けた影狼がバランスを崩し、その一瞬の隙を突き、黒狼が影狼の左肩目掛けて剣を振り下ろす。

「斬！！」

「クウッ……！」

影狼は黒狼の斬撃をバックステップで辛うじてかわし間合いを開いた。

「フッ……よく躱したな。……どうした、もう終わりか？」

「ハア、ハア……ハア……ッ！　まだまだ、勝負はこれからだ！！」

影狼は呼吸を整え、体勢を立て直し再び居合いの構えを取る。

「……フッ」

黒狼は、ふと視線を後ろにやり小さく笑った。

「余所見とは随分と余裕じゃないか……」

「いや、なに……向こうも随分と派手に殺りあってるなと思っただけさ」

「ああ？」

影狼は黒狼何を言ってるのか理解できずに首を傾げる。
黒狼は影狼に後ろを見るよう促し、影狼は体勢を維持したまま後ろに視線を向ける。

……

……

…

「ウグッ……！　このクソガキどもがぁ！！　調子に乗りやがってえぇぇぇ！！」

銀狼は二人の動きに翻弄され、防戦一方の状況に苛立ちを募らせていた。

「へへ～ん♪　所詮アンタの足じゃアタシ達の動きには追いつけないのよ♪」

「フン！　そんなに悔しいのなら村正の能力を使ってアタシ達を切り刻んでみなさいよ」

「ほざいたな！！　いいだろう！！　フーー……」

銀狼はその場に立ち止まり、右眼を手で押さえ集中するように息を

吐く。そして…

「『朱の眼（ロート・アウゲン）』……開眼！！」

銀狼が右眼を開くと、その眼は朱色に変化していた。

「クックック……覚悟しろよガキども。お望みどうりみじん切りにしてやるぜ！！！」

そう言って銀狼は居合いの構えを取る。

「ようやくその気になったわね……臥々瑠、分かってるわね。アイツの右眼の視界内に絶対に入っちゃ駄目よ！！」

分かってるって！！　それより、来るよ！！」

「お遊びはここまでだ！！　死ねえぇぇぇぇぇ！！！」

銀狼は野獣のように大声で咆えながら奈々瑠達に襲い掛かる。

……

……

…

「ほらほら、どうしたんだよ！！　白狼！！　逃げ回るので精一杯かぁ？」

金狼は白狼に向かって高速の連続突きを浴びせる。

「クッ……！」

白狼は金狼の連続突きをかわすのが精一杯で近づくことができない状況にあった。

「どうした、白狼！！　遠慮せず正面からかかって来てもいいんだよ！！」

「フッ、冗談言わないで下さいよ。そんな事したら胸に風穴が空いちゃいますよ」

「ああ……『アレ』ならまだ使うつもりはないよ。魔力を膨大に消費するし、万が一外したら僕が圧倒的に不利になるからね……切り札は最後まで取っておくもの……さっ！！」

金狼が白狼の額に目掛けて渾身の突きを放つ。

「ウッ……！　ハアッ！！」

白狼は素早く反応し、双龍を振り上げそれを弾き返す。

「なっ！？」

渾身の突きを弾かれた金狼はそのままバランスを崩してしまい、その隙を突くように白狼が一気に間合いを詰めて双龍を振り下ろす。

「せいっ！！！」

「クウッ！！」

金狼は辛うじて白狼の斬撃を受け止め、力で押し返そうと競り合いを始める。

「クッ……！　やってくれるじゃないか！！」

金狼は苛立ち交じりに唇を噛みながら白狼を睨み付ける。

「やれやれ。そのまま真っ二つになってくれればよかったんですがねぇ……」

白狼はいつもの事と思ってるのか、金狼の視線をさらりと受け流し、静かに物騒な発言をする。

「悪いけど、君を殺すまで死ぬつもりは無いんでね」

「奇遇ですね……私も貴方を殺すまで死ぬつもりは無いんですが」

「フンッ！！　面白い、やってみなよ！！」

「そっちこそ！！！」

……

……

…

「あの様子なら向こうもすぐにカタがつきそうだな。では……こちらも続けるか」

「フッ……次で終わらせてやる」

双方が最大の一撃を放とうと武器を構え集中力を高める……。と、その時、室内に異変が起きた。

「む？　これはっ！？」

「なっ、何だ！？　光が……」

突如、制御室内が白い光に包まれ始めた。あまりの出来事に、その場に居る全員が戦いの手を止めてしまった。

「な、何なのこれ！？　奈々瑠、何が起こってるの！？」

「わっ、私にも分からないわよ！！　でも、あまり良い状況じゃない事だけは確かね」

「これは、神器同士の共鳴反応（ディバイン・アームズ）……って訳ではなさそうですね」

「白狼……敵の君に言うのもなんだけど、冷静に分析してる場合じゃないと思うんだけど。なんだか、光がどんどん広がってる気がするし。それに……何か頭もボーっとしてきた……」

「オイ！　何だよこれは！？　一体何が起こってんだ！！　影狼！！　テメェ、何しやがったぁ！！！」

「何もしてねぇよ！！　何でもかんでもオレのせいにするんじゃねぇ！！！」

あまりの事態に影狼達はすっかり混乱していた。ただ、一人を除いて……

（忌々しいな……。またしても『アレ』が始まるのか……。フン！まあいい、邪魔をされるのは癪だが、退屈しのぎに付き合ってやろうではないか……）

「クッ……何が起こっていようと関係無い……奴を……殺す事に……クソ……意識が……薄れて……」

影狼は朦朧とする意識の中、黒狼に立ち向かおうとするが、まるで全身に鉛でも流し込まれたように体全体が重くなり、思うように動けなかった。

「影狼……貴様との決着は次の機会までお預けだな」

「何……だと……？」

影狼は声が聞こえる方向を向くが、光が既に室内全体を覆いつくしていたため黒狼の姿は見えなかった。

「クソ……どこだ……気配が……掴めない……白狼達は……」

「安心しろ、死んではいない。ただ、お前より一足先に『外史』に降り立っただけだ……」

「外……史……？　貴様……何を言って……」

「そろそろ時間だな……お前もせいぜい、この先の『外史』の旅を楽しむがいい」

「おい……まだ……話は……終わってな……クッ……ダメ……だ……意識が……」

影狼の意識は、そこで途絶えた……

第1話　開かれる外史の扉（後書き）

作者「は～い、どうも。この作品の作者で～す」

影狼「……」

作者「ん？　ちょっと、影狼さん。ほら、挨拶して」

影狼「はあ……この作者の妄想から生まれた主人公の影狼だ」

作者「やめてくんない！！　その言い方！！」

影狼「何だよ？　違うのか？」

作者「……次に進もう、次に！」

影狼「おい。今の間は何だ？」

作者「ん～？　何の事？」

影狼「時間の無駄だ。さっさと終わらせるぞ」

作者「はいはい。いや～、ついに投稿しちゃったぜ」

影狼「ああ……よくこんな駄文小説を投稿する気になったな」

作者「駄文って言うなよ！！　傷つくだろ！！」

影狼「事実だろうが……まあ、投稿したからにはちゃんと最後まで

書けよ」

作者「はい。読者の期待を裏切らないために最後まで走り抜くさ」

影狼「口で言うのはガキにもできる事だ。大事なのはそれを実践する事だぞ」

作者「ああ……じゃあオレ、今から一狩り行って来るぜ！」

影狼「おい！　テメェ！　オレの話を聞いてなかったのか！　モンハンやってる暇があるんなら……」

作者「うっせぇ！　息抜きも必要だろうが！　じゃあな！！」

影狼「まてコラ！！　ああ……行っちまいやがった」

影狼「しかたない……ここはオレが。では、作者に代わりこの作品を読んでくれた読者に感謝の言葉を。ありがとう……作者はあんな奴だがこれからも生温かく見守ってやってくれ……じゃあ、次の話で会おうぜ」

オリキャラ設定（前書き）

オリキャラ設定です。
7人分もあるから長い長い。
穴だらけな設定かもしれませんが大目に見てください……

オリキャラ設定

コードネーム：　影狼（かげろう）

本名：　音無零治（おとなしれいじ）

身長／年齢：　１８１ｃｍ／１９歳

容姿：　瞳の色は蒼。髪は肩の辺りまで有り、赤毛のツンツン頭。（Ｆ〇？のク〇ウド程のツンツン頭ではない）顔の方は、白狼曰く、並みの女性なら声をかけるだけで一瞬で落とせるらしい。（実際にした訳ではない）服装は、全身黒ずくめのロングコート姿。（この服装は五色狼のメンバー全員共通である）

所有神器（ディバイン・アームズ）：　叢雲（むらくも）

外観：　見た目は普通の日本刀。ただし、鍔が付いてるタイプではない。

（分かりやすく言うと、ぬ〇孫のリ〇オが持ってる刀と同タイプ）

固有スキル

雲の幻影（ヴォルケ・ゲシュペンスト）

簡単に言えばあらゆる物理攻撃が効かなくなる無敵技。ただし、魔力を膨大に消費するため長時間の使用はできなず、せいぜい３０秒ぐらいが限界らしい。攻撃が当たった部分が雲のように霧散し、揺らめきながら元に戻る事からこの名が付けられた。

霧散する雲（ヴォルケ・フェアシュヴィンデット）

体を雲のように霧散させ姿を消し、別の場所に姿を現す転移技。移動距離に応じて消費する魔力が上下する。最大移動距離は１０ｍぐらいである。

本作の主人公。元々は西軍の一兵士であったが、その突出した才能と実力を黒狼に見出され、五色狼への入隊話を持ちかけられ入隊した。その後は、影狼として主に、敵地での情報収集、要人の暗殺などの任務、裏の仕事を請け負っていた。時には昔のように、金狼、銀狼と共に前線に出る場合もある。その際、よく銀狼と諍いを起こしていた（実際は、銀狼が一方的に食ってかかり、影狼がそれを無視した事に銀狼が逆上してただけ）らしい。
戦闘時は叢雲の能力を生かした一撃必殺の居合い、コートの下に隠し持っている投げナイフ等で相手を仕留める。ちなみにナイフを隠し持っているのは影狼だけである。
根は悪い人間ではなく、白狼や、妹のような存在と思ってる奈々瑠、臥々瑠には優しい一面を見せるが、仲間を傷つける者、本人が世界に仇なす害悪とみなした者には一片の容赦も無い冷酷な面も持ち合わせている。

コードネーム：　白狼（はくろう）

本名：　神威瑠利亜（かむいるりあ）

身長／年齢：　１７６ｃｍ／１８歳

容姿：　瞳の色はエメラルドグリーン、髪は腰の辺りまで有る白銀のストレートヘアーである。顔は五色狼内でファンクラブが存在する程の美女。（本人はファンクラブの存在を知らない）

また、服装のせいで判り難いが胸は意外と大きいらしい。

所有神器（ディバイン・アームズ）：双龍（そうりゅう）

外観：　先端部分が少し反り返ってる二本一組の西洋風の剣。

固有スキル

剣形態（シュヴェーアト・フォルム）

普段はこの形態。非戦闘時は腰の左右に有る鞘にしまっており、戦闘時は剣の柄同士を繋ぎ合わせ薙刀のようにして扱う。

弓形態（ボーゲン・フォルム）

繋ぎ合わせた剣に魔力で構成された弦を張り弓として扱う。双龍の本来の姿はこちらである。矢も同じく魔力で作り出すので魔力が尽きぬ限りいくらでも矢を放てる。

殺人蜂の矢（プファイル・キラー・ビーネン）

弓形態で使用可能のスキル。魔力で構成した大き目の矢を放ち、標的に近づくと広範囲に拡散し必ず標的のどこかに命中する矢。言い換えると命中する瞬間までどこに当たるか分からない矢なのである。しかし必ず標的のどこかに命中するので決して使えない訳ではない。ただし、この矢はあくまで複数の敵を殲滅するためのスキルなので敵が単体の場合はスキルは発動しない。

盗賊の守護（パトロン・デァ・ディープ）

剣形態で使用可能のスキル。完全無敵の防御壁を一瞬だけ張り他の神器（ディバイン・アームズ）の攻撃型スキルを受け止め、そのスキルをコピーできる。しかし魔力の消費が激しいため1回しか使えず、スキルも1つしかコピーできない。別のスキルをコピーする場合は、前のスキルを破棄す

る必要がある。
コピーしたスキルはそのまま使用するのではなく、スキルの特性を矢に反映して使用するため、どんな効果をもたらすかは使ってみるまで分からない。また、コピーしたスキルは使用者が破棄しない限り永久に使うことができる。

西軍で司令官の秘書官を勤めていた人物だったが、類い稀な情報処理能力、幅広い知識、戦略家としての才能を黒狼に評価され五色狼に引き抜かれる。黒狼が司令官を恫喝して引き抜いたと言う噂が流れてるが真実は定かではない。五色狼での役割は、作戦の立案や影狼が集めた情報処理など。戦場では後方支援が主だが、稀に最前線に出る事もある。しかし、もともと前線で戦うタイプではないので五色狼のメンバーの中で前線で戦った回数は一番少ない。そのため、戦闘能力は五色狼内最弱と言われてるが、あくまで五色狼内での話である。一般の人間から見れば十分強い戦闘能力を持っている。また、遠距離戦は得意だが近接戦闘は苦手なため、よく影狼に教えを請うなど努力家としての一面もある。これがきっかけで影狼とは親しい仲になっている。
基本的に誰とでも仲良くなれる温和な性格だが、戦闘時など敵に対してはその性格とは裏腹に冷酷な面を見せる。また、無類の酒好きで影狼とよく呑みに行ったりするが、本人は非常に酒癖が悪く、酔うと人格が豹変して周りに居る人間を病院送りにしてしまう程の凶暴な性格になる。（影狼もこれが原因で何度も殺されかけたらしい）
ちなみに、酔ってる時の記憶は本人には無い。さらに、どれだけ泥酔しても翌日には完全回復する異常体質者でもある。

コードネーム：　銀狼（ぎんろう）

本名：　不破彰（ふわあきら）

身長／年齢：　１８０ｃｍ／１８歳

容姿：　瞳の色は紺。髪も同じく紺色で長さは首筋辺りまでで、前髪は横に分けて流してある。
（判りやすく言うと、ディ○ガイアの忍者（男）みたいな髪型をしている）
顔は悪くないのだが、目つきが悪いうえに性格も最悪なので女性にモテルタイプではない。右頬には昔、模擬戦で影狼につけられた刀傷がある。

所有神器（ディバイン・アームズ）：　村正（むらまさ）

外観：　影狼の叢雲と同型。唯一違う点は柄と鞘が黒色である点。
（叢雲は浅い茶色である）

固有スキル

次元斬（ディメンションスラッシュ）
その名のとうり次元を斬り裂く事ができるスキル。ただしこのスキルは単体では使用できず、もう一つのスキル、朱の眼（ロート・アウゲン）を発動しておかないと使用できない。このスキルは銀狼が視認してる場所、及び空間に斬撃を浴びせる事ができる。ようするに斬りたい場所を視ながら剣を振ると同時にその視てる場所に斬撃が現れると言う訳である。また、魔力を溜めながら居合い撃を放つとその場所に時間差で無数の斬撃が連続的に襲いかかる時間差攻撃もできる。ちなみに斬撃は光の筋となって現れるので見切ろうと思えば見切れない訳でもない。

朱の眼（ロート・アウゲン）
次元斬（ディメンションスラッシュ）を使用するのに必要なスキルで、眼が朱色に変化するのが特徴である。本来は両眼に発動するのだが、銀狼の素質は人為的に与えられたが故か右眼にしか発動しない。
また、このスキルは眼に大きな負担がかかるもので、両眼に来る負担が銀狼の場合、右眼に集中してるので長時間の使用はできない。無理に使い続けると視力の低下、最悪の場合失明する危険性がある。

元は西側で服役中の殺人犯だったのだが、黒狼が人殺しの才能に目をつけ取引を持ちかけ、刑期の減刑を条件に五色狼に入隊した。今でこそ神器（ディバイン・アームズ）を扱えてはいるが、もともと魔法を行使する能力が無い民間人だったので当初は扱うことができなかった。そのため、西軍内で生体調整を受け、強化人間になる事で扱えるようになった。しかし、人為的に与えられた能力である故、神器の力も中途半端にしか引き出せていない。
戦闘時以外に出番は無く、非戦闘時は何もしていないし自分から何かしようともしない堕落した人間である。また、気に入らない事があるとすぐ人や物に当り散らす悪癖の持ち主でもある。
戦闘時は、力押しによる一点突破を好み、そこがどんな激戦区だろうが、罠が有ろうと関係なしに敵を叩き潰してきている。その上、本人は無傷で帰還して来ていたので戦闘の才能は十分あると思われる。
昔、模擬戦で敗北した事がきっかけで影狼の存在を快く思っておらず、よくケンカを吹っかけたりしていたが当人には全く相手にされていない。また、金狼ともそりが合わず犬猿の仲である。

コードネーム：　金狼（きんろう）

本名：　葵龍弥（あおいりゅうや）

身長／年齢：　１７８ｃｍ／１７歳

容姿：　瞳の色はイエロー。髪の色は茶色で長さは背中辺りまで有り、後ろは束ねてある。前髪も長く、左眼が前髪で隠れている。顔は女性陣から『爽やか系の好青年』と称され好印象を持たれているが、本人は色恋沙汰には全く興味が無い。

所有神器（ディバイン・アームズ）：　ゲイボルク

外観：　細長い深紅の長槍。（元ネタはフェ○トのランサーが使ってた槍）

固有スキル

刺し穿つ死刺の槍（ゲイボルク）
槍を相手に突き刺すと先端部から３０もの棘が飛び出し相手の息の根を止める凶悪なスキル。
また、相手に突き刺さなくても意図的に棘を飛び出させる事もでき、初撃をワザと外して棘で攻撃するなどの戦法もとる事ができる。

降り注ぐ死翔の鏃（ゲイボルク）
魔力を溜めた槍を相手に投げつけると槍が３０もの鏃に変化して降り注いでくるスキル。
ただ、このスキルは魔力の消耗が大きい上に使用者本人が丸腰になり鏃が槍の形状に戻るのにも時間がかかるため使い所が難しいと言う欠点がある。ちなみに槍は使用者の手元で元に戻る。

周囲の人当たりが良く周りからは好感を持たれているが、それは演技で、本性はプライドが高く他者を見下し、嫉妬深い性格をした野心家であり、自分より優れた人間、自分の障害となり得る人間はどんな汚い手を使ってでも排除しようとする危険な男である。
元は西軍の戦略家を務めていた人物で、その能力を黒狼に評価され五色狼に引き抜かれる。白狼が入隊する前までは彼が白狼の役目を担っていたが、白狼の出現により戦略家としての座を失う。もともと、戦闘能力が高かったので、戦力増強と言う名目で前衛組に回される。以来、白狼に対して激しい憎悪を抱くようになり、事故を装い何度も殺害を試みたが、ことごとく失敗している。また、戦闘時もその怒りが表に現れ周囲の味方を巻き込むほど派手に暴れ回っていたらしい。

コードネーム：　黒狼（こくろう）

本名：　不明

身長／年齢：　１８５ｃｍ／　不詳（外見から判断するに、２０代後半と思われる）

容姿：　瞳、髪、共に色は黒。髪の長さは膝までとかなり長い。後ろの方には所々に跳ね毛が有る。
顔は衆目美麗、これの一言に尽きる。（説明雑すぎ…）また、鋭い目つきをしているので、周囲の人間は恐れて誰も近寄らないらしい。

所有神器（ディバイン・アームズ）：　魔王剣（ディスキャリバー）

外観：　刀身が赤く細長い西洋風の剣。（元ネタは某ロボットＳＬＧの、とある機体が使ってた物）

固有スキル

王の支配（ディ・ヘルシャフト・デス・ケーニヒス）
使用者を中心点に結界を張り巡らせ結界内にある他の神器（ディバイン・アームズ）の能力を完全に無力化するスキル。結界内から出れば再び使用出来る。結界の範囲と持続時間は使い手の魔力で上下するのだが、黒狼がこのスキルを使用してるのを誰も見た事がないため正確な範囲と持続時間は不明である。

五色狼を組織した人物にして、五色狼の頂点に立つ者。自らの理想を実現するためなら、時には味方をも犠牲にする作戦を平然と実行する男で、作戦に失敗し逃げ帰ってきた味方も容赦なく殺す冷徹な性格をしている。過去の経歴は存在しておらず、その正体は謎に包まれている。
戦場に出ることは基本的になく、どれ程の戦闘力を持っているのか不明で、五色狼最強と言われてるが、それを疑問視する人間も少なくない。五色狼のメンバーが所有している神器は叡智の城（ディバイン・アームズ ハイト）の地下区画に封印されていた物で、それを回収したのは彼である。（当時、戦況が西軍に傾いていたので、実質一叡智の城は西側の領有地と化していた）

名前：　奈々瑠（ななる）

身長／年齢：　１５０ｃｍ／不詳（外見年齢は１５歳ぐらい）

容姿：　瞳の色は赤。髪の色は黒で、長さは腰の辺りまででボサついた癖毛の有るロングヘアー。ちなみに、手入れをしてもこの癖毛

は完全には修正出来ないらしい。顔は見かけに似合わず大人びた顔をしている。胸は身長のせいもあってツルペタの幼児体形で本人はこれをかなり気にしてる。

人間を素体に狼のＤＮＡを組み込んだ半人半獣のため？　犬耳と尻尾が有り、狼に変身する事もできる。（獣耳属性のお約束で、例の如く側頭部は髪で隠れている）

服装は、太めの革ベルトをサラシの様に胸に巻きつけ、下はショートパンツスタイル。上にはハーフコートを羽織っている。（妹の臥々瑠も同じ服装）

所有模造兵器（イミテーション・アームズ）：千鳥（ちどり）

外観：二本一組の小太刀で柄と鞘の色は黒。普段は腰の後ろにしまっている。

属性：雷

影狼と白狼が叡智の城（ヴァイスハイト）で発見し保護した半人半獣の戦闘獣人（バイオロイド）の姉妹の姉。一叡智の城に存在する生物兵器の一種でガーディアンとして運用する目的で創られたものと思われてる。性格は白狼に似たのか人と話すときは基本的に丁寧語で、大人びたおとなしい性格だが、気に食わない奴には悪意を込めた丁寧語で遠回しに馬鹿にしたり、相手によってはタメ口を利くなど口が悪くなる。臥々瑠曰く『奈々瑠の口の悪さは一級品』との事。

影狼、白狼のことを実の兄、姉のように慕っている。その反面、影狼のことは一人の男性としても意識しているのだが、今の関係が崩れるのではないかと恐れ、想いは打ち明けていない。

戦闘時はスピードを生かした連続攻撃や臥々瑠との連携攻撃で相手を仕留める。また、日々の努力を怠らず影狼に稽古を頼んだりもし

てるが勝った事は一度も無い。しかし、潜在能力はかなり高いらしい。

名前：　臥々瑠（ががる）

身長／年齢：　１４６ｃｍ／不詳（外見年齢は１４歳ぐらい）

容姿：　瞳の色は姉同様赤。髪は茶色でシンプルなショートヘアー。姉妹故にか、やはりボサついた癖毛をしているが一歩間違えるとクシが引っ掛かって取れなくなる程の剛毛なため手入れは奈々瑠以上に時間がかかる。顔は童顔で子供っぽい性格と相まって周りのウケは良いらしい。胸は姉同様ツルペタの幼児体形だが胸の大きさは気にしていない。奈々瑠曰く『臥々瑠には女としての自覚が無い』との事。
姉と同じで、変身能力及び犬耳と尻尾が有り、側頭部は髪で隠れている。

所有模造兵器（イミテーション・アームズ）：　鵜丸（うのまる）

外観：　姉のと同じく二本一組の小太刀で柄と鞘の色は白。しまってる場所も同じ。

属性：　水

姉の奈々瑠同様、影狼達に保護された戦闘獣人（バイオロイド）の姉妹の妹。
無邪気な子供っぽい性格で、食う、寝る、遊ぶ、戦うが大好きな女の子。
戦闘時は姉との連携か、野生本能を全開にした獣のような一撃必殺

の攻撃で相手を仕留める。
奈々瑠同様、影狼達の事を実の兄、姉のように慕っていて、特に影狼にくっついて行動する事が多い。
理由は作ってくれる料理が旨いからとの事。ただ、本人は超が付くほどの大飯食らいで、作らされる料理の量が半端じゃないので影狼はかなり大変な目にあってるらしい。また、姉同様、影狼に戦闘の稽古を頼んだりもしてるが本人は遊び感覚でやってる場合が多く、酷い時は朝から晩まで影狼を付き合わせ彼を負かした（体力的意味で）数少ない人物。精神年齢が幼いので姉と違い影狼に恋心は抱いていないが、兄としては心の底から慕っており彼を傷つける者は誰だろうと許さないらしい。

オリキャラ設定（後書き）

作者「はい。ただのキャラ設定です」

白狼「いきなりですね……」

影狼「ん？　お前居たのか？」

白狼「ええ。そこのダメ作者に呼び出されて」

作者「ダメ作者って言うなよ！！」

影狼「じゃあ、何て言えばいいんだよ？」

作者「……天才？」

影狼・白狼「「死ね」」

作者「なんだよ！！　２人してオレの事いじめて！！」

白狼「ん？　その手の趣味があるんでしょう？」

作者「ねぇよ！！　オレはむしろＳだ！！」

影狼「おい！！　こんな所でそんな事ぶっちゃけんじゃねぇ！！」

作者「もういい！！　話を進めるぞ！！」

白狼「強引ですね……」

影狼「はあ……」

白狼「って言うか、何ですこのキャラ設定は」

作者「ん？　何か問題でも？」

白狼「私の設定ですよ。酒癖が悪いって……酷すぎませんか？」

影狼「そうか？　オレは面白いと思うが？」

作者「おお！！　そう思ってくれるか！！　同志よ！！」

影狼「寄るな。バカがうつる……」

作者「酷い……」

白狼「はあ……2人して、私を何だと思ってるんですか？」

影狼「設定と言えばよ……」

白狼「無視しないで下さいよ」

影狼「臥々瑠のもどうよ？」

作者「何が？」

影狼「名前だよ。女の名前でこの読み方は酷いだろ」

白狼「それについては私も同感ですね」

作者「いや～。こう……野生児をイメージするような名前にしたかったから」

影狼「読者からいろいろとツッコミが来そうなんだが……」

作者「いいじゃん。オレ作者だし」

影狼・白狼「「……」」

作者「ん？　何だよ？」

影狼・白狼「「ダメ作者」」

作者「……次の話から2人の存在を抹消してやる」

影狼「作品終わっちまうぞ」

白狼「やれやれ……」

第2話　古の世界（前書き）

ここから話の舞台が恋姫の世界に移ります。
ちなみに覇王と主人公達はまだ出会いません。
途中から影狼、白狼の名前が本名に変わります。ちょっと混乱するかもしれませんね……サーセン。
それと、この話の中盤で主人公がかなり暴力的に……どうしてこうなった……

第2話　古の世界

「……流れ星？　それも四つも？　不吉ね……」

ここは辺りに何も無く果てしなく地平線だけが続く荒野の地。乾いた風が吹き付ける中、鎧を身に纏った金髪の少女が一人大地にたたずみ、空を見上げ呟く。

「……様！　出立の準備が整いました！」

黒髪の長髪の女性が何かの準備を終えたのか、少女に力強く話しかける。

「……様？　どうかなさいましたか？」

青色の髪の女性が静かに少女に尋ねる。

「今、流れ星が見えたのよ。それも四つ同時に」

「四つの流れ星、ですか？　こんな昼間に」

黒髪の女性が首を傾げながら言う。

空は見渡す限りの青空。どう考えても流星が見えるとは思えない空模様だ。

「あまり吉兆とは思えませんね。出立を伸ばしましょうか？」

「吉と出るか凶と出るかは己次第でしょう。予定どうり出立するわ」

「承知いたしました」

青髪の女性は落ち着いた口調で返答し一礼する。

「総員、騎乗！　騎乗っ！」

黒髪の女性の命令で辺りの兵達が慌しく動き出す。

「無知な悪党どもに奪われた貴重な遺産、何としても取り戻すわよ！　……出撃！」

少女の号令と共に騎馬隊で編成された軍勢が土煙を上げながら荒野を走り出した。

……

……

…

「くっ……うぅ……オレは？　生きてるのか？」

影狼そう言って眼を開く。次第に眼の焦点が合いだし、大地を照り付ける日の光が影狼の眼に射し込んできたので思わず影狼は眼を二、三回瞬かせる。

「青空？　ここは……外か？　オレは確か黒狼と殺りあって、突然制御室が光に包まれて、それから……ダメだ、そこから先の記憶が無い。とにかく状況を確認しなければ」

影狼はそう言って、フラフラとその場から立ち上がり辺りを見渡す。

「なっ……！？」

影狼はその場の光景を見て言葉を失った。そこは、誰一人居ない、見渡すかぎり荒野が続く平原だった。

「なんだこれは！？　どこだよここは！？　ハッ！　そうだっ！　白狼達は！？」

影狼は慌てた様子で周囲を見回す。

「居たっ！！」

影狼は倒れている白狼達を見つけ、すぐさま駆け寄り、体を揺すりながら声をかける。

「おいっ！　白狼！　奈々瑠！　臥々瑠！　大丈夫か！？」

「うっ……う～ん……影……狼？」

「うん……あ……れ……兄……さん？」

「うにゃ……兄さん……もう食べられないよ……」

「何寝ぼけたこと言ってんだ、臥々瑠っ！！　起きろ！！」

そう言って影狼は臥々瑠の頭を小突いた。本人はそんなに力を入れたつもりは無いのだろうが、臥々瑠は堪らず頭部を抑えながらその場から飛び起きる。

「痛っ！？　……あれ？　兄さん？」

「起きたか？」

「うん……おはよ」

「何がおはようだ、ったく。全員無事みたいだな」

影狼は三人の無事を知り安堵の表情を浮かべる。

「三人とも動けるか？」

「ええ……なんとか。しかし、一体何があったんです？　『叡智（ヴァイス）の城（ハイト）』の制御室が光に包まれたとこまでは覚えてるんですが……」

「それについては口で説明するより、周りを見た方が早い」

「周りを？」

三人は影狼に促されその場から立ち上がり辺りを見回し、白狼と奈々瑠は目の前に広がる光景に言葉を失ってしまう。

「……兄さん」

臥々瑠はポカンとした表情で影狼に尋ねる。

「何だ？」

「ここ……どこ？」

「分からん」

影狼は臥々瑠の問いに即答する。その態度に白狼が呆れた表情を向ける。

「分からんって……貴方……」

「分からんもんは分からん。そもそもこんな景色今まで見たことない。と言う訳で白狼、頼む」

「はいはい……ああ、それと」

「ん？　なんだよ？」

「もう、お互いにコードネームで呼び合うのは止めませんか？　私達はもう五色狼の人間じゃないんですから」

「まあ、確かに……」

「では、これから私は貴方の事を『零治』と呼ばせてもらいますね。そのかわり、貴方も私の事をちゃんと本名で呼んでくださいね」

「分かったよ、『瑠利亜』……これでいいか？」

「ええ。ところで零治、一つ確認したい事があるんですが……」

「ああ？　なんだよ？」

「『叡智の城（ヴァイスハイト）』はどこにあるんですか？」

「はあ？　どこって、そんなの……」

零治は瑠利亜の疑問に答えようと辺りを見渡すが……

「ん？　見当たら……ない……だと！？」

「ええ。さっきからずっと気になってたんですよ。『叡智の城（ヴァイスハイト）』は大陸のどの位置からでも見える程の巨大な建造物です。それがどうして見当たらないのか疑問に思いましてね……」

「奈々瑠、臥々瑠、『叡智の城（ヴァイスハイト）』からの魔力波は感じるか！？」

「それが……さっきからずっと調べてるんですが……」

「おい……まさか……」

「うん……兄さんの思ってる通りだよ。まったく感じないの……」

「なん……だと……っ！？」

奈々瑠が零治に曇った表情を向けるので、零治の表情が青ざめる。

零治は衝撃を受ける。『叡智の城（ヴァイスハイト）』の魔力波が感じない。それは『叡智の城（ヴァイスハイト）』が存在してない事を意味するからだ。

「一体どうなってるんだ……」

「零治……これはあくまで仮説なんですが、もしかしたら、今私達が居るこの場所は別の世界なんじゃ……」

「はあ!?　おいおい、いくらなんでもそれは……」

『ありえない』と言おうとした零治の言葉を瑠利亜は手で制止する。

「貴方の言いたい事も分かります……ですが、それだと話の辻褄が合うんですよ。私も信じたくはありませんがね」

「うーん……」

零治は腕を組みながら唸り、自分の足元を睨み付け考え込む仕草をする。それにお構いなしに瑠利亜は自分の考えを零治に聞かせる。

「私達はつい先程まで『叡智の城（ヴァイスハイト）』の制御室で黒狼達と戦っていました。ですが、突然部屋が光に包まれ私達はそこで意識を失った。次にこんな見た事もない場所に放り出され気絶していた……」

「そして、極め付けは大陸のどの位置からでも見えるはずの『叡智（ヴァイ）の城（スハイト）』が見当たらない、魔力波が感じられない事……か」

三人は黙ったまま渋面を作り地面を見つめながら考え込む零治を見つめる。

「……ん？　まてよ。確か黒狼が……」

零治は何かを思い出したようにふと顔を上げて言う。

「うん？　黒狼がどうしたんです？」

「オレが意識を失う直前に気になる事を言ってたのを思い出したんだ」

「気になる事？　なんです？」

「確か……『外史』と……」

「……『外史』。……確か正式に採用されていない歴史の事……でしたよね、姉さん」

奈々瑠が瑠利亜に零治の言った言葉の意味を問いかける。

「ええ。しかし、『外史』ですか……確かに気になりますね」

「ああ……」

「まあ、ここで考えても何も始まりません。まずは情報を集めなければ」

「それはそうだが……しかしどうする？　ここがどこかも分からないから、どっちに行けばいいかも判断出来んぞ……」

「問題はそこなんですよねぇ。せめて人が居れば……」

零治と瑠利亜が行動方針について話し合っているその時、不意に何者かが声をかけてきた。

「よお、兄ちゃん達」

「あん？」

突然声をかけられ一同は声がした方を振り向く。

「へっへっへ。兄ちゃん達、珍しい服着てんじゃねぇか」

「アニキ、それにコイツら珍しい剣も持ってますぜ。売ればきっといい金になりますぜ」

「そ、それに女も居る。か、かわいいんだな」

振り向くとそこにはいかにもガラの悪い三人組の男、中肉中背のひげ面の中年男、尖った鼻が特徴の背の低い子男、やたら太った背の高い大男が立っていた。

「「「「……」」」」

零治達は三人のあまりにも古風な服装を見て絶句してしまう。

「……コスプレ？」

臥々瑠が思わずそんな事を呟く。

「はあ？　何言ってんだコイツ？　おいチビ、オメェ分かるか？」

「いえ、あっしに聞かれても……」

「そうか。デブ、オマエは？」

「わがんね」

三人組の男は臥々瑠の言葉に困惑の表情を浮かべる。

「なんなんだコイツら……？」

零治は目を白黒させながら目の前に立つ三人組の男を見つめる。

「ちょうどいい。零治、彼らから情報を聞き出しましょう」

「はあ！？　こんな連中からか？　どう見ても友好的な態度を取ってるとは思えんぞ。それに大した情報も持ってなさそうだ」

零治が言うように確かに目の前の三人組の男は決して友好的な態度を取ってる様子ではない。それどころか、まるで得物に狙いを定めた獣のような眼つきで零治達を品定めするような視線を向けていた。

「まあまあ、とりあえず話だけでもしてみましょう。どうするか決めるのはその後でも遅くはないでしょう？」

「はあ……分かったよ」

そう言って零治は溜め息を一つ吐いて、２、３歩前に進み出て男達に話しかける。

「オレ達に何か用か？」

「おうよ。兄ちゃん、命が惜しかったらオメェの身ぐるみ全部と一緒に連れてる女達を置いていきな」

リーダー格の男がそう言い放ち零治に腰の鞘にしまっていた曲刀を抜刀し突きつける。それを見た零治の表情に影が差し、眼は殺気を帯び始め、静かに瑠利亜の名を呼ぶ。

「……瑠利亜」

「なんです？　まあ、聞かなくても言いたい事は分かりますが……」

「コイツらは『世界の害悪』だ……殺していいか？」

「ダメです。大事な情報源なんですから」

「そうか……だが、『三人』も必要はないよなぁ？」

「ええ、そうですね……今ので連中がどんな輩なのかは十分に理解できましたから『三人』も必要ありません。『一人』で十分です……」

零治と瑠利亜が何を言ってるのか奈々瑠と臥々瑠は即座に理解し、静かに零治の両脇に移動する。対するリーダー格の男は零治が無視したと勘違いしたのか声を荒げる。

「おいっ！！　聞こえてんのか！！　テメェ！！！」

「そんなに怒鳴らなくてもちゃんと聞こえてる……いちいちギャーギャー喚くな」

零治の表情に苛立ちが浮かぶ。

「だったらさっさとテメェの着ている服と剣をよこしやがれ！！死にてぇのか！！！」

「あ、後、お、女と金も、お、置いていくんだなぁ」

続いて連れのチビとデブが曲刀を抜き零治の前にチラつかせる。

「はあ……ゴミどもめ……時間の無駄だ。奈々瑠、臥々瑠」

「はい」

「は～い♪」

「お前達はチビとデブを殺れ……オレはリーダー格のヒゲ面を押さえる」

「分かりました」

「うん、分かった」

返事をした二人は零治の前に歩み出る。

「臥々瑠、アンタどっちを殺る？」

「別にどっちでもいいよ。コイツら大したことないじゃん」

「それもそうね。じゃあ、デブの方は任せるわね」

「オッケ～♪」

二人はそれぞれチビとデブの前に移動する。

「ん？　なんだお前。その頭に付いてる耳は？」

「何よ……この耳がどうかしたの？」

チビが奈々瑠の頭頂部を指差しながら犬耳の事を指摘する。

「それ付け耳かぁ？　おかしな趣味してんなぁ。へっへっへ」

チビの台詞を聞いた奈々瑠の眼が据わり、殺気を帯びたものに変わる。

「アンタみたいなクズにそんな台詞を言われる筋合いはないわ……死になさい」

奈々瑠はそう言い放ち、腰の後ろにしまっていた千鳥を右手で逆手に抜くと同時にチビの喉を斬り裂いた。

「グガッ！！？？」

チビは血が噴き出す喉を両手で押さえながら地面にうつ伏せに倒れ、ピクピクと痙攣しながら息絶えた。

「フンッ！」

奈々瑠は鼻を鳴らし、チビの亡骸に侮蔑の視線を向けながら千鳥を軽く振って刃に付いた血を落とし、鞘にしまう。

「チビッ！！？」

あまりにも一瞬の出来事だったのでアニキは何が起こったのか理解できずにチビに声をかけるが反応が返ってくるはずもなかった。

「おーおー。今の殺し方はエグイですねぇ」

チビを殺された事に対しアニキが怒りをあらわにして怒声をあげる。

「この野郎!!　よくもチビを!!　おい、デブ!!　遠慮する必要はねぇ!!　やっちまえ!!!」

「う、うん。わ、分かったんだな」

「ちょっと～。アタシを無視しないでくれない？」

「ん～？」

奈々瑠に向かおうとしていたデブを臥々瑠が呼び止める。

「お、お前……ち、小さいんだな」

「大きなお世話だよ。この……豚！」

「ぶ、豚じゃ、な、ないんだな！」

臥々瑠に豚呼ばわりされたデブが怒り、臥々瑠目掛けて曲刀を振り下ろす。が……

「あ、あれ？」

振り下ろした先に臥々瑠の姿は無かった。

「い、居ない……どこ行った？」

デブが辺りをキョロキョロと見回す。と、その時。

「へ～。アンタって結構背が高いんだね～」

「ど、どこに居るんだな！？」

「デ、デブ！！　後ろだぁ！！」

「後ろ～？」

デブが後ろに振り返る。

「なあっ！？」

そこにはデブの首の後ろに座り込んだ臥々瑠の姿があった。

「まるで肩車をしてるみたいだな」

「ええ……。そして、これであの男も終わりですね」

「ん～……見晴らしは悪くないけど、兄さんの肩車と比べると雲泥の差だね」

そう言いながら臥々瑠はデブの頭を両手で掴む。そして……

「ばいば～い♪」

臥々瑠はデブの首の骨をへし折り、その場に、ゴキャっと骨が砕ける嫌な音が響く。

「デ、デブ！！？？」

「よっと」

臥々瑠は首の骨を折ると同時に素早くジャンプをして奈々瑠の左隣に着地する。

物言わぬ屍となったデブはそのまま地面に仰向けに倒れた。

「おいおい、今のスゲェ音だったな」

「うぅ……今の音、耳に残りそうですよ。お～、ヤダヤダ」

瑠利亜はワザとらしく両耳を抑えながら、先程の音を振り払うように頭を軽く左右に振る。

「さて……残るは貴様だけだな……」

「ひっ……！？」

零治は殺気の籠もった眼でアニキを睨みつける。アニキはその迫力に気圧されて表情が青ざめ、思わず数歩後ろに下がってしまう。

「どうした？　さっきまでの威勢のよさはどこに行ったんだ？」

「ひいいいいっ！！　た、助けてくれーー！！」

アニキは剣を投げ捨て、背を向けて全力で逃げ出す。

「あっ、逃げた」

「逃がすかっ！！　……フッ！！」

零治はアニキの背に向かってコートの下に隠し持っている投擲ナイフを投げつける。

「ぐあっ！？」

ナイフはアニキの左肩後ろに突き刺さり、アニキはその痛みでバランスを崩して地面に倒れこむ。

「そんな事しなくても、『霧散する雲（ヴォルケ・フェアシュヴィンデット）』で追いつけるでしょうに……」

「何であんな奴を相手に魔力を使わなきゃいけないんだ？　もったいねぇだろ。第一、急所は外してある」

「まあ、それならいいんですがね……それじゃあ彼から話を聞きに行きますかね」

「ああ」

零治達は倒れて左肩を押さえながらうずくまってるアニキの元へ歩みだした。

「ううっ……！　い、痛てぇ……！」

「おい……いつまで寝ているつもりだ……？　さっさと立ちやがれ

っ！！」

零治はアニキの胸ぐらを掴み上げ無理やり立ち上がらせる。

「ぐあぁぁぁっ！！　い、痛てぇ！！　や、やめてくれ！！　殺さないでくれぇぇぇ！！！」

零治が掴み上げた事で傷に響いたのだろうか、アニキは苦痛の悲鳴を上げる。

「ああ、うるせぇなぁ！！　喚くなっつってんだろうがぁ！！」

「ちょっと、零治。もう少し丁重に扱って下さいよ。その男に死なれたら困るのは私達なんですから」

零治のアニキに対する扱いに見兼ねた瑠利亜が零治を咎める。

「チッ……分かってるよ。奈々瑠、臥々瑠、さっきみたいな事になると面倒だ。お前達は周囲を警戒していろ」

「ああ、兄さん。それなんだけど、さっきからアタシ達の事を見ている人間が居るみたい……」

「なにっ！？　位置と数は？」

臥々瑠の言葉に反応する零治は小声で臥々瑠に尋ね、その問いに奈々瑠が答える。

「すぐ後ろです。距離は約二十m前後、数は三人です」

「動く気配はあるか？」

「いえ、今のところはありません」

「なら放っておけ。ただし……」

「油断はするな、だね」

「そうだ」

「しかし、現地の人間に見られるのはあまりよくないですね。勘違いされても困りますからね。零治、早いとこ用件を済ませましょう」

「分かってる」

そう言って零治は改めてアニキに向き直り、質問を始める。いや、この場合、尋問の方が正しいだろうか……

「おい。貴様にいくつか聞きたい事がある。いいか……正直に答えろよ」

「ひいっ！！」

零治は凄みながら問いかけるので、アニキは堪らずガタガタと体を震わせながら小さく悲鳴を上げる。

「まず一つ目の質問だ。ここはどこだ？」

「ひっ……！　た、助けて……殺さないでくれ……！」

アニキは零治に対してすっかり怯えきっており質問に答えるどころか命乞いをする有様だった。その反応に苛立った零治はアニキの無防備な腹に強烈なボディブローを叩き込み、深々と零治の拳がアニキの腹にめり込む。

「何寝ぼけた事抜かしてんだぁ！！　貴様オレの話を聞いてなかったのかぁ？　その耳は飾りか？　ああっ！！！」

「うぅっ……ぐうっ……」

いきなり腹を殴られたアニキは堪らずうめき声を漏らし、強烈な嘔吐感に襲われる。

「零治……丁重に扱えと、私さっき言いましたよねぇ？」

零治のアニキに対する扱いがあまりにもぞんざいなので、瑠利亜がドスの利いた声で零治に問いかける。

（うわっ！？　あの姉さんが怒ってる！？）

（うん……怒ってる……）

瑠利亜の豹変振りを見て、奈々瑠と臥々瑠の表情が青ざめる。と言うのも、瑠利亜は元々温和な性格をしてるので余程の事でない限り怒ったりはしないし、二人も彼女が怒った姿を見た事がないので当然の反応だろう。
まあ、あんなのを見れば普通は誰でも怒ると思うが。

「大丈夫だ。ちゃんと手加減はしている」

（（それでも動じない兄さんも凄い！！　って言うかあれで手加減してたの！？））

「まあ、貴方がこの手の輩を嫌ってる事は知ってましたけど……一度深呼吸でもして落ち着いてください。これじゃあどっちが悪者か分かりゃしない」

「ああ……。すー……はー……」

零治は気持ちを落ち着けるために、大きく深呼吸をする。

「落ち着きましたか？」

「ああ……。その……悪かったな……」

「いえ、分かってくれればいいんです。では続きを頼みます」

瑠利亜に促され零治は再びアニキに質問する。

「おい。もう一度聞くぞ。いいか、今度はちゃんと答えろよ？」

「は、はい！！」

「ここは一体どこなんだ？」

「こ、ここは……ち、陳留……で、です……！」

「ん？」

「『陳留』？」

零治と瑠利亜が『陳留』と言う単語に反応する。

「おい、瑠利亜。『陳留』って確か……」

「ちょっと待ってください。念のため携帯端末で調べてみます」

瑠利亜は懐から小型の端末機を取り出し操作を始める。

「……『陳留』。まさかな……」

零治はアニキから視線を外し、考え込むように呟く。そこへアニキがおずおずと話しかけてきたので、零治は視線をアニキに戻す。

「あ、あの……」

「あん？　なんだよ？」

「その……そろそろ……離して……くれませんか？」

「ああん！？」

「ひいいいいっ！！　う、嘘です！！　ごめんなさい！！　だ、だから殴らないで下さい！！！」

「殴られたくなかったら必要な時以外は口を閉じてろ！！」

「……っ！！」

アニキは零治の怒声に気圧され、黙って首を激しく縦に振る。そこへ、端末で事を調べ終えた瑠利亜が零治に話しかける。

「零治……」

「どうだ？　何か分かったか？」

零治は瑠利亜に視線を向け、問いかける。

「ええ、まあ……。零治、『三国志』は知ってますよね？」

「ああ。お前程じゃあないがな」

「『陳留』とは、その頃に使われてた地名なんですよ……」

「と言う事はやはり……ここは中国なのか……」

「その男の言ってる事が本当ならそうなりますね。しかも『滅びの日（ション）』で滅びるより遥か前の時代……つまり二千年以上前の時代ですよ」

「つまり何か？　オレ達は古代の中国にタイムスリップしたと……そういう事か？」

「ええ……そうとしか言えませんよ」

「はあ……にわかに信じがたい話だな……瑠利亜、他には聞き出す

事はあるか？」

「んー……そうですねぇ……ああ、そうだ。風習について聞いてください」

「風習？」

零治は首を傾げる。

「ええ。風習ってのは厄介な物で、私達にとっては当たり前の事でもその地方や国では絶対にしてはいけないタブーはよくある事ですから」

「分かった。……おい、次の質問だ。この国では何かやっちゃいけない風習とかはあるのか？」

「は、はい……！　あ、あります！」

「そうか……どんな風習なんだ？」

「そ、それは、ま、真名です……」

「『真名』？　瑠利亜、この時代にそんな名前の風習なんかあったか？」

「いいえ。私もいろんな文献を読み漁りましたが、そんな風習、見た事も聞いた事もないですね」

「だよなぁ……で、その『真名』ってのは一体なんなんだ？」

「真名ってのは、その人物の持つ本当の名前の事です。家族や親しい奴しか呼んではならない神聖な名前の事です……」

「家族や親しい人間しか呼んじゃいけない神聖な名前……ねぇ……。ちなみに親しくない奴が勝手に呼んだらどうなるんだ？」

「そ、その人物の許可無く勝手に真名を呼んだら相手から何をされても文句は言えない……です」

「何をされても？　つまり殺されてもか？」

「は、はい……」

「なんとまあ……ずいぶんと厄介な風習もあったものですねぇ……」

「厄介？　下らないの間違いじゃないのか？」

「ちょっ、ちょっと零治！　滅多な事を言わないで下さいよ！　現地の人間に聞かれでもしたらマズイでしょう！」

「なんでさ？　オレは思った事を口にしただけだ。オレから言わせれば名前など所詮ただの呼称にすぎん。そんな物に神聖性を求めるなどオレには理解出来んな……」

「まあ、貴方の言ってる事も理解できない訳ではありませんが……だからと言ってそんなおおっぴらに……」

「……姉さん……もう……遅いかと……」

奈々瑠が気まずそうに瑠利亜に声をかける。

「えっ？　それはどう言う……」

と、その時。

「ほお？　その発言は聞き捨てなりませんな」

「ああ？」

突然、後ろから声をかけられ一同は振り返る。

「「「……」」」

振り向いた先には三人の女性が立っていた。

第2話　古の世界（後書き）

作者「……なった」

零治「ん？　おい、どうした？」

作者「……うなった」

零治「瑠利亜。作者が壊れたぞ」

瑠利亜「じゃあ、この作品は終わりですね」

作者「違う！！　勝手に終わらせるな！！」

零治「おお。復活した。で？　さっきからどうしたんだ？」

作者「今回の話だ！　何だよお前のアレは！！」

零治「何がだよ？」

作者「まるで悪役じゃないか……」

瑠利亜「ああ……確かに。今回の話、貴方かなり暴力的でしたよねぇ……」

作者「ホント、どうしてこうなった……」

零治・瑠利亜「「お前（貴方）の書き方が悪いからだろ（でしょ）？」」

作者「違う！！　キャラが勝手に動いて好き勝手するからだ！！」

零治「今度は責任転換かよ……」

瑠利亜「ホント、大丈夫なんですか？　この小説……」

臥々瑠「ｚｚｚｚｚｚ……」

奈々瑠「……私達の出番は？」

第3話　狼と龍の対決（前書き）

また長くなってしまった……
文才が無い人間が書くとこれだよ……
長ったらしい文章でホント、サーセン（涙）

第3話　狼と龍の対決

「奈々瑠、臥々瑠……」

険しい顔つきをし、低いトーンの声で零治が二人の名を呼ぶ。

「は、はい……」

「ひっ！」

「周囲を警戒してろと、オレさっき言ったよなぁ？」

「す、すみません……この男の態度の変わりぶりが面白かったものでつい……その……油断……してしまいました……」

「ご、ごめんなさい！！」

奈々瑠がバツの悪そうな顔で、臥々瑠は涙眼で零治に謝罪する。

「ったく……お前達の訓練はもっと厳しくする必要があるようだな。……で？　なんだ、お前達は？」

零治は奈々瑠達から三人組の女性陣に視線を移し、苛立った口調で問いかける。

「零治……少しは丁寧に話せないんですか？」

「おっと、そいつは失礼しましたね……お母様」

瑠利亜が零治の口の利き方をたしなめるも、当の本人は反発的な態度を取る。

「はあ……まったく、今日の貴方はやけに機嫌が悪いですね……」

「気のせいだろ？　オレはいつも通りだ……」

（（絶対不機嫌だ……））

流石は姉妹だけあって、心の中でとはいえ見事なハモり具合である。

「よろしいですかな？」

三人組の中央に立つ背の高い青髪の女性が話しかける。

「ん？　ああ、悪かったな。で？　お前達は何者だ？」

「何、ただの通りすがりの旅の者ですよ」

「その通りすがりの旅人が一体なんの用だ？　まさか……コイツの知り合いって訳じゃないだろうな？」

「いえ～。そう言う訳じゃないですよ～」

零治の問いに、頭に人形？　のような物を乗せペロペロキャンディーをくわえた、ウェーブのかかった金髪の女の子が間のびした口調で代わりに答える。

「あ？」

零治は女の子の頭部に有る人形らしき物を見て、間の抜けた声を出す。

「どうかしましたか～？」

「いや……別に……」

零治はそう答えるが心の中では……

（なんだ？　あの頭に乗せてる人形は？）

頭に乗ってる人形に疑問を抱き。

（この時代に……ペロペロキャンディー！？）

瑠利亜は女の子がくわえてるペロキャンの存在に驚き。

（ずいぶんノロノロと喋る子ね……あんな喋り方をするなんて、変わった子）

奈々瑠は女の子の喋り方が独特なので首を傾げながら興味深げな視線を向ける。

「……」

「ん？　臥々瑠、どうしたの？」

臥々瑠は奈々瑠の問いかけを無視し、金髪の女の子にツカツカと歩み寄り、じーっと女の子のくわえてる飴を見つめる。

「じーー……」

「ん～？　なんですか～？」

「飴を凝視してるな……」

「ひょっとして欲しいんでしょうか？」

臥々瑠はひとしきり飴を見つめて、女の子に話しかける。

「ねえ……」

「はい～？」

「その飴ってどこで売ってるの？」

「「予想通り……」」

「はあ……」

零治と瑠利亜は自身の考えが的中し口を揃えて同じセリフを言い、奈々瑠は呆れたように頭を抱えながら溜め息を一つ吐く。

「おおっ！　そのような質問をされるとは予想外でしたね～」

「ん？　なにが？」

「いえいえ～、お気になさらず～。それとこの飴の事ですが～、残念ながら風の口から教える事はできないのです」

「へえ～、君の名前って……」

「臥々瑠っ！！」

「んぐぅっ！！？」

奈々瑠は臥々瑠に素早く近づき口を塞ぐと同時にそのままズルズルと女の子から引き剥がした。

「ぷはぁっ！　何するのさ！！　奈々瑠！！」

奈々瑠は臥々瑠の抗議を無視して耳打ちをする。

「何をやってるのアンタは！？　さっきの話を聞いてなかったの！！」

「え？　何か言ってたっけ？」

「はあ……もういい。奈々瑠、とりあえずお前は臥々瑠が余計なことを言わないように黙らせとけ」

「はい……すみません、兄さん……」

「風、貴方もよ。このままでは話が先に進まないわ」

メガネを掛けた女の子が金髪の女の子をたしなめる。

「おおっ。それは失礼いたしました～」

「やれやれ……。で？　オレ達に何の用だ？」

零治は青髪の女性に問いかける。

「いえ、大した用ではないのですが……ただ、貴殿の口から何やら聞き捨てならぬ発言が聞こえたもので……」

「ああ？　瑠利亜、オレなんか言ったか？」

「零治……貴方、分かって言ってるでしょう？」

零治はワザとらしく瑠利亜になんの事かと問いかけ、その態度に瑠利亜は零治に呆れた視線を向けながら問いかけるが、本人は素知らぬ態度を決め込む。

「フッ……一体なんの事だかさっぱり分からんな？　……ああ、そっちの用に関しては、こっちの用件が片付くまで待ってもらえるか？」

「いいでしょう」

零治は女性が納得したのを確認し、瑠利亜に話しかける。

「瑠利亜。コイツから他に聞く事はあるか？」

「いえ、もう特には……とりあえず場所に関しては分かりましたし……」

「だそうだ……」

零治はアニキに向き直りそう言う。

「ほっ……。じ、じゃあ……もう、解放……してもらえるんですか……？」

「……オレの質問に答えられたらだな……そしたら『楽にしてやる』よ」

「ひっ！　ま、まだ……あるんですか……っ！？」

「そう怯えるな。これは個人的な質問だ。すぐに済む。だから正直に答えろよ……」

「は、はいっ！」

「では、一つ目の質問だ。さっきの言動から察するに、お前は盗賊か何かか？」

「そ、それは……」

「……どうなんだ？」

アニキは言いよどむが、零治の鋭い視線に気圧され、怯えながらも素直に白状する。

「ひっ！　は、はい！　そうです！！」

「そうか……ちゃんと正直に答えられたな。では、二つ目だ。さっきのは初犯か？　そんな訳ないよなぁ？　過去に何度も同じ事を繰り返してきたんじゃないのか？」

「はい！　し、してき、き、きました！」

アニキは助かりたい一心で零治の質問に必死に答える。そんな様子を見て瑠利亜は心の中で呟く。

（おーおー。バカ正直に答えてますねぇ。まっ、いくら正直に答えたところで彼の『結末』は変わらないんですがね……）

「次だ。お前は今まで襲ってきた奴は全員殺してきたのか？」

「い、いいえ……い、一部の連中は……その、ど、奴隷商人に……う、売り飛ばしたり……」

「売られた連中は一生奴隷生活か……それでは死んだも同然だな……。では、次の質問だ。お前さっき命乞いをしたな？　ひょっとして、今まで殺してきた連中も同じように命乞いをしたんじゃないのか？」

「は、はい！！」

「連中はこう言ってなかったか？　『助けてくれ』、『死にたくない』、『殺さないでくれ』……と」

「はい！　い、い、言ってました！！」

「そうか……。では、最後の質問だ……お前は一度でも……その台詞を聞き入れてやったのか？」

「そ、それは……その……」

アニキが言いよどむ。その時点で答えは分かりきってるのだが、それでも零治は問い詰める。

「答えろっ！！」

「い、いいえ！　き、聞き入れてません！！」

「そうか……」

零治はアニキの答えを聞き、静かにそう一言呟き、何かを考えるように視線を落とす。
そこへ、アニキがおずおずと話しかけてくる。

「そ、それで……その……」

「ん？　ああ、そうだったな。おい、奈々瑠、臥々瑠」

零治は奈々瑠達に呼びかけニ人は黙ったまま零治の方を振り向く。

「コイツの両腕を押さえてろ……」

「へっ？」

アニキは状況を理解できないまま奈々瑠達に両腕を左右に引っ張られる形で押さえられる。２人が腕を掴んだのを確認した零治はアニキの胸ぐらから手を離し、ニ、三歩後ろに離れる。

「ちょっ！　ちょっと!?　何をする気だよ!!!」

「何って？　貴様の処刑だが？」

零治の口から告げられる死の宣告。
それを聞いたアニキの顔が絶望の色に染まる。

「そ、そんな！！　質問に答えたら助けてくれるって言ったじゃないか！！！」

「貴様、何か勘違いしてるんじゃないか？　質問に答えたら『楽にしてやる』とは言ったが、『助けてやる』とは一言も言ってないぞ……」

「ひっ！　い、嫌だー！！　やめてくれ！！　くそっ！　コイツ、は、離しやがれ！！」

アニキは二人を振り解こうと抵抗するが、ただの人間が戦闘獣人（バイオロイド）の力に敵う訳がなかった。

「おい……あまり暴れるな。手元が狂う……」

「お、お願いします！！　殺さないで！！　もう盗賊からは足を洗います！！　だから、助けてください！！！」

「貴様は今まで殺してきた連中から何度その台詞を聞いてきた？それに……貴様のような害悪を生かして帰すほど、オレはお人好しじゃないんでな……」

零治はそう言いながら、ゆっくりと居合いの構えを取る。

「安心しろ、すぐには殺さん……貴様には、貴様の犯した罪の重さを身を持って知る必要があるからな……」

「嫌だーー！！　やめてくれえぇぇぇ！！！」

「聞こえんな……」

零治はそう言い放つと同時に素早くしゃがみながら叢雲を抜刀し、アニキの足に目がけて横に薙ぎ払う。

「斬！！」

「……」

零治は薙ぎ払い時の勢いに身を任せながら体を１８０度回転させ、アニキに背を向ける形で動きを止める。

辺りが静寂に包まれる。そんな中、零治はゆっくりと立ち上がり口を開く。

「二人とも……もう離していいぞ」

二人は黙ってアニキを解放する。

「へっ？　あれ？　生き……てる？　へ、へっへっへ。なんだよ、なんともねぇじゃねぇか！！　脅かしやがって！！　このバカが！！」

アニキは零治の背に向かって怒鳴るが、零治はアニキに背を向けたまま口の端を吊り上げ、冷笑しながら静かに問いかける。

「フッ……遺言はそれだけか？」

「へっ？」

「では……生き地獄を味わいながら……死ね……」

零治はそう言いながらゆっくりと叢雲を鞘に収める。鞘に収め終えた次の瞬間……

「えっ……？」

アニキは仰向けに地面に倒れた。なぜ自分は地面に倒れたのかアニキは理解できなった。そう疑問に思ったアニキは上半身を地面から起こし、自分が立っていた場所を確認する。その視線の先には……

「っ！？」

切断された自分の足が残っていた。

「ぎゃあああああああああああ！！」

アニキが悲痛の叫び声を上げ地面をのた打ち回る。それに呼応するように切断面から大量の血が、まるで噴水のような勢いで噴き出し、辺りに血の池を作り出した。

「あ、足が！！　オレの足があぁぁぁぁ！！　痛てぇ！！　痛てぇよぉぉぉぉ！！　うあああああああ！！」

「どうだ痛いか？　その痛みは貴様の犯した罪にかせられし罰だ！！　その痛みを、罪の重さを胸に抱きながら死んでいけ！！！」

零治はまるでその辺に転がってる石ころでも見るかのような視線をアニキに向けながら言い放つ。

「零治、流石にこれはやり過ぎ……って言うかアレうるさいんですけど……」

「フン！　どうせすぐに死んで静かになるさ……」

そうこうしている内にアニキは絶命していた。

「ほらな……」

「まったく貴方は……あそこまでする必要があったんですか？」

「奴を生かして帰したところで同じ事を繰り返すだけだ。ならば、ここで止めておくにこしたことはない……」

「それはそうかもしれませんが……」

「なら、この話は終わりだ。それより、コイツらの用件を済ませなければな……」

そう言いながら零治は女性達にゆっくりと向き直る。

「待たせたな……」

零治は三人に静かにそう声をかけるが、女性達は零治の先程の行動に言葉を失い、呆然としていた。

「どうした？　何か用があったんじゃないのか？」

「……えっ？　あ、ああ、そうでしたな」

「ちょっ！？　ちょっと、星殿！！」

メガネをかけた女の子が青髪の女性に小声で話しかける。

「どうした？　稟」

青髪の女性も同じく小声で答える。

「どうした、じゃありませんよ！　この男に関わるのは正直危険だと私は思うんですが……」

「なぜだ？」

「なぜって、いくら相手が賊とはいえ、あんな残酷な殺し方を平然とするような男ですよ！　どう考えても異常としか思えませんよ！！」

「確かに私も眼を疑ったが……だが、そう言う訳にもいかんのだよ。あの男が先程言った発言を私は黙って見過ごす事ができんのでな……」

青髪の女性はメガネをかけた女の子の意見に同意こそするが、それでも引き下がる様子を見せずにきっぱりと反論する。

「ですが……」

「凛ちゃん」

金髪の女の子が二人の会話に割って入る。

「風？」

「凛ちゃん。ここはひとつ星ちゃんに付き合ってあげませんか～？
星ちゃんはこう見えて頑固なところがありますしね～」

メガネをかけた女の子は眉をひそめながら二人を見つめる。

「それに風もこのお兄さん達の事が少々気になりますので～」

「はあ……もう、分かりましたよ。好きにしてください……」

とうとう諦めたように溜め息を一つ吐いて、投げやりに言う。

「すまないな、二人とも」

「いえいえ～」

「さっきから何をコソコソと話をしている。用が無いんなら行かせてもらうぞ……」

零治は三人のコソコソした態度に苛立ってるのか、足で地面を一定のリズムで叩きながら訝しげな表情で呼びかける。

「ああ、これは失礼」

青髪の女性はそう言い零治達の方へ二、三歩前に進み出る。

「で？　用件は何だ？」

「何、貴殿が先程言っていた言葉の件について……ですよ」

「……」

零治は黙ったまま、おもむろに懐からタバコを取り出し、女性達に見えないように手で隠してジッポライターで火をつけ煙を燻(くゆ)らせ、その煙は揺らめきながら風に乗って瑠利亜達の居る方へ流れていく。

「フーー……」

「零治……」

「なんだ？」

「ココナッツミルクの匂いをこちらに漂わせないでくれるとありがたいんですが……」

「じゃあ風上に行けよ」

「貴方が立ってる位置が丁度風上なんですが！」

「はいはい、なら火を消せばいいんでしょう？　お母様」

零治はそう言いながらタバコを持っていた携帯灰皿の中へ捨てた。

「まったく……ブラックデビルのどこがいいんですか？　私には理解できませんね」

「タバコその物が真っ黒で格好いいじゃないか。だいたい、チェリー味のブラックストーンを吸ってるお前には言われたくないんだが……」

「いいじゃないですか。好きで吸ってるんですから」

（（どっちもどっちだと思うんだけど……））

奈々瑠と臥々瑠はそう思いこそするが、口には決して出そうとはしなかった。

「……続けてもよろしいですかな？」

青髪の女性がやや呆れ気味の視線で零治に話しかける。

「ん？　ああ、悪かった」

そんなやり取りを少し後ろで見ていた女の子二人組みは零治が吸っていたタバコに興味心を抱く。

「何なんでしょうね～？　さっきお兄さんが口にくわえていた物は～？」

「さあ？　何やら煙が出ていたようだったけど、火を使ったって事？　でも、どうやって火を点けたのかしら？　火打石を使ったようには見えなかったし……それに聞き慣れない言葉を使っていたのも気になるわね……」

「そうですね～。ますます、お兄さん達に興味がわきましたのですよ～」

「はあ……この子ったら……」

「気になると言えば～……」

「ん？」

「あの二人も気になりますね～」

二人は奈々瑠達に視線を向ける。

「あの二人がどうかしたの？　確かに先程の賊を倒した手際は見事だったけど、別に気になるような事は……まあ、服装はかなり変わってるけど、それ以外に気になる事は……」

「いやいや～。風が言ってるのはそう言う事ではなくてですね～」

「え？　じゃあ何が気になるって言うの？」

「稟ちゃんには見えませんか～？　あの二人の頭に付いてる犬のような耳が～」

「耳？」

メガネをかけた女の子はそう言われて、奈々瑠達をジッと見つめる。

「あっ！　確かに犬耳のような物が付いてるわね。でも、アレってなんなのかしら？　付け耳？」

「むむむ～。付け耳にしてはよく出来てますね～。ちょっと触ってみたいのです。それにあの二人、何やら尻尾のような物も付いてるみたいですしね～」

「尻尾？」

「はい～。羽織ってる外套のせいで分かりにくいですが、腰の辺りから何やら髪の毛とは別の毛が垂れ下がってるのが見えるでしょう～」

「ん～……？　確かに……」

そうこうしてる間に零治達が会話を続ける。

「オレがさっき言った言葉の件ねぇ……それはひょっとして、『真名』と言う風習を下らないと言った事か？」

「ええ、そうですよ」

「で？　オレにどうしろと？」

「何、貴殿が『下らない』と言った事を訂正していただきたいと思いまして……」

「……」

「我らにとって真名は己の生き様のような物。故に我らは己の真名を誇りに思い神聖視している。そうであるように真名と言う風習その物も尊い物だと思っている。直接我らの真名を呼ばれた訳ではありませんが、風習その物を下らないと称されるのはいささか我慢ならんのですよ」

零治は黙ったままだった。そこへ、不穏な空気を感じ取ったのか瑠利亜が小声で釘を刺すように話しかけてくる。

「零治。頼みますから、これ以上事をややこしくする真似はしないでくださいよ」

瑠利亜はそう懇願するが無情にもそれはバッサリと切り捨てられる事になる。

「……断る」

「なっ！？」

「ちょっ！？　零治！！」

「お前の言ってる事も分からん訳ではないが、だからと言って『はい、そうですか』と自分の言った事を簡単に覆すほどオレは意志の弱い人間ではない」

「ほお……」

女性の眼が僅かながら据わる。

「それにだ、その風習のおかげで迂闊に相手の名を呼ぶ事もできない。どこの誰が考えたか知らないが面倒くさい事この上ない。しかも許可無く呼んだら殺されても文句は言えないだぁ？　ハッ！　それじゃあ墓が幾つ有っても足りやしないぜ」

「なるほど。そういう態度をお取りになるか……」

「納得のいかないって顔だな……」

「当然でしょう」

「フッ……このままでは埒があかんな。どうするか……ん？」

零治の視線が女性の持ってる深紅の穂先が特徴の槍に止まる。

「お前、槍を持ってるという事は武術の心得があるのか？」

「ええ。それが何か？」

「……なら勝負で白黒つけるのはどうだ？」

「勝負ですと？」

女性は零治の言葉に首を傾げながら聞く。

「そうだ。その槍でオレを負かす事ができたら、さっきの言葉を取

り消してやる……どうだ？」

「ほお、面白い……では、そちらが勝った場合は？」

「別にどうもしない。興味も無いしな……」

「それでは張り合いが無い気がするが……まあ、いいでしょう」

このやり取りを見ている双方のメンバーは……

「姉さん……止めなくていいんですか？」

「無理言わないで下さい。もう私の手には負えませんよ……」

「うわ～♪　何だか面白い事になってきたね！」

「「はあ……」」

「？」

状況を理解出来ていない臥々瑠の発言に、瑠利亜と奈々瑠は盛大な溜め息を吐くが、臥々瑠はなんの事かと首を傾げる。
そもそも、子供っぽい性格をしている臥々瑠にこの状況の重大性を理解しろという方が無理な話なのである。

「おやおや～。何やら面白い展開になりましたね～」

対する青髪の女性の連れの金髪の女の子もこの展開に興味深げな反応を示すが、メガネをかけた女の子は声を上げ反論する。

「ちょっ！？　風、何を呑気な事を言ってるの！！」

「まあまあ、稟ちゃん。これは好機なのですよ～」

「好機？」

「はい～。あのお兄さんがどれ程の武を持ってるのかを目にする又と無い好機ですよ～」

「確かに彼の強さは気になるけど……でも、だからって！！」

「じゃあ稟ちゃんはあの二人を止める事ができますか～？」

「……無理」

そうこうしてる間に女性が槍を構え零治に対峙するが、対する零治は棒立ちのままである。

「ん？　お主、なぜ剣を抜かない？」

「抜く？　それは冗談のつもりか？」

「何？」

「お前如きの相手など素手で充分だ……」

「ほお……大言壮語とはよく言ったもの」

「言いたい事はそれだけか？　さっさとかかって来い……」

零治はそう言いながら右手を突き出し手招きをして女性を挑発する。

「フッ、ならば我が神速の槍……受けてみよ！！」

女性は零治に向かって突進し高速の突きを放つ。

「せいっ！！」

「フッ……」

しかし、零治はその一撃をヒラリと交わし槍を右手で掴み取る。

「なにっ！？」

「これで神速を語るとはな……笑わせてくれる」

「くっ……！」

女性は零治の手から槍を引き抜こうとするが、まったくビクともしなかった。

「どうした？　もう終わりか？」

「フッ、まさか。今のはほんの小手調べですよ」

「ほお……オレも舐められたものだな」

（とは言ったものの、こやつ間違いなく強い！　さて、どうしたものか……）

「やはりこんなものか……」

零治は一言呟き、不意に槍から手を離す。女性はおもわずバランスを崩し転びそうになるが、すんでの所で踏みとどまる。

「おっとっ！？」

「時間の無駄だな。これで終わりにしてやる……」

そう言いながら零治は居合いの構えを取る。

「フッ……ようやくその気になりましたか」

女性も槍を構え直し、不敵な笑みを浮かべながら改めて零治と対峙する。

「そう思いたければそう思ってろ。真の神速がどういうものか、今から教えてやる……」

「フッ、面白い。なら、見せていただきましょうか」

辺りに静寂と緊迫した空気が張り詰める。その刹那……

「フッ！！」

零治は女性に向かって凄まじい速度で突進する。

「クッ！　速い！？」

女性は咄嗟に防御の体勢を取るが……

「遅いっ！！」

零治は女性の持ってる槍に渾身の一太刀を打ち込む。

「なっ！？」

女性は零治の一撃の衝撃を受け止めきれず槍を弾き飛ばされた。槍はそのまま空中でクルクルと回転しながら落下し地面に突き刺さる。そんな中、零治は女性に叢雲の切っ先を突きつける。

「勝負ありだな」

「くっ……私の負けですな」

女性は悔しげな表情で両手を軽く上げ、零治に降参の意を示す。

「流石は兄さんですね」

「まっ、当然の結果ですね」

「兄さん、すっご～い！！」

瑠利亜と奈々瑠はこうなるのが当然のような反応をし、臥々瑠はその場でピョンピョンと飛び跳ねながら大はしゃぎしていた。

「あの星殿が……負けた？」

「いやはや～。上には上が居るものですね～」

メガネをかけた女の子は信じられないというような表情で二人を見つめる。金髪の女の子も賞賛の言葉を漏らす。

零治は周りの反応など気にも留めず槍を地面から引き抜き女性に手渡した。

「ほらよ」

「これはどうも。しかし、先程の一撃は見事でしたな」

「あの程度の事で褒められてもなぁ……」

零治は女性の賞賛に素っ気ない反応をする。

「ほお。では、まだ上があると？」

「少なくとも本気を出したつもりは無い」

「フフ、ならいつか、その本気とやらを見せていただきたいものですな」

「機会があればな……。で？　まだ続けるとか言ったりしないだろうな？」

「いや、ここは潔く負けを認めましょう。ですが、貴方の言った事を認めたわけではありませんぞ」

「フッ……それで構わんさ」

そうこうしてる間に双方のメンバーが二人に近寄ってきた。

「星ちゃん、お疲れ様でした～」

「星殿、大丈夫でしたか？」

「ああ、二人とも。見てのとおり傷一つ負っておらんよ」

二人は青髪の女性に労いと気遣いの言葉をかける。一方、零治達の方はというと……

「零治っ！！」

「な、なんだよ……？」

「どうして貴方はいつも事を荒立てる方向にしか持っていかないんですか！！　少しは穏便に済ませる考えは無いんですか！！」

「はいはい、オレが悪うございました。分かったから耳元で怒鳴るなよ……タバコでも吸うか？」

「結構です！！」

あまりにも対照的な光景だった。

「いやはや。にぎやかですな」

「そうか？　単に口うるさいだけだぞ」

「誰のせいだと思ってるんですか……」

「そう言えば、まだ名を伺ってませんでしたな。見た所この国の者ではないようですが……」

「人に名前を尋ねる時は、まず自分が名乗るのが礼儀だと思うんだが……」

「ああ、これは失礼。我が名は趙雲、字は子龍と申します」

「「……えっ？」」

零治と瑠利亜は女性の口から予想だにしない名前が出てきたため思わず素っ頓狂な声を出してしまった。

「どうかなさいましたか？」

趙雲は零治達の反応に首を傾げる。

「いや……別に……。ええと、趙雲……ちょっと失礼していいか？」

「ええ、どうぞ」

零治は趙雲から少し距離を取り瑠利亜と小声で話し合う。

「おい、瑠利亜。アイツ今、趙雲って言ったか？」

「ええ。この耳で確かにそう聞きましたよ……」

「……趙雲って女だったのか？」

「いえ、私の知る限り男性と記憶してますが……」

そこへ二人の話が気になったのか、奈々瑠と臥々瑠が会話に入って来る。

「どうかしたんですか？　兄さん」

「なになに～？　なんか面白い話～？」

「お前達には後で話してやる」

「はあ……」

「ブ～。ケチ……」

「どうしました？　さっきからコソコソと」

「あ、ああ、何でもない。気にしないでくれ」

「はあ……」

「えーと、アンタの名は趙雲ね……じゃあ、そっちの二人は？」

零治はその場を誤魔化すように残りの二人の名前を尋ねる。

「風は程立と申します～」

「今は戯志才と名乗っております」

「……」

零治は戯志才と名乗った女の子をジッと見る。

「な、何です？　私の顔に何か付いてますか？」

「いや……偽名で名乗るんならもう少し言葉は選んだ方がいいぞ」

「えっ！？」

戯志才は零治の指摘を受け、驚きの表情を浮かべ声を上げる。

「名乗る時、『今は』って言っただろ？　その名乗り方だと偽名を使ってますって自白してるのと同じだぞ。次からは注意しな」

「えっと……その……」

「まあ、偽名で名乗るのは理由があっての事だろ？　深くは聞かんよ」

「すみません。そうしていただけると助かります」

（『趙雲』、『程立』、『戯志才』……どれも三国志の登場人物の名前ですね。しかし、なぜ性別が女性に？　平行世界？　それとも我々の世界の歴史の記録が間違っていたんでしょうか？）

「さて、こちらは名乗り終えたのですから、次はそちらの番ですぞ」

「ああ、そうだな。オレは音無零治だ」

「神威瑠利亜です」

「奈々瑠といいます」

「アタシは臥々瑠♪　よろしくね」

零治達は順に名を名乗る。

「ふむ。姓が音、名が無、字が零治ですかな？」

「違う。姓が音無、名が零治だ。字は無い」

「字が無い？　変わってますな」

「そちら側からすればそうなんだろうな。加えて言うとだ、そちらで言う真名も無い。強いて言うなら下の名前の零治が真名に該当するが……」

「えっ！？」

「なんと！？」

「おやおや～」

趙雲達は零治の言葉を聞き驚きの表情を浮かべる。約一名、本当に驚いてるのか疑問だが……

「まさか、会って間もないのに真名を預けられるとは……と言う事はそちらの御三方も？」

「ええ。私も彼と同じく字も真名もありません。下の名前が真名に該当する点も同じですね」

「私達はそれどころか姓名も無いんですけどね」

「何をそんなに驚いてる？　生まれの国が違えば風習も違うものだ。だいたい、オレの名前に特別な意味など無い。気にするな」

零治は三人に対しそう言うが、程立が口を挟んでくる。

「いやいや～。そう言う訳にはいきませんよ～」

「ん？」

「お兄さん。これから風の事は風と呼んでください～」

「ちょっと!?　風!!」

「ほお」

戯志才は驚きの、趙雲は興味深げの表情で程立もとい風を見る。

「それは真名だろ？　いいのか？」

「はい～。知らずとは言え、お兄さん達に真名を預けられたのです

から、こちらも預けねば不公平ですので～」

「そういうもんか？」

「そういうものですよ～。他の御三方も風と呼んでくださいね～」

「ふむ。確かに風の言ってる事も一理あるな」

「はい？」

「零治殿、そして他の御三方も以後、私の事は星と呼んでくだされ」

「おいおい。オレは真名と言う風習を下らないと言った男だぞ。そんな奴に大事な名前を預けるつもりか？」

「フッ、その件に関しては貴方を負かして訂正させれば済む話。何より貴方の武に惚れましたので」

（あれ～？　オレひょっとして厄介な奴に目を付けられた？）

「えっと……私は……その」

二人とは対照的に戯志才は言いよどんでしまう。

「別に無理に教えなくても構わんぞ」

零治は気遣うように言う。

「すみません……」

「ところで零治殿達はこれからどうするおつもりで？　どこかに行く当てとかはあるのですか？」

「ああ、それなんだが……どこかに街とかがあれば場所を……」

「兄さん。お話中すみません」

「ん？　どうした？」

「兄さん。アレは何でしょう？」

「ああ？」

一同は奈々瑠が指差してる方向に眼を向ける。そこには……

「砂煙？」

大量の砂塵を舞い上げる一団が近づいていた。

第3話　狼と龍の対決（後書き）

作者「はい。恒例の後書きコーナーです」

零治「いい加減やめる気は無いのか？」

作者「無いね」

零治「はあ……」

奈々瑠「まあまあ、兄さん。ここは一つ暇な作者にお付き合いしてあげましょう？」

作者「やめろよ！！　その言い方！！」

瑠利亜「違うんですか？」

作者「違うわ！！　仕事とかもあって、メッチャ忙しいわ！！」

臥々瑠「その割にはいつも夜遅くまで起きてるよね？」

零治「だな。いつも寝る時間、夜中の3時とかだもんな」

作者「そうでもしなきゃ趣味に没頭できねぇんだよ」

瑠利亜「まあ、その気持ちは分かりますがね。仕事もある身なんですから差し支えの無いようにしてくださいよ」

作者「はいはい。じゃあ次に進みますかね」

零治「今回も酷い内容だな」

作者「開口1番がそれかい……」

零治「つーか、オレが吸ってるタバコの銘柄なんだがよ」

作者「何だよ？」

零治「何でブラックデビルなんだ？」

作者「何か問題でも？」

零治「アレお前が吸ってるタバコだろうが」

瑠利亜「確かブラックストーンもそうでしたよね？」

作者「んー？　最近ブラストは買ってないぞ。値上がりしてから買うのきつくなったから」

零治「そう言う話をしてるんじゃない。自分が吸ってるタバコをオリキャラに吸わせるんじゃねぇよ」

作者「だって普通のタバコなんか吸わせても面白く無いじゃん。ならセブンスターとかがよかったのか？」

零治「ブラックデビルでお願いします！！」

奈々瑠「兄さん……」

零治「いや～、だってセブンスターはＤＱＮが吸ってるイメージが強いから」

瑠利亜「全員がそう言う訳ではないでしょうけど、そんなイメージがあるのは確かなんですよね」

作者「だろ？　後さ、マイルドセブンはサラリーマンのオッサンが吸ってるイメージがあると思わないか？」

瑠利亜「ああ、確かに」

零治「なら、マルボロは？」

作者「マルボロはそうだな～……」

臥々瑠「なんかタバコの話で盛り上がってるんだけど……」

奈々瑠「あれはしばらく終わりそうに無いわね」

臥々瑠「じゃあ、今回はアタシ達で」

奈々瑠「そうね」

奈々瑠・臥々瑠「「読者の皆様。今回もここまで読んでいただいてありがとうございます。また、次の後書きコーナーでお会いしましょう。それでは失礼いたします」」

第４話　覇王との出会い（前書き）

今回は珍しく短いです。
ですが、それには理由が……
詳しい事は次の話の後書きコーナーで話します……

第４話　覇王との出会い

「なんだありゃ？　どこかの軍隊か？」

「おそらくは……砂塵の規模から推察するに結構な数だと思いますよ」

零治と瑠利亜は舞い上がる砂煙を見ながら言う。

「あれはおそらく陳留の刺史の軍勢でしょうな」

零治達の疑問に星が答える。

「し？　瑠利亜。刺史って何の事だ？」

「確か監察官の事だったと思いますが……」

「監察官か……」

「兄さん。どうしますか？　あの速度だとすぐに接触しますよ」

「……」

零治は迫りくる砂塵を見つめながら黙って考え込む。

「零治殿。我々はこの場を去りますが、零治殿達はどうなさいますか？」

「お兄さん。よろしければご一緒しませんか～？」

「ん？　それは一緒に来ないかと言う意味か？」

「はい～。風はお兄さんといろいろお話をしてみたいと思ってますので～」

「ふむ。それはよい案だな。何より零治殿がご一緒してくだされば、いつでも手合わせができますからな」

星は零治の方を見ながら意味深な笑みを浮かべながらそんな事を口にする。

（やっぱコイツ厄介な奴だったわ……）

「はあ、もう……この二人は……」

戯志才は星と風の言動に呆れ果てた表情を向けながら溜め息を吐く。

「零治。ホントにどうします？　あまり考えてる時間はありませんよ」

「いや……オレはここに残る」

「零治。私達みたいな人間が軍に接触するのは正直言って得策ではないと思うんですが……一応、理由は聞いておきましょうか？」

「瑠利亜。オレ達は今、致命的な問題を抱えてるのに気づいてないのか？」

「致命的な問題？」

「オレ達……この国の金を持ってないだろ」

「「あっ……」」

「ん～？」

零治の発言で瑠利亜と奈々瑠の表情が凍りつく。臥々瑠は状況を理解してないようで首を傾げるだけだった。

「だから金の稼ぎ口を確保する必要があるだろ。まさか盗賊紛いな事をする訳にもいかないだろ。それに……」

「それに？」

零治は星達にチラッと視線をやり、聞かれないように小声で話しかける。

「もし軍関係の仕事に就く事ができたら、元の世界に戻る方法の情報も集める事ができるかもしれないからな」

「なるほど。確かに」

「だからオレはここに残る。お前達はどうする？」

「そう言う事なら、お付き合いしましょう」

「私は兄さんについて行くだけです」

「アタシも～♪」

「そう言う訳だ。すまんが三人とはここでお別れだな……」

「そうですか～。奈々瑠ちゃんと臥々瑠ちゃんには聞きたい事があったのですが～……残念ですね～」

（おそらく頭に付いてる犬耳と尻尾の事なんだろうな……）

零治は、風が何を聞きたがっていたのか即座に察し、心の中で苦笑する。

「まあ、零治殿がそう決めたのなら我々は何も言いませんよ。少し残念ではありますがな」

「まあ、今からやって来る刺史とやらが取るに足らない奴なら後から追いかけてやるよ」

「フフ。さようか。なら少しは期待してもよろしいのでしょうな？」

「あまり期待されても困るんだが……」

「二人とも！　急がないと！」

戯志才が星達に早く来るように急かす。

「はいはい～。では、皆さん道中お気をつけて～」

「ああ。風も気をつけてな」

「皆さん。縁があればまた会いましょう」

「まったね～♪」

「皆さん。お元気で」

「零治殿！」

「ん？」

星が大声で呼びかけるので、零治は何事かと星の方に視線を向ける。

「零治殿……次に会うときは私が勝たせてもらいますぞ」

「フッ……悪いがそう簡単に勝ちを譲るつもりは無いぜ」

「フフ。それでこそ私が認めたお方だ。では、ごめん！！」

星は零治にそう告げ風達と共に足早にその場を後にする。

「おやおや。随分と彼女に好かれたようですね？」

瑠利亜は零治をからかうように言う。

「うるさい……」

「む～～……」

奈々瑠はその事が気に食わないのか、あからさまに不機嫌な表情で頬を膨らませる。

「ん？　どうした奈々瑠。何をむくれてるんだ？」

「別に……何でもありませんよ……」

「んー？」

奈々瑠は不機嫌なままプイッとそっぽを向き、零治に対し素っ気なく答え、零治は奈々瑠の心境を理解できないまま首を傾げていた。
その光景を傍らで見ていた瑠利亜は心の中で呆れたように呟く。

（やれやれ……こっちはこっちで不憫ですねぇ……。まあ、彼の鈍感さは今に始まった事ではありませんが……）

「さて……お前達、いつでも動けるようにはしとけよ。場合によっては逃げる事になるかもしれないからな」

零治の言葉に三人は黙ってうなずく。それからすぐに……

「これはまた……」

「……随分と大所帯だな」

零治達の前に騎馬隊の軍勢がやってきた。

「華琳様！　こやつらは……」

「……どうやら違うようね。連中はもっと年かさの、中年男だと聞いたわ」

「どうしましょう。連中の一味の可能性もありますし、引っ立てましょうか？」

「そうね……。けれど、逃げる様子もないということは……連中とは関係ないのかしら？」

「我々に怯えてるのでしょう。そうに決まってます！」

「姉者。相手を過小評価するのはよくないぞ」

青髪の女性が黒髪の長髪の女性をたしなめる。

「あら？　秋蘭は違うと言うのかしら？」

部隊の総大将と思われる金髪の少女が青髪の女性に尋ねる。

「はっ。少なくともこの四人……特に……あの赤毛の男は油断ならぬ相手かと」

「ふぅん……」

少女は零治を品定めするような目で見る。

（やれやれ……品定めされてるみたいで気に食わんな）

零治がそう思ってる時、瑠利亜が小声で話しかけてくる。

「零治、ちょっと」

「ん？　何だよ？」

「零治。あの旗、牙門旗を見てください」

「牙門旗？」

そう言われ、零治は掲げられてる牙門旗に視線をやる。

「アレがどうかしたのか？　別に変ったところはないが……」

「そうじゃありませんよ！　旗に書かれてる字ですよ……」

「旗の字？」

零治は再び牙門旗に視線を向ける。

「……『曹』に……『夏侯』の字が二つ……という事はコイツら……」

「ええ。確証はありませんが、曹操、夏侯惇、夏侯淵の可能性が高いですよ……」

「って事はオレ達、とんでもない人物に出くわしたって事か？」

「ええ。ただ、相変わらず性別は女性になってるみたいですが……」

「……まあ、その話はとりあえず置いといて、話はしてみるか。会話の内容から察するに人を捜してるみたいだしな」

そう言いながら零治は金髪の少女に呼びかける。

「なあ……」

「何？」

少女は零治を威圧するように返事をする。しかし、零治はそれに臆することなく話を続ける。

「ひょっとして、人をお捜しか？」

「あら、なぜそう思うのかしら？」

「いや。会話の内容からそう思っただけだ。それともオレの見当違いか？」

「へえ……。貴方、なかなか出来る男みたいね。名は何と言うのかしら？」

「人に名を訪ねるなら、まず自分から名乗るのが礼儀だと思うが……まあ、いいだろ。オレは音無零治だ」

「音無……そう。……ええ、貴方の言ってる通り、私達はある賊を捜してるの。何か知ってるのなら聞かせてもらえるかしら？」

「華琳様！　こんな奴の話を信用するおつもりですか！？」

「春蘭。今は少しでも情報が必要なのよ。それに信用するか否かは話を聞いてから判断すれば済む話よ」

「むう……華琳様がそう仰るのなら……」

「続けてもいいか？」

「ええ。構わないわよ」

「その捜してる賊の特徴は？」

「そうね……。背は貴方より少し低くて、中年のヒゲ面の男なんだけれど」

「背がオレより少し低くて……」

「中年のヒゲ面……」

零治と瑠利亜は少女に特徴を聞かされ、考えるように……と言うより何か思い当たる節があるように賊の特徴を口にする。

「……他に特徴は？」

零治の問いに今度は青髪の女性が答える。

「他には特に無いな。強いて言うなら、背の低い小男と、背の高いやたら太った大男を連れ立ってるぐらいだな。どう言う訳か、その二人はすぐ向こうで何者かに殺されていたのだが……」

「「あっ……」」

奈々瑠と臥々瑠が何かを思い出したように揃って声を出す。

「どうしたの？　何か知ってるのかしら？」

「あー……アンタらの捜してる男って……アレの事か？」

零治はそう言いながら、アニキの死体を右手の親指を後ろに向けながら指差す。

「「「……！？」」」

三人の女性はアニキの死体を見て、一瞬言葉を失う。

「誰か！　あの死体を調べてきなさい！！」

「はっ！！」

すぐに我に返った金髪の少女が近くの兵士に指示を出す。指示を受けた兵士がアニキの死体を調べるが、すぐに少女の元に戻って来た。

「どう？」

「いえ。あの男は持っていませんでした。ただ、こんな物が刺さっていたのですが……」

兵士はアニキの肩に刺さっていた零治の投擲ナイフを少女に手渡す。

「これは……短剣かしら？」

少女はそう言いながら、零治のナイフを興味深げな視線で鑑定でもするように見る角度を変えたりして調べる。

「たぶん、そうだと思いますが、なにぶん見た事もない形をしてますし、随分と小さいので何とも言えませんが……」

「そう……。いいわ、下がりなさい」

「はっ」

兵は一礼し、その場から下がり、自分の持ち場に戻る。

「あの男が持っていないと言う事は、他の仲間が持ち去ったと言う事かしら？」

「華琳様。もしや、この四人の誰かが……！」

黒髪の女性が殺気の籠った視線を零治達に向けながらそう言う。

「確かに、その可能性が無いとは言えないけれど、それは彼らを引っ立てて調べれば済む話。それよりも……貴方達に聞きたい事があるのだけれど」

「何だよ？」

「……アレをやったのは誰なの？」

「オレだが……それがどうかしたのか？」

「そう……春蘭」

「はっ」

「貴方、人の手足をあんな風に切断する事は出来るかしら？」

金髪の少女はアニキの死体を見ながら黒髪の女性に問いかける。

「はあ……。切断は出来るかもしれませんが、あそこまで綺麗に切り落とすのは流石に……」

「うむ。いくら姉者の剣の腕でも、あそこまで綺麗に切断は出来ないだろうな……」

「そう……。音無と言ったわね」

「ああ」

「アレは、その腰に下げてる剣でやったのかしら？」

「そうだが……？」

「そう。その剣、見せてもらえないかしら？」

「これをか？」

「ええ」

「別に構わんが、アンタに『触る』事が出来るのかな？」

「それはどういう意味かしら？」

零治の意味深な発言に、少女が零治をじろりと睨み付けながら反応するが、零治はその視線をさらりと受け流し、当たり障りのない返事をする。

「いや、こっちの話だ。まあ、見たいんなら……ほらよ」

零治は腰の専用ベルトから叢雲を鞘ごと引き抜き、無造作に少女の方に放り投げた。

「きゃっ！？　……貴方ねぇ、手渡すのなら、もう少しマシな……って何よ、触れるじゃない」

「ほお……。叢雲が『触る』事を『許可』するとはな……」

「ええ。珍しい事もあるものですね」

零治と瑠利亜は興味深げな表情で少女を見る。

「しかし……『抜く』事は出来るかな？」

「さっきから何を訳の分からない事を言ってるの？　抜く事が出来ない訳……」

少女はそう言いながら叢雲を鞘から引き抜こうとするが……

「……えっ？　あれ？」

「華琳様？　いかがなさいました？」

黒髪の女性が問いかけるが、少女はそれに構わず、叢雲を鞘から引き抜こうと更に手に力を込める。

「どういう事？　剣が……抜けない？」

だが、どうやっても鞘から抜ける気配は全くなかった。

「華琳様。私もよろしいでしょうか？」

「え、ええ……」

黒髪の女性が叢雲に手を伸ばすが……

「痛っ！！？」

黒髪の女性が叢雲に触れた瞬間、苦悶の表情を浮かべながら声を上げ、慌てて手を引っ込める。その様子を見た少女は慌てた様子で女性に問いかける。

「ちょっと！？　どうしたの！？　春蘭！！」

「わ、分かりません。その剣に触った瞬間、何やら手に衝撃が走って……」

黒髪の女性は右手をさすりながら少女の問いに答える。

「どういう事！？　貴方！！　この剣に一体なにをしたの！？」

少女はキッと零治を睨み付けるが、零治は落ち着いた態度で少女の疑問に答える。

「落ち着けよ。オレは何もしてないぜ。オレはな……。ただな、その剣は普通の剣とは違うんだよ」

「どういう事？」

「その剣にはな、意思のようなものが宿ってるのさ。その剣に認められなければ、抜く事はおろか触る事すら出来ないんだよ……」

「剣に意思が宿ってるだと？　ハン！　貴様、頭がおかしいんじゃないのか？」

黒髪の女性はバカにしたような眼で零時を見ながらそう言う。

「春蘭。黙りなさい」

「ですが華琳様……」

「春蘭……」

「は、はい……」

黒髪の女性はしぶしぶ黙る。

「なるほど……。仮に貴方の話が本当だったとして、なぜ私は触る事ができたのかしら？」

「さあな？　その剣、叢雲がアンタの中に眠る何かの素質を見出したから触る事を許可したんじゃないのか？　ただ、そいつの所有権はオレに有る訳だから抜く事までは許可しなかったみたいだがな……」

「ふぅん……」

少女はジッと叢雲を興味深げな視線で見つめる。

「まだ気になるのか？」

「ええ」

「はあ……。なら、そいつを貸せ。オレが代わりに抜いてやるよ」

「貴様ぁ！！　そんな事を言って、この場で華琳様を亡き者にするつもりだろ！！」

黒髪の女性が零治に殺意をむき出しにしながらそう言う。

「おいおい。この状況でそんな気を起こすバカがどこに居るんだ？だいたい、そう言う時のためにアンタらがついてるんだろうが。その手に持ってる武器は飾りか？」

「何だと！？」

零治の発言に黒髪の女性は激昂し、自身の持ってる剣の柄に手をかける。

「姉者！」

「止めるな！　秋蘭！！」

「やめないか、姉者。確かに言い方は気に入らないかもしれないが、その男が言ってる事は正論だぞ」

「むう……」

青髪の女性に咎められ黒髪の女性は黙り込む。

「零治。貴方もですよ。もう少し言葉を選んで下さい」

「へいへい……」

「まあ、私に抜く事が出来ないのなら、貴方に頼むしかないわね。それじゃあ、お願いできるかしら？」

「はいよ」

零治はそう返事をしながら少女から叢雲を受け取る。

「くっ！　貴様、妙な真似をしたら命は無いと思えよ！！」

「お～、怖い怖い」

零治は黒髪の女性の台詞をどこ吹く風と聞き流し、おもむろに叢雲を鞘から引き抜く。

「ほら……」

零治は叢雲を横倒しに持ちながら女性達の前に突き出し、三人の女性はマジマジと叢雲の刃を見つめる。

「むう……。随分と細い剣だな……」

「うむ、確かに……。しかし、こんな形の剣は今まで見た事もないな」

「ええ、そうね……。その上、刃は恐ろしいほど鋭く出来てるわ。こんな物で斬り付けられたらひとたまりもないわね……」

「……もういいか？」

「ええ。ありがと」

零治は少女が納得したのを確認し叢雲を鞘に納め、そのまま専用ベルトの元に戻した。

「ならついでに、その短剣も返してくれるとありがたいんだが……」

「あら？　これも貴方の物なの？」

「ああ」

「フン！　貴様の物だと言う証拠でも有るのか？」

「証拠なら有るぞ……ほら」

零治はそう言いながらコートを開いて隠し持ってるナイフを女性たちに見せる。

「なっ？　同じ物だろ？」

「ふむ。確かに同じ形をしてるから嘘ではなさそうね。なら、お返しするわ」

「どうも」

零治は少女からナイフを受け取り、刃に付いてる血を持っていたハンカチで拭き取りコートの中にしまう。

「さて、華琳様。この者達の処遇はいかがいたしましょうか？」

青髪の女性が金髪の少女に尋ねる。

「そうね……。気になる事もあるし、とりあえず街まで連れて行くわ」

「御意」

「まだ連中の手掛かりがあるかもしれないわ。半数は辺りを捜索。残りは一時帰還するわよ」

「はっ！」

「そう言う訳だから貴方達、悪いけど一緒に来てもらうわよ」

「……どうせ拒否権は無いんだろ？」

「あら。分かってるんじゃない。なら、さっさと歩きなさい」

零治達は騎馬隊の軍勢に連行される形で移動を始める。そんな中、零治は懐に手を入れタバコを取り出そうとするが、瑠利亜に止められる。

「零治。タバコはダメですよ」

「なんで？」

「なんでって、この世界にタバコは存在しないんですよ。この状況でタバコに火を点けるとこを見られて、変に疑われたらどうするん

ですか？　勘弁してくださいよ……」

「はいはい……」

零治はしぶしぶタバコを吸うのを諦める。

「ん？　さっきから何をブツブツ言ってるの？」

「何でもありません……」

零治はそう言うが、心の中では大きなため息をついていた。

第4話　覇王との出会い（後書き）

作者「……」

零治「どうした？　今日は珍しく静かじゃないか」

作者「いや……風邪ひいてるから調子が……」

瑠利亜「それは、リアルでの話でしょうが……」

作者「まあ、そうだけど……じゃあ、オレ5話の仕上げにかかるから、後は任せる……」

零治「はっ？　おい、待てって……」

奈々瑠「……行っちゃいましたね」

臥々瑠「どうしたんだろうね？」

瑠利亜「さあ？」

零治「……とりあえず」

瑠利亜「とりあえず？」

零治「次回を待て！！」

第5話　覇王の元に集う4人の狼、そして…（前書き）

はい。前の話の続きです。
鋭い方なら、前回の話が短かった理由について気付かれるでしょうね。
つまりは、そういう事です……

第5話　覇王の元に集う4人の狼、そして…

零治達は騎馬隊の軍勢に連行され、しばらくして街に到着し、尋問される事になり……

「なら、順にもう一度聞く。名前は？」

青髪の女性が零治達に名を聞き、零治達は順に名乗る。

「音無零治」

「神威瑠利亜」

「奈々瑠です」

「臥々瑠だよ」

「では音無零治。お主の生国（しょうごく）は」

「国名が無いから西側としか答えようがないな……」

「……この国に来た目的は？」

「分からん」

「……ここまで、どうやって来た？」

「それも分からんとしか言えんな。気が付いたら、あの荒野に居たんでね」

「……華琳様」

青髪の女性は困惑した表情で金髪の少女に顔を向ける。

「埒があかないわね。春蘭」

「はっ！　拷問にでも掛けましょうか？」

現在に至ってるが、話はまったく進展しない状態だった。

「あのなぁ、拷問されようが何されようが、今言った以上の事は分からんし、知らんもんは知らん」

「本当に埒があかないわね」

「後は、こやつらの持ち物ですが……」

机の上には零治が吸ってるタバコの箱とライター、瑠利亜が吸ってるタバコの箱とライター、彼女が雑記帳代わりに使ってる携帯端末、零治の投擲ナイフなどが並べられていた。

「この箱は何なの？　随分上質な紙が使われてるようだし、表面には見た事も無い文字が書かれてるし、中には筒状の棒が何本も入ってるけど……これにも紙が使われてるわね……」

少女は零治のタバコの箱を手に取り、興味深げに観察しながら零治に質問し、零治はその問いに淡々と答える。

「タバコ……オレの国の嗜好品」

「嗜好品？　どうやって使うの？」

「火を点けて煙を吸う……それだけ」

「そんな嗜好品、見た事も聞いた事も無いわね。そもそも、貴方の国、西側のどこにあるの？　おまけに国名が無いだなんて……」

「それについては……どう答えたものかな？　なあ瑠利亜……」

「そうですねぇ……」

二人は自分たちの置かれてる状況をある程度把握してるだけに返答に詰まってしまう。それを見た黒髪の女性がその態度に苛立って、怒りを露わにしながら零治達に詰め寄る。

「貴様らぁ……！　こちらが下手に出ていれば、話をはぐらかしお

ってぇ……！」

「いや、アンタは下手に出てないだろ」

「なんだと、貴様ぁっ！」

「はぁ……春蘭。いい加減になさい」

「……で、でもぉ」

「あとさ、一つ頼みがあるんだが……」

「何？」

「こちらは名前を教えたんだ。いい加減そっちの名を教えてくれてもいいんじゃないのか？　今、アンタらが呼び合ってる名前は真名なんだろ？」

「あら。知らない国から来た割には、真名の事は知っているのね？」

「……オレが殺した、あのクズ野郎から聞き出してね」

その際、零治は瑠利亜に目配せをする。

（とりあえず星達の事は伏せておきますかね……）

「勝手に呼んじゃいけないんだろ？　その名前……」

「当たり前だっ！　貴様ごときが華琳様の真名を呼んでみろ……。その瞬間、貴様の胴と首は離れているものと思えっ！」

（ああ……やっぱメンドくせぇなぁ、この風習。考えた奴が、もしオレの目の前に居たら間違いなくブン殴ってるわ……）

「だから、そろそろ名を教えてくれないか？　でないと不便なんでね……」

「そういえばそうね。私の名は曹孟徳。それから彼女達は、夏侯惇と夏侯淵よ」

「ふんっ」

「……」

曹操は丁寧に名乗り、夏侯惇は忌々しげに鼻を鳴らし、夏侯淵は黙ったまま零治達を見る。

その名を聞き、零治は思わず自分が知ってる歴史の知識をぽろっと口に出してしまう。

「ああ。牙門旗に書かれてる字を見て、まさかとは思ってたが、やっぱ魏の曹操だったのか」

「……どういう事？」

零治の台詞で曹操の表情が凍りつく。

「ん？　どうかしたか？」

「……どうして貴方が、魏と言う名前を知っているの？」

「どうしてもなにも、魏の曹操と言えば有名な話だろ？」

曹操の言葉の意味を理解していない零治に、瑠利亜がすかさず小声で話しかける。

「零治。もしかしたら魏はまだ建国されてないのでは？　確か基礎作りがされたのが『赤壁の戦い』の後でしたし……」

「あっ……」

零治は思わず間の抜けた声を出してしまい、『やっちまった』、と表情に出す。

「貴様、華琳様の名を呼び捨てにするでない！　しかも、魏だの何だの、意味不明な事ばかり言いおって……！」

「春蘭。少し黙っていなさい」

「う……は、はい……」

「……信じられないわ」

「……華琳様？」

夏侯淵がどうしたのかと曹操に話しかけるので、曹操は事情を説明し始める。

「魏と言うのはね。私が考えていた国の名前の、候補の一つなのよ」

「……は？」

「どういう意味ですか……？」

「まだ春蘭にも秋蘭にも言っていないわ。近いうちには言うつもりだったのだけれど……」

部屋の空気がどんどん冷えていく。そんな中、零治は瑠利亜に話しかける。

「なあ、瑠利亜……」

「なんです……？」

「オレひょっとして……地雷を踏んだか？」

「それどころか、火を点けた花火を持って地雷原に突撃したのでは

？」

そんな話をする二人を曹操が睨み付けながら鋭く叫んだ。

「それを、どうして会ったばかりの貴方が知っているの！　そして私が名乗った曹孟徳ではなく、操と言う名を知っていた理由も！　説明なさい！」

「まさかこやつら、五胡の妖術使いでは……！」

「華琳様！　お下がりください！　魏の王となるべきお方が、妖術使いなどという怪しげな輩に近づいてはなりませぬ！」

そう言いながら夏侯惇は剣を抜き、零治達に突き付ける。

（いきなり魏って使ってるじゃねぇか……）

「なんだよ……？　殺る気か？」

零治の眼に殺気が宿り、部屋に一触即発の空気が張り詰める。

「ちょっと！？　二人ともやめてください！　ちゃんと説明しますから、荒事は勘弁してください！！」

瑠利亜が慌てながら零治と夏侯惇の間に割って入り、2人を止め、事のいきさつを曹操達に説明する。

……

……

…

「……で、結局それは、どういう事なんだ？」

先程説明を聞いたにもかかわらず、夏侯惇が再び質問する。

「ですから、私達はこの世界で言う……未来から来た人間って事ですよ」

「……秋蘭。理解できた？」

「……ある程度は。しかし、にわかには信じがたい話ですな」

夏侯淵は信じられないという表情で零治達を見ながら言う。

「我々も全てを信じてる訳ではありませんよ。ですが、そう考えないと辻褄が合わないんですよ」

「……ふむ」

「この時代の王朝は、漢王朝ですよね？　今の皇帝はよく憶えてませんが、一度新に滅ぼされかけて、そこから国を復興させた皇帝は光武帝でしたよね？」

瑠利亜の質問に曹操は小さく頷く。

「ええ。その辺りの知識はあるのね」

「流石は本の虫の歴史マニアだな」

「いつも一言多いんですよ貴方は……だいたい、最近の学校ならこの辺はテストの範囲内ですよ」

「けっ……。あの世界で学校に行けるのは一部の上流階級の人間だけだろうが……」

学校という単語を聞いた零治は頬杖をつきながら吐き捨てるように言う。

「まあ、そうですけど。昔は違ってたみたいですがね……」

「……学校？」

曹操が首を傾げて聞くので、瑠利亜がその疑問に簡単に答える。

「ええっと、みんなで集まり、様々な分野の勉強をする所……ですね」

「私塾の事？」

「まあ、そんなとこですね。……我々のいた世界より少し前の時代では、それを個人ではなく国が運営して、国民全員に義務として勉強させていたそうですよ」

「なるほど。最低限の学力を平均的に身に付けさせるためには、悪くない方法ね……」

曹操は感心したように言う。だが、今は学校に話をしてる訳ではないので、瑠利亜が本題に戻す。

「で、話は戻りますが、先程言った漢王朝の出来事は、私達の世界では、二千年以上も昔の話なんですよ」

「……ふむ」

「……お前、話を全く理解してないだろ？」

「……文句あるか」

零治と夏侯惇が再び睨み合う。

「二人ともケンカはやめてくださいよ。……では、例えばですが、夏侯惇殿」

「おう」

「貴方が、どこかわけの分からない場所に連れて行かれて、項羽と劉邦に会ったようなものですよ。後は、太公望とか始皇帝とかですかね」

「……はぁ？　項羽と劉邦と言えば遥か昔の人物だぞ！　そんな昔の英傑に私が会えるものか。何を馬鹿な例えを……」

「だから、今のオレ達がそう言う馬鹿げてる状態にあるんだよ」

「……な、なんと」

夏侯惇がようやく話の内容を理解し、驚きの表情を浮かべる。

「確かに、それならば……音無が華琳様の考えていた魏と言う国の名前を知っていた事も、説明が付くだろうな」

「だが……貴様らはどうやってそんな技を成し遂げたのだ。それこそ、五胡の妖術ではないか」

「それは分かりませんね。妖術ではありませんが、それに似た類の

術は確かに使えますけど。どうしてこうなったのか、こっちが知りたいくらいですね」

「……南華老仙の言葉に、こんな話があるわ」

「なんだよ突然。なんかろうせん……？」

「南華老仙……荘周が夢を見て蝶になり、蝶として大いに楽しんだあと、目が覚める。ただ、それが果たして荘周が夢で蝶になっていたのか、蝶が夢を見て荘周になっていたのかは……誰にも証明できないの」

「ああ、胡蝶の夢ですね」

「へぇ～……大した教養ね。それも学校と言うやつのおかげかしら？」

「いえ、私の場合は独学ですので」

「なんせ、本の虫だからな」

「だから、一言多いと言ってるでしょ！」

瑠利亜が零治をキッと睨み付けながらそう言う。

「な、ならば華琳様は、我々はこやつらの見ている夢の登場人物だと仰るのですか！」

「そうは言ってないわ。けれど私達の世界に、零治達が迷い込んできたのは事実、と考える事も出来ると言う事よ」

「は、はあ……」

夏侯惇はそう返事をするもの、今一つ理解できてないようである。

「零治達が夢を介してこの世界に迷い込んだのか、こちらに居た零治達が夢の中で未来の話を学んできたのかは分からない。もちろん、私達にもね」

「……要するに、どういう事です？」

曹操の説明の仕方が難しすぎるので、妹の夏侯淵が簡単に説明し、夏侯惇に聞かせる。

「華琳様にも分からないが、少なくともここに音無達が居る、と言う事だけは事実だ、と言う事だ」

「……うむぅ？」

夏侯惇は生返事をするだけだ。どうも理解できていないようだ。

「それでも分からないなら、諦めろ。華琳様にもお分かりにならな

い事を姉者が理解しようとしても、知恵熱が出るだけだぞ」

「むむむ……」

「春蘭。色々難し事を言ったけれど……ここに居る音無零治達は、天の国から来た遣いなのだそうよ」

「「「「……はっ？」」」」

曹操がいきなりとんでもない発言をするので、零治達四人は素っ頓狂な声をだしてしまう。

「なんと……。こんな風采の上がらない奴らが、天の遣いなのですか？」

「おい……。いきなり何を言い出すんだ」

「しかも、夏侯惇は納得してるっぽいですし……」

「五胡の妖術使いや、未来から来たなんていう突拍子もない話をするよりは、そう説明した方が分かりやすくて済むのよ。貴方達もこれから自分の事を説明するときは、天の国から来たと、そう説明なさい」

「どっちも似たようなものだろうが……」

零治は半ばあきれた表情で曹操を見ながらそう言う。

「あら。妖術使いと呼ばれて、兵に槍で突き殺される方がマシ？」

「「「「……天の遣いで良いです」」」」

口をそろえて、そう言う零治達。

「さて。大きな疑問が解決したところで、もっと現実的な話をして良いか？　音無」

「ん？　……ああ、その南華老仙の古書を盗んだ賊の話か？」

「そうよ。貴方達、確かにあの三人以外に賊は見なかったのよね」

「ああ」

「となると、やはり他にも仲間が居て、そいつらが持ち去ったと言う事でしょうか？」

「あの三人は持っていなかったし、その可能性は高いわね。秋蘭、また斥候を放って情報を集めさせといてちょうだい」

「御意」

曹操と夏侯淵がそんな話をしてる中、零治は瑠利亜に小声で瑠利亜に話しかける。

「瑠利亜……」

「何です？」

「……オレ達の置かれてるこの状況から考えると、黒狼達もこっちの世界に来てるんじゃないか？」

「確かに……その可能性は高いでしょうね……」

「なら、曹操達に捜してもらうとするか……」

「捜させてどうするんです？」

「決まってる。奴から情報を聞き出すのさ。奴は間違いなく、この世界について何か知ってるはずだ……」

「その前に殺し合いになると思うんですが……」

「なら、情報を聞き出してから殺すだけだ……」

「どっちにしても殺すんですか……」

零治は瑠利亜の最後の言葉には耳を貸さず、曹操に話しかける。

「曹操」

「なにかしら？」

「実は、アンタに捜してもらいたい人が居る」

「……それは構わないけど。まさか、タダでと言うつもりかしら？」

「そのつもりは無い。代わりにアンタ達の捜査に協力してやる。オレ達の事を好きに使ってくれて構わない……これでどうだ？」

「ふふ。いいわ。なら、貴方達の言う未来の知識と、その武、私の覇業の助けとして存分に使わせてもらうわよ」

「ああ」

「それで、その捜してほしい人ってのは、どんな奴なの？」

「三人組の男で、そいつらもオレ達と同じ世界の人間だ。服装がオレと同じだからすぐに分かるはずだ」

「そう。分かったわ。なら、捜させるように手配をしておくわ」

「ただし……一つだけ約束してほしい事がある……」

「約束？」

「その三人を絶対に味方に引き入れない事を約束しろ。そいつらとオレ達は……敵同士だからな……」

「……いいわ。約束しましょう」

「では交渉成立だな」

「ええ。なら、貴方達の部屋を用意させるわ。好きに使いなさい」

「ありがとう。助かる」

「ふふ……そうだわ。そういえば、貴方達の真名を聞いていなかったわね。教えてくれるかしら？」

「そうしてやりたいところだが、生憎オレ達に真名は無いんだが……」

「ん？　どういう事だ？」

零治の返答に、夏侯淵がよく分からないという表情で零治に聞く。

「だから、オレ達の世界に真名は無いんだよ。……強いて言うなら、下の名の零治が真名に該当するんだが……」

「……っ！」

「な、なんと……」

「むぅ……」

「……またこの反応かよ」

零治は曹操達が星達のときと同じ反応をしたので、思わずそんな事を口にする。

「また？」

「いや、何でもない……」

「ならば貴様らは初対面の我々に、いきなり真名を呼ばせる事を許していたと……そういう事か？」

夏侯惇が驚きの表情で聞いてきたので、零治は、『そこまで驚くような事か？』と、内心思いながらも淡々と答える。

「ああ？　まあ、そっちの流儀に従うなら、そうなるな」

「むむむ……」

「そうなのか……」

「そう……。なら、こちらも貴方達に真名を預けないと不公平でしょうね」

「あん？」

「零治。そして、貴方達三人も私の事は華琳と呼んでいいわ」

「いいのか？」

「私が良いと言ってるのだから、構わないわ。……貴方達も良いわね」

「で、ですが、華琳様……っ！　こんなどこの馬の骨とも知れぬやつらに、神聖なる華琳様の真名をお許しになるなど……！」

「なら、どうするの？　春蘭は零治達の名を呼びたいとき、ずっと貴様で通すつもり？」

「アレとか犬とかお前でいいでしょうに！」

「それは流石に失礼よ。それに……」

華琳は視線を奈々瑠と臥々瑠に向け……

「こんな可愛らしい娘達を名前で呼んだあげないなんて可哀そうじゃない。ねえ、貴方達もそう思うでしょう？」

華琳は妖艶な笑みを浮かべながらそう言う。その笑みを見た奈々瑠と臥々瑠は思わずビクッと肩を震わせ、小声で話し合う。

「ねえ、奈々瑠。この人……なんか怖い」

「そうね……なんか身の危険を感じるわ」

そのやり取りを見ていた零治と瑠利亜は。

「瑠利亜……」

「何ですか……？」

「コイツ……ひょっとしてレズなんじゃねぇのか……？」

「奇遇ですね。私もそう思っていたところですよ……」

「って事は、お前も危ないんじゃないか？」

「縁起でもない事を言わないでください。私にそっちの気はありませんよ……」

なんて事を口にしていた。

「それで、秋蘭はどう？」

「ふむ……承知しましたとお応えしましょう」

「秋蘭っ！　お前まで……！」

「私は華琳様の決めた事なら従うまでだ。姉者は違うのか？」

「ぐ……っ。い、いや、私だって、だな……！　そうだ、こいつら

の名前が本当に真名かどうかなど、分からぬだろう……」

「そんなつまらない嘘を吐いてるのなら、即刻首を刎ねるまでよ」

「……そんな理由で首を刎ねられたら、死んでも死にきれんわ」

「貴方が真名の意味をどう捉えてるのかは知らないけれど、私達にとって、真名と言うものはそれだけ重いと言う事よ」

（やれやれ……。昔の人間の考えは、オレには理解できんわ。しかし、少しは考えを改めるべきなのかもな……）

「だから、もしその存在を偽ってるのなら……ふむ。今謝るなら、百叩きで許してあげましょう。どうする？」

華琳は挑発的な笑みを浮かべて零治に問いかけ、それを見た零治も不敵な笑みを浮かべながら返答する。

「フッ……。どうするもなにも、オレ達の名はコレ一つしか無い。それに関しては、首でもなんでも賭けてやるさ」

「結構。なら、これから私の事は華琳と呼びなさい。良いわね、春蘭も」

「は、はぁ……」

「なら、これからよろしくな。華琳」

零治はそう言いながら右手を差し出す。

「ええ。こちらこそ」

華琳も同じく右手を差し出し零治と握手を交わした。

「さて、話がまとまったところで悪いんだけど、実はもう一つ貴方達に質問があるのだけど」

「まだ何かあるのかよ……一体何が聞きたいんだ……？」

先程まで散々質問攻めにあっていたためか、零治は嫌そうな顔になる。

「そんな嫌そうな顔をしないでちょうだい。個人的な事だからすぐに済むわよ」

「はいはい。で？　何が聞きたいんだ？」

「ええ、その二人の事なんだけど……」

華琳が奈々瑠と臥々瑠の二人に視線を向けながら零治に聞く。

「ん？　コイツらがどうかしたのか？」

「その……頭に付いてる耳は本物なの？」

「「ギクッ！！」」

華琳の問いに、奈々瑠と臥々瑠はビクッと小さく肩を震わせる。

「あ～……いつか聞かれるとは思っていたが、やはりその事か……」

「ええ。話してる間もずっと気になってたのよ。付け耳にしては随分良く出来てるし……実際のとこどうなの？」

零治はどうしたものかと考えるように後頭部をポリポリと掻き、長い間をおいて一言率直に答える。

「……本物だ」

「嘘っ！？」

「な、なぬっ！？」

「むう……」

「……流石にもう見飽きたぞ」

零治は華琳達の反応にそんな事を口にする。

「零治。流石にこの話は驚くなって方が無理でしょう……」

「まあ、確かに……」

「「「……」」」

華琳達は零治の口からとんでもない答えが返って来たため絶句していた。

「え～と……音無……」

「なんだよ？」

正気に返った春蘭が零治に話しかける。

「今のは……冗談……だよな……？」

「生憎と冗談ではないぞ」

「う～む……しかし音無……流石にこの話は信られないのだが……」

話の内容が内容なだけに、三人とも信じられないようだ。

「……そうね。人間の頭に犬耳が付いてるなんて、どう考えても普通じゃないもの。何か証明できるものはあるの？」

「はぁ……。そんなに信じられないのなら、触って確かめてみろよ……」

「「兄さん！？」」

奈々瑠と臥々瑠が零治の発言に反論しようとするが、零治はそれを制し、二人を説得する。

「二人とも、オレ達の状況を考えると隠し事をしてもロクな事にならんのは分かるだろ？　嫌かもしれないが、ここは我慢してくれないか？」

「分かりました……」

「は～い……」

二人は不満げな顔をしながらしぶしぶ了承する。

「あら、触ってもいいのかしら？」

「ああ。ただし、手早く済ませろよ。この二人はオレ達以外の人間に、耳と尻尾を触られるのを極度に嫌ってるからな」

「えっ？　この二人って尻尾もついてるの？」

「なんだよ、気付いてなかったのか？　ほら……腰の辺りから、髪とは別に毛が垂れ下がってるのが見えるだろ？」

零治は華琳に見るよう促し、華琳は零治が言った部分に視線をやる。

「……確かに……それらしき物が有るわね……」

「それより、早く用件を済ませてくれないか？」

「え、ええ……。それじゃあ……奈々瑠だったわね？　その耳……少し触らせてもらうわね」

「はい……」

華琳は奈々瑠の頭に有る犬耳に恐る恐る手を伸ばしながら触りだす。

「ひゃっ！？　く、くすぐったい……！」

「……っ！？」

華琳は奈々瑠の反応に興味をそそられ、指をさらに動かし犬耳をいじりだす。

「か、華琳さん。もう、そのくらいで……や、やめてください……っ！」

「えっ？　あ、ああ、ごめんなさい」

華琳は慌てて奈々瑠の犬耳から手を放した。

「ど、どうでしたか？　華琳様……」

「……本物だわ」

華琳は自分の手を見つめながら信じられないという表情で春蘭の問いに答える。

「華琳様……それは、確かなのですか……？」

「私も未だに信じられないけど、ちゃんと体温があったし脈も打っていたわ。作り物じゃないのは間違いないわ……」

「……音無」

長い間をおいて、秋蘭が零治の名を呼ぶ。

「なんだ？」

「その……私も……触って良いだろうか……？」

「それはオレじゃなくて、コイツらに聞いてくれ」

「……」

秋蘭が黙ったままジッと奈々瑠達を見つめる。

「じゃあ……アタシのを触って良いよ……」

臥々瑠はそう言い、秋蘭の前に進み出る。

「う、うむ……すまんな。では、失礼して……」

秋蘭は臥々瑠の犬耳に恐る恐るの手つきで触る。

「ひゃうっ！？」

「む、むう……これは……！」

華琳同様に興味をそそられた秋蘭は指をさらに動かすが、つい力を入れ過ぎてしまったようで、臥々瑠が痛がりながらペチペチと秋蘭の手を叩き、離せと訴えかける。

「ちょっ！？　秋蘭！　痛い！　痛いってば！！」

「あ、ああ。すまない……！」

秋蘭は慌てて手を放す。臥々瑠は犬耳を手で押さえ、涙目で秋蘭を睨み付ける。

「う～……！　酷いよ。触るんならもっと優しくしてよ……！」

「うむ。本当にすまなかった……」

「で……？　どうだったんだ、秋蘭？」

「うむ……確かに……本物のようだ……」

「な、なら私も……」

春蘭は二人の耳を触ろうとするが……

「え～～！？」

「もう、嫌ですよ！！」

二人は揃って耳を抑えながら触られる事を拒否する。

「ちょっと待てぇい！　華琳様と秋蘭は触れたのに、私だけ触れないのは不公平ではないか！！」

春蘭はどうしても触りたいのか、なお食い下がる。

「もう……。ちょっとだけですよ……」

「お、おう！　では、失礼して……」

春蘭は奈々瑠の犬耳に手を伸ばす。

「ひゃっ！？」

「お、おおっ！？　こ、これは……！」

先の二人同様興味をそそられ春蘭の指の動きが増す。が……

「しゅ、春蘭さん……！　もう、そのくらいで……」

奈々瑠の声が聞こえないのか、春蘭は恍惚な表情を浮かべ奈々瑠の犬耳を触り続ける。

「春蘭さんっ！！　ホントもう、やめてくださいよ！！」

秋蘭が流石にと思い春蘭を止めに入る。

「姉者。いい加減やめてやれ。奈々瑠が嫌がってるじゃないか」

「へっ？」

春蘭が指の動きを止めたのを確認した奈々瑠は素早く春蘭から離れ、零治の元に駆け寄り、春蘭を睨み付けながら怒りを露わにする。

「もう！　酷いですよ！　やめてって言ったのに……！！」

「あう……その……すまなかった」

「春蘭さんには、もう二度と触らせませんからねっ！」

「あらあら。すっかり嫌われちゃったみたいじゃない。春蘭？」

「か、華琳様～……」

「ふふ。それにしても……」

華琳はまたしても妖艶な笑みを浮かべながら奈々瑠達を見つめる。

「さっきの貴方達の反応……とても可愛らしかったわ。思わず閨で可愛がってあげたくなるわ」

「っ！？」

「ほえ？」

奈々瑠は華琳が何を言ってるか即座に理解したのか、顔が真っ赤になる。対する臥々瑠は首をかしげるだけだった。

「ねえ、奈々瑠。ねやって何の事～？」

「ア、アンタは知らなくていいのよっ！！」

「ブ～。いいじゃん。教えてよ～」

「あら？　それじゃあ、今から私が教えてあげましょうか？」

これ以上は危険と判断した零治がすかさず華琳達の会話に割って入る。

「華琳……」

「ん？　なにかしら？」

「この二人はオレ達にとって妹のような存在だ。妙な真似をしたらタダじゃおかないからな……」

「あらあら。怖いお兄様だこと」

「ほっ……」

「ん～？」

このやり取りを傍観していた瑠利亜は……

（なんか……私生活面にもの凄く不安を感じるのは私だけでしょうか……？）

なんて事を心の中で呟いていた。

……

……

…

ここは零治達が居た場所とは別の荒野。そして、そこに立つ三人の人影、黒狼、金狼、銀狼。

例によって、金狼と銀狼が怒鳴り散らしながら言い争いをしていた。

「だから、ここはどこだって聞いてんだろうが！！」

「さっきから何度も言ってるだろ！　分からないって！！」

「何だよ。使えねぇ奴だな」

「……自分の頭で考えようとせず、人を殺す事しか能の無い君にだけは言われたくないね」

「んだとぉ！？　テメェ……殺る気かぁ！！」

「面白い……。白狼を殺り損なって丁度イライラしてたところなんだよ……憂さ晴らしに付き合ってあげるよ……」

「上等だぁ……」

二人が睨み合う中、先程まで黙っていた黒狼が怒声を上げる。

「貴様ら……いい加減にしろ！！！」

「「！！？」」

黒狼の怒声を聞いた二人は思わず言葉を失い、黒狼に視線をやる。

「な、何だよ……黒狼……？　そこまで怒鳴らなくてもいいじゃねぇか……」

「そ、そうだよ。だいたい、僕とコイツがいがみ合うのはいつもの事じゃないか……」

黒狼の豹変ぶりに二人はうろたえてしまう。

「もう一度だけ言うぞ……私は今すこぶる機嫌が悪い。死にたくなければ黙っていろ……」

「「……」」

二人はあまりの迫力に何も言えず、黒狼から距離を取り小声で話し合う。

「おい、金狼。お前、黒狼があそこまで怒った姿、見た事あるか……？」

「いや……僕は一度も……君は？」

「いや、オレも無い……」

二人はそう言いながら黒狼に視線を向ける。

「忌々しい……後少しで私の望みが成就していたかもしれないというのに……！！」

「何か喋ってるみたいだけど……ここからじゃよく聞こえないな……」

「おい、やめとこうぜ……これ以上近づいたらマジで殺されそうだぞ……」

「そうだね……」

「ふん！　まあいい……おそらく影狼もこちら側に来ているのだろう。まだ希望はある。こちらに来たついでに、奴にも挨拶をしておくか……この外史について聞きたい事もあるしな……」

黒狼が吐き捨てるようにそんな事を口にしてる中、何者かが声をかけてきた。

「あのぉ～、すみません」

「ん？」

黒狼達は声がした方を振り向く。その視線の先には三人の女性が立っていた。

「……」

「えーっと……その……」

黒狼の視線に気圧され、声の主と思われる栗色の頭髪の女性がどう話を切り出したものかと言葉に詰まってしまう。
黒狼は三人の女性を観察するように見つめ、心の中で呟く。

（コイツらは、関羽に張飛か……だが、中央に立ってるあの女は誰だ？　前の外史には、あんな奴は居なかったはずだが……。まあいい、とりあえず話をしてみるか）

黒狼は数歩前に進み出て、栗色の髪の女性に話しかける。

「何か用か？」

「あの……貴方達はもしかして、天の御遣い様ですか？」

「なに……？」

「はっ？」

「……なに言ってんだ？　この女」

意を決して口を開いた女性から思いもよらぬ言葉が出て来たので、三者三様の反応をする。

「……とりあえず、君達の名を聞かせてくれるか？　でないと何かと不便なのでな」

「あっ！　ごめんなさい。私の名は劉備。字は玄徳です」

「我が名は関羽。字は雲長」

「鈴々は張飛なのだ！」

三人の女性は黒狼にそれぞれ自己紹介をし、それを聞いた金狼は驚きの表情を浮かべるながら自分の世界の歴史の知識を口にする。

「劉備、関羽、張飛だって！？　まさか、あの女達が三国志の登場人物だっていうのか！？」

「何だよ？　三国志って？」

「三国志も知らないの？　これだから無教養の人間は……」

「んだとぉ！？」

金狼がバカにしたような視線を銀狼に向けるので、それに銀狼が反応し、再び両者が睨み合いを始める。

「貴様ら……黙ってろ。話が先に進まん」

「あのぉ～……」

劉備と名乗った女性がおずおずと黒狼に声をかける。

「ん？　ああ、すまなかった。名乗り遅れたな。私は黒狼。後ろに居るあのバカどもは、金狼、銀狼だ……」

「けっ……！」

「黒狼。僕をコイツと同列視しないでよ……」

「それで、劉備よ。先程の話だが……」

「は、はい！！」

「ここでは落ち着いて話も出来んから、どこかに街があるのなら、そこで詳しい話をしたいのだが……」

「あっ、そうですね。じゃあ、私達について来てください」

「ちょっと、桃香様！」

関羽が小声で劉備に話しかける。

「どうしたの？　愛紗ちゃん」

「どうしたではありません！　桃香様、この男どうも危険な気がするのですが……」

「え～、そうかなぁ？」

「鈴々もそう思うのだ。特にあの銀狼って奴はいかにも悪そうな奴に見えるのだ」

「もう。ダメだよ二人とも。人を見かけだけで判断するのはよくないよ。黒狼さん達はいい人だよ！　絶対！！」

「は、はあ……」

「どうかしたか？」

「いえ、何でもないですよ。街まで行くんでしたよね？　なら、私達について来てください！」

そう言いながら劉備達は街に向かって歩き出す。

「フッ……。貴様ら、行くぞ……」

「へいへい……」

「……」

黒狼達は劉備達の後を追うように歩き出し、黒狼は氷のような冷たい笑みを浮かべながら一人ブツブツと意味深な事を口にする。

「劉備か……まあいい。今しばらくだけ……この外史の茶番劇に付き合ってやるとしよう。それにしても……私が天の御遣いとはな…影狼達もおそらくどこかでそのように呼ばれて。クックック……御遣い同士の殺し合い、それもまた一興か……」

狼達の戦いは、まだ始まったばかりである……

第5話　覇王の元に集う4人の狼、そして…（後書き）

作者「どうも。風邪で調子が悪いのでサクサク進めたいと思います」

零治「どうぞ……」

作者「え～……この話を読んで気付いた方も居ると思います。前回の話が珍しく短かった理由なんですが……」

零治「おう」

作者「当初の予定では今回の話も4話にまとめて投稿するつもりだったんだけど……その……」

瑠利亜「それだと字数がとんでもない事になるから、急きょ2つに分ける事にしたんでしょう？」

作者「まあ……そういう事……」

零治「まっ、あまり気にするなよ。そういう事はよくある話だ」

瑠利亜「そうそう」

作者「うん……オレ、頑張るよ……」

零治「何でオレ達がコイツを慰めなきゃなんねぇんだよ……」

瑠利亜「まあまあ。これも、このダメ作者のためを思って」

零治「……」

瑠利亜「ん？　何です？」

零治「お前……何気に酷い事言ってないか？」

瑠利亜「気のせいでしょ？」

臥々瑠「ｚｚｚｚｚｚ……」

奈々瑠「……また出番なし？」

第6話　勉強会（前書き）

拠点パートを書いたつもりだったのに……
どうしていつも長くなるんだ……
これがオレのスタイルなのか……？

第6話　勉強会

零治達が華琳に拾われ、翌日の昼下がり。ここは華琳から零治達に用意された部屋一つ。現在、零治達四人は零治が使用してる部屋に集まり、何やら話し合いをしている様子である。

「字の読み書きを覚える必要があります」

「……唐突だな」

「何を呑気な事を言ってるんですか！？　これは重大な問題なんですよ！！」

瑠利亜は机を叩き怒鳴るように零治にそう言うが、零治は今一つ事の重大さが理解できてないようだ。

「おい、机をそんな風に叩くなよ。お茶がこぼれるだろうが」

「はぁ……。貴方って人は……零治、試にこれを読んでみてください」

そう言いながら瑠利亜は零治に竹簡を手渡す。

「こいつは……竹簡か？　こんな物博物館でしか見た事ないぜ」

「この世界では紙は高級品ですから、基本的に字は竹簡に書くんですよ。そんな事より、その竹簡に書かれてる文字を読んでみてください」

「はいはい……」

零治はメンドくさそうに返事をして竹簡に眼を通し、竹簡に書かれてる字を読み始めるが……

「……」

「……」

零治は黙って竹簡に眼を通し眉をひそませ、瑠利亜はその姿を黙って見守るが、あまりにも時間がかかり過ぎてると感じ取った奈々瑠が怪訝な表情で零治に声をかける。

「……兄さん？」

その問いに応じるように短く一言。

「……読めん」

「理解できましたか？　事の重大さが」
「ああ。確かにこれは大問題だな」
零治は瑠利亜の問いに軽く頷いて答え、持ってる竹簡をポイッと机の上に放り投げる。
「ええ。華琳の元に身を置く事で、お金の問題は解決しましたが……」
「字の読み書きが出来ないとなると仕事どころの話ではないな。それどころか、私生活にも影響をきたす」
「そういう事です。華琳には事情は話してあるので、今日は仕事を回される心配はありませんよ」
「その華琳はなんて言ってたんだ？」
「今日中に字の読み書きを習得しろ……だそうです」
「「今日中に！？」」
瑠利亜の発言を聞いた奈々瑠と臥々瑠は驚愕の表情を浮かべ声を上げるが、零治は余裕の表情で答える。
「まあ、何とかなるだろ。資料と道具はちゃんと用意してるんだろ

？」

「ええ。道具はここに……で、資料はこれを使います」

瑠利亜はそう言いながら、懐から携帯端末を取り出す。

「私のこの端末には、三国志の歴史、当時使われてた言語、地名、その他諸々をデータ化して保存してあります。で、言語のデータを引っ張り出して資料として使います」

「あいよ。ところで……一つ気になってたんだが……」

「ん？　なんです？」

「その大量の竹簡はどこから用意したんだ？」

零治は瑠利亜の居る場所の脇に積み上げられてる竹簡を指差しながら聞く。

「ああ、これですか？　まあ、ちょっと物質変換魔法を使って」

「材料はどうした？　まさか、城の物を勝手に使ったんじゃないだろうな……？」

「そんな事する訳ないでしょう。外に出て、適当に集めた木の枝とかを使ったんですよ」

「なるほど。しかし、それだけの量を用意したって事は、変換に使った木の枝もかなりの量になったんじゃないのか？」

「ええ……。部屋に戻る際、周りから奇怪なものを見るような眼で見られましたよ……」

「フッ。そりゃ、お気の毒様」

「さあ、無駄話はこれくらいにして、さっさと始めますよ」

「ああ。そう言う訳だから、お前達も気合を入れろよ」

それまで無言だった奈々瑠と臥々瑠に零治が声をかける。

「……善処します」

「……」

「何だ、臥々瑠？　不満そうだな」

「だって……メンドくさいもん……」

反抗的な態度の臥々瑠。しかし、そう来ることを零治は予想していたようで、説得という名の『脅し』にかかる。

「臥々瑠……今日中に読み書きを身に付けられなかったら、二度と飯を作ってやらないぞ……」

「全力で頑張りますっ！！」

臥々瑠はそう返事をしながら、姿勢を正し、ビシッと敬礼をする。その姿を見て、姉の奈々瑠は頭を抱えながら呆れたように溜め息を吐く。

「はぁ……現金な子……」

「まあ……理由は何にせよ、やる気を出してくれたのですから良しとしましょう……」

こうして零治達の、この世界の字の読み書きを習得するための勉強会が始まった。

……

……

…

どれ程の時間が経過しただろうか。一同はひたすら黙々と竹簡に字を書き続ける。

「……筆で字を書くのって結構難しいな」

「まあ、一応ボールペンとかシャーペンもありますけど、それだと紙にしか字が書けませんし、何より、報告書を書くたんびに物質変換魔法で紙を用意するのが面倒ですし……」

「違いない。何気に物質変換魔法は魔力を消費するからな。加えて言うと、オレとお前は神器（ディバイン・アームズ）の使用にも大量の魔力が必要だからな」

「そういう事です。まっ、これも一つの経験と言う事で」

「古代の中国にタイムスリップなんて経験は普通しねぇだろ。……はい、終了」

「「早っ！！」」

奈々瑠と臥々瑠は作業の手を止め、驚いた表情で零治の方に視線をやる。

「確かに随分早く終わりましたね。ホントにちゃんと覚えたんですか？」

「何でそんなに疑うんだよ……何なら、適当に何か文章を書いてやろうか？」

「まあ、それは華琳に頼めば済む話ですし、別にいいですよ。……はい、私も終わりです」

「「嘘っ！？」」

「お前も人の事言えねぇだろ……」

「まあまあ。そうむくれないで」

零治達があまりにも早く終わったため、奈々瑠達は頭を抱えながら机に突っ伏して唸る。

「う～……。私達、まだ半分も済んでないのに……」

「兄さん達……ずるいよ……」

「ずるいって……なに人聞きの悪い事言ってんだよ……」

「まあ、分からない所が有ったらちゃんと教えてあげますから、焦らず自分のペースで進めてくださいね」

「はい……」

「は～い……」

そう返事をした二人は再び手を動かし作業を再開する。その時、部屋の扉がノックされる。

「ん？　誰だ？　開いてるぞ」

部屋の扉が開けられる。やって来たのは、華琳、春蘭、秋蘭の三人だった。

「失礼するわよ。どう？　勉強は進んでるかしら？」

「ああ、華琳か。オレと瑠利亜はもう済んでる。後は、コイツら二人だけだ」

「貴方達二人はもう済んだの？　まあいいわ。後で確認させてもらうわよ」

「勝手にしろよ……」

零治はそう言いながら窓辺に移動し、タバコを手に取り火を点け、煙を吹かし始める。

「フーー……」

「零治……タバコを吸うんなら外に出てくれませんか……？」

「何だよ？　窓は開けてるだろうが……」

「それでも煙は多少部屋に入ってくるんですよ。受動喫煙って言葉は貴方も知ってるでしょう？」

「はいはい、分かりましたよ。外に行けばいいんだろ？」

零治はそう言い窓から外に出て、すぐ横の壁に背を預けながらタバコを吸う。

「瑠利亜。初めて会った時も気になってたんだけど、あのたばこと言う物は一体何なの？」

「それは説明したじゃないですか。ただ、火を点けて煙を吸う……それだけの物ですよ」

「煙なんか吸って何かいい事とかあるのか？」

瑠利亜の説明を聞き、更なる疑問を投げかける春蘭。

「まあ、気分が落ち着くぐらいですかね……」

瑠利亜はそう答えるが……

（正確にはニコチンのせいで脳がそういう風に錯覚してるだけなんですがね……）

と、補足を加えるが、ニコチンの事まで説明しだすときりがないの

で決して口には出さなかった。

「気分を落ち着けるために煙を吸うとは……天の国の人間は随分と変わってるんだな」

怪訝な表情でそう言うのは秋蘭。

「まあ、この世界にタバコは存在しませんから、そう思われても仕方ないですね」

「それじゃあ、さっき言ってた『じゅどうきつえん』って言葉は何なの？」

「ああ、それはですね……では、少し話が変わりますが、さっき見てたから気付いてると思いますが、零治のタバコの火が点いてた部分から煙が立ち昇ってたのは見えましたよね？」

「ええ」

「アレは副流煙と言いまして、副流煙、もしくは零治が吐き出した煙を非喫煙者、つまりタバコを吸ってない人間がその煙を吸うとタバコを吸ってるのと同じ事になる。それが受動喫煙ですよ」

「なるほどね」

「しかし、それなら別に音無を部屋から出す必要は無かったんじゃないのか？　その煙を吸うと気分が落ち着くんだろ？」

今の説明だけなら春蘭がそう思うのも仕方のない事。
だが、瑠利亜は春蘭の言葉に首を左右に振り、それを否定し、タバコの煙の一番の問題点を華琳達に教える。

「いえ……タバコの煙は基本的に体に毒なんですが……」

「なにっ！？　そうなのか……？」

「ええ……」

驚いた表情で問いかける春蘭に、瑠利亜は短く答える。

「つまり……貴方達二人は、その体に悪い煙を自分から進んで吸ってると……そう言う事？」

「そうなりますね……」

「……」

「むう……」

「う～む……」

華琳達三人が瑠利亜に呆れた視線を向ける。

（いや～……ある程度予想はしてましたが、こうも呆れた視線を向けられると、ちょっと居心地が悪くなりますねぇ……）

「う～む……なぜ貴様らは体に悪いのに、そのたばこと言う物を吸ってるのだ？」

「そこにタバコがあるからに決まってるだろ」

「どわぁっ！？」

さっきまで居なかった零治にいきなり声をかけられたので、春蘭が驚いて大声を張り上げる。

「何をそんなに驚いてるんだよ？」

「居ないはずの人間に、いきなり声をかけられたら誰だって驚くだろっ！！」

「そりゃ悪かったな」

「はぁ……。呆れた……」

「ん？　何がだ？」

「貴方のさっきの台詞よ。そこにたばこがあるから吸うなんて……呆れて物も言えないわ」

「そうかぁ？」

「いや、零治……流石にさっきの台詞は同じ喫煙者の私も呆れますよ。そこにタバコがあるから吸うって……どこの登山家ですか貴方は……？」

「タバコを吸うのにいちいち理由なんか必要ないだろ」

「まあ、そうですけど……」

「はぁ……。そのたばこと言う物の良さが私には理解できないわ……」

「タバコの良さはタバコを吸ってる人間にしか解らんよ」

「あっそ……」

零治に対して華琳は投げやりな返事をする。

「に、兄さん……お、終わりました……」

そうこうしてる間に奈々瑠は課題を終えたようで、疲労困憊の様子で机に突っ伏して零治にその事を知らせる。

「おう。お疲れさん」

「ふふ。相当疲れたみたいね。奈々瑠、ちょっとその竹簡を見せてもらってもいいかしら？」

「はい……。ど、どうぞ……」

奈々瑠は机に突っ伏したまま手だけ動かし、華琳に竹簡を手渡す。

「へえ～、なかなか綺麗な字じゃないの。頑張ったようね。偉いわ」

「あ、ありがとう……ございます……」

華琳は奈々瑠に労いの言葉をかけながら奈々瑠の頭を優しく撫で回す。

零治は華琳のその姿を監視するように険しい表情で見つめる。

「……」

「ふふ。そんな眼で睨まなくても大丈夫よ。手は出さないから」

「当たり前だ……」

「う～……」

「ん？　どうした臥々瑠？　手が止まってるぞ」

奈々瑠同様に机に突っ伏してる臥々瑠だが、まだ課題を終えてないようである。

「どうしました？　あと少しで終わりですよ。どこか分からない字でもあるんですか？」

「ち、違うの……」

「じゃあ、どうしたんだよ？」

「お腹が空いて……手が……動かない……の……」

「ああ……そういう事か……」

「お願い兄さん！　何か食べさせて！！　ご飯食べたらちゃんと最後までやるから～！！」

臥々瑠は今にも泣きそうな顔で零治にすがり付く。

「はぁ……分かったよ。華琳……」

「なに？」

「悪いが厨房を借りても構わないか？」

「別に構わないけど……貴方、料理なんか出来るの？」

「まあ、人並みには……」

「いやいや、零治。私から言わせれば貴方の料理の腕は人並み以上ですよ」

「へえ～……なら、お手並みを拝見させてもらおうかしら？」

華琳が零治に意味深な視線を向けながらそう言う。その視線が何を語ってるのかすぐさま零治は悟り、溜め息を一つ吐き答える。

「はぁ……。まあ、ここに居る人数分は作るつもりだが、あまり過剰な期待はするなよ。じゃあ、厨房にある食材は勝手に使わせてもらうぞ？」

「ええ。そのかわり、何をどれだけ使ったのか、後でちゃんと報告しなさいよ」

「ああ、それは分かってるんだが……実は一つ問題があってな……」

「問題？」

「ああ……。実は臥々瑠の奴は超が付くほどの大飯食らいでな……」

「え……？」

華琳はポカンとした表情で間の抜けた声を出してしまう。

「……アイツが食う分は大量に用意する必要があるんだ」

「……最低でもどれぐらい必要なの？」

「最低でも……五人前は……」

「……今回だけよ。次からは自分で何とかしなさい……」

「すまん……じゃあ、オレは厨房に行ってくる」

零治はそう言いながら、そそくさと部屋を後にする。

「はぁ……」

華琳は大きなため息を漏らす。

「すみませね、華琳……」

「まあいいわ。その分を今後貴方達にしっかりと働いてもらって返してもらうから」

「ハハハハハ……お、お手柔らかにお願いしますね……」

瑠利亜は引きつった笑顔を浮かべながらそう言う。
何しろ目の前に居る少女はあの曹孟徳なのだ。どんな激務に課せられるか想像しただけでも冷や汗が出るというもの。

「そういえば、瑠利亜。一つ気になってたのだが……」

「何がです？」

「その大量の竹簡はどこから用意したのだ？」

秋蘭が積み上げられてる竹簡を見ながら瑠利亜に聞く。

「ああ、それは私も気になってたのよ。一体どこから用意したの？」

「自分で創ったんですよ」

「えっ？　まさか……これ全部……！？」

「ええ」

「お前……そんなに手先が器用だったのか……？」

「いや、創ったと言っても、竹を用意して一から創った訳じゃありませんよ」

「ん？　どういう事だ？」

瑠利亜の返答に春蘭は首を傾げながら聞く。

「そういえば城の者達が、お前が大量の木の枝を抱えて部屋に入っていく姿を見たと話をしていたが……それと関係があるのか？」

秋蘭の問いに瑠利亜は軽く頷いて答える。

「ええ。その枝を使って創った……いえ、正確には創り変えたと言うべきですね」

「創り変えたって……どういう事？」

華琳は怪訝な表情で瑠利亜に疑問を投げかける。

「私達は魔法……妖術や仙術に似た術が使えることは以前話しましたよね？」

「ええ」

「私と零治は物質変換魔法……つまり、ある物をまったく別の物に創り変える術が使えるんですよ。それを使って用意したんです」

「物を別の物に創り変える術なんて……そんな事が本当に可能なの？」

話の内容が内容なだけに、三人とも信じられないという表情で瑠利亜と部屋に積み上げられてる竹簡を交互に見る。

「まっ、口で説明するより、実際に見た方が早いですね。……奈々瑠」

「何ですか？」

「悪いんですけど、ちょっと外から適当に木の枝を何本か取って来てもらえますか？」

「分かりました」

そう返事をした奈々瑠は部屋の窓から外に出ていく。それから少しして……

「姉さん。これぐらい有ればいいですか？」

木の枝を数本持って奈々瑠が戻ってくる。

「ええ。それだけ有れば十分です。では、それをここに置いてくれますか？」

瑠利亜はそう言いながら自分の足元を指差す。奈々瑠はそれに従い、木の枝を瑠利亜の足元に置く。

「では、三人とも……この枝をよ～く見ててくださいね」

瑠利亜の言葉に華琳達三人は黙ってうなずき、瑠利亜は床に座り込み木の枝に両手をかざし集中する。

「……」

それからすぐに、瑠利亜の手が青白く発光し、枝が宙を浮きながら周りに奇妙な形の文字が幾つにも連なりながら浮かび上がり、二重、三重と円を描きながらクルクルと枝の周りを回転する。

「こ、これはっ！？」

「なんと……面妖な……！」

「っ！？　華琳様！　見てください！！　木の枝が……！！」

春蘭が驚きの声を上げ、宙に浮いてる木の枝を指差す。

「えっ！？　なに……これ……？　木の枝が……崩れていく！？」

宙を浮いてる木の枝は、まるで手からこぼれ落ちる砂のようにサラサラと崩れていく。それから次第に別の物体へと形を変え始め、そして……

「はい。完成です」

先程まで木の枝が有った場所には、何の変哲もない竹簡が出来上がっていた。

「な、なんと……！」

「し、信じられん……本当に竹簡に変わるとは……」

「る、瑠利亜。これは……触っても……大丈夫なの……？」

「何を言ってるんですか？　さっき奈々瑠の竹簡を手に取ったじゃないですか。アレも私が創った物ですから、大丈夫ですよ」

「そ、そう……じゃあ、ちょっと見させてもらうわね……」

華琳は恐る恐る床に有る竹簡を拾い上げ、手に取り調べ始める。

「……」

「華琳様。いかがですか？」

「信じられないわ。手触り、重さ、間違いなく本物の竹簡だわ……」

「華琳様。私も拝見してよろしいですか？」

「ええ」

華琳は竹簡を秋蘭に手渡す。

「おい、秋蘭。私にも見せてくれ」

「ああ」

二人は興味深げに瑠利亜が創った竹簡を調べ始める。

「どうです？　これで信じる気になりましたか？」

「ええ。あんなものを見せられたら、信じない訳にはいかないでしょう？」

「フッ。でしょうね」

「瑠利亜。さっきの術には何か制限とかはあったりするのかしら？」

「そうですねぇ……私の場合は、変換に使う材料の物質が、変換後に出来上がる物質と同じじゃないといけない……ですかね」

「どういう事？」

「つまり、その竹簡で言うと、竹簡の原料は竹、竹は植物、そして、さっき変換に使った木の枝も植物。要するに、植物に関連するものを創る場合は同じ植物を使わないといけない、と言う事ですよ」

「なるほどね。それじゃあ、零治の術にもその制限が？」

「いえ。彼の場合は、この法則を多少なら無視する事が出来ますよ」

「多少？　完全には無理なの？」

「ええ。創る物によっては、流石の彼もこの法則は無視出来ませんから。まあ、気になるんなら、本人に頼んでいろいろ創らせてみたらどうです？」

「そうね。時間が有るときにでも確かめてみようかしら？」

二人がそんなやり取りをしてる最中……

「おい。誰か部屋の戸を開けてくれ。両手が塞がってんだ」

料理を終えた零治が戻ってくる。

「はいはい。今開けます」

瑠利亜が部屋の戸を開けると、そこには大皿に山のように盛り付けられた炒飯と取り皿とレンゲを器用に持つ零治の姿があった。

「これはまた、随分な量ですね……」

「んな事より、この取り皿とレンゲを持ってくれよ。片手でこの山盛り炒飯を持つのは辛いんでね……」

「はいはい」

そう言いながら、瑠利亜は零治から取り皿とレンゲを受け取る。

「奈々瑠。机の上を片付けろ」

「はい」

奈々瑠が手早く机の上にある物手際よくを片付ける。

「よっ……と……」

机の上に山盛り炒飯がドンっと置かれる。

「じゅるっ……。美味しそう……」

「まだ食うんじゃねぇぞ、臥々瑠。華琳達が自分の分を取ってからな。後、よだれを垂らすな……」

華琳達三人は目の前にある山盛り炒飯を見て絶句していた。

「どうしたんだ、三人とも？　早く自分の分を取らないと臥々瑠が全部食っちまうぞ」

「零治……貴方、一体どれだけの食材を使ったの……？」

「ん？　一応この竹簡に書いといたが……」

「見せなさい……」

「ああ」

華琳は零治から竹簡をひったくるように受け取り、眼を通す。

「……ちょっと!?　貴方こんなに使ったの!?」

「いや……これでも少ない方だぞ……」

「これで少ないって……まあいいわ。この分は、働いてしっかり返してもらいますからね」

「分かってる。それより早く自分が食う分を取ってくれないか？　臥々瑠が今にも炒飯に飛び付きそうなんでね」

「ええ」

各々が取り皿に自分の分の炒飯を盛り付ける。ちなみに臥々瑠は大皿に残ったものをそのまま食べるので取り皿は無い。

「全員ちゃんと自分の分は取ったか？　大丈夫だな。では……」

「「「「「「「いただきます」」」」」」」

「はぐはぐ！！　がつがつ！！　もぐもぐ！！」

臥々瑠が凄まじい勢いで山盛り炒飯を掻き込むように食べる。そんな臥々瑠の姿を華琳達三人は呆然と見つめる。

「……」

「……凄まじい食欲だな」

「ええ……。この小さな体のどこに、これだけの炒飯が収まるのかしら……？」

「それは気にしない事だな。それより早く食えよ。冷めるぞ？」

「ええ、そうね。それじゃあ……」

華琳達も零治の作った炒飯を口に運ぶ。

「あむ……。おお！　これはっ！？」

「むっ……旨いな……」

「零治……」

「ん？　なんだ？」

「見事な炒飯ね。正直これほどの腕前とは思わなかったわ」

「そりゃどうも」

華琳は感心したように零治を見て褒めるが、零治は素っ気なく答える。

「相変わらず貴方には恐れ入りますよ」

「私もこれぐらい料理が上手ならなぁ……」

瑠利亜も感心したように言い、奈々瑠は零治の料理の腕前に圧倒され自嘲するように呟く。

「音無。これだけの腕なら店を持つ事も出来るんじゃないか？」

秋蘭がそう言うが、零治は首を左右に振ってそれを否定する。

「いや、それは無理だな……」

「あら、どうしてそう言い切れるの？」

「オレはタバコを吸ってるからな。料理人には向いてないんだよ……」

「ん？　それはどういう事だ？」

春蘭の疑問に零治は淡々と答える。

「タバコを吸ってる人間はな、舌と鼻の粘膜の細胞が丸みを失い平べったくなってるのさ。つまり、味覚と嗅覚が鈍くなってるから微妙な味の変化に気付けないんだ」

「……そうなのか？」

怪訝そうな表情で聞いてくる秋蘭に、零治は短く答える。

「ああ」

「それにしては、この炒飯は味付けも調理法も完璧だと、私は思うんだけど？」

「それは作り慣れてるからにすぎんよ。後は、長い間培ってきた経験と勘だな……」

「例えそうだとしても、貴方には、貴方なりの料理人としての素質が有るのよ……少なくとも私はそう思うわ」

「フッ……そうか……」

零治は華琳に素っ気ない返事をするが、その表情はどことなく嬉しそうだった。

第6話　勉強会（後書き）

作者「やあ皆さん。本日はいかがお過ごしですか？」

零治「いきなり何言ってんだ？」

作者「いや、なんとなく……」

零治「意味分からん……」

瑠利亜「そう言えば、昨日はバレンタインでしたが、貴方チョコは貰えたんですか？」

作者「まあ、職場の女性陣から貰ったけど」

零治「へえ。お前みたいな奴でもチョコが貰えるんだな」

作者「なんか引っかかる言い方だな、それ……」

奈々瑠「あっ！　それで思い出しました。兄さん……」

零治「ん？」

奈々瑠「1日遅れですが、どうぞ。バレンタインのチョコです」

臥々瑠「アタシからも。どうぞ～♪」

零治「おっ、悪いな……って、臥々瑠」

臥々瑠「なっ、なに……？」

零治「このチョコ……齧った跡が有るんだが……食いかけのチョコをプレゼントとは、どういう嫌がらせだ……？」

臥々瑠「ち、違うよ！　それは、最初からそういうチョコだったの！！」

零治「どんなチョコだよ……？　それ……」

作者「……」

瑠利亜「羨ましいんですか？」

作者「……全然」

瑠利亜「無理しちゃって」

作者「うるせぇ……」

第7話　盗賊団討伐作戦　前編（前書き）

え～、前回と同じ轍を踏まないように、今書いてる話は三分割して投稿する予定です。

ちなみに、中編と後編は両方仕上げてから投稿するつもりです。

この作品を読んでくださってる読者の皆様、すみませんが今しばらくお待ちください。

第7話　盗賊団討伐作戦　前編

「……」

「久しぶりですね。こういう光景を見るのは……」

零治達の視線の先にあるもの、それは城壁の下を慌ただしく動き回り、各装備品の数の点検などをしてる完全武装の兵士達。

「久しぶりかもしれんが、あっちの世界とは違う点が多すぎるだろ。主に装備品とか……」

「それは言わないお約束でしょう……」

「あんな鎧を着て走り回るのは大変でしょうね……」

「うん。絶対重いよね、アレ……」

奈々瑠と臥々瑠も城壁から身を乗り出して、下で慌ただしく動き回る兵士達を見ながら言う。

「そう言えば……零治、アノ計画書の話は憶えてますか？」

「ああ？　確か、『城の治安維持向上草案』……だったか？　あれがどうかしたのか？」

「この前、アレを二人で本案に仕上げましたよね？　あの後すぐ華琳に計画書を渡してきたんですがね……」

「ああ」

「そのおかげで、私と貴方は街の警備隊に配属される事になりました。よかったですね～。役職が決まって」

「オレとお前が警備隊ねぇ……」

警備隊に配属という事は街の治安維持が主な仕事となるが、正直ガラじゃないと言いたげな零治。
元居た世界で彼は真逆の事をしていたのだからそう思うのも無理はないだろうが、自身の置かれてる状況を考えれば贅沢は言ってられない。

「ちなみに私は副隊長、貴方が隊長ですよ。頑張ってくださいね、隊長殿」

「はいはい……。ところで、オレとお前が警備隊に配属として、コイツらはどうするんだ？」

零治が奈々瑠達に視線を向けながら瑠利亜に聞く。

「彼女達には、華琳の親衛隊を務めてもらうそうですよ」

「マジかよ……？　……二人とも聞いてたか？」

「はい……正直不安です……別の意味で……」

「ん～？　何が不安なの～？」

奈々瑠は華琳が同性愛者だという事は以前理解しているので表情に不安の影が差すが、精神年齢が幼い臥々瑠はまったく理解出来ていないので首を傾げる。説明してみてもいいのだが、面倒だと判断した零治は適当にあしらっておく事にした。

「お前は気にしなくていい」

「ほえ？」

「まあ、流石の華琳も仕事中にそんな事はしないと思うが……二人とも、身の危険を感じたら全力で逃げるんだぞ」

「はい……」

「ほえ？　よく分かんないけど、は～い♪」

「はぁ……頭痛がしてきたぜ……」

零治はそう言いながら頭を抱え、懐からタバコを取り出し火を点ける。

「また貴方は、そうやってすぐタバコに走る。まあ、気持ちは分かりますがね……では、私も……」

瑠利亜もそう言いながら懐からタバコを取り出し火を点け、二人揃って煙を燻(くゆ)らせる。

「「フーー……」」

「……二人して何をしてるの？」

そこへ春蘭、秋蘭を伴った華琳が零治達に話しかける。

「ん？　ああ、華琳か。何って、なぁ……」

「ええ。見ての通りタバコを吸ってるんですが？」

「貴方達……これから何をしに行くか分かってるんでしょうねぇ……？」

「分かってるさ。盗賊団の討伐だろ？」

「そうよ。なら零治、糧食の最終点検の帳簿は、ちゃんと受け取って来てるんでしょうね？」

「ああ、それならここに……ほら」

零治はそう言いながら、華琳に草色の表紙が当てられた紙束を手渡し、華琳はすぐにそれをペラペラとめくって確認し始める。

「フーー……」

「……」

瑠利亜は華琳がタバコの臭いを気にすると思い、携帯灰皿にタバコを捨てたが、零治は相変わらず煙を吹かしてる。

「零治……」

「なんだ？」

「その甘ったるい匂いはどうにかならないの……？」

「無理だな。このタバコはそういう匂いがする物だからな」

「なら、今すぐ火を消しなさい。気になって集中できないわ」

「はいはい……」

零治はしぶしぶタバコを携帯灰皿に捨てる。それを確認した華琳は

再び作業に戻る。

「……」

（まるで、テストの採点をしてる教師みたいだな）

一通り確認を終えた華琳は秋蘭に声をかける。

「……秋蘭」

「はっ」

「この監督官というのは、一体何者なのかしら？」

「はい。先日、志願してきた新人です。仕事の手際が良かったので、今回の食糧調達を任せてみたのですが……何か問題でも？」

「ここに呼びなさい。大至急よ」

「はっ！」

華琳に命じられた秋蘭は監督官を呼びにダッと走り出した。

……

……

…

「……遅いわね」

「遅いですなぁ……」

「すぐ戻ってくるだろ」

まだそれ程時間は経っていないが、華琳は相当苛立ってる様子である。零治は華琳に聞かれないようにそっと距離を取り、小声で瑠利亜に話しかける。

「ありゃ相当キてるな……」

「ええ……。正直居心地が悪くて堪りませんよ……」

「そうですね……何事も無ければいいんですが……」

「なにが～？」

「はぁ……。アンタの性格が時々羨ましく思うわ……」

「ほえ？　何の事～？」

「何でも無い。お前は良い子だなって事さ」

「ん～？　よく分かんないけど、褒められてるの？」

「ああ」

「にへへ～♪」

臥々瑠は零治に褒められたと思い、嬉しそうに笑う。

「相変わらず扱いが上手いですね？」

「フッ……言ってろ」

「ところで零治……」

「なんだ？」

「貴方、その例の監督官には会ってるんですよね？」

「ああ。帳簿を受け取る時にな」

「どんな人でしたか？」

「……」

なぜか、そこで零治は瑠利亜の問いに答えずに黙り込んでしまう。

「零治？」

「一言で言えば……生意気なクソガキだ……」

零治は仏頂面をしてそう答える。

「はっ？」

瑠利亜は何を言ってるのかと思い、怪訝な顔になる。

「まっ、会って話してみれば分かるさ……」

「はあ……」

「華琳様。連れて参りました」

そこへ、監督官と思われる、茶髪の小柄の女の子を連れた秋蘭が戻って来た。

華琳は監督官に歩み寄り話を始める。

「お前が食料の調達を？」

「はい。必要十分な量は、用意したつもりですが……何か問題でもありましたでしょうか？」

「必要十分って……どういうつもりかしら？　指定した量の半分しか準備できてないじゃない！」

「なに……？　半分だと？」

「なるほど。そりゃ、華琳が苛立つのも当然ですね……」

「このまま出撃したら、糧食不足で行き倒れになる所だったわ。そうなったら、貴方はどう責任を取るつもりかしら？」

「いえ。そうはならないはずです」

「何？　……どういう事？」

「理由は三つあります。お聞きいただけますか？」

「……説明なさい。納得のいく理由なら、許してあげてもいいでしょう」

「兄さん。納得がいかなかったら、どうするんでしょうか？」

「ん？　そりゃお前……コレだろ？」

そう言いながら零治は首を斬るジェスチャーをしてみせる。

「……ご納得いただけなければ、それは私の不能のいたす所。この場で我が首、刎ねていただいても結構でございます」

「……二言は無いぞ？」

華琳は念を押すようにそう言い、監督官は無言で軽く頷き、説明を始める。

「はっ。では、説明させていただきますが……まず一つ目。曹操様は慎重なお方故、必ずご自分の目で糧食の最終確認をなさいます。そこで問題が有れば、こうして責任者を呼ぶはず。行き倒れにはなりません」

「ば……っ！　馬鹿にしてるの！？　春蘭！」

「はっ！」

華琳は怒りを露わにし春蘭に命じ、春蘭が剣の柄に手をかける。

「待て華琳。まだ二つ理由があるだろ。判断するのは、それを聞いてからでも遅くはないはずだ」

「音無の言う通りかと。それに華琳様、先程のお約束は……」

「……そうだったわね。で、次は何？」

「次に二つ目。糧食が少なければ身軽になり、輸送部隊の行軍速度も上がります。よって、討伐行全体にかかる時間は、大幅に短縮できるでしょう」

監督官のその説明を傍らで聞いていた春蘭はふと疑問に思う。

「ん……？　なあ、秋蘭」

「どうした姉者。そんな難しい顔をして」

「行軍速度が早くなっても、移動する時間が短くなるだけではないのか？　討伐にかかる時間までは半分にはならない……よな？」

「ならないぞ」

そう。確かに荷物が少なければ、当然その分移動速度は速くなる。だがそれは、あくまで移動にかかる時間が短くなるだけで討伐にかかる時間まで短くなったりはしない。
討伐に時間がかかれば、当然その分糧食も必要になってくるから、先程の説明だけでは糧食を半分の量に減らした理由の説明にはならないだろう。

「良かった。私の頭が悪くなったのかと思ったぞ」

「そうか。良かったな、姉者」

「うむ」

自身の考えが間違ってないと知り、春蘭は安堵の笑みを浮かべながら満足げに頷く。
それを傍らで見ていた零治は、春蘭に呆れた視線を向けながら瑠利亜に話しかける。

「……なんでアイツは、あんな単純な答えも自信を持って言えないんだ？」

「さあ？」

「ところで瑠利亜。お前、あのガキの考えが分かるか？」

「いえ。全く……」

二人はそう言いながら監督官に興味深げな視線を向ける。

「まあいいわ。最後の理由、言ってみなさい」

「はっ。三つ目ですが……私の提案する作戦を採れば戦闘時間はさらに短くなるでしょう。よって、この糧食の量で十分だと判断いたしました」

「提案する作戦……！？」

荀イクのその言葉を耳にした瑠利亜は思わず驚きの声を出す。

「曹操様！　どうかこの荀イクめを、曹操様を勝利に導く軍師として、麾下（きか）にお加えくださいませ！」

荀イクと名乗った少女は、その場で跪き頭を垂れ、華琳に申し出る。

「な……っ！？」

「何と……」

「このガキが……荀イクだと……？」

「……」

「どうか！　どうか！　曹操様！」

華琳は黙ったまま荀イクを見つめ、荀イクはなお力強く声を発しながら懇願を続ける。
やがて華琳は静かに荀イクに問いかける。

「……荀イク。貴方の真名は」

「桂花にございます」

「桂花。貴方……この曹操を試したわね？」

「はい」

「な……っ！　貴様、何をいけしゃあしゃあと……。華琳様！　このような無礼な輩、即刻首を刎ねてしまいましょう！」

「貴方は黙っていなさい！　私の運命を決めていいのは、曹操様だけよ！」

「ぐ……！　貴様ぁ……！」

荀イクの台詞に対し、春蘭は怒り愛刀を抜刀し、今にも斬りかかろうとする。

「やめろ春蘭。気持ちは分かるが、ここは我慢しろ」

「ぐぅぅ……」

すかさず零治がそれを止め、春蘭はすんでのところで踏み留まる。

「桂花。軍師としての経験は？」

「はっ。ここに来るまでは、南皮で軍師をしておりました」

「……そう」

南皮という地名を耳にした瑠利亜は何か思う所が有ったのか、秋蘭に聞く。

「ん？　秋蘭。南皮とは……」

「南皮は袁紹の本拠地だ。袁紹というのは、華琳様とは昔からの腐れ縁でな……」

「腐れ縁……？　瑠利亜。確か史実では学友関係だったよな？」

「ええ。ですが、学友と腐れ縁は意味が全く違いますから……あまり良い関係ではなさそうですね……」

「……だろうな」

零治はそう短く答え、宙を睨みながら考えてみる。何しろ相手は、あの華琳の腐れ縁なのだ。興味心が湧くのも当然かもしれないが、この世界の袁紹がどういった人物か零治は知らないので、すぐに考えるのをやめ、華琳の方に視線を戻し会話に耳を傾ける。

「どうせアレの事だから、軍師の言葉など聞きはしなかったのでしょう。それに嫌気がさして、この辺りまで流れてきたのかしら？」

「……まさか。聞かぬ相手に説く事は、軍師の腕の見せ所。まして仕える主が天を取る器であるならば、そのために己が力を振るう事、何を惜しみ、ためらいましょうや」

「……ならばその力、私のために振るう事は惜しまないと？」

「一目見た瞬間、私の全てを捧げるお方と確信いたしました。もしご不要とあらば、この荀イク、生きてこの場を去る気はありませぬ。遠慮なく、この場でお切り捨てくださいませ！」

「……」

「華琳様……」

「春蘭」

「はっ」

華琳は春蘭に声をかけ、愛用してる大鎌、『絶』を受け取り、荀イクの首筋に突きつける。

「華琳様……っ！」

「零治……これは止めた方がいいのでは……？」

「決定権は華琳に有る。オレ達が口をはさむ権利は無い……」

「桂花。私がこの世で尤も腹立たしく思う事。それは他人に試されるという事。……分かっているかしら？」

「はっ。そこをあえて試させていただきました」

「そう……。ならば、こうする事も貴方の手の平の上という事よね……」

そう言うなり、華琳は振り上げた鎌を荀イクに目掛けて一気に振り下ろした。

そして、その場に漂う沈黙。一同は息をのみ荀イクに視線をやるが、荀イクは無傷のままその場に立っており、血は一滴も飛び散ってはいなかった。

「……寸止めですか」

「チッ……！」

「ん？」

瑠利亜がチラッと零治の方に視線を向ける。

「……」

（気のせいでしょうか？　今、零治が舌打ちをしたような気が……）

「当然でしょう。……けれど桂花。もし私が本当に振り下ろしていたら、どうするつもりだった？」

「それが天命と、受け入れておりました。天を取る器に看取られるなら、それを誇りこそすれ、恨む事などございませぬ」

「……嘘は嫌いよ。本当の事を言いなさい」

「曹操様のご気性からして、試されれば、必ず試し返すに違いないと思いましたので。避ける気など毛頭ありませんでした。……それに私は軍師であって武官ではありませぬ。あの状態から曹操様の一撃を防ぐ術は、そもそもありませんでした」

「そう……」

小さく呟いた華琳は、荀イクに突き付けていた大鎌をゆっくりと下ろし、突如声高らかに大笑いする。
それを見て、春蘭は何事かと思い怪訝な表情で華琳に話しかける。

「……ふふっ。あはははははははっ！」

「か、華琳様……っ！」

「最高よ、桂花。私を二度も試す度胸とその智謀、気に入ったわ。貴方の才、私が天下を取るために存分に遣わせてもらう事にする。いいわね？」

「はっ！」

「ならまずは、この討伐行を成功させてみせなさい。糧食は半分で良いと言ったのだから……もし不足したならその失態、身をもって償った貰うわよ？」

「御意！」

「零治、貴方にも期待させてもらうわ。貴方の武がどれ程のものなのか、この眼で確かめさせてもらうわよ？」

「フッ……好きにしな……」

「なら、そろそろ出撃するわよ。ついて来なさい」

「ああ……」

零治達は先を進む華琳達の後を追うように歩き出す。

「いや～……一時はどうなるかと思いましたよ」

「……」

「どうしたんです、零治。さっきからずっと黙ったままですが？」

「いや……あのガキの首が刎ね飛ぶ所が見れなくて残念だ……っと思ってな」

「何サラリと物騒な事を言ってるんですか……。ああ……だからさっき舌打ちをしたんですか？」

「ああ……。あのガキは好きになれん。生意気でムカつく……」

「ひょっとして、帳簿を受け取りに行った時の事を言ってるんです

か？　一体何を言われたんですか？」

「口にしたくない。思い出すだけでも腹が立つからな……」

零治はそう言いながら、懐からタバコを取り出し火を点け、乱暴に煙を吹かす。

「フーー！……！」

（はぁ……。また、私の苦労が増えそうな気がする……）

瑠利亜は心の中でそう呟き、大きなため息を吐いた。

第7話　盗賊団討伐作戦　前編（後書き）

作者「さあ、今回も張り切っていきますか」

零治「へ～い……」

作者「何だよ？　テンション低いな」

零治「お前のバカに付き合うのに、いい加減ウンザリしてんだよ……」

瑠利亜「まあ、そう言わずに。では、次に進みましょうか」

奈々瑠「今回の話は珍しく短いですね？」

作者「前回と同じ轍は踏みたくないんでな。それに、今書いてる話は長くなるのが分かり切ってるし」

臥々瑠「ねえ、兄さん。この人ホントに、あのバカな作者なの？」

零治「さあ？　別人じゃねぇの？」

作者「同一人物だよ！　何だその言い草は！！」

零治「冗談だよ。それより、この続き、ちゃんと書けるのか？」

作者「どういう意味だ？」

瑠利亜「ああ、そう言えば、今週はキルゾーン3が発売するんでし

たよね？」

作者「その通り！　久々に最新作のＦＰＳで遊べるぜ！！　いや～、ＦＰＳで遊ぶのはＡＶＰ３以来だな～」

零治「そういう事を言ってんじゃねぇ！　オレはキルゾーン３に没頭して小説をほったらかしにするんじゃないかと言う事を心配してんだよ！！」

作者「大丈夫だって。ソロでストレス解消程度にプレイするんだから」

臥々瑠「ストレス解消？　どうやって発散するの？」

作者「いや、オレの職場って、客商売だからさ……」

臥々瑠「うん」

作者「店に頻繁に来るムカつく客を頭の中に思い浮かべながら、敵をハチの巣にしたり……」

奈々瑠「はいはい。危ない発言は控えてください。読者が離れますよ？」

瑠利亜「不安ですね。いろんな意味で……」

零治「ああ……」

第8話　盗賊団討伐作戦　中編（前書き）

え～、当初の予定では中編、後編と同時に投稿する予定でしたが、先に中編だけを投稿しました。
別に理由はありません。後編もほぼ出来上がってるので、今週中には投稿できると思います。
最後に……予定をコロコロ変えるいい加減な作者で、ホント、サーセン。

第8話　盗賊団討伐作戦　中編

零治達は現在、盗賊団討伐のため騎馬隊の軍勢とともに、果てしない荒野を移動している。

「思っていたより、速度はそこまで早くないんだな？」

「ええ。いつもの行軍より少し早いぐらいですかね？」

二人がそんな事を言ってる中、秋蘭が話しかけてくる。

「二人とも、だいぶ乗馬が様になってきたみたいだな」

「まだ、完全には慣れてないがな……」

「ええ。それに……あの二人の方が遥かに上手ですよ」

瑠利亜がそう言うと、三人はすぐ横に居る、奈々瑠と臥々瑠の方に視線を向ける。

「「ふ～ん♪　ふふ～ん♪」」

「二人揃って鼻歌なんか歌いやがって。余裕かましてくれるぜ……」

「仕方ありませんよ。あの二人に動物に関する事で敵う訳ありませんから」

「う～む……お前達二人もそうだが、なぜ奈々瑠達は、ああも短期間で馬を乗りこなせるようになったのだ？」

「ああ、彼女達は動物と意思疎通ができますから。そのおかげでしょう？」

「動物と意思疎通……？　あの二人はそんな事が出来るのか？」

「ああ。アイツらの体は、半分は獣だからな」

「獣……？」

秋蘭は怪訝な表情になり首を傾げる。まあ、今の説明では誰も理解する事はまず出来ないだろうから当然の反応といえるだろう。

「まあ、詳しい説明は今度時間が有る時にでもしてやるよ。それにしても……なんか凄い事になったな」

「うむ……」

「おや？　噂をすれば……来ましたよ、零治」

「……来たか、桂花」

「な……っ！　アンタ、何で……っ！」

「華琳から聞いてるだろ？　オレ達は、お前の事を真名で呼ぶと」

「聞いたけど覚える気にもならなかったわ！」

「……軍師の台詞とは思えんな」

「それに、古参の夏侯淵はともかくとして、何でアンタなんかに真名で呼ばれなきゃならないのよ！　私の大切な真名をアンタなんかに犯させてたまるもんですか！　訂正なさい！」

（こんのクソガキがぁ……！）

桂花の高飛車な態度に零治は苛立ちを露わにし、米神がピクピクと痙攣する。

（ああ、あれは相当キてますねぇ……。流石に放ってはおけませんか）

喧嘩になるとマズイと判断し、瑠利亜が話題を逸らしに入る。

「そんな事よりも桂花。あんな無茶を言って大丈夫なんですか？」

「そんな事じゃないわよ……」

「華琳様の命だ。諦めて受け入れるのだな」

桂花は不満を露わにするが、秋蘭にまでそう言われては、無理にでも納得するしかないだろう。
桂花はやむを得ず瑠利亜の持ちかけた話題に話を合わせる。

「っ……。で、何が無茶な事ですって？」

「フッ……諦めたか。……何って糧食を半分で済ます事さ」

「別に無茶でも何でもないわよ。今の曹操様の軍の実力なら、これくらい出来て当たり前なんだから」

「そうなんですか、秋蘭？」

「華琳様は知にも勇にも優れたお方だが、それを頼んで無茶な攻めを強いるお方ではないからな……。正直、こういう強行軍を実戦で試すのは初めてだ」

「ここしばらくの訓練や討伐の報告書、今回の兵数を把握した上での計算よ。これでも余裕を持たせてあるのだから、安心なさいな」

「まあ、その辺の手並みはおいおい見せてもらうとしよう。……しかしあのやり取りは肝が冷えたぞ」

「なぜあんな無茶なやり方をした？　能力に自信があるなら、軍師として志願すれば済む話だろ」

「ああ……それはだな」

「軍師として志願出来たなら、していたわよ」

「してなかったのかよ？」

「……ふん」

桂花は軽く鼻を鳴らし、秋蘭の方を見る。

「零治。軍師の募集はしていなかったんですよ」

「そうなのか？」

「って、何で試験管じゃない貴方が知ってるのよ！？」

「確かに私は試験管ではありませんでしたが、裏で秋蘭の補佐はしてましたので」

「ああ、そういやそんな事を言ってたな」

「うむ。あの時はおかげで随分と楽が出来た。感謝してるぞ、瑠利亜」

「いえいえ。あれぐらい、お安いご用ですよ」

（武官をやって文官をやって、おまけに新人の面接官まで……どんだけ多忙なんだよ秋蘭の奴）

零治はそう思うも、冷静に考えれば当然と言えるだろう。春蘭に事務的な仕事をこなせるわけがないのだから仕方ない面もあるとしか言いようがない。

「で？　何で軍師は募集してなかったんだ？」

「経歴を偽って申告する輩も多いのでな。個の武勇なら姉者あたりが揉んでやればだいたい分かるのだが……文官はよほど名の通った輩でない限り、使ってみないと判断がつかん」

「だから、一刻も早く曹操様の眼に留まる働きをして、召し上げていただこうと思ったのだけれど……その機が思ったより早く来て、良かったわ」

（だからって、あんな無茶をするのはどうかと思うが……）

「で、華琳様はどうだったのだ？」

「思った通り、素晴らしいお方だったわ……。あのお方こそ、私が命を懸けてお仕えするに相応しいお方だわ！」

「……えらく心酔してるな」

「……ふっ。アンタのような木偶の坊には分からないのでしょうね。可哀想に」

桂花は零治にバカにしたような視線を向けながら言う。その態度に

零治の怒りの沸点がふつふつと上昇し始めるが、なんとか自制心を働かせ我慢するが、内心では毒づいてしまう。
というか、そうでもしないと内に抱えてる怒りが爆発してしまいかねないと自覚してるのだから。

（ああ……今すぐこのガキをシバキあげてやりたい気分だ……）

「ちょっと、アンタ……」

それまで黙っていた奈々瑠が零治達の会話に割って入ってくる。

「な、何よ……？」

「さっきから黙って聞いてれば、兄さんに対して随分な口を利いてくれてるじゃないの。私達の兄さんをバカにするのも大概にしなさいよ……」

「……」

臥々瑠は何も言わないが、その眼つきは明らかに穏やかなものではなかった。
しかし、それに気圧される事無く桂花も負けじと言い返す。

「フンッ！　何よ、アンタ達コイツの妹なの？　こんな盆暗の妹だなんて、アンタ達二人も救われないわね」

「何ですってぇ!?　アンタぁ!!　二度とそんな口が利けないように、今すぐこの場でその喉笛を噛み千切ってやろうかぁ!!!」

「がるるるるる!!」

奈々瑠と臥々瑠は桂花の発言に対して、怒りを露わにし牙を?き出す。臥々瑠に至っては、野獣のような唸り声をあげる有様である。

「ひっ!?」

桂花は二人の凄まじい迫力に気圧され、思わず落馬しそうになる。見かねた秋蘭が仲裁に入るが二人はそれを全く聞き入れようとしない。

「お、おい!　二人ともよさないか!!　音無!　黙ってないでお前からも言ってやってくれっ!!」

「はぁ……。二人ともやめるんだ……」

「止めないでください、兄さん!!　この女、今すぐ八つ裂きにしてやります!!!」

「そうだよ!　あんな事を言われて黙ってなんかいられないよっ!!」

「奈々瑠、臥々瑠……オレの言う事が聞けないのか……？」

零治は二人に冷ややかな視線を向け、威圧するように言う。

「くっ……！　分かりました……」

「は～い……」

二人はしぶしぶ零治の言葉に従う。

「フ、フンッ！　二人して野蛮な奴ね！　これも野蛮な兄に育てられたせいかしら？」

「……桂花」

「何よ？　……っ！？」

零治に呼ばれ、桂花が視線を向けた先には、冷酷な視線を桂花に向ける零治の姿があった。

「桂花。お前がオレの事をどうこう言うのは別に構わんさ。ムカつくけどな。だがな……奈々瑠達に対する侮辱的な発言は控えてもらおうか……」

「……」

「今度コイツらの事を悪く言ってみろ。二度と朝日を拝めなくしてやるからな……」

零治の迫力に気圧され、その場に居る人間全員が口をはさむ事が出来なかった。

（うぅ……。私ホント、いつか胃に穴が開くかも……）

「……」

瑠利亜が苦悶の表情で胸を抑えながら心の中呟き、その表情を秋蘭は観察するようにジッと伺う。その時、春蘭がやって来る。

「おお、貴様ら、こんな所に居たのか……って、どうかしたのか？」

春蘭はその場に漂う異様な空気を感じ取り、怪訝な表情で周りに尋ねるが、誰も何も言おうとしないので秋蘭が誤魔化すように答える。

「いや、何でもない……。それより、どうした、姉者。急ぎか？」

「うむ。前方に何やら大人数の集団が居るらしい。華琳様がお呼びだ。すぐに来い」

「分かった。奈々瑠、臥々瑠、ついて来い」

「はい」

「は～い♪」

零治は奈々瑠達を連れ立って移動を始める。

「ん？　どうした、秋蘭。来ないのか？」

「ああ、私は瑠利亜と一緒に行くから、姉者は桂花と先に行っててくれ」

「そうか、遅れるなよ。……行くぞ、桂花」

「ええ」

春蘭は桂花とその場を後にし、秋蘭と瑠利亜がその場に残る。

「瑠利亜……」

「何ですか……？」

「お前も……随分と苦労してるのだな……」

「分かりますか……？」

「うむ。お前の先程の表情を見れば、だいたいの察しが付く……」

「ああ……そう言ってくれたのは、貴方が初めてですよ、秋蘭……。そう言う貴方も大変なんでしょう？」

「まあな……」

「お互い苦労が絶えませんねぇ……」

「そうだな……」

「……行きますか？」

「ああ」

二人は胸の内の苦労を簡単に明かし意気投合し、華琳達の所に移動を開始する。

……

……

…

「……遅くなりました」

「ちょうど偵察が帰って来た所よ。報告を」

華琳に報告を促され、偵察から戻って来た兵士の一人が姿勢を正し、報告する。

「はっ！　行軍中の前方集団は、数十人ほど。旗が無いため所属は不明ですが、格好がまちまちな所から、どこかの野盗か山賊だと思われます」

「……様子を見るべきかしら」

華琳は顎に手を当てながら考えるが、桂花が首を横に振りそれを否定。もう一度偵察するように提案をする。

「もう一度、偵察隊を出しましょう。夏侯惇、音無、貴方達が指揮を執って」

「おう」

「分かった」

「ついでに、夏侯惇の抑え役も頼むわね」

「……不本意だが引き受けよう」

「おい、それはどういう意味だ！？　それではまるで、私が敵と見ればすぐ突撃するようではないか！」

そう言われては流石の春蘭も我慢出来ないのか、声を荒げて反論するが……

「違うの？」

「違うのか？」

「違わないでしょう？」

「ううん、華琳様までぇ～……」

華琳にまでそう言われてしまい春蘭は涙目になる。おまけにこれが紛れもない事実なのだからフォローのしようも無いというものだ。

「では春蘭、零治。すぐに出撃なさい」

……

……

…

春蘭の隊をまるまる偵察部隊に割り振り、零治達は華琳の本隊から離れ、先行し移動を始めている。

「まったく。先行部隊の指揮など、私一人で十分だというのに……」

春蘭は馬上で一人ブツブツと文句をブータレている。

「偵察も兼ねてるんだ。通りすがりの傭兵隊とかだったら、突っ込むなよ？」

零治が釘を刺すように言うが、春蘭は不満を露わにして反論する。

「貴様なんぞに言われるまでもないわ。そこまで私も迂闊ではないぞ」

（その迂闊が大いにあり得るからオレが付けれたんだろうが……）

零治がそう思っていた時、目的地が見えたようで、兵士の一人が前方を指差しながら声を張り上げる。

「夏侯惇様！　見えました！」

「ご苦労！」

「あれか。しかし……見たところ行軍してる感じじゃないな……？」

「何かと戦ってるようだな」

その時、零治達が見てる集団の中からナニかが、上空に吹き飛ばされる。

「ん……？　おい……今、吹っ飛んだのって……人じゃないのか……！？」

「なんだ、あれは！」

「誰かが戦ってるようです！　その数……一人！　それも子供の様子！」

「なんだと！？」

その報告を聞くや否や、春蘭は馬に鞭を振り、一気に加速させる。

「って、おいっ！？　春蘭！！　ああ、クソッ！！」

零治も春蘭の後を追うために、馬を一気に加速させた。

……

……

…

「でえええええいっ！」

「ぐはぁっ！」

野盗の集団を相手に一人大立ち回りをしてる少女は、手に持ってるけん玉の先に付いてる巨大な鉄球を振り回し、野盗の一人を吹き飛ばした。

「まだまだぁっ！　でやあああああっ！」

「がは……っ！」

「ええい、テメェら、ガキ一人に何を手こずって！　数でいけ、数で！」

「「「おおぉぉ！」」」

リーダー格の男がそう指示し、野盗達は少女を取り囲みだす。

「はぁ……はぁ……はぁ……。もぅ、こんなに沢山……多すぎるよぅ……！」

「だらぁぁぁぁっ！」

「げふぅっ！」

そこへ駆けつけた春蘭が、すかさず野盗の一人を渾身の一太刀を浴びせ、野盗は苦悶の断末魔を上げながら地面に崩れ落ちる。

「……えっ？」

「大丈夫か！　勇敢な少女よ！」

「え……？　あ……はいっ！」

「な、何だっ！？　新手か！？」

「フッ……。後ろがガラ空きだぞ」

零治はそう言いながら、背後から野盗に叢雲を突き刺す。

「ぐがぁっ！？」

「貴様らぁっ！　子供一人によってたかって……卑怯と言うにも生温いわ！」

「ほお。珍しいな。お前と意見が合うとは」

「うわぁ……っ！　退却！　退却ーーーーっ！」

野盗達は自分達の不利を悟り、脱兎の如く逃げ出した。

「逃がすか！　全員、叩き斬ってくれるわ！」

「おい、春蘭。オレ達の仕事は偵察だぞ。その子を助けるために戦うのは良いとして、敵を全滅させてどうするんだ……」

「ふんっ。敵の戦力を削って何が悪い！」

「まあ、お前の言ってる事も理解できるが、それより残った敵を追跡して、本拠地の場所を掴んだ方が効率的だと思わないか？」

「……おお、それは良い考えだな。誰か、おおい、誰かおらんか！」

「……もう何人かに指示は出してる」

「むぅぅ、貴様にしてはなかなかやるな」

（はぁ……。考え無しにも程があるだろ……）

「あ、あの……」

そこへ、先程まで野盗達に一人で戦ってた少女が零治達におずおずと話しかけてくる。

「おお、怪我はないか？　少女よ」

「はいっ。ありがとうございます！　おかげで助かりました！」

「それは何よりだ。しかし、なぜこんな所で一人で戦っていたのだ？」

「はい、それは……」

少女がそんな話をしようとした時、そこへ華琳達の本隊が零治達の所にやって来る。

「来たか……」

華琳達本隊を目にした少女は先程までの大人しそうな雰囲気とは一変し、殺気を放ちながら険しい表情になる。

「……っ！」

（ん？　殺気だと……？）

零治はその殺気を感じ取り、疑問に思ったが、華琳が話しかけてきたので報告を始める。

「零治。謎の集団とやらはどうしたの？　戦闘があったという報告

は聞いたけれど……」

「連中はオレ達の勢いに負けて逃げたよ。何人かを尾行に付けてるから、本拠地が見つかるのも時間の問題だろ」

「ふふ。上出来ね」

「そりゃどうも」

「あ、あなた……！」

「ん？　この子は？」

「お兄さん、もしかして、国の軍隊……っ！？」

「ん？　一応、そうなるの……うおっ！？」

少女は零治の返答を聞く前に、零治に向かって持っている鉄球を振り下ろし、零治は素早くソレを避ける。

「……何の真似だ？」

「国の軍隊なんか信用できるもんか！　ボク達を守ってもくれないクセに税金ばっかり持っていって！」

「なるほど。一人で戦っていた理由はソレか……」

「そうだよ！　ボクが村で一番強いんだから、ボクがみんなを守ら

なきゃいけないんだっ！盗賊からも、お前達……役人からもっ！」

少女はそう言いながら、零治に更に攻撃を仕掛ける。

「くっ……！　その鉄球、マジで怖いんだが……！」

「桂花。これは一体どういう事なんですか？　華琳程の人物が、あの子が言ってるような悪政を働くとは思えないんですが……」

「この辺りの街は、曹操様の治める土地ではないのよ。だから盗賊追跡の名目で遠征して来てはいるけれど……その政策に、曹操様は口出しできないの」

「なるほど。そう言う訳ですか……」

事情を理解した瑠利亜は、ふと自分の居た世界とこの世界の情勢を照らし合わせ、吐き捨てるように心の内で呟く。

（やれやれ。いつの世、いつの時代も政治が腐敗してるのは変わらない訳ですか……）

「……」

華琳は悲壮感が漂う面持ちで、零治に挑む少女を見つめる。

「華琳様」

その心中を察するように秋蘭が華琳の名を呼ぶ。

「でえええええええいっ！」

少女は零治に向かって最大の一撃を放つ。

（くっ！　この子は悪政の被害者なんだ。叢雲を使う訳にはいかないか……ならばっ！！）

そう思いながら零治は、とんでもない行動に出る。

「うおおおおっ！！」

零治は裂帛の気合いとともに、左手を突き出し自信に向かってくる鉄球を受け止めた。

「なっ！？」

「えっ！？」

「くぅ……！　今のは……結構痛かったぞ……！」

少女の放った一撃の衝撃が零治の左手から腕全体に走り、零治は苦悶の声を出す。

「「兄さんっ！！」」

「また……なんて無茶を……」

「あの巨大な鉄球を……素手で……それも片手で受け止めるとは……！」

「アイツ……ホントに人間か……！？」

零治は鉄球を掴んだまま少女に静かに問いかけるが、少女はどうしていいか分からずうろたえてしまう。

「……気は済んだか？」

「あ、あの……」

「二人とも、そこまでよ！」

今まで戦いを傍観していた華琳が二人を一喝する。

「剣を引きなさい！　そこの娘も、零治も！」

「いや……オレ抜いてねぇし……。とりあえず、この鉄球は放していいんだな……？」

そう言いながら零治は鉄球から手を放し、鉄球は激しい轟音を立て地面を陥没させた。

（地面が陥没したんだが……。この小さな体でよくあんなに振り回せたな……）

「……零治。この子の名は？」

「……聞いてない。ってか、そんな余裕なかったし……」

「き……許緒と言います」

「そう……」

（こういう威圧感の有る相手を前にするのは初めてなんだろうな。完全に空気に呑まれてるぜ）

「許緒、ごめんなさい」

「……え？」

華琳は許緒と名乗った少女に頭を下げ謝罪し、それを見た許緒は怪訝な表情で華琳を見つめる。

「曹操、様……？」

「何と……」

「あ、あの……っ！」

「名乗るのが遅れたわね。私は曹操、山向こうの陳留の街で、刺史をしている者よ」

「山向こうの……？　あ……それじゃっ！？　ご、ごめんなさいっ！」

許緒は自分が誤解していたと知り、慌てて頭を下げ謝罪する。

「な……？」

「山向こうの街の噂は聞いてます！　向こうの刺史様は凄く立派な人で、悪い事はしないし、税金も安くなったし、盗賊も凄く少なくなったって！　そんな人に、ボク……ボク……！」

「構わないわ。今の国が腐敗してるのは、刺史の私が一番よく知ってるもの。官と聞いて許緒が憤るのも、当たり前の話だわ」

「で、でも……」

「だから許緒。貴方の勇気と力、この曹操に貸してくれないかしら？」

「え……？　ボクの、力を……？」

「私はいずれこの大陸の王となる。けれど、今の私の力はあまりにも少なすぎるわ。だから……村の皆を守るために振るった貴方の勇気と力。この私に貸してほしい」

「曹操様が、王に……？」

「ええ」

「あ……あの……。曹操様が王になったら……ボク達の村も守ってくれますか？　盗賊も、やっつけてくれますか？」

「約束するわ。陳留だけでなく、貴方達の村だけでなく……この大陸の皆がそうして暮らせるようになるために、私はこの大陸の王になるの」

「この大陸の……みんなが……」

その時、偵察が戻って来た事を桂花が報告する。

「曹操様、偵察の兵が戻りました！　盗賊団の本拠地は、すぐそこです！」

「判ったわ。……ねぇ、許緒」

許は、はい！」

「まず、貴方の村を脅かす盗賊団を根絶やしにするわ。まずそこだけでいい、貴方の力を貸してくれるかしら？」

「はい！　それなら、いくらでも！」

「ふふっ、ありがとう……。春蘭、秋蘭。許緒はひとまず、貴方達の下に付ける。分からない事は教えてあげなさい」

「はっ」

「了解です！」

話を終えた華琳が、今度は零治に歩み寄る。

「零治。左手を見せなさい」

「なんで？」

「いいから見せなさいっ！！」

華琳は零治の左手をグイッと無理やり引っ張る。

「いっつぅ……！」

「やっぱり……。貴方、血が出てるじゃない！」

「えっ……？　あっ！」

華琳の言うとおり、零治の左手の側面に大きな切り傷があり、結構な勢いで血が流れ出ている。おそらく鉄球を受け止めたときに、鉄球に付いてる棘で切ったのだろう。

「この程度、傷のうちにも入らねぇよ。すぐ治る」

「黙りなさいっ！　零治、私の目の前で、今後あんな無茶な真似をする事は許さないわよっ！！」

華琳は凄まじい剣幕で先程の零治の行動を咎める。
その凄まじい迫力に気圧され、流石の零治も反論は出来なかった。

「……」

「返事はっ！！」

「分かったよ。だからそんなに怒鳴るなって……」

「まったく……。秋蘭、衛生兵をここに」

「その必要はありませんよ。私が手当てをしますから」

いつの間にか、包帯を手に持った瑠利亜がそこに居た。

「そう。なら、お願いするわね」

「ええ。お任せを。……零治、左手をこっちに」

「ん……」

瑠利亜は零治の左手の傷口を止血し、慣れた手つきで包帯を巻き付けていく。

「まったく、貴方は……。いくら神器（ディバイン・アームズ）のおかげで身体能力が強化されてるとは言え、無茶しすぎですよ……」

「別に、あんなのどうって事ないだろ……」

「よく言いますよ。常人なら腕の骨が砕けてますよ。もう少し自分の体を大事にしてください」

「お前はオレの母親かよ……？」

「私はこんなバカ息子を持った憶えはないですよ……」

「あ、あの……」

そこへ、許緒がおずおずと零治に話しかけてくる。

「ん？　どうした？」

「その……さっきは、ごめんなさいっ！　ボクのせいで、お兄さん、手にケガを……」

「ああ、その事は気にするな。お前は何も悪くない」

「でも……！」

「許緒、でしたね？　彼の言う通り貴方は悪くないですよ。悪いのは、このバカ男ですから」

「おい。それがケガ人に対して言う言葉か……？　そんなんだから、お前は彼氏が居ないんだよ……」

「ほお……？」

零治の発言を聞いた瑠利亜はすうっと眼を細め、いきなり零治の左手に巻いてる包帯をギュッときつく縛り上げたので、零治は堪らず悲痛の叫び声を上げる。

「いってえええええええっ！！」

「おっと失礼。手が滑っちゃいました」

「お前……今の絶対ワザとやっただろ……」

零治は左手を抑え、瑠利亜に恨めしげな視線を向けながら、そう言う。

「華琳。こっちは済みましたよ」

「無視すんなっ！！」

そのやり取りがよっぽど可笑しいのか、華琳は鼻で軽く笑いながら零治に言う。

「ふふ。それだけ怒鳴る元気が有るなら、当然まだ戦えるわよね？」

「はぁ……。当然だろ。まだ戦えるさ」

「よろしい。……では総員、行軍を再開するわ！　騎乗！」

「総員！　騎乗！　騎乗っ！」

秋蘭の号令とともに、騎馬隊の軍勢が慌ただしく動き出す。

「零治。私達も……」

「ああ」

「あの、お兄さん」

「ん？　なんだ？」

「お兄さん、名前は何て言うの？」

「ああ、姓は音無、名は零治だ。真名は無い。好きに呼んでいいぞ」

「えっと、それじゃあ、兄ちゃんって呼んでいい？」

「兄ちゃん？」

「ダメ？」

「フッ……。好きにしな」

「ありがとうっ！　じゃあ、ボクの事は季衣って呼んでね」

「ああ。よろしくな、季衣」

「うん！　こっちこそ、よろしく！」

許緒という新たな仲間を加え、華琳の軍勢は盗賊団の本拠地を目指し、移動を再開した。

第8話　盗賊団討伐作戦　中編（後書き）

作者「う～……さあ、いつもの後書きコーナー、張り切っていくか～」

零治「おい……。テメェ、酒臭いんだが……」

作者「ったりめぇだぁ。この後書き、酒を飲んだ状態で書いたんだからな」

瑠利亜「最低の作者ですね。貴方……」

作者「うっせぇ！　酒を飲んで何が悪いんだ！」

奈々瑠「やけに荒れてますね……。何か嫌な事でもあったんですか？」

作者「嫌な事ぉ？　そんなもん、職場で散々あるに決まってんだろ」

臥々瑠「例えば？」

作者「え～っと、例えば……、アレとか、コレとか、ソレとか……」

瑠利亜「それじゃあ、分からないんですが……」

奈々瑠「完全に酔ってますね……」

臥々瑠「作者は、この後書きコーナーで何がしたいんだろう？」

零治「知るか……」

瑠利亜「えー、ちなみに……」

零治「作者がこの後書きを酒を飲んで書いたのは、ネタではなく実話だ。理由は書くネタに困っていたからだそうだ」

臥々瑠「この場を借りて、作者に代わり、アタシ達が謝ります」

零治達「「「「バカな作者で、ホントすみません!!」」」」

第9話　盗賊団討伐作戦　後編（前書き）

……文章が長くなるのはいつもの事です。
そう割り切って書いてます。
別に諦めてる訳じゃないですよ？　これでも努力はしてるんですよ
……

第9話　盗賊団討伐作戦　後編

「ほう、これは……。上手く地形を利用して建ててますね」

瑠利亜は目的地に建てられてる砦を見て、感心したように言う。
華琳達の視線の先に有る盗賊団の砦は、山の影に隠れるようにひっそりと建てられていた。

「フッ……。敵もそれなりに頭を使ってるみたいだな」

「そうですね。あの子、許緒さんと出会った場所から距離はそれ程ありませんが……これでは、よほど上手く探さなきゃ見つからなかったでしょうね」

「砦と言っても、まだ豆粒ほどの大きさしかないんだけど……」

「そこは仕方ないだろ。これ以上近づくと敵に見つかるからな」

零治達の会話をよそに、華琳は季衣に他の盗賊団が居ないか確認を取り、季衣は首を横に振り答える。

「許緒、この辺りに他に盗賊団は居るの？」

「いえ。この辺りにはアイツらしか居ませんから、曹操様が探してる盗賊団っていうのも、アイツらだと思います」

それを聞いた華琳は秋蘭に視線を移し、敵の人数を聞く。

「敵の数は把握できている？」

「はい。およそ三千との報告がありました」

「我々の隊が千と少しだから、三倍ほどか……。思ったより、大人数だな」

春蘭は難しい顔をして言うが、今回の討伐の作戦の立案者である桂花は余裕たっぷりの笑みを浮かべている。

「もっとも連中は、集まっているだけの烏合の衆。統率もなく、訓練もされておりませんゆえ……我々の敵ではありません」

「けれど、策はあるのでしょう？　糧食の件、忘れてはいないわよ」

華琳にそう言われても桂花は余裕の笑みを崩さずに静かに答える。

「無論です。兵を損なわず、より戦闘時間を短縮させるための策、すでに私の胸の内に」

「説明なさい」

「まず曹操様は少数の兵を率い、砦の正面に展開してください。その間に夏侯惇、夏侯淵の両名は、残りの兵を率いて後方の崖に待機。本隊が銅鑼を鳴らし、盛大に攻撃の準備を匂わせれば、その誘いに乗った敵は必ずや外に出てくる事でしょう。その後は曹操様は兵を退き、十分に砦から引き離したところで……」

「私と姉者で、敵を背後から叩く訳か」

「ええ」

桂花は小さく頷きそう返事をする。そこへ、それまで説明を聞いていた春蘭が渋面を作り、声を荒げながら口を挟んでくる。

「……ちょっと待て。それは何か？　華琳様に囮をしろと、そう言う訳か！」

「そうなるわね」

「何か問題が？」

桂花はいたって冷静に返答するが、春蘭はさらに声を張り上げ反論してくる。

「大ありだ！　華琳様にそんな危険な事をさせるわけにはいかん！」

「なら、貴方には他に何か有効な作戦が有るとでも言うの？」

「烏合の衆なら、正面から叩き潰せば良かろう」

春蘭は桂花の問いに、真顔でそう答える。

「……」

「……」

「……春蘭。それは作戦とは言わねぇだろ……」

華琳と桂花は春蘭に呆れた視線を向け、零治も呆れ果てた表情でツッコミを入れる。

しかたなく桂花は、春蘭にも理解できるように分かりやすく丁寧に改めて説明をする。

「油断した所に伏兵が現れれば、相手は大きく混乱するわ。混乱した烏合の衆はより倒しやすくなる。曹操様の貴重な時間と、もっと貴重な兵の損失を最小限にするなら、一番の良策だと思うのだけれど？」

「な、なら、その誘いに乗らなければ？」

「……ふっ」

なお食い下がってくる春蘭。その姿を見た桂花は長い間をおいて鼻で軽く笑い、バカにした視線を向ける。

「な、なんだ！　そのバカにしたような……っ！」

「曹操様。相手は志も持たず、武を役立てる事もせず、盗賊に身をやつすような単純な連中です。間違いなく、夏侯惇殿よりも容易く挑発に乗ってくるものかと……」

「……な、ななな……なんだとぉー！」

桂花の言葉に春蘭は顔を赤くして憤慨するが、これ以上無駄な時間を割く訳にはいかないので華琳が春蘭をなだめる。

「はいどうどう。春蘭。貴方の負けよ」

「か、華琳様ぁ……」

「……とはいえ、春蘭の心配ももっともよ。次善の策はあるのでしょうね」

「この近辺で拠点になりそうな城の見取り図は、既に揃えてあります。あの城の見取り図も確認済みですので……万が一こちらの誘いに乗らなかった場合は、城を内から攻め落とします」

桂花の二重の策の説明を聞いた華琳は満足げな表情で頷き、作戦の決行を決定する。

「分かったわ。なら、この策で行きましょう」

「華琳様っ！」

「これだけ勝てる要素の揃った戦いに、囮のひとつも出来ないようでは……この先の覇道など、とても歩めないでしょうよ」

「その通りです。ただ賊を討伐した程度では、誰の記憶にも残りません。ですが、最小の損失で最高の戦果を上げたとなれば曹孟徳の名は天下に広まりましょう」

「な、ならば……せめて、華琳様の護衛として、本隊に許緒を付けさせてもらう！　それもだめか？」

「許緒は貴重な戦力よ。伏兵の戦力が下がるのは好ましくは無いのだけれど……」

「私が許緒の分まで暴れれば、戦力は同じだ。それで文句は無かろう！」

（なんて無茶苦茶な戦力計算式なんだ……）

零治が呆れながら春蘭を見る。しかし、思ってる事まで口にすれば話が更にややこしくなってしまうので決して口にはしなかった。

「でも……」

桂花は納得のいかない様子で言葉を濁す。このままでは話が先に進まないので零治が溜め息を一つ吐き、季衣の代わりを務める意思を示す。

「はぁ……。だったらオレが許緒の代わりを務めてやる……」

「はあっ!?　アンタなに言ってるのよ!　アンタは本隊に残って曹操様の護衛に徹してもらうんだからっ!」

「本隊には許緒だけじゃなく、瑠利亜、奈々瑠に臥々瑠も居るんだ。オレ一人が抜けるぐらい問題ないだろう?　それとも、お前は自分が考えた策に自信が無いのか?」

零治は桂花に挑発的な笑みを向けながらそう言う。零治のその態度が癇に障ったのか、桂花は歯をギリギリと食いしばり睨み返し不満な態度を現しながらも、零治の提案を受け入れる事にした。

「ぐっ……!　分かったわよ。なら、囮部隊は曹操様と私、許緒と神威、奈々瑠と臥々瑠。伏兵は夏侯淵と夏侯惇、音無。これでよろしいでしょうか、曹操様」

「それで行きましょう。零治、貴方の働きに期待させてもらうわよ」

「まっ、期待を裏切らない程度には働いてやるよ。なら瑠利亜、そっちは任せたぞ」

「ええ。任されました」

「奈々瑠、臥々瑠。瑠利亜の言う事をちゃんと聞くんだぞ？」

「はい。兄さんも気をつけて」

「は～い♪　こっちは任せといて」

「では作戦を開始する！　各員持ち場に付け！」

華琳が力強い声で兵達に指示を出し、各部隊の兵士たちが慌ただしく動き出す。

……

……

…

春蘭の隊が離れていき、華琳達本隊の手勢は数える程度の数になる。

「いよいよですね……」

「へへっ。腕が鳴るね」

「二人とも、あまり派手な真似はしないでくださいよ？」

「……」

「ん？　許緒、どうかしたんですか？」

先程から無言で緊張気味の季衣に瑠利亜が話しかける。

「あ、姉ちゃん」

「ね、姉ちゃん……？」

瑠利亜は思わず怪訝な表情になってしまう。

「ダメだった？　兄ちゃんの事は兄ちゃんって呼んでるから」

「まあ、別に構いませんけど……」

「やった～。じゃあ三人とも、ボクの事は季衣って呼んでね。春蘭様と秋蘭様も、真名で呼んでいいって言ってくれたし」

「そうですか。それで、さっきから黙って、どうかしたんですか？」

「うん……。その、なんだか緊張してきちゃって……」

「緊張？　ああ、華琳の護衛をする事にですか？」

「うん。たいやく、なんだって」

「そうですね。華琳を守る仕事ですから、もの凄い大役ですね」

「そっか……。姉ちゃん達は凄く落ち着いてるよね？」

「まあ、私達は実戦経験がありますから。そのせいでしょう？」

「そうなんだ。確かに、三人とも強そうだもんねぇ」

「確かに強いですけど……私、近接戦では季衣に絶対に勝てないと思いますよ……」

「えっ、どうして？　剣を持ってるのに」

季衣は瑠利亜の腰に下げられてる双龍を指差しながら聞く。

「確かに剣は持ってますけど、コレ本当は弓なんですよ」

「そうなの？　……あれ？　でも姉ちゃん、矢を持ってないじゃん」

「ああ、矢はこうやってですね……」

瑠利亜はそう言いながら、右手の平に魔力を集中させ青白く光り輝く一本の矢を創り出した。

「創る事が出来るので、持っとく必要が無いんですよ」

「うわー！　すげーー！！」

「あまり驚かないんですね」

「うん。曹操様から聞いたけど、姉ちゃん達って天の御遣いなんでしょう？」

「まあ、一応そういう事になってますが……」

「だったら、別に驚く必要も無いと思って」

「そうですか。じゃあ、あの二人の頭に犬耳と尻尾が付いてるのも？」

「うん。まあ、初めて見たときは驚いたけど……」

季衣は奈々瑠達を興味津々の眼差しで見ながら話しかける。

「ねえねえ、二人とも」

「何ですか？」

「な～に？」

「その……その耳、触っちゃダメ？」

「えっ？　えっと……その……」

「う～ん……」

零治達以外の人間に触られるのがもともと嫌いなため、二人は返答に詰まってしまう。

「ダメ？」

「「うっ……」」

季衣は上目遣いの視線で二人に問いかける。

（この視線は反則でしょう！！）

（うぅ……。視線が痛いよ～……）

「えっと……また今度でいいですか、季衣さん？　今は大事な戦いの前ですし……」

なんとかその場をごまかすために奈々瑠はそう言うと、季衣も納得したのか軽く謝りながら引き下がる事にした。

「あっ、そうだね。ごめんごめん」

そこに桂花がやって来て、瑠利亜達に怒鳴り散らす。

「貴方達！　いつまで油を売ってるの！　早く配置に付きなさい！　作戦が始められないでしょうっ！！」

「はいはい。今行きますよ。では季衣、行きましょうか」

「うんっ！」

……

……

…

華琳の率いる本隊が盗賊団の砦の正面に展開し、激しい銅鑼の音が響き渡る。それと同時に人々の咆哮も辺りに響き渡る。

「……」

響き渡る……

「……」

響き……

「……」

ちなみに、響き渡る銅鑼の音は華琳の軍のもの。しかし、それに合わせて響き渡る咆哮は、城門を開け飛び出してきた盗賊達のものである。

「……桂花」

「はい」

「これも作戦のうちかしら？」

「いえ……これは流石に想定外でした……」

華琳の問いに桂花もどう反応していいか分からず、戸惑った表情で答える。

「連中、今の銅鑼を出撃の合図と勘違いしているのかしら？」

「はぁ。どうやら、そのようで……」

「……そう」

「ん？　華琳、ひょっとして、盗賊を相手に舌戦をするつもりだったんですか？」

「……一応、こういう時の礼儀ですからね。まあ大した内容ではないから、次の賊討伐の時にでも使う事にするわ」

「ははっ。そうですか」

「曹操様！　姉ちゃん！　敵の軍勢、突っ込んで来たよっ！」

季衣がそう言うように、盗賊の軍勢は大量の砂塵を舞い上げながら、華琳の本隊目掛けて突進してきた。

「うわ～……。結構な数だね……」

「そうね。でも、聞いてた数より少ない気が……」

奈々瑠と臥々瑠は右手を水平にし額にかざして、敵軍を観察するように見つめながら言い、奈々瑠の疑問に瑠利亜が答える。

「おそらく、ある程度の数は砦内に残ってるんでしょうね」

「ふむ……まあいいわ。多少のズレはあったけれど、こちらは予定通りにするまで。総員、敵の攻撃は適当にいなして、後退するわよ

！」

……

……

…

「報告！　曹操様の本隊、後退して来ました！」

「やけに早いな……。ま、まさか……華琳様の御身に何か……！？」

「心配しすぎだ、姉者。隊列は崩れていないし、相手が血気に逸ったか、作戦が予想以上に上手くいったか……そういう所だろう」

「そ、そうか……ならば総員、突撃準備！」

春蘭の号令とともに、兵達が突撃態勢に移行する。

「さて、殺るぞ……叢雲……」

そう言いながら、零治も叢雲を起動させ戦闘態勢に入る。

「音無。本当に護衛の兵は必要ないのか……？」

秋蘭が心配げな表情で聞くが、零治は表情一つ変えずにきっぱりと答える。

「構わん。周りに味方が居ると本領が発揮できんからな」

「ふんっ！　そんな事を言って、後で助けを求めても助けてやらんからな」

「ああ、心配するな。仮にそうなっても、お前にだけは絶対に助けは求めないから安心しろ」

「なんだとぉ！！」

「やめないか、姉者。それより見ろ。あそこに華琳様は健在だ。季衣に瑠利亜達も、ちゃんと無事のようだぞ」

「おお……。良かった……」

華琳の無事を確認し、春蘭は安堵の表情を浮かべながら胸をなでおろす。

「……あれが、敵の盗賊団か……」

「隊列も何もあったものではないな」

「ただの暴徒の群れではないか。この程度の連中、作戦など必要なかったな、やはり」

「そうでもないさ。作戦があるからこそ、我々はより安全に戦う事が出来るのだからな」

「ふむ……。そろそろ頃合いかな」

「まだだ。横殴りでは、混乱の度合いが薄くなる」

「……」

「ま、まだか……？」

春蘭は今すぐ突撃したいのか、しだいに落ち着きを無くし焦れ始める。

「まだだ」

「もういいだろう！　もう！」

「おい。少しは落ち着けよ、春蘭」

「だが、これだけ無防備にされているとだな、思い切り殴りつけたくなる衝動が……。音無、お前もそう思うだろ？」

「オレをお前と一緒にするんじゃねぇ……」

「まあ、姉者の気持ちも分からんでもないが……」

「敵の殿だぞ！　もういいな！」

「うむ。遠慮なく行ってくれ」

「頼むぞ、秋蘭」

「応。夏侯淵隊、撃ち方用意！」

秋蘭の指示を聞き、秋蘭の部隊の兵が一斉に弓を構え、射撃体勢に入る。

「よぅし！　総員攻撃用意！　相手の混乱に呑み込まれるな！　平時の訓練を思い出せ！　混乱は相手に与えるだけにせよ！」

「敵中央に向け、一斉射撃！　撃てぃっ！」

秋蘭の合図とともに弓兵達が敵軍に向けて一斉に矢を放たれ、敵軍に矢の雨が降り注ぎだす。

「統率など無い暴徒の群れなど、触れる端から叩き潰せ！　総員、突撃ぃぃぃぃっ！」

……

……

……

「後方の崖から夏侯惇様の旗と、矢の雨を確認！　奇襲、成功です！」

「流石は秋蘭。上手くやってくれたわね」

「春蘭様は？」

「敵の横腹辺りで突撃したくて堪らなくなっていた所を、夏侯淵に抑えられていたんじゃないの？」

「でしょうね……」

「うんうん。その光景が眼に浮かぶよ」

「……別にアンタ達と意見が合っても、嬉しくも何ともないんだけど」

「奇遇ですね。私もそう思っていた所なんですが……」

「ふんっ！　べ～、っだ」

いつぞやの一件が原因なのか、奈々瑠と臥々瑠、桂花の間にはピリピリした空気が張り詰め、完全な冷戦状態となっていた。

「はい。ケンカはそこまでになさい。この隙を突いて、一気に畳みかけるわよ」

「はっ！」

「季衣。貴方の武勇、期待させてもらうわね」

「分っかりましたーっ♪」

「瑠利亜、奈々瑠、臥々瑠。貴方達もその力、この場で存分に振るってみせなさい」

「お任せを」

「よ～し！　久々に大暴れしてやるぞ～っ！」

「まっ、貴方を失望させないように最善を尽くしますよ」

「総員反転！　数を頼りの盗人どもに、本物の戦が何たるか、骨の髄まで叩き込んでやりなさい！」

華琳の号令とともに本隊が敵軍に向け反転する。そして……

「総員、突撃っ！」

敵軍に目掛け突撃を開始する。

……

……

…

「ん？　正面から砂塵？　本隊が突撃を開始したか……」

「てめぇ！　よそ見してんじゃねぇっ！」

零治の態度に激昂した一人の野盗が零治に斬りかかるが……

「うるさい……」

零治はその攻撃をあっさりと避け、野盗の首を刎ね飛ばし、野盗は首から鮮血を吹き上げながら地面に崩れ落ちる。

「ひっ！　な、なんだコイツっ！？　強すぎるぞっ！！」

「強すぎる……？　違うな。貴様らが弱すぎるんだよ……」

「うわーー！！　後退だ！　城まで後退しろぉぉぉぉっ！！」

零治の殺気に気圧された野盗達は城まで撤退を始める。

「フンっ！　逃げたか。だが好都合だ……。おい、春蘭」

「なんだ？」

「オレは城の内部を制圧に向かう。ここは任せたぞ……」

「はっ？　おい、何を言って……って、おい！？　音無っ！！」

零治は春蘭にそう告げ、春蘭の声には耳も貸さずに単身野盗の砦内部に突入した。

……

……

…

「逃げる者は無理に逃げ道を塞ぐな！　後方から追撃を掛ける、放っておけ！」

「……それ、もっとタチが悪くないですか？」

「正面からヘタに受け止めて、噛みつかれるよりはマシでしょう」

「まっ、ごもっとも」

「華琳様。ご無事でしたか」

そこへ、本隊に合流した秋蘭がやって来た。

「ご苦労様、秋蘭。見事な働きだったわ」

「ん？　春蘭はどうしたんです？」

「どうせ追撃したいだろうから、季衣、それと奈々瑠と臥々瑠に夏侯惇と追撃に行くよう、指示しておいたわ」

瑠利亜の疑問に桂花が答え、その手際の良さを瑠利亜は賞賛する。

「……見事なものですね」

「桂花も見事な作戦だったわ。負傷者も殆ど居ないようだし、上出来よ」

「あ……ありがとうございます」

華琳に褒められた事がよほど嬉しいのか、桂花は顔を紅潮させながら深々と頭を下げて礼を言う。

「それと……瑠利亜」

「なんです？」

「奈々瑠と臥々瑠もそうだったけど、貴方の働きも見事だったわ」

「それはどうも」

「それにしても、その剣がまさか弓とは思わなかったわ。腕前も秋蘭と互角って所かしら？」

「ほう、そうなのか？」

華琳の発言を聞いた秋蘭が、瑠利亜に興味深げな視線を向けながら聞く。

「さあ？　どうでしょうね？」

瑠利亜はシレッとした態度で返答する。

「ふっ。機会があれば、一度手合わせを願いたいものだな」

「まあ、機会があれば……」

「それにしても、春蘭達は随分遅いわね。一体何をしてるのかしら？」

「おそらく城の制圧に向かったのだと思いますが……確かに遅すぎますな。何かあったのでしょうか？」

「仕方ないわね。私達も城に向かうわよ。ついて来なさい」

「御意」

華琳は周りの者たちにそう告げ、盗賊団の城に向け移動を始める。

「……遅いなぁ」

「遅いですねぇ……」

春蘭と季衣は敵の城の城門前で何かを待ってるのか、そんな事を言う。

「ねえ、奈々瑠」

「ん？　なに？」

「春蘭達は気付いてないんだろうけど、さっきから城の中から血の臭いが漂ってきてるよね……」

「ええ。それも一人や二人じゃないわ。臭いの濃度から判断して、かなりの人数分の血の臭いだわ……」

「これって……間違いなく兄さんの仕業だよね……」

「でしょうね。城の中は間違いなく地獄絵図の状況になってるわよ」

「うわ～……。偵察に行った兵隊さん達が気の毒だね……」

「たぶんあの人達、当分の間は肉料理は食べれなくなるんじゃないかしら？」

と、そこに先程まで後方に居た華琳達がやって来る。

「貴方達、こんな所で何をしてるの？」

「あっ！　華琳様！　ご無事でしたか！」

「ええ。ご覧の通り、私は無事よ。……ん？　春蘭」

「はい」

「零治の姿が見えないのだけれど……彼はどこに居るの？」

「はぁ……。それが、あ奴何を考えたのか、あの混戦の最中（さなか）に城の内部を制圧すると言って、単身で突入をしたのです」

「なんですって？」

「フッ……。彼らしい選択ですね」

「なるほど。それで、春蘭達はここで何をしてるの？」

「はっ。季衣達が合流して来たので、我らも城に突入しようと思ったのですが……城の中が妙に静かなのが気になりまして……」

「静か……？」

春蘭の言葉を聞いた華琳達は城に眼を向けながら耳を澄ませてみが、何一つ聞こえてこない。
せいぜい聞こえてくるのは、吹き付ける風の音ぐらいだろうか。

「……言われてみれば、確かに静かだな……」

「それで、兵隊さん達に中を偵察に行ってもらったんですけど……」

「まだ戻って来てないの？」

怪訝な表情で聞いてくる華琳に、春蘭は小さく頷き返答する。

「はい……」

「そう……。桂花」

「はっ」

「この城には秘密の抜け道とかは有るの？」

「確かに有りますが、連中が抜け道の存在に気付いてるとは正直思えませんね。何しろ見取り図が無いと分かりにくい場所に有りますから」

「では、罠の可能性は？」

「それは、偵察が戻ってこない事には判断しにくいですね……。可能性が無いとは言えませんが……」

華琳達がそんな会話をしているその時。

「夏侯惇将軍……」

偵察の兵達が青ざめた表情で城門から出て来た。

「おおっ！　やっと戻って来たか。それで、中の状況はどうなっていた？」

「はっ……。簡単に申し上げますと、中に居た盗賊達は音無様によって全滅させられていました……」

「へえ～、大したものね。それで、零治は無事なの？」

「はい。傷一つ負っていません。彼は現在中庭に居ます……」

「そう。それで、中の状況は？」

「……」

偵察の兵はなぜか口を紡いだまま開こうとしなかった。

「おい、どうした？　華琳様の質問にお答えせんか」

「申し訳ございません。とても自分の口からは……。ご自分の眼でご確認なさった方が早いと思います……」

「なにぃ！？　貴様、それはどういう……」

春蘭は思わず兵に怒鳴り散らそうとするが。

「春蘭。構わないわ」

華琳がそれを手で制止する。

「ですが、華琳様！」

「いいのよ。どうせ自分で確認するつもりだったんだし。……ご苦労だったわね。貴方達は戻って他の者たちの作業を手伝いなさい」

「はっ……」

そう聞いた兵達は、一礼して足早にその場を後にする。

秋蘭はその後ろ姿を見ながら兵達の様子が変な事を疑問に思い、口にする。

「……あ奴ら、随分と顔色が悪かったが、一体どうしたのだ？」

「それは中を見れば分かると思いますよ……」

「あら、瑠利亜は中がどうなってるか知ってるの？」

「いいえ。ですが、ある程度の予測はついてますよ。零治との付き合いは長いですから……」

「ふ～ん……。まあいいわ。とにかく中に入るわよ」

そう言いながら華琳達は城門をくぐり、城内に足を踏み入れる。

「桂花。中庭はどっちなの？」

「こちらです」

桂花が中庭の方角を指し示し、華琳達はそちらに足を進める。

「……おい、秋蘭……」

「なんだ、姉者？」

「なんだか……血の臭いが、だんだん濃くなってきてないか……？」

「うむ。確かに……。正直気分が悪くなりそうだ……」

「うぅ……。ボク、なんだか吐き気がしてきましたよ……」

「季衣、大丈夫？　もし辛いのなら、貴方は外で待ってなさい」

「だ、大丈夫です。ボクも兄ちゃんの事が気になりますから。それにこれからは曹操様の所で働く事にもなったんですし、このくらい我慢します」

季衣は力強くそう答えるが、明らかに顔色が悪く、気分は悪そうなのは誰が見ても明らかだった。

「ふふ。偉いわね。でも本当に辛かったら我慢せずに、ちゃんと言いなさいね」

「はい」

「曹操様。あそこの廊下を抜けたら中庭に出ますよ」

「そう」

華琳達は桂花が指し示す廊下に足を運ぶが、すぐに足を止める。

「……」

「おい、これって……！」

「……血だな」

「血だけじゃないでしょう？　廊下をよく見てください……」

瑠利亜がそう言い、華琳達は眼を凝らしながらもう一度廊下をよく見てみると、廊下に有る柱の陰などに転がってる何かを見つけた桂花と季衣が青ざめた表情で声に出す。

「ちょっと!?　これって……!!」

「盗賊達の……死体……だよね……コレ……」

中庭に続く廊下の床や壁は血で真っ赤に染めあがっており、廊下にはバラバラに切り刻まれた盗賊達の死体が、あちこちに転がっていた。

「瑠利亜……」

春蘭は恐る恐る瑠利亜に尋ねる。

「なんです？」

「まさか……これ全部……音無がやったのか……？」

「当たり前でしょう。他に誰が居るって言うんですか？」

「……」

華琳は黙ったまま廊下に足を進めようとするが……

「華琳様っ！！」

「どうしたの？　春蘭」

「華琳様。まさか、ここを通るおつもりですか……？」

「なに？　貴方達は怖気づいたの？　死体なんて戦場で見慣れてるでしょう？」

「確かに見慣れてはいますが……流石にこれは……」

春蘭だけでなく、秋蘭も廊下に足を踏み入れるのをためらっている。

「私だって出来れば通りたくないわよ。でも迂回してる暇なんか無いんだから仕方ないでしょう」

華琳はそう言い再び廊下に足を踏み入れようとするが、今度は瑠利亜が華琳を呼び止める。

「華琳……」

「今度は何……？」

「まあ、そう苛立たないで。……華琳、この先に進むのなら、ちゃんと心の準備をしといた方がいいですよ……」

「どういう意味？」

「いえ、私の予想が正しければ、おそらく中庭はここよりも凄まじい状況になってるでしょうから……」

「ふっ。私を誰だと思ってるの？　この曹孟徳、この先にどんな状況が待ち構えていようとも、決して臆する事は無い」

「そうですか。なら私は、これ以上は何も言いませんよ」

「貴方達はどうするの？　嫌ならここで待っていても構わないわよ？」

「華琳様をお一人で行かせる訳にはいきません！　最後までついて行きます！！」

「ふっ。姉者が行くのなら、私も行かない訳にはいかないな」

「ボ、ボクも兄ちゃんの無事を確かめたいから、ついて行きます！！」

「別に、アイツの事なんかどうでもいいけど……。曹操様の身に何かあってはいけませんから、当然私もついて行きます」

「ふふ。良い答えね。瑠利亜、貴方達三人も当然来るんでしょう？」

瑠利亜達は華琳の問いに黙ってうなずく。

「よろしい。なら、行くわよ」

華琳達は血で真っ赤に染まった廊下に足を踏み入れる。その際ベチャベチャと、血溜まりを踏みつける嫌な足音がその場に響く。やがて一同は中庭にたどり着き、中庭内の光景を見て戦慄する。

「……っ！？」

「な、なんと……！」

「なるほど……。偵察の顔色が悪かった理由がようやく理解できた……」

「……」

「これって……ホントに現実なの……！？」

一同が眼にした中庭は、まさに地獄絵図の一言に尽きる光景が広がっていた。まず、そこらじゅうに盗賊の死体が転がっていて、ある者は腕を、ある者は足を、ある者は首を切断され、更には胴体から真っ二つにされてる者や、四肢を切断されてる者まで居て、中庭には彼らの血で深紅の海が出来上がっていた。

「フーー……」

「……」

華琳は中庭の一角に置かれている、やや大きめの岩に腰掛けタバコを吸っている零治の姿を見つけ、そのまま血の海を渡り歩きながら歩み寄る。

「零治……」

「ん？　おお、やっと来たか。待ちくたびれたぜ、華琳」

「零治……これは……全て貴方がやったの……？」

「……フーー……。そうだ……」

「そう……」

「……」

「見事な働きぶりね。褒めてつかわすわ」

「ほぉ……」

零治が感心したような声をだし華琳をジッと見つめる。

「なによ？」

「いや、この光景を見ても、そんなセリフが言えるとはたいしたものだ……っと思ってな」

「フッ。この私を甘く見ないでちょうだい。この程度の事で臆するようでは、この先の覇道、到底歩めるとは思ってないわ」

「フッ、なるほどな……。華琳。初めて会った時の事は憶えてるな？」

「ええ」

「あの時、お前が叢雲に触る事ができた理由が分かった気がする……」

「そう。よかったら聞かせてくれないかしら？」

「まず、いかなる事にも臆さない度胸、そして王としての資質と器の大きさ……そこに叢雲は興味を持ったのかもしれん……」

「当然でしょう。この私を誰だと思ってるの？」

「曹孟徳。いずれ、この大陸の王となる人物」

「その通りよ。零治、これからも、その力を私の覇道の助けに存分に振るってもらうわよ」

「フッ、もちろんだ。……ああ、それと例の古書、太平要術だったか？」

「なに？　見つかったの？」

華琳の顔に期待の表情が浮かぶが、零治は首を横に振る。

「いや……。城中くまなく探したが、それらしき物は無かった……」

「そう……。無知な盗賊に薪にでもされたのかしらね。……まあ、代わりに桂花と季衣という得難い宝が手に入ったのだから、良しとしましょう」

「……そうか。季衣は華琳の所に残るのか……って、季衣。顔色が悪いが大丈夫か？」

「う、うん。平気だよ……ちょっと気持ち悪いだけだから……。それにボクの村も曹操様が治めてくれる事になったんだ。だから今度はボクが、曹操様を守るって決めたから、このくらいでへこたれたりしないよ……」

季衣はそう答えるが、誰が見ても具合が悪そうなのは明らかであった。

（どう見ても大丈夫じゃないだろうに……。城の戻ったら飯でもご馳走してやるか）

「ん？　華琳が季衣の村を治めるって事は……」

零治の疑問に秋蘭が答える。

「この辺りを治めていた州牧が、盗賊に恐れをなして逃げ出したらしくてな。そこで華琳様が州牧の任も引き継いぎ、この地も治めようという話になってな」

「それに季衣には、今回の武功をもって華琳様の親衛隊を任せる事になった」

「これからもよろしくね、兄ちゃん！」

「そうか。よかったな、季衣」

「ああ」

「さて、話が済んだのなら帰還するわよ。正直これ以上ここに居たら季衣が倒れかねないわ」

「そうだな。早いとこ季衣に新鮮な空気を吸わせてやった方がいいだろ」

こうして、華琳達の盗賊団討伐戦は大成功という形で幕を下ろし、一同は帰路に着くのであった。

……

……

…

現在、零治達は城まで目前の位置まで来ている。

「兄さ～ん……。お腹空いたぁ……」

情けない声で零治に空腹を訴える臥々瑠。

「もうちょっとで城に着くから我慢しろ。朝飯が食えなかったのはお前だけじゃねぇんだからな……」

「……誰のせいでこんな事になったのか、分かってるんでしょうね……」

怒りを抑えながら桂花が臥々瑠に言う。

「……少なくとも、アタシだけのせいじゃないよ」

臥々瑠はそう言いながら季衣に視線を向ける。

「にゃ？　え～と、ボク、何か悪い事したかな？」

「いや、季衣は何も悪くないぞ。悪いのは、そこに居るネコミミ頭巾を被った性悪女だからな」

「なんですってぇ！！」

一同が嘆いてるのは食事の件。今この場に居る人間全員が朝食を食べていないのだ。理由はいたって単純である。まず、華琳の軍勢の被害が少なかったので予想以上に兵士が残った事。そして一番の原因が臥々瑠と季衣の存在である。この二人が糧食を人の十倍も食べていたため糧食は城に着く直前で底をついてしまったのだ。結果、桂花は華琳との賭けに負けてしまったのだ。

「桂花。不可抗力や予測できない事態が起こるのが、戦場の常よ。糧食の賭けの件、忘れたとは言わせないわよ？」

「……分かりました。最後の糧食の管理が出来なかったのは、私の不始末。首を刎ねるなり、思うままにしてくださいませ」

「ふむ……」

「……」

零治と春蘭が意味深な視線を桂花に向ける。

「ですが、せめて……最後は、この夏侯惇や音無などではなく、曹操様の手で……！」

「……」

「チッ……！」

（まったく……この二人は……）

零治と春蘭のあからさまな態度に瑠利亜は呆れ果てる。

「とは言え、今回の遠征の功績を無視できないのもまた事実。……いいわ、死刑を減刑して、お仕置きだけで許してあげる」

「曹操様……っ！」

「それから、季衣と共に、私を華琳と呼ぶ事を許しましょう。より一層、奮起して仕えるように」

「あ……ありがとうございます！　華琳様っ！」

「……」

零治は気に食わない表情で桂花を見つめる。

「やれやれ……。桂花の存在は心強いですが、これで私の苦労が増えるのは確定ですね……」

瑠利亜はそう言いながら、タバコを取り出し火をつける。

「フーー……」

「オレも付き合わせろ」

そう言いながら、零治もタバコを吸いだす。

「「フーー……」」

「零治……」

「なんだよ？」

「彼女、桂花とは仲良く出来そうですか……？」

「無理だな」

零治は即答する。

（はぁ……。私、これから先、体調を崩さずにいられるか不安だ……）

瑠利亜は心の中でそう呟き、大きな溜め息と共にタバコの煙を吹かすのだった。

第9話　盗賊団討伐作戦　後編（後書き）

作者「……あれ？　なんでオレしか居ないんだ？　アイツらはどこだよ？」

兵士「お届け物です」

作者「ん？　アンタ魏軍の兵士じゃん。いつから配達業なんか始めたのさ？」

兵士「いえ、そういう訳では。音無様から、これを渡してくれと」

作者「ん？　手紙？」

兵士「では、私はこれで失礼します」

作者「ああ、ご苦労様です。……何が書いてるんだ？」

零治『バカな作者へ。最近お前のバカに付き合うのに疲れたから瑠利亜達と一緒に休暇を取らせてもらう。よって、次の話の後書きコーナーはお前だけで何とかしろ。じゃっ、そういう事で』

作者「ふざけんなぁぁぁぁっ！！　オレ一人でどうしろって言うんじゃあ！？　一人でボケとツッコミをしろってのか！！　やってらんね！　本日の後書きコーナーはこれで終了！！」

第１０話　傾国の美女？　現る（前書き）

原作ユーザーなら、サブタイトルでお気付きですね？
みんな大好きの、あの人が登場します。

第１０話　傾国の美女？　現る

「……」

とある昼下がり。零治は何をするのでもなく自室のベッドに横たわって天井を眺めていた。そこへ、瑠利亜が扉をノックする。

「零治。居ますか？」

「開いてるぞ。勝手に入れよ」

扉が開かれ、奈々瑠と臥々瑠を連れ立った瑠利亜がやって来る。

「失礼しますよ……って、貴方、何をしてるんですか……？」

「別に何も……。今日は非番だからする事なんか無いんでな。そう言うお前は今日は仕事じゃなかったのか？」

「私は今日は昼までですから。後は優秀な部下がやってくれますよ」

「ウチの警備隊ホントこんなんで大丈夫なのか……？」

「まあ、今は軍部の人間を借りてますから大丈夫でしょう。ただ、いつまでもこのままって訳にはいきませんがね……」

二人は自分たちが受け持ってる警備隊の現状を嘆く。
それもそのはず、現在の警備隊は人手、特に指揮官クラスの人間が圧倒的に足りていないのだ。
今は軍部から人を借りてそれを補ってはいるが、いつまでもこのままという訳にはいかない。
何より、指揮官、つまり警備隊で小隊長を務められる人間を確保しなければ零治達の負担が増えるだけなので、警備隊の人手の確保は重要課題となっていた。

「そこは優秀な人間が来てくれなきゃ話にならんがな……。で？今日はそんな話しをするために来た訳じゃないんだろ？」

「ええ。……零治、今時間はありますか？」

「別に大丈夫だが？」

「なら、今から買い物に行くので付き合ってくれませんか？」

「それは構わんが……何を買いにいくんだ？」

「下着です」

「……他を当たれ」

零治はそう言って、瑠利亜に背を向けて寝転がる。

「今、構わないと言ったじゃないですか。零治……」

「毎度の事とはいえ、なんでオレが女物の下着の買い物に付き合わなきゃなんねぇんだよ……？」

零治は相変わらず瑠利亜に背を向けたまま受け答えをする。

「男性である貴方の意見が聞きたいからですよ」

「男なんかオレ以外にも居るだろうが……」

「確かに居ますけど……貴方以外の男性の意見は正直言って当てにならないんで。それに奈々瑠達も居ますし」

「見せる相手も居ないのに男の意見なんか聞いてなんの意味があるんだ……？」

零治はボソッとそんな事を呟く。

「今、何か言いましたか……？　零治……」

零治の呟きが聞こえたのか、瑠利亜はドスの利いた声で零治にそう言う。加えて言うと、表情も普段の穏やかなモノとは真逆の険しい表情で、影が差し、眼も据わり殺気を帯びており、もうその視線だけで人を殺せそうな気がする。

（怖っ！！）

零治は瑠利亜に背を向けたままなので顔こそ見てはいないが、あまりの迫力に思わず身震いをし、ぎこちなく答える。

「いや……なにも……」

「そうですか。なら、さっきのは空耳ですか。……なら、当然付き合ってくれますよねぇ……？」

「……」

「付き合ってくれますよねぇ……？」

「はぁ……。分かったよ。付き合えばいいんだろ。付き合えば……」

諦めたようにそう言いながら零治はノロノロとベッドから起き上がる。

「結構……。二人ともよかったですねぇ。零治が快く引き受けてくれて」

瑠利亜は零治の返答を聞くと同時に、いつもの穏やかな表情に戻し、

それまで黙っていた奈々瑠達に声をかける。

「えっ？　あ、ああ……そ、そうですね……」

「う、うん……そうだね……」

（（これからは、姉さんの事も絶対に怒らせないようにしようっ！！））

瑠利亜のもう一つの姿を垣間見た二人は心の中でそう誓う。

「ったく……。せっかくの休みなのに……」

「何をブツクサ言ってるんですか？　早く行きますよ」

「へ～い……」

一同は零治の部屋を後にし、街に向かう。

……

……

…

「で？　行く店とかは決まってるのか？」

「ええ。最近この辺に新しく出来た店が有るんで、そこにしようかと」

「ああ、それならオレも知ってるぞ。この先の通りに有る店だろ？」

「ええ、そうです。流石は隊長殿。ちゃんと街の事は把握してるようですね？」

「茶化すな。行き先が決まってるんなら、さっさと行くぞ」

「はいはい」

「奈々瑠、臥々瑠。この時間帯は人が多いからはぐれないように注意しろよ」

「む～……。子供扱いしないでくださいよ……」

「そうだよ……。それに、いざとなったら建物の屋根の上を移動するから」

「それは目立つから勘弁してくれ……」

零治達はそう言いながら目的地の店を目指し、通りの人込みをかき分けるように移動し、やがて目的の店にたどり着く。

「ここだな」

「そのようで」

「なら、さっさと店に入って、さっさと用件を済ませて、さっさと城に帰るぞ」

「なんです？　そんなに嫌なんですか？」

「男が女との買い物、もしくはデートで行かれると一番困る店は、ランジェリーショップと相場が決まってるんだよ……」

「はいはい……。なら、早々に終わらせますから、少しだけ我慢してください」

「ああ。じゃあ、入るぞ」

そう言いながら、一同は店の入り口の扉を開け入店し、瑠利亜と奈々瑠は店内を見回す。

「ほぉ、中々の品揃えですね」

「そうですね。……あっ！　あの下着すごく可愛い～♪」

「あ～あ、メンドくさいな～……」

「アンタはもう少し女としての自覚を持つべきじゃないの？」

「うるさいな～……」

「はいはい、ケンカはしない」

「おい、いいから早く用件を済ませろよっ！」

「分かってますから、そう怒らないで。……すみませ～ん。誰か居ませんか～？」

「は～い♪　今行くわ～ん♪」

店の奥から独特のイントネーションで、店員と思われる男の声がする。

「おい。この店、男が店員なのか……？」

「まあ、そういう店も有るんでしょう？」

「にしても、妙な喋り方だったな。一体どんな奴……」

「いらっしゃいませ～ん♪」

零治がそう言いかけた時、店の奥から営業スマイルを浮かべた、スキンヘッドでピンクのビキニパンツ一丁姿のゴリモリマッチョの大男が姿を現した。

「「「「……」」」」

零治達は目の前に現れた大男の姿を見て絶句してしまう。

「あらあら～。どうかしたの～？」

「アンタ……この店の店員なのか……？」

零治は恐る恐るの声で男に問いかけると、男の口から予想だにしない名前が出てきた。

「いいえ～。あたしはこの店の店主をやってる貂蝉よ。よろしくねん♪」

貂蝉と名乗る大男は、そう言いながらシナを作って零治達に挨拶する。

その名を聞いた零治と瑠利亜は同時に驚きの声を上げる。

「「はあっ！？」」

「貂蝉っ！？」

「貴方がですか！？」

「そうよ。な～に？　あたしの名前がそんなに珍しいのかしらん？」

「いや、なんでもない。気にしないでくれ……。瑠利亜、ちょっと来いっ！」

「はい……」

零治は小声で瑠利亜に呼びかけ、貂蟬から距離を取り、声を潜めて話し合う。

「瑠利亜。これは流石にキツいだろっ！！」

「ええ……。今までの経緯からなら、貂蟬が男性になっていても不思議じゃありませんが……流石にこれはキツいですね……」

「おいっ！　今すぐ別の店に行くぞ！！」

「そんなぁ……。この店、品揃えは悪くないのに……」

「そう言う問題じゃねぇだろっ！　見ろ！　奈々瑠と臥々瑠、完全に怯えてるじゃないか！！」

零治の言う通り、二人は貂蟬に対して完全に怯えきっており、店の隅に移動して、まるで小動物のように縮こまっていた。

「あらあら。二人ともどうしたの？」

「「ひっ！！」」

「おいっ！　この筋肉達磨っ！！　その二人に近寄るんじゃねぇ！！」

零治は貂蝉に怒鳴りながら叢雲に手をかける。

「ちょっ！？　零治！　春蘭じゃないんですから、店内で抜こうとしないでくださいよっ！！」

「いや～ん。怖～い」

貂蝉は体をクネクネさせ、ワザとらしい反応をし、それを見た零治は更に逆上する。

「殺すっ！！」

このままでは本当に零治は貂蝉を殺してしまいかねない。そう判断した瑠利亜は素早く零治を背後から羽交い絞めにし、落ち着くように言い聞かせる。

「だから荒事はやめてくださいっ！！　とにかく一度落ち着いてくださいよっ！！」

「ぜぇ、ぜぇ……ぜぇ……」

零治は肩で激しく息をし、なんとか気持ちを落ち着け、踏みとどまる。

「零治。買い物に関してはここで済ませますよ」

「なんだとぉ!?」

「話は最後まで聞いてください。そのかわり出来るだけ手早く済ませます。奈々瑠達もあの有様ですからね……」

「……」

瑠利亜は零治にそう聞かせるが、零治はまだ納得のいかない顔である。

「それでも不安なら、私達が下着を選んでる間、貴方が彼に眼を光らせてればいいでしょう?」

「……別の店に……」

「却下です」

瑠利亜はピシャリと言い放つ。

「……分かった」

「話はまとまったかしらん？」

「ええ。では貂蝉。下着を幾つか拝見させてもらいますね」

「ええ、どうぞ。うちの店は品揃えには自信があるわよん♪」

「ふふっ。なら期待させてもらいましょうか。それと、試着室はどこですか？」

「ああ、それならこの先の奥に有るわよ」

貂蝉はそう言いながら店の奥を指差す。

「どうも。……ほら、二人とも行きますよ？」

「は、はい……」

「……」

瑠利亜について来るように促され、奈々瑠と臥々瑠は貂蝉の様子を窺いつつ、壁を背にして、そのまま張り付きながら横ばいに移動を始める。

「零治。意見が聞きたいときは呼びますから、貴方は試着室の手前で待機しててください」

「へ～い……」

「うふふ。ごゆっくり～」

（こんな奴と二人っきりなんて勘弁してくれ……）

零治は心の中でそう呟きながら、ウンザリした表情でガックリとうなだれる。

……

……

…

「奈々瑠。貴方にはこれが似合うと思いますが？」

「あっ、いいですね～。すごく可愛いです」

「臥々瑠は……これなんかどうです？」

「そんなヒラヒラしたのなんか穿きたくないよ～。……アタシはこれにする」

「ちょっ！？　それボクサーブリーフじゃないですか！？　なんでそんな物がこんな所に……」

（ボクサーブリーフ？　ここって中国だよなぁ……？）

零治は首を傾げる。そう、この時代、それも古代の中国にボクサーブリーフなんか存在していないはずなのだからそう思うのも無理はない。この場合、店主である貂蝉に話を聞けば早いのだろうが、零治は貂蝉に関わりたくないので話しかけようとはしなかった。

「アンタってホント女らしさの欠片も無いわねぇ……」

「別にいいじゃん。動きやすいし……」

「あっそ……。姉さんは、これなんかどうですか？」

「う～ん、デザインは悪くないんですが……ちょっと胸が……きついですね」

（羨ましいっ！！）

試着室からは女の子らしい会話が聞こえてくる。そしてそれは、試着室の手前で待機している零治の耳のも当然入ってくるのだが、当の本人は健全な男子らしい反応はせず、それどころか苛立ちを募らせ、足で床を一定のリズムで叩き始めていた。

（ったく！　早くしてくれよっ！！）

「あらあら。そんなにイライラしちゃダメよ。女の子の買い物は長いんだからん」

「おい、あまり近寄るな……」

貂蝉が苛立ってる零治をなだめながら近寄ってくるが、零治はそう言いながらスゥッと横にスライドして貂蝉から距離を取る。

「あらん。つれない人ねぇん」

（いちいちシナを作りながら答えるなっ！　キモいわっ！！）

「ねえ、ちょっと質問していいかしらん？」

「なんだよ……？」

「零治ちゃんと、あの銀髪のお嬢さんって恋人同士なの？」

「違う。って言うか、気安く人の名前を呼ぶな……」

「あん、堅い事を言わないの。じゃあ、今付き合ってる人は居るの？」

「はぁ……。いや、居ないが……なんでそんな事を訊く？」

「うふふ。気にしないで♪」

貂蝉はそう答えながら、零治に意味深な視線を向ける。

「おい……オレにそっちの気は無いからな。妙な真似したら、どうなるか分かってんだろうなぁ……？」

零治は貂蝉がどういう人種なのか即座に悟り、叢雲の鞘に手をかけ、殺気の籠もった視線で睨み付けながらそう言う。

「もう、短気な人ねぇん。そんなにカリカリしてたら女の子に嫌われちゃうわよん？」

（誰のせいだと思ってんだっ！！）

「零治～。ちょっとこっちに来てくれますか～？」

零治が怒りに耐えながらそう思っていた時、試着室から瑠利亜が呼びかける。

「連れが呼んでるから行かせてもらうぞ……」

「ええ、どうぞ。零治ちゃん、あの子達を傷つけるような事言っちゃダメよ？」

「うるせぇぞ。この筋肉達磨……」

零治はそう毒づいて試着室の方に移動する。

「おいっ！　まだ終わらねぇのかよっ！？」

「いきなりソレですか……？」

零治の態度に呆れながら言う瑠利亜。

「オレはもう一秒たりともアイツと同じ空間に居たくないんだよっ！　それに身の危険も感じてるんでな……」

「身の危険？」

「あの筋肉達磨は……ゲイだ……」

「まあ、それはさて置き」

「さて置くな……」

「まあまあ。それより貴方の出番ですよ。意見を聞かせてください」

「はいはい……」

「奈々瑠～。出てきて構いませんよ」

「は、はい……」

小さく返事をした奈々瑠が試着室から下着姿で、オドオドしながら出てくる。

「どうです？」

「……」

「に、似合ってますか……？　兄さん……」

淡い水色の下着を着けた奈々瑠が、はにかみながら零治に聞く。

「……」

「に……兄さん……？」

零治が無言なので、奈々瑠の表情に不安が浮かぶ。

「よく似合ってるじゃないか」

（……よかったぁ。似合ってないのかと思っちゃった）

零治の感想を聞き、奈々瑠の不安は一気に吹っ飛び、安堵の……い

や、キラキラと輝く恋する乙女の笑顔になった。

「じゃあ、私はこれにします！」

奈々瑠は満面の笑顔でそう言う。

「なら、奈々瑠はそれに決まりとして、次は臥々瑠なんですが……」

「どうせそのボクサーブリーフにするんだろ？」

零治は臥々瑠が手に持ってる下着を指差しながら言うと、臥々瑠も軽く頷き返事をする。

「うん」

「なら、オレの意見は必要ないだろ？」

「まあ、本人が良いって言うんなら別に構いませんが……。なら、後は私だけですね。しばしお待ちを」

瑠利亜は零治達にそう告げ、試着室に入る。

「二人とも、他には選ばなくていいのか？」

「大丈夫です。もう何着か決めてますから」

「アタシはこれ以外に要らないし」

「そうか」

「お待たせしました」

そこへ、きわどいデザインの黒色の下着姿の瑠利亜が試着室から出て来た。

「おおっ！　すご～い」

「お、大きい……」

言わなくても分かると思うが、奈々瑠が大きいと言ってるのは瑠利亜の胸の事である。

「……」

「フッ。どうですか、零治？」

瑠利亜はシナを作り、まるでモデルのようなポーズをとりながら自身の下着姿を見せびらかし、零治に聞く。

「はいはい。よく似合ってるぞー」

「おもいっきり棒読みじゃないですかっ！！」

瑠利亜は零治の態度に憤慨する。

「そう怒るなよ。似合ってるってのはホントだぞ」

「まあ、それなら構いませんが……」

（だったら、もうちょっとマシな言い方をしてくれてもいいじゃないですか……）

瑠利亜は心の中で、そう呟いた。仮にも彼女も女性なのだからそれは当然の反応といえる。

「それとよ、ずっと言いたかったんだが……」

「なんです？」

「男であるオレに、そうホイホイと下着姿を見せるのはどうよ……？」

「今更何を言ってるんですか？　私の下着姿なんか見慣れてるじゃ

ないですか」

「おいっ！　まるで普段からオレがお前の下着姿を見ているような言い方をするんじゃねぇ！！」

「ハハハ。冗談ですよ」

「ったく……」

「なら、私はこれにしましょう」

「じゃあ、全員決まったな？」

「ええ」

「はい」

「うん」

なら、さっさと会計を済ませるぞ」

一同は試着室を後にし、会計を済ませに行く。

「は～い、お会計確かに。ありがとうございま～す♪」

「貂蝉。なかなかの品揃えでしたよ。また来ますね」

（ゲッ！　マジかよ！？）

「うふふ。気に入ってもらえてうれしいわん♪　その時は零治ちゃんも一緒に来てねん♪」

「おや、いつから名前で呼び合う仲になったんです？」

「コイツが勝手に呼んでるだけだ……」

「ふむ。貂蝉、私の事は瑠利亜と呼んでくれて構いませんよ」

「あらん、ありがとねん。ならついでに、そっちの可愛らしいお嬢さん達も名前を教えてくれないかしら？」

「「……」」

二人は相変わらず貂蝉にビビりまくっていた。

「二人とも失礼ですよ。そんなに悪い人じゃないんですから」

（変態には違いないがな……）

零治は心の中で、そう毒づく。

「な、奈々瑠です……」

「が、臥々瑠……」

「奈々瑠ちゃんに臥々瑠ちゃんね？　素敵な名前じゃないの」

「ど、どうも……」

「あ、ありがと……」

二人は礼を言うものの、まだどこかぎこちない反応をする。

「おい。用は済んだんだから行くぞ」

「はいはい。では貂蟬、失礼しますね」

「ええ。また来てねん♪」

「兄さん。お腹空いた～」

「なら、どこかで飯にするか？」

「あっ、それならこの近くにいいお店がありますよ」

「じゃあ、そこで食事にしますか？」

零治達はそんな会話をしながら店を後にした。

「……」

貂蝉は黙ったまま店の出入り口を見つめる。

「ふふ。零治ちゃんか……。彼がこの外史の起点となった人物なのね。ホントはご主人様を捜しに外史に来たんだけど、どうやらこの外史ではなかったようね……。まあいいわ。せっかく来たんだから、この外史の行く末を見届けてあげましょうか……」

貂蝉は誰に言うのでもなく、一人意味深な事を口にする。と、その時、店の戸が開けられ、全身黒ずくめの服装をした一人の男が来店する。

「いらっしゃいま……って、あら？　これはまた随分と珍しいお客さんじゃないの……」

「……」

貂蝉の視線の先に無言で佇む人物、それは……零治の宿敵、黒狼であった。

第１０話　傾国の美女？　現る（後書き）

作者「休暇は楽しかったか？　この野郎……」

零治「とりあえず黙秘しとく」

瑠利亜「そんなに気に食わないんなら、貴方も休めばいいでしょうに」

作者「ここで休んでなんの意味が有るんだ？　どうせ休むんならリアルの方で休みたいね……」

臥々瑠「それは無理じゃないの？」

奈々瑠「そうですね。現実の世界は理不尽と不公平に満ち溢れてますから」

作者「そんな事言われなくても分かっとるわ……」

零治「おい。ここはお前の愚痴を読者に聞かせる場所じゃねぇんだぞ」

瑠利亜「そうですね。では次に進みましょうか」

奈々瑠「今回の話ですが、なんですかアレは……？」

作者「ん？　なんの事よ？」

臥々瑠「そうだよ！　なんであんな怪物を登場させたのさっ！！」

作者「怪物だとぉ！　貂蝉さんに失礼だろ！　今すぐ謝ってこい！！」

零治「落ち着けよ。まあ、なんで登場させたのかは気になるな」

瑠利亜「そうですね。原作では魏のルートに彼は居なかったでしょう？」

作者「何言ってんだ？　ちゃんと居たじゃないか」

零治「どこに？」

作者「原作で一刀が春蘭に下着屋を案内するイベントが有っただろ？」

奈々瑠「ああ、そう言えば有りましたね」

作者「で、最初に案内した店で春蘭がダメ出ししただろ」

臥々瑠「えっと、確か半裸の筋肉達磨の店員が踊りながら出て来たって言ってたんだっけ？」

作者「そう。オレの中では、その筋肉達磨は貂蝉に違いないって思ってたからな」

零治「そんなんでいいのか？」

作者「いいんだよっ！　当初から登場させる予定だったんだし。だいたい、貂蝉の居ない恋姫なんて恋姫じゃないっ！！」

瑠利亜「その理屈はどうかと思うんですが……」

作者「うっせぇ。後は、オレが考えてる独自設定のために登場させたんだし」

零治「独自設定？」

作者「まっ、その話は次の話の本編を読んでくれれば分かるさ」

奈々瑠「でも、今回の落ちで、だいたいの人は気付いてるんじゃ……」

作者「それは言わないでくれ……」

零治「今回はこのへんでやめとくか？」

臥々瑠「そうだね……」

瑠利亜「では、次回の後書きでお会いしましょう。それでは失礼いたします」

第１１話　監視者と傍観者の邂逅（前書き）

今回の話は今まで書いた中で一番短いです。
別に手を抜いた訳じゃないですよ。
ホントですよ……

第１１話　監視者と傍観者の邂逅

互いに何も言わずただ黙って視線を交わす黒狼と貂蝉。
それからしばらくして、黒狼が静かに口を開いた。

「久しぶりだな。貂蝉……」

「ええ、そうね。元気そうね、黒狼ちゃん」

「……」

黒狼は貂蝉の言い方が癇に障ったのか、殺気の籠もった視線を向け貂蝉を睨み付ける。

「なぁに？　そんな怖い顔なんかして、どうかしたのん？」

「その呼び方はやめろと過去に何度も言ったはずだぞ……」

「もう。相変わらずの堅物ちゃんねぇ。あたしと貴方の仲じゃないの」

「貴様とそんな親密な関係になった憶えは無い……」

「あらん。つれない人ねぇん。それで一体なんの御用かしら？　ひょっとして、貴方も下着を買いに来たのかしらん？」

「おい……。もう一度そんなふざけた事を抜かしたら、貴様といえど容赦はせんぞ……」

黒狼の表情はますます険しいものになり、ドスの利いた声で貂蝉にそう言う。

「もう。ホント冗談の通じない人ねぇ」

「……本題に入ってもいいか？」

「ええ、どうぞ。大方この外史について聞きたい事があってここに来たってところかしら？」

「そうだ。まず、この外史の起点となった人物は、あの男……北郷一刀なのか？」

「いいえ。この外史の起点はご主人様ではないわ。起点となったのは零治ちゃんよ」

「零治……？　ああ、影狼の事か……。だが、なぜ貴様が奴の名を知っている？」

「だって、ついさっきまでここに居たんですもの」

「フッ。なるほど。私が来たのが奴が帰った後でよかったな。もし奴と鉢合せしていたら、この店は間違いなく戦場になっていたぞ……」

黒狼は冷酷な笑みを浮かべながらそう言う。

「あらあら。零治ちゃんと貴方って、そんなに仲が悪いの？」

「クックック……悪いどころではないな。奴は私を心の底から殺したいと思ってるからな。まあ、そうするように私が仕向けたのだがな……」

貂蝉の問いに黒狼は視線を下に向け、口の端を吊り上げ、その笑みはますます冷酷さを増す。

「……」

貂蝉は黙ったまま黒狼の考えを読み取ろうとするようにその姿を見つめる。

その視線に気づいた黒狼は、貂蝉に視線を戻し、表情も普段と変わらない無感情なものに戻り、静かに問いかける。

「なんだ……？」

「いえ、なんでもないわ」

「話を続けても構わんか？」

「ええ、どうぞ」

「次の質問だが、前の外史には居なかったはずの劉備が、なぜこの外史には存在してるのだ？」

「あら？　貴方、劉備ちゃんに会ったの？」

「ああ。今は奴の下に身を置いている。あの女は私が天の御遣いだと思ってるようでな……」

「そう……」

「劉備の存在に北郷は関係しているのか？」

「あら。なぜそう思うの？」

「あの女はどこか北郷に似ている。考えが甘い所とか、お人好しな所がな……。それで、どうなんだ？」

「何が？」

「さっきの質問の答えだ」

「ああ、それについては分からないとしか言えないわね。貴方も知ってる通り、外史には未知な部分が多すぎるから……」

「そうか……」

「他に聞きたい事はあるのん？」

貂蝉に聞かれ黒狼は両腕を組み、しばらく宙を睨み付けながら考え、やがて口を開き、以前存在していた外史について質問をする。

「他には……そうだな……貴様がここに居るという事は、あの外史は左慈と于吉の望む形で終幕を迎えたのか？」

「ええ……。でも、あの外史はきっと今もどこかに存在してるはずよ。『新たに生まれた外史』としてね……」

「そんな事はどうでもいい。私が知りたいのは左慈と于吉の事だ……。奴らもこっちに来ているのか？」

「あの子達なら当分こっちには手が出せないわよ。ただし、あの子達以上の力を持っている者なら干渉ぐらいはしてくるかもしれないわねぇ……」

「フッ……。例えば……卑弥呼とかか？」

「あら。卑弥呼に会ったの？」

「いいや……。会ったとしても話をするつもりは無いし、会いに行くつもりも無い。貴様同様に鬱陶しい男だからな……」

「んまぁ！　こんな絶世の美女に向かって失礼な人ねぇ！！」

貂蝉は黒狼の発言に対しプリプリと、まるで女の子のような怒り方をする。

その反応を見た黒狼は、唾棄するべき物でも見るかのように表情を歪める。

「そういう反応が鬱陶しいのだよ……」

「貴方は思った事を口にしすぎなのよ。ホント失礼な人ね」

「本題に戻るぞ。では、左慈と于吉はこちらには来ていないのだな？」

「ええ。間違いないわよ。……なぁに？　あの子達が居たら都合が悪いのかしらん？」

「私が否定派の連中に眼を付けられてる事は貴様も知ってるだろ……」

「そうだったわね。貴方は外史の存在を否定も肯定もしない中立の傍観者だったものねぇ……」

「ああ。前の外史でも、否定派の老いぼれどもと左慈が何かとうるさかったのでな……。まあ、袂（たもと）を分かつにはいい機会ではあったがな……」

「だから、あの外史で途中から姿を見なくなったのね……」

「フッ。まさか、また戻ってくる事になるとは思わなかったがな……。まあ、この外史にうるさい連中が居ないのなら、こちらとしては助かる。奴らの顔を見るのは正直ウンザリしていたのでな……」

「でも、彼らと顔を会わせたくないから、左慈ちゃん達の事を聞いた訳じゃないんでしょう？　本当の理由はなんなの？」

「貴様……分かってて訊いてるのか？」

「さあ？　どうかしら？」

貂蝉は黒狼の問いシレッとした態度で返答するので、仕方なく黒狼は本音を貂蝉に聞かせる事にする。

「あくまでも私の口から言わせたいのか……。まあ、いいだろ。……そうだ。本当の理由はそこではない……」

「……」

「私達の殺し合いの舞台がこの外史に移ったのだ。その舞台を連中に破壊されては困るのでな……。だから否定派の連中は、今の私にとっては邪魔な存在でしかないのだよ……」

「黒狼ちゃん……。貴方、やっぱりまだ諦めてないのね……」

「貂蝉……。そんな哀れむような眼で私を見るのはやめてもらおうか……」

「黒狼ちゃん。貴方だって分かってるはずでしょう？　私達『監視者』は、人として終わりを迎える事なんて出来やしないのよ……」

「実際に試してもいないのに、なぜそう断言できるのだ？　まあ、

確かに自害する事は出来んがな……。まったく……良く出来たプログラムだな」

「……」

貂蝉は何も言わずに、ただ静かに黒狼の言葉に耳を傾け続ける。

「貂蝉、貴様には分からないのか？　永遠にも等しい時間を生きる目的も無く、ただ同じ事を繰り返しながら無為に過ごす。これ程の苦痛は他には存在しまい……」

「貴方の言ってる事も分からない訳ではないわ。でも、外史の中で生きる目的を見つける事だって……」

貂蝉は黒狼にそう言い聞かせようとするが、鼻を軽く鳴らしてそれを遮り、言い返す。

「フンっ。いつ消えるかも分からない、存在概念があやふやな外史でそんな事をして何の意味があるのだ……？　それが出来ないから、私は今の道を選んだのだ。そして私はようやく希望を見つける事が出来たのだからな……」

「それが、彼……零治ちゃんなの？」

「ああ。奴の存在が今の私にとっての希望であり、生きる目的だ。奴なら私の望みを必ず叶えてくれる。そのために私は奴に叢雲を与

えたのだからな……」

「そう……。貴方がそこまで言うのなら、あたしはこれ以上何も言わないわ。貴方は自分の思うように行動なさい」

「貴様なんぞに言われずともそうするさ……。ところで貂蝉。この外史、時期的には次は……」

「ええ。そろそろ『黄巾の乱』が起こると思うわよ」

「そうか……。なら、次に奴と顔を合わせるのは『反董卓連合』あたりか……」

「ちょっと、黒狼ちゃん。まさか、その時にひと悶着やらかすつもりじゃないでしょうねぇ？」

「そこまで私は愚かではないぞ……。本格的に動くのは『群雄割拠』に入ってからだ。それまでは、この外史の茶番に付き合いながら大人しくしているさ……」

「そう……」

「……長居しすぎたな。そろそろ失礼させてもらう……」

「あらん。もうちょっとゆっくりしていけばいいじゃないのん。お茶くらいは出すわよん？」

「劉備達に無断で外に出てきてるのだぞ。あまり時間をかけると関羽の奴がうるさいんでな……」

かつて別の外史で共に過ごした仲間の名を聞き、貂蝉は懐かしむように笑みをこぼす。

「ふふ。愛紗ちゃんは相変わらずのようね。そういえば貴方、愛紗ちゃん達から真名は預けられなかったのん？」

「一応預かりはしたが呼ぶつもりは無い……。所詮は一時（いっとき）の仲だからな……馴れ合うつもりはない……」

「あらあら。それはあまりにもつれなすぎるんじゃないの？」

「なんとでも言うがいい。ではな、貂蝉……」

黒狼はそう言いながら、クルリと貂蝉に背を向ける。貂蝉は黒狼が立ち去ろうとする前に、その背中に声をかけ、黒狼を呼び止める。

「黒狼ちゃん。気が向いたら、またいらっしゃい。話ぐらいは聞いてあげるわよん」

「貴様の暑苦しい顔をわざわざもう一度見に来る気など毛頭無い……」

「あらやだ。漢女に向かって失礼な人ねぇ」

「さらばだ、貂蝉……。もう二度と会う事も無いだろう……」

黒狼は貂蝉にそう告げ、音も無くその場から姿を消した。

「黒狼ちゃん、本当に可哀相な人……。その純粋な想いをもっと違う事に向けることが出来たら、貴方は今とは違う生き方を見つける事が出来たかもしれないのでしょうに……」

一人取り残された貂蝉は誰に言うのでもなく、一人そんな事を呟いた。

第１１話　監視者と傍観者の邂逅（後書き）

零治「ようやく投稿したか。このダメ作者」

作者「いきなり酷い言い草じゃないか」

臥々瑠「だって、確かこの話、４日ぐらい前に完成したんじゃなかったっけ？」

奈々瑠「そうそう」

瑠利亜「それをようやく投稿したんですからねぇ……。ダメ作者と言われても仕方ないのでは？」

作者「いや……それには理由が……」

零治「今度はなんだよ？」

作者「その……サブタイトルが中々思いつかなかったから……」

零治「はぁ……」

作者「ホント、サーセン……」

瑠利亜「……次に行きますかね。今回の話、随分短いですね？」

奈々瑠「ひょっとして、手を抜いたんですか？」

作者「違うわ！　登場人物が二人しか居ないんだから、短くなるの

は仕方ないだろうがぁ！！」

瑠利亜「それに戦闘シーンもない会話劇ですしね」

臥々瑠「ねえ、この怪物ってこの先も登場するの？」

作者「だから怪物と言うんじゃないっ！！」

零治「それは分かったから、質問に答えろよ」

作者「まったく……。貂蟬はこの先も登場させる予定だ」

零治「あっそ……」

作者「ちなみにその時は、お前にいろいろ頑張ってもらうからな」

零治「マジで……？」

作者「おう。楽しみにしとけ」

零治「最悪だ……」

第１２話　家臣の務め（前書き）

今回も拠点パートです。
しかし、相変わらず文章が長いのは仕様という事で。

第１２話　家臣の務め

「あ～……やっと終わった……」

本日の仕事を終え、自室の戻って来た零治はしんどそうにそう言いながら、フラフラと部屋に設けられてるベッドに歩み寄り、そのままうつ伏せに倒れこむ。

「ったく……今日は昼までの勤務とは言え、街の見回り、書類仕事、隊員のシフト作成……やる事が多すぎる。早く優秀な人が来てくれねぇかな～。……もう今日はこのまま寝て過ごすか。正直疲れて何もする気がせん……」

零治はそう言いながら眼を閉る。

「……」

零治が眠りに入りかけたとき、二人分の足音が零治の部屋に近づいてくる。

（……嫌な予感しかしないな。そのまま素通りしてくれよ）

零治はそう願うも、無情にもそれは叶わなかったようで、自室の扉がノックもされずにバンッと勢いよく開かれる。

「音無！　居るかぁ！」

「失礼するぞ。音無」

「……」

零治はうつ伏せに寝転がったまま首だけ動かし、自室に来た春蘭と秋蘭に恨めし気な視線を向ける。
零治と眼があった春蘭は怪訝な表情になり、零治に話しかける。

「ん？　貴様、一体何をしてるのだ？」

「見りゃ分かるだろ。寝ようとしてたんだが……」

春蘭の問いに、零治は寝転がったまま気怠そうに答える。
零治の答えに春蘭だけでなく、秋蘭も怪訝な表情になり、零治に聞く。

「寝る？　こんな昼間からか？」

「仕事で疲れて何もする気がしねぇんだよ……。で、なんか用か？　急ぎじゃないんなら今度にしてくれないか……？」

零治はこう言ってはいるが、内心では諦めている。この二人がわざわざ部屋まで来たという事は、余程の急用だという事になる。つまり、今から休むのは無理だという事だ。
そして、その予感は見事に的中する。

「急ぎに決まってるだろ！」

「うむ、音無にも協力してほしいのだ。疲れているところをすまんが、街まで付き合ってはくれぬだろうか？」

「しょうがねぇなぁ。一つ貸しだからな」

「くっ！　いいだろう。なら街まで行くぞ。さっさと起きろ！」

「分かったから、そう怒鳴るなよ……」

零治はそう言いながら、ノロノロとベッドから起き上がる。

「で、街まで何をしに行くんだ？」

「それは店に着いてから説明しよう。今は少しでも時間が惜しいからな」

「はいよ」

そうして一同は街に足を進める。

……

……

…

「で？　なんで服屋に来るんだ？」

「華琳様の服を買うために決まってるだろっ！」

「普段は私と姉者で買いに行くのだが、それではあまり変わり映えがしないからな。だから、たまには男の視点からの意見が聞きたくてな」

「なるほど……って、ん……？」

そこで零治はふと疑問に思う。

「なあ。秋蘭の言ってる事も分からない訳じゃないんだが、華琳の服を選ぶんなら、オレじゃなく本人を連れてきた方が手っ取り早いんじゃないか？」

「それでは意味がないだろう！」

「なんで？」

「華琳様はお忙しい身だからな。買い物に出る暇も、それほど取れる訳ではないんだ」

「だから我々が華琳様の代わりとなって、華琳様により似合う服が無いかどうか探し回っているのだ！」

「で、華琳が買い物に出た時にそういう服を勧めると」

「その通りだ。さりげなく、だがな」

「華琳ってそういう気遣いをされるのは好きじゃなさそうだからなぁ」

「聡い華琳様の事だ。勘付いてはいるだろうがな、未だ気付かぬ振りをしてくださる」

「華琳の家臣の務めってのも大変なんだなぁ……」

零治は苦笑しながら言うが、それとは対照的に秋蘭はイタズラっぽい笑みを浮かべながら答える。

「ふふっ。こちらも華琳様のためならばこそ。愉しくこそあれ、苦になどならんよ」

「う～む……よし、店主。この服を一着貰うとしよう」

「まいどありがとうございます」

零治と秋蘭がそんなやり取りをしてる中、いつの間にか春蘭が華琳用の服を一着選び購入する。
それを見た零治は怪訝な表情で間の抜けた声を出す。

「はっ？」

「どうした、間抜けな声を出して？」

「いや……なんで買うんだよ？　下見するだけって、さっき言ってたじゃないか」

「こんな店頭で見ただけで、本当に華琳様に似合うかどうか分かるものか。ならば、実際に試してみるしかあるまい」

「……すまん。春蘭の言ってる事がさっぱり理解できん」

「なにぃ！　私がこれだけ分かりやすく説明してやってるというのに、理解できんだとぉ！！」

「……秋蘭。説明してくれ」

埒があかないと判断した零治は秋蘭に話を振る。

「おい！　なんで私に聞かないんだ！」

春蘭は声を張り上げて抗議してくるが零治はこれを無視。華琳に関する事で春蘭に話を訊いていたら日が暮れてしまいかねない。

「……その服はだな。華琳様の身代わり用なのだ」

「身代わり？　華琳の影武者とか居たっけ？」

「バカか貴様は！　華琳様に代われる者など居るはずがなかろう！」

「姉者は黙っていてくれ。話がややこしくなる」

「……しゅうらぁん」

秋蘭の何気にキツイ一言に春蘭はしょぼくれてしまう。

「……お前ってたまに酷くないか、秋蘭？」

「身代わりと言っても、人形だがな」

（おい、しかもスルーしたよ。コイツ……）

「華琳様そっくりに作った等身大の人形に、候補に挙がった服を着せてみて、本当に似合うかどうかさらに確かめているのだ」

「なるほど。ならこの服は、その着せ替え華琳様用の服って事か」

「ふん。ようやく理解したか」

（人形遊びの歴史が古い事は知っていたが、この時代から着せ替えドールの歴史って始まってたのか……？）

「……ん？　なあ、一つ聞きたいんだが？」

「なんだ。人形とはいえ華琳様のお姿ゆえ、いかに音無といえど、着せ替えの現場には立ち会わせられんぞ？」

「いや、それは別にいいんだが。その着せ替え人形、誰が作ったんだ？」

「私だ！」

零治の疑問に春蘭が胸を張って自慢げに答える。

「春蘭がぁ！？」

「何をそんなに驚いてる？　私が人形を作るのがそんなに不思議か？」

（いや、不思議もなにも、あの春蘭だぞっ！　正直信じられん……）

零治はそう思いながら秋蘭に視線を向ける。

「私が言うのもなんだが、正直すごいぞ」

「マジかよ……」

「さて、どうする姉者。この店で他にも何着か買うか？」

「う～む……この店には、もうめぼしい物は無いなぁ」

「なら他の店に行くか」

「それも構わんが、最近は市井（しせい）の服の質も落ちてきてるからなぁ……」

「……確かに」

（なんだよ。じゃあオレが一緒に来た意味なんか無いじゃないか）

「音無。何か妙案は無いか？」

「妙案？」

「そうだ。こういうときこそ、天の国の人間である貴様の出番だろ？」

「う～ん……ようするに、二人は華琳に似合う、今までに無い新しい意匠の服が欲しいんだよな？」

二人は零治の問に無言でうなずく。

「なら、方法が無いわけでもない」

「ほう。どんな案なんだ？」

「オレの世界の女物の服を、紙か何かに図案として描いて、職人達に作らせればいい」

「なるほど。それは名案だな」

零治の案に秋蘭は満足げに頷き、春蘭は眼の色を変え、興奮気味に零治に詰め寄って、すぐに実行に移すように頼み込んでくる。

「なら今すぐにやってくれ！」

「それには、まず瑠利亜を捜す必要がある」

「瑠利亜を？」

「ああ。こういう事はアイツの方が適任だ」

「そうか。居場所は分かるのか？」

「今日はオレと入れ替わりで勤務だから、今頃は街の見回りをしてるはずだ」

「なら今すぐ捜しに行くぞ！」

「オレ一人で大丈夫だから、二人はここで待っててくれ。居場所についてもだいたいの見当はついてるからな」

「むぅ……」

「姉者。ここは音無に任せて、我々はここで大人しく待っていようではないか」

「……分かった。音無、すぐに戻って来るんだぞっ！」

「はいはい」

零治はそう返事をして、店を後にする。

「さて、確かこの時間は、この辺りの区画を見回るって言ってたからな。とりあえず店の周辺を捜してみるか」

「……零治？」

零治が店の前で一人ブツブツとどこから捜すか口にしていた時、そこへ数人の警備兵を率いた瑠利亜が現れる。

「おおっ。捜す手間が省けたぜ」

「ん？　なんの話です？」

「実はな……」

零治は瑠利亜に事のいきさつを説明する。

「……という訳だ」

「なるほど」

「協力してくれないか？」

「まっ、いいでしょう。そのかわり一つ貸しですからね？」

「分かってる……」

「貴方達。すみませんが後は任せても構いませんか？」

「はっ。お任せください」

姿勢を正し、そう返事をした警備兵達はその場を後にする。

「では私達も行きましょうか」

「ああ」

零治達は再び春蘭達の居る店に足を運ぶ。

「戻ったぞ」

もっと時間がかかると思っていたのだろうか、秋蘭は意外そうな顔をしながら零治に聞く。

「ん？　随分と早いな」

「すぐそこで出くわしたからな」

「事情は零治からすでに聞いてますよ。私達の世界の女物の服が欲しいんですよね？」

「うむ。話が早くて助かる」

「で、服は何着ぐらい必要なんですか？」

「最低でも二、三十着は欲しいところだな」

春蘭の口から聞かされた予想以上の数に、瑠利亜は表情を引きつらせてしまう。

「よ、予想以上の数ですね……。まあ、なんとかしましょう」

これなら街の見回りをしていた方がまだマシだと内心思ってしまうが、それを口にするわけにもいかなかった。その心中を察したように秋蘭が瑠利亜に詫びの言葉をかける。

「すまんな」

「いえいえ、お気になさらず。でもそのかわり、この件は貸しにしておきますので、お忘れなく」

零治だけでなく瑠利亜にまで貸しにされてしまったので春蘭は口をへの字にする。
しかし、頼み事をしてるのは自分達なのだから、強く言えないのもまた事実。

「むう……。いいだろ。そのかわり、ちゃんといい服を用意しろよ」

「ええ。期待は裏切りませんよ」

「じゃ、後は任せた」

零治はそう言いながら店を立ち去ろうとするが、すぐに瑠利亜に止められる。

「どこに行くつもりですか？　零治、貴方にも手伝ってもらいますからね」

「な、なんでオレが……」

「貴方もそれなりに女物の服に詳しいじゃないですか」

「ん、そうなのか？」

「ええ。なにせ彼は……」

「だあああああああっ！！」

瑠利亜が秋蘭に何か言いかけたとき、零治は叫び声をあげながら彼女に素早く近づき耳打ちをする。

「おいっ！　その事は絶対に誰にも言うなって言っただろっ！！」

「私はまだ何も言ってませんよ。まあ貴方の態度次第では、うっかり口を滑らせちゃうかもしれませんがね……」

意味深な笑みを浮かべならそう言う瑠利亜。零治としては、後は瑠利亜にすべてを任せ、自分は今すぐ自室に戻って休みたいのが本音だったが、それをやれば間違いなく瑠利亜は春蘭と秋蘭の二人に自分の秘密をばらすだろう。

それだけは絶対に避けたいと判断した零治は力なく答える。

「……分かったよ。手伝えばいいんだろ」

「よろしい。……ああ、二人は城に戻ってもらっても構いませんよ。後は私と零治でやっておきますから。服は出来上がったら、城に届けてもらうように手配しておきますので」

「むっ、そうか。では姉者、私達はお言葉に甘えて先に帰るか」

「……」

春蘭は秋蘭の言葉に耳を貸さず、黙ったまま零治をジーっと見つめる。

「ん？　なんだよ？」

「音無……。お前、一体何を隠してるのだ？」

「べ、別に何も隠してなんかいないぞ……」

「嘘つけ。お前があんなに慌てる姿なんか初めて見たぞ。さあ正直に言え。何を隠してるのだ？」

春蘭はまるで尋問でもするかのように零治に詰め寄り、零治の隠し事を聞き出そうとするが、秋蘭が口を挟んできた。

「姉者」

「ん？　なんだ秋蘭？」

「姉者。音無にだって人に知られたくない事の一つや二つはあるだろ。無理に聞き出そうとするのは感心しないぞ」

「しかし、秋蘭だって気になるだろう？」

「確かに気にはなるが、だからと言って、根掘り葉掘り聞き出そうとするほど私は野暮ではないぞ」

「むぅ……」

「悪かったな、音無。姉者の事は気にしないでくれ」

「いや、こっちこそ助かった」

「ふふ。そう思ってるのなら、私にだけこっそりと秘密を教えてくれないか？」

イタズラっぽい笑みを浮かべながら、ちゃっかり秋蘭も零治の秘密を聞き出そうとする。

「それは……勘弁してくれ……」

「ふっ。安心しろ、冗談だ。まあ、教える気になったら教えてくれればいいさ」

「ああ……」

（それは一生無いと思うがな……）

零治は心の中でそう付け加える。

「ほら姉者。行くぞ？」

「うわっ！？　お、おい秋蘭。分かったから、そんなに腕を引っ張るなってっ！」

秋蘭は春蘭の腕を無理やり引っ張りながら店を後にする。

「ふぅ……」

二人が店を立ち去ったのを確認した零治は安堵の溜め息を吐く。

先程のやり取りが可笑しかったのか、瑠利亜はにやけながら零治に意味深な視線を向ける。

「……」

「ん？　なに人の顔を見てニヤニヤ笑ってんだよ……」

「いえ、別に」

「ムカつく奴だ。さっさと終わらせるぞ」

「はいはい。店主殿、筆と硯と紙はありますか？」

「はい。有りますよ。え～と、紙は何枚ほど？」

「三十枚欲しいのですが」

「さ、三十枚……ですか……」

店主の顔が引きつる。この世界では紙は高級品なのだから当然の反応といえるだろう。

（まっ、当然の反応だわな）

「大丈夫です。後悔はさせませんよ。もし納得がいかない場合は、私が新しい紙を用意してお返しいたしますので」

「分かりました。少々お待ちを」

店主はそう言って店の奥に移動する。

「零治。ここはお互いに半分ずつ図案を書きましょうか」

「ああ。それで構わん」

「お待たせいたしました」

そこへ道具一式を持った店主が戻ってくる。

「ああ、どうも。では始めますか」

「ああ」

「店主殿、ここの会計場の台をちょっとの間使わせてくださいね」

「ええ。どうぞ」

店主から許可を得て、二人は長方形の台の上に道具を並べ、作業に取り掛かる。

「さて、どんな服が良いですかねぇ？」

瑠利亜は顎に手を当て、宙を睨みながらどこか楽しげに思案するが、それとは対照的に零治はメンドくさそうな表情で頬杖をつき、右手で筆をクルクルと回しながら瑠利亜に返事をする。

「ん～？　まあ、無難にワンピースとかで良いんじゃないか？」

「そうですね。後は書きながら考えますかね」

そう言いながらも二人は手を動かし、凄まじい速度で図案を書き上げていく。
それから二時間ぐらい経過して……

「零治、そっちはどんな感じですか？　私はあと五枚なんですが」

「こっちもあと五枚なんだが……流石にネタが尽きてきたなぁ……」

「そうですねぇ……。この際ですから趣味に走りますかな」

「趣味？」

「ええ。少しお待ちを」

瑠利亜はそう言いながら、サラサラと筆を動かし、一枚の図案を書き上げる。

「これなんかどうでしょうか？」

「ん～？　……ぶっ！」

零治は瑠利亜が書き上げた図案を見て、思わず吹き出す。

「お前……それメイド服じゃないか……」

「ダメですか？　華琳なら似合うと思いますが」

「そっちがそう来るんなら、オレは……」

零治もサラサラと筆を動かし、図案を書き上げ瑠利亜に見せる。

「これでどうだ？」

「どれどれ。……ほお～、ゴシックドレスですか」

「ああ。華琳なら絶対似合うだろ」

「でしょうね。では、この勢いで一気に終わらせますよ」

「ああ」

そう言いながら二人は再び作業を再開する。そして……

「お、終わった……」

「いや～……流石に疲れましたねぇ……」

二人は疲労困憊の様子で机代わりに使っていた台の上に突っ伏する。

「こ、これは!?　凄い！　どれもこれも非常に凝った意匠ばかりだ!!」

店主は二人が書き上げた図案を手に取り、驚愕の表情を浮かべながらそう言う。

「どうだ？　その図案の服、作れそうか？」

「ええ、もちろんです！　うちの店の針子を総動員して、必ず作り上げてみせましょう!!」

「そうですか。それで代金の方は……」

「いえ、お代は結構です」

「はっ？　結構って、何言ってんだよ。三十着分もあるんだぞ。それに貴重な紙を三十枚も使っちまったし、流石にそういう訳には……」

「いえ、ホントにいいんです。こんな素晴らしい意匠を考えてくださった方からお代を頂くなんてとんでもない。久しぶりに職人魂に火が点きましたからねぇ。そのお礼も兼ねて、この図案の服は無料で提供させてください」

「ホントにいいんですか？」

「はい。そのかわりに、これからこの服でバッチリと稼がせてもらいますので」

「そうですか。なら、お言葉に甘えさせてもらいましょうか」

「はい。それで、出来上がった服の方は……」

「ああ、服は出来上がったら城まで届けてくれるか？」

「かしこまりました。では、受取人はどなた様で？」

「受取人は、夏侯惇、夏侯淵で頼む」

「夏侯惇様、夏侯淵様ですね。かしこまりました」

「では、用は済みましたし、私達も行きますか？」

「ああ。それじゃあ服の方、よろしく頼むぞ」

「お任せください。本日はありがとうございました」

店主は零治達にぺこりとお辞儀をし、二人は店を後にした。

「零治。貸しの件、忘れないでくださいよ？」

「なんだよ？　今返せってのか？」

「別に今すぐじゃなくて構いませんよ。それに関してはおいおい考

えておきますから」

「へいへい……」

のちにこの貸しの件で、零治はとんでもない事をやらされるハメになる事を、本人はまだ知る由もなかった。

……

……

…

それから三日後の昼下がり。

「フーー……。ん？　あそこに居るのは……」

中庭に有る東屋でタバコを吸ってる零治の視線が一人の人物に止まる。

それは大荷物を抱え、無言で辺りを警戒するようにきょろきょろと見回す春蘭であった。

「……」

「春蘭？　しかしやけに挙動不審だなぁ。おまけにあんな大量の荷物を抱えて。……気になるし、後をつけてみるか」

そう言って零治は春蘭の追跡を開始する。

「……」

「……」

春蘭は周りに細心の注意を払いながら吹き抜けの廊下をコソコソと歩き、零治はその数メートル後ろから春蘭に気付かれないようにそっと後をつけている。

（フッ。昔を思い出すな……）

「……」

（おっと、危ない危ない）

春蘭が辺りをきょろきょろと見回したので、零治は素早く廊下の柱に身を隠す。誰も居ないことを確認した春蘭はそのまま自分の部屋に入っていく。

「ん？　なんだよ。自分の部屋じゃないか。自分の部屋に戻るのに、なんであそこまでコソコソとする必要が……」

と、そのとき、春蘭の部屋の扉が軽く開く。ちゃんと閉めてないどころか鍵すらかけていなかったようだ。

（って鍵かけてねぇのかよ！）

零治がそう思っていた時、扉の隙間から話し声が漏れてくる。

「……お、おい、これは」

「……いや、まさか、こんなに……」

（ん？　春蘭とは別の声……この声は秋蘭か？）

「……あぁ、これは、たまらん……」

「やりすぎだぞ、姉者ぁ……」

艶のある声で会話をする春蘭と秋蘭。流石の零治もこれだけでは中で何をしているのか判断出来なかった。

（一体何をやってんだよ。あの二人は……）

「うむ。さすがにこれは禁じ手という事で……」

（ダメだ。危険だと分かっていても、やはり気になる……）

零治は好奇心に駆りたてられ、開いてる扉の隙間か、部屋の中を覗き込む。部屋の中には春蘭、秋蘭、そして華琳の姿が確認できた。

（ん？　華琳も居たのか……？　しかし声は全く聞こえなかったような……）

「っ！　何やつ！」

「ヤバッ！」

春蘭に気配を気取られ、零治はその場から離れようとしたが、一瞬早く部屋から飛び出してきた秋蘭に背後から組み敷かれ、首筋に短刀を突き付けられる。

「大人しくしてもらおうか」

「おのれ！　我々の秘密を見た者……は……」

「……なんだ、音無ではないか」

「ああ……。誤解が解けたんなら、その物騒なモノを引っ込めてくれないか……？」

「む……すまん」

秋蘭は零治を解放して、持っている短刀を鞘にしまう。

「悪かったな。こんな所で立ち話もなんだ。入れ」

「ん？　秘密とやらはいいのか？」

「音無なら構わんよ。な、姉者」

「何……？　こやつとて……！」

「いや、前に話しただろう。姉者の居るところで」

「……そうだったか？」

「……」

「……」

春蘭の反応を見る限り当の本人は本当に覚えていない様子だ。零治と秋蘭はどう反応していいか分からず、互いに顔を見合わせて口を紡いでしまう。

「まあ……いい。とりあえず、入れ」

秋蘭に促され、零治は二人の部屋にお邪魔する。

「そういえば華琳も居たんだな……。って事は、オレはホントにお邪魔だったんじゃないか？」

「……」

零治は目の前に居る華琳に話しかけるが、華琳は何も言わずに零治を凝視している。

（なんか黙ったままガン見されてるんだが……。怒ってる……ようじゃなさそうだが）

「音無。前に話した件、憶えているか？」

「ん？　二人が華琳の寵愛を受けてるって話か？　アレなら、別に秘密でもなんでも……」

「それは誇りこそすれ、秘密にする事ではあるまい」

と、春蘭が答える。

「だよなぁ」

「それではなくて、華琳様の人形を作って、衣装の研究をしている

話だ」

「ああ、等身大着せ替え華琳様の事か。アレがどうし……ん……？」

零治はふと気が付き、傍らに立ってる華琳に視線を向ける。

「……」

相変わらず目の前に居る華琳は表情一つ変えずに沈黙を保っている。

「……まさか」

「それが、華琳様人形だ」

「えええええええっ！？」

零治は驚きの声を上げ、目の前に居る華琳に手をブンブン振ったり、指を弾いて音を鳴らしたりしてみせるが何の反応も返ってこなかった。

「……だから言っただろう。凄いぞ、と」

「凄いどころじゃないだろ、コレ。肌の感じも本物そっくりだし……動くのか？」

「当然だ。おっと、人形とはいえ、華琳様に触れる事はまかりならんぞ？」

（ここまで雰囲気がそっくりだと、逆に触るのが怖いわ……）

零治は目の前に有る華琳とうり二つの人形を見ながら疑問を口にする。

「……しかし、どうやって作ったんだ？」

「……普通に木を彫っただけだが？」

「いやいやいや！」

春蘭は真顔で当たり前のように零治の疑問に答えるが、目の前に有る人形はどう見ても木彫りだけで作ったとは思えない。
髪、肌の質感、その他諸々、どれも本物と全く変わらないのだから。
何より一番の疑問は……

（木彫りでここまで作れるのか！？　フィギュア業界に革命をもたらす事も出来るぞ！　ってか、塗装とかどうしたんだよ！？）

「ふふん。どうだ、良く出来てるだろう。我ながらの自信作だ」

「なら、さっきここまでコソコソ帰ってきたのは、人形絡みか？」

「うむ。この前行った服屋から新しく作らせた服が届いたのでな、それをこっそりと……なんだと!?　貴様、どこから気付いていたというのだ!」

「どこって、庭の辺りから……」

「バカな……細心の注意を払って帰ってきたというのに……。貴様なんぞに気付かれるとは……!」

「姉者、いつも言ってるだろう。堂々と帰ってきた方が、気付かれにくいぞ」

「同感だな。普通にしてれば気にしなかっただろうな」

「むぅぅ……。この夏侯元譲、一生の不覚……!」

「なあ。その服は、この前にオレと瑠利亜の案で作らせたやつか?」

「うむ。そうだ」

「ホントに作れたのかよ。大したものだな」

「ふふん。我が国の職人の腕を甘く見るなよ?」

まるで自分の事のように、春蘭は誇らしげに胸を張りながら言う。

「で、もう着せてみたのか?」

「う、うむ。着せては……みたんだが」

「そうか。ちなみに何を？」

「え～と……コレと、コレなんだが……」

そう言いながら春蘭が二着の服を手に取って見せる。

「ん？　おお、それは瑠利亜が考えたメイド服に、オレが考えたゴシックドレスだな。どうだ？　似合ってたか？」

「そ、それは……だな」

「いや、何というか……だな」

なぜか春蘭と秋蘭は頬を赤らめながら言いよどむ。

「似合わなかったのか？　華琳ならその二着を着た姿は可愛いと思うんだが……」

「うむ。確かに可愛らしかった」

「だが、あれはまずい。まずすぎる」

「まったくだ」

「なんだよ？　何が問題なんだ？」

「あれは可愛らしすぎて、我々の仕事が手に付かん」

「……あー。そういうオチか」

春蘭のその一言に、零治納得したように声を出す。

「案を出してもらった音無と瑠利亜には悪いが、あの二つの服は禁じ手という事にさせてもらった」

「そりゃまあ、いいが……。もう着せないのか？」

やはり案を出した本人としては一度は見てみたいのだろうが、春蘭が恨めし気な視線を向けながら言う。

「我々を殺す気か……？」

「いや、オレも一度見たいんだが」

「すまんが、あのお姿の華琳様をお主に見せる訳にはいかん。それに、着付けさせる我々の身にもなってみてくれ……」

「……そうか。悪かった。じゃあ、オレはそろそろ失礼するぜ。午後から仕事なんでな」

「そうか。長々と引き止めて悪かったな」

「気にすんな。それじゃあな」

「ああ」

零治はそう言いながら二人の部屋を後にした。

「やれやれ。瑠利亜に無駄な借りまで作ったのに……。あの時の苦労は一体なんだったんだよ」

零治は廊下を歩きながらため息交じりにそう呟いた。

第12話　家臣の務め（後書き）

零治「さて、お前に一つ聞きたい事がある……」

作者「なんだよ？」

零治「今回の話に、なんか意味深な言い回しがあっただろ」

奈々瑠「ああ、姉さんに作った貸しの件でとんでもない事をやらされるハメになる、とかってやつの事ですか？」

臥々瑠「確かに意味深だねぇ……」

瑠利亜「もしかして……フラグってやつですか？」

作者「死亡フラグじゃないから安心しろ」

零治「とにかく、どういう事か教えろよ！」

作者「聞きたいのか？」

零治「お……おう」

作者「あまり大っぴらに言うとネタバレになるから、詳しくは言えないが、簡単に言うと貂蝉が深く関わる、とだけ言っとく」

零治「マジ？」

作者「ああ」

零治「聞くんじゃなかった……」

第１３話　予言と忠告（前書き）

ようやく話が黄巾の乱に突入……っと言っても正確にはまだなんですが。
しかし、こんなちんたらしたペースじゃ群雄割拠の話はいつ頃になるのか……

第13話　予言と忠告

「フーー……」

「みんな遅いねぇ……」

臥々瑠が両手を頭の後ろに組み退屈そうにしながら言う。しかし、この世界には時計など存在してないのだからそれは仕方のない事である。一緒に居る姉の奈々瑠がその事を臥々瑠に言い聞かせる。

「しょうがないでしょう。この世界には時計なんか存在してないんだから」

現在零治達は午後に広場に集まるように指示を受け、残りのメンバーが来るのを待ってるようである。

「……フーー……。ん……？　携帯灰皿が一杯になっちまった」

「兄さん……それで何本目なの？」

臥々瑠の質問に、零治は携帯灰皿の中に有る吸殻を数えて答える。

「……六本だな」

「兄さん、いくらなんでも吸いすぎですよ。禁煙しろとまでは言いませんが、少しは控えましょうよ……」

「健康のために？」

「はい」

「だが断る！」

「はぁ……」

零治の態度に奈々瑠は頭を抱えながら溜め息を吐く。

「そういえばそのタバコ、いつもの甘い匂いがあんまりしないねぇ？」

臥々瑠が鼻をスンスン鳴らしながらそう言うので、零治は顔をしかめながら箱から一本タバコを取り出し、唸りながら睨み付ける。

「む……って事は、葉っぱの着香が不十分だったか？」

「ちゃっこう？　って事はそのタバコ、自分で作ったんですか？」

「ああ。この世界にタバコは売ってないんだから、物質変換魔法で材料を用意して自分で作るしかないだろう？　しかし、あの甘い匂

いがあまりしないとは……もっと詳しく研究をせねばならんか」

「なんだお前達、随分早いな」

と、そこへ春蘭と桂花が集合場所にやって来た。

「ああ、春蘭か。こういう場合、男は先に来ておくのがお約束なんだよ。それより華琳と秋蘭はどうした？　まだ、昼か？」

「うむ。食事は済んだのだが……なにか髪のまとまりが悪いとかでな。今、秋蘭に整えさせている」

「なるほど。あのクルクルした巻き髪は整えるのが大変そうだからなぁ」

「アンタ、随分女の身支度に理解があるのね？」

桂花が意外そうな顔をしながら訊いてくる。

「そりゃ身の回りに女が三人も居るからな」

「まあ、それに州牧ともなったお方が、だらしない格好で公の前に出てみろ。臣下たる我々どころか、主の品格まで疑われるわ」

「あら、珍しく意見が合ったじゃない」

「当然だ」

「しかし……その華琳も、今は刺史じゃなく、陳留の州牧ってやつに昇進か……。これでさらに広い地域を治める事になるわけだな」

「何よ。何か問題でもあるの？」

「誰もそんな事言ってないだろ。ただ、その昇進って大変な事じゃないのか？」

「華琳様は既に陳留刺史としての十分な実績があるだろう。州牧など、ごく正当な評価……いや、むしろ低いくらいだ」

「そうなのか？」

「当たり前だ。本来の州牧が逃亡した非常時でもあるしな。中央にも、わざわざ人を選別して派遣するより、有能な華琳様に任せよう、と思った見る目のある奴が居たのだろう」

「それに、中央には知り合いも何人か居たしね」

「あん？　それってつまり、桂花が中央に居る知り合いに手回しして、華琳を州牧にしたって事か？」

「ええ。袁紹の所って、扱いは悪かったけど、中央との繋がりだけはたくさん作れたのよね」

「それ、華琳が知ったら怒るんじゃないか？」

「別に怒らないわよ」

と、そこに、身支度を終えた華琳と秋蘭が合流する。

「華琳様……」

「なりふりを構っていられるほど、今の私達に力も余裕もないでしょう。使えるものなら天の国の知識でも部下の繋がりでも、遠慮なく使わせてもらうわ」

「……」

零治は黙って華琳の髪に視線を向けている。

「……何？」

「いや、髪のまとまりが悪いと聞いてたのだが、いつも通りだから大丈夫そうだな、と思ってな」

「そう。ならいいのだけれど……零治」

「なんだ？」

「奈々瑠と臥々瑠の髪、随分とボサボサじゃないのかしら？」

華琳が奈々瑠達に視線をやり、二人の髪の事を指摘する。

「あ～、これはクセ毛だから、これ以上直しようがないんだ。だから勘弁してくれよ」

「そんなこと言って、ホントは面倒だから手抜きしたんじゃないの？」

「「むっ……！」」

桂花が零治にバカにしたような視線を向けながらそう言ってきたので、奈々瑠と臥々瑠はむっとした表情になり桂花を睨み付けるので、零治は二人をなだめる。

「二人とも、アレの言う事なんかに耳を貸すな」

「ちょっと、何よアレって！？　アンタいくらなんでも失礼じゃないの！！」

零治のその一言に、桂花はヒステリックな声を出しながら零治を睨み付けるが、零治はそれを軽く流して、涼しい顔で言い返す。

「失礼？　失礼が服を着て歩いてるような奴にだけは言われたくないな」

「なんですってぇ！！」

「はいはい、二人ともいい加減になさい」

二人の言い合いを見かねた華琳が仲裁に入る。

「まあ、そういう事なら仕方ないわね。……それにしても、こうして州牧になったおかげで季衣との約束を守ることも出来たし、言うことはないわ」

「ん？　そういえば、その季衣はどうしたんだ？　姿が見当たらんが……」

零治は辺りを見渡しながらそう言うので、零治の疑問に秋蘭が答える。

「今朝、山賊のアジトが見つかったという報告があってな。私か姉者が討伐に向かうから、街を見に行って来いと言ったのだが、聞かなくてな」

「ああ、それならオレも聞いたよ。確か瑠利亜も一緒だったよな？」

「ああ。自分の村と同じ目に遭ってる村を見ていられんのだろう。はりきって出掛けて行ったぞ」

「なら、土産ぐらいは買っといてやらないとな」

「なんだ。考える事は同じか」

そんなやり取りをしている零治と春蘭に、桂花は呆れた視線を向けながら確認するように言う。

「アンタ達、観光に行くわけじゃないのよ？」

「分かってる。仕事と両立させればなんの問題もないだろ？」

「ちゃんと仕事をするんならね」

そう言う零治に、華琳も念を押すように言い、その言葉に春蘭が大きく頷き返事をする。

「はい」

「華琳様ぁ……。コレは一緒に連れて行くのに、なんで私は留守番なんですかぁ？」

「ちょっと、なに兄さんを指差してコレ呼ばわりなんかしてるのよ」

「臥々瑠、こんな奴の言う事なんか放っとけ。……そうだなぁ。お前が普段警備隊として街を見回ってるオレより街に詳しくて、有事の際に華琳を守る事が出来るんなら代わってやるが？」

零治のその言葉に桂花は悔しげな表情になる。
確かにこのメンバーの中では警備隊として街を見回ってる零治が一番街には詳しいだろうし、有事の際に関しては、桂花は華琳を守るどころか、むしろ守られる側の立場になってしまう。
なので、桂花はしぶしぶ納得する。

「くっ……！　分かったわよ」

「はい、無駄話はそこまでにして、そろそろ出発するわよ。なら桂花。留守は任せたわよ」

「はぁい……」

そうして零治達は街を目指し、城を発った。

……

……

…

「あれが陳留か……」

全身傷だらけの特徴的な女の子が街の入り口を前にして一人呟く。

「やっと着いたー。凪ちゃーん、もう疲れたの」

「いや、沙和……これからが本番なんだが」

「もう竹カゴ売るの、めんどくさーい。真桜ちゃんもめんどいよねぇ……」

メガネをかけ小洒落た格好をしたおさげの女の子が、傷だらけの女の子に文句をブータレながら、もう一人の、やたら肌を露出させた童顔と巨乳が特徴的な女の子に話を振る。

「そうは言うてもなぁ……全部売れへんかったら、せっかくカゴ編んでくれた村のみんなに合わせる顔がないやろ？」

真桜と呼ばれる女の子は渋面を作りながら沙和と呼ばれる女の子にそう言い聞かせ、凪と呼ばれる女の子も同感する。

「そうだぞ。せっかくこんな遠くの街まで来たのだから、みんなで協力してだな……」

「うっうー……。分かったよぉ」

涙目になりながらもしぶしぶ納得する沙和。

「最近はなんや、立派な州牧様が来たとかで治安も良うなっとるみ

たいやし、いろんな所から人も来とるからな。気張って売り切らんと」

「……そうだ。人が多い街なら、みんなで手分けして売った方が良くないかな？」

「……なるほど、それも一利あるな」

「それじゃ、三人で別れて一番売った奴が勝ちって事でええか？負けた奴は晩飯、奢りやで！」

「こら真桜。貴重な路銀を……」

「分かったの」

「沙和まで……」

「よっし。二対一で、可決って事で！　凪もそれでええやろ？」

「はぁ……やれやれ。仕方ないな」

「ほな決まり！」

「おーなのっ！」

「……なら、夕方には門の所に集合だぞ。解散！」

傷だらけの女の子が、そう号令をかけ、三人は街の中に足を踏み入れる。

……

「はい！　それでは、次の一曲、聴いていただきましょう！」

……

「姉さん。伴奏お願いね」

…

「はーい」

姉妹と思われる女三人組の旅芸人がま街の通りで演奏を始める。

「ほぉ。旅芸人も来ているのか……」

秋蘭は珍しげに言い、それを聞いた零治は怪訝な表情になる。

「ん～？　珍しいか？　前からそれなりに居たはずだが……」

「芸人自体はさして珍しくないだろうが、あれは南方の歌だろう。南方の旅人は今までこちらまでは来れなかったからな……」

「ん？　つまり……途中の街道が危険だったから、今まで来れなかったって事か？」

「そういう事だ。商人と違って、街道が安全でなければ連中は寄って来ないからな。そういう意味では、我々の働きが認められた、とみて良いかもしれん」

「特に彼女らは女だけのようだし、武芸に相当の自信があるか、安全でなければ、こんな所まで来ないでしょうね」

「なるほど。確かに……」

華琳のその説明に零治は納得したように頷き、旅芸人の姉妹に視線を戻す。

「ありがとうございましたー」

「次、もう一曲、いってみましょう！」

旅芸人達が演奏を終え、次の曲の演奏に入る。

（しかし、あまり人気はないみたいだな。下手って訳じゃないが、そこまで上手いとも言えないな……）

零時の思う通り、客はそれほど居ないし、おひねりもあまり貰えていない様子である。

「まあ、腕としては並という所ね。それより、私達は旅芸人の演奏を聴きに来た訳じゃないのよ？」

「分かってる」

「狭い街という訳でもないし、あまり時間もないわ。手分けして見る事にしましょう」

「承知しました。では、私は臥々瑠と街の右手側、姉者と奈々瑠には左手側を回らせます。それでよろしいですか？」

「問題ないわ。では、突き当りの門の所で落ち合いましょう」

「はっ」

「零治。警護と案内、しっかり頼むわね？」

「了解」

「むぅ……」

春蘭が羨ましげな視線を零治に向ける。本当は華琳と一緒に行きたいのだろうが、そういう訳にもいかないので、秋蘭が姉に理由を言い聞かせる。

「……諦めろ、姉者。私達は音無ほど街に詳しくないし、この中に居る人間では音無が一番強いのだから、華琳様の警護に就くのは当

然だろう？」

「……音無」

「なんだ？」

「貴様の腕っ節の強さが、心底羨ましく思うぞ。どうすればそこまで強くなれるのだ？」

春蘭の質問に、零治は短い間を置き、どこか悲愴感が漂う表情をしながらポツリと呟いた。

「……人間をやめたら……かな？」

「はっ？」

零治の言ってる意味が理解できず、春蘭は間抜けな声を出し、きょとんとする。

「いや、なんでもない。聞き流してくれ……」

「ほら春蘭。無駄話なんかしてないで、早く行きなさい」

「はぁい……」

華琳にそう言われては従わない訳にはいかないので、春蘭は哀愁を漂わせながら、トボトボと街の左手側に向かいだす。

「あっ、春蘭さん。待ってくださいよー」

奈々瑠が慌てながら春蘭の後を追いかける。
その後ろ姿を見て、秋蘭は苦笑ながら通りに行くのを見送って、臥々瑠に出発するよう声をかける。

「やれやれ……。では、臥々瑠。私達も行こうか」

「は～い」

「さて、私達も行くわよ」

「ああ」

残りのメンバーも、各々が視察する場所に足を進めだした。

……

……

…

「ん？　なあ、華琳」

「何？」

「大通りは見ないのか？　こっちは裏通りだぞ」

「大通りは後でいいのよ。大きな所の意見は、黙っていても集まるのだから」

「ああ、なるほど……」

「それより零治。……この辺りを見て、貴方はどう思う？」

「どうって……」

零治は華琳に言われて、辺りに市や小さな店がひしめき合う通りを見回す。

「いつも通り何事も無く、十分に賑わってると思うが？」

「そのくらい、見れば分かるわよ。もっと他に気付く事はないのかしら？」

「気付く事ねぇ……。強いて言うなら、この辺りは食い物屋と料理屋が多いってぐらいだな」

「ええ。食材がすぐ手に入るから、それは当然ね。それで、他に気付く事はない？　何でもいいわ」

（ん？　思った事を適当に言っただけなんだが、意外な反応だな）

そう思いながら零治は再び通りをぐるりと見回し、思った事を華琳に聞かせる。

「……この通りは調理器具を取り扱う店……鍛冶屋が無いな。鍛冶屋が有ればもっと繁盛すると思うんだが？」

「鍛冶屋は三つ向こうの通りに行かないと無いわね」

「そして、その通りには料理屋が無い」

「ええ。よく分かってるじゃない」

「つーか、そこまで詳しいんなら、オレの案内なんか必要ないだろう？」

「ふふ。ちょっと貴方を試したかったのよ。警備隊として街の事をちゃんと把握してるのかをね」

「あっそ……。で？　実際に街の光景を目にしたご感想は？」

「ええ、悪くないわ。人の流れ、客層や雰囲気は地図や報告書だけじゃ実感できないから、やはり、たまにはこうして視察して実際に確かめないといけないわ。でないと、住民達の意にそぐわない指示を出してしまいかねいわ」

「フッ。そうだな。それに……」

零治は小さく笑い、露店の前の人だかりに視線を止める。

「……ああいう光景は、紙の地図じゃ確かめられないからな」

「はい、寄ってらっしゃい見てらっしゃーい！」

そこに居た露天商の女の子、カゴを売りに来た三人娘の一人、真桜がネコの額ほどのスペースに竹カゴをずらりと並べ、道行く人に元気よく声をかけていた。

「ん？　なんだこりゃ？」

「カゴ屋のよう……だけれど？」

「いや、カゴじゃなくて、このデカイ木箱だよ。何なんだコレ？」

「さあ？」

零治は女の子のすぐ横に置かれた、やや大きめの木箱の事を指差しながら聞くが、華琳にも分からないようだ。仕方ないので零治は箱を観察して自分で考えてみる。

木箱は所々に金属のフレームが組み込まれており、隙間からは木製の歯車がチラリとその姿を覗かせている。どうも何かの機械のように見える。

（ん、歯車……だと？　この時代に歯車なんか有ったか？）

「どうしたの？　そんなに歯車をジーっと見て。零治は歯車を初めて見るのかしら？」

「いや、歯車ぐらい見た事あるさ。……流石に木製のは初めてだがな」

（華琳の口ぶりから察するに、どうも普通にあるみたいだな……）

二人の会話が聞こえたようで、真桜は感心したような表情で零治達に声をかけてくる。

「おお、そこのお二方、なんともお目が高い。それはウチが発明した絡繰の、全自動カゴ編み装置やねん」

「全自動……」

「カゴ編み装置……？」

零治と華琳は怪訝な表情で真桜に聞いてくるので、真桜は実演をして見せる事にする。

「せや。この装置の底の部分にこう、竹を細ぅ切った材料をグルー

ッと一周突っ込んでやな……そこの兄さん、ちょっとこの取っ手を回してくれるかぁ？」

「これをか？」

零治は女の子に言われ、木箱の横に取り付けられてるハンドルをグルグルと回す。すると……

「ん……？　おおっ！」

みるみる内に竹カゴの側面が出来上がり、装置の上部からせり出してきた。

「ほら、こうやって、竹カゴの周りが簡単に編めるんよ！」

（確かに凄いが……おもいっきり手動なんだが！）

「……底と枠の部分はどうするの？」

「あ、そこは手作業です」

「そう……。まあ、便利といえば、便利ね……」

華琳が苦笑しながらそう言うが、零治は容赦なく一番の問題点を指摘する。

「全然全自動じゃねぇじゃんか……」

「うっ。兄さん、ツッコミ厳しいなぁ……。そこは雰囲気重視、っちゅうことでひとつ」

「なんだそりゃ……？」

零治が女の子に呆れた視線を向ける。その時、装置から何かが軋むような異音がする。

「あ、ちょ！　お兄さん、危ないっ！」

「え……？」

女の子がそう叫ぶが時すでに遅し。

「どわあっ！？」

「大丈夫、零治？」

装置は派手な轟音を立てバラバラに吹っ飛んでしまい、木製の歯車や、竹カゴの材料が辺りに散らばる。

残ったのは零治の手に握られてるハンドルだけだった。

あまりの突然の出来事に、零治はハンドルを握ったまま硬直してしまう。

「ば、爆発したぞ……」

「あー。やっぱダメやったか……」

真桜は先程の光景を見て、天を仰ぎながら低い声で言う。
その言葉に零治は、首だけ動かし、真桜に問いかける。

「……どういう事だ……？」

「まだそれ、試作品なんよ。普通に作ると、竹のしなりにこう強度が追い付かんでなぁ……こうやって、爆発してまうんよ」

「そんな物騒なモノをなぜ持って来た」

「置いとったらこう、目立つかなぁ……て思てな」

（そんな物騒なモノで実演なんかやらすな！　オレを殺す気かっ！？）

「ならここに並んでるカゴは、この装置で作った物ではないの？」

「ああ。村のみんなの手作りや」

真桜のその一言で、どこか気まずい空気が漂い始める。

「……」

「……」

「なぁ、お兄さん」

「あん？」

「せっかくの絡繰を壊したんやから、一個くらい買うていってぇな」

真桜は商売人特有の愛想笑いを浮かべながら零治にそう言う。
それを見て零治は内心呆れ果ててしまう。

（オレを危険な目に遭わせた上に、カゴまで売ろうとするか。ある意味見上げた商人魂の持ち主だな、コイツ……）

「……まあ一つくらいなら。買ってあげなさい、零治」

「買うのかよ？　まあいいが……」

（こんな物なんに使えってんだ？　オレ、カゴが必要なほど私物の置き場に困ってないぞ……）

……

……

…

一方、春蘭と奈々瑠は……

「この辺りは、服屋ばかりだな」

「そうですね」

「……」

春蘭の視線が一軒の服屋の店頭に飾られてる服に止まる。

「春蘭さん、どうかしたんですか？」

「……ああ、この服、華琳様がお召しになったら似合うだろうなぁ……」

春蘭は顔をにやけさせながらそう言うので、奈々瑠が呆れた顔で釘を刺すように当初の目的を春蘭に聞かせる。

「春蘭さん、私達は視察に来てるんですよ……」

「わ、分かっているぞ！　それぐらい……」

「ならいいんですが……」

「……」

春蘭の視線が再び店頭に飾られている服に止まる。

「……ちょっとだけなら……」

「春蘭さん……」

「はっ！？　いかんいかん。誘惑に負けるな私！」

春蘭は頭をブンブンと左右に振って誘惑を振り払おうとするが……

「……」

またしても服に視線が止まり、奈々瑠は黙ってそれを見守る。

「……」

「……ああ、やっぱり可愛らしい服が有るなぁ」

（はぁ……。これは落ちるのも時間の問題ね……）

「……そうだ、ちょっとだけ……」

「視察はどうするんですか……？」

「こ、これも視察の一環だ。行くぞ、奈々瑠」

「はぁ……。少しだけですよ？」

そう言って二人は目の前の服屋に入店し、営業スマイルを浮かべた店員が二人を出迎える。

「いらっしゃいませー」

「おお、これはなかなか……」

店の品揃えに春蘭は驚嘆し、一着の女性用の服を手に取る。それを見た店員が、おずおずと春蘭に声をかける。

「あのぅ、お客様。失礼ですがこの辺りは、お客様よりも少々小さめの……。お客様に合う物でしたら、あちらの棚に」

「ああ、華り……いや、知り合いの頼まれ物なのだ。私の事は気にせず、放っておいてくれ」

「は、はあ……そうですか？」

春蘭がそう言うので店員は怪訝な表情をしながらも春蘭から離れる。
もはや彼女の頭には視察という当初の目的は残っていないだろう。

「うむ、これも悪くない……。ああ、あれも……」

（ダメだこの人。早くなんとかしなきゃ……）

奈々瑠がそう思ってた時、メガネをかけ小洒落た服装をした女の子、
沙和が春蘭に話しかけてくる。

「じゃあ、これは？」

「おおっ。これは素晴らしい！」

「やっぱりなの！　それだったら、こっちも合うと思うのー」

「……そうかぁ？　それはイマイチだろう。むしろ、これを内側に
合わせた方が……」

「おおーっ。お姉さん、なかなかやるのー」

「お主もな……って、誰だ貴様っ！」

（今更気付いたの！？）

「うーん。さっきから、服を見る目が凄く熱かったから……。こういう服が好きなら、これも気にいるんじゃないかなーって思ったの」

「ほぅ。最近はそういうのが流行りなのか」

「そうなのー。でもお姉さんは、自分のこだわりがちゃんとあるみたいなの」

「フッ、貴様、この私とやり合う気か……？　本気になった私は、かなり凄いぞ？」

「んー。このお店、可愛い服がたくさんあるし……分かったの！その勝負、受けて立つの！」

二人は服に対して譲る事が出来ないこだわりを持っているようで、二人の闘いはますますヒートアップする。特に春蘭は華琳に関係する事となると普段以上のスペックを発揮する人物な上に言っても聞かない人物なのでもはや止める事は不可能だろう。

（何……？　この熱血的な展開は……？）

奈々瑠はこの状況について行けず、すっかり置いてきぼりになっていた。

それからしばらくして……

「……うむ、久しぶりに良い戦いであった。血がたぎったぞ！」

「私も楽しかったの。その買った服も、きっとその子に似合うと思うのー」

二人は満足げな表情で店の前に立ち……

「や、やっと終わった……」

奈々瑠は心底疲れ果てた表情で店の前に立っていた。

「しかし、少々服を買いすぎたな。これでは持って帰るまでに落としてしまいそうだ……」

（両手で抱えなきゃ持てない量を少々って言うのかしら……？　ってか、私も持たされるハメになっちゃったし……）

「あー。それなら、この竹カゴを使うと良いの」

沙和はそう言って、背に背負っている竹カゴを一つ春蘭に手渡す。

「おお、それは助かる！　感謝するぞ！」

「あ、でもそれ、売り物なの……」

「なんだ、そうなのか」

「あと今思い出したけど、今日中にこのカゴ、全部売らないといけないの……」

「フッ。それならそうと早く言え。今日の勝負の礼だ。そのようなカゴ、私が全て引き取ってやろうではないか！」

「おおっ！　お姉さん、太っ腹なのー！」

（ん……？　あれ？　でも、確かさっき服を大量に買ったから……）

「はっはっは。誰がお腹がたゆんたゆんで子供が乗ったらフカフカだとー？」

「誰もそんな事言ってないのー」

「まあ良い。ほれ、これで……」

そう言いながら、春蘭は服を大量に抱えてるにもかかわらず、器用に懐から財布を取り出し、女の子にお金を手渡すが……

「……」

「……」

（やっぱり……）

その金額はスズメの涙ほど。どう考えても沙和が持ってる竹カゴを全部買い取る事は出来ない。

「……それは流石に、一個しか売れないの」

「……すまん」

「はぁ……」

……

……

…

続いて、秋蘭と臥々瑠は……

「……」

「……」

臥々瑠は気まずそうに身を縮め、チラチラと秋蘭の顔色を窺っている。

別に彼女が秋蘭を怒らせる事をしたわけではないのだが、この異様な雰囲気のせいで話しかける事が出来ないのだ。

（うぅ……。何なの？　この重っ苦しい空気は……）

秋蘭は目の前の傷だらけの女の子、凪が露天商を務めるカゴ屋の前に足を止め、さっきからずーっと目の前に並んでるカゴを凝視して、露天商の女の子はその秋蘭の様子を窺うように見つめていた。
決して二人が睨み合ってる訳じゃないのだが……

「……良いものだな。このカゴは」

「……どれも入魂の逸品です」

「……そうか」

「……はい」

「……」

「……」

再び黙り合う秋蘭と凪。
誰が見ても、異様な空気を漂わせてるのは明らかであった。

（も～。そんなにそのカゴが欲しいんなら、早く買ってよ！　アタシ、これ以上この空気に耐えられないよ～！）

臥々瑠としては一刻も早くこの重っ苦しい空気から解放されたいのだが、それには秋蘭がカゴを買うかどうか決めなければならないのだが……相変わらず秋蘭は黙ってカゴを凝視しているだけだった。

「……」

「……」

「姉ちゃん、このカゴ一つおくれや」

「……まいど」

一人の一般客が二人の間に割って入り、カゴを一つ購入し、凪は軽く会釈をし客にカゴを手渡す。
ほんの一瞬だが、その場の空気が和んだが……

「……」

「……」

客が立ち去った事で、またしても異様な空気に戻ってしまう。
流石の臥々瑠も限界のようで、涙目で秋蘭に心の叫びを訴えかける。

（お願いだから早くして～！）

「……よし」

「……っ！」

ようやく秋蘭は決断し、それを見た凪の表情がこわばる。

「……これを一つ、もらおうか」

「……はっ」

凪は姿勢を正し、秋蘭にカゴを手渡した。
それを見て、臥々瑠は心の中で安堵の息を漏らす。

（はぁ……。これでやっとこの空気から解放される……）

……

……

…

そうして一同は視察を終え、集合場所の突き当りの門で合流をする。

「……で？」

華琳が一同を見回す。
その場に居る全員が、どう説明したものかと困惑の表情を浮かべ黙り込む。

「どうしてみんな、揃いも揃って竹カゴなんて抱えてるのかしら？」

華琳が周りのメンバーにそう言う。
最初に口を開いたのは秋蘭だった。

「はぁ。今朝、部屋のカゴの底が抜けているのに気付きまして……」

（ホントにそうなのかなぁ……？）

臥々瑠は首を傾げながら秋蘭を見つめる。
仮に秋蘭の話が本当だとしたら、あそこまでカゴを凝視する必要はなかったはずである。

「……まあ、それなら仕方ないわね。どうせ貴方の事だから、気になって仕方なかったのでしょう？」

「は。直そうとは思っていたのですが、これればかりはどうにも……」

「いいわ。で、春蘭は？　何か山ほど入れているようだけれど……」

華琳の視線が春蘭のカゴに詰め込まれてる、大量の服に止まる

「こ、これは……季衣の土産にございます！」

春蘭はそう説明するが、実際は華琳のために買った服なのだが、視察をそっちのけで服選びに没頭していたなんて口が裂けても言えなかった。
当然ながら奈々瑠にもしっかりと口止めをしている。

（嘘ばっかし……）

そのため本当の事を口にしこそしないが、心の内で毒づいてしまう奈々瑠。

「何？　服？」

「はっ！　左様にございます！」

「……そう。土産もいいけどほどほどになさいね」

「はいっ！　ほどほどにしますっ！」

「……で、どうして音無もそんなカゴを背負っているのだ？」

秋蘭がカゴを背負っている零治の方を見ながら聞く。本人も答えこそするが、深くは語らなかった。

「……こっちにもいろいろ事情があってな」

「……事情かぁ」

「……そうか」

春蘭と秋蘭も零治の表情を見て何かを読み取ったようで、深く追及はしてこなかった。

「それで、視察はちゃんと済ませたのでしょうね？　カゴなり土産なりを選ぶのに時間をかけすぎたとは、言わせないわよ」

「はいっ！」

「無論です」

「ならいいわ。帰ったら今回の視察の件、報告書にまとめて提出するように。……零治、奈々瑠、臥々瑠、貴方達もね」

「了解」

「えっ？　わ、私達もですか！？」

奈々瑠は自分達が言われるとは思っていなかったようで、うろたえながら華琳に聞く。

「こういう意見は質云々よりも、まずはいろいろな視点からの意見が大切なのよ。分かったわね？」

「ぜ、善処します……」

「は～い……」

（奈々瑠はともかく、臥々瑠には荷が重い気がするが……。いざとなったらオレが手伝ってやるか）

零治がそう思ってるその時、唐突に声をかけられる。

「そこの、若いの……」

「……誰？」

「そこの、お主……」

声の主は、目深に布を被った誰か、だった。低くしわがれた声は、老婆のようにも聞こえるし、若い男性が無理に声を作ってるようにも聞こえる。無論、かぶってる布のせいで表情はまったく分からな

い。

「何だ？　貴様」

「占い師か……」

「華琳様は占いなどお信じにならん。慎め！」

「……春蘭、秋蘭。控えなさい」

「は？　……はっ」

「強い相が見えるの……。希に見た事の無い、強い強い相じゃ」

「一体何が見えると？　言ってごらんなさい」

「力の有る相じゃ。兵を従え、知を尊び……。お主が持つのは、この国の器を満たし、繁らせ栄えさせる事の出来る強い相……。この国にとって、稀代の名臣となる相じゃ……」

「ほほぅ。良く分かってるではないか」

春蘭はまるで自分の事のように誇らしげに胸を張り、満足げな表情で大きく頷く。

「……国にそれだけの器が有れば……じゃがの」

「……どういう事だ」

占い師の言葉に秋蘭は眉をひそめながら聞く。

「お主の力、今の弱った国には収まりきらぬ。その野心、留まるを知らず……あふれた野心は、国を犯し、野を侵し……いずれ、この国の歴史に名を残すほどの、類い稀なる奸雄となるであろう」

「貴様！　華琳様を愚弄する気か……っ！」

激昂した秋蘭が占い師に掴みかかろうとするが……

「秋蘭！」

華琳はそれを手で制止する。

「……し、しかし華琳様！」

秋蘭は納得のいかぬ表情で反論しようとするが、華琳は言葉に耳を貸さず、占い師に不敵な笑みを向けながら話を進める。

「そう。乱世においては、奸雄となると……？」

「左様……それも、今までの歴史に無いほどのな」

「……ふふっ。面白い。気に入ったわ。……秋蘭、この占い師に謝礼を」

「は……？」

「聞こえなかった？　礼を」

「し、しかし華琳様……」

秋蘭は占い師が華琳の事を奸雄呼ばわりしたため、謝礼を渡すのを渋る。

仕方なく華琳は零治に謝礼を渡すように命じる。

「……零治。この占い師に、幾ばくかの礼を」

「ん？　ああ……」

華琳に言われ、零治はズボンのポケットから財布を取り出す。

「早くなさい」

「分かってる。そう急かすなよ……」

零治はいくらかの小銭を目の前に置かれてるお椀の中に入れる。

「乱世の奸雄大いに結構。その程度の覚悟も無いようでは、この乱れた世に覇を唱える事など出来はしない。そういう事でしょう？」

（乱世の奸雄か……。確か史実の曹操もそう言われてたんだよな……）

「それから、そこのお主……」

占い師が今度は零治に声をかける。

「今度はオレか？　何だよ？」

「大局の示すまま、流れに従い、逆らわぬようにしなされ。さもなくば、待ち受けるのは身の破滅……。くれぐれも用心なされよ？」

「……ご忠告どうも。だが、生憎とオレは占いなんか信じない主義でね。自分の事は自分で決めさせてもらう」

「左様か……。ではもう一つだけ……」

「今度は何だ？」

「お主が持っておる、その雲の名を冠する剣についてじゃ……」

「なに……？」

占い師の口から予想だにしない言葉が出て来たので、零治の表情がこわばる。

「その剣に秘められし、『無限にも等しい力』……。もし使うのなら、よく考えて使う事じゃ。その強大な力は……お主の命をも蝕む危険な力じゃ」

（コイツ……なぜ叢雲の事を知っている？　しかし、『無限にも等しい力』だと？　一体何の事だ……？）

零治はそう疑問に思うが、占いを信じない主義なので深く訊こうとは思わず、それが忠告なのかどうかはっきりさせるだけにとどめる。

「それも忠告か……？」

「いかにも……」

「フッ。まあいい。心の片隅には留めておいてやるよ……」

「零治。行くわよ」

「ああ。だがその前に……アンタ、名は？」

「管輅ともうす……」

「管輅……か。その名、憶えといてやる……」

零治は管輅と名乗った占い師にそう告げ、その場を後にした。

……

……

…

「……それにしても春蘭。よく我慢したわね。偉かったわ」

「……はぁ」

視察の帰り道、華琳は占い師に対して全く怒らなかった春蘭を褒めるが、当の本人はなぜ褒められたのか理解出来ていないようで、首を傾げながら生返事をする。

（そういえば、春蘭の奴、随分と大人しかったなぁ。秋蘭はあんなに怒ってたのに）

「……なあ、音無」

「何だ？」

「乱世の奸雄とは、どういう意味だ？」

春蘭は真顔で零治に問いかける。

「……」

「……」

「……そういう事か」

華琳と秋蘭は絶句し、零治は納得したように言う。
秋蘭、溜め息を一つ吐き、春蘭に奸雄の意味を説明する。

「……姉者。奸雄というのは、奸知にたけた英雄という事だ」

「……そうか。かんちか」

「春蘭さん。絶対意味を解ってないでしょう……」

「ごめん。アタシも解んない……」

「お前は別に知らなくていい」

「奸知とはずる賢く、狡猾な、という意味よ」

「ええと、という事は……」

華琳がより解りやすく説明するが、まだよく理解できていないようので、零治がより解りやすい言葉に置き換え補足する。

「世が乱れれば、ずる賢い手段で上にのし上がる、卑劣な奴って意味だ」

「な……なんだとぅ！　あの占い師！　華琳様に何という暴言を！！」

ようやく意味を理解した春蘭が剣を振り回しながら憤慨する。

「華琳様、すぐに引き返しましょう！　あのイカサマ占い師め！木っ端微塵に叩き斬って、城の外堀に放り捨ててくれる！」

（木っ端微塵に叩き斬るって、どうやるんだよ？　是非とも見てみたいわ……）

「……だから、いいと言ってるでしょう、春蘭。とりあえず剣をしまいなさい」

「そうだぞ。落ち着け、姉者。そんなに剣を振り回したら危ないだろう」

「これが落ち着いてなどいられるか！　くそぅ！」

（それにしても、『大局の流れに逆らえば身の破滅』に『無限にも

等しい力』……か。帰ったら瑠利亜に話をしてみるか）

……

……

…

その夜、瑠利亜の自室にて、零治は昼間の出来事を瑠利亜に伝える。

「……てな事があってな」

「なるほど……」

「一体何の事だと思う？」

「さあ？　そもそも、『大局』という言葉が、いろんな意味で捉える事が出来ますから、判断するのが難しいですねぇ……」

「そうか……。なら、『無限にも等しい力』ってのは何の事だと思う？」

零治は管輅という占い師から言い聞かされたもう一つの言葉の意味を聞いてみるが、瑠利亜は渋面を作り両腕を組んで唸りながら考えてみるが、やはりこちらも分からない様子だ。

「う～ん……、叢雲に秘められた『無限にも等しい力』……ですか。

……すみません、さっぱり分かりません」

「いや、分からないならいいんだ。悪かったな。こんな時間に」

「いえ、こちらこそ、お役に立てなくて申し訳ないです」

「気にすんな。それじゃあな」

零治はそう言いながら、瑠利亜の部屋を後にした。
零治の気配が部屋から離れたのを確認した瑠利亜は一人ブツブツと呟くように言葉を漏らす。

「……『無限にも等しい力』……恐らくアレの事なんでしょうが……。まだ、黒狼がこの世界に居ると決まった訳じゃありませんから、話すべきではないでしょう。しかし、それでも本当に話すべきなのか……？」

瑠利亜は一人そう言いながら、窓辺に行き、月を眺める。

「……あの力は、あまりにも危険すぎる……。出来る事なら話したくはない。彼自身のためにも……」

……

……

…

「……はぁ。今日の実入りも、今一つだったわね」

昼間の旅芸人三姉妹の三女が宿屋の部屋で、頭を抱え、溜め息をつきながらぼやく。

「あーあ。こんなんで、大陸一の旅芸人になれるのかなぁ……」

旅芸人の次女が座ってる椅子の背もたれに力なくもたれかかりながら三女同様に現状をぼやく。

「ほら、二人とも、気にしないの。明日はきっと良い事があるってー」

「天和姉さんは気楽でいいわねぇ……」

次女が能天気な長女、天和に呆れながらそう言い、それを聞いた天和は頬を膨らませながら反論する。

「えー。ちーちゃんもれんほーちゃんもひどーい」

天和の抗議をよそに、一番のしっかり者の三女、人和は現状の打開

策を思案し、どうするかを二人に問いかける。

「それより、何か新しい策を考えないと、本当に行き倒れよ？　もう宿泊費もあまり無いのだから……」

「ちょっと、せっかくこんな都会まで来たのに、また田舎回り！？　私、絶対嫌だからね！」

「私だって嫌よ……。もっと大きな都で有名にならないと、多寡が知れているもの」

「もぅ、二人とも辛気くさいなぁ……。お姉ちゃん、外の空気吸ってくるからねー」

そう言いながら、長女の天和は外に出ていく。

「はいはい。あーあ、誰か後援者が付いて、大陸中を回ったりとか出来ないかなー」

「それならせめて、もっと有名にならないとね」

人和は頭を抱え、地和は机の上に突っ伏し今の状況を嘆き、今後どうするべきか頭を悩ませる。

「あーっ、空気がおいしー！」

外に出た天和は大きく伸びをしながら言う。

「まったくもぅ～。人生まだまだ長いんだから、二人とも、もっと楽しくやれないのかなぁ……？」

天和がそう言ってた時、一人の不審な男が声をかけてきた。

「あ……あのっ！」

「んー？　誰ですかー？」

「張三姉妹の、張角さんですよね！」

「そうですけどー」

「あの、俺……張角さんの歌、凄く好きなんです！　これからも頑張ってください！」

「え？　ホントに？　ありがとうございますー♪」

「あと……よかったらこれ、もらってください！　よく知らない貴重な本らしいですから、売ったら、ちょっとはお金になると思います！　活動資金の足しにでもしてください！」

男はそう言いながら、黄色い包みを手渡す。

「え？　いいんですかー？　嬉しいですー♪」

天和は感謝の意を表し、男の手を優しく両手で握り締める。
男は頬を緩ませ感激する。

「うお……あ、握手まで……！　こっちこそありがとうございます！　この手、もう一生洗いません！」

「あはは♪　厠に行ったらちゃんと洗わなくちゃダメですよぉ♪」

「それじゃ、失礼しますっ！　追われてるので！」

「はぁ……？」

「なんだったんだろ……？」

男はそう言い、逃げるようにその場を立ち去る。

「あの、すいませーん。さっきこっちの方に、怪しい男が来ませんでしたかー？」

続いて、入れ替わるように、兵士達を率いた季衣が現れる。

「怪しい人？　さあ？　見てないですけどー……」

「そうですか。ありがとうございます！　じゃ、次はあっち捜しに行くよ！」

「はっ！」

季衣は兵達に指示をし、慌ただしくその場を後にした。

「なんだかみんな忙しそうだなぁ……」

「どうしたの、姉さん。何か騒がしかったみたいだけど」

「んー……よく分かんない」

「あれ。その黄色い包み、何？」

地和が天和の持ってる包みを指差しながら聞いてくる。

「なんかお姉ちゃん達を応援してくれてるって人がくれたの。売ったらお金になるかもってー」

「ホント！？　ちょっと、見てみましょうよ！」

「あーっ！　お姉ちゃんがもらったんだから、お姉ちゃんが開けるのー！」

「……はいはい。分かったから、早く開けてよ」

地和に促され、天和は乱暴に包み紙を破き、中身を取り出して、二人に見せびらかすように掲げる。

「えへへー。じゃーん！」

「何これ……。古い……竹簡？」

地和はもっと豪華な物が入ってるとでも思っていたのだろうか、竹簡を見て落胆したような表情になる。

「表題が書いてあるわ。ええっと……南華老仙……。太平……要術……？」

人和がメガネに手を当てながら竹簡に書かれてる題名を読み上げる。

しかもそれは華琳が捜していた古書。

つまり、先程の男が古書を華琳の下から盗み出した犯人という訳である。

「何これ？　こんなボロボロの本、本当に売り物になるのぉ？」

「好事家なら、内容次第で高く引き取ってくれると思うけど。でも……ちょっと待って？　これ……」

人和が食い入るように古書の内容に目を通す。

「ねえねえ、ちーちゃん。これ売ったら、もうちょっとこの街に居られるかなぁ？」

「お金も良いけど、なんかこう、私としては、凄く売れっ子になる方法とかが書いてあると嬉しいんだけどなー」

「……天和姉さん」

しばらく古書の内容に目を通していた人和が何やら緊張したような面持ちで天和に呼びかける。

「なにー？」

「これ、凄いわ……。私達の思い付かなかった有名になる方法が、たくさん書いてある……」

「ちょっと……ホントに！？　さっきの冗談よ？」

地和が驚いたように言う。先程冗談交じりに言った事を、よりにも

よって一番のしっかり者の人和が言うのだから無理もない。
だが人和はいつになく真剣な表情で力説する。

「冗談なんかじゃないわよ。これを実践していけば、きっと……大陸を獲れるわ！　私達の歌で！」

「ホントに！？」

「ええ！」

「よ、よく分かんないけど、凄いのねー」

話についていけてない天和は、のほほんとした表情で言う。

「そうよ！　凄いのよ！」

「よぉっし！　なら私達三人、力を合わせて歌でこの大陸、獲ってみせるわよ！　いいわね！」

「おおーっ！」

「ええ！」

三人は力強く右手を天に高々と突き上げ、元気よく声を上げ、気合を入れる。
だがこの行為が、のちに大陸に大きな争いを巻き起こすきっかけに

なると、三人は知る由もなかった。

第13話　予言と忠告（後書き）

零治「ようやく黄巾の乱に話が進むのか？」

作者「正確にはまだだけどな。次は拠点パートの話を2話分書く予定だから」

瑠利亜「しかし、貴方もう少しテンポよく更新できないんですか？」

奈々瑠「そうですね。少しは他の作者さんを見習ったらどうなんですか？」

作者「これでも努力してるんだぞ。そんなこと言うんなら、オレの代わりに仕事してくれよ」

臥々瑠「自分の妄想が生んだキャラにそんな事頼む、普通？」

作者「妄想って言うな！」

零治「じゃあ、何なんだ？」

作者「オレの頭脳という名の大宇宙が生み出した真理！」

瑠利亜「いい大人がそんな事を言って恥ずかしくないんですか？」

奈々瑠「姉さん。この作者に羞恥心なんか有るわけないじゃないですか」

作者「いや、多少は有るんだが」

臥々瑠「多少なんだ……」

零治「いつもの事だが、また話が脱線し始めてるな」

瑠利亜「では、今回はここまでという事で」

第１４話　警備隊の仕事風景（前書き）

珍しく早く出来上がった……
書いてて自分でもビックリ。
いつもこれぐらいスラスラ書ければいいのに……

第１４話　警備隊の仕事風景

「この野郎！　待ちやがれっ！」

「くそっ！　しつけぇ連中だぁ！」

昼下がりの街中、零治が率いる警備隊がゴロツキ相手に大捕り物を繰り広げている。

「隊長っ！」

「お前達はそのまま追跡を続行しろ！　オレは迂回して反対側に回りこむ！　この先の路地で挟み撃ちにするぞ！」

「了解しました！」

零治は部下達にそう告げ、脇道に逸れ、迂回路を全力疾走する。

「ぜぇ……ぜぇ……。こ、ここまで来れば……」

「大丈夫だと思ってるのか？」

「ゲェっ！？　て、てめぇ、いつの間に！？」

「これから捕まる奴にそんな事を説明をする必要はないな」

そうしてる間に、警備隊達が反対側からやって来る。

「さあ、これで逃げ道は無くなったぞ。どうする？」

「うっ……。く、くそぉっ！」

ゴロツキは手に持ってる大太刀構える。

「フンッ！　そう来るか……。おい、お前ら。丁重にお相手してやれ」

「えっ！　わ、私達がですか!？」

「し、しかし隊長、我らの武器は六尺棒なんですが……」

「その上、相手は大太刀を持った大男っスよ。正直分が悪いんっスけど……」

零治が引き連れてきた三人の部下は、まだ実戦経験が無いためうろたえてしまう。

しかし、だからといって彼らを甘やかすほど零治は甘くはない。

「なんだお前らぁ？　こんな奴相手にビビッてんのか？　オレは新

人だからって甘やかすような事はしないぞ。ほら、日頃の訓練の成果を見せてみろ」

「わ、分かりました」

警備隊の一人が武器を構え、ゴロツキの前に進み出る。

「うおおおおっ！」

隊員は気合を入れながら武器を振りかぶり、ゴロツキに向かって突進し、攻撃を仕掛けるが……

「ちっ！　この野郎っ！」

「ぐあっ！？」

ゴロツキはその攻撃を上手くかわし、隊員を蹴り飛ばした。

「はぁ……なにしてんだよ。ほら、次だ。さっさとかかれ」

「は、はいっ！　……でえええいっ！」

次の隊員が勢い良く突撃する。が……

「あっ、あらっ！？」

勢いをつけすぎたせいか、足をもつれさせ、派手に転び自滅してしまった。

「きゅう……」

「はぁ……情けない……」

零治はそう言いながら、顔を手で覆い俯く。

「へっへっへ。なんだよ、大したことねぇなぁ」

二人の隊員が醜態をさらしたため、ゴロツキの顔には余裕が現れ、零治達に挑発的な言葉を投げかけてくる。

「おいおい、どうする？　このまま舐められっぱなしでいいのか？」

「俺にだって意地は有るっス！　一泡吹かせてやるっスよ！！」

「よーし、その意気だ。いいとこ見せてみな」

「行くっス！　……でりゃあああ！」

次の隊員が六尺棒を縦に振り上げながら突撃する。

（ああ、あれじゃダメだな……。ったく、どいつもコイツも……）

零治がそう思っていたその時……

「貸してみろ」

「へっ？」

突如、隊員の背後から現れた女性が、ひょいっと棒を奪い取り、そのままゴロツキの脳天に強力な一撃を叩き込んだ。

「ぐえっ！？」

あまりにも突然の出来事だったので、ゴロツキは動くとすら出来ず、呻き声を上げて地面に倒れこんだ。

「まったく貴様ら。この程度の相手に手こずっていてどうする？」

「か、夏侯惇将軍……」

「す、すみません。助かりました」

「まったく……貴様ら、それでも我が軍の兵士か？　我らが曹操様に弱卒は不要ぞ！」

隊員達に鋭く叫びかける春蘭。その迫力は、場所が戦場であろうが街中であろうが一切変わる事は無かった。

「は、はいっ！　申し訳ありません！」

三人の隊員は姿勢を正し、大声で謝罪する。

「春蘭。もうその辺で勘弁してやれ。お前ら。ここはいいから、そこに転がってるバカをふん縛って連行してさしあげろ」

「えっ？　この大男を俺らだけで運ぶんスか……？」

「それぐらいやれよ……。それとも、今回の失態の件の始末書を書かされたいのか？」

「わ、分かりました。運びますから、始末書だけは勘弁してください。……おい、お前らはそっち持て」

「お、おう」

「ちょっ！？　コイツ……重っ……！」

隊員達はウンウン唸りながらゴロツキを抱え運び、その場を後にする。

「すまんな春蘭。おかげで助かった」

「やれやれ。お前の警備隊の隊員は、少々たるんでいるのではないか？」

「そう言ってくれるな。ウチはタダでさえ人手不足な上に、今回は新人達で編成していたからな」

「それで、責任者自らが陣頭指揮か。だが、そろそろ正規軍から人手を借りてるこの状況を改善してもらいたいものだな」

「それに関しては努力するさ。……で、今日はどうした？　お前が一人で街を出歩くとは珍しいじゃないか」

「珍しくて悪かったな。私が一人で買い物に来るのがそんなに不満か？」

「誰もそんな事言ってねぇだろ。何か探してるんなら案内してやるぞ。オレが街に詳しい事は知ってるだろ？」

「ふむ。では頼むとしようか」

「おう。で、今日は何をお求めで？」

「下着だ」

「……はっ？」

零治は春蘭の口から思いもよらぬ物の名前が出て来たため、きょとんとした顔で間抜けな声を出す。
その姿を見た春蘭は、零治が聞き取れてないと勘違いしたのか、更に大声を出す。

「下着だと言っている！」

「……」

零治はどう反応していいか分からず、黙り込んでしまい、短気な春蘭は更に大声で、街の大通りで下着下着と連呼しだす。

「聞こえんとでも言うつもりか？　下着を買いに来たのだ、下着を！」

「だーーっ！　そんなに大声で連呼すんな！　周りが見てるだろっ！」

「……ふん。小心者めが」

（お前の神経が単に図太いだけだろ……）

「まあ、男である貴様に女物の下着の店の場所を聞くのは野暮だったな。ふはははははは！」

何を思ったか、春蘭は勝ち誇ったように高笑いしながら言う。

「いや、知ってるぞ」

「……なに？」

流石の春蘭も意外と思ったのか、零治が店の場所を知ってると言ってきたので、ポカンとした表情になる。

「流石に品揃えまでは知らんが、どこにどの店があるかは把握してるぞ。道を聞かれる事なんか日常茶飯事だからな」

「そ……そうなのか……」

「若い子によく聞かれる店もいくつか知ってる。そこで良いんなら案内するぞ？」

「あ、ああ……」

「なら、ついて来な」

そうして二人は店を目指し、移動する。

……

……

…

「まずはここだな」

「ここはダメだ。前に来た事があるが……半裸の筋肉達磨が踊りながら接客に出て来て、思わず叩き斬りそうになったぞ」

「半裸の筋肉達磨……？　ああ、貂蝉の事か。そこまで悪い奴じゃないぜ。変態には違いないが」

「アイツの名前なんぞどうでもいい。ともかくここでは買わん！次！」

「はいよ」

二人は次の店を目指し移動する。

……

……

…

「次はここだな」

「ここもダメだ。ここの店員は私が何を着ても、お似合いですよとしか言わんのだ」

「それはホントに似合ってたからじゃないのか？」

「私が最初から着ていた下着を着て出ても、お似合いですよと言ったのだぞ？」

「……それは、微妙だな」

「ともかく、次だ、次に案内しろ！」

二人は次の店に足を進める。

……

……

…

「じゃ、ここは？」

「ここもダメだ。ここの生地は妙に硬くて、私の肌には合わん！」

「なるほど……。なら、春蘭はどういうのがいいんだ？」

「なんでもいい」

（そういう注文が一番困るんだよ……）

「ともかく次だ、次！」

「はいはい……」

二人は足を進めるが、流石の零治も少々ウンザリしてきてる様子だ。

……

……

…

「後は、ここぐらいだな。ここがダメならオレは帰らせてもらうぞ……」

「ここは初めて来るな」

「ならここで決まりだな。じゃ、オレは帰って報告書を書かなきゃならんから……」

零治はそう告げ、その場を後にしようとしたが……

「ここまで来たんなら最後まで付き合え！」

春蘭に後ろからコートの襟首を掴まれ、そのままズルズルと引っ張られてしまう。

「ちょっ！？　おいコラ！　離せ！　オレは仕事があるっつってんだろうがぁ！」

「ええい！　ゴチャゴチャとうるさいぞ！　いいから来いっ！」

抵抗もむなしく、零治は店内に連行されてしまう。

「春蘭、オレは男だって分かってるのか？」

「そんな事分かってるぞ？」

（絶対に分かってない顔だな、そりゃ……）

「いらっしゃいませー」

「うむ」

「……」

女性店員の一人が営業スマイルを浮かべながら丁寧に挨拶をし、春蘭は満足げに頷くが、零治は黙ったまま顔を右手で覆い、俯いてい

た。

「あら、これは夏侯惇様に音無様じゃありませんか。いらっしゃいませ。今日は彼氏を喜ばせるための下着をお探しですか？」

「ちょっと待て！　どこの誰が彼氏などと……っ！」

春蘭は顔を真っ赤にして反論するが……

「でも、殿方に真名で呼ばせるだなんて……ねぇ？」

「ねぇ？」

（さっきの会話を聞かれてたか……）

「……」

一人の店員が零治に、非難するような鋭い視線を向ける。

「ん？　どうした？」

「音無様……。神威様というお人が居るのに……最低です……」

どうもこの店員は零治と瑠利亜が恋仲であると勘違いしているよう

である。
たしかに、はたから見ればそう見えるのだろうが、零治はそれは誤解である事を溜め息交じりに説明する。

「あのなぁ、アイツとはそんな関係じゃないと以前説明しただろ。それと、春蘭ともそんな関係じゃないからな」

「では、なぜ真名を？」

「これには深い理由がって、おいこらそこ！　その紐はなんだ、その紐はっ！」

春蘭が店員が持って来た下着を指差しながら怒鳴り散らす。
それは、下着というよりただの紐である。はたしてこんな物を下着と言って良いのだろうか。

「あら、こちらは西方の職人が精魂込めて織り上げた、究極の紐下着ですわ」

「そんなの下着とは言わんだろうがっ！」

「では、こちらは……？　さる名山で織り上げられた、秘伝織りの下着ですの」

もう一人の店員が持って来たのは、透け透けの布が使用された下着である。先程の紐下着と違い、ちゃんとした下着の形はしているの

だが、布地があまりにも薄いので向こう側が透けて見えている。
これも下着と言える代物とは思えない。

「それはあれか！　バカには見えない布か何かか！　向こうの景色が透けて見えるじゃないか！」

「流石お目が高い。いやらしい心を持っている者には見えない布地で作られているのですわ」

「それ意味がないだろうがっ！」

（この店って、こんなきわどい下着を取り扱っていたのかよ……）

「おい音無！　お前も何とか言えっ！」

「オレにどうしろと……？」

「おやめなさい！」

突如、店内に凛とした声が響き渡り、零治や春蘭はおろか、二人を囲んでいた店員たちも動きを止めてしまう。

「……まったく、どこの田舎者が騒いでるのかと思えば……。呆れて物も言えないわ」

「か……華琳様っ！？」

「華琳……それに、秋蘭も……」

「あら零治。今日は仕事だと言っていなかった？」

華琳が訝しげな顔で聞いてくるので、零治は疲れ果てた声で事情を説明する。

「……仕事として春蘭をこの店に案内して来たんだが、まさか買う所にまで付き合わされるとは思わなかったんでな……」

「まあ……そんな事だろうとは思っていたが」

付添いの秋蘭がそう言う。

「だろう。あろうことかこの男が、店員にこんな下着を勧めさせようとするのだ……！」

「……」

「……」

華琳と秋蘭が零治に刺すような視線を向ける。

「……誤解だっつーの。だからそんな眼で見るな」

「あ、あまつさえ、私と音無の事を……そ、その……だな！　まったくもう、訳が分かりませぬ！」

「それは姉者が悪い」

「それは春蘭が悪いわ」

「それは春蘭が悪い」

三人から全否定を食らう。

「なんですと！」

「女性物の下着を売る店に男連れで来れば、その連れはそれなりに近しい関係と考えるでしょうよ」

「姉者。音無が男だと……忘れているのではないか？」

「ちゃんと覚えてるに決まっているだろう！　コイツが男だと忘れた事など、一度とてあるものか！」

「なら、男と女の違いをこの場で言ってみろよ」

「おう。それは……」

「それは？」

「金的を蹴れば悶絶する！」

自信満々に胸を張って、春蘭は大声で答えた。

「……」

「……」

「……」

春蘭のぶっ飛んだ答えに、その場の空気が凍りつき、三人は眼を丸くしていた。

「な、なんだその眼は！」

（当たり前だろ……）

「……今回ばかりは部下の無知を詫びさせてちょうだい。零治」

「いや、いいんだ……」

「姉者。姉者の下着は私が選んでやるから。な？　こっちへ来い」

「お？　おう……？」

「華琳様。申し訳ありませんが、私は我が愚姉の面倒を見ねばなら

ぬようです。代わりに音無がお相手いたしますゆえ、それでご寛恕賜わりたく」

「……仕方ないわね。いいわ、行って来なさい」

「音無。すまんが、華琳様のお相手を頼むぞ」

「オレがここから出るという選択肢は……？」

「ある訳ないでしょう。しっかり私の相手をなさい。いいわね、零治」

「へ～い……」

「ほら。行くわよ」

「はぁ……」

零治はウンザリした表情で華琳の後に続く。

「……」

零治の目の前には、華琳が選んだと思われる、たくさんの女性用の下着がズラリと並べられている。

「これはアレか？　店の一角を指差して、あそこからあそこまで全

部頂戴、とかそういうノリか？」

「誰がそんなバカなお金の使い方をするのよ？」

「違うのか？」

「違うわよ。ここから必要な物に絞り込むのよ」

「ふ～ん。どうやって？」

「本当は秋蘭に選んでもらうはずだったんだけど……」

華琳はそう言って、零治に意味深な視線を向ける。

「……」

零治は無言で自分を指差す。

「察しがいい子は嫌いじゃないわよ？　零治」

「はぁ……最悪だ……」

零治はそう言いながら俯く。

「ほら、始めるわよ？」

「ああ……」

「まずは……これはどう？」

華琳は姿見を前にして下着をあてがいながら聞く。

「う～ん、少し地味だな。……こっちの淡い色をしたヤツの方が似合うと思うが？」

「あら、渋ってた割にはちゃんとやってくれるんじゃないの」

「命じられたからにはちゃんとやるさ」

（でないと、後が怖いしな……）

なにせここには春蘭と秋蘭も居るのだ。不真面目な態度を取ったら二人から何をされるか分かったものではない。

「そう。ならこれは要らないと……。じゃあ、これは？」

「……余計な装飾が多いな。もう少し装飾が少なめの物にしたらどうだ？」

（なんでコイツ顔色一つ変えないのよ！　せっかく零治の事を動揺

させてやろうと思ったのに！）

華琳は零治があまりにも慣れてるのを疑問に思い、内心の動揺を表に出さないように落ち着いた態度で話しかける。

「零治。貴方、随分と慣れてるのね？」

「ん？　ああ、そりゃ身の回りに女が三人も居るからな」

「あら、あの子達の下着も貴方が？」

「ああ。よく買い物に付き合わされてたからな。嫌でも慣れるさ……」

（なるほど。これは思ったより手強そうね。でも、私だって負けないわよ！）

そう思い華琳は次の下着を手に取る。それも、かなりきわどいデザインの……

「これは……どう……？」

どうも本人も恥ずかしいらしい。

「……」

（ん？　効果はあったかしら？）

零治が黙ったまま見つめてるので、華琳は上手く行ったのかと思う。

だが……

「……そういった下着は男が出来てから着けるべきだろ？」

「なっ！？」

真顔で返答されてしまう。どうやら効果はなかったらしい。

「華琳。オレを動揺させたいと思ってるんなら諦めろ。その程度の事じゃオレは動揺しないぞ」

「い、言ったわね！　見てなさい！　必ず貴方を動揺させてやるんだからっ！」

「おい。目的の趣旨が変わってるぞ……」

「うるさいわね！　早く次の下着をよこしなさい！」

（やれやれ。怒らせちまったか……）

零治はひょいっと肩をすくめる。

「……」

「……」

少し離れた位置から二人のやり取りを、春蘭と秋蘭は黙って見つめる。

「楽しそうだな、華琳様……」

「まったく、華琳様の事となると気が付くのだな、姉者は。……羨ましいか？」

「う、羨ましくなど……うぅ」

やはり羨ましいらしい。

「まあ、買い物が終わればお茶の時間の一つも取れよう。だがまずは自身の下着を選ばねばな、姉者」

「うむ……」

春蘭は秋蘭に言われ、辺りの売り場を見渡しだす。

「それにしてもなぜ武人たるこの私が、こんな下着までわざわざ選んで買わねばならんのだ……おお？」

「何か良い物が見つかったか？　姉者」

「なんだ、良い物が有るではないか！」

そう言いながら春蘭が手に取ったのは……

「三枚一組で……」

「ちょっと待てい！」

秋蘭がいつになく珍しく、声を張り上げる。

「な、何だ……？」

「それだけはやめろ！　いや、むしろそれを選んだら私は姉者との縁を切る！　切らせてもらう！」

「おう……？　分かった……これはやめればいいんだな、やめれば……？」

「……はぁ。もう姉者は座っていればいい。姉者の下着は、私が選

ぼう」

「うむ……。なら、お前に任せるぞ……」

……

……

…

「……」

一同は買い物を終え、店を後にしたが、華琳はえらく不機嫌な様子だ。

「なにを仏頂面してんだよ？」

「貴方、分かってて聞いてるの……？」

「さあな？」

「貴様ぁ！　さては、華琳様の下着を真面目に選ばなかったんだろぉ！」

春蘭は零治に剣を突き付けながら言う。

「おい。街中でそんな物騒な物を抜くんじゃない」
「やめなさい、春蘭。零治はちゃんと真面目に選んでくれたわよ」
「は、はあ……。それならいいんですが」
「それより、春蘭はちゃんと買えたのかしら？」
「もちろんです！　三枚一組の……」
「……秋蘭？」

眼を閉じて静かに問いかける華琳。
秋蘭はビシッと姿勢を正して答える。

「は。全身全霊をもって阻止いたしました」
「結構」
（よりにもよって、なんて物を選んでんだよ……アイツは……）
「……？　よく分かりませんが、それは秋蘭に止められたので、秋蘭に選んでもらいました」
「それは、ちゃんと買えたとは言わないでしょう」
「はぁ……」

「今度は零治にでも選んでもらいなさい」

「それは勘弁してくれ……。じゃあ、オレは行かせてもらうぞ。帰って報告書を書かなきゃならないんでな」

零治はそう告げ、その場を去ろうとするが……

「待ちなさい」

「ん？　なんだよ、まだ何かあるのか？」

「……」

華琳は黙ったまま零治を睨み付けてる。次第にわなわなと体を震わせながら……

「華琳？」

「ああっ！　やっぱり負けたままなんて私の気が済まないわ！　零治、もう一件行くから付き合いなさい！」

「はあっ！？　いきなり負けたとか、なに訳の分からない事言ってんだよ！」

「黙りなさい！　次の店では必ず貴方を動揺させてみせるわ！　さあ、行くわよ！」

「おい！　オレは帰って報告書を……」

「そんな物は明日でも構わないわ！」

（そんな物!?　報告書をそんな物って言ったぞ！　コイツ!!）

「春蘭、秋蘭！　零治が逃げないようにしっかりと見張ってなさい！」

「はっ！」

「そういう訳だ。悪いが付き合ってもらうぞ、音無」

春蘭は剣を、秋蘭は弓を零治に突き付け、逃げないようにしっかりとガードを固める。

（……まったく。華琳も華琳なら、この姉妹も姉妹だな）

零治は内心呆れ果ててしまうが、この状況、どう見ても逃げると後が大変なので、零治は諦めたように力なく答える。

「はぁ……。分かったから。付き合うからその物騒な物を引っ込めてくれよ……」

「ふんっ！　そんな事を言って、逃げるつもりなんだろ?　そうは

いくか！」

（いや、確かにその気になれば逃げれるが……それをやったらオレ、二度と城に戻れないと思うんだが……）

「音無の事を信用してない訳ではないが、これも華琳様の命なのでな。すまんが我慢してくれ」

「はいはい……」

「話はまとまったわね？　なら、行くわよ」

「華琳様の行くところなら、どこへでも！」

「喜んでお供いたします」

（ったく、コイツらは……。まあ、たまにはこんな日があっても悪くないか……）

零治は心の中でそう思いながら、華琳達の後に続いた。

第１４話　警備隊の仕事風景（後書き）

瑠利亜「今回は珍しく早かったですね？」

作者「ああ。自分でも驚いてる」

奈々瑠「いつもこのくらいのペースで書けないんですか？」

作者「仕事もある身だから、それは無理」

零治「そして今回も下着関連の話かよ……」

作者「いや～、この話は外したくなかったからな」

臥々瑠「以前の話に、あの怪物を登場させたから？」

作者「だから、怪物じゃないと何度言えば……。そんな事言ってると貂蟬をここに登場させるぞ？」

臥々瑠「ひっ！　それは勘弁して！」

零治「それは置いといて、華琳とのやり取りは原作とは少し違うな」

作者「ん？　ああ、だってお前が一刀みたいにうろたえる姿なんか想像つかないし」

瑠利亜「ああ、確かに」

奈々瑠「むしろ、そっちの方が不自然ですよね？」

臥々瑠「だよねぇ～」

零治「確かにそうかもしれんが……」

作者「じゃあ、一刀みたいな扱いがお望みか？」

瑠利亜「春蘭に殺されそうになったり」

奈々瑠「桂花にボロクソに罵倒を浴びせられたり」

零治「いや、そこはあまり変わってないだろ」

臥々瑠「華琳に殺されそうになったり」

零治「……」

作者「まだ聞きたい？」

零治「いや、もういい。十分理解したから……」

作者「それはなにより。では、今回はこの辺で失礼します」

第１５話　血塗られた過去（前書き）

重い内容の話を書くさい、それっぽいセリフを考えるのは思っていた以上に大変な事でした。
今回の話を書いてて、その事を痛感させられました。

第１５話　血塗られた過去

「ここにも居ないか……」

零治は誰かを探しているのか、城内のあちこちを歩き回る。

「う～む……一体どこに行ったんだ……？」

零治は一人ブツブツと呟きながら吹き抜けの廊下を歩く。
その時、反対側から桂花が現れ、眼が合った。

「……げ」

桂花は零治と眼が合った途端に、汚い物でも見るかのように嫌そうに表情を歪める。

「……」

桂花の態度に零治は内心呆れながらも、華琳の居場所知らないか聞こうとするのだが……

「近寄らないでっ！　感染るからっ！」

桂花の開口一番がこれである。

「何がだよ？」

「私の口からとても言えない何かよ！」

「やれやれ。想像力が豊かな事で……。おい、桂花。華琳がどこに居るか知らないか？」

「ふんっ。たとえ知ってもアンタなんかに教えるもんですか！　地の底を這いずり回ってお探しなさい」

根っからの男嫌いの桂花は相変わらず零治に対して高飛車な態度を取り続けている。

だが、そんな事を言われても引き下がるほど零治も甘くはない。

「そうか。教える気が無いんならコレを使うまでだ……」

零治はそう言いって、不敵な笑みを浮かべながらコートの下から小さな茶色の瓶を取り出す。

「ち、ちょっと！　何よそれ！？」

「ん、自白剤だが？」

「じ、自白剤っ！？」

「ああ。教える気のない奴には薬を使うのが一番だからな。さあ、口を開けろ……」

零治は小瓶を片手に、桂花にじりじりと近寄る。

「ちょっと！　冗談じゃないわよ！　誰がそんな得体の知れない薬なんか飲むもんですかっ！」

「……何をしてるのだ？　二人して……」

「ん？　おお、秋蘭。いいところに来てくれた。華琳がどこに居るか知らないか？　部屋にも玉座の間にも居ないし……桂花も知らないようだからな」

「だ、誰が知らないなんて言ったのよ！　知ってるけど教えてやらないって言っただけでしょ！　だいたいアンタ、私に無理やり自白剤を飲ませようとしたくせに、よくそんな何食わぬ顔をする事が出来るわね！」

「……自白剤？」

そう聞いた秋蘭の視線が、零治の手に有る小瓶に止まる。

「音無。確かその瓶に入ってるのは、お前が吸ってるたばこの着香剤じゃなかったか？」

「へっ……？」

「ハハハハハ。バーカ、引っかかってやんの」

「なっ！　だ、騙したわねぇ！！」

桂花がわなわなと体を震わせ、顔を真っ赤にして憤慨する。
それを見て、秋蘭は呆れたように言う。

「やれやれ。桂花もそうだが、音無も音無だぞ。二人してタチの悪い事を……」

「ハハハ。いや、すまんな。やられっぱなしじゃ気が済まないタチなんでな。で、肝心の華琳は？」

「華琳様なら、今日は一日お休みだぞ？」

「ん？　そうなのか……」

「聞いていなかったのか？」

「ああ。効率的な連絡手段についての案を出すように言われてな、今日までにまとめて、報告に来るよう言われてたんだが。華琳が休

みの日を忘れて……なんて事は無いよな？」

「それは、アンタの仕事が遅いのが悪いんでしょ。今日までの仕事なら、昨日のうちに終わらせて報告しておけば済む事じゃない」

「内容的に、間違いなく今日になるがいいかと確認はしたぞ。それで問題ないって話だったんだが」

「……やれやれ。また悪い癖か」

「悪い癖？」

「音無は華琳様が一日仕事を休んでいるところ……見た事があるか？」

「なるほど。そういう悪い癖か」

零治は納得したように頷く。

（昼間休んだり、街に遊びに出てる姿は見た事あるが……。丸一日休んでる華琳は確かに見た事が無いな……）

「ご自身の休息と公務を比べれば、必ず公務を優先されるお方だからな……。今日の休みも、私と姉者で無理やりに休ませたのだ」

「なら、春蘭は？」

「華琳様の代理で、季衣と一緒に視察に出掛けている」

「よく華琳があの二人で納得したな……」

「……軍関係の視察だったからな。まあ、色々あったのだよ。こちらも」

笑みを浮かべながらそう言う秋蘭。
それを見て、零治はその色々とやらを即座に察する。

（華琳を説得するのに春蘭は絶対に役に立たないからな。それどころか寝返る姿が眼に浮かぶぜ……）

「いや、お疲れさん」

秋蘭の苦労を察しながら、労いの言葉をかける零治。

「なに、大した事ではないよ」

「なら、この書類も今日は見せない方がいいな」

「なんだったら預かってあげましょうか？」

桂花が悪意の有る笑みを浮かべながら言う。だが、そんなあからさまな悪意の籠もった笑みを浮かべれば何を考えてるのかなんてバレバレである。

だが、あえて零治は桂花に書類を手渡した。

「そうか。ならお前に預ける。無くすんじゃないぞ？」

「ええ、任せといて」

（くっくっく。バカな男ね。こんな物、後で焼却炉にでも持って行って……）

桂花は内心、零治の行動をほくそ笑む。しかし……

「奈々瑠、臥々瑠、ちゃんと見ていたな？」

「はい」

「うん、バッチリと」

零治に呼ばれて、奈々瑠と臥々瑠が吹き抜けの廊下の横に生えてる茂みに中からひょいっと顔を出してきた。

「ひゃあ！？　ア、アンタ達、どこから出てきてるのよっ！」

「そんなの貴方には関係のない事でしょう？　それよりも、桂花さん……」

「な、何よ……？」

「兄さんに預けられたその書類、どうしようと貴方の自由ですが、その後、貴方がどうなろうと全て自己責任になる事をお忘れのないように……」

奈々瑠が眼を細めながら脅すように言ってくるので、桂花はその迫力に気圧されそうになるが負けじと聞き返す。

「どういう意味よ、それ？」

「その書類には特殊な薬剤が塗り込まれていてね、アタシ達の鼻じゃないと嗅ぎ分けられない匂いがするんだよ。ああ、ちなみにその匂いは何をやっても消す事も出来ないからね」

「なっ！？」

「つまり、それをどこに持っていこうが、どこに隠そうが私達の鼻は誤魔化せないという事です。これだけ言えば私達が何を言いたいのか分かりますよねぇ？」

桂花の顔が青ざめていく。自分の考えが完全に見透かされている事を流石の彼女も自覚したようである。

「兄さん、もしも桂花さんがあの書類を捨てようとしたらどうしますか？」

「ちょっと！　誰も捨てるなんて一言も……っ！」

だがそうしようとしていたのは紛れもない事実であるし、零治が思いもよらぬ手を使ってきたので、今の桂花には、いつもの冷静さはどこにも無く、どう対処したものかとうろたえていた。

「殺しちゃっていい？」

「ちょっと！？」

「臥々瑠、それは流石にダメだろ」

「ほっ……」

臥々瑠の過激な発言に、零治は首を横に振ってダメ出しをする。それを見た桂花は、ホッと胸を撫で下ろし安堵する。だが……

「せめて半殺しにしておけ」

「なっ！？　アンタねぇ、この二人を止める意思は無いの！？」

「無いな」

零治はキッパリと答える。

「……三人とも、桂花は我が軍の大事な軍師なのだ。頼むからそういう真似はしないでくれよ……？」

それまで無言で零治達のやり取りを見守っていた秋蘭が呆れながら口を挟んでくる。

「安心しろ、冗談だ」

「……とてもそうは見えなかったのだが」

「それは気のせいだろう？」

シレッとした態度を決め込む零治。

「ああもうっ！　いいわよ！　返すわよ、こんな物！」

このままでは自身の身が危ないと判断し、桂花は悔しそうな顔で書類を零治に突き返す。

「では、私達は失礼しますね。書類の安全も確保できたようですので」

「ああ」

「臥々瑠、行くわよ」

「うん」

奈々瑠と臥々瑠は茂みから飛び出し、小走りにその場を立ち去って行き、桂花はその後ろ姿を、悔しげな顔で睨み付ける。

「チッ！　あの二人さえ居なければ……」

「……何か言ったか？　桂花……」

「別に……」

「はぁ……二人ともよさないか。……それと音無、その書類だが、急ぎのものでないなら、明日の朝にしてくれると嬉しいのだが。華琳様に何か言われたら、私の名を出して構わんぞ」

「それは構わんが……そういった気遣いをすると華琳が怒るんじゃないか？」

「うむ。理解はしてくださるだろうが、納得はされないだろうな」

（やれやれ。難儀な王様だぜ……）

「なら、書類の事は警備の仕事が忙しくて忘れていた、という事にでもしておこう」

「そうか。気を遣わせて悪いな」

「気にするな。じゃ、書類の事を忘れるために、警備の仕事に行って来る」

「そうか。なら城を出るなら、向こうの庭を通った方が近道だぞ」

「ちょっと、秋蘭！」

桂花が慌てたように声を出す。

その反応で、零治は秋蘭の言った言葉の意味を即座に理解する。

（なるほど……）

「そうか。礼を言う」

零治はそう言い、その場を後にし、秋蘭が言った近道に足を運んだ。

……

……

…

「こっちだよな……？」

零治は秋蘭に言われた道を進んでいく。すると、そこには……

「……やっぱり」

「すぅ……すぅ……」

零治の視線の先には、ハンモックのような物に揺られながら、すぅすぅと寝息を立てながら寝てる華琳の姿があった。

「さて、どうしたものか……」

「……ん、んぅ……」

「……ん？　顔が赤いな。ひょっとして暑いのか？　……こっちの世界じゃ使えるか分からんが試してみるか」

零治はそう言い、右手を上に掲げ指をパチンと弾く。すると、やさしいそよ風が華琳に向かって吹き付ける。

「ふむ。上手くいったな。……これなら、大抵の魔法は使用可能だな」

（へぇ。こんな事も出来るのね。魔法というものは……）

華琳は内心感心する。実は彼女はつい先ほどまで起きていたのだが、零治の気配を感じ取ったので、今はこうして寝たふりをしているという訳である。

（どうして私は寝たふりなんかしてるのかしら？　この曹孟徳ともあろう者が、どうして相手の様子を窺うような真似を……？）

「しかし……」

（ん？）

「この少女が、あの曹孟徳とはな……。オレの知ってるイメージとは随分かけ離れてるな……」

（……いめぇじって何の事かしら？　天の国の言葉のようだけど……）

「……」

零治は黙ったまま寝ている華琳の姿を見つめている。

（……ひょっとして、気付かれたのかしら……？）

「なぜ……」

零治は誰に言うのでもなく、一人ポツリポツリと、嘆くように呟く。

「なぜ、彼女のような王が……オレの世界には存在しなかったんだ……」

（零治？）

「華琳のような指導者が居れば、あの戦争もあそこまで酷い状況にはならなかっただろうに……」

（戦争？　天の国でも戦争が……？）

「もし、彼女のような人物が居たら、オレも今とは違う生き方が出来たのだろうか……？」

（零治……。貴方、ひょっとして、哀しんでるの……？）

「……」

その場を静寂が支配する。そんな中、零治は一人口を開く。

「華琳……」

「……」

「……起きてるんだろ？」

（っ！？）

「怒らないから起きろよ。そうやって寝たふりを続けるのも疲れるだろ？」

「……」

零治に言われ、華琳はゆっくりと上体を起こす。

「おはよう。よく眠れたか？」

「……」

華琳は何も言わずに、気まずそうな顔で眼を伏せている。

「ん？　どうした？」

「零治。ごめんなさい……」

「何が？」

「その、盗み聞きをするつもりは無かったの。だから……」

「ああ、その事なら気にするなよ。オレが一人で勝手に喋ってただけなんだから」

「そう……」

「……」

「……」

お互いに何も言わなくなり奇妙な沈黙が続くが、やがて華琳が口を開く。

「零治……」

「ん？」

「よければ、貴方の事を聞かせてくれないかしら？」

「オレの事？」

「ええ」

「そう言われてもなぁ……一体何を話せと？」

「何でも構わないわ。貴方が天の国でどう過ごしてたとか、そんな事で構わないの」

「……別に話してもいいが、聞いても決して気分のいい話じゃないぞ。それでもいいのか……？」

「構わないわ」

「そうか。……では、オレがもと居た世界で何をしていたか……だが……」

「ええ」

「……」

「……」

華琳は零治が続きを話すのをただジッと待つ。やがて零治は重い口を開く。

「それは……人殺しだ……」

「人殺し？」

「オレはもと居た世界では暗殺者だったのさ……」

「暗殺者……」

「ああ」

「さっき戦争がどうのと言ってたけど、それと関係が？」

「そうだ。オレはもとの世界でも軍関係の仕事をしててな、そこの特殊部隊の暗殺部隊の部隊長を務めていたんだ……」

「そうなの。でも……なぜ貴方の世界でも戦争が？」

「……少し長くなるぞ？」

「いいわ。話して」

「分かった……。実は、オレの世界は一度崩壊をしてな……」

「世界が……崩壊……？」

「ああ。ある日突然、原因不明の大陸変動が起きてな。その結果、大陸の地形は大きく変わってしまい、世界の人口の約半数以上が死に絶えたんだ……」

「世界の……半数以上が……っ！」

華琳の表情が驚愕のものに変わる。だが当然の反応と言える。この世界でも大勢の死者が出る争いは確かに起こっているし、過去のもそういう事があったのも事実。

だが零治の口から聞かされた話は、それを遥かに超えていたものだった。

「……今なら聞くのをやめる事も出来るぞ？」

気遣うように零治は言う。正直こんな話は休日の身である人間に聞かせるような話ではない。

「いいえ、最後まで聞かせて」

だが華琳は首を横に振りそれを断り、最後まで聞こうとする。

「分かった。……でだ、その大陸変動が起きてから数日後、大陸の中央部に有った山岳部から、それは突然現れた」

「現れた……？　何が？」

「……オレの世界の人間が考えもしない、技術と知識で構成された巨大都市だ」

「巨大……都市……」

「ああ。生き残った人々は、その都市に有る知識と技術を使って世界を復興、再生させ大きく発展していった。オレの世界に存在する魔法の知識もその都市から得たものなんだ」

「なるほど……。零治、一つ質問してもいいかしら？」

「なんだ？」

「もしかして、貴方の生まれの国に名前が無いのって、その崩壊が原因なの？」

「流石に察しが良いな。そう。世界が崩壊し大陸の地形が変わったため、崩壊前に使われてた国名は全て破棄されたんだ。世界を再生

中の間は『東側』、『西側』と、大ざっぱな名前にしてたのさ。世界の情勢が安定したら、双方の国の指導者は国名を付けるつもりだったんだろうが、そうはならなかった……」

「……その最中に……戦争が起きたのね」

「ああ。そして、その原因は……言わなくても分かるだろ……？」

「その巨大都市を、そしてそこに有る知識と技術を互いが独占しようとしたから……でしょ？」

「そうだ……」

「じゃあ、貴方はその戦争を止めるために戦いに身を投じたの？」

「いや、そんな大層な理由じゃない」

「それじゃあ、一体……？」

「……ただの復讐だ」

「復讐？」

「ああ」

「……理由は？」

「聞きたいのか……？」

「聞かせて」

「……」

零治はしばらく黙り込み、やがて眼を伏せながら重い口を開く。

「オレはその戦争で、すべてを失った……。故郷も、家も、家族も……」

「……」

「もちろんオレだけが被害者じゃない事ぐらい理解してる。ましてや、オレはその戦争の片棒を担いだ人間だ。そんな事を言う資格もない事ぐらい分かっている。だがそれでも許せなかった……。あの戦争を引き起こした、あの腐りきった世界を作り上げた連中が。世界そのものが……っ！」

「零治……」

「だからオレは、そいつらに対して、世界に対して復讐するために……叢雲を手にしたんだ……」

「そう……」

「……」

「零治。貴方はひょっとして、後悔してるの？」

「ん？　どうしてそう思うんだ？」

「私が寝たふりをしてた時、貴方の口ぶりからそう感じたから……」

「……後悔はしていない。いや、しないように意識してると言うべきか」

「つまり、していないのね？」

「まあな。だが後悔しそうになった事は何度だってあるさ。でもそれだけはしてはならない。後悔したら、自分が今までしてきた事のすべてを否定する事になる。どんな理由にせよ、自分がした事には最後まで責任を持つさ。オレが死ぬその時まで……」

「そう。それが分かってるのなら、貴方は立派よ。胸を張っていいわ」

華琳は優しい慈愛に満ちた顔を向け、零治にそう語りかける。

「そうか……」

「……」

「……」

再び、その場を沈黙が支配する。

「零治。もう一つ聞いてもいいかしら？」

「ああ」

「あの三人、瑠利亜達とはどういう経緯で出会ったの？」

「ああ、瑠利亜はオレが居た軍の司令官の秘書官を勤めてたんだが、オレが居た特殊部隊を立ち上げた奴に引き抜かれてな。その時に出会ったんだ」

「何？　その、ひしょかんってのは？」

「華琳を補佐する、秋蘭や桂花みたいなもんだ」

「そう。じゃあ、奈々瑠達とは？」

「あの二人は、さっき話したその巨大都市の内部を調査中に発見し、保護したんだ。それ以来なつかれてな」

「じゃあ、あの二人はその都市の住人って事なの？」

「……いや、正確には違う」

「どういう事？」

「あの二人は……その都市で創られた生物兵器なんだ……」

「兵器……っ！？　あの二人が！？」

「ああ……」

「それにしても、生物兵器って一体……」

「それについては詳しい説明をすると長くなるから省くが、あの二人は例の都市を防衛するために、人間を素体として創られた兵士の一種なんだ」

「……」

華琳は二人の正体を知り言葉を失う。

この世界にだって確かに兵器は存在する。だがそれはあくまで機械的な物だ。生物兵器などこの世界では概念すら存在していないし、そのような物、人道的かつ道徳的な観点で許されていいわけがないのだ。

「あの二人は狼の身体能力と特徴が体に組み込まれていてな。アイツらに犬耳と尻尾があるのはそのせいさ。ちなみに、あの二人は狼に変身する能力もあるぞ」

「なるほど。それにしても……生き物を、ましてや人間を兵器として利用するなんて、恐ろしい考えもあったものね……」

「あの二人はまだマシな方さ……。オレが見た生物兵器の中には、人間を素体にしていながら人としての原形を留めていないものも数多くあったからな……」

「なんて事……。そんな事が許されて良いわけがないわ……っ！」

「そうだな。……人類は強大な力を手にすると冷静な判断力を失ってしまう。それ故に人は神の真似事したくなる。……愚かしい話だ。まあ、叢雲を使ってるオレが言えた義理じゃないが……」

「……どうして？」

「オレと瑠利亜が使ってる武器の総称は神器（ディバイン・アームズ）……。通称、神器（じんき）とも呼ばれてる」

「……でぃば……？　じんき……？　どういう意味なの？」

「『神の兵器』って意味さ……」

「なるほど。でも貴方は神の真似事をした訳じゃないんでしょう？」

「当然だ。そもそも人は神になどなれはしない。なれる訳がないんだ」

「それが分かってるのなら、貴方にはさっきの言葉を言う資格が十分あると私は思うわよ？」

「そうか……」

「ええ」

「……オレはそろそろ行くよ。仕事があるからな」

「そう。なら、しっかり働いてきなさい」

「ああ。……それと悪かったな。せっかくの休日に下らない昔話に

付き合わせちまって」

「気にしないで。私が聞きたいって言ったんだから」

「そう言ってくれると助かる。じゃあな。ちゃんと休めよ？」

「分かってるわよ。早く行きなさい」

華琳はシッシッと、猫を追い払うような仕草をする。

「やれやれ……。それじゃあな」

零治は苦笑しながらその場を去って行った。

「……ふぅ」

その場に取り残された華琳は小さく息を吐き、ハンモックに寝転がり身を預ける。

「……想像以上の内容だったわ。もしかしたら天の国は私達の世界……いえ、それ以上に酷い世界なのかしら？　……零治は復讐のために戦っていたと言っていたけど……今は……今、この私達の世界では、どんな気持ちで戦ってるというの……。彼の眼には、この世界はどういう風に映ってるのかしら……？」

華琳は空を見上げながら一人呟く。

「……今は考えるのはよしましょう。とりあえず今は休まないと……」

華琳はそう言って眼を閉じ、眠りに落ちた。

第１５話　血塗られた過去（後書き）

作者「今日は休んでいいか？　お前の昔話書くのに疲れたから……」

零治「ふざけんな。このコーナー、お前がやりだしたんだろうが」

瑠利亜「まったくですよ。無責任にもほどがありますよ」

臥々瑠「そんなに疲れたの？　今回はそんなに長くないじゃん」

作者「いや、それっぽいセリフとかが全然思いつかなかったから……」

奈々瑠「それは貴方が悪いんでしょうに……」

零治「文才も無い人間が小説を書くと、必ずそうなるんだよ」

瑠利亜「そういう言い方はやめましょう？　全員がそうって訳じゃないんですから」

作者「うおおおっ！　文才を開花させる神よ！　ここに降臨してくれえぇぇぇっ！」

臥々瑠「何してんの？」

作者「オレに足りないのは文才なんだ！　だからここに神を呼ぶ！」

奈々瑠「……」

零治「おい。バカがここに居るぞ……」

瑠利亜「いつもの事でしょう？」

零治「……まあな」

第１６話　黄巾の乱、勃発　前編（前書き）

風邪で体調を崩して、しばらく執筆が止まってしまったため投稿が遅くなってしまいました。
お待たせしてしまって、ホントサーセン。

第16話　黄巾の乱、勃発　前編

「押せ！　押せい！　押し切れぇい！」

春蘭が率いる軍勢は、とある荒野にて暴徒と思われる一団と激しい戦闘を繰り広げている。

「春蘭様！　敵、撤退していきます！」

「何、もうか！？」

「……はぁ。見ての通りです」

春蘭達の視線の先に居る暴徒の一団は、まるで蜘蛛の子を散らすような勢いで逃げ出していく。
その様を見て、春蘭も季衣も呆気にとられている。

「ちっ。益体もない」

「追撃はどうしましょう？」

「そうだな、必要とも思えんが……まあいい。隊列を整えた後、一応出しておけ。ゆっくりでいいぞ」

「はいっ！」

「相手はただの町人。殺さず、追い払うだけにせよ。分かっているな？」

その指示を聞いた季衣の顔がウンザリした表情になる。と言うのも……

「はい。……今日だけで、三度聞きましたから」

「そうか。もう三度目か……やれやれ……。我々は、蜘蛛の子を散らすために訓練をしている訳ではないのだぞ……」

「姉者、こちらも片付いたぞ」

「……ふぅ」

そこへ、別の場所で同じ暴徒の相手をしていた零治と秋蘭がやって来る。

秋蘭は普段と変わらぬ様子だったが、零治は少々疲れてる様子で、小さく溜め息を吐いている。

「おお、秋蘭。どうだった？」

「桂花の言う通りだ。これを……」

秋蘭は暴徒の持ち物と思われる物を春蘭達に見せる。

「やはり黄色い布か……。こちらもだ」

「何なんですかね、これ」

「ふむ……」

「むー……」

「うーん……」

「ううー……」

「むむむー……」

春蘭と季衣は秋蘭の手に有る黄色い布を、渋面を作ってじーっと凝視しながら、唸り声を出して考えてるようだ。

「……二人とも」

「ん、何だ？」

「分からないなら、分からないで構わんぞ」

秋蘭が二人にそう言い聞かせる。これ以上放っておいたら二人を知

恵熱を出して倒れてしまいかねない。

「……そ、そうか。……まあ、それを考えるのは我々の仕事ではないからな。華琳様や桂花に任せるとしよう」

「はーい！」

「追撃部隊が戻ったら撤収するぞ！　帰ったらすぐ華琳様に報告だ！」

「判った。ならこちらの隊も撤収を始めておこう」

「あ、ボクもお手伝いしますー！」

「なら、オレも……」

「いや、音無は休んでおけ」

秋蘭は首を横に振り、零治の申し出をキッパリと断る。

「あ？　なんでさ？」

「音無。お前……疲れているんだろ？」

秋蘭のその言葉に、季衣は怪訝な顔で零治の顔を覗き込みながら聞いてくる。

「えっ？　そうなの？　兄ちゃん」

「なんだ音無。この程度で疲れるとは、だらしないぞ」

春蘭が茶々を入れるように口を挟んできたので、秋蘭は真剣な表情でピシャリと春蘭に黙るように言う。

「姉者は黙っていてくれ」

「ん？　お、おう……」

「……」

零治は黙ったまま何も言おうとしない。

「音無、正直に答えてくれ。実際のところどうなんだ？」

秋蘭は再度零治に尋ねる。流石に答えない訳にもいかないので、仕方なく零治は本音を口にする。

「まあ、疲れていないと言えば嘘になるな。相手を殺さずに戦う不殺戦法は、通常の戦闘以上に神経を使うからな……」

「あー、確かに……」

零治の言葉に、季衣も同意する。

「ならば、尚更お前をこれ以上働かせるわけにはいかん。今お前に倒れられたら皆が困るからな。いいな、音無。お前は休んでいろ」

「分かった。じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおう」

「うむ。それでいい。……では、季衣。こちらの撤収の作業を手伝ってくれ」

「はーい！」

秋蘭は季衣を連れ、自分の率いる隊の方へ足を運ぶ。

（やれやれ……。秋蘭に見透かされるとは、オレもまだまだ甘いな……）

零治はそう思いながらもその辺に有る小さな岩に腰かけ、懐からタバコを取り出し、火を点け煙を吹かし素直に休むのだった。

「フーー……。しかし……連中、黄色い布を持ってるという事は、

やはり……」

零治は自分の世界の知識を思い出すように一人ブツブツと呟く。
そう、彼にとって、三国志の世界で黄色い布を身に付けた暴徒の組織は一つしか思い当たらない。

「ん、どうした音無。何をブツブツ言ってるんだ？」

「ん？　ああ、何でもない。気にするな」

「そうか」

（考えても仕方ない。どうせ今日の朝議でハッキリするだろう……）

しばらくして追撃部隊が戻り、一同は城に帰還するのだった。

……

……

…

「……という訳です」

「そう……やはり、黄色い布が」

その日に行われた朝議は、暴徒の鎮圧から戻って来た春蘭の報告から始まった。

「こちらの暴徒達も同じ布を持っておりました」

「桂花。そちらはどうだった？」

「は。面識のある諸侯に連絡を取ってみましたが……どこも陳留と同じく、黄色い布を身に付けた暴徒の対応に手を焼いているようです」

「具体的には？」

「ここと……ここ、それからここも」

桂花はそう言いながら、広げられた地図の上に磨きぬかれた丸石を置いていく。

「それと、一団の首魁は張角というらしいんですが……正体は全くの不明だそうです」

「正体不明？」

華琳は桂花の言葉に怪訝な表情になる。

「捕らえた賊を訊問しても、誰一人として話さなかったとか」

「……ふむ。剣を振り上げれば逃げ回るくせに、そこだけは口を割らぬか。何やら気味が悪いな」

「やはり黄巾党か……」

「……ですね」

それまで終始報告の内容に耳を傾けていた零治が歴史の知識を口にし、瑠利亜も頷いて同意する。

「ん？　二人とも知っているのか？」

その言葉が聞こえたようで、秋蘭が二人に尋ねる。

「知識としては。一応な……」

「なら、それ以上は言わなくていいわ」

「……ん？」

「天の国の技術や考えは確かに興味深いし、それを説明させるために貴方達を飼っている訳だけど……。歴史そのものは、こちらの世界では完全に再現されている訳ではないんでしょう？」

「んー、多分そうかと……」

首を捻りながら瑠利亜がそう言う。

（そもそも、オレ達が知ってる曹操は男だしな……。それにこの世界は平行世界の可能性が高いからな。そう考えるとオレ達の世界の歴史の記録はあまり役に立たない可能性もあるだろうな……）

「なら、明確な根拠のない情報は判断を鈍らせるわ。そんなもの、占い師の予言と変わらない」

「こないだは占い師の言葉を笑ってたじゃないか」

「アレは私個人の問題だもの。外れたところで、笑い話にしかならない。……けれど、国の問題を占いで解決させる気はないわよ」

「そりゃごもっともですね」

「まあ、敵を呼ぶにも名前は必要だわ。黄巾党という名は貰っておきましょう。それで皆、他に新しい情報は無いの？」

「はい。これ以上は何も……」

「こちらもありません」

「ならば、まずは情報収集ね。その張角という輩の正体も確かめないと……」

その場に何となく気の抜けた空気が漂いだしたが、一人の兵士が駆け込み、状況は一変する。

「会議中失礼いたします！」

「何事だ！」

「はっ！　南西の村で、新たな暴徒が発生したとの報告がありました！　また黄色い布です！」

「休む暇もないわね。……さて、情報源がさっそく現れてくれたわけだけれど。今度は誰が行ってくれるのかしら？」

「はいっ！　ボクが行きます！」

季衣が勢いよく手を挙げ、返事をする。

「季衣ね……」

華琳は顎に手を当てながら、考える仕草をする。

（ん？　いつもなら即断即決なのに、あの華琳が言葉を濁すとは珍しいな……）

「……季衣。お前は最近、働き過ぎだぞ。ここしばらくロクに休んでおらんだろう」

（あー……言われてみれば確かに。まあ、オレも人の事は言えんが……）

「だって春蘭様！　せっかくボク、ボクの村みたいに困ってる村を、たくさん助けられるようになったんですよ……！」

季衣はどうしても助けに行きたいのか、必死の形相で春蘭に訴えかけるが。

「華琳様。この件、私が」

「どうしてですか、春蘭様っ！　ボク、全然疲れてなんかないのに……！」

「そうね。今回の出撃、季衣は外しましょう。確かに最近の季衣の出動回数は多すぎるわ」

「華琳様っ！」

華琳も春蘭の意見に同意するので、さらに声を張り上げる。

「季衣。貴方のその心はとても貴いものだけれど……無茶を頼んで体を壊しては、元も子もないわよ」

華琳は慈愛に満ちた母親のように季衣にそう言い聞かせるが。

「無茶なんかじゃ……ないです」

季衣は不機嫌そうにそう言う。

「いいえ、無茶よ」

「……でも、みんな困ってるのに……」

「そうね。その一つの無茶で、季衣は目の前に居る百の民は救えるかもしれない。けれどそれは、その先救えるはずの何万という民を見殺しする事に繋がる事もある。……分かるかしら？」

「だったらその百の民は見殺しにするんですか！」

「するわけ無いでしょう！」

「……っ！」

華琳の力強い一声に、季衣だけでなく、その場に居る人間全員が思わず身を縮め声を失ってしまう。

「季衣。お前が休んでいる時は、私が代りにその百の民を救ってやる。だから、今は休め」

「ううー……」

「今日の百人も助けるし、明日の万人も助けてみせるわ。そのために必要と判断すれば、無理でも何でも遠慮なく使ってあげるわ。……けれど今はまだ、その時ではないの」

「……」

春蘭の言葉にも、華琳の言葉にも、季衣は下を向いたまま何も言わなかった。

「桂花。編成を決めなさい」

「御意。……では秋蘭。今回の件、貴方が行ってちょうだい」

「何っ！　この流れだと、どう考えても私だろう！　どうして秋蘭が出てくる！」

「今回の出動は、戦闘よりも情報収集が大切になってくると、華琳様も仰ったでしょう。出来る？　貴方に」

バカにしたような視線を春蘭に向ける桂花。しかし、春蘭が情報収集に向いていないのも事実なので反論のしようがなかった。

「ぐ……っ」

「決まりね。秋蘭。くれぐれも情報収集は入念にしなさい」

「は。ではすぐに兵を集め、出立致します」

「秋蘭様！」

季衣が大声で秋蘭を呼び止める。

「どうした。何と言われても、連れては行かんぞ。私とて気持ちは華琳様や姉者と同じだ」

「そうじゃなくって……。あの……えっと……ボクの分まで、よろしくお願いしますっ！」

「ふ……うむ。お主の想い、しかと受け取った。任せておけ」

静かに頷きながら、秋蘭は季衣に笑みを向ける。

「……秋蘭」

続いて今度は零治が秋蘭に声をかける。

「ん、どうした？」

「情報収集をするんなら、奈々瑠と臥々瑠を連れて行くといい。コイツらは耳と鼻が良く利くからな。何か手がかりが掴めるかもしれん」

「ふむ。……との事ですが、いかが致しますか？　華琳様」

「零治がそう言うのなら間違いはないわね。……二人とも行って来てくれるかしら？」

華琳はそう言いながら、奈々瑠と臥々瑠に視線を向け、奈々瑠達は力強く頷きながら返事をする。

「はい。任せてください」

「うん。それぐらお安い御用だよ～」

「ふふ。頼もしいな。……では音無。少しの間、二人を借りるぞ？」

「ああ」

「では二人とも、行くぞ」

「はい」

「は～い」

秋蘭は奈々瑠達を伴い、玉座の間を後にする。

……

……

…

「……」

季衣は無言で城壁の上に座り込み、出発する秋蘭の率いる部隊を黙って見つめている。

「ここ、いいか？」

「あ、兄ちゃん……」

零治は季衣に声をかけ、隣に腰掛ける。

「落ち込んでるのか？　らしくないぞ」

「ボクだって、落ち込むときくらいあるよぅ……」

「さっきの事か？」

「うん……。ボク、全然疲れてなんかないのに……。そりゃ、ご飯はいつもの倍食べてるけどさ」

（普段あれだけ食ってんのに、その倍食ってんのかよ……。むしろそっちの方が心配だぞ）

季衣が大飯食らいとい事は、いつぞやの盗賊団討伐の時に零治も知ってはいたが、流石にそんな話を聞かされては零治も表情を引きつらせてしまう。

「よく胃もたれとかしないな……」

「……にゃ？」

季衣はなんの事かと首をかしげる。

「いや、分からないんならいい……」

「変な兄ちゃん」

「だが、華琳が言うように、今が無理をする時じゃないのは事実だ」

「兄ちゃんまでそんな事言うー！」

「みんな季衣の事が心配なんだよ。その事を分かってやれよ」

「うぅ……そりゃ、分かってるけどー……」

「今は、黄巾党と張角の正体を突き止めるための情報が必要なんだ。季衣に本気で働いてもらうのは、連中の正体がわかった後さ」

「うん……」

「もちろん季衣の気持ちもみんな理解している。だが、まだその時ではない。困っている人を助けたいその想いは、出番が来た時におもいっきりぶつけてやればいいんだ」

「……分かったよ」

そう元気よく答えた季衣は、ひょいっと城壁の上に軽快に飛び乗る。

「おい。危ないぞ」

「大丈夫だよー。それに今、なんていうか、力が湧いてきて、我慢できない感じなんだ！」

そういうやいなや、季衣は城壁の上で、不思議な節回しの歌を朗々と歌い始める。

あまり上手いとは言えないが、零治は眼を閉じ、耳を澄ませ、その歌を聴き入る。

「……ほぉ。悪くないな。何て歌なんだ？」

「さあ？　ちょっと前に、街で歌ってた旅芸人さんの歌なんだけど……。確か、名前は張角……」

「……何っ！？」

「あっ！　兄ちゃん！」

「ああ、すぐ華琳に報告だ！」

……

……

…

秋蘭達が討伐から戻ったのは、その日の晩遅く。普段なら報告は翌日に回す時間だが、今夜は主要メンバーが玉座の間に集められ、すぐに報告会が開かれた。

「……間違いないのね」

華琳が秋蘭に念を押すように確認を取る

「確かに今日行った村でも、三人組の女の旅芸人が立ち寄っていたという情報がありました。恐らく、季衣が見た張角と同一人物でし

ょう」

「はい。ボクが見た旅芸人さんも、女の子の三人組でした」

季衣が頷きながらそう答え、さらに桂花からも報告がされる。

「季衣の報告を受けて、黄巾の蜂起あった陳留周辺のいくつかの村にも調査の兵を向かわせましたが……大半の村で同様の目撃例がありました」

「これで、張角の正体は判明だな……」

「正体が分かっただけでも前進ではあるけれど……。可能ならば、張角の目的が知りたいわね」

華琳の言葉に、臥々瑠は首を捻りながら奈々瑠に聞く。

「目的～？　ねえ、奈々瑠。アレって目的があるって言えるのかな？」

「う～ん……どうなんだろ。聞いた話じゃ、ただ村の中で歌を歌っていただけって話だったし……」

「なるほど……。という事は、本人はただ楽しく歌ってるだけで、単に周りの連中が暴走してるだけの可能性が高いな」

「ああ、あり得ますね。私達の世界でも似たような事がよくありましたからね」

零治はの言葉に、瑠利亜が軽く頷きながら、自分達の世界で起こっていた過去の出来事を口にする。

「……というと？」

零治達の言葉に、華琳が怪訝な顔で聞いてくるので、零治は簡単に説明をする。

「例えば、その張角が……『私、この大陸が欲しいのー』とか何とか、その場の勢いで言っちまって、熱狂的な客が真に受けて暴れだした……とか」

つまりは、デモとかそういった類の事柄である。

「何？　それ」

桂花が訝しげな表情で聞いてくる。

「だとしたら余計タチが悪いわ。大陸制覇の野望とか持っていてく

れた方が、遠慮なく叩き潰せるのだけれど」

「叩き潰すのが前提なんですか……」

「夕方、都から軍令が届いたのよ。早急に黄巾の賊徒を平定せよ、とね」

その言葉に零治は、眉をひそめながら華琳に訊き返す。

「……今頃にか？」

「ええ、今頃よ」

「それはこれだけ大騒ぎになった後に出すような命令じゃないでしょうに……」

瑠利亜が呆れ果てた表情で言い、零治も不機嫌そうに顔を歪め、吐き捨てるように言う。

「反応が鈍いどころの話じゃないな。これでは今の朝廷の実力もたかが知れてるな……」

「良く分かってるじゃない。まあ、これで大手を振って大規模な戦力が動かせる訳だけれど……」

「華琳様っ！」

そこへ、春蘭が慌てた様子で駆け込んで来る。

「どうしたの、春蘭。兵の準備は終わった？」

「いえ、それが……また件の黄巾の連中が現れたと。それも、今までにない規模だそうです」

「……そう。一歩遅かったという事か」

「後手に回らされちまったか……」

「ええ。まったくよ」

華琳はイラついた様子で呟くと同時に、その怒りを吐き出すように、溜め息をつく。

「……ふぅ。春蘭、兵の準備は終わっているの？」

「申し訳ありません。最後の物資搬入が、明日の払暁になるそうで……既に兵に休息を取らせています」

「間が悪かったわね……。恐らく連中は、いくつかの暴徒が寄り集まっているのでしょう。今までのようにはいかないわよ」

「え？　単に集まってるだけじゃないの？」

「人が集まるという事は、集まろうとする意志か、集めようとする意志が働いてるとみるべきよ。集団同士が合流するなら、尚更ね」

「ほえ？　……兄さん。つまりどういう事？」

臥々瑠は桂花の言った事が全然理解できなかったのか、零治に問いかける。

「はぁ……。要するに、その集団を集めた奴……つまり指揮官が居るって事だ」

「恐らくそうだろう。仮に居なかったとしても……それだけの能力を持つ奴は、集団に一人二人は居るものだ。そいつは必ず指揮官に祭り上げられる」

「秋蘭の言う通り。万全の状態で当たりたくはあるけれど、時間も無いわね。さて、どうするか……」

「華琳様っ！」

華琳が思考を巡らせてる時、今まで黙っていた季衣が手を挙げる。

「……」

「華琳様！　ボクが行きます！」

「……季衣！　お前はしばらく休んでおけと言っただろう！」

「だって！　華琳様仰いましたよね！　無理すべき時は、ボクに無理してもらうって！　それに百の民も見捨てないって！」

「……」

華琳は季衣を見つめたまま何も言わない。

季衣は再度、大声で華琳に問いかける。

「華琳様！」

「……そうね。その通りだわ」

「華琳様……」

「春蘭。すぐに出せる部隊はある？」

「は。当直の部隊と、最終確認をさせてる隊はまだ残っているはずですが……」

「季衣。それらを率いて、先発隊としてすぐに出発なさい」

「はいっ！」

「それから、補佐として秋蘭を付けるわ」

「え……？　秋蘭様、が……？」

季衣は呆気にとられる。何しろ、本来自分より立場が上の秋蘭を補佐につけると言われたのだから当然であろう。

「秋蘭にはここ数日無理をさせているから、指揮官は任せたくないの。やれるわね？　季衣」

「あ……は、はい……。秋蘭様、よろしくお願いします」

「うむ。よろしく頼むぞ、季衣」

「へへ……っ、なんか、くすぐったいです……」

「ただし撤退の判断は秋蘭に任せるから、季衣はそれに必ず従うように。すぐに本隊も追いつくわ」

「御意」

「分かりました」

「桂花は後発部隊の再編成を。明日の朝来る荷物は待っていられないわ。春蘭は今すぐ取りに行って、払暁までには出立できるようになさい！」

「「御意！」」

「今回の本隊は私が率います。……それから、零治、瑠利亜。貴方

達も季衣達と一緒に先発隊として出撃してちょうだい」

「了解した……」

「フッ……お任せを」

「……あれ？　華琳さん、あの……私達は？」

奈々瑠は自分たちが指名されなかったのを疑問に思い、自分を指差しながら聞く。

「貴方達二人は本隊に残ってもらうわ。これ以上戦力を割いたら本隊が手薄になっちゃうでしょう？　だから二人は、それまで戦いに備えて体を休めていなさい」

「そういう事なら仕方ないですね。分かりました」

「ちぇ～……。アタシも暴れたかったのに……」

奈々瑠は納得した様子だが、臥々瑠は決定に不満があるようで、膨れっ面をする。

「ふふ。そんな顔をしないの。出番が来たら存分に暴れさせてあげるから、それまでは我慢してなさい」

「は～い……」

返事はするものの、やはりまだ不満らしい。

「やれやれ……。すまんな華琳。オレの教育不足だったようだ」

「ふふ。いいのよ。臥々瑠は、ああだから可愛らしいんじゃないの」

「まあ、それは否定せんが……」

「さあ、無駄話は終わりよ。零治……季衣達の事……お願いね」

「ああ。任せろ」

「ええ。……では各員、それぞれの持ち場に付き作業に取り掛かれ。以上、解散！」

華琳の号令と共に、その場居る全員が慌ただしく動き出す。

「では、私達も行きますかね」

「ああ。……そういう訳だ。よろしく頼むぞ、季衣」

「うん！　こっちこそ！」

「今回は瑠利亜も一緒か。なら、お前の弓の腕前をじっくり拝見させてもらうとしようか」

「別に構いませんが……過剰な期待はしないでくださいよ？」

そんな会話をしながらも、零治達は準備を早々に済ませ出撃し、戦場に赴くのだった。

第16話　黄巾の乱、勃発　前編（後書き）

零治「ようやく話が恋姫らしくなってきたな」

作者「……たぶん」

奈々瑠「作者のセリフとは思えませんね」

臥々瑠「ん？　そんなのいつもの事じゃん」

瑠利亜「ですね」

作者「フッ……もう慣れたぞ。何も感じんなぁ」

零治「で？　次の話はどうすんだ？」

作者「あん？　とりあえず、お前ら二人に派手に暴れてもらうぞ」

瑠利亜「それはいいんですが……やりすぎないでくださいよ？」

作者「悪いな。保障は出来ん」

零治「あっそ……」

奈々瑠「私達は？」

作者「話の流れ上、あまり出番は与えられないと思うぞ」

臥々瑠「え～！？　ブーブー！」

作者「ブーブー言うな！」

奈々瑠「もう……。今回はこの辺で失礼します。お見苦しい所を見せてすみません」

第17話　黄巾の乱、勃発　中編（前書き）

オリキャラの性能がチート仕様である以上、無双するのはお約束だと思います。
ですので今回の話、中盤で二人が派手にやらかしてくれます。

第17話　黄巾の乱、勃発　中編

「急げ急げ！　急いで先遣隊に合流するぞ！」

零治達の先発隊が出撃した翌朝、華琳率いる本隊は先発隊に合流するために現在行軍をしている。

「あの……春蘭さん。馬上で休むんじゃなかったんですか？」

奈々瑠が疑問に思うのはもっともだろう。春蘭は昨夜徹夜で作業をしていたので普通は馬上で休むと思うだろう。にもかかわらず、当の本人はというと……

「秋蘭達が死に物狂いで戦ってる時に、休んでなどいられるか！　進め！　進めぇいっ！」

ご覧のように気合が入りまくってる状態である。むしろ徹夜をしたからハイになってるのかもしれない。

「そんなに急がせては、戦う前に疲れてしまうわよ。春蘭」

春蘭は苦虫を噛み潰したような表情で唸りながら言う。

「う、うぅ……っ。華琳様ぁ。私だけ、先遣隊として向かってはダメですか？」

「ダメよ。目と鼻の先ならまだしも、今の距離でこれ以上隊を分けても効果は薄いわ」

「華琳様。秋蘭から報告の早馬が届きました」

「報告なさい」

「敵部隊と接触したそうです。張角らしき存在は確認していないようですが、予想通り敵は組織化されており、並の盗賊より手強いだろうとの事。……くれぐれも余力を残して接敵してほしいそうよ、春蘭」

桂花は春蘭に意味深な視線を向けながら、釘を刺すように言う。

「うぅぅ……」

しゅんとした顔で唸る春蘭。

傍らでそれを見ていた奈々瑠と臥々瑠は、春蘭に聞かれないように声を潜めながら言う。

「……さすが秋蘭。春蘭の事をよく分かってるね」

「ええ。ホントに……」

「数は？」

華琳が桂花に敵の数を確認する。

「夜間のため、詳細は不明。ただ、先遣隊より明らかに多いため、迂闊に攻撃はせず、街の防衛に徹するとの事です」

「そう。さすが秋蘭。賢明な判断ね」

「だそうですよ、春蘭さん。兄さん達は戦ってないようですし……現場で十分に戦えるように、力は抑えていきましょう。季衣さんにもそう言ってたでしょう？」

「……うむぅ、仕方ない」

そうは言うものの、春蘭がどこか不満げに見えるのは気のせいだろうか？

「張角本人が指揮を執っているか、とも期待したけれど……やはり、別の指揮者が居るのね。張角の才覚、侮れないわ」

「張角の才覚……それは、人を惹き付ける魅力ですか？」

「あら、良く分かってるのね。奈々瑠」

「私達の世界にも、良い見本が居ましたからね。と言っても歴史上の話ですが……」

「恐らく張角はその能力が極端に高いのでしょう。それが野心に向かったか、暴走しているだけなのかは別にして……面白い相手である事には違いないわ」

不敵な笑みを浮かべながら華琳はそう言うので、春蘭が呆れたように口を挟んでくる。

「また悪い癖が……。よもや、張角達を部下にしたいと言うのではないでしょうね、華琳様」

「それは張角の人となり次第。利用価値のない相手なら、舞台から消えてもらうだけよ」

「曹操様！　曹操様はいらっしゃいますか！」

そこへ一人の兵士が切羽詰まった様子で駆けつけて来る。

「どうした！」

「あれ？　お前は先遣隊の……」

「はっ！　許緒先遣隊、敵軍と接触！　戦闘に突入しましたっ！」

「……状況は？」

華琳は落ち着いた様子で兵士に報告の先を促す。

「数と勢いに押され、お味方に不利！　街に籠もって防御に徹してはいますが、戦況は芳しくありません！　至急、援軍を求むとの事！」

「え……？　じゃあ、今頃……」

「バカを言うなっ！」

兵士の報告を聞いた臥々瑠が不吉な事を言いかけたが、春蘭が大声を上げ、それを遮った。

「ええ。秋蘭の事だから、苦戦すると読んで、あらかじめ遣いを出したのでしょう」

「仰る通りです。ですが、自分が出された段階で、彼我の戦力差は非常に大きく……」

「秋蘭の予測を疑っている訳ではないわ。総員、全速前進！　追いつけない者は置いて行くわよ！」

「総員、駆け足！　駆け足ぃっ！」

号令と共に華琳率いる本隊が全速力で移動を開始する。

「貴方は殿について、脱落した兵を回収しながら付いて来なさい。以降は本隊と合流するまで、遊撃部隊として指揮を任せます。いいわね」

「はっ！」

……

……

…

「秋蘭様っ！　西側の大通り、三つ目の防柵まで破られました！」

「……ふむ、防柵は後二つか。どのくらい保ちそうだ？　李典」

秋蘭は季衣の報告を受け、街に居た義勇軍の一人、李典に聞く。

「せやなぁ……。応急で作ったもんやし、後一刻保つかどうかって所やないかな？」

眉間にシワを寄せながら李典は答える。

「……微妙なところだな。姉者達が間に合えばいいのだが……」

「しかし、夏侯淵様が居なければ、我々だけではここまで耐える事は出来ませんでした。ありがとうございます」

義勇軍のもう一人の少女、楽進が秋蘭に礼を言う。

「それは我々も同じ事。貴公ら義勇軍が居なければ、連中の数に押されて敗走していたところだ」

「いえ、それも夏侯淵様の指揮があっての事。いざとなれば、後の事はお任せいたします。自分が討って出て……」

「そんなのダメだよっ！」

季衣が楽進という名の、全身にある傷跡が特徴的な女の子を一喝する。

「……っ！」

「そういう考えじゃ……ダメだよ。今日は絶対に春蘭様達が助けに来てくれるんだから、最後まで頑張って守りきらないと！」

「……せやせや。突っ込んで犬死しても、誰も褒めてくれへんよ」

「……うむむ」

渋面を作りながら唸る楽進に、季衣は優しく言い聞かせる。

「今日百人の民を助けるために死んじゃったら、その先助けられる何万の民を見捨てる事になるんだよ。分かった？」

「……肝の銘じておきます」

「……ふふっ」

「あ、何がおかしいんですか、秋蘭様ー！」

「いや、昨日あれだけ姉者や音無に叱られていたお前が、一人前に諭しているのが……おかしくてな」

「ううー、ひどーい」

季衣達のやり取りを零治と瑠利亜は、傍らに建てられている家屋の壁に背を預けながら見ている。

「……」

「ふふ。季衣もなかなか言うようになりましたね」

「……ん？　ああ、そうだな」

「ん、どうしたんです？　零治」

「いや……」

「んー？」

瑠利亜は先程から零治の視線が全く別の方向に向いているので、気になって視線の先を追ってみる。その先には……

「ん？　彼女、李典がどうかしたんですか？」

「……いやな」

零治が言いかけた時、瑠利亜はニヤニヤと笑いながらその場に茶々を入れ出す。

「……はっは～ん。さては彼女の大きな胸が気になるんでしょう？」

「アホッ！　違うわっ！」

零治は、瑠利亜があまりにも的外れな事を言い出すので大声を出して言い返すが、瑠利亜はまったくやめようとしない。

「やれやれ。水臭いですねぇ。私に一言言ってくれたら、いつでも見せてあげるのに」

「だから違うって言ってんだろうがぁ！！」

「ハハハ。冗談ですよ。そう怒鳴らないでください。……で、何が気になるんです？」

「いや……この前、華琳達と街を視察しに行った時にな……」

「はいはい」

「ある事情で竹カゴを買うハメになってな……」

「ああ、そういえば言ってましたね」

「でだ、そのカゴ屋の露天商をしてたのが李典だったんだよ……」

「なんとまあ……。いや～、世間は意外と狭いですねぇ」

「だな。オレもまさか、こんな形で再開するとは思わなかったからな」

二人がそんな会話をしてる時、メガネをかけたおさげの女の子の于禁が慌てた様子でやって来る。

「夏侯淵様ー！　東側の防壁が破られたのー。向こうの防壁は、後一つしかないの！」

「……あかん。東側の最後の防壁って、材料が足りひんかったからかなり脆いで。すぐ破られてまう！」

于禁の報告を聞き、李典の顔が青ざめる。
傍らでそれを聞いていた零治は、表情は普段と変わらないが、低い声で瑠利亜に呼びかける。

「……瑠利亜」

「ええ、分かってます。ここが正念場ですね」

「ああ。……幸いここに来てる黄巾党の連中は、ドサクサ紛れに集まった野盗どもだ。今までの町人達と違って手加減する必要は無い……」

「ですね。では、連中には地獄を見てもらうとしましょうか……」

「決まりだな。……秋蘭」

「なんだ？」

「お前達はこのまま西側の防衛に専念していろ。オレと瑠利亜で東側に群がってるクズどもを潰してくる……」

「なっ！？　いくらなんでも二人だけでなんて無茶ですっ！」

楽進が声を上げて反論する。まあ、彼女は二人の強さを知らないから当然と言えば当然の反応だろう。

「……大丈夫なのか？」

秋蘭が不安げな顔で聞いてくる。
以前の盗賊団討伐の時に、零治が無茶を平気でする男だと言う事を嫌というほど知らされているだけに余計に不安のようだ。

「オレが信用できないか？」

「……分かった。だが、くれぐれも無茶だけはするなよ」

「フッ。分かってるさ。また華琳に怒鳴られるのはご免だからな」

「ふふ。どうやら要らぬ心配だったようだな。なら、そっちは任せる」

「夏侯淵様っ！？」

「楽進。あの二人なら大丈夫だ。なにせ、彼らの強さは別格だからな」

「……分かりました。お二人とも、お気をつけて」

「ああ。東側は任せておけ」

「零治。私はあの建物の上から援護します」

「ん、どれだ？」

「アレですよ。アレ」

瑠利亜はそう言いながら、通りに有るやや大きめの二階建ての飲食店を指差す。

「あの屋根の上なら、東と西の大通りの両方を見渡せます。私はあそこから援護射撃を行いますね」

「了解だ。必要になったら合図を送る。連中に殺人蜂の一刺しをくれてやれ……」

「分かりました。では、行動開始といきますか」

「ああ」

そう返事をした零治は猛スピードで東側の防壁を目指して走り出した。

「秋蘭も援護が必要なときは言ってください。幸いあの位置なら何とか声も聞き取れますので」

「うむ。承知した」

「では、私も行ってきますかね……ハッ！」

瑠利亜はその場から一気に跳躍し、建物の屋根の上に着地すする。
義勇軍の三人の少女は、零治達の異様な身体能力を目の当たりにし、呆然と見つめていた。

「秋蘭様。兄ちゃん達……大丈夫ですよね？」

「今は二人を信じるしかあるまい。さあ、我らも西側の防衛に当たるぞ」

「はいっ！」

季衣は気合を入れ直し、力強く頷きながら返事をする。

「あの……夏侯淵様……」

楽進が恐る恐るの声で秋蘭に尋ねる。

「ん、どうした？」

「……あの二人は……一体何者なんですか？」

「うんうん。あの銀髪のお姉さん、ここから一気にあの建物の上に跳んで行ったし……」

「ほんまやで。あの赤毛の兄さんも、なんやとんでもない速さで東側へ走ってったし……」

李典と于禁も楽進の疑問に同意し、それぞれ疑問を口にする。

「貴公らの疑問も尤もだが、その説明は後回しだ。今はここを守り抜く事に専念するぞ」

「はっ！」

「了解や！」

「分かったのー！」

「もう少しで春蘭様達が来てくれるはずだから……みんな、がんばろー！」

……

……

…

「攻めろ攻めろ！　戦況は俺達が優勢だ！　このまま一気に攻め落とせぇ！！」

「「「おおおおおおっ！！」」」

黄巾党達は東側の最後の防壁を破壊しようと、怒声を上げながら執拗に攻撃を仕掛けている。

「……」

零治はただ黙って防壁の前に佇む。そして……

「防壁が崩れるぞ！　全員離れろーー！」

最後の防壁が轟音を立てながら崩れ落ちた。

「……ん？　なんだアイツ？」

「おいおい。まさかアイツ、一人で俺達全員を相手にする気かぁ？」

「おい兄ちゃん。悪い事は言わねぇ。そこをどきな。そうすりゃ悪いようにはしないぜ」

「……」

指揮官らしき男が零治に呼びかけるが、零治は黙って黄巾党達を睨み付ける。

「おい！　聞こえてんのか、てめぇ！　それとも死にてぇのか！！」

「バカが……。死ぬのは貴様らの方だ」

「この野郎！　言わせておけば！　お前らぁ！　やっちまえ！！」

指揮官の一声で、黄巾党達は雄叫びを上げながら各々が持つ武器を構え、零治に向かって突撃する。

「フン！　クズどもが……。貴様らの地獄への道案内役……このオレが引き受けてやろう！」

零治はそう言い、叢雲を構えながら黄巾党の一団に突撃する。

「死ねっ！」

黄巾党の一人が零治に曲刀を振り下ろす。

「フッ……甘いなっ！」

しかし零治はそれをひらりとかわし、胴体に目掛けて叢雲を横に薙ぎ払い相手を真っ二つにし、相手の男は断末魔を上げる事さえ許されずに、切断面から勢いよく血を吹き出しながら通りに転がり、物言わぬ屍と化した。

「なっ！？　この野郎よくも！」

「黙れ……」

零治は立て続けに近くに居た黄巾党に一太刀を浴びせる。

「ぎゃあああああっ！」

斬り付けられた黄巾党は断末魔を上げ、体から血を噴出しながら息絶えた。

「ええいっ！　たった一人相手に何やってんだ！　数で攻めろ！！」

「「「おおおおおっ！！」」」

後続の黄巾党達が雄叫びを上げながら続々と街になだれ込んで来る。

「フッ……頃合いだな。……瑠利亜！　殺れっ！！」

零治はそう叫び、左手を天に掲げ指をパチンと弾き鳴らした。
建物の上で待機し、眼を閉じ、耳を澄ませていた瑠利亜は、合図をしっかりと聞き取り、カッと目を開く。

「むっ！　合図ですね。……では、連中に殺人蜂の一刺しを浴びせてやるとしましょうか」

瑠利亜は右手に魔力を集中させ、通常の矢よりも一回り大きいオレンジ色に発光する矢を創り上げる。

「……」

瑠利亜は双龍に矢をつがえ、無言でゆっくりと狙いを定める。

「夏侯淵様。アレは一体……？」

西側の防衛に当たりつつ、瑠利亜の様子を窺っていた楽進が秋蘭に聞く。

「分からん。彼女も私と同じ弓使いだそうだが……ああやって矢を創り出せるのか……」

「でも、矢にしては大きい気がするのー……」

「せやな。あの矢……どう見ても普通の矢より明らかに一回りはでかいで」

「あれ……？　あの矢……前に使ってたヤツと違う……」

「ん？　季衣。違うとはどういう意味だ？」

「いえ……。前の戦いで姉ちゃんが使ってた矢って、青白く光ってたんですよ。あんな夕焼けみたいな色の矢じゃなかったんですけど……」

「……それに、狙いを上空に付けてるのも気になりますね……」

「確かに……。一体何をするつもりなんだ？」

「……」

瑠利亜は全神経をつがえてる矢に集中させる。そして……

「射殺せ……殺人蜂（プファイル・キラー・ビーネン）の矢！！」

瑠利亜は東側の大通り上空に目掛けて矢を放った。

「ん？　アニキ、ありゃ何ですかね？」

「あん？　どれだ？」

「ほら、あれですよ。あの光……」

黄巾党の一人が上空に有るオレンジ色の一筋の光を指差しながら指揮官に聞く。

「クックック……。アレはな……貴様らに死をもたらす光だ」

「はあ？　何言ってんだコイツ。頭がおかしくなっちまったのか？」

「さあ、殺人蜂達よ……。かの者どもに雨の如く降り注げ」

零治が立っている位置の手前上空まで飛んできた矢は、瑠利亜の声に反応するようにピシピシと音を立てながら亀裂が走る。そして……

「さあ、ショータイムだ……」

零治のその一言が引き金となったかのように矢はそのまま砕け散り、小さな矢へと形を変え広範囲に拡散し、弧を描きながら黄巾党達に

雨の如く降り注ぎだす。

「う、うわあああっ！？　に、逃げろーー！！」

「おいおい。下手に動き回ると矢が急所に当たっちまうぞ。何しろ当たる瞬間までどこに当たるか分からない矢だからなぁ。だいたい、どうやって逃げるつもりだ？　お前らの足で、矢が内包する魔力が尽きて消滅するまで追跡してくる矢から逃げられると思ってるのか？　……クックック……ハハハハハ！」

零治は逃げ惑う黄巾党達を見て、冷酷な笑みを浮かべながら無邪気な子供のように高笑いをする。

「ぎゃっ！？」

「ぐあっ！？　い、痛てぇ！」

「ぐえっ！」

降り注ぐ矢は次々と黄巾党の人間に突き刺さり、腕や肩、足などに走る痛みで悲痛な叫び声をあげながら地面をのた打ち回る者、運悪く喉や胸に矢が突き刺さり絶命する者達で溢れかえり、東側の大通りは一瞬にして阿鼻叫喚の地と化した。

「ふむ。まずまずの結果ですね」

楽進、李典、于禁の三人は唖然としてしまう。

「……まさか一本の矢が無数の矢に変化するとはな……」

「秋蘭様……。という事は、東側の黄巾党は……」

「ここからでは分からんが、恐らく東側の敵は殆ど片付いたと判断すべきだろうな」

「しゅうらーん！　そっちは大丈夫ですかー？」

瑠利亜が大声で西側の秋蘭達に呼びかける。

「大丈夫だ。今のところ問題ない」

「そうですか。では、私は零治の様子を見に行ってきますのでそっちは任せます」

「分かった」

瑠利亜はその場から大きく跳躍し、東側の通りへ向かって行った。

「……真桜ちゃん」

「なんや……？」

「沙和……ひょっとして夢を見てるのかな……？」

「奇遇やな。今ウチもそう思ってたところや……」

あまりの非現実的な光景を目の当たりにした李典と于禁は軽い現実逃避に走ってしまう。

「二人とも。気持ちは分かるが、現実逃避するのはよくないぞ」

そんな中、三人の中で一番のしっかり者の楽進が二人にそう言い聞かせる。

「ああ……やっぱ現実なんやな。うぅ……もし、あの姉さんが敵やったらと思うとゾッとするわ……」

「確かにな。だが、今はそんな事を言っている時ではない。この勢いに乗じて敵を一気に押し返すぞ！」

「はいっ！」

「報告です！　街の外に大きな砂煙！　大部隊の行軍のようです！」

楽進の報告に、全員の顔に緊張が走る。

「なんやて！」

「えー……また誰か来るの？」

「敵か！　それとも……」

その時、街の外から激しい銅鑼の音が響き渡る。

「お味方です！　旗印は曹と夏侯！　曹操様と夏侯惇様ですっ！」

……

……

…

「鳴らせ鳴らせ！　鳴らしまくれ！　街の中に居る秋蘭達に、我らの到着を知らせてやるのだっ！」

春蘭の指示に、銅鑼を担当している兵士が更に力強く銅鑼を叩き、銅鑼の音を辺りに響き渡らせる。

「敵数の報告入りました！　敵数、およそ三千！　我ら本隊の敵で

はありません！」

「部隊の展開は！」

「完了しています！　いつでもご命令を！」

「さて、中の秋蘭はちゃんと気付いてくれたかしら……？」

「華琳さん。街の砦らしき所から、矢の雨が放たれたとの報告が来ました。砦の旗印は夏侯。秋蘭さんは気付いてくれたみたいですよ」

「流石ね。なら、こちらが率先して動くわよ！　秋蘭と季衣は呼応して動いてくれるでしょう！」

「後々、敵の本隊と戦わなければなりません。ここは迅速に処理するべきかと」

「判ったわ。……春蘭！」

「はっ！　苦戦してる同胞を助け、寄り集まった烏合の衆を叩き潰すぞ！　総員、全力で突撃せよ！」

春蘭の号令と共に本隊が一斉に突撃を開始し、敵の掃討戦が始まる。

……

……

…

「零治。今の銅鑼の音は……」

「ああ。華琳達の本隊が到着したみたいだな」

「うっ……！　く、くそ！　撤退だ！　撤退しろー！」

瑠利亜の攻撃を受け、傷を負いながらもなお生き残った黄巾党達が自分達の不利を悟り撤退し始める。

「ふぅ……。何とか追い返せましたか。……って、零治。貴方、何をしてるんですか……？」

零治は自分と背丈が同じ位の黄巾党の死体から身に纏ってる服を脱がせていた。

「……瑠利亜。コレをしばらく預けるぞ」

素早く黄巾党が着ていた服に着替えた零治はそう言って、着ていた自分の服と叢雲を無造作に放り投げ、瑠利亜は投げられた服一式と叢雲を慌てて受け取る。

「おっと!?　……何です。コスプレでもするつもりですか？　てか、全然似合ってませんよ」

「うるせぇ。それより瑠利亜、奴ら……黄巾党の強みはなんだと思う？」

「奴らの強み……？　そうですねぇ……我々みたいに特定の拠点を持たず各地を転々としてる可能性が高いですから、そのせいで官軍に動きが掴まれにくい点……とかですかね」

「そうだな。だが、あれだけの数に人数が膨れ上がったら、連中でも必ず持たなきゃいけない拠点がある」

「……ああ、なるほど。物資の集積地点ですね？」

「そうだ。あれだけの大部隊になったら、装備品と食料は現地調達だけでは賄えないからな。今から奴らの中に紛れて、その場所を見つけてくる……」

「……ふむ。私はてっきり張角を暗殺してくるのかと思いましたよ」

「今の所それはしないさ。まあ、この騒ぎを張角本人が煽ってるのなら話は別だがな……。じゃあオレは連中を見失う前にそろそろ出発する」

「ええ。華琳には私から説明しておきますので」

「ああ。頼むぞ」

零治はそう言い、黄巾党の追跡を開始し、小走りにその場を後にした。

「……さて、私も華琳達の所に合流しに行きますかね」

瑠利亜は華琳達に合流するため西側の通りに足を進める。残されたのは瑠利亜の放った矢によって息絶えた黄巾党の死体のみ……その光景がまさに、街の防衛戦が華琳達の勝利で幕を下ろしたことを物語っていた。

第17話　黄巾の乱、勃発　中編（後書き）

零治「やってくれたな……」

瑠利亜「ええ。やってくれましたね……」

作者「ん？　何が？」

零治「今回の話の中盤だよ……」

作者「ああ、お前ら二人の無双劇か？」

瑠利亜「そうですよ……」

作者「何言ってんだよ？　アレはお前らがやった事じゃん」

零治「お前がやらせたんだろうが」

作者「チート性能のオリキャラを普通に戦わせても面白くないじゃん」

瑠利亜「まあ、今回それを披露したのは私なんですがね」

零治「お前はまだマシだろ？　オレのアレはなんだよ？　逃げ惑う黄巾党を見て高笑いするとかって……」

瑠利亜「ああ、確かに。まるで悪役ですよね」

作者「ん？　いいじゃん。お前、第2話でやらかした前科があるし」

零治「アレもお前がやらせたんだろうが！　テメェ、自分のキャラをなんだと思ってんだ！」

奈々瑠「兄さん達は出番があったからまだいいじゃないですか……」

臥々瑠「そうだよ。今回アタシ達、全然出番無かったもん……」

瑠利亜「ああ、そうですね。臥々瑠なんか二回しか喋ってませんもんね」

作者「それは前に言っただろ。話の流れ上あまり出番は与えられないって」

奈々瑠「だからって……」

作者「まあ、次はもっと出番を与えてやるから、機嫌直してくれよ」

臥々瑠「ホントに……？」

作者「……たぶん」

零治「相変わらずいい加減な奴だぜ……」

瑠利亜「ええ。ホントに……」

第１８話　黄巾の乱、勃発　後編（前書き）

久々に長ったらしい文章になってしまった。
当初の予定では中編の話と一緒に書くつもりだったんですが、分けて正解だったかも……

第１８話　黄巾の乱、勃発　後編

「秋蘭！　季衣！　無事かっ！」

春蘭が二人を心配する様子で街に駆け込んでくる。

「危ないところだったがな……まあ見ての通りだ」

「春蘭様ー！　助かりましたっ！」

「二人とも無事で何よりだわ。損害は……大きかったようね」

「はっ。しかし彼女らのおかげで、防壁こそ破られましたが、最小限の損害で済みました。街の住人も皆無事です」

「……彼女らは？」

華琳は義勇軍の三人娘に視線をやり、秋蘭に聞く。

「……我らは大梁義勇軍。黄巾党の暴乱に抵抗するために、こうして兵を挙げたのですが……」

「あー！」

楽進が華琳に説明をしている時、突然、李典が何かを思い出したように華琳を指差しながら大声を上げる。

「「あー！」」

続いて、春蘭と于禁が互いを指差し合いながら大声を出す。

「……何よ、一体」

「貴方は、あの赤毛の兄さん……音無って人と一緒に居た……。姉さん、憶えてませんか？　前に街でカゴ売りをしていた……」

「……思い出したわ。どうしたの、こんな所で」

「ウチも大梁義勇軍の一員なんよ。そっか……あの時の姉さんが、陳留の州牧様やったんやね……」

「姉者も知り合いなのか？」

「そうなのー。前に服屋でむぐぐ」

春蘭が慌てて于禁の口を塞ぎ、そっと耳打ちをする。

「そ、それは内緒にしておいてくれっ！」

「むぐぐ……んー？　よく分かんないけど、内緒にしとけばいいの？　分かったの……」

「どうしたんですか？　春蘭様」

「い、いや、何でもないっ。何でも！」

「むぐぐー。内緒にするから、離してなのー！」

于禁が春蘭の腕の中でジタバタと暴れ解放するよう訴えかけるので、春蘭は即座に彼女を解放した。

「……で、その義勇軍が？」

春蘭達のやり取りをよそに、華琳は楽進に話の続きを促す。

「はい。黄巾の賊がまさかあれだけの規模になるとは思いもせず、こうして夏侯淵様に助けていただいている次第……」

「そう。己の実力を見誤ったのはともかくとして……街を守りたいというその心がけは大したものね」

「面目次第もございません」

「とはいえ、貴方達が居なければ、私は大切な将を失う所だったわ。秋蘭達を助けてくれてありがとう」

「はっ！」

「あの、それでですね、華琳様。凪ちゃん達を……華琳様の部下にしてもらえませんか？」

「義勇軍が私の指揮下に入るという事？」

「聞けば、曹操様もこの国の未来を憂いておられるとの事。一臂の力ではございますが、その大業に是非とも我々の力もお加えくださいますよう……」

「……そちらの二人の意見は？」

「ウチもええよ。陳留の州牧様の話はよう聞いとるし……そのお方が大陸を治めてくれるなら、今よりは平和になるっちゅう事やろ？」

「凪ちゃんと真桜ちゃんが決めたなら、私もそれでいいのー」

「秋蘭。彼女達の能力は……？」

「は。一晩共に戦っておりましたが、皆鍛えれば一廉の将になる器かと」

「そう……。季衣も真名で呼んでいるようだし……良いでしょう。三人の名は？」

「楽進と申します。真名は凪……曹操様のこの命、お預けいたします」

「李典や。真名の真桜で呼んでくれてもええで。以後よろしゅう」

「于禁なのー。真名は沙和って言うの。よろしくお願いしますなのー♪」

「凪、真桜、沙和。そうね……。貴方達、零治と瑠利亜は知っているわよね？　全身黒ずくめの服装をした男女二人組なんだけれど」

「はい。音無様と神威様の事ですね。存じております」

「さしあたり貴方達三人は、あの二人に面倒を見させます。別段の指示が有る時を除いては、彼らの指揮に従うように」

「お待ちください！　華琳様！」

それまで兵士達に周囲の警戒や追撃部隊への指示を出していた桂花が納得のいかない表情で声を上げる。

「あら、桂花。どうしたの？　作業の方はもう終わったのかしら？」

「はっ。周囲の警戒と追撃部隊の出撃、完了いたしました。住民達への支援物資の配給も、もうすぐ始められるかと」

「ご苦労様、桂花。で、何の話だったかしら？」

「音無の事です！　何であんなのに部下をお付けになるんですか！　あんな変態に華琳様の貴重な部下を預けるなど……部下が穢されてしまいます！」

本人の居ない所で桂花は零治の事をボロクソに言うが、頭に血が上ってるせいか、ある二人の存在をどうも失念していたらしく……

「誰が……変態ですって？」

「……もう一度言ってごらん？」

「ひっ！？」

奈々瑠と臥々瑠に背後から得物を首筋に突き付けられてしまう。ひんやりとした金属の冷たい感触が桂花の首筋に走る。

「はいはい、二人ともやめなさい。ウチの大事な軍師なんだから殺すような真似はしないでちょうだいね？」

「フンっ！　命拾いしたわね……」

「でも……次は無いよ……」

桂花は二人から解放され、へなへなとその場に崩れ落ちる。

「それで、貴方達三人の意見は？」

「あのお兄さん大丈夫なん？　この間もウチの絡繰壊してたけど……」

真桜はそう言ってはいるが、あれはどう見ても零治が壊したと言うより、整備不良による自滅だと思うのだが、作った本人は認めたくないのかもしれない。

「んー？　私は結構平気かもー。かなりカッコ良かったし♪」

「曹操様の命とあらば、従うだけです」

「なら決まりね。……ところで秋蘭？」

「はっ」

「零治と瑠利亜はどこに居るの？　姿が見当たらないけど……」

「呼びましたか？」

そこへ東側に居た瑠利亜が合流してくる。

「ああ、瑠利亜、一体どこに行ってたの？　姿が見当たらないから心配したわよ」

「いや、すみません。零治と二人で東側の防衛に当たってましたので」

「そう。ご苦労だったわね。それで、零治はどこに居るのかしら？
まだ東側に？」

「ああ、それについては本陣で説明しましょう。今後の行動方針にも関わってきますから」

「分かったわ。……ああ、それと瑠利亜」

「はい？」

「この三人、貴方と零治の部下という事になったから、しっかり面倒を見てあげなさいね？」

凪、真桜、沙和の三人が瑠利亜を無言でじーっと見つめる。

「まあ、それは構いませんが……」

「そう。なら三人とも、もう済んでるかもしれないけど、改めて自己紹介なさい」

「はっ！　自分の名は楽進。真名は凪です。以後は凪とお呼びください」

「ウチは李典。真名は真桜や。よろしゅうに」

「私は于禁なの。真名は沙和なのー。よろしくなのー」

「凪、真桜、沙和ですね。私は神威瑠利亜です。以後よろしく」

「はっ。こちらこそよろしくお願いします。隊長」

凪に隊長と呼ばれ、瑠利亜は苦笑する。

「隊長……。それはどちらかと言うと、零治が該当しますね」

「ほんなら姉さんは副隊長やな」

「立場上そうなるんでしょうが……『副隊長』はどうも語呂が悪いですし……」

「えー。じゃあ、なんて呼べばいいのー？」

「普通に下の名前で呼んでくれて構いませんよ。事あるごとに、『副隊長』って呼ばれるのは嫌ですから」

「分かりました。では、瑠利亜様でよろしいですか？」

「別に呼び捨てでも構いませんよ？」

「いえ。上官たるお方を呼び捨てする訳にはいきません」

「姉さん。凪はこういう所は絶対に譲らんき、諦めた方がええで」

「はぁ……分かりましたよ。好きにしてください」

「はーい。瑠利亜様、よろしくなのー」

「ええ。こちらこそ」

「話はまとまったわね？　物資の配給準備が終わったら一度本陣に戻るわよ。そこで軍議を行い、現状の再確認と今後の行動方針を決めるわよ」

「分かりました」

……

……

…

そうして軍議の時間はあっという間にやって来た。

「さて。これからどうするかだけど……。新しく参入した凪たちも居る事だし、一度状況をまとめましょう。……春蘭」

「はっ。我々の敵は黄巾党と呼ばれる暴徒の集団だ。細かい事は……秋蘭、任せた」

「早っ！」

「やれやれ……」

秋蘭がため息交じりにそう言いながらも、いつもの事と割り切ってるのか春蘭に代わり説明を始める。

「黄巾党の構成員は若者が中心で、散発的に暴力活動を行ってるが……特に主張らしい主張は無く、現状で連中の目的は不明だ。また首魁の張角も、旅芸人の女らしいという点以外は分かっていない」

「分からない事だらけやなぁ～」

「目的とは違うかもしれませんが……我々の村では、地元の盗賊が合流して暴れていました。陳留の辺りでは違うのですか？」

「同じようなものよ。凪達の村の例もあるように、事態はより悪い段階に移りつつある」

「悪い段階……？　どういう意味ですか？」

春蘭は華琳の言葉に首を傾げる。

「ここの大部隊を見たでしょう？　ただバカ騒ぎをしているだけの烏合の衆から、盗賊団やそれなりの指導者と結びついてまとまりつつあるのよ」

「……ふむ？」

どうも春蘭は桂花の説明が理解できていないようだ。

「要するに……今までのように、春蘭が大声で咆えたぐらいじゃ逃げ出さなくなるって事」

「ああ、なるほど」

春蘭は手をポンと叩き、納得したように頷くが、桂花は訝しげな顔で春蘭を見ている。

「……ホントに分かってるのかしら」

「秋蘭や季衣だけでは苦戦するという事だろう。それくらいは分かるぞ。バカにするな！」

（いや、それは分かってると言うんですか……？）

瑠利亜は内心そう思う。一般常識で当てはめれば、今の言葉だけでは理解してるとは言い難い。

「ともかく、一筋縄では行かなくなったという事よ。ここでこちらにも味方が増えたのは幸いだったわね。……さて、瑠利亜。そろそろ説明してくれるかしら。零治がこの場に居ない理由を」

「分かりました。……零治は今、ある場所を捜しだすために単独行動をとっています」

「……ある場所？　それは黄巾党の拠点か何かか？」

「そうです」

春蘭の言葉に瑠利亜は軽く頷き答える。

「しかし瑠利亜。連中は旅芸人のせいもあって、我々みたいに決まった拠点は持っていないと思うぞ」

秋蘭が尤もな意見を言う。そう。そこが華琳達が頭を悩ませている種でもある。

張三姉妹は旅芸人であるが故に特定の場所に拠点を持っていない。故に黄巾党の動きも掴みにくく、華琳達は常に後手の対応に回らされているのだ。

「そうですね。ですが……今日の大部隊を見たように、あれだけの数に膨れ上がったら、奴らも一時的にとはいえ持たなきゃいけない拠点がありますよ」

「……にゃ？」

「あれだけの数の部隊を動かすのに、食料や装備品を現地調達だけで補えるでしょうか？　……これだけ言えば分かりますよね？」

「……なるほど。つまり零治は今、物資の集積地点を捜してるとい

う訳ね？」

「ええ」

「だけど、アイツ一人で捜しだせるの？」

桂花が眉をひそめながら聞いてくる。こっちの世界の常識で考えれば、そういった重要拠点を少人数の部隊で捜す事はあっても、単独で捜すなんて事は普通はしない。

「その点は大丈夫だと思いますよ。なにせ彼は今、黄巾党に変装して連中の中に紛れ込んで行動してますから」

「なるほど。なら、こちらも零治が戻ってきたらいつでも動けるように準備をしておいた方がいいわね」

「ええ。彼の事ですからそろそろ……」

「軍議中失礼いたします」

瑠利亜が言いかけた時、一人の兵士が軍議の場にやって来る。

「どうした？」

「はっ。音無様が帰還いたしました」

「フッ。噂をすれば何とやら……ですか」

「そのようね。……すぐに彼をここへ」

「はっ！」

兵士は一礼しその場を走り去り、それからしばらくして黄巾党の格好に変装した零治がやって来た。

「……」

その場に居る人間全員が何かを堪えるように、黄巾党の格好をした、無言で佇む零治を見つめる。

「……言いたい事があるんなら言えよ……」

「アンタその格好……ウケ狙いでやってるの？」

「違うわ……。そんなに笑いたければ笑えばいいだろ……」

「ぷっ……くくっ……ふ……ふはははは！　な、何だ音無、その格好はぁ！　あはははは！」

零治の服装がよっぽど可笑しいのか、春蘭は腹を抱えて大笑いする。

「あ、姉者。あ……あまり笑ったら……失礼だぞ。……ふ、ふふふふふ」

「……そう言いながらも、お前も笑ってるじゃないか。秋蘭……」

「いや……ふふっ……すまない」

「ったく。どいつもコイツも……」

「に、兄ちゃん、あんまり気にしないで。そ、そこまで……酷くないよ」

「そ、そうですよ。結構……似合ってますよ……」

「う、うん！　凄く似合ってると思うなぁ……！」

季衣、奈々瑠、臥々瑠の三人は、そうフォローするのだが……

「……三人とも……そう言ってる割には眼を逸らしてないか……？」

「き、気のせいです！」

「そ、そう！　気のせいだよ！　これは……ほら！　む、虫が飛んでるから！　ねえ、季衣！」

「えっ！？　あ、うん！　そうそう……！」

二人はそう言って、ワザとらしく羽虫を追い払う仕草をする。

「はぁ……もういい……」

「アンタ、いっその事それを私服にしたら？」

桂花は春蘭みたいに大笑いこそしてはいないが、何やら人を小バカにするような悪意のある笑みを浮かべていた。

「うっせぇ……」

「……」

凪は呆然とした表情で黄巾党の姿の零治を見つめていた。

「隊長、なかなかやるやん。体を張って笑いを取るなんて」

「あはは！　ホントなのー！」

「こ、こら！　真桜、沙和！　隊長に対してなんて事を言うんだ！」

「なんや？　じゃあ凪はアレ可笑しいと思わんの？」

「……」

凪は何も言わずにプイッと顔を逸らす。

「な～んや。やっぱ凪も可笑しいと思うとるんやん」

「こ、声が大きいぞ真桜！　隊長に聞かれたらどうするんだ！」

「そこ……全部聞こえてるぞ……」

「っ！？　い、いや、これは……その……」

「それと、隊長とか一体何の事を言ってるんだ？」

「ああ、それは後で私が説明しますから」

「あっそ……。それと、お前も笑うんじゃない」

「おや。これは失礼。……くくっ……」

「ふふっ。零治、報告は後で構わないから、とりあえず着替えてきなさい。ふ、ふふふ……」

流石の華琳もこれは笑わずにはいられないようで、口元を手で隠しながら上品に零治の姿を見て笑っていた。

「言われずともそうするわ……。瑠利亜、オレの服はどこだ？」

「ああ、向こうの天幕の中に有りますよ」

「なら、とっとと着替えてくるわ。正直これ以上笑われたくないんでな……」

零治はそう言って、スタスタと天幕の中に入っていく。それからしばらくして……

「ふぅ……。やっと落ち着いたぜ」

普段通りの服に着替えた零治が戻ってくる。

「ふふ。やっぱり貴方はその服装の方がしっくりくるわね」

「ああ。自分でもそう思う」

「では零治、報告を。ここに戻って来たという事は、黄巾党の物資集積地点を発見したという事かしら？」

「ああ。連中はここから半日ほど行った所に有る廃棄された砦を利用していた。ただ、敵は既に物資の移動の準備を始めていたから、早めに手を打った方がいいだろう」

「判ったわ。……皆、聞こえたわね？　すぐに陣を撤収するわ。急いで支度なさい」

「はっ！」

華琳の一声で周囲が慌ただしく動き出し、各部隊がそれぞれの隊の撤収作業に当たる。

「……で、瑠利亜。説明してくれるか？　この三人の事を」

「ええ。この三人、貴方が単独行動をしてる間に私と貴方の部下という事になりましてね」

「それで隊長か……」

「そういう事です。ちなみにこれは、華琳直々の決定ですので」

「なら従うしかないだろう？」

「決まりですね。……では三人とも、彼にも改めて自己紹介をお願いします」

「はい。私の名は楽進。真名は凪です。よろしくお願いします、隊長」

「ウチは李典。真名は真桜や。よろしゅうにな、隊長」

「私は于禁なの。真名は沙和なの。よろしくね、隊長」

「凪、真桜、沙和だな。ではこちらも改めて名乗ろう。オレは姓が

音無で、名が零治だ。真名は無い。三人ともよろしくな」

「零治、挨拶は済んだかしら？」

「ん？　ああ、華琳。丁度済んだところだ」

「結構。なら、貴方は先頭に立って部隊を案内なさい」

「待て。じゃあオレの部隊の撤収はどうするんだ？」

「それは一番遅くなった隊にやらせるわ」

「ん、了解だ。なら行くとしますかね」

「ええ。……総員、可能な限り急いで撤収、終わった隊から零治の先導に続きなさい！」

「じゃあ、オレは先に行ってるぜ？」

「ええ。こちらも終わり次第すぐに合流するわ」

「ああ。……なら、みんな行くぞ！　撤収が終わった隊はオレに続け！」

華琳の軍勢は大急ぎで陣の撤収作業を終え、零治の先導に続き、本来なら半日かかる行程をわずか数刻で駆け抜け、零治達は山奥にポツンと立つ、古ぼけた砦の前にたどり着く。

「着いたぜ。ここがそうだ」

「なるほど。連中、良い場所を見つけたものだわ」

「敵の本隊は近くに現れた官軍を迎撃しに行っているようです。残る兵力は一万がせいぜいかと」

敵軍の偵察に行っていた凪が一同を見渡しながら、現在の敵の兵力数を報告する。

「官軍が来たから砦を捨てるんですか？」

「華琳様のご威光に恐れをなしたからに決まっているわ。だから、わざわざ砦まで捨てようとしているのだろう」

奈々瑠の言葉に、春蘭はまるで自分の事のように、上体を軽く逸らして威張るように言う。

「ふ～ん……なんかもったいないね」

臥々瑠は両手を後ろに組み、目の前の砦を眺めながら呟く。

「連中は捨ててある物を使っているだけだからな。そういう感覚が薄いのだろう。後一日遅ければ、ここはもぬけの殻だったはずだ」

「厄介極まりないわね……。それで秋蘭。こちらの兵は？」

「義勇軍と併せて、八千少々です。向こうはこちらに気付いていませんし、荷物の搬出で手一杯のようです。今が絶好の機会かと」

「ええ。ならば、一気に攻め落としましょう」

「華琳様。一つ、ご提案が」

桂花が軽く手を上げ、自身の考えを華琳に言う。

「何？」

「戦闘終了後、全ての隊は手持ちの軍旗を全て砦に立ててから帰らせてください」

「え？　どういう事ですか？」

季衣は桂花の意図が理解できず、怪訝な顔で桂花に聞く。

「この砦を落としたのが、我々だと示すためよ」

桂花のその言葉に、秋蘭は腕を組み、納得したように頷いて、砦に視線をやる。

「なるほど。黄巾の本隊と戦っているという官軍も、本当の狙いは恐らくここ……。ならば、敵を一掃したこの砦に曹旗が翻っていれば……」

「……面白いわね。その案、採用しましょう。軍旗を持って帰った隊は、厳罰よ」

「なら、誰が一番高い所に旗を立てられるか、競争やね！」

「こら、真桜。不謹慎だぞ」

「ふん。新入りどもに負けるものか。季衣、お前も負けるんじゃないぞ！」

「はいっ！」

「姉者……大人気ない」

「そうね。一番高い所に旗を立てられた隊は、何か褒美を考えておきましょう」

「おいおい、華琳まで何を……」

「ただし、作戦の趣旨は違えない事。狙うは敵の守備隊の殲滅と、糧食を一つ残らず焼き尽くす事よ。いいわね」

「はっ！」

「あの……華琳様？」

それまで終始無言だった沙和が、小さく手を上げて口を開いた。

「何？　沙和」

「その食料って……さっきの街に持って行っちゃダメなの？」

「ダメよ。糧食は全て焼き尽くしなさい」

「どうしてなの……？」

華琳の言葉に沙和は納得のいかない顔で問いかける。

彼女としてはその食糧を街に持って行って住民たちに配りたいのだろう。

だが、それをやると生じる問題があった。桂花が沙和にその事を説明する。

「簡単な事。糧食を奪っては、華琳様の風評は上がるどころか傷付くの。糧食も足らないのに戦に出た曹操軍は、下賤な賊から食料を強奪して食べました、とね」

「けど……！」

まだ納得できない沙和。だが理由はこれだけではなかった。華琳が

それを補足する。

「……かといって奪った食料を街に持っていけば、今度はその街が黄巾党の復讐の対象になる。今よりも、もっとね」

「……あ」

沙和はようやく華琳の考えを理解する。いくら街の人達を助けたいからとはいえ、相手が賊と言えど食料を奪い取ったりすれば、それはタダの火事場泥棒でしかない。

更にそれを被害に遭った街に持って行った事が原因で街を再び危険に晒しては元も子もないのだ。

「あの街には警護の部隊と糧食を送っているわ。それで復興の準備は整うはず。華琳様はちゃんと考えておられるのだから……安心なさい」

「そういう事。糧食は全て焼くのよ。米一粒たりとも持ち帰る事は許さない。それがあの街を守るためだと思いなさい。いいわね？」

「分かったの……」

桂花と華琳にそう言い聞かされ、ようやく沙和も納得した。

「なら、これで軍議は解散とします。先鋒は春蘭に任せるわ。いい

わね？　春蘭」

「はっ！　お任せください！」

「なら、この戦をもって、大陸の全てに曹孟徳の名を響き渡らせるわよ。我が覇道はここより始まる！　各員、奮励努力せよ！」

華琳は手を、バッと正面に突き出して戦闘準備の号令をかける。

「……さて、オレ達も行くか」

「あの、兄さん」

「なんだ？」

「華琳さんがさっき言ってた、旗を高い所に挿す件はどうするんですか？」

「んー？　まあ、やれって言うんならやるまでさ。お前らは嫌なのか？」

「ううん。そんな事ないよ。それに、どんな内容でも勝負事には負けたくないし」

「私は出来れば勘弁願いたいですね。あんな重たい旗を抱えて高い所に登るのは疲れますから」

「まっ、オレは正直褒美には興味がないが……一番高い所には挿し

といてやるかな」

「まっ、私はどこかその辺にでも適当に挿しときますよ。勝負する気すらないので」

「フッ。好きにしな。……さて、無駄話はこの辺にして、オレ達も配置に付くぞ」

「ええ」

「はい」

「フッフッフ。ここではおもいっきり暴れてやるぞ」

臥々瑠は不敵な笑みを浮かべながら、指の骨をポキポキと鳴らす。前の戦いで出番が無かったのでその憂さをこの場で晴らすつもりなのだろう。

「やれやれ……。程々にしてくれよ、臥々瑠」

……

……

…

「……」

零治は指定の場所に配置に付き、黙って砦を見つめている。

「隊長。楽進隊、布陣完了しました」

「ん、ご苦労」

「はっ」

「……」

「……」

二人して黙り込んでしまい、その場を沈黙が支配すが、やがて零治が口を開く。

「なあ、凪」

「なんですか？」

「ちょっと聞きたい事があるんだが、いいか？」

「はい。自分に答えられる事でしたら」

「沙和の事なんだが……」

「沙和がどうかしましたか？」

「いや、どうしてあんな優しい奴が義勇軍なんかに入ったのか疑問に思ってな」

「沙和の事は沙和に聞いてみないと分かりません」

「そうかもしれんが……付き合いは長いんだろ？」

零治のその言葉に、凪は気まずそうに俯きながら言う。

「確かに付き合いは長いですが、その……自分は空気を読むとか察する事が苦手ですので……」

「そうか」

「ただ一つ言えるのは……沙和が決めたの事なら、沙和は後悔しないだろう、という事です」

「そうか。信頼してるんだな」

「はい」

「なんや二人して。何話しとるんや？」

そこへ、隊の布陣が完了した真桜が会話に入ってくる。

「何、大した事ではない」

「あー、隊長もしかして凪の事口説いてたん？　それでふられたんやろう？」

「なっ！？　真桜、いきなり何を言い出すんだっ！」

真桜がニヤニヤ笑いながら茶々を入れてきたので、凪は顔を真っ赤にして反論する。

「そんなんじゃないさ。……つーか、真桜。お前、部隊の布陣は完了したのか？」

「その報告に来たに決まっとるやん。で、何の話しとったん？」

「沙和の事だ。どうしてアイツが義勇軍に入ったのか、隊長が疑問に思ってな」

「そんなん沙和に聞けばええやないの。呼ぼか？」

「いや、そこまでしなくてもいいさ」

「まっ、隊長が思ってる子やないで、あの子」

「ん？　どいう意味だ」

「沙和が自分で決めた事やもん。それをいちいち後悔するようなタマやないで、あの子は」

「フッ……」

「なんや？　一人鼻で笑ったりして」

「いやな、凪と同じ事を言うからな」

「そうなん？」

真桜は怪訝な顔で凪に聞き、凪はふふっと、軽く笑って答える。

「……まあな」

「あー！　三人で何話してるのー！　ずるーい。沙和も混ぜてー」

「なに。他愛もない世間話をしてただけだ。それよりも、沙和は隊の布陣は終わったのか？」

「うん！　バッチリなのー！」

「そうか。ご苦労だったな」

「隊長。沙和には聞かないんですか？」

「構わん。二人の話を聞いて十分理解できたからな」

「そうですか」

「……まだ時間はあるようだな。なら……」

零治はいつものようにタバコを懐から取り出し、火を点けて煙を吹かし始める。

「フーー……」

零治のタバコを吸う姿を、凪達はきょとんとした顔で見つめている。
その視線に気づいた零治は三人に声をかける。

「ん？　三人ともどうした？」

「隊長。なんやの、その口にくわえちゅう物は？」

「ん？　ああ、タバコの事か」

「たばこ？　それは天界の言葉ですか？」

「まあな。コイツはオレの世界では、ごく一般的な嗜好品だ」

「へー。どうやって使うのー？」

「んー？　ただ火を点けて煙を吸うだけだが？」

「煙を吸うって……そんな事して何かええ事があるん？」

「とりあえず気分が落ち着く」

「へー。……ねえ、隊長。沙和もそれを吸ってみたいのー」

「ダメだ」

「えー。どうしてなのー？」

「タバコの煙は体に悪いんだ。それに麻薬と同じで依存性が高いから、一度吸い出すとタバコが無いとイライラするようになる。吸ってもいい事なんか一つも無いぞ」

「……あの、隊長」

「凪、お前が言いたい事は分かる。だから言うな」

「いえ、それでも言います。隊長、体に悪いと分かっていながら、どうしてそんな物を吸っているんですか？」

「ホンマやで。隊長、言っとる事とやっとる事が矛盾しとるやん」

「あー、はいはい。この話はもう終わりだ。……フーー……」

零治は凪達の言葉を適当にあしらい、残りのタバコを一気に吸い、吸殻を携帯灰皿の中に捨てた。

「……隊長って変わってるねー」

「そうかぁ？」

「そうだよー」

「なあ隊長。もう一つ質問してええか？」

「何だよ？」

「さっきのたばこ……やったっけ？　アレどうやって火を点けたん？」

「ああ、確かに気になりますね。火打石を使ったようには見えませんでしたし……」

「ああ、それはコレを使ったんだよ」

零治はそう言って、懐から愛用してるジッポライターを取り出す。

「なんなのー？　この小さな金属の箱は？」

「これはライターと言って、オレの世界に有る着火器具の一つだ」

「……らいたぁ……？」

聞いた事のない言葉に凪は面食らう。

「しかも着火器具って……隊長、ホンマにこんなんで火が点けれるがぁ？」

真桜は疑惑たっぷりの視線をライターに注ぎながら零治に聞く。

「点けれるさ。じゃあ三人とも、こいつをよく見とけよ」

三人は零治に言われ、じーっとライターを凝視する。三人の行動に零治は内心苦笑しながらライターの火を点けてみせる。

「っ！？　こ、これは！？」

「うわー、すごーい！　ホントに火が点いてるのー！」

凪と沙和はライターに火が点いた光景に純粋に驚いた反応をするが、真桜だけ二人とは違う反応をする。
具体的に言うと、眼の中に好奇心が宿り、興味心をくすぐられるような反応をしている。

「……なあ、隊長」

「ん、どうした？」

「それ……ちょっとの間、ウチに貸してくれへん？」

「……何をする気だ？」

零治は不審に思い、ジト眼で真桜に聞く。

「いやー……バラして構造を調べたいなー、と思って……」

絡繰を作るのが趣味の真桜としては、やはりその点が非常に気になるようだ。

「冗談じゃない。これが無いとタバコが吸えないだろうが」

「そこをなんとか！　ちゃんと無傷で返すき、お願いや！」

「絶対ダメだ」

「……」

少し離れた位置で、華琳は零治達のやり取りを無言でジッと見つめてる。

「……何をしてるのだ、あ奴らは？」

「さあ？　戦闘前の気合でも入れ直してるのではないの？」

「華琳様！　秋蘭隊、布陣完了しました！」

「そう。なら、行くわよ」

「御意。……銅鑼を鳴らせ！　鬨の声を上げろ！　追い剥ぐ事しか知らぬ盗人と、威を張る官軍に、我らの名を知らしめてやるのだ！　総員、奮闘せよ！　突撃ぃぃぃぃっ！」

春蘭の大号令と共に全部隊が突撃を開始し、黄巾党の殲滅戦が始まる。

「合図だ。凪、真桜、沙和！　お前達の働きに期待させてもらうぞ！」

「はっ！」

「おう！　任しときや、隊長！」

「沙和も頑張るのー！」

「よしっ！　真桜と沙和は左側の敵の掃討に当たれ！　凪はオレと一緒に来い！　正面の敵を殲滅するぞ！」

「了解です！」

「おっしゃあ！　ほんなら行くでぇ、沙和！」

「あっ！　真桜ちゃん、待ってなのー！」

真桜は愛用してる得物、穂先にドリルの絡繰が取り付けられた、螺旋槍と名付けている槍を構えながら一人突っ走っていくので、沙和も二本一組の剣、二天を手にして、その後ろ姿を慌てて追いかける。

「ふふっ。威勢がいい事だな。凪、オレ達も行くぞ！」

「はいっ！」

「うわわわっ！？　て、敵襲！　敵襲だーー！　応戦しろーー！」

不意を突かれた黄巾党達は大混乱に陥り、応戦こそするものの、華琳達の敵ではなかった。

「しっつれ～い♪」

身軽な臥々瑠がいち早く砦内部に侵入する。

「うわっ！？　な、何だテメェは！？」

「うるさいよ～」

臥々瑠は目の前の黄巾党を、持っている得物、鵜丸で斬り殺す。

「ぎゃっ！？」

「へへ～ん。いっちょあがり～」

「ちょっと臥々瑠。アンタ一人で突っ走りすぎよ」

追いついた奈々瑠が、先走る臥々瑠を姉としてたしなめる。

「いいじゃん。こんな連中、アタシ達の敵じゃないもん」

「そうかもしれないけど、油断はしちゃ……」

「このガキがっ！　死ねぇ！」

「黙りなさい……」

「ぐえっ！？」

奈々瑠は背後から襲い掛かってきた黄巾党に素早く反応し、鳩尾に強烈なボディブローを叩き込む。
黄巾党は苦悶の声を上げ、腹を押さえながら蹲ってしまう。

「終わりよ」

奈々瑠はそのまま蹲ってる黄巾党の脳天に千鳥を突き刺し、黄巾党は声も上げずに息絶えた。

「フンッ！」

「……」

「ん？　どうかしたの？　臥々瑠」

「奈々瑠……今のはやり過ぎじゃないの……？」

「こんな連中に慈悲なんか不要よ。それより残りの敵を片付けるわよ」

「うん。オッケ～♪」

二人は砦のさらに奥へ進み残りの敵の殲滅に当たる。戦況は華琳達の一方的な展開となり勝敗が決するのも時間の問題であった。

……

……

…

「はあああああっ！」

凪が裂帛の気合いと共に氣の弾を目の前の黄巾等に放ち、直撃を受けた数名の黄巾党が派手に吹き飛ぶ。

「隊長！　周囲の掃討、終わりました！」

「……凪」

「はい？」

「今のは……何だ？」

「何と言われましても……ただの氣ですが」

「ああ、あれが氣なのか」

「……隊長と瑠利亜様も氣を使われてるのではないのですか？」

「いや、オレと瑠利亜のは正確には氣じゃないんだ。まあ、似たようなモノには違いないが」

「そうなのですか。……隊長、私は周りの確認に行ってきます」

「ああ、頼む。……ふぅ……流石に疲れたなぁ……」

零治はそう言いながら、城壁に背を預け体を休める。

「あっ、隊長。お疲れなのー」

「おう。沙和もお疲れさん」

「火を放て！　糧食を持ち帰る事、まかりならん！　持ち帰った者は厳罰に処すぞっ！」

春蘭の指示で、中庭に集められた糧食に兵士達が火を点け、モクモクと煙が立ち上り始める。

「あーあ。やっぱり、勿体ないの」

「気持ちは分かるが……だからって、あの街に持ってく訳にはいかないだろ」

「みゅぅぅ……」

悲しげに唸る沙和。零治は沙和の気持ちを理解しながらも、華琳の心中を聞かせる。

「華琳も悩んだ末に下した決断なんだ。彼女もどうするかかなり悩んだと思うぞ？」

「うん……分かってるの」

「目的は果たしたぞ！　総員、旗を目立つ所に挿して、即座に帰投せよ！　帰投、帰投ーっ！」

秋蘭が大声で周りに散っている兵達に帰投の指示を出す。

「さて。帰投命令も出たし、旗を挿して、帰るぞ」

「分かったのー。ねえ、隊長はどこに挿すのー？」

「オレは……そうだなぁ……。おおっ。あそこにするか」

「えー、どこー？」

「ほら。アレだよ、アレ」

零治はそう言いながら、一番高い正殿の屋根を指差す。

「隊長。アレはいくらなんでも無理なんじゃあ……」

「無理じゃないさ。こうやって……フッ！」

零治は自分の軍旗を抱え、その場から大きく跳躍し、正殿の屋根に着地する。

「……」

「おーい、沙和ー。ここにおったんか。早く旗をその辺に挿して、帰るで」

「ん？　沙和。隊長はどこに行ったんだ？　さっきまでここに居たはずなんだが？」

「……えっと……あそこに居るの」

「ん？　どこや？」

「アレ……あの正面の大きな建物の屋根の上なの……」

沙和はそう言いながら、正殿の屋根を指差す。凪達は沙和の指が差してる方向に視線をやり、眼を凝らして、屋根の上に居る、豆粒程度の大きさの零治の姿を発見し言葉を失う。

「……」

「……」

「……」

「なあ、沙和……」

しばらくして、真桜が口を開いた。

「なーに……？」

「隊長……どうやってあそこに登ったん……？」

「……ここから一気に跳んでったの……」

「それって……瑠利亜様が街でやったようにか……？」

「うん……」

「……」

「……天界の人って、みんなああなんやろうか……？」

三人はそんな会話をしながら呆然と正殿の屋根を見つめていた。

「っとぉ。瓦とはいえ足元には注意しないとな。……じゃ、この辺にでも……って、何だ。先客が居たのか」

「あっ、兄ちゃん」

「よう。季衣もここに旗を？」

「うん。一番高い所って言ったらここじゃん」

「まあ、そうだな。ところで季衣。お前どうやってここまで来たん

だ？」

「にゃ？　普通に登ってだけど？」

零治の質問に季衣は首を傾げ、さも当たり前のように答える。

「……マジ？」

「うん。ボク木登りが得意だから」

（いや、木とこの建物は全くの別物だと……よそう。気にしたら負けだ）

「それより兄ちゃん。早く旗を挿そうよ」

「ん？　ああ、そうだな」

二人は正殿の屋根の適当な場所に自分の軍旗を挿し込む。

「よし。目的も果たしたし、帰るか」

「うん」

「……あれ？　兄さん？」

「ん？　おお。お前達もここにしたのか」

「はい。一番高い所はここしかありませんし」

「まあ、確かな。ところで二人とも、瑠利亜はどうした？　一緒じゃないのか？」

「姉さんは旗を城壁の適当な所に挿して、さっさと砦の外に行っちゃったよ」

「やれやれ、張り合いが無いな。まあいい。なら、お前らもさっさと旗を適当な所に挿せよ。あまり華琳達を待たせる訳にもいかないからな」

「はい」

零治に言われ、奈々瑠達も自分の軍旗を適当な場所に挿す。

「よし。じゃあ戻るか」

「はい。兄さん、先に行ってますね」

「ああ」

そう言って奈々瑠達はその場から軽く跳躍し、屋根から飛び降りる。

「わっ!?　に、兄ちゃん！　奈々瑠と臥々瑠、飛び降りちゃった

よ！　大丈夫なのっ！？」

「大丈夫さ。ほら、下を見てみろよ」

「んー……？　あっ！」

季衣の視線の先には、無事地面に着地し、普段と変わらぬ様子で歩いてる奈々瑠と臥々瑠の姿があった。

「なっ？」

「う、うん。改めて思ったけど……あの二人って凄いんだね」

「まあな。それよりオレ達も降りるぞ。ほれ、季衣。オレにおぶされよ」

「えっ？　兄ちゃん、何するつもりなの？」

「いや、お前を背負ってここから飛び降りるんだよ。どうせお前一人だと、ここから地道に降りてくしかないんだろう？」

「う、うん。それはそうなんだけど……」

今からやる事の内容が内容なだけに、流石の季衣も不安なようだ。

「大丈夫だ。オレを信じろよ」

「うん。分かったよ」

季衣はそう言って、零治の背中によじ登り首に両腕を回す。

「しっかり掴まってろよ。いいか、行くぞ？」

「うん」

「せー……っの！」

零治も奈々瑠達同様、屋根から軽く跳躍して飛び降りて、凄まじい速度で地面に落下していく。

「うっ、うわわわぁぁぁっ！！」

あまりの落下速度に、季衣は思わず零治の首に回してる腕に力を込めてしまう。

「ちょっ！？　季衣、首を絞めるなっ！」

「あっ！　ごめんっ！」

「口を閉じてろ！　もう着地するぞ！」

零治はあっという間に地面に到達し、大地を踏みしめるようにしっかりと着地する。その際、爆音にも似た轟音が鳴り響き、着地地点を中心に石造りの床にひびが入る。

「ふう……季衣、もう降りても大丈夫だぞ」

「う、うん」

零治はその場に屈みこんで季衣を地面に降ろす。

「兄ちゃん……足、何ともないの？」

「ん？　ああ。平気だ」

心配そうに季衣は零治に尋ねるが、当の本人は涼しい顔で答える。
季衣は改めて零治の凄さを目の当たりにした。

「……兄ちゃんも凄いね……」

「まあ、否定は出来んな。それより早いとこ外に出ようぜ」

「そうだね」

二人は華琳達の所に合流するためその場を後にした。

……

……

…

城までの帰り道。華琳は主要な人物を集め簡単な会議のようなものを開いている。

「作戦は大成功でしたね、華琳様！」

「ええ。皆もご苦労様。特に凪、真桜、沙和。初めての参戦で、見事な働きだったわ」

春蘭の言葉に華琳も同意するように満足げに頷き、皆に労いの言葉をかける。

「ありがとうございます」

「おおきに」

「ありがとうなのー」

「さしあたり、これでこの辺の連中の活動を牽制する事が出来たは

ずだけれど……」

「はい。しばらく大きな動きは出来ないでしょう。ただ、もともと本拠地を持たない連中の事。今回の攻撃も、時間稼ぎにしかならないはずです」

「でしょうね。だから、連中の動きが鈍くなった今のうちに、連中の本隊の動きを掴む必要があるわ」

「どうやってだ？　連中は本拠地が無いのに」

華琳の言葉に零治が疑問を投げかけ、桂花がそれに答える。

「地道に情報を集めて回るしかないでしょう。補給線が復活すれば、優先順位が高い順に補給を回していくでしょうし」

「なるほど……。それを追跡して、優先的に物が回る場所が奴らの重要拠点という事ですね」

瑠利亜が桂花に視線をやりながら言う。

「そういう事。しばらくは小規模な討伐と情報収集が続くでしょうけれど、ここでの働きで、黄巾を私達が倒せるかどうかが決まると言っても良いわ。皆、一層の努力奮闘を期待する！　以上！」

「はいっ！」

華琳の言葉に、季衣が力強く頷いて返事をする。

「ああ、そうだ。例の、旗を一番高い所に飾るという話だけれど…
…結局誰が一番だったの？」

それからすぐに華琳は思い出したように、旗を高い所に挿す件を話題に持ち出した

「あーっ。なんか忘れてると思うたら、それか！」

「はっはっは。初めての戦で、そこまでの余裕は無かったか！　まだまだ青いなぁ！」

「くぅぅ……！　置いて帰るんで精一杯やったわ」

真桜は悔しそうに唸り声を出す。

「……そういう春蘭は大人気がなさすぎるぞ」

「な、なんだとぅっ！」

「で、誰なの？」

「……」

零治が黙ったまま軽く手を上げる。

「あら、零治。貴方なの？」

「ああ。後、季衣に、奈々瑠と臥々瑠だ」

「そう。どこに挿したの？」

「ええっと……城の真ん中に有る一番大きい建物の、屋根の上ですけど」

華琳の問いに、季衣は渋面を作り思い出すように答える。

「正殿の屋根に突き刺さっていた、あれか！？」

「……どうやって挿したの」

季衣の答えに、春蘭は驚きの声を上げ、華琳も信じられないという表情で季衣に聞く。

「ボク、木登り得意なんですよ」

季衣はいつも通りの明るい笑顔で答えた。

「……」

「……」

春蘭、秋蘭は完全に言葉を失ってしまう。そもそも、正殿は木登り感覚で登れるような建物ではないのだから当然と言える。

（まあ、当然の反応だよなぁ）

「……ならその勝負は零治、季衣、奈々瑠と臥々瑠の勝ちで良いわね。貴方達、何か欲しい物はある？」

「うーん……特に、何も無いんですけど……」

「私も特にこれといって……」

「オレはそもそも興味が無い」

「揃って欲の無い子達ね。……臥々瑠、貴方は？」

「あっ！　じゃあ、アタシは美味しい食べ物が欲しいー！」

「そう。なら臥々瑠は食べ物で決まりね。……貴方達三人は？　何でも良いのよ？」

「何かあるだろう。食べ物とか、服とか……」

「え？　どっちも、今のままで十分ですし……」

「私も……」

「フーー……」

零治はいつの間にか一団から少し距離を取り、華琳の話を聞かずにタバコを吸い始めていた。

「領地までは流石にあげられないけれど……何か無いの？」

「そんなものいりませんよー」

「ホント、私も特に何も無いですから」

「まあいいわ。なら、貴方達三人には一つ貸しにしておくわね。何か欲しい物が出来たら、言いなさい」

「はいっ！　ありがとうございます！」

「分かりました」

「零治、聞こえた？」

「ん……？　ああ。ちゃんと聞いてたさ。まっ、適当に考えとくわ」

「はぁ……まったく。まあいいわ。なら、話はここまでにして、帰るわよ」

「ああ」

こうして黄巾党との緒戦は華琳達の勝利で終わり、一同は帰路に着くのだった。

第１８話　黄巾の乱、勃発　後編（後書き）

零治「久々だな。こんなに長ったらし文章の塊は」

作者「ああ。オレもまさかここまで長くなるとは思わなかった……」

瑠利亜「それは、貴方の話のまとめ方が悪いからでしょう」

作者「うっ……」

奈々瑠「ホント、よくこんなんで小説を書こうって気になりましたねぇ」

臥々瑠「うんうん。同感」

作者「うっさい！　これでも努力してるんだぞ！」

零治「やれやれ。こんなんじゃ『反董卓連合』は、一体どうなる事やら」

瑠利亜「まったくですね」

作者「とりあえず、今は考えたくない」

零治「いや、少しは考えろよ」

第１９話　始動！　音無警備隊（前書き）

サブタイトルを見れば分かる通り、今回の話は三羽烏がメインです。
しかし、サブタイトル……捻りが無さすぎる……

第１９話　始動！　音無警備隊

零治は主が不在の玉座の間で苛立ちを込めて呟く。

「……遅いな」

「……すみません。隊長……」

凪が申し訳なさそうな顔で零治に謝罪する。
というのも、凪、真桜、沙和の三人は今日から警備隊の一員として仕事に就く事となり、零治は三人に玉座の間に集合するように言っていたのだが、真桜と沙和は未だに現れる気配が無い。

「別に凪が謝るような事じゃない。悪いのは、あの二人だからな」

「まあまあ。確かに遅刻は問題ですが、彼女達は警備隊としての初仕事なんですから、今日くらい大目に見てあげましょう。ようやく念願の優秀な人材が来てくれたんですから」

瑠利亜がそう言ってなだめるが、零治の苛立ちは収まる気配が無い。

「……まあ、優秀な点は否定せんが……」

と、その時。

「ごめーん。遅くなってもうた」

「やっほー。お待たせなのー」

「……やっと来たか。お前ら遅いぞ」

「いや、だからこうして謝っとるやんか」

「その割には悪びれてる様子が全く無い気がするのは、オレの気のせいか？」

「それは気のせいなのー」

沙和はそう言ってはいるが、二人ともへらへらと笑っており、息を切らしてる様子も無いので、急いでここまで来た気配は全く無い。つまり、今日の遅刻は確信犯と言っても過言ではないだろう。

「はぁ……。まったく二人とも、初仕事の日からそんな事でどうするんだ。だいたいお前達は昔から……」

「凪、その辺にしてやれ」

「ですが、隊長！」

「構わん。まだ不慣れな点もあるだろうから、今回は特別に大目に見てやる」

「おお。流石は隊長。話が分かるのー」

しかし、ただの遅刻と言えど、それを無償で許すほど零治は甘い男ではない。

零治はすーっと眼を細め、脅しをかける。

「ただし……次やったら始末書だからな……」

「うっ……。隊長、その始末書って、なんかヘマやらかしたらホンマに書かなあかんが……？」

「それはやらかしたヘマの内容によるがな。まあ、今日みたいなあからさまな遅刻は、本来なら始末書を書かせてるところだぞ」

「……」

「……」

真桜と沙和から先程までのにやけた表情は完全に消え失せ、強張った表情になる。

いつの時代でも、大量の謝罪文を書かされるのはやはり苦痛でしかないのだ。

「それが嫌なら今後は注意しろ」

「へ～い……」

「はーい……」

二人は何やら不満げな表情で生返事をする。

「はぁ……」

二人の態度に、凪は頭を抱えながら溜め息を吐く。

「さて、話がまとまったところで、説明を始めますかな」

「そうだな。……じゃあ、瑠利亜。頼む」

「そこは普通、隊長である貴方が説明するのでは……？」

「こいつらの説教で疲れた」

「はぁ……しょうがないですねぇ。……では説明を始めますよ。三人とも整列」

「はっ」

「ほいよー」

「はーい♪」

三人が零治と瑠利亜の前に、姿勢を正しながら横一列に並ぶ。

「えー、私達の主な仕事は街の治安維持です。貴方達三人は、華琳の命で私達と同じ警備隊に配属となりました。今日は私達と一緒に街の見回りを行いますが、三人は指揮官としても能力が高いので今後は小隊長として部下を率いて街の警邏に出てもらう事になるでしょう」

「はいっ！」

「ほーい」

「分かったのー」

「はい。元気があってよろしいですねぇ。三人とも、何か質問はありますか？」

「はーい。瑠利亜様、しつもーん」

沙和が元気よく手を挙げ、瑠利亜に質問する。

「はい、どうぞ」

「休憩はいつ取れるのー？　後、休憩時間はどれぐらいなのー？」

沙和の、あまりにも場違いな質問にその場の空気が凍りつく。

「沙和……いくらなんでも、その質問は無いやろ」

流石の真桜もツッコミを入れざるを得ない。

「えー。そんなことないよー。これはとっても重要な事だと思うのー」

「ハ、ハハハ……」

瑠利亜が乾いた笑い声を上げながら苦笑する。

「はぁ……。まあ、一通り担当区域の見回りを終えたら、お茶や食事休憩をするぐらいなら認めてる。それと休憩時間は組み分けの時に決めた班長の判断に任せてある」

「おおっ！　それはとってもすばらしいと思うのー！」

「ただし、過剰な休憩は始末書の対象だからな。そこの所は憶えとけよ」

「はーい！」

「ホントに分かってんのかぁ？」

零治は沙和を訝しげな表情で見つめる。初っ端から遅刻をしてきただけにやはり不安ではある。

「まあ、いいんじゃないんですか？　どこかで息抜きをしないといつか爆発しちゃいますし。彼女の質問もある意味、間違ってはいないでしょう」

「まあ、確かにな。……他に質問はあるか？」

「いえ、私は特に」

「ウチも無いで」

「沙和も無いのー」

「そうか。なら、今から街の見回りに行くぞ」

「はっ！」

「了解や」

「はーい」

一同は玉座の間を後にし、街の見回りに出発する。

……

……

…

「……ん～？」

「隊長、むずかしー顔してどないしたん？」

「いや、どうも街の様子がいつも違う気がしてな……」

「ああ、言われてみれば確かに。……もうすぐ昼時で、通りに並ぶ店が盛り上がりを見せ始める点は変わらないんですが……」

「ああ。いつもなら周りの人たちも声をかけてきたりして来るんだが、今日は遠巻きにこっちを見てるだけだよなぁ……」

零治は街の人たちの反応がいつもと違うのを疑問に思いきょろきょろと辺りを見回す。

「あ」

零治の視線が凪、真桜、沙和の三人に止まる。

（そうだった。オレ普段は一人で出歩く事が多いが、今日はコイツらが一緒だったな。だからか……）

「隊長、不審者でも居ましたか？」

「えー、そんなの怖いのー」

「アンタが怖いゆうてどないすんねん。ウチらより、強い不審者なんて滅多におらんから安心し」

「……瑠利亜」

「はい？」

「今日のオレ達って、明らかに目立ってるよな？」

「そうですね。私達も武装こそしてますが、この世界の武官みたいに鎧までは身に付けてませんから、街の人達も比較的話しやすいんでしょうが……」

「この三人は武装もしてる上に服装も厳ついからな。街の連中も警戒するわな……」

「ん？　二人して何を話しとんの？」

「いや……オレ達、目立ってるなぁ、と思ってな」

「そう？　そんな事ないやろ」

「いや、明らかに目立ってますよ。特に貴方達三人は」

「気のせいなのー。……あ、もしかして沙和に見とれてるのかな」

「ははははっ！　無い無いー」

「そんなすぐ否定しなくたっていいじゃーん！　真桜ちゃん、酷いのー」

「……不審者、不審者……」

のんびりな沙和とツッコミ役の真桜のやり取りをよそに、凪は一人真面目に不審者が居ないか辺りをきょろきょろと見回している。

「……」

「なかなかに個性の強い子達ですね」

「はぁ……先が思いやられるぞ」

零治がため息交じりにそう呟いたその時。

「あーーー！！」

沙和が突然大声を上げ、数軒先の店先に駆け込んでいく。

「どうしたっ！？」

「もしや、不審者か？」

残りのメンバーも慌てて沙和の後を追う。

「新しい阿蘇阿蘇（あそあそ）が出てるー！！」

「あ、阿蘇阿蘇？」

「そ、阿蘇阿蘇なの。ほら！」

沙和はそう言って、普通のより大きめの本のページを瑠利亜に広げて見せる。内容から察するに女性向けのファッション雑誌のようなもだろう。

「見て見てー！　社練（しゃれん）の抜具（バッグ）の新作が載ってるの♪　かわいー！」

「阿蘇阿蘇……ひょっとして、ａｍａ……むぐっ」

沙和が何かを言いかけた瑠利亜の口を塞ぐ。

「瑠利亜様、それ以上は言っちゃダメなの。ね、それよりほらー！　沙和、今月の恋愛運、二重マルみたいなのー！　瑠利亜様、隊長の誕生日って、いつなのー？」

「零治の誕生日ですか？　確か零治は……」

（……ふむ。やはり年頃の女ってのは、いつの時代、どこの国でも変わらないみたいだな。まあ……こういった空気はオレには縁遠いものだが……。って、凪と真桜はどこに行った？）

零治が二人を探すように辺りをきょろきょろと見渡していたその時。

「おーーーっ！！」

「今度はなんですっ！？」

「オレが行ってくる」

向かいの店から真桜の叫び声が聞こえたので、零治は落ち着いた足取りで歩み寄る。

「おい真桜。どうかしたのか？」

「見てぇ！　発売中止になった超絶からくり夏侯惇！」

「……なんだ、こりゃ？」

「え。隊長、コレ知らんの？　ホンマに？　からくり夏侯惇やで」

「まったく知らんな」

真桜の手の中に有るのは、からくり仕掛けの人形のようで、外観は言われてみると確かに、夏侯惇……つまり春蘭に見えなくもない。

「これはな、許昌のからくり師が勇名轟く春蘭様のからくりを是非とも作りたいっちゅー事で作られてんけど……」

「ふんふん……」

「大人気ない春蘭様は『こんな物は私では無い！』って怒ってもーて、あっちゅー間に発売中止になってん」

「……なるほどな。それでいつしか貴重な物になった訳か。春蘭も大人気ない奴だなぁ」

「せやねん～。こりゃ掘り出し物やで。好事家なら驚くような値を付けるはずや！　……な、おっちゃんこれナンボ？」

「おい、真桜。お前……買う気なのか？」

「当たり前やろ！　この機会逃したら、次いつこんな巡りあわせがあるか分からへんやん！！」

「おい……今は仕事ちゅ……」

「おっちゃん、ナンボ!?　……は?　あっかん!　そら高い!　ぼり過ぎやろ!」

「……」

真桜は零治の言葉に耳を貸さずに、店主と値切り交渉を始めだす。

「うーむ……これはひょっとして、オレは舐められてるのだろうか?　ここは一度厳しくしごくべきか?　……だがやり過ぎると逆に怯えられるし、そこの加減が難しいよなぁ。どうするべきか……」

零治が一人自問自答を繰り返してるその時。

「待てっ!!」

「今度はなんだっ!?」

今度は凪の叫び声が上がり、零治は声がした方角を振り向く。

「待てぇーいっ!!」

「うおっ!?」

「待てと言われて、止まる奴が居るもんかっ！」

すぐ近くの店先から飛び出してきた不審な若い男が、零治のすぐ隣を走り去っていき、その後を数メートル遅れて、凪が追いかける。

「何の騒ぎだ？」

「盗人だよ、盗人！　店の売り物、片っ端から盗んでいきやがったっ！」

被害に遭った店の店主と思われる人が零治に説明をする。

「なんだと！？　瑠利亜、オレは凪の後を追う！　その二人の面倒はお前に任せた！」

「はっ！？　ちょっ！　何を言って……」

零治は言う事だけを言って、瑠利亜の抗議には耳を貸さずに、凪の後を追いかけ始める。

「凪っ！！　絶対に逃がすな！　何としても捕まえろーー！」

「はい、隊長！」

凪は魏の将軍達の中でも、かなりの俊足の持ち主だが、相手の賊もなかなかにすばしっこく、街の狭い裏路地に入り込みちょこまかと逃げ回り、零治と違ってあまり裏道に慣れていない凪は見失わないようにするのが精一杯だった。

「くっ……ちょろちょろしおって……」

息も切らさず走り回りながら、凪は悔しげに眉根を寄せる。

「ええいっ！　まどろっこしい！！」

「ん？」

走る凪の背に、メラメラと赤い炎が浮かび上がる。ちなみに凪の攻撃方法は素手による格闘術と氣弾攻撃だ。つまりこれは、凪の闘志が眼に見えてるのではなく、凪自身が氣を練り、攻撃準備をしている訳で……練り上げた氣が凪の右脚に集中する。

「ちょっ！？　こんな街中で氣弾攻撃をする気かっ！？」

零治達が現在居る場所は、洛陽の中心街。多くの店が建ち並び入り組んでる場所だ。そんな所で威力抜群の氣弾を放てばどんな結果になるかは……推して知るべしだ。

「やめろ、凪！　こんな街中で本気を出すなぁぁぁぁっ！！」

「はあぁぁぁぁぁーっ！」

「だあああああっ！！」

零治が止める間も無く、凪は裂帛の気合いと共に氣弾を放つ。蹴りから繰り出された氣の塊は、凄まじい騒音を上げながら街の店々を薙ぎ倒しながら、賊めがけて飛んでいく。

「ぎゃあぁーっ！」

「うわあぁー！」

「きゃあああぁぁ！」

氣弾は街中を飛んでる訳だから、町人達が巻き込まれるのも当然なわけである。

「……あ……ぁ……あ……」

崩れ落ちる建物。逃げ惑う人々。ついさっきまで平和だった洛陽の街は一瞬にして阿鼻叫喚の地と変り果てる。

「泥棒一人捕まえるのに、なぜこんな事に……」

零治は地面に両手を付きガックリとうなだれる。

「げふっ！？」

数々の被害を生み出した末に、やっと本来の目的である若い盗人に氣弾が命中する。

「よしっ！　見たか！」

凪は賊に氣弾が命中したのを確認し、グッとガッツポーズを取り、脇目も振らずに倒れてる賊に駆け寄り、そのまま腕を捻り上げる。

「隊長。賊を一名、捕獲しました！」

「は、はい……ご苦労さん」

心底嬉しそうな笑みを浮かべ、満足げな凪。どうも彼女の眼には街の惨状は映ってないらしい。

「ちょっ！？　零治、何ですかこの惨状はっ！？」

「なんやなんや、どないしたん～？」

「街が大変～！　驚きなのー」

そこにようやく、真桜と沙和を連れ立った瑠利亜が合流する。真桜の手にはからくり夏侯惇、沙和の手には阿蘇阿蘇の本がしっかりと握られていた。

「お前ら……来るのが遅せぇよ……」

零治は三人に恨めし気な視線を向けながら言う。

「社練のお店は無事かなあー！？　今度、新作の靴が出るのに心配なのー！」

「いやー、ウチのからくり人形ちゃんは何とものうてホンマ良かったわ！　はように買うとって正解や！」

「隊長！　こやつはどこに連れて行きましょう？」

「もう……どこへでも好きな所に連れて行けよ……」

「……」

流石の瑠利亜も目の前の光景を見て完全に言葉を失っていた。

「……瑠利亜」

「……なんですか？」

「オレ達……華琳に殺されるんじゃね……？」

「……そうならないように、せめて言い訳ぐらいは考えときましょうね……」

「……ああ」

しかし、そんな事を言った所で、華琳が許してくれるとはとても思えないが。

「……」

「……」

「「はぁ……」」

二人は街の惨状を改めて眼にして、項垂れながら大きな溜め息をつく。

この後、城に帰還した零治達が華琳にこっぴどくお叱りを受けたのは言うまでも無い。

第１９話　始動！　音無警備隊（後書き）

作者「はい。今回の話、どうだった？」

零治「うーん……何というか……」

瑠利亜「……普通？」

作者「普通って……」

臥々瑠「だって……ねぇ……」

奈々瑠「ええ。内容が原作と殆ど同じでしたし……」

瑠利亜「違う所っていったら、最初ぐらいですし」

零治「作者の力量の無さが招いた結果だな」

作者「やかましい」

第２０話　昼食会（前書き）

約一名、出てないキャラが居るかもしれませんが気にしないでください。
登場させる要素が見つからなかったんで。
黄巾党編を終わらせたら、次の拠点パートの話は彼女メインで書こうと思ってますので、ファンの方はご安心を。

第２０話　昼食会

「うーん……むむむぅ……」

零治は一人自室に籠もり、机に広げられた街の地図と睨めっこをし、渋面を作り名がら唸り声を上げている。

「どうも最近、区画によって治安の格差が顕著に出てるよなぁ。特に西地区はかなり酷いからなぁ。やはり西地区は重点的に巡回を……しかし、そうすると他が手薄に……。もう少し人員を増やして、予算を割り振ってかないとな……」

零治は一人ブツブツと地図を前にして呟く。

「うーん……予算も人員も全然足りないな。やはり見直しが必要……だな。かといってあまり無理を言うと桂花の奴がうるさいからなぁ……。ああっ！　いい案が全然浮かばねぇ！」

零治は一人部屋で怒鳴り声を上げ、髪をわしゃわしゃと掻き回し、不意に窓から太陽を見上げる。

「……ん、そろそろ昼時か。いい案も浮かばねぇし、いったん区切って昼にするかな」

零治は一人そう言って部屋から出て行く。

「さーて、今日はどうするかなぁ？」

零治は一人廊下を歩きながら今日の昼食をどうするかブツブツと呟く。

「おっ、隊長。丁度ええところに」

「ん？」

「あっ、隊長。お疲れ様です」

廊下の反対側から、凪、真桜、沙和の三人がやって来て、凪一人だけ姿勢を正して零治に挨拶をする。

「おお、お疲れ。三人揃ってどうした？」

「えっとー、これからお昼に行こうと思うんだけど、隊長も誘おうと思って」

「ん、そうなのか？」

「私は止めたのですが……」

凪が伏し目がちに言う。

「いや、全然気にする必要はないぞ。部下と一緒に昼食をして親睦を深める事も出来るしな」

「そうですか。よかった」

零治の言葉に凪は安堵の笑みを浮かべる。

「で、お前らはなんか食いたい物とかあるのか？」

「では麻婆で」

「即答かよ！」

零治は思わず凪に裏券を入れつつツッコミをする。

「……なんですか？」

凪は零治のツッコミにキョトンとする。

「いや、一緒に行くのを遠慮してた割には食べたい物を即答したから、ついな……。しかし、麻婆とは意外だな」

「隊長、あんな！　凪の奴、激辛料理が大好きやねんっ！」

真桜が凪に背後から抱きつき、ほっぺをプニプニと突付きながら言う。

「なっ！　やめろ真桜！　隊長の前だぞ！　それに私は別に……」

凪が顔を真っ赤にして反論するが。

「はーい。凪ちゃんに質問その一。麻婆茄子と茄子田楽、どっちが好きー？」

「麻婆」

「質問その二。麻婆春雨と？麺（ラーメン）は？」

「麻婆」

「最後ー。唐辛子と荔枝（ライチ）はー？」

「……唐辛子」

「なっ？」

「ああ。今のでよーく分かった」

「隊長には誤解してほしくないのですが、私は決して辛い料理だけが好きとか、辛い料理ばかり食べているとか、そういう訳ではなく……」

「ああ、それは分かってるから、そこまで反論しなくてもいいだろう」

「はい……」

「ほんなら昼食べに行こかー」

「おーなの！」

「いや、わざわざ外に出て食べに行く必要はないだろう？」

「へっ？　どういうこっちゃ？」

「今から厨房に行くぞ。お前らの分の昼飯も作ってやるよ」

「えっ！？　隊長って料理出来るが？」

真桜は眼を丸くする。零治が料理をするのがよっぽど意外と思ったらしい。

「何だその反応は……。オレが料理をするのがそんなに不思議か？」

「いや、だって……隊長が料理をする姿なんて、正直想像がつかんもん」

「こら、真桜。いくらなんでも失礼だぞ」

「えー。じゃあ凪ちゃんは想像出来るのー？」

「……」

凪は黙り込んでしまう。その時点で考えは明白だろう。

「お前らがオレをどういう眼で見ていたのか、今のでよーく理解出来た。せっかくお前らの食いたい物を作ってやろうと思ったんだが、やめにするかな」

零治はそう言って、くるりと踵を返す。

「あー、ウソウソ。さっきの言葉は取り消すき、そんなつれない事言わんといてぇなぁ！」

真桜が零治のコートを引っ張って引き止める。

「……二度目は無いぞ？　分かったからコートから手を離せ」

「あの……本当にいいんですか？」

「構わんよ。どうせ今日は厨房に行かなきゃならん理由もあるしな」

「……厨房に行かなきゃいけない理由ー？　それってなんなのー？」

沙和が首を傾げながら訊いてくるが、零治は適当にお茶を濁す。

「なーに、大した事じゃないさ。ほら行くぞ。早くしないと昼休みが終わっちまう」

「あー！　隊長、絶対なんか隠しちゅうやろー。ケチな事言わんと教えてえなぁ」

「ホント大した事じゃないんだ。あまり要らん詮索をすると飯を作ってやらねぇぞ？」

「ちぇー……」

「真桜。隊長の前でみっともないぞ」

（こいつらに理由を話したら、絶対について来ないだろうからなぁ）

零治は内心苦笑しながら、数日前に城内の廊下であった、秋蘭とのやり取りを思い出す。

……

「オレが華琳の昼食を～？」

……

零治は眉をひそめながら秋蘭に訊く。

……

「うむ、そうだ。まあ、音無も仕事がある身だから、たまにで良いそうだが」

「秋蘭。オレが料理を作る点において致命的な欠点を抱えてる事は知ってるだろう」

「無論、華琳様もその点は承知している。その上でお前に作ってほしいと言ってるのだ」

「う～ん……」

零治は腕を組んで唸る。どうも乗り気ではないようだ。何しろ食事を出す相手が、あの華琳なのだから当然の反応だろう。

「なあ、華琳って相当の美食家で食通なんだろ？」

「ああ。それに華琳様ご自身もかなりの料理の腕前を誇っておられる」

「その華琳に昼食を作れって……正直難易度が高すぎるだろ」

「そうか？　お前が以前作った炒飯の味は正直言ってかなりの物だったぞ」

「……」

「少なくとも華琳様はお前の料理の腕を高く評価している。華琳様が人の料理の腕前を認めるなんて事は滅多に無いぞ」

「まあ、それは嬉しい事だが……ここって、他に華琳個人に料理が作れる奴は居ないのか？」

「他には私ぐらいだな」

「……春蘭は？」

「……姉者が料理なんか出来ると思うか？」

「思わん」

本人の居ない所でボロクソに言われる春蘭もなかなかに気の毒である。

「だろ？　それでどうなんだ？」

「うーむ……華琳に料理を作るって事は当然評価もされるよな？」

「だろうな」

「まあ、料理をする事自体は嫌いじゃないが……」

「なら引き受けてくれるか？」

「はぁ……分かった。引き受けよう」

諦めたように溜め息を吐き、零治は承諾した。

「そうか」

「ただし、一つ条件がある」

「なんだ？」

「味の評価をするんなら、オレの味覚と嗅覚が鈍いという点を踏まえた上で評価してくれ。でないと作る気がせん」

「分かった。伝えておこう。では昼食の件、よろしく頼むぞ？」

「ああ。……おっと、そうだ。大事な事を聞き忘れるところだった」

「大事な事？」

「華琳って苦手な食べ物とかあったりするのか？　オレ、アイツの好みを知らないからさ」

「ああ、そうだったな。……華琳様は基本的に好き嫌いは無いが、唯一苦手なのが辛い食べ物だな」

「辛い物？　それって基準はどの程度なんだ？　人によって苦手な辛さの度合いは違うから、それだけじゃ判断しにくいぞ。……例えば麻婆豆腐とかはどうなんだ？」

「……確か麻婆豆腐は普通の辛さでも大丈夫だったはずだ」

「……一応判断材料にはなるか。他には何かあるか？」

「いや、もう特には無いと思うぞ」

「そうか。なら、昼を作ってほしいときは連絡してくれ」

「分かった」

……

……

…

（はぁ……気が重いな……）

「ん？　隊長、どうかしましたか？」

「ん？　ああ、なんでもない。気にするな。それより早く厨房に行くぞ。もたもたしてると昼休みが終わっちまう」

「はい」

そうして一同は厨房に足を運ぶ。

……

……

…

「さーて、お前らは何が食いたいんだ？」

「そしたらウチは、麻婆豆腐と炒飯」

「沙和は麻婆茄子と炒飯と……後、餃子も食べるのー」

「餃子は何餃子がいいんだ？　焼き餃子、水餃子、蒸し餃子、どれにする？」

「へっ？　隊長、餃子は普通、蒸すか水餃子にするんちゃうが？」

真桜が怪訝な顔で零治に訊いてくる。

「ああ、そういえばこっちの世界には焼き餃子は無かったんだったか。オレの世界じゃ餃子は焼いて食うのが一般的なんだよ」

「へー。変わってますね」

「だったら、その焼き餃子を食べてみたいのー」

「あいよ。餃子は一人前でいいか？」

「うん。あんまり食べると太っちゃうのー」

「分かった。……で、凪は？」

「麻婆豆腐、麻婆茄子、辣子鶏（ラーズージー）、回鍋肉、全部大盛り、唐辛子ビタビタでお願いします」

「ぶっ！」

零治の問いに凪は即答するが、内容が内容なだけに零治は驚きの表情で吹き出す。何しろ頼んだ料理が全部、唐辛子を使った物のオンパレードなのだから。

「……どうかしましたか？」

「ああ……いや、本人が良いってんなら、別に良いんだ。好みは人それぞれだからな……」

流石の零治も反応に困ってしまい、ぎこちなく応対する。

「あははは♪　沙和も始めて見たときは、そんなに食べて平気？って聞いちゃったもん」

「まあ、隊長の気持ちもよう分かるけど、凪やったら大丈夫やで。行きつけの店じゃいつもやっとる事やき」

「そ、そうか……。なら、調理を始めるかな」

そう言って零治はコートを脱いでその辺に適当に置き、前掛けを身に着け、厨房の一角に大量に置かれてる食材を手に取り調理を始める。

「凪。作る物の関係上、お前の分は最後になってしまうが構わないか？」

「はい。構いません」

「悪いな」

零治は凪に一言そう言い、餃子の餡作りに取り掛かる。

（しかし唐辛子ビタビタねぇ……。味を落とさずに辛くするのって結構大変だからなぁ。作るのは一苦労だな。ってか、味見はどうし

よう……凪にやらせるか？　オレ、あいつの好みの辛さを知らないし）

「なあ、隊長」

「ん？　なんだ？」

真桜が話しかけてくるが、零治は料理に集中してるので、背を向けたまま返事をする。

「作り始めてから聞くのもなんやけど、そこにある食材って勝手に使ってええが？」

「ああ、それなら大丈夫だ。ここにある食材は全部オレ個人の金で買った物だからな。つまり、これはオレの私物なんだよ」

「えっ！？　それ全部ですか！？」

「なんだよ？　そんなに驚くような事か？」

「だって……量が量だし、驚くなって方が無理だと思うの」

「ああ、そういえば三人は知らないんだったな。……お前ら、臥々瑠は知ってるよな？」

「ん？　えっと、あの犬耳姉妹の妹の方やったっけ？　あの子がどないしたん？」

「ここにある食材は全部アイツのために買ったような物なんだよ」

「そうなんですか？」

「ああ。アイツは飯を食う量が半端じゃなくてな。恐らく季衣と同等か、それ以上だな」

「えーっ！？　あんなに小さいのにー！？」

「なんだよ？　それを言ったら季衣も十分小さいだろ？」

今の言葉、季衣が聞いたら間違いなく怒りだすだろう。

「なるほど。けど隊長、それでどうして隊長が食材を大量に買う必要があるんですか？」

「アイツは基本的にオレが作る飯しか食わないんだよ。まあ、一緒に外食もしたりするが、それでもオレの作る料理が一番好きらしい」

「へー、そうなんや。ひょっとして厨房に来る理由ってソレなが？」

「当たらずとも遠からずだな」

「じゃあ、一体なんながよ？」

「知りたければ自分の頭で考えろ。……よし、これで餃子の方は焼けば出来上がりだ」

零治は三人と話をしながらも、作業の手は止めずに餃子の餡作りから皮に包むまでの作業工程を終えていた。

「……凄いですね、隊長。私達と話をしながらも作業はちゃんとこなしてますから」

「そうか？　慣れればこれぐらい誰でも出来るだろ？」

「いや、普通そこまではでけへんやろ？」

「うんうん」

「そんなもんかぁ？　……さて、餃子と炒飯を一気に仕上げるか」

零治はそう言いながら、鍛冶屋で特注に作らせた焼き餃子用の小さな鉄板と中華鍋を火に掛け、黙々と調理を開始する。

「……凄い手際だ」

「ホンマやな。隊長に出来ん事って無いんとちゃう？」

「うん。沙和もそう思うのー」

「……」

ただひたすら黙って調理をする零治は真桜と沙和の分の料理を完成させていく。そして最大の難関、凪の分の『唐辛子ビタビタ』の調理を始める。

「さて……最大の難関の攻略を始めるのだが……。なあ、凪」

「なんですか？」

「お前の行きつけの店の『唐辛子ビタビタ』って、どんなんだ？」

「えーっと……全部の料理に唐辛子を……そのまま山盛りに……」

凪は顔を赤くしてボソボソとした声で申し訳なさそうに言う。

「そ、そうか……」

（唐辛子そのまま入れるのかよ。てか、味するのかそれ？　はぁ……作ってる最中に辛子の刺激臭で眼がやられたりしないか心配になってきたぞ……）

零治は心の中でそう思いながらも調理を始める。

「……」

黙々と料理を作っていくのだが……

（くっ……！　眼は大丈夫だが……唐辛子の刺激臭が……喉に……っ！）

「……ゲホッ！」

零治は堪らず、むせ返り咳き込んでしまう。

「隊長、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だ。それより凪、悪いが味見をしてくれるか？」

「私がですか？」

「ああ。一応、それっぽくは仕上げたつもりだが、オレ、お前の好みの辛さを知らないからな」

「分かりました」

そう言って凪は、見た目からして一番辛そうな辣子鶏を口に運ぶ。

「あむ……」

「……どうだ？」

「……」

「……凪？」

しばらく凪は固まったように黙り込んでいたが、やがて静かに口を開いた。

「隊長……」

「お、おう……」

「隊長、凄いです！　こんなに美味しい唐辛子ビタビタは初めてですっ！」

凪は零治の右手を両手で握りしめ、眼をキラキラと輝かせてる。どうも、零治が作った料理の味に感動してるようだ。

「そ、そうか……。つまり、この辛さで……良いんだな？」

「はいっ！」

「凪があんなに喜んでる姿ら初めて見たで……」

「隊長が作った料理がよっぽど美味しかったんだねー」

「な、凪。分かったから、とりあえず落ち着け。料理を卓に運ばなきゃならんから」

「あっ！　す、すみません。つい、興奮してしまい……」

「気にするな。喜んでくれるのは、作った身としては嬉しいからな」

零治は凪の頭を軽くポンポンと叩いて、出来上がった料理を三人が座ってるテーブルの上に次々と並べていく。

「はいよ。三人とも待たせたな」

テーブルの上に三人の料理が運ばれ、辺りに湯気と美味しそうな匂いが漂う。

「おおっ！　メッチャ旨そうやん」

「凪、白飯はいるか？」

「はい。いただきます」

「……はいよ」

「ありがとうございます」

「んー？　ねえ、隊長。この餃子の周りに付いてる薄い膜みたいの

はなんなのー？」

「ん、羽の事か？」

「羽？」

凪が首を傾げる。

「ああ。そいつは羽付き餃子と言ってな、オレの世界の焼き餃子の一つだ。羽はパリパリしてて旨いぜ」

「へー、そうなんやぁ」

「さて、オレの分の昼を作るか。……ああ、三人はオレの事は気にせずに先に食ってて構わないぞ」

「えっ？　ですが……」

「いいっていいって。オレの分なんかすぐに出来上がるからよ」

「凪。ここは隊長のお言葉に甘えようや。ウチらもあんま時間が有る訳ちゃうんやき」

「……そうだな。では隊長、先に頂いてますね」

「ああ」

「いただきまーす♪」

「……」

零治は一人調理場に戻り、余った麻婆豆腐を自分好みの味に作り直し始める。

「悪い、凪。酢醤油取ってくれんか？」

「もぐもぐ……んぐっ、ん……はい」

「へへっ。おーきに。沙和、酢醤油要るやろ？」

「ありがとう。真桜ちゃんにしては気が利くのー」

「いやー、その餃子、酢醤油つけて食ったら旨いやろなと思うてなぁ」

「もー。素直に頂戴って言えばいいのに。じゃあ、一個あげるの」

「おーきにな」

「凪ちゃんも要るー？」

「あむ……ん、食べる……」

「はい、どうぞ」

「ありがと」

「おおう。ちょいと失礼するぜ？」

調理を終えた零治が凪たちのテーブルに、丼に盛り付けた麻婆豆腐を持ってやって来る。

「あっ。ちょっと待ってね隊長。今、間を空けるのー」

「おう。悪いな」

三人は自分の分の料理の皿を動かし、零治の分が置けるスペースを作る。

「ふぅ……流石に三人分、それも料理も別々となると疲れるぜ」

「ん？　隊長。昼飯、麻婆豆腐だけでええが？」

「ああ。まだ用があるから、オレは手早く済ませたいんだよ。それとこいつは、正確には麻婆豆腐ではなくて麻婆丼だ」

「麻婆丼？　なんやのそれ？」

「名前通りさ。丼に盛り付けた白飯に麻婆豆腐をぶっかけた物だ」

「はぁ！？　麻婆豆腐を白ご飯にかけてるらて……気持ち悪っ！」

「邪道だよ、邪道～！　変なのー」

「もぐもぐ……もぐ……」

凪は何も言いはしないが、嫌そうに眉をしかめてる。

「そうか。こっちには麻婆丼は無いんだな。オレの世界じゃ至って普通なんだがな。食うの楽だし」

「そーなん？　ウチらからしたら、なんや抵抗あるなあ……」

「旨いぞ、麻婆丼。……食うか？」

「うーん……じゃ、一口だけ」

「……私も」

「ん～～～……ッッ、せやったらウチも！」

三人は零治が差し出した麻婆丼をレンゲで掬って、恐る恐る口に運ぶ。

「……どうだ？」

「おわわっ！？　旨いで、コレ！」

「うん、おいしー。何これビックリー！」

「……意外」

「だろ。もともと挽肉入りの餡と米の相性が良いから、不味いわけがないんだよ」

「今度、沙和もやってみるのー」

「やー、こんな事やったら炒飯やのーて、ウチも白ご飯にしときゃ良かったなー」

「……やってみよ」

凪は零治に習い、自分の白飯に麻婆豆腐をかけて同じように麻婆丼を作り、真桜と沙和はもう一口と零治の麻婆丼をレンゲで掬い取る。

（ふむ。気に入ってもらえて何よりだ。さて、オレもさっさと昼を済ませるか）

零治は黙々と食事を始める。と、その時。

「あら？　先客が居たのね」

「ん？」

零治達は厨房の入り口から声がしたので視線を向けると、そこには春蘭、秋蘭を連れ立った華琳の姿があった。

「か、華琳様っ！？」

「た、大将、なんでここに……！？」

「なんでって、昼食を食べに来たからに決まってるじゃないの」

「隊長……」

沙和は、まるでロボットのようにカクカクとした動作で、首を横に動かして零治に視線を向け訊く。

「なんだ？」

「もしかして……厨房に行かなきゃいけない理由って……」

「ああ。そういう事だ」

「なんで教えてくれんかったがよっ！？」

「いや、教えたらお前ら来なかっただろ？」

「当たり前やん！　大将と一緒に昼を食うら恐れ多いっちゅうねん！」

「……」

凪達は華琳が現れた事により、すっかり畏縮してしまっていた。

「ふふっ。私の事は気にしなくて良いから、貴方達はそのまま食事を続けなさい」

「は、はーい……」

「やれやれ……。華琳、もう少し待ってくれ。すぐに昼を済ませて、取り掛かるから」

「あら、別にゆっくりでも構わないわよ？　こっちが無理を言って付き合わせてるんだから」

「本来ならそうしてるところだが、春蘭が早くしろって眼で語ってるからな……」

「……春蘭」

「姉者……」

「わ、私はそんな眼などしておりませんっ！」

本人はそう言ってるが、慌ててるという事は図星なのだろう。

「はいはい、そういう事にしとくわ。とにかく、零治が昼食を済ませるまで私達は席に着いて大人しく待ってるわよ」

「はい」

華琳達は空いてるテーブルに着き、零治が昼食を終えるのを待つ。

「……」

零治は黙々と食事を続け、それを春蘭は黙ってまり続けるのだが……

「……」

次第に春蘭は苛立ちを募らせ始め……

「まだか音無！！」

堪え性の無い春蘭は、もう待ちきれないと言わんばかりに大声を張り上げる。

「そんなに怒鳴るなよ。もうすぐ済む」

「姉者。これから昼食を作ってくれる人間にその言い方はないだろう」

「それは分かっているが、これ以上待たされるのは……」

「はぁ……いい加減になさい、春蘭」

「うぅ……」

「……済んだぞ」

華琳達がそんなやり取りをしてる中、食事を終えた零治が三人の座ってる卓の前まで足を運んでくる。

「おおっ！　ならば早く作れ！」

「……お前だけ昼は白飯一杯だけにしてやろうか？」

春蘭の言い方が気に障ったのか、零治は不愛想に言う。

「なんだとぉ！」

「やめないか姉者。あんな言い方をされたら、誰だって気分を害するに決まってるだろう？」

「そうよ。貴方はもう少し物の言い方を勉強するべきかしらね、春蘭？」

「むぅ……」

「まあ、冗談はさて置き、三人とも本日はなんにする？」

「そうねぇ……」

華琳の視線が凪達のテーブルに有る料理に止まる。

「な、なんですか……？」

凪は思わずうろたえてしまう。

「ああ、気にしないで。どんな料理が並んでるか見ていただけだから」

「は、はぁ……」

「……ふむ。見たところ、三人とも麻婆を食べてるようね」

「ああ。凪と真桜は麻婆豆腐、沙和には麻婆茄子を作ってやったが」

「そう。なら、麻婆豆腐をお願いするわ」

「はいよ。春蘭と秋蘭は？」

「華琳様が麻婆豆腐なら、私も同じ物を食べるぞ！」

「私も同じ物を頼む」

「はーい、麻婆豆腐三人前入りまーす」

零治はまるで飲食店の店員のような口調で言う。

「……何を言ってるの？」

華琳は奇怪な物でも見るような視線を零治に向けながら言う。

「いや、その場のノリで言ってみただけだ。……昼は麻婆豆腐だけでいいのか？」

「あら、他にも作ってくれるの？」

「餃子ぐらいならすぐに作れるが？」

「餃子？」

「ああ。沙和に作ってやったんだが、材料が余っててな」

「そう。ならお願いするわ」

「二人も食うか？」

「ああ」

「うむ」

「なら、調理に取り掛かるとしよう」

零治は調理場に移動し、華琳達の昼食の調理を開始する。

「しっかし隊長、よう大将の昼を作る気になったなぁ」

「うんうん。華琳様って、すっごい美食家だもんね。普通は作る気になれないよねぇ」

「……」

「て、凪はいつまで緊張しとんねん。別に相席しとるわけちゃうやろ」

「あ、ああ……それは分かってるんだが……」

「……」

零治は黙々と調理を続け、華琳はその姿をジッと見つめている。

「……そんなにジッと見て何が楽しいんだ？」

その視線に気づいた零治は、背を向けたまま華琳に話しかける。

「いえ、見事な手際だと思ってね」

「ふ～ん……」

「うぅ……私だってあれぐらい……」

「出来るのか？」

「うぅ……しゅう～ら～ん」

「よし、餃子はこんなもんか」

零治は餃子を鉄板に乗せ火に掛ける。

「えっ？」

零治の行動に華琳は素っ頓狂な声を出す。

「ん？　どうした？」

「音無……一体何をしてるのだ？」

続いて春蘭が怪訝な顔で零治に訊いてくる。

「何って、餃子を焼いてるんだが？」

「音無。餃子は普通、蒸すか水餃子にする物だろう？」

更に秋蘭も零治の行動に疑問を抱き、そう言う。

「ああ、オレの世界じゃ餃子は焼いて食うのが一般的なんだよ」

「へえ。変わってるわね」

「気に入らないんなら作り直すが？」

「いいえ。気になるから、そのまま続けてちょうだい」

「はいよ。じゃあ、この間に麻婆豆腐を作り上げるとしよう」

と、その時、厨房に新たな来客がやって来る。

「くんくん。美味しそうな匂いがする」

「ちょっと臥々瑠、やめなさいよ。はしたないじゃない」

「ん？　おお、やっぱり来たな」

「兄さん。ご飯作ってー」

「分かった分かった。華琳達の分が出来たら作ってやるから、席に着いて大人しく待ってろ」

「は～い」

「すみません、兄さん……」

「別に謝るような事じゃないさ。お前も食うだろ？」

「はい」

「おーい。二人ともこっちおいでやー」

「こっちで一緒にご飯食べよー」

真桜と沙和が奈々瑠達にそう呼びかけてくる。

「うん。行く行くー」

「あの、兄さん。私は手伝った方がいいんじゃ……」

「いいって。ほら、お前も行って来いよ」

「はい」

と、更に。

「すみませーん。何か食べる物は有りますかー？」

「あーっ！　みんなでご飯食べてる、ずるーい！　ボクも食べたーい！」

瑠利亜と季衣が厨房に姿を現した。

「なんだよ。今日は随分と来客が多い日だな」

「おや？　今日は随分と大所帯なんですね」

「二人もどっか適当に座っとけ。華琳達の分が出来たらまとめて作ってやる」

「……零治」

「なんだ？」

零治は返事はするものの、料理に集中してるので瑠利亜の方は見て

いない。

「臥々瑠と季衣が居ますし、私は手伝った方がいいんじゃないですか？」

「あっ、それなら私も」

「……すまん、頼む」

「いえいえ」

（やった！　兄さんと一緒に料理が出来る！）

「よしっ！　完成だ」

零治は出来上がった麻婆豆腐と焼き餃子を華琳達のテーブルに手早く運ぶ。

「はいよ。お待たせしたな」

「ほお。これは旨そうだな」

「ん？　零治。この餃子に付いてる膜みたいな物は一体……」

「すまん華琳。質問と味の評価は後で聞く。次の調理に取り掛かりたいからな」

零治はそう言って再び調理場へ戻る。

「こら音無！　華琳様の質問にちゃんと答えんかっ！」

「後にしろって言ってるだろぉ！　ここから更に四人分、そのうち二人の分は大量に作らなきゃいけないんだからよ！」

流石なの零治も作業の手を止められるのに苛立ってか、思わず春蘭に怒鳴り散らす。

「なんだとぉ！」

「ほら春蘭。零治の邪魔をしちゃダメでしょ」

「そうだぞ。それに、音無は後で聞くと言っていたではないか」

「むぅぅ……」

「さっ、せっかく零治が作ってくれた手料理なんだから、冷めないうちに戴きましょう」

「はい」

「後から来た四人、お前らの昼飯は麻婆丼に決定だ。反論は認めん」

「にゃ？　ねえ、臥々瑠。麻婆丼ってなんなの？」

季衣は聞いた事のない料理の名前に面喰い、首を傾げながら臥々瑠に訊く。

「えーと、麻婆豆腐を白ご飯にかけた物だよ」

「えー、それって美味しいのー？」

「季衣ちゃん、それがね、信じられくれない美味しかったのー」

「えっ、そうなの？」

「ウチらもさっき隊長が作ったのを食べさせてもろうたんやけど、ゴッツ旨かったで」

「へえー」

「兄さん、アタシ特盛で～」

「あっ、じゃあボクも」

「はいはい。……瑠利亜、奈々瑠。お前らは材料を切ってろ。味付けはオレがやる」

「分かりました」

「……中華鍋、一つで足りますかね？」

瑠利亜が不安げに言う。何しろ、今この場に超が付くほどの大飯食らいが二人も居るのだから。

「足らんな。もう一つ出さないと」

零治は中華鍋をもう一つ取出し、両方火にかけてタレの下ごしらえを始める。

「奈々瑠。豆腐の下ごしらえは私がやっておくので、零治を手伝ってあげてください」

「はい。……兄さん、お手伝いします」

「ん、ならこっちの鍋のタレ作りを頼む。分からない事があったら聞きな」

「はい」

「ふふっ。大忙しね」

華琳は食事をしながら、料理でてんてこ舞いの零治の姿を見ながら、どこか楽しげに呟く。

「そうですな。……しかし、相変わらず見事な腕前ですな、音無の

料理は」

「そうね。この麻婆豆腐は、単純に辛いのではなく、素材の味を引き立てるように辛さを上手く調整してあるわ。正直言って、味覚と嗅覚が鈍いという話が信じられないわね」

「同感ですな。それに、この餃子もなかなかどうして」

「うむ。確かにこれは旨いな！」

「ええ。ただ焼いてるだけなのに、ここまで変わるものなのね。この餃子の周りに付いてる膜と皮が良い食感を出してるわね」

「零治。豆腐の下ごしらえ、終わりましたよ」

「おう。ならこっちに回してくれ」

零治は瑠利亜から仕込が終わった豆腐を受け取り、中華鍋の中に放り込み最後の仕上げに入る。零治が担当してる鍋は明らかに豆腐が奈々瑠の鍋の倍以上入っている。恐らく、臥々瑠と季衣の分だろう。

「……凄い量ですね」

「んな事より、丼を用意してくれよ。二つは一番でかいやつな」

「はいはい」

「兄さん。それ……重くないですか？」

「ん、平気だ。それより鍋から眼を離すな」

「あっ、はい」

「兄さ～ん。まだ～？」

「もうちょっとで出来るから大人しく待ってろ」

「は～い……」

「もう。あの子ったら……」

不満そうに返事をする臥々瑠に、奈々瑠は呆れ果てる。

（ちくしょー！　昼休みなのに、なんでこんな忙しい目に遭わなきゃいけないんだっ！？　これじゃ休憩になりゃしねぇ！）

料理をする事自体は嫌いじゃない零治も、これだけの大人数分、しかも昼休みの時間に作るとなると流石に苦痛に感じてしま、内心では叫び声を上げる。

こうして零治の昼休みは、厨房に来た来客たちの昼食と作るという多忙な形で終わってしまったのだった。

第２０話　昼食会（後書き）

作者「はい。今回はどうだった？」

零治「……一人、姿を見せてない奴が居ないか？」

瑠利亜「ああ、桂花ですか？」

作者「だって、登場させる要素が無かったからさ」

奈々瑠「そんな事言って、ホントは嫌いだから出番を与えなかったんでしょう？」

作者「んな事するか」

臥々瑠「でも桂花の事、あんまり好きじゃないのは事実じゃん」

作者「まあ、他のキャラに比べるとあまり好きじゃないのは否定できんな」

臥々瑠「ほら、やっぱり」

作者「だが安心しろ。次に書く拠点パートでは桂花メインでやるつもりだ」

零治「ほお。そうなのか？」

作者「ああ。そこの姉妹。お前達も大きく絡んでくるから、そのつもりでいろ」

奈々瑠「……私達が？」

作者「そうだ。期待してろ」

瑠利亜「あの顔、また何かろくでもない事を考えてますね……」

零治「そうだな……」

第２１話　黄巾の乱、勃発　完結編（前書き）

やっと黄巾党編が終了……長かった……。
読者の皆様、お待たせしてしまって、サーセン。
後、今更ですが、誤字脱字を見つけたら指摘してくれると嬉しいです。
自分でも読み直してチェックをしてますが、自分でも気づかない場合もあるので、よろしくお願いします。

第２１話　黄巾の乱、勃発　完結編

黄巾党との緒戦から数日。再び黄巾党が現れ、官軍が苦戦してるとの報を受け華琳は、春蘭、季衣、凪の三人を救援に向かわせた。それからしばらくして春蘭達が帰還し、その日の軍議で結果の報告を現在春蘭がしてるのだが……その内容が、要約すると『袁術の領地に踏み込んでしまい、そこの客将の孫策と協力して黄巾党を討伐した』という内容だ。

「……とまあ、そういう訳です」

春蘭の長い報告を聞き終え、華琳は呆れながら溜め息を一つ。

「……呆れた。それで、孫策に借りを作ったまま帰ってきたというの？」

「え、ええっと……連中の領に逃げ込んだ盗賊の退治は手伝ったのですから、差し引きで帳尻は……」

「合っていないわよ。他国の領に逃げ込む前に黄巾党を片付けておけば、差し引く必要すら無いじゃないの」

「……また面倒な事になっちまったな」

「ええ。孫策に借りを作ってしまった以上、どこかで返さないと余計面倒な事になりますからね」

傍らで話を聞いていた零治が呟き、瑠利亜もそれに同意する。
この世界において……いや、この世界だけに限らず、他国の人間に借りを作る事は、決して軽い事では済まされないのだ。

「それが……私達が仕掛けた瞬間、もの凄い勢いで逃げられまして……。今思えば、あれも連中の策略だったのではないかと」

「……策略？　凪、それは本当なの？」

春蘭の言葉に、桂花が怪訝な顔で凪に訊く。

「私に聞けよ！」

「す、すみません。自分は官軍の撤退の支援をしていたもので……」

「なら季衣」

「聞けってば！」

この場にいる人間全員が、春蘭にその手の類の話をしても当てにならない事は十分理解している。そのため誰も春蘭に聞かないのは当然の事。まあ、日頃の行いが原因であるのは間違いないだろう。

「ええっと……それまでは都の軍を一方的に攻めてたんだけど……ボクと春蘭様が攻撃を仕掛けたら、ばーって撤退していって……」

「華琳様……」

秋蘭が渋面を作りながら華琳の方を見る。

「……ええ。春蘭や季衣相手だったとはいえ、黄巾党はそれだけの作戦を展開できる指揮官を得た事になる。その将を討てたのは幸いだったわね」

「だが、人材が増えてきてる事実は変わらん。これからは厄介な事になるな」

「そうね。これからは苦戦する事になるでしょう。以後、奴らの相手は気を引き締めるように。特に春蘭と季衣、いいわね！」

「はっ！」

「はいっ！」

「……それから春蘭。その孫策という人物は、どんな人物だったの？　確か、江東の虎、孫堅の娘よね」

「はい。風格といい、雰囲気といい、気配といい……袁術の客将を名乗っておりましたが、とてもそのようには見えませんでした」

「いや、春蘭……それ、全部意味同じですよ……」

瑠利亜は遠慮がちに春蘭にツッコミを入れる。

「う、うるさいぞっ！」

「そういう難しい言葉は使わなくてもいいわ。武人の夏侯惇としては、どう見たの？」

「……檻に閉じ込められた獣のような眼をしておりました。袁術とやらの人となりは知りませんが、あれはただの食客で収まる人間ではないでしょう」

「そう……。春蘭、その情報に免じて、今回の件についての処分は無しにするわ。孫策への借りは、いずれ返す機会もあるでしょう」

「……ありがとうございます」

「それでは、他に何か報告すべき意見はある？」

華琳は玉座の間に集まってるメンバーを見渡し、他に意見が無いか聞く。

「いえ、春蘭の件で最後です」

「黄巾党はこちらの予想以上の成長を続けているわ。官軍は当てにならないけれど……私達の民を連中の好きにさせる事は許さない。

いいわね！」

「分かってます！　全部、守るんですよね！」

季衣が気合を入れながら言う。

「そうよ。それにもうすぐ、私達が積み重ねてきた事が実を結ぶはずよ。それが奴らの最後になるでしょう」

「……これで事が上手くいかなかったら、私達の苦労はパーですよ……」

「……ホントだよ。あんなにあちこち駆けずり回ったのは久しぶりだから、疲れちゃったよ……」

奈々瑠と臥々瑠が、今までの苦労をその場でポツリポツリと愚痴るので、零治と瑠利亜が苦笑しながら二人に労いの言葉をかける。

「ああ。二人には随分と苦労を掛けちまったな」

「二人ともお疲れ様です。……まあなんにせよ、その時が来るまでは今まで以上の情報収集と連中の対策が必要ですね」

「その通りよ。……民達の血も米も、一粒たりとて渡さない事！以上よ！」

そして、その日の軍議は解散となった。

……

……

…

「凪、大丈夫か？　ついさっき南から帰ってきたばかりだろ？」

「大丈夫です。鍛えてますから」

軍議が終わった後、零治は華琳の命で黄巾党の情報収集のため、凪、奈々瑠、臥々瑠を連れて森の中を探索している。

（いやー、生真面目だよなぁ、凪は。それに比べて真桜と沙和の奴は……はぁ……）

零治は二人の今までの行動を思い出し、心の中で溜め息をつく。

（根は悪い奴らじゃないんだが、仕事に対する真面目さはいささか欠けてるよなぁ……。あの二人は一度、厳しくしごいた方がいいのかもな……）

「……隊長、どうかしましたか？」

「ん？　ああ、なんでもな……」

零治は不意に言葉を区切り、鋭い視線で目の前に生い茂ってる草木を睨み付ける。

「ん？　隊ちょ……」

「しっ！」

零治は凪に静かにするように制止し、すぐ目の前の道を挟んでる左右の茂みを指差しながら小声で話しかける。

「三人とも、あの左右の茂みに敵が居る……」

「はい。匂いで既に確認済みです。左右に三人ずつですね」

零治はコートの下からゆっくりと投擲ナイフを六本取り出す。

「オレがコイツを茂みに投げ込んで敵を追い立てる。三人は敵が飛び出してきた所を取り押さえろ」

三人は零治の指示に黙ってうなずく。

「……フッ！」

零治は投擲ナイフを左右の茂みに投げ込む。すると……

「ぎゃっ！？」

「ぐあっ！」

零治の投げつけたナイフが黄巾党達の腕や肩などに命中し、彼らは傷を押さえながら道端に倒れこむ。

「三人とも！　奴らを取り押さえろ！」

「はいっ！」

「オッケ～」

「はっ！」

凪達三人が倒れ込んでる黄巾党に飛び掛り、取り押さえ縄で縛り上げる。

「まだ敵が残ってる可能性がある！　残りの者は周囲の警戒と索敵を行え！」

「はっ！」

零治の指示を受け、兵士達が周辺に散らばっていく。

「お見事です、隊長」

「あの程度、大した事は無い」

「兄さん。敵の一人がこんな物を持ってたよ～」

臥々瑠が皺くちゃになった一枚の巻物を零治に手渡す。

「なんだこりゃ？　……手紙？」

開いた巻物には何やら地図らしきものと、汚い字で何かが書かれていた。

「……これは、集合連絡の場所！？　なら、こいつらは連絡兵か！」

「これで、敵の主要地点が一つ分かりますね」

「いや、これはそれ以上に重要な場所が分かるかもしれんぞ」

「……どういう事ですか？」

零治の言葉に、奈々瑠は怪訝な表情になる。

「今まで連絡兵は何度も捕えていたが、どれも連絡は口頭によるもので、中にはいい加減な内容のヤツもあった」

「確かにそうでしたね」

凪が軽く頷きながら同意する。

「にもかかわらず、今回は連絡手段がしっかりしている。この場合、考えられる理由は二つ。学習したか、あるいは……この地図に記されてる場所が、絶対に間違えてはならない程の重要な情報であるかだ」

「……という事は、その地図の場所は」

「とにかく、戻ってすぐに華琳に報告だ」

零治達はすぐにその場を撤収し、城の帰還する。それからすぐに、零治達が見つけた連絡文章が最重要課題として取り上げられ、軍議が開かれる。

「大手柄ね、零治」

「そうか。それは何より」

「先程偵察に出した部隊が戻ってきました。連中の物資の輸送経路と照らし合わせて検証もしてみましたが、敵の本隊で間違いないようです」

「……では、張角もそこに？」

「ああ。張三姉妹の三人が揃っているとの報告も入っている」

「間違いないのね？」

華琳が念を押すように再度秋蘭に尋ねる。

「何というか……三人の歌を全員が取り囲んで聞いていて、異様な雰囲気を漂わせていたとか」

秋蘭は困惑した表情で、偵察からの報告内容を華琳に言う。

「……何かの儀式？」

それを聞いた華琳の顔にも、困惑の表情が浮かぶ。

「詳細は不明です。連中の士気高揚の儀式ではないかというのが、偵察に行った兵の見解ですが」

「まるでライブだな」

「らいぶ？」

春蘭が零治の言葉に首を傾げる。

「あー、大人数で歌い手の歌を聴く集会みたいなものだ。オレの世界じゃ千や万人単位の集まりも普通にあったぞ」

「良く分からんな。そんな千も万も集まっては、号令や銅鑼ならともかく……歌声などまともには聞こえんだろう」

「確かに普通に考えるとそうなんですが、私達の世界では音声を拡大する機械……つまり絡繰が存在しているんですよ。それを使って大人数の聴き手にも歌声が聞こえるようにしてたんです」

「へえ。その絡繰、貴方達の例の術で創る事は可能なの？」

華琳の眼に興味心の光が宿り、零治と瑠利亜に訊いてくるので、零治は腕を組み、唸りながら答える。

「うーん、部品は創れるかもしれんが、それを稼動する動力も必要だからなぁ。創ったところで使えないと思うぞ」

「そう。それは残念ね。……それで、その集まりは何かの宗教的な儀式なの？」

「いえ、ただの娯楽ですよ。ただ彼らの場合は士気高揚も兼ねてると思いますが」

「なるほど。ともかく、零治のおかげでこの件は一気にカタが付きそうね。動きの激しい連中だから、これは千載一遇の好機と思いなさい。皆、決戦よ！」

華琳は力強く声を発し、黄巾党との決戦の大号令をかける。

……

……

…

「れんほーちゃーん。おーなーかーすーいーたー」

ここは黄巾党本隊の張三姉妹が使用してる天幕。三姉妹の長女、張角こと天和が三女の張梁こと人和に、頬を膨らませながら空腹だとブーたれている。

「はいはい……。そんなに言わなくても、分かっているわよ」

「人和。私、もうこんな所に居たくないわよ。ご飯も少ないし、お風呂だってちょくちょく入れないし……何より、ずーっと天幕の中で息が詰まりそう！」

同じく三姉妹の次女、張宝こと地和も自信が置かれてる今の状況に不満を口にする。

「それも分かってるわよ。でも仕方ないでしょう……。曹操って奴に糧食が焼かれちゃったんだから」

「仕方なくないわよ。別の所に行けばいいでしょ。今までだって、うるさくなったら他の所に移動してたじゃない」

「……私達の活動に朝廷が眼を付けたらしくてね。大陸中に黄巾党の討伐命令が回ってるのよ」

「……はぁ？　私達、何もしてないわよ！」

地和が人和の言葉に驚きの表情を浮かべる。

そう。確かに地和が言うように彼女達は何もしていない。だが……

「周りの連中がね……」

「え？　じゃあ、今までみたいにいろんな国は回れないの？」

「連中が付いてくると、どうしても大きな動きになってしまうわ。彼らを連れて県境は越えられない」

「なら、置いて行けばいいじゃない」

地和が尤もな事を言う。しかし、それが出来ないから人和は頭を悩ませているのだ。

「出来るならとっくにやってるわよ。何度か試してみたけど……その度に、誰かが寄ってきて……一人来たら、百人来るんだから」

「まったくもぅ。何でこんな事になったのー？」

「姉さんが悪いんでしょっ！　『私、大陸のみんなに愛されたいのー』とか何とか……」

「えー。それだったら、ちーちゃんも『大陸、獲るわよっ！』とか言ってたじゃない！」

「そ、それは、歌で獲るわよって意味で……！」

そう。事の発端は二人のこの発言に有った。彼女達にその意図は無かったのだろうが、熱狂的な聴き手達は言葉のまま意味を解釈してしまい、このような騒ぎを引き起こした。さらに悪い事に、今回の騒ぎに便乗して山賊や盗賊までもがどさくさ紛れに暴れていたため、

事態は余計に悪化してしまい現在に至るわけだ。

「……はぁ」

人和は頭を抱えながら溜め息を吐く。

「張角様！　張宝様！　張梁様！」

「あ、ちょっと待ちなさい！」

「はっ！」

「……いいですよ」

三人は居住まいと口調を正し、訪ねてきた黄巾党を天幕に招き入れる。

「失礼しますっ！」

「どうしたの？　何か問題でもあったの？」

地和が落ち着いた口調で黄巾党に尋ねる。普段の態度からは想像もつかない見事な演技ぶりだ。

「はい。西方を追われた新たな会員が、合流したいと来ているんですが……どうしましょう？」

「それって、私達の歌を好きって言ってくれてる人なんですよねー？」

「はい！」

天和の言葉に黄巾党は大きく頷く。

「じゃ、いいんじゃないですかー？」

「そうね。応援してるコは大切にしないと」

「という事です。後はそちらで計らいなさい」

「はっ！　流石お三方！　それでは、食料と装備を支給させます！」

「え、あ、ちょっと！　装備って……！」

「失礼しましたっ！」

黄巾党は人和が呼び止めてるにもかかわらず、話も聞かずに天幕から出て行った。

「……」

「……」

「……」

取り残された三人の間に広がる沈黙。
やがて、呆れたように人和が口を開く。

「何……？　食料も装備も持たずに合流したいって……たかりに来てるだけじゃない」

「バカーーっ！　なんで姉さん、あんな事言うかなぁ……！」

地和がヒステリックな叫び声を上げる。

「えー。だって、ちーちゃんだって、応援してくれてるコは大切にしようって……」

「だって、あの場でああ振られたら、ああ答えるしかないでしょっ！」

「……はぁ。それにしても下も下よね。今の食糧状況を考えれば、これ以上の数は増やせないのは分かっているでしょうに」

「なら人和が上手く反論してよ……」

「世の中、建前といものが有るでしょ……？」

「あーもう！　お腹空いたよぅ！」

天和は半泣きの表情で空腹を訴えるが、もはやこの状況はどうしようもないだろう。

「人和。本当に食料、なんとかならないの？」

「大きな経路は上の連中が封鎖を掛けてきてるし、小さな抜け道は野良犬みたいに食いついてくる奴が居るのよ……。あそこまで徹底的に潰されたら、どうにもならない」

今の黄巾党は、まさに八方塞がりの状況下に置かれていた。

……

……

…

「秋蘭。本隊が到着したそうだ」

零治達先発隊が黄巾党の本隊の偵察を終えた頃、伝令から本隊到着の報告を受ける。

「そうか……各隊の報告はまとまったか？」

「ちょうど終わったところやで。連中、かなりグダグダみたいやな」

「やはりな……。華琳様の予想通りか。では真桜、報告を聞かせてもらおうか」

「はいはい。まず、連中の総数やけど、約二十万」

「うはー。もの凄い大軍隊なのー」

「なにせ本隊だからな。数が多いのは当然だろう」

「それって……ボク達だけで勝てるんですかね？」

季衣が不安げに秋蘭に聞いてくるが、零治が余裕の表情で代わりに答える。

「問題ないだろう。で、真桜、実際に戦える数はどれぐらいなんだ？」

「おっ、流石は隊長、やっぱ気付いとったんやね。連中、戦えそうなんは三万くらいやと思うで」

「ふむ。そんなものですか」

「せや。大将の予想通り、武器も食料も全然足らんみたいや。それに、さっきもどっかの敗残兵みたいなのが合流しとったから……」

「さっきの大兵力は、その非戦力を合わせた上での数という事か」

「ああ。あちこちで内輪同士の小競り合いも見えたから、一枚岩ですらないみたいや。指揮系統もバラバラなんちゃうかな？」

「フッ。戦闘力を奪った連中を本拠地にまとめさせ、ワザと敵の頭数を大きくする。……華琳の作戦は上手く行ったな」

「ああ。受け入れる本拠地が無い以上、陣内に取り込むしかないからな。ここまで組織が肥大化すれば、おのずと動きも鈍くなるし、指揮系統も作らねばならん。そうなればこの程度の相手、そこいらの野盗と変わらんさ」

「神出鬼没の大熊も、太り過ぎればただの的、という事ですね」

「……太り過ぎたら……」

「……嫌な例えなの」

「……同感です」

「……大丈夫。大丈夫よね？　私……」

「にゃ？」

「ほえ？」

凪の例え話に一部の女性陣が過敏に反応する。まあ、女の身である以上は仕方ないのだろう。

「しかし……当初の予定通りの作戦で大丈夫でしょうか？」

「問題なかろう。華琳様の本隊に伝令を出せ。皆は予定通りの配置で各個撹乱を開始しろ。攻撃の機は各々の判断に任せるが……張三姉妹にだけは手を出すなよ。以上、解散」

ついに、黄巾党最終討伐の作戦が開始される。零治達先発隊はそれぞれ配置に付き、黄巾党の本隊に撹乱攻撃を開始する。

「張角様！　張宝様！　張梁様！」

「何？　慌ててるわね」

「すみません！　しかし急用だったもので……！」

「なんなのー？」

「敵の奇襲です！　各所から火の手が！」

「何ですって！　すぐに消火活動を！」

「各々でやってるようですが、火の手が多いのと誰に指示すればよいか分からず……！」

「く……っ。無駄に増えているから……！」

「どうしましょう！」

「ともかく、敵の攻撃があるだろうから、皆に警戒するように伝えなさい！　火事も手の回る者が消せばいいでしょう！」

「はいっ！」

「……まったくもう」

人和は周りの慌てふためく様子を見て頭を抱える。もはや黄巾党は軍隊としての機能は失ったも同然だろう。

「れんほーちゃぁん……」

「人和……」

「……もう潮時ね。応援がどうこう言っている場合じゃないわ。……よっと」

人和がその場に隠していた大荷物を背負うので、天和が荷物を指差しながら訊く。

「何？　その荷物」

「逃げる支度よ。三人分あるから……みんなでもう一度、一からやり直しましょう」

「……仕方ないわね。でも、二人が居るなら」

「そだねー。ちーちゃんとれんほーちゃんが居れば、何度だってやり直せるよね♪」

「そういう事。そうだ、これも……」

人和がそう言いながら荷物の中から一冊の古書を取り出す。それは……

「太平何とか、だっけ……？」

「そうよ。コレを使って、またみんなで……」

「もうそんなのいいよ。二人が居れば何もいらないから、早く逃げようよー！」

……

張三姉妹は本陣の騒ぎのどさくさに紛れながら、数名の護衛を引き連れ、コソコソとその場から逃げ去った。

……

…

「華琳様、秋蘭達先発隊が行動を開始したようです。敵陣の各所から火の手が上がりました」

桂花が先発隊が行動を開始した事を華琳に報告する。

「秋蘭から伝令が届きました。敵の状況は完全に予想通り、当初の作戦通り奇襲をかけると。こちらも作戦通りに動いてほしいとの事です」

続いて春蘭が秋蘭から届いた伝令の内容を報告する。

「了解……。桂花、決めておいた通りに動きなさい」

「御意！」

「しかし、先日はあれほど苦戦したというのに……なんですか、今日の容易さは」

「それは春蘭がバカだからじゃないの？」

「なんだとぅ！」

春蘭は憤慨しながら桂花を睨み付け、怒鳴り散らす。

「少数の兵で春蘭程度を扱える器は居ても……あれだけの規模の兵をまとめ、扱える器は居なかった。ただそれだけの事よ」

「なるほど。私程度を……って華琳様！　それは酷うございます」

春蘭は心底悲しそうな表情を浮かべながら言う。

「ふふっ、冗談よ」

「華琳様。そろそろ、こちらも動こうと思うのですが……号令を頂けますか？」

「あら、もう？　もう少し春蘭で遊んでいたかったのだけれど……秋蘭達、張り切り過ぎではない？」

「向こうの混乱が輪をかけて酷いのでしょう。ともかく、こちらの準備は出来ていますので、お早くお願いいたします。急がなければ、張三姉妹がこちらではなく身内に殺されかねません」

「それはそれで問題ね……分かったわ」

華琳は後方に控えている兵達にゆっくりと向き直り、力強い声を発し号令をかける。

「皆の者、聞け！　汲めない霧は葉の上に集い、既にただの雫と成り果てた！　山を歩き、情報を求めて霧の中を彷徨う時期はもうおしまい。今度はこちらが呑み干してやる番！　ならず者どもが寄り集まっただけの烏合の衆と、我らとの決定的な力の差……この私に、しっかりと見せなさい。……総員、攻撃を開始せよっ！」

華琳率いる本隊の兵達が、雄叫びを上げ、激しく大地を揺らしながら黄巾党本隊目掛けて突撃を開始する。

「凪。華琳達の本隊が来たぞ」

「流石は華琳様。予定通りですね……」

一糸乱れぬ動きで突撃する華琳の大軍団と混乱の極地にある黄巾党の大集団。その動きはまさに雲泥の差と言えるだろう。

「では、オレ達も合流するぞ。瑠利亜と臥々瑠、秋蘭と沙和の隊が右翼。オレ達は季衣と真桜と奈々瑠と合流して左翼担当だ」

「はい。後は三人が来るのを……」

「兄ちゃーん！」

「隊長、お待たせー」

「すみません。遅くなりました」

「おう、来たな。三人とも大丈夫だったか？」

「ぜーんぜん。なんや、こっちが一方的過ぎて悪いくらいやったわ」

「うん。で、華琳様も来たし、そろそろかなって真桜ちゃん達と」

「ああ。こちらも合流しようと思っていたところだ。丁度良かった」

「では隊長、号令をお願いします」

「オレが……？　まあいいが。……オホン……」

零治は後ろに控えている兵士たちに向き直り、軽く咳払いを一つ。

「これより我らは本隊に合流、本隊左翼として攻撃を続行する！　ただし張三姉妹は生け捕りにせよ！　総員、今までの借りを思う存分に返してやれ！」

「「「応っ！」」」

「全軍突撃ーーーっ！」

零治達も突撃を仕掛けながら本隊に合流。以後、零治は最前線に出て叢雲を振るい、いつものように敵を斬り伏せる。

「……」

零治は黙って、一人、また一人と黄巾党を斬り倒し続ける。その最中、無意識に過去を思い出したのか、零治に戦い……つまり人殺しの術を教えた、一人の男の言葉が脳裏によぎる。

「感情的になるな、お前は暗殺者なのだぞ。暗殺者でなくとも戦場に立つ人間なら感情の制御は必要不可欠だ。……戦場で感情的に行動すれば、己どころか周りの味方すらも殺してしまう……」

（黙れ……）

零治は忌々しげに頭の中に響く声の主に黙るように言い聞かせる。しかし、それでも声の主は黙ろうとせずに話を続ける。

「『人を殺す』と思うから感情的になってしまうのだ。……『物を壊す』と思えばいい……」

（黙れ……っ！）

「暗殺者になるのなら、『人』ではなく『機械』となれ。そう……すべてを破壊する無感情な機械にな……」

（黙れっ！！）

「戦いにおいて……優しさなど邪魔な感情でしかない。……そんな物、捨ててしまえ」

その一言が引き金となったのか、零治はその場に居もしない声の主に大声で怒鳴った。

「黙れぇぇぇぇっ！！」

「うわっ！？　た、隊長どないしたんっ！？　いきなり大声出したりして」

「はっ！？」

零治は真桜に声をかけられ現実に引き戻される。辺りを見渡せば黄巾党は既に全滅している。どうやら本人も気付かぬうちに全滅させていたらしい。

「……」

零治は叢雲を握りしめたまま全滅してる黄巾党達を見つめ、呆然と立ち尽くす。

「隊長、大丈夫ですか？」

「兄ちゃん、もしかして具合が悪いの？」

凪と季衣が心配そうな顔で零治の顔を覗き込みながら言う。

「あ……ああ。大丈夫だ」

「ですが……」

「本当に大丈夫だ。……それより、張三姉妹の捜索に当たれ。ここで逃げられたら元も子もないぞ」

「ああ、それは分かっちゅうけど……隊長、無理はせられんで？」

「ああ。分かってるから、早く行け」

「はい……」

凪、季衣、真桜の三人は納得のいかない表情をしながらも、張三姉妹の捜索に当たるため辺りに散っていった。

「……ふぅ」

三人を見送った零治は自信を落ち着けるように、大きく息を吐く。

「兄さん……」

「ん、なんだ？　お前も早く行け」

「それは分かってます。ですが、さっきの事がどうしても気になって……」

「……奴の声が」

「えっ？」

「戦ってる最中に……あの男、黒狼の声が頭の中によぎってな……」

「……」

「それで思わず声に出して怒鳴っちまった。それだけだ……」

「そう……ですか……」

「ああ。分かったなら、お前も捜索に向かえ」

「はい……」

奈々瑠も零治に言われ捜索に向かい、零治がその場に一人取り残される。

「……なぜ、こんな時に奴の言葉が。……どれだけ正義感ぶったところで、どれだけ自分を着飾っても本質は変わらないとでも言いた

いのか？　黒狼……」

零治はまるでそこに黒狼が居るかのように、空を睨み付けながら、一人呟く。

「分かってるさ。昔と立場が変わったところで、所詮やってる事は変わらない……。どうせオレは、もうこの生き方以外に道は無いのだからな。……オレも捜索に向かうか」

零治も張三姉妹の捜索に当たるため、移動を開始した。

……

……

…

「この辺りまで来れば……平気かな」

地和が後方を振り返りながら、周囲が安全かを確認する。

「もう声もだいぶ小さくなってるしねー。……でも、みんなには悪い事しちゃったかなぁ？」

「難しい所だけれど……正直、ここまでのものになるとは思ってい

なかったし……潮時でしょうね」

「けど、これで私達も自由の身よっ！　ご飯もお風呂も入り放題ねっ！」

「……お金無いけどね」

「う……」

人和のその一言に、地和は苦虫を噛み潰したような表情になる。

「そんな物はまた稼げばいいんだよ。ねー？」

天和は普段と変わらず、能天気な口調で妹達にそう言い聞かせる。
今は彼女のこの能天気さが心のオアシスとなり、地和、人和の表情も明るくなり前向きに考えるようにしてくれた。

「そう……そうよ！　また三人で旅をして、楽しく歌って過ごしましょうよ！」

「で、大陸で一番の……」

「そうよ！　今度こそ歌で大陸の一番に……っ！」

「……盛り上がってる所を悪いが、お前ら……張三姉妹だな？」

不意に背後から零治が声をかけてきたので、三人の顔に緊張が走る。

「な……っ！」

「く……っ、こんな所まで……！」

「どうしよう……もう護衛の人達も居ないよー？」

「大人しく付いてくるなら悪いようにはせんぞ」

「……付いて行かなかったら？」

「多少なりとも痛い目を見てもらう事になるな」

「ちょっと！　まさか、その腰に下げてる剣で斬るつもりっ！？」

地和が零治の腰に下げられてる叢雲を指差しながら言う。

「安心しろ。手刀で済ませてやる」

「そういう問題じゃなくて！」

「張角様っ！」

「テメェ！　俺達の張宝ちゃんに何をしようとしてんだ！」

「やれやれ。人が事を穏便に済ませようとしてるのに、空気ぐらい読めよ。……だいたい、勇気と無謀を履き違えるようでは、長生き出来んぞ？」

零治はそう言って、二人組の黄巾党に眼にも止まらぬ速さで踏み込み、二人の鳩尾にボディブローを叩き込んだ。

「ぐふっ！」

「がはっ！」

黄巾党達は苦悶の声を上げ地面に沈み込む。

「な、何よアイツ！　動きが全然見えなかったんだけどっ！」

「……諦めましょう、姉さん。あんな人を相手に逃げられるわけないわ。……いきなり殺したりしないよね？」

「ああ。その点は保証してやる」

「……ならいいわ。投降しましょう」

その言葉を聞いた姉二人は悲痛な表情になる。

「人和……」

「れんほーちゃん……」

「なら、付いて来い……」

零治は張三姉妹に歩くように促し、華琳の待つ本陣まで連行した。

「華琳様。敵部隊の追撃隊、出発させました」

「後で暴れられても困るものね。まとめて捕まえて、郷里に送り返させなさい」

「はっ」

「……で、貴方達が……張三姉妹？」

華琳は傍らに控えている秋蘭から張三姉妹に視線を移し、訊く。

「そうよ。悪い！」

捕らえられてる立場にもかかわらず、地和は高飛車な態度を取る。

「季衣、間違いない？」

「はい。ボクが見たのと同じ人達だと思います」

「あ、私達の歌、聞いてくれたんだねー。どうだったー？」

「すっごく上手だったよ！」

「ホント！？　ありがとー♪」

季衣と天和が、まるで友達同士の会話のような感覚で、場違いな会話劇をする。

そのやり取りをよそに、瑠利亜が張三姉妹に尋ねる。

「で？　どうしてこんな事をしでかしたんです。見たところ普通の旅芸人のようですが……？」

「……色々あったのよ」

瑠利亜の問いに、人和が答える。

「色々ねぇ……？　ではその色々とやらを話してみなさい」

「話したら斬る気でしょう！　私達に討伐命令が下ってるのだって、知ってるんだから！」

「それは話を聞いてから決める事よ。それから、一つ誤解してるよ

うだけど……貴方達の正体を知っているのは、恐らく私達だけだわ」

「……へ？」

華琳の言葉に、地和はきょとんとする。

「そうよね、桂花」

「はい。貴方達ここ最近、私達の領を出ていなかったでしょう」

「それは、あれだけ周りの捜索や国境の警備が厳しくなったら……出て行きたくても行けないでしょう」

「ですから現状、首魁の張角の名前こそ知られていますが……他の諸侯の間でも、張角の正体は不明のままです」

「……どういう事？」

「誰を訊問しても、張三姉妹の正体を口にしなかったからよ。……大した人気じゃない」

「そんな……！」

人和が驚きの表情を浮かべる。流石の彼女も、まさか華琳達以外の人間に正体が知られていないとは夢にも思っていなかったようだ。

「それに、この騒ぎに便乗した盗賊や山賊も、そもそも張角の正体は知らないもの。そいつらのデタラメな証言が混乱に拍車をかけてね……。確か、今の張角の想像図は……零治」

「……これか？」

零治は華琳に持つように言われた姿絵を三姉妹の前に広げて見せる。そこに描かれていた姿絵は、お世辞にも人とは言えない。まず、身長は約三ｍぐらい有るヒゲモジャの大男である。おまけに、腕は八本、足は五本、更には角と尻尾まで描かれていた。

「えー。お姉ちゃん、こんな怪物じゃないよー」

当の本人は頬を膨らませて憤慨する。まあ、当然の反応だろう。

「いや、いくら名前に角があるからって、角は無いでしょ……角は」

「まあ、この程度という事よ」

「何が言いたいの？」

華琳の意味深な言葉に、人和がメガネに手を当て、眉間に皺を寄せながら聞く。

「黙っていてあげてもいい、と言ってるのよ」

「……どういう事？」

華琳の真意が理解できていない地和は怪訝な顔で聞く。

「貴方達の人を集める才覚は相当なモノよ。それを私のために使うというのなら……その命、生かしてあげてもいいわ」

「……目的は？」

「ちょっと、人和！」

「私が大陸に覇を唱えるためには、今の勢力では到底足りないわ。だから、貴方達の力を使い、兵を集めさせてもらうわ」

「そのために働けと……？」

「ええ。活動に必要な資金は出してあげましょう。活動地域は……そうね。私の領内なら、自由に動いて構わないわ。通行証も出しましょう」

「ちょっと！　それじゃ、私達好きな所に行けないって事じゃないのっ！？」

「……待って。ちぃ姉さん」

「何よ」

「……曹操。貴方、これから自分の領土を広げていく気なのよね」

「それがどうかした？」

「そこは私達が旅が出来る、安全な所になるの？」

「当たり前でしょう。平和にならないのなら、わざわざ領土を広げる意味は無いわ」

「……分かったわ。その条件、飲みましょう。その代わり、私達三人の全員を助けてくれる事が前提」

「問題ないわ。決まりね」

「ちょっと人和！　何勝手に決めて……！　姉さんも何か言ってやってよ！」

「えー。だってお姉ちゃん、難しい話って、よく分かんないし……」

「あーもう役に立たないわねっ！」

「……」

三姉妹のやり取りを見ていた秋蘭が、春蘭に意味深な視線を向ける。

「……どうした秋蘭。なぜ私を見る」

「いや……何でもない」

（お前の気持ちはよーく分かるぞ、秋蘭）

秋蘭の心中を察するように、零治は心の中で大きく頷いていた。

「ちぃ姉さん。もともと選択肢なんか無いのよ。ここで断れば、私達はこの場で殺されるわ」

「むぅ……っ」

「生かしてくれる上に、自由に活動するための資金までくれて、自由に歌っていいなんて……正直、破格の条件だと、私は思う」

「……だって、コイツの領地だけなんでしょう」

地和は不満を口にする。生かしてくれるとはいえ、行動が制限されるのが彼女は不満なのだ。

「これから曹操が勝手に広げてくれるわ。それに、最終的には大陸全部が曹操のものになるのなら……安全になるまでは、曹操のために歌ってあげてもいいでしょう。……そういう考えで良いのよね？」

「ええ。貴方達は、私の広げた領土の中で自由に歌ってくれればいい」

「用が済んだからって、殺したりしないわよね？」

「用済みになったら支援を打ち切るだけ。でも、その頃には大陸一の歌い手になっているのでしょう？　せいぜい私の国を賑やかにしてちょうだい」

「……面白いじゃない。それは、この張三姉妹に対する挑戦とい事でいいのよね？」

華琳の言葉に、地和が不敵な笑みを浮かべる。

「そう取るのなら、そう取ればいいわ」

「よし！　なら決まりだわ！」

「……えーっと。結局、私達は助かる、って事でいいのかなぁ……？」

「それに、また大陸中を旅して回れるのよ！　今度こそ、あの太平何とかって本が無くても、大陸の一番を獲ってみせるわよ！」

「え、やったじゃなーい♪　またみんなで歌って旅が出来るんだね♪」

「……これがあの黄巾党の長、ですか……」

「ホントこの世界じゃオレ達の知ってる歴史は当てにならんな……」

傍らでやり取りを見ていた、零治と瑠利亜は、自身が想像していた張角の人物像とあまりにもギャップが有ったので唖然としていた。

「……ちょっと待ちなさい」

「何？」

「さっき、太平何とかって……」

「太平要術？」

「貴方達、それをどうしたの！」

華琳が凄まじい剣幕で詰め寄り、鋭く叫びながら三姉妹に問いかける。

「んー。応援してくれる、って人に貰ったんだけどー。逃げてくるときに、置いてきたの」

「私達の居た陣地に置いてるはずだけど……恐らく、もう灰になっているはず。……それがどうかしたの？」

「いえ。……そう、あの書は灰になったのね」

「華琳様。探して参りましょうか？」

春蘭がそう言うが、華琳は首を横に振る。

「……不要よ。それよりあの陣にもう一度火を。誰かに拾われて悪用されては、また今日のような事態になりかねないわ」

「承知いたしました」

「おい、いいのか？　ずっと探していたのに」

「いいわ。それがあの書の天命なのでしょう」

「そうか。……ところでその話で思い出したんだが、あの件はどうなった？」

「例の三人組の男の事？」

「ああ」

「ごめんなさい。情報は集めさせてるんだけど、未だそれらしき話は聞かないわ」

「……そうか。ま、居ないなら別にそれでもいいんだがな」

「零治。その三人との間に一体何があったの？」

「……いつか話してやる」

「そう。なら、気長に待っててあげるわ。なら、帰りましょう」

こうして黄巾の乱は終結し、零治達一同は帰路に着くのだった。

「……ふぅ」

城まで目前の帰り道。凪は小さく溜め息を吐く。

「凪。お疲れさん」

「ああ、隊長、みんな……」

「凪ちゃん、今回は大活躍だったねー。華琳様もすっごく褒めてたの」

「そんな……私なんて隊長に比べれば……」

「そう謙遜しなくてもいいだろ。もっと胸を張れよ」

「はい……」

「うーむ、どうも表情が硬いですねぇ。こういう時は笑顔が一番ですよ？」

「瑠利亜様の言う通りなの。ほら、凪ちゃん、もっと笑顔になるのー！　ほら、むにむにー♪」

沙和が凪を笑わせようと頬をむにむにと引っ張る。

「こ、こら、沙和……やへふぇ、やめふぇっへ！」

「お、沙和ぁ！　こっちもうちょっと、引っ張った方がええんちゃうか？」

真桜も悪乗りして、加わってくる。

「ひゃへー！　ひゃへろ、たいひょたひゅけへ！」

凪は零治に助けを求めるが……

「ん？　凪はもう少し笑うようにした方がいいぞ。なあ、お前ら」

「そうなの。凪ちゃんはもっと笑った方がいいの」

「せやろ。意見もまとまったところで……！　沙和、やってまえ！」

「おー！　ほらほら、こっちもこうやってー」

沙和はさらに凪の頬を引っ張り出す。

「やめひぇー！」

「さて、なら華琳から褒賞も受け取りましたし、城に着いたら隊のみんなで宴会でもしましょうか。華琳は軍議は次の日にすると言ってましたし、急ぎの荷解きだけ済ませて、残りは明日にしましょう」

「おおー！　さすが華琳様、話が分かる！」

「わ、わひゃひは……っ」

「主役の凪が来ないんじゃ意味が無いでしょう。真桜、沙和、今日は凪を絶対に逃がしてはいけませんよ。これは上官命令です！」

「任せときぃ！」

「沙和にお任せなのー！」

「ひょんなー！」

「……宴会……か……」

瑠利亜の口から発せられた、宴会という単語を聞いた零治の表情に影が差す。ノリノリの瑠利亜とは対照的に、零治は乗り気ではないように見える。

「零治、貴方も当然来ますよね？　今回の戦いの一番の功労者なんですから」

「あ、ああ……」

「奈々瑠、臥々瑠。貴方達もどうですか？」

「えっ！？」

「えっと……アタシ達は……」

「んー？　なんや二人とも。警備隊じゃないからって、別に遠慮する事無いで」

「そうだよー。宴会は大勢でやった方が楽しいのー」

「そ、そうです……ね。なら……私達も」

奈々瑠がぎこちなく返事をする。

「決まりですね。なら、早いとこ用事を済ませちゃいましょう！」

「おーなの！」

瑠利亜達三人は凪を連行するように引っ張りながら、零治達を置き去りにして一足早く城に向かっていく。

「……やばいな」

「はい……」

「……兄さん、どうするの？　アタシ……まだ死にたくないよ～！！」

臥々瑠は今にも泣きそうな顔で零治にすがり付く。

「ええいっ、落ち着け！　大丈夫だ、まだ希望はある」

「……へっ？」

「アイツも決して酒に弱いわけじゃない。そんなすぐに酔ってあの状態になったりはしないだろう」

「それは、そうでしょうが……でも、酔った時はどうするんです？」

「心配ない。もし、そうなりそうになったら……」

「うん」

「……睡眠薬入りの酒を呑ませて眠らせる」

「……」

「……兄さん、それはあまりにも……」

「じゃあ、お前らは酔ったアイツの相手がしたいのか？」

「「嫌です（だ）……」」

「決まりだな。……オレ達も行くぞ」

零治達も瑠利亜達の後を追うように城に向かい、到着したら荷解きを手早く済ませるはずだったのだが……

「……ええと、だ」

零治達は荷を解く暇もなく、広間に招集をかけられた。真桜に沙和はもちろん、他のメンツ、特に瑠利亜はあからさまに不満げな表情である。

「華琳。今日は会議はしないはずじゃなかったのか？」

「私はする気はなかったわよ。貴方達も宴会をするつもりだったんでしょう？」

「宴会……ダメなん？」

真桜が不安げに華琳に訊く。

「バカを言いなさい。そのために褒賞を貴方達にあげたのよ？　…

…私だって春蘭や秋蘭とゆっくり閨で楽しむつもりだったわよ」

（頼むから、そういう事はもっと小声で言ってくれ。聞かされるこっちの身にもなれよな……）

「……すまんな。みんな疲れとるのに集めたりして。すぐ済ますから、堪忍してな」

そこに、胸にはさらしを巻き、上に羽織をまとい袴に下駄と、かなり特徴的な服装をした女性が謝罪しながら広間に現れる。

「貴方が何進将軍の名代？」

「や、ウチやない。ウチは名代の副官の張遼や。よろしゅうな」

「なんだ。将軍が直々にというのではないのか」

「アイツが外に出るわけないやろ。クソ十常寺どもの牽制で忙しいんやから。……ほれ、陳宮。さっさと用件を済ませんかい」

「分かっているのです。……呂布様のおなりですぞー！」

その名を聞いた零治と瑠利亜の顔に緊張が走る。

「なっ！？」

「呂布だとっ！？」

桂花よりも小柄な、中央にパンダのマークが入った学生帽のような帽子をかぶった少女が広間に現れ、その後方から、言い方は悪いが、頭頂部にまるでゴキブリの触角のように髪の毛がピンと二本跳ねた、どこか幼さを感じさせる長身の女の子がやって来る。

「……」

「曹操殿、こちらへ」

「はっ」

陳宮に促され、華琳は呂布の下まで歩み寄り、片膝をつき、頭を垂れる。

「……」

（……何も喋らねぇぞ、呂布の奴）

「えーっと、呂布殿は、此度の黄巾党の討伐、大儀であった！　と仰せなのです！」

「……は」

「……」

「して、張角の首級は？　と仰せなのです！」

「張角は首級を奪われる事を恐れ、炎の中に消えました。もはや生きてはおりますまい」

「……」

「ぐむぅ……首級が無いとは片手落ちだな、曹操殿。と仰せなのです！」

「……申し訳ありません」

非難する陳宮の言葉に、華琳は淡々と言葉を述べる。

「瑠利亜……アレ、本当に三国最強と言われた、あの呂布か……？」

「……のようですね。正直そうは見えませんが……」

「だよな。……秋蘭、呂布が代理を務めてる奴って何者だ？」

「軍部の頂点に居るお方だ。朝廷での地位で言えば我々どころか華琳様すら足元に及ばん」

「何進といってね。皇后の兄で肉屋のせがれよ」

「肉屋のせがれが軍部の頂点かよ……」

「仕方ないのでは？　この時代では、皇帝の奥さんの身内ってだけで、いい地位に就けるぐらいですし」

「……確かにな」

「……」

「今日は貴公の功績を称え、西園八校尉が一人に任命するという陛下のお達しを伝えに来た。と仰せなのです！」

「は。謹んでお受けいたします」

「……」

「……ホント何も喋りませんね、彼女」

「ああ。陳宮が代りに代弁してるが、ホントに呂布の言葉なのか疑問だぞ」

「……」

「これからも陛下のために働くように。では、用件だけではあるが、これで失礼させてもらう。と仰せなのです！」

「……ねむい」

「……おい。今、眠いって言わなかったか？」

「ええ。確かに言いましたね……」

「ささ、恋殿！　こちらへ！」

「……ま、そういう訳や。堅苦しい形式で時間取らせてすまんかったな。後は宴会でも何でも、ゆっくり楽しんだらええよ」

将軍の代理で来た三人は用件を終え、広間を立ち去って行ったのだが……

「……」

華琳は決していい気分ではなかったようで、わなわなと肩を小さく震わせている。

（……怒ってる。間違いなく怒ってるぞ、アレは……）

他のメンバーもそれを悟ってか、広間に集まってる人間の視線が零治に集中する。

（で、なんで全員オレを見るわけ？　……ええい、オレに話しかけろってか！？）

零治は意を決して華琳に話しかけるのだが。

「か、華琳……？」

「話しかけないで！」

華琳は普段の立ち振る舞いからは想像もつかないようなヒステリックな叫び声を上げる。

（怖っ！）

あまりの迫力に零治は思わず身震いしてしまう。

「悪いけれど、今なにか話しかけられたら、そのまま斬り殺してしまいそうなのよ……少し黙っていて」

「華琳様……」

「春蘭、秋蘭。閨に戻るわよ！　気分が悪いったらありはしない！　今日は朝まで呑み直すわよ！」

「はっ」

「零治達も今日は休みなさい。作業は明日からで構わないわ。明日は二日酔いで遅れてきても眼を瞑ってあげるから、思い切り羽目を外すと良いわ」

「……そうさせてもらう」

この時、広間に集まってる人間全員が思った。華琳が怒るような、こういう出来事は二度とあってほしくないと。

余談だが、警備隊の人間の間で行われた宴会は、零治の作戦により無事に事なきを得たという。

第２１話　黄巾の乱、勃発　完結編（後書き）

作者「やっと終わった……」

零治「……作品そのものが終了したような言い方すんなよ」

瑠利亜「まあ、確かにやっと終わりましたね、黄巾党の話」

臥々瑠「じゃあ、次はいよいよ……」

奈々瑠「反董卓連合軍の話ですね」

作者「その前に間に拠点パートを書くがな」

零治「前の話で言ってたヤツか？」

作者「そっ。まあ、犬耳姉妹よ、今回はお前達二人がメインだ。楽しみにしとけよ」

奈々瑠「貴方の技量ではたかが知れてるので、期待はしません」

臥々瑠「うんうん」

作者「酷い……」

零治「……毎回思うが、コイツ自分の事をいじめて何が楽しいんだ？」

瑠利亜「さあ？」

第２２話　口は災いの元（前書き）

以前、作者は桂花が嫌いだと後書きで言いましたが、今回の話、それとは一切関係ありませんので誤解のないようお願いいたします。
個人的にこの話が一番だろうと思って書いたのです。

第２２話　口は災いの元

「いやー、今日も街は平和ですね」

凪達三人を率いて、昼下がりの街を巡回中の瑠利亜は大きく伸びをしてながら言う。

「平和すぎてつまらんけどな」

「真桜、不謹慎ですよ。……街の巡回も私達の重要な任務の一つなんですから」

「いざという時はお役に立つでありますの！」

沙和が勢いよく手を上げ、元気な声で言う。

「その時は頼りにしますが、あまり目立つ真似はしないでくださいよ？」

「はいでありますの」

（ホントに分かってるんですかねぇ……？　まあ仮にも私は彼女達の上官なんですから、信じてやらないといけませんね）

「なんやこう……面白い事あれへんかなぁ」

「面白い事？　例えば？」

「ならず者が瑠利亜様を知らずに『おうおうおう、姉ちゃん、俺に肩ぶつけといて挨拶も無しかよなの！』みたいに絡んで来るとか～」

「私が絡まれる状況は歓迎できませんが……それで、どうするんですか？」

「決まってるの。徹底的に自分達が虫以下の存在だって事を分からせた上に、くっくっくっなの♪」

口元の手を当てながら悪意のある笑みを浮かべる沙和に、真桜が呆れながらツッコミを入れる。

「それ、どう見ても新入隊員の募集やないか」

「そうだよ？」

「どうして新人の勧誘に私がならず者に絡まれる必要があるんですか……？」

「えーと、瑠利亜様って美人だし、そういう人達を引っ掛けやすいと思って」

「勘弁してくださいよ。てか、新入隊員の募集は定期的にしてるでしょう」

「それは知ってるけど、人手不足で沙和は凄く困ってるのー」

（はぁ……まったく、この前の新入隊員の教育の時に零治が沙和に変な入れ知恵をしたから、妙に悪乗りしてる節がありますねぇ……）

それはつい先日の事。零治は凪達三人にこの前入隊してきた新人の教育を任せたのだ。しかし沙和だけやり方に問題があり、零治は沙和にある事を教えた。それは、海兵隊などがよくやっていた罵倒式訓練術である。昔観た映画でやっていたのを零治が思い出し、沙和にそれを教えたわけだ。

結果、効果は覿面だったのだが、おかげで魏の兵の一部が海兵隊仕様になってしまい、彼らは事あるごとに『サーイエッサー』と返事をするようになってしまったのは、また別の話である。

「凪、貴方も何か言ってあげてください」

「……頑張れ」

「いや、そうじゃなくて……」

「……無理だと思うけど」

「無理じゃないもん！　よおし、意地でもガラの悪そうな奴を瑠利亜様にぶつけさせてやるの……」

「だからそれが無理なんやって。……沙和、最近街におるゴロツキ達が大人しくなったんは知っとるやろ？」

「知ってるけど……それがどうしたの？」

「あれ、隊長と姉さんのおかげなんやで」

「へえ。でも、その話がさっきの話とどう関係してるのー？」

「まあ話は最後まで聞きや。この前、隊長と姉さんが二人で西地区を見回りに行った時の事なんやけどな……」

「うん」

「その時にな、西地区のゴロツキ達を仕切っちゅう奴がな、無謀にも隊長達に喧嘩を吹っかけてきたがよ」

「ああ、あの時の事ですか。って、真桜、どうして貴方が知ってるんです？」

「姉さん、あの話、警備隊の間じゃ有名やで。たぶん知らん奴はおらんのとちゃうん？」

「……最悪だ」

瑠利亜は顔を手で覆いながら俯く。

「それで？　それからどうなったのー？」

「零治がその喧嘩を買っちゃいましてね。あそこ一帯のゴロツキを大通りに集めて、そこから大乱闘に発展しちゃったんですよ。立場

上、ホントはやめさせるべきだったんですが、どうにもならなくて……」

「……結果は？」

沙和も頭の中では分かっているのだが、やはり訊かずにはいられないらしい。

「隊長達が負けると思うか？」

沙和の問いに凪が答える。

「……思わないの」

「やろ。二人があそこのゴロツキを全員ブチのめしてもうてな、その話もあっちゅー間に街中に広まってな、この街に居るガラの悪い連中もすっかり大人しゅうなってもうたんよ」

「二人って……殆ど零治が一人でやったんですよ。まあ、確かに私も数名ほど痛い目に遭わせてやりましたが……」

「……」

沙和は話の内容にどう反応していいか分からず、完全に言葉を失っている。

「そういう事だ。瑠利亜様に絡んでくるならず者なんて、せいぜい隊長達の事を知らないよそ者ぐらいだ。だから諦めろ」

「それに募集は定期的にやってるんですから、今は巡回に専念してください」

「ふぇーいなの……」

沙和は膨れっ面で生返事をする。

「それにしても、ホンマ暇やなぁ……」

「暇って事は、私達が何かしないといけない困り事が無いって事ですよ。引いては街が平和である証拠なんだからいいじゃないですか」

「それはそうなんだけど……年頃の女の子としては、やっぱり刺激が欲しいの～」

「貴方の言う刺激は強すぎなんです」

「ちぇーなの」

「平和やったら、巡回の必要が無いんちゃうん？　ウチはこの時間を発明に回したいんやけどなぁ」

「あのですねぇ、街が平和なのは私達がこうして眼を光らせてるか

らなんですよ。無論、巡回しなくても平和なのが一番ですが」

「そういう事だ」

「ま、分からんでもないけどな。それにしても暇やなぁ……」

「そんな、毎日刺激的な事があったら、私は胃に穴が開いちゃいますよ……」

「そうかなぁ。私は楽しいと思うけどなー」

一同がそんな会話をしながら街を巡回していたその時。

「……となると、残りはいくつ？」

「ん？　今、桂花の声がしませんでしたか？」

「はい。確かに聞こえましたね」

「んー？　どこにおるんや？」

「瑠利亜様。あそこに居るのー」

沙和が街の通りに設けられた、小さな小屋を指差しながら言う。

「四つ！」

「二つー！」

「あ、あのねぇ……あんた達、分かんないからって、適当に言ってるんじゃないでしょうね」

「わかんないからてきとー」

「あ、あんたねぇ……くっ、ここで怒ってはいけないわ。怒ったら余計に話を聞かなくなる……そうすればこの任務は失敗に終わってしまう。……せっかく華琳様から直々に許可を頂いたというのに！」

沙和が指差した小さな小屋には、粗雑な椅子に座る数人の子供達を相手にしながら教壇に立つ桂花の姿があった。桂花の背後の壁には枠組みされた大きな木の板が張り付けられており、そこには何かの問題の説明文が書かれた紙が貼られている。

「彼女……あんな所で何をしてるんですかね？」

「授業をしてるようですね」

「授業？　ああ、そういえば華琳が街の子供達に勉学を教えるって話を以前してましたね」

「だから何度も言ってるじゃない、いい？　孟徳様が十の宝物を手に入れました。それを強欲で野蛮な部下の音無が勝手に三つ取って行きました」

「……えっ？」

瑠利亜は桂花の説明を聞いて素っ頓狂な声を出す。桂花は彼女達の存在には気付いていないので、そのまま説明を続ける。

「更に凶暴で何を考えてるか分からない奈々瑠と臥々瑠が、何も言わずに二つ持っていきました」

「ちょ……」

「半分になってしまった宝物を見て、孟徳様は謝りながら、一番忠実で有能で、心から愛してる文若ちゃんに……」

「……」

「お前はいつ見ても可愛いし、心から愛しているから私の宝物を一つあげようと言って、一番価値のある宝物を一つ文若ちゃんにあげました。……さあ、残りの宝物はいくつかしら？」

「なんか……もの凄い内容の例え話をしていた気がするんですが……」

「隊長が強欲で野蛮、奈々瑠と臥々瑠が凶暴で何を考えてるか分からない。桂花様は一番忠実で有能……」

「いや、声に出さなくていいですから……」

「まあ、例え話なんやから別にええんとちゃうん？　でも、桂花の

頭の中では真実なんやろうけど」

「はぁ……」

瑠利亜は大きな溜め息を吐きうな垂れる。桂花と零治達の仲の悪さは今に始まった事ではないが、だからと言って授業の問題内容に使うのは人としてどうかと彼女は思う。

「瑠利亜様」

「ん？　なんです？」

「一番価値のある宝物をあげたのなら、残りは……ゴミですか？」

「ちょっ！？　全然違いますよ！　彼女達は今、算数の授業をしてるんですよ？」

「算数を教えていたんですか……」

「凪。見回りはいいですから、一度あの子達と一緒に授業を受けてきなさい」

「ううっ……すみません……」

凪は俯いてバツの悪そうな顔で謝罪する。

「二つじゃなかったから三つ！」

「二つー！」

「何言ってんだよ、一つに決まってるだろ！」

子供達は好き勝手な数字を言って騒いでいる。授業を受ける気はあるようだが決して教養は高くない様子。しかし、この時代は文字を書けない大人も普通に存在してるのだから仕方のない事とも言えるだろう。

「……瑠利亜様」

「ん？　今度はなんです？」

「答えは……四つですよね？」

「はい、正解です。やれば出来るじゃないですか」

「……」

「凪、何赤くなってんのや？　それぐらい答えられて当然やろ」

「でも……褒められると嬉しいし……」

「ハハハ」

「瑠利亜様ー。答えは四でありますの！　えへへ、褒めて褒めてな

の～♪」

「あー、はいはい。よく分かりましたね」

「うわ……棒読みなの！」

「凪が答えだした後に言うてもしゃーないやろ」

「よーく考えて？　強欲で野蛮な音無と凶暴で何を考えてるか分からない獣女の奈々瑠と臥々瑠が、三つと二つ、勝手に持っていったのよ？」

桂花は子供達の不真面目な態度に対して、必死に怒りを抑えながら懸命に説明を繰り返してる。何やら米神がヒクヒクと痙攣を起こしてる気がするのは気のせいだろうか……？

「しかし……相変わらず仲が悪いですねぇ……」

「そうですね。隊長ともそうですが……奈々瑠達とは特に険悪な仲ですからね」

「なあ、姉さん」

「なんです？」

「さっきの話……隊長に聞かれたら、かなりマズイんちゃう？」

「大丈夫だと思いますよ。幸い零治は今日は非番ですから」

「それはそうだけど……隊長、ひょっとしたら外出してるかもしれないし……」

真桜と沙和は顔を青ざめさせながら瑠利亜に言うが、瑠利亜はいたって平静に答える。

最近になって二人は、零治を怒らせる事がどれ程恐ろしい事かを思い知ったので、内心零治がこの場に現れるのではないかとビクついていた。

「それも心配はないでしょう。最近仕事が多忙なせいか、零治は休日の殆どを自室で寝て過ごしてますから」

「……そうなんですか？」

「ええ。だってこの前顔を合わせた時も、『オレ、昨日の休日何してた？』って聞かれたぐらいですから」

「それって……」

「ええ。どうもその日は休日を丸々寝過ごしたみたいで」

「それ……メッチャ重症やん……」

「ですね。だからこそ、私達がこうして街を巡回し、零治の負担を少しでも軽減してあげなきゃいけないでしょう？」

「はい！　微力ではありますが、自分も精一杯頑張ります！」

「ふふ。頼もしいですね。では、そろそろ行きますかね。桂花の邪魔をするわけにもいきませんし」

「はっ」

「へーい」

「はーい♪」

瑠利亜達は次の区画を見回るため、その場を後にする。だが、彼女達は気付いていなかった。桂花の先程の話に聞き耳を立てていた人物が、すぐ近くの細い路地の暗がりに、もう二人存在していた事に……

「……臥々瑠。さっきの聞こえたわね……？」

「うん。バッチリと……」

「あの女狐。私達の居ない所で、随分とふざけた事言ってくれるじゃないの……」

「……どうする？　あそこに殴り込みに行こうか？」

「それをしたら子供達の邪魔もしちゃうでしょう。流石にマズイわ」

「じゃあどうするの？　このまま言われっぱなしってのもムカつくんだけど……」

「分かってるわよ。とにかく、あの女には一度思い知らせてやる必要があるわね……」

「うん。でも、どうやって？」

「そうねぇ……あ、そうだ。臥々瑠、耳貸して」

「なになに～？」

「ごにょごにょごにょごにょ……」

「うん……うんうん……。あはっ♪　いいねそれ！」

「なら決まりね。あの女が城に戻って来る前に準備をするわよ」

「オッケ～」

二人はそう言いながら、すうっと路地の暗闇に紛れるように姿を消した。

……

……

…

その日の夕方、城の中庭にて、それは起こった。

「ふぅ……今日は今一つだったわね。まあ、これぱっかりは根気よく続けていくしかないわね……」

桂花が昼間の授業の結果について、一人ブツブツ言いながら中庭を歩いていたその時、右手に有る茂みがガサガサと音を立てながら揺れる。

「ん？　誰か居るの？」

桂花は音が立った茂みの方を向き呼びかけるが、なんの反応も返ってこなかった。

「……気のせいかしら？」

桂花はそう思ってその場を立ち去ろうとしたが、再び茂みが音を立てながら揺れる。

「……ちょっと、誰だか知らないけど、イタズラも大概になさいよ」

桂花は再度茂みに向き直り、やや苛立った口調で呼びかける。すると、茂みの中から一匹の黒色の毛並みの狼がゆっくりと姿を現す。

「なっ！？　な、なんで城の中庭に狼がっ！？　警備の連中は何をしていたのよ！」

「ぐるるるる……」

狼は桂花に狙いを定めるかのように睨み付けながら唸り声を上げ、じりじりと近づいてくる。

「ちょっと、冗談じゃないわよ！　こ、こっちに来ないでよっ！」

「がうっ！！」

「いやあああああっ！！」

狼が自身に突進してきたので、桂花は城内に続く吹き抜けの廊下を目指して脱兎の如く走り出す。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

桂花は息を切らしながら必死に走り続ける。廊下までの距離はもう目と鼻の先。だが、その時……

「がるるるる……」

「なっ！？　もう一匹居たの！？」

廊下のすぐそばに有る茂みの中から、今度は茶色の毛並みをした狼が桂花の行く手を塞ぐように飛び出してきた。

「がうっ！」

「ひゃあああああっ！」

桂花は右手に逸れ、新たに現れた狼をかわし、廊下の吹き抜けの部分に飛び込もうとするが。

「がぁうっ！」

後方から迫ってきた黒毛の狼に行く手を阻まれる。

「ひいいいいっ！」

桂花はやむを得ず、廊下に逃げ込むのを諦め、中庭へ引き返す。

「と、とにかく人をっ！　人が居る場所に逃げないと！」

そう言いながら必死の形相で桂花は中庭を走るが、彼女が中庭のど真ん中に足を踏み込んだその時。

「へっ……？　きゃあああああっ！」

桂花がその場から姿を消した……。いや、正確に言うと中庭に掘られた落とし穴に落ちてしまったのだ。

「いたたたぁ……。誰よっ！　こんな所に落とし穴なんか掘ったの……って、何か居る……？」

掘られた落とし穴は結構な深さで、少なくとも桂花の身長では自力で出るのは不可能だろう。更にタチの悪い事に、落とし穴の中には大量の何かが居た。それは……

「ひっ！？　へ、蛇！　い、いやっ！　こっちにはカエルにトカゲまでっ！　だ、誰か助けてえええええっ！！」

桂花は半泣きの顔で穴の中から助けを呼びかけるが反応は無い。そこへ、先程まで散々桂花を追い回していた二頭の狼が、桂花の様子を窺うように穴の中を覗き込んでくる。

「「……」」

「ひぃっ！　いや……こ、来ないでよ……っ！」

二頭の狼はそのまましばらく桂花を見つめた後、その場を立ち去っていった。

「……た、助かっ……てなーいっ！　ひゃっ！　カ、カエルが服の中に！　ああ、誰か助けてぇ！！」

桂花は助けを呼び続けるが人が来る様子は一向に無かった。
一方、落とし穴から離れた狼達は中庭の茂みの中に身を潜め、その場に体を伏せる。すると、全身から黒い霧のようなもやが出現し、全身が覆われる。しばらくすると……

「……」

「……」

もやの中から奈々瑠と臥々瑠の姿が現れる。そう。先程まで桂花を追い回していた狼の正体は彼女達だったのだ。

「ぎゃはははは♪　見たー？　さっきの桂花のあの顔ー！」

臥々瑠は腹を抱え、自分の膝をバシバシと叩きながら大笑いする。

「ええ。ホントいい気味だわ。私達の、何より兄さんの陰口を抜かした罰よ」

「で、どうするの？　あのまま埋めちゃおうか？」

「それは流石にやりすぎよ。しばらく放っておいて、それから穴から出してあげましょう。それまで、ここから高みの見物でもしてましょう」

「はいは～い」

二人は茂みの中から落とし穴の様子を伺う。
穴の中からは、未だに桂花の悲痛な叫び声が木霊していた。

「くくっ。まだ叫んでるよ」

「そうね。まあ、あの深さじゃ自力で出るのは無理だから当然でしょうけど。……ところで臥々瑠。アンタ、あの中に入れた蛇は全部無害なヤツでしょうねぇ？」

「大丈夫だって。ちゃんと無毒のヘビしか入れてないから。……ん？　あっ、秋蘭が来たよ」

「えっ？　……あっ、ホントだ」

二人の視線の先にある吹き抜けの廊下から秋蘭が現れる。そして、秋蘭の視線が中庭にある落とし穴に止まり、歩み寄っていく。

「あっ、気付かれちゃったよ」

「……仕方ない、見物はここまでね。見つかるとマズイから、桂花の事は秋蘭さんに任せて、私達は城に戻るわよ」

「は～い」

二人は姿を見られないように、茂みの中を移動しながら城に帰って行った。

「なんだ……この穴は？　誰がこんな所に掘ったんだ？　……ん、人の声……この声、桂花か？」

秋蘭は穴に落ちないように身を乗り出して中を覗き込む。

「なっ！？　け、桂花！　大丈夫かっ！」

「しゅ、秋蘭！？　お、お願い、ここから出して！　腰が抜けちゃって身動きできないのよー！」

「うーむ……しかしこの穴、結構な深さがあるな。桂花、縄を取って来るから少し待っていろ」

「い、急いで！　この中、蛇とかが居て気持ち悪いのよ！　ひゃあ あっ！　来ないでー！」

「分かった。すぐに戻って来るから待っていろ！」

秋蘭は縄を取りに大急ぎでその場を走り去る。それからしばらくして。

「待たせたな、桂花。さあ、これに掴まれ」

縄を持った秋蘭が戻ってきて、穴の中に縄を放り込み、桂花を引き上げる。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

秋蘭のおかげでようやく穴から脱出できた桂花は全身が土で汚れ、疲労困憊の様子で地面に両手を付き、肩で激しく息をしていた。

「桂花、大丈夫か？　どこにも怪我は無いか？」

「え、ええ……。助かったわ、秋蘭」

「うむ。……で、一体何があったのだ？」

「はっ！？　そ、そうよ！　狼よ！　中庭に狼が二匹居たのよ！！」

「……狼？」

「そうよ！　まったく、警備の連中は一体何をしていたのよ！」

「落ち着け桂花。順を追って説明してくれ。お前が見たその狼と、あの穴にお前がはまっていたのとどう関係してるのだ？」

「……今日、街から戻って、この中庭を歩いていたら」

「うむ」

「庭の茂みの中から狼が現れて、私が追い回されたのよ」

「それで？」

「中庭を逃げ回って、あそこに足を踏み出したら、いきなり……」

「なるほど……つまり、あれは落とし穴か」

「ええ。間違いないわ」

「ふむ。とりあえず、お前が見たという狼に関しては、兵達に城内を調べさせるとしよう。城の者に害が及んだら一大事だからな。……後は……あの穴を誰が掘ったかだな」

「……アイツだわ」

桂花はわなわなと体を震わせながら呟く。

「ん？　アイツとは誰の事だ？」

「音無に決まってるじゃないっ！」

「おい、桂花。まだ犯人が音無と決まった訳では……」

「いいえ！　絶対にアイツの仕業よ！　きっと狼を城の中に連れ込んだのも音無に違いないわ！　私がここを歩く機会を見計らって、あの狼達をけしかけてきたのよ！」

「……」

眼の付け所は悪くないが桂花の推理は大ハズレである。流石の彼女も、あの狼の正体が奈々瑠と臥々瑠とは夢にも思っていないだろう。

「うぅっ！　ぜっったいに許さない！　見てなさい！　この私を敵に回すとどうなるか思い知らせてやるわっ！」

桂花は怒りを露わにしながら、瞳の中に復讐の炎をメラメラと燃え上がらせる。

「……まあ、音無には私から話を聞いてみるが……あまり人の迷惑になるような事はするなよ？」

「くっくっく……どうしてくれようかしらね、あの男……」

秋蘭の声は桂花には届いていないようだ。それどころか悪意のある笑みを浮かべながら、禍々しいどす黒いオーラのようなものを全身に纏っているように見える。

「はぁ……また面倒な事にならないといいのだが……」

それから数日後の昼下がり、秋蘭の予感は見事に的中する。

「あのバカ、アホ、おたんこなす！　この前はよくも私をあんな目に……っ！」

桂花は怒りを露わにし、悪態を吐きながら木製のスコップで中庭の地面に穴を掘っている。どうも落とし穴を作ってるようだ。

「出来たわ！　後はコイツに布を被せて上手く偽装して、そして音無が引っかかったら……コレを頭上から浴びせてやるんだから！」

黒い笑みを浮かべながら桂花は近くに置いてあった麻袋を手に取り、縛り口の紐を緩めて中を確認する。袋の中には蛇やカエル、トカゲなどの爬虫類系の生き物が大量に入っている。どうも零治を自分と同じ目に遭わせてやるつもりのようだ。しかし、唯一違う点があるとすれば、肝心の落とし穴が浅いというぐらいだろうか。

「わざわざ憲兵に頼んで気持ち悪い蛇やカエルをかき集めてきてもらっただけの事はあるわ。なかなかの迫力じゃない。くっくっく……後はあの茂みに隠れてアイツが来るのを待つだけ。今日こそあの男に自分の立場というものをわきまえさせてやるわ」

桂花はそう言って近くの茂みに身を潜めるが……穴を掘る姿を桂花が立っていた位置の後ろに有る吹き抜けの廊下から、二人の人物に見られていたのを彼女は気付いていなかった。

「何をやっているかと思えば……あの女、またロクでもない事を……」

「どうも兄さんを引っ掛けるための落とし穴っぽいけど……どうする？」

「今日、兄さんはどうしてるの？」

「今日は非番だよ。確か……朝から華琳と買い物に出かけたから、そろそろ帰ってくるんじゃない？」

「そう……」

「で、アイツはどうするの？」

「しばらく様子を見るわ。場合によっては、この前みたいに桂花を追い立てて、あの落とし穴に落としてやるわよ」

「ラジャー」

二人は桂花が潜んでる位置の背後に回り込み、そのまま茂みの中に身を潜め様子を伺う。それからしばらくして。

「ふわぁぁ～……」

「ちょっと……何よ。だらしない欠伸なんかして……」

買い物を終えた零治と華琳が戻ってくる。

「あんな朝早くに叩き起こされたんだ。欠伸ぐらい出るさ……」

「それでも我慢ぐらいしなさいよ」

「これでも我慢はしてるつもりだが……ふわぁぁ～……」

またもや零治は大口を開けてだらしなく欠伸をする。どう見ても我

慢してるようには見えなかった。

「はぁ……」

「う～……こう眠いと、コーヒーが飲みたくなるのはやはり現代人の性か」

「こぉひぃ……？　なんなのそれ？」

「ああ、オレの世界にある眠気覚ましのお茶みたいな物だ」

「へえ。貴方の世界にはそんな物もあるの」

「ああ。……今度、魔法で材料と道具一式を用意していつでも飲めるようにするかな」

「そう。なら、その時は私にも声をかけなさい。どんな物か気になるから」

「まあ別に構わんが……。ん……？」

零治の視線が桂花が仕掛けた落とし穴の位置に止まる。

（あの地面……なんか妙な違和感があるな。……ひょっとして落とし穴か？　こんな事をする奴は一人しか思い当たらんな。華琳が落ちるとマズイし位置を変えるか）

流石に元暗殺者だけあって、そういった事を見抜く零治の眼力は確かなようだ。

「華琳。こっちに寄った方がいい」

「え？　別に歩く位置を変える必要なんて……」

（マズイっ！　あのままじゃ華琳様が……っ！）

桂花がそう思ったその時。

「「ぐるるるる……」」

「へっ？」

桂花の背後に狼に変身した奈々瑠と臥々瑠が現れる。

「なっ！？　こいつらはこの前の……っ！」

「「がうっ！」」

「きゃあああっ！！」

追い立てられた桂花は茂みから飛び出し、奈々瑠達もそれに続く。

「ひいいいいっ！　た、助けてーー！」

「ん？　桂花？」

桂花は猛スピードで零治達の所に一直線に走る。しかし、その先には……

「桂花、何をそんなに慌てて……なっ！？」

「危ないっ！」

「へっ……？　きゃあああああっ！」

華琳が落とし穴にはまりそうになり、零治は素早く華琳の腕を掴み、引っ張り上げ難を逃れる。それと入れ替わるように、桂花は自分で作った落とし穴に落下してしまう。

「なに……これ？　落とし穴？」

「大丈夫か、華琳？」

「ええ、ありがとう。一体誰がこんな……って、狼っ！？」

「ん？」

零治が二頭の狼に視線をやる。

「奈々瑠、臥々瑠。そんな姿で何をしてるんだ？」

「えっ！？」

「華琳。以前話しただろう？　アイツらは狼に姿を変えることが出来るって」

「え、ええ。それは憶えてるけど……まさか、これがそうなのっ！？」

「そうですよ」

狼の姿のまま奈々瑠が返答する。

「なっ！？」

「へへっ。驚いた？」

「あ、当たり前でしょう！　ていうか、その姿でも喋れるの！？」

「ええ。もちろんです」

「二人とも、オレはともかく、華琳はその姿じゃ話しにくいから、元の姿に戻れ」

「は～い」

奈々瑠達の体が黒いもやに全身が包まれ、それからすぐに元の姿に戻った奈々瑠達がもやの中から現れる。

「なっ！？　ア、アンタ達だったのねぇ！　この前、中庭で私を追い回したのはぁ！」

「あら、今更気付いたんですか？」

「じゃあ、あの時の落とし穴も！」

「そう。アタシたちの仕業だよ～」

「くぅ～っ！　何のつもりであんな事をしたのよ！？」

「さあ？　自分の胸に手を当てて聞いてみたらどうですか？」

「ちょっと、何よ！　そのバカにしたような態度はっ！」

「……で、桂花、いつまで穴の中に居るつもりなんだ？」

「うるさいわねっ！　そんな事言う暇があるんなら早く引き上げなさいよ！」

「別にそれは構わんが……その前に聞きたい事がある」

「……何よ？」

「この落とし穴を仕掛けたのはお前か？」

「うっ……そ、そうよ、悪いっ！」

「はぁ……。この前の落とし穴騒ぎは秋蘭から聞いてはいたが……。どうせ男嫌いのお前の事だ。大方、その落とし穴を仕掛けたのがオレだと決めつけて、その仕返しにここに落とし穴を仕掛けた、といった所だろう？」

「うっ……」

「図星のようだな」

「残念ながら、アレは私達の仕業ですがね」

「はぁ……その件に関しては、後で詳しく二人から聞くとしよう。……とにかく、お前もこんなくだらない事をするのはやめるんだな。誰か他の人が引っかかったらどうするつもりだ？」

「う、うるさいっ！　もとはと言えばそこの獣女どもと引っかからないアンタが悪いんでしょう！　そうよ、そうに決まってるわ！」

（おいおい。それが軍師の言うセリフか……）

桂花は穴の中でヒステリックに喚き散らす。零治はその姿を見て呆

れ果てる。
今の彼女はすっかり頭に血が上ってるせいで、言ってる事も滅茶苦茶で内容も筋も通っていない。

「だいたい、何でアンタが華琳様と……」

「お黙りなさい！」

「っ！？」

「なっ！？」

「わっ！？」

「ひっ！？」

それまで黙っていた華琳が突如怒声を上げ、その場を一喝する。

「そう……この罠を作ったのは貴方だったなのね、桂花」

「あ、いや……えっと……その……」

「あ・な・た・な・の・ね」

「ひぅっ！？　……はい」

「そう……軍師ともあろう者が敵ではなく、自分の主を罠にかける

なんて……いい度胸ね」

「そ、そんなつもりは無かったんです！　ただ、たまたま華琳様が罠の有る所に足を踏み入れただけで……」

「なぜ、自分の城に罠があると思うのかしら？　私がここを歩いてはいけない理由でもあるのかしら？」

「あ……ありません……」

桂花の顔色がどんどん青ざめていく。確かに不可抗力はあったかもしれないが、彼女が落とし穴を仕掛けたのは紛れも無い事実なので、この場はフォローのしようが無いだろう。

（はぁ……これは桂花の自業自得だが……この居心地の悪さは何とかならねぇのかよ）

「貴方にはとっておきのお仕置きが必要なようね。男の文官達を呼んで、代わる代わる質問攻めにさせてやろうかしら」

「ひいぃぃぃぃぃっ！　それだけはご勘弁を！　そんな事されたら、妊娠し過ぎて死んでしまいます！」

桂花はこの世の終わりのような悲鳴を上げながら華琳に懇願する。しかし、そんな事をしても華琳が許すはずが無かった。

「こんなくだらない物を作る性根は、死んだ方がマシだと思わない？　いくら男が嫌いだとはいえ、私にこんな辱めを与えた罰は軽くないわよ！」

「そ、それは……！　そもそも、そこに居る奈々瑠達が私にあんな事をするから……っ！」

「それは貴方が零治の悪口でも言って、彼女達の反感を買うような事でもしたんでしょう。だいたい、今の私にそんな言い訳は通用しないわよ！」

「どうか……どうか、華琳様！　お慈悲を！」

桂花は穴の中で祈るように華琳にすがる。そこへ、臥々瑠がとどめの一撃を刺すかのように、華琳にある事を教える。

「ねえねえ、華琳。桂花がこんな物を隠し持ってたんだけど」

「ん？　何、その麻袋は？」

「へへっ……じゃ～ん！」

臥々瑠が麻袋の口を開いて、華琳に中身を見せる。そう。彼女が持ってきたのは、桂花が予め用意していた、大量の蛇やカエルが入っている麻袋である。

「なるほど。……桂花、貴方へのお仕置きが決まったわよ」

「へっ？」

華琳が氷のように冷たい笑みを浮かべながら桂花に告げる。だが桂花は何の事か理解出来てないようだ。

「臥々瑠。それを……頭から桂花に浴びせてあげなさい」

「え？　やっちゃっていいの？」

「ええ。遠慮は要らないわよ」

「は～い♪　……てな訳で……それ～～♪」

臥々瑠は袋を逆さに向け、中身を盛大に桂花の頭にぶっかける。

「ぎゃあぁぁぁぁっ！！」

「きゃはははは♪　気分サイコー！」

臥々瑠は満面の笑みで袋の中身を桂花にかけ続ける。対する桂花は耳をつんざく様な悲鳴を上げ続け、穴の中で激しく暴れまわる。

「ひゃあぁぁぁっ！　へ、蛇！　カエル！　嫌！　カエルが！　ふ、服の中にっ！」

「あはははは！　いいざまね、桂花さん」

奈々瑠も今の桂花の有様を見て、指を刺しながら大笑いする。

「ひいぃぃぃぃっ！　お許しを、華琳様！」

「ダメよ。しばらくそうやって反省してなさい。それと、城内への罠の設置も禁止よ」

（容赦ねぇなぁ、華琳の奴。まあ、これは自業自得なんだろうが、今回ばかりは桂花に同情するぜ……）

「うぅ……。音無達なんか、だーーーーいっきらーいっ！！」

（前言撤回。やっぱコイツは一度身をもって思い知るべきだな）

「きゃあぁぁぁっ！！　こ、今度は蛇がぁっ！」

中庭には桂花の悲鳴が虚しく木霊する。天才軍師、荀文若の自滅劇はこうして幕を閉じたのだった。

第２２話　口は災いの元（後書き）

作者「どうだ、今回の話は？」

零治「なんというか……」

瑠利亜「ええ。思いっきり桂花を苛めてる話ですよね……」

零治「アイツが嫌いだからこんな話にしたのか？」

作者「おい。前書きにも、それは関係ないと書いてただろ？　これが一番いいと思ったから書いたの」

零治「あっそ……」

奈々瑠「私はいいと思いましたね。気分がスカッとしましたよ」

臥々瑠「うんうん。見直した」

作者「そうか。気に入ってくれて何よりだ」

瑠利亜「で、次は？」

作者「いつもなら、もう一本拠点パートを書くんだが、本編を早く進めたいから、次は反董卓連合を書く」

零治「そうか。まっ、せいぜい長ったらし文章にならないよう注意するんだな」

作者「うっさい……」

第２３話　新たな動乱の兆し（前書き）

やっと話が反董卓連合軍に突入。
これで登場人物の数も大幅に増えるが……いつもの事ながら、また文章が長くなりそうな予感が……。

第２３話　新たな動乱の兆し

「ん？　何だ、この調子外れの鼻歌は？　……あれは、季衣か？」

零治は中庭に設けられてる東屋で上機嫌な季衣を見つけ、話しかける。

「季衣、何をしてるんだ？」

「あ、兄ちゃん。へへー。手紙を書いてるんだー」

「手紙？　ああ、そういえば、黄巾党との戦いがようやく片付いたから、手紙も出せるようになったんだったな」

「ねえ、兄ちゃん。たのしみにしてるって、どう書くんだっけ？」

「筆を貸してみろ……それは、こう書くんだ」

零治は季衣から筆を受け取り、使ってない紙に手本を書いて見せる。

「あ、そっかぁ。ありがと、兄ちゃん」

「どういたしまして」

「あら、二人で何をしてるの？」

「ん？　ああ、華琳か。何、季衣に手紙の書き方を教えていただけさ」

「手紙？　相手に証拠にされない、正しい脅迫文の書き方とか？」

「んな事するかよ……」

「ふふっ。冗談よ」

「ったく……。しかし、季衣は秋蘭について、もう少し物事を学んだ方がいいんじゃないか？」

「えー。ボク、勉強苦手だし……。体を動かしてる方が楽しいから、そっちを勉強するんじゃダメ？」

季衣は苦笑いしながら言う。もっぱら体育会系の季衣は積極的に勉強をしたくはないようだ。

「好きな事を学ぶのは勉強とは言わないわ。知らないと困る事や立場が悪くなる事くらい、学んでおいても損は無くてよ？」

「そうだな。例えば……饅頭を山ほど買った時、どれぐら小遣いが残るかは……計算できた方がいいだろう？」

「うぅぅ……。それは、確かに……」

「おいおい。いくらなんでも悩みすぎだぞ……って、聞いちゃいな

いな。……ところで華琳。その後、都とかでは何事も無いのか？」

「あら、急にそんな事を訊いて、どうしたの？」

「いや、市井は最近は平和だが、ここまで国が腐敗してるとな……何事も無いとは思えんのでな」

「……何進が殺されたそうよ」

零治の問いに、華琳は表情に影を落として答える。

「そうか。やはり権力争いが……？」

「ええ。肉屋のせがれが権勢を振るうのを……面白く思わなかった連中が居たんでしょうね」

「そういう所はやはりどこも変わらんか……。で、今有力なのは誰だ？」

「何でも……董卓とか言うらしいわ」

（……董卓って、あの董卓だようなぁ……？　だが、この世界の董卓ってどんな奴なんだ？　張角はあんな奴だったし……正直想像もつかんな）

「……何を変な顔をしてるのよ？」

「別にしてるつもりは無いが……華琳はその董卓って奴の事は？」

「初めて聞く名よ。桂花や秋蘭達も知らないそうだし、張三姉妹も戦っていた将の中に、そんな名前は聞いた事が無いって言っていたわ」

「そうか」

「このあいだ都から戻った間諜も、董卓の正体は不明と言っていたし……恐らく、誰かの傀儡なのでしょうけれどね」

「……傀儡政権か。そういった事がまかり通るのが今の都の現実とは言え……反吐が出るな。遅かれ早かれ、いずれはこっちにもとばっちりは来るだろうな」

「ええ、間違いなくね。零治もその時のために、しっかりと心構えはしておきなさいね」

「分かってる。そのための軍備強化なんだろ？」

「そういう事」

「出来た！　華琳様、兄ちゃん！　ボク、ちょっと手紙を出しに行ってくるよ！　あっちに行く隊商、昼過ぎに出ちゃうって言ってたし！」

「ええ、行ってらっしゃい」

「気を付けてな」

「うん！」

それまで一人黙々と手紙を書き続けてた季衣は出来上がった手紙を片手に、バタバタと賑やかな足音を立てながら走り去って行った。

（この様子じゃ、もうじき戦いが始まるとは思えんが……嵐の前の静けさというやつか……）

……

……

…

それから数日後の昼下がり、街中にて。

「……」

「んー、本日も異常は無し、ですね」

「ああ」

零治と瑠利亜はいつものように街の巡回をしていた。

「……」

「……そんな難しい顔をしてどうしたんです？」

「ん？　ああ、董卓の事を考えててな」

「ああ……」

「お前はどう思う？」

「ま、遅かれ早かれ、いずれ反董卓連合軍が結成されるのは間違いないでしょうね」

「だが、史実だと連合の董卓討伐は失敗に終わったんだろう？」

「ええ。それどころか、連合自体も内部分裂が原因で自然と解散しちゃいましたからね」

「……」

「まあ、こっちじゃそうなるとは限らないでしょう？　私達の世界の歴史の記録があまり当てにならない事は黄巾党の件で証明されたじゃないですか」

「そうだな」

「あのぉ……すいません」

二人が会話をしてる時、黒髪のおカッパ頭の女性が話しかけてきた。

「はい、何でしょう？」

「すみません。ちょっと教えてほしい事があるんですけどぉ……」

「どうした？　道に迷ったのか？　それとも盗難か？」

「えっと、お城……」

「の前に、美味しい料理食べさせてくれる所、教えてくれよ！」

黒髪の女性がそう言いかけた時、連れの緑がかったボサついた頭髪のボーイッシュな女性がそう言いながら会話に割り込んでくる。

「ちょっ！　文ちゃぁん！」

「いいじゃんか。あんなバカでかいもん、別に逃げやしないんだし。それより斗詩ぃ、あたい、お腹空いたよー！　お腹空いた、お腹空いたー！」

「うー。まったくもぅ、しょうがないなぁ……」

「で、結局どこに案内すればいいんだ？」

「なら、何か美味しい物を食べさせてくれる……」

「料理屋がたくさん並んでる所、どこ！」

「あー、料理街ですね。向こうに屋台通りが有るので……そこでい

いですか？」

「おお！　姉ちゃん、気が利いてるじゃんか！」

「では、こちらへどうぞ」

零治達は二人の女性を屋台通りに案内するため、そちらに足を進めだした。

……

……

…

「おおおーっ！　斗詩、見ろよ！　すげー！　屋台がたくさんある！」

文ちゃんと呼ばれてる女性は目の前に並ぶ屋台通りを見て、眼をキラキラと輝かせながら興奮する。

「そりゃ、屋台通りって言うくらいだし……」

「じゃ、オレ達はこの辺で……」

「何だよ二人とも、アンタ達も食べていきなよー。どうせ昼飯、まだなんだろ？」

「え？　まあ、確かに昼時ではありますが」

「ちょっと、文ちゃん。悪いよ」

「気にすんなって。旅費なら麗羽様からたっぷり貰ってるんだし！」

「まあ、そりゃそうだけど……」

「それより何か？　あたいの奢りが、食べられないって言うつもりかい？」

「いや、そういうわけでは……」

「なら決まり！　兄ちゃん、姉ちゃん、どっかオススメの店、教えてくれよ！」

「オススメの店ねぇ……瑠利亜、知ってるか？」

「いや、私はそこまで詳しくは……。うーん、こんな時、季衣が居てくれればいいんですが……」

「あ、兄ちゃーん！　姉ちゃーん！」

そこへ絶妙なタイミングで季衣が走りながら零治達の所にやって来る。

「お、季衣、丁度いい所に来てくれた」

「にゃ？」

「季衣、貴方この辺りの店には詳しいですか？」

「この辺り？　任せてよー！」

「ん？　このちびっ子、詳しいのか？」

「ちょっと文ちゃん、失礼だよぅ……」

「……兄ちゃん。誰、このぼさぼさ」

季衣はちびっ子呼ばわりされたせいでか、むっとした顔で言う。

「……ぼさぼさ……」

「季衣、初対面の人にそんな事言ったらダメですよ。失礼じゃないですか」

「うー」

「文ちゃんも落ち着いてってば」

「むぅぅ……」

季衣と文ちゃんと呼ばれてる女性は唸り声を上げながら睨み合う。

「あー、彼女はこの辺の料理屋には非常に詳しいから、良い店を教えてくれるはずだぞ」

「兄ちゃん。凄く棒読みだよ」

「へぇぇ……。良かったね、文ちゃん」

「……ふぅん。こんなちびっ子が詳しいのかねぇ」

「この街に来たばかりのぼさぼさよりは、詳しいと思うけどねー」

「なんだとぅ……！」

「なんだよぅ……！」

「ああもう、二人とも喧嘩はしないで……」

「ふー……」

「むー……」

季衣と文ちゃんは、今にも取っ組み合いをしかねない勢いで、鼻息を荒くしながら睨み合う。

「はぁ……。とにかくその店に行こうぜ。季衣、案内してくれ」

「いいよ！　そっちのぼさぼさに、絶対美味しいって言わせてやるんだから！」

「へっ。あたいの舌は厳しいぜ？　ちびっ子程度の選んだ店で、そうそう旨いなんて言わないっての」

「はぁ……どうしてこうなったんだ……」

零治は顔を右手で覆い、俯きながら季衣の案内に続く。そして、店に到着して食事を始めるのだが。

「旨いっ！」

（……舌は厳しいんじゃなかったのかよ）

「うお……こんな旨いの食べた事無いぜ！　斗詩も食ってみろ！　びっくりするほど旨いから！」

「もう食べてるよぅ……」

「へぇぇ……お姉ちゃん、いい食べっぷりだねぇ」

「そういうお前もなかなかじゃん。見直したぜ！」

「……おい。人の皿に手を着けようとするな」

零治は、季衣と文ちゃんが自分の料理の皿に手を出そうとしたので、

それを自分の箸で阻む。

「あ、ばれた？」

「何だよ兄ちゃん。食わないんなら別にいいだろぉ？」

「誰も食わないとは言ってない」

「ちぇー、ケチだなぁ……」

「とか言いながら、今度は私の皿に箸を着けようとしないでください」

「むぅぅ……こっちもダメか……」

「そんなに食い足りないんなら追加を頼めばいいだろう。金は持ってるんだろ？」

「そうだよ、文ちゃん……って、私の分まで取ろうとしないでよぅ！」

「ああもう、分かったよ。お姉さん、おかわりー！」

「ボクもおかわりー！」

「はいはい！　すぐ持ってきまーす！」

季衣と同年代ぐらいの緑色の髪をした給仕の少女が慌ただしく動き

ながら言う。

「……まるで季衣が二人居るみたいだぜ」

「……私も、文ちゃんが二人居るみたいに見えます」

「それにしても、これ旨いなぁ。南皮でもこんな旨い店、なかなか無いぜ？」

「うーん。なんかこの味、どこかで食べた気がするんだよなぁ……こんな美味しいお店の味、ボクが忘れるはずないんだけど……」

「え？　季衣、この店は行きつけじゃないんですか？」

「違うよ。秋蘭様が美味しいって教えてくれたから初めて食べに来てみたの」

（……なんというチャレンジ精神だ）

「……何だお前。まさか、そんな店でこのあたいと勝負しようと思ったのか？」

（おいおい。食事の場で喧嘩は勘弁してくれよ……？）

零治は二人が喧嘩を始めるのではないかと内心不安に思ったが、文ちゃんの口から予想外の言葉が出て来た。

「気に入ったっ！　そのイチかバチかの勝負度胸、ちっこいのに大したもんだっ！　あたいの事、猪々子って呼んでいいぜ！」

「おーっ！　なら、ボクの事も季衣って呼んでいいよ！　いっちー！」

「はっ？　……いっちー？」

瑠利亜が首を傾げる。

「いっちーか！　いいなぁ、気に入った！　今日はいい日だ！　すっげーいい日だっ！」

「なあ、あれは……真名か？」

「……はい。真名です」

斗詩は苦笑交じりの呆れ顔で答える。

「真名ってそんな軽々しく呼ばせていいモノでしたっけ？」

「軽くなんかないっ！　あたいが、いっちーの事を認めた……って、あれ？」

「二人ともいっちーじゃ呼びにくいねぇ。ならボクは、きょっちーでいいよ」

「……許緒だからきょっちーかよ」

「……直球過ぎでしょう」

「おお、きょっちー！」

「いっちー！」

出会った当初の険悪な仲が嘘のように、二人はすっかり意気投合してる様子。そこへ、先程の給仕の少女が追加の料理を零治達の居るテーブルに運んでくる。

「はい大皿、これとこれとこれ……追加ですー！」

「ご飯おかわり！」

「こっちもおかわり！」

「は、はぁいっ！」

「……忙しそうですね、あの子」

「そりゃこんなのが二人も居たらな……。で、君らはこの街に何をしにきたんだ？　さっき城と言いかけたから、城に用があるんだろうが……」

「そうなんです。ええっと、ですね……」

と、そこへ。

「失礼する」

「ん？　おお、華琳に秋蘭」

「あら。零治達も来ていたの。……そちらは？」

「旨い料理屋を案内してくれって頼まれたんで案内したら、なぜかこんな事にな……」

「お二人にはお世話になっていますー」

斗詩はぺこりと、丁寧に華琳にお辞儀をする。

「ふぅん……若い女の子には優しいのね、零治」

「いや、仕事でやってるだけで……」

「……」

零治はそう言うのだが、華琳は無言で意味深な視線を向け続ける。

「……」

「……」

斗詩と猪々子はその視線から何かを感じ取ったのか、表情を強張らせながら無言で零治を見る。

「二人とも、誤解だからな。……瑠利亜、お前からも言ってくれよ」

「……」

「黙るなよ」

「あ、いらっしゃいませ！　曹操様、夏侯淵様、今日もいつものでよろしいですか？」

「っ！」

「……？」

華琳達の名を聞いて、斗詩の顔色が変わるが猪々子は何の事か分かっていない様子だ。

「ええ。お願いするわ」

「私も同じもので」

「はいっ。すぐお持ちしますねー！」

給仕の少女は注文を受け、大急ぎで裏の厨房に駆け込んでいく。

「おや？　二人はよくこの店に来るんですか？」

「ええ。まだ若いのに、大した腕の料理人よ。お抱えで欲しいくらいなのだけれど……」

「ふーん……」

零治は頬杖をつきながら厨房の方を見つめる。

「あら。対抗意識でもあるのかしら？」

「んなもん無ぇよ。オレの料理は、あくまで趣味の域なんでな」

「やれやれ。つまらない男ね……」

「ほっとけ……。で、お抱えの話はどうした？　断られたのか？」

「ええ。親友に呼ばれてこの街に来たのだけれど、結局合流出来なかったらしいのよ。それで、手掛かりが見つかるまでここで働いてるんですって」

「やれやれ。では、オレ達が一肌脱いでやるかね」

「ええ。人捜しも私達の仕事ですからね」

「ふふ。分かってるじゃない」

「はいっ。お待たせしましたー！」

しばらくして、給仕の少女が華琳と秋蘭の席に二人分の料理を運んでくる。

「失礼、お嬢さん」

「はい？　ご注文ですか？」

「彼らが貴方の親友を捜してくれるそうよ。良かったら、特徴を言ってみてはどうかしら」

「本当ですか？」

「そういうのがオレ達の仕事だからな。その子も料理人か？」

「いえ、食べる方は大好きなんですけど……料理はさっぱりなんです。ただ、私を呼んでくれたっていう事は、料理屋で働いてるんじゃないかな……と」

「手紙に仕事の内容とかは書いてなかったんですか？」

「住み込みのいい仕事が見つかったから、来いとだけしか……ただ、私が呼ばれるくらいですから、彼女も食堂の給仕か、力仕事の裏方をしているのかと。力には自信のある子なので」

（……そんな内容で呼ぶ方も問題だが、来る方もどうかと思うぞ）

「ふーむ。食べるのが大好きで、力持ちの子、ですか……」

「ん？　なんか身近にそんな奴が居た気がするんだが……気のせいか……？」

「気のせいでしょう？　……しかし、それだけじゃ情報が少ないですねぇ。その子、真名じゃない方の名は何て言うんですか？」

「ええっと、真名じゃない名前なら、許緒……」

給仕の口から出て来たのは予想外の名前だった。

零治、瑠利亜、華琳、秋蘭の間に奇妙な沈黙が広がる。

「……にゃ？」

「あーーーーーっ！」

給仕の少女が季衣を指差しながら驚きの声を上げる。

「あー。流琉ー♪　どうしてたの？　遅いよぅ」

「遅いよじゃないわよーっ！　あんな手紙をよこして私を呼んだと思ったら、何でこんな所に居るのよーーーっ！」

「ずーっと待ってたんだよ。城に来いって書いてあったでしょー！」

「季衣がお城に勤めてるなんて、冗談としか思わないわよ！　どこかの大きな建物をお城と思ってるんだと思って……もぅぅっ！」

（何気に酷い事言ってるな。コイツ本当に親友か？）

二人は店内でギャーギャー言い合いながら派手に暴れ始める。それこそ店を破壊しかねないような勢いで。

「季衣のバカーーっ！」

「流琉に言われたくないよぅっ！」

「零治、瑠利亜、止められそう？」

「はぁ……オレ達は落ち着いて食事も出来ないのかよ……」

「ぼやかないでください。このままじゃ食事が出来ないどころか、店が破壊されかねませんよ？」

「へいへい。じゃ、季衣の方は頼むな」

「はい」

零治と瑠利亜は落ち着いた足取りで暴れる二人に歩み寄り。

「って言うか、来たんなら来たって連絡頂戴ってばー！」

「連絡先書いてから言いなさいよぅっ！」

「連絡先なんて手紙をくれた人に聞けば……ひゃぅっ！」

「そんなの先に確認できるわけ……ひゃふっ！」

零治は流琉を、瑠利亜は季衣を猫の子でも掴み上げるようにあっさりと抱き上げ、二人を引き離し仲裁に入る。

「はーいどうどう。二人とも少し落ち着けよ」

「そうですよ。店内で暴れて周りの人に迷惑を掛けちゃいけませんよ？」

「うみゅぅ……」

「うぅ……」

季衣と流琉は申し訳なさそうな顔で縮こまる。

「……へぇ」

「おおっ！　二人ともやるねーっ！」

それを見た斗詩と猪々子は感心したように声を漏らした後、華琳に向き直り。

「お初にお目にかかります、曹孟徳殿。私は顔良と申します」

「あたいは文醜！　我が主、袁本初より言伝を預かり、南皮の地よりやって参りました」

「……こんな場面で恐縮ではありますが、ご面会いただけますでしょうか？」

「……あまり聞きたくない名を聞いたわね。まあいいわ、城に戻りましょうか」

……

……

…

華琳達は城に戻り、現在、玉座の間にて顔良、文醜と面会をしている。

「袁紹に袁術、公孫賛、西方の馬騰まで……よくもまあ、有名どころの名前を並べたものね」

華琳は顔良から手渡された、手紙の文面に眼を通し、感心したように呟く。

「董卓の暴政に、都の民は嘆き、恨みの声は天高くまで届いてると聞いております。先日も、董卓の命で官の大粛清があったとか……」

「それをなげいた我が主は、よをただすため、董卓をたおすちからをもったえいゆうのかたがたに……」

「手本になるぐらいの見事な棒読みだぜ……」

零治は文醜に呆れた視線を向けながら呟く。

「持って回った言い方は止しなさい。あの麗羽の事だから……どうせ、董卓が権力の中枢を握った事への腹いせなのでしょう」

「う……っ」

顔良が小さく呻く。つまりは図星という訳だ。

「その大粛清も、都で悪い政事をしていた官を粛清しただけと聞いてるわよ？」

（えっ！？　あの……董卓がですかっ！？）

（話を聞く限り……史実の董卓とは完全に別人だな）

「統制の取れていない文官がやりたい放題にしている事を、董卓のせいにしているだけではなくて？」

「……よく知ってますねー」

「あまり知りたくないけれどね。どう思う、桂花」

「は。顔良殿、先程挙げた諸侯の中で、既に参加が決まっている方々は？」

「先程挙げた皆様は既に。今も、流れを見ていた小勢力や、袁家に縁のある諸侯達を中心に、続々と参戦の表明を受けております」

「おい。その中に、孫策という奴は居るか？」

「孫策……ですか？　文ちゃん、知ってる？」

「んー。袁術様の所の怖い姉ちゃんかな……？」

「おお、それだ！」

「その方なら、恐らく袁術様と一緒に参戦されるのではないかと」

「華琳様！」

「春蘭、私情は控えなさい。個人的な借りを返すために参加するなど、愚の骨頂よ」

「うぐ……」

「桂花。私はどうすればいい？」

「ここは参加されるのが最上かと……」

「何だとぅ！　貴様、私の意見は散々こき下ろしておいて、結局は賛成なのではないか！」

「……当たり前でしょう。華琳様、これだけの英傑が一挙に揃う機会など、この先あるとは思えません。ここで大きな手柄を立てれば、華琳様の名は諸侯の間に一挙に広まります」

「そうね。顔良、文醜。麗羽に伝えなさい。曹操はその同盟に参加する、と」

「はっ！」

「ありがとうございます！　これであたい達、麗羽様にお仕置きされないで済みます！」

（こっちもお仕置きか……。この世界の君主様は随分とお仕置きが好きなんだな……）

……

……

…

「……この辺だよな？」

顔良達との面会を終えて、華琳、零治、瑠利亜、奈々瑠、臥々瑠の四人は近場の森の中を進んでいる。すると、しだいに進む先から金属の塊がぶつかり合うような轟音が響いてくる。

「はぁ……はぁ……はぁ、はぁ……」

「ふぅ……ふっ…ふぅ……ふぅ……」

轟音が響いてくる場所では、季衣と流琉が武器を手にした状態で、肩で激しく息をしながら睨み合っていた。
そこから少し離れた位置では、真桜が二人の闘いぶりを見守っている。

「どう？　調子は」

「あ、華琳様。見ての通りですわー」

「やるんなら徹底的にやれ、か……。ホントに全力でやってたのか、あの二人」

「ウチ、何度死ぬ思うたか、教えたろか？」

「……少なくともオレよりは少ないだろう？」

「え……？　それはどういう……」

「何だ？　聞きたいのか？」

「……遠慮しとくわ」

零治達がそんな会話をしてる間も、二人の激突は続く。

「……流琉、お腹空いた」

「……作ってあげるから、降参しなさい」

「……やだ。流琉をブッ飛ばして、作らせるんだから！」

「言ったわね！　なら、季衣を泣かして、ごめんなさいって言わせてやるんだから！」

「ちょぉりゃあああーーー！！」

「どぉりゃぁぁーーー！！」

再び、季衣の巨大鉄球の付いたけん玉と流琉の持つ巨大な金属のヨ

ーヨーが火花を散らす。

「……凄いですね」

「うん……。季衣もそうだけど、あっちの子も凄いよね」

「ええ。流石は季衣さんの親友ね……」

「そういうお前らも似たようなもんだろうが。特に……臥々瑠、お前はな……」

零治は過去に、臥々瑠に訓練と言う名目で散々な目に遭わされた経験があったので、臥々瑠に恨めし気な視線を向けながら言う。

「うぅ……そんな事ないもん……」

「どうだか」

「零治、あまり臥々瑠を苛めては……。あ、木が吹っ飛びましたよ」

「さっきから、ずーっとあのノリやで」

「あれでいいのよ。下手にしこりが残るよりは、余程マシだわ」

「まあ、互いに加減はしてるようだが……見ていて危なっかしいぜ」

「で、隊長。その面会とやらはどうなったん？」

「ああ、これから全員で都に遠征する事になった。もう凪と沙和には準備をさせてる」

「都かぁ……」

「恐らくこの戦いで、都の権力は完全に失われる。大陸も、もっと混乱する事になるはずよ……」

「……黄巾の時よりもですか？」

「アレが凪の海だと思えるくらいにね」

「なんやて……！？　じゃあなんで華琳様は、そんな戦いに行くん？　守るための力を溜めた方が、ええんとちゃうん？」

「変化の波にむざむざ呑まれるよりも、波の頂に居たいと思ったからよ」

「……ごめん。ウチ、海って見た事ないねん」

「混乱が起こるのを外から見るより、内側からしっかり見届け、確実に収める、て所ですかな？」

「まあ、そんな所ね」

「……ああ、そういう言い方やったら、なんか分かる気がするわ」

「ちょぉりゃあああーーー！！」

「どおりゃぁぁぁーーー！！」

そこに、森に今まで聞いた事のない快音が響いた。

「……きゅう」

「……うみゅぅ」

二人は同時に倒れる。

「相打ちか……」

「やれやれ。向こうも終わったようね……」

「……ごめんね、流琉。ボク、流琉と早く一緒に戦いたかったから……手紙、きちんと書けなかったんだよね」

「……いいよ。私も季衣と早く働きたかったから……州牧様の所で将軍をやってたのは、びっくりしたけどね……」

「じゃあ、ご飯、作ってくれる？」

「うん。一緒に食べよ」

「ようやく決着がついたようね。二人とも」

「あ、華琳様……」

「曹操様……」

「立ちなさい、典韋」

「はい」

流琉はその場から立ち上がり、佇まいを正し、華琳に向き直る。

「もう一度誘わせてもらうわ。季衣と共に、私に力を貸してくれるかしら？　料理人ではなく、一人の武人……武将として」

「分かりました。季衣にも会えたし……季衣がこんなに元気に働いてる所なら、私も頑張れます」

「ならば私を華琳と呼ぶ事を許しましょう。季衣、この間の約束……確かに果たしたわよ？」

「はい、ありがとうございますっ！」

「約束……？」

「季衣の願いを一つ叶えると約束していたのよ」

「だからボク……流琉を呼んでもいいかってお願いしたんだよ」

「もっとも、貴方ほどの人物と知っていれば、そんなものが無くて

も招いていたでしょうけれどね」

「ありがとうございます……華琳様」

「季衣。流琉の件は貴方に任せるわ。流琉も、分からない事は季衣に聞くようにね」

「はいっ！」

「分かりましたっ！」

華琳はこうして新たの将を迎え入れ、数日後、都の遠征に赴くのだった。

第２３話　新たな動乱の兆し（後書き）

零治「……」

瑠利亜「……」

奈々瑠「……」

臥々瑠「……」

作者「……何か言ってよ」

零治「何を言えと？」

瑠利亜「ええ。今回は特に変わったところは無いですし……」

奈々瑠「内容も原作に沿ってますし……」

臥々瑠「特に言う事は無いよ」

作者「いや、それでも何か……」

零治「じゃあ……頑張れ？」

作者「なぜ疑問形なんだよ……」

第２４話　反董卓連合軍結成（前書き）

２３話と同時進行で書いてたので、割と前に完成していたんですが、細かい修正とかしてたら結局遅くなっちった。

第２４話　反董卓連合軍結成

零治達は現在、連合軍の集合場所を目指し、移動をしている。

「まだ着かねえのかぁ？　もう馬の上で揺られるのはウンザリだぜ……。……フーー……」

「何だらしない事を言ってるの。もう乗馬には慣れたんでしょう？……それから、馬上でたばこを吸うの、いい加減やめなさいよ」

「嫌だ」

「はぁ……」

「兄ちゃん、それって体に悪いんでしょう？　だったら華琳様の言うようにやめようよ」

「そうですよ、兄様」

「……なあ、流琉。この前から気になってたんだが」

「何ですか？」

「なぜに兄様なの？」

「え？　季衣のお兄様なら、私も兄様でいいかなぁ……と」

「そりゃまあ、季衣の兄貴分を名乗ったのは確かだが……」

「……ダメ、ですか？」

「まあ、好きに呼べよ」

「はい！　兄様」

「その理屈だと、私は姉様になる訳ですか？」

「もちろんですよ、姉様」

「まあ、構いませんがね」

「お前はどっちかと言うと、女王様じゃねぇの？　鞭にハイヒールに網タイツをセットにしてさぁ……ハッハッハ！」

「……」

瑠利亜は零治の隣に馬を寄せ、無言で零治の後頭部をどついた。

「ってぇ！？　テメッ何しやが……って、ああっ！　オレのタバコがっ！」

零治は殴られた衝撃で吸ってる途中のタバコを地面に落としてしまう。当然ながら、馬に乗って移動してるので拾いに行く事は出来ないし、それをやると後続者に迷惑をかけてしまうので諦めるほかない。

「……自業自得でしょ」

「ハッ！　冗談の解らねぇ奴だな」

「貴方の場合、冗談に聞こえないんですよ」

「華琳様！　袁紹の陣地が見えました！　他の旗も多く見えます！」

桂花が目の前に展開されている連合軍の陣地を指差しながら言う。

「やっと着いたか。……奈々瑠、臥々瑠。フードで頭を隠せ」

「……兄さん。やっぱり、コレ着るの嫌ですよぉ」

「我慢してください。貴方達のその耳と尻尾は只でさえ目立つんですから」

「う～……暑～い……」

奈々瑠と臥々瑠は、零治達から例の耳と尻尾を隠すように言われてるので、全身を覆い隠すようなフード付の布を身に纏っているが、本人達は不満を漏らしている。

「曹操様！　ようこそいらっしゃいました！」

陣地の出入り口から、顔良が出迎える。

「顔良か。久しいわね。文醜は元気？」

「はい。元気すぎるくらいですよ」

「結構な事だわ。……で、私達はどこに陣を張ればいいのかしら？案内してちょうだい」

「了解です。それから曹操様、麗羽様がすぐに軍議を開くとの事ですので、本陣までおいでいただけますか？」

「分かったわ。凪、真桜、沙和、奈々瑠、臥々瑠。顔良の指示に従って陣を構築しておきなさい。それから桂花は、どこの諸侯が来ているのかを早急に調べておいて」

「御意」

「分かったのー」

「私は麗羽の所に行ってくるわ。春蘭、秋蘭、それと零治と瑠利亜も私に付いてきなさい」

「……オレ達もか？」

「他の将の顔も見ておくといいわ。損は無いはずよ」

「そうですね。分かりました」

零治達は華琳の後に続き、麗羽、つまり袁紹の居る本陣に足を運ぶ。

「おーっほっほっほ！　おーっほっほっほ！」

華琳達が本陣に到着するや否や、金色の派手な鎧を纏った、華琳にも勝るとも劣らない金髪のクルクル頭の女性が、実にありきたりな笑い方の高笑いをする。

「……久しぶりに聞いたわね。その耳障りな笑い声……麗羽」

「華琳さん。よく来てくださいましたわ」

「……」

華琳は心底ウンザリしたような顔で、腐れ縁の袁紹を見据える。

「さーて。これで主要な諸侯は揃ったようですわね。華琳さんがびりっけつですわよ、びりっけつ」

（ちょっ！？　華琳になんつー事をっ！）

「……はいはい」

（……あれ、スルー？　春蘭は？）

零治はさっきの言葉で華琳が切れると想像したのだろう。だが、その反応は予想外のもの。

不思議に思い、零治が春蘭達に視線を向けると。

「……」

「……」

春蘭と秋蘭も黙ったまま。いつもの事だと言わんばかりの反応だった。

（こっちもかい……）

「それでは最初の軍議を始めますわ。知らない顔も多いでしょうから、まずはそちらから名乗っていただけますこと？　ああ、華琳さんはびりっけつですから、一番最後で結構ですわよ。おーっほっほっほ！」

「……なあ、秋蘭。もしかして、アレが……？」

零治が声を潜めながら秋蘭に尋ねる。

「ああ。この集りの主催者の袁紹だ」

「アレが……ですか……？」

瑠利亜も半信半疑の眼で袁紹を見つめながら言う。

「どう見てもただのバカだろ……」

「言うな……。あれでも三公を輩出した名家の出身で、自身も司隷校尉だ。恐らく、ここに揃った一同の中では一番地位が高いはずだぞ」

「……瑠利亜、そうなのか？」

「ええ。華琳は西園八校尉。向こうは司隷校尉。残念ながら袁紹の方が上ですね」

「そこ。何をくっちゃべってますの！」

「むっ……失礼」

「……幽州の公孫賛だ。よろしく頼む」

連合に集まった諸侯たちが順に挨拶を始める。

「平原郡から来た劉備です。こちらは私の軍師の諸葛亮」

「よろしくお願いします」

劉備の脇に控え、大きな帽子をかぶった背の低い少女がぺこりとお辞儀をして挨拶する。

（諸葛……って、あのチビがか？　それに、この時期はまだ三顧の礼は済んでないはずだが……）

「涼州の馬超だ。今日は馬騰の名代としてここに参加する事になった」

次に、茶髪のポニーテールと太い眉毛が特徴の、頭に鉢金を巻いた女性が名乗る。

「あら、馬騰さんはいらっしゃいませんの？」

「最近、西方の五胡の動きが活発でね。袁紹殿にはくれぐれもよろしくと言付かってるよ」

「あらあら。あちらの野蛮な連中を相手にしていてはなかなか落ち着く暇がありませんわねぇ」

「……ああ。すまないが、よろしく頼む」

「袁術じゃ。河南を治めておる。まあ、皆知っておろうがの！　ほっほっほ！」

煌びやかな衣装を身に纏った、この場にはあまりにも不釣り合いな少女が袁紹に似たような高飛車な態度で挨拶をする。

「ん、瑠利亜、確か袁術って……」

「ええ。袁紹の従弟……あ、いえ、この場合は従妹と言うべきですね」

「流石に血縁者だけあってか、どことなく雰囲気とかが似てるな」

「私は美羽様の補佐をさせていただいています、張勲と申しますー。こちらは客将の孫策さん」

孫策は黙って席を立ち、一同に軽くお辞儀をして、そのまま席に着いた。

「……むっ」

「彼女が孫策か……」

「次、びりっけつの華琳さん、お願いしますわ」

「……典軍校尉の曹操よ。こちらは我が軍の夏侯惇、夏侯淵……そ

れから、音無と神威」

零治達の名の聞き、他の諸侯達の間にどよめきが走る。

「ん？　どうしました？」

「あーら。その貧相なお二人が、天からの遣いとかいう輩ですの？
どこの下男と下女かと思いましたわ」

「華琳。これはどういう事だ……？」

「適当に噂を流しておいたのよ。まさか、皆が知っているとは思わなかったけれど」

「勘弁してくださいよ。只でさえ私達は目立つ存在なのに……」

と、その時。

「ほう。では、私達もその天の遣いと名乗った方がいいのか？」

「……誰？」

「零治、この声は……っ！」

「ああ。どうやら感動の再会のようだぞ」

零治達が居る軍議の場に、全身黒ずくめの服装をした三人組の男…
…黒狼、金狼、銀狼が現れる。

「……」

「やあ、白狼。久しぶりだね」

「クックック。やっと会えたなぁ、影狼」

「黒狼……っ！」

「……」

「久しぶりだな、影狼……」

黒狼達の出現により、辺りに緊迫した空気が張り詰める。零治に至っては今にも黒狼に斬りかかりそうなほどだ。

「華琳様、もしやこやつらが……」

秋蘭は黒狼達に視線をやりつつ、華琳に顔を近づけて耳打ちをする。

「ええ。服装も零治達と同じだし、恐らく間違いないわね」

「しかし、何やら音無達の事を、影狼だの白狼だのと呼んでいますが、一体何の事でしょうか？」

「それは本人達に後で聞けば良いだけよ。それよりも。……貴方達、一体何者？」

華琳は凛とした態度で黒狼達に問いかける。

「ん？　ああ、軍議の邪魔をして失礼したな。私の名は黒狼。そこに居る、劉備達の下に降り立った天の御遣いだ」

「へえ～、劉備の下に……ね……」

華琳が劉備に興味深げな視線を向ける。

「え？　あの、何か？」

「いえ、何でもないわ」

「貴様……っ！　ぬけぬけとそんな事を……っ！」

零治の視線は黒狼の一点に集中し、険しい表情で睨みつけながら叢雲の鞘を握りしめ、禍々しい殺気を放つ。

「お、おい。瑠利亜……っ！」

零治のあまりの豹変ぶりに、春蘭は軽くたじろぎながら瑠利亜に尋ねる。

「何です？」

「音無の奴、一体どうしたのだ？　あの三人が現れてから様子が変だぞ」

「うむ。さっきから今まで感じた事の無いほどの殺気を放ってるぞ。正直、味方である我らも恐怖を覚えるほどだ……。お前達とあの三人はどういった関係なんだ？」

「……もう分かってるでしょうが、奴の名は黒狼。私達の元上官、そして、零治に戦い……つまり人殺しの術を教えた人物です」

「という事は、あの男は音無の師に当たる人物なのか？」

「まあ、そうなりますかね……」

「断じてそんな関係ではない！　少なくとも今はなっ！！」

会話が聞こえていたのか、零治は脇目もふらずに怒声を上げ、その場に居る諸侯全員が肩をビクッと震わせる。

「落ち着け、影狼。そんなに大声を出すな。皆が驚いてるぞ？」

「黙れっ！　オレに指図するな！」

「やれやれ。血気盛んな事だな」

「……華琳、悪いがオレは陣に戻らせてもらう。これ以上ここに居ると……この場に血の雨を降らせちまいそうだからな」

「ええ、分かったわ。……零治、後で話を聞かせてもらうわよ」

「ああ……」

零治は苛立った表情でその場を後にする。

「華琳、すみませんが私も……。今の彼を一人で陣に戻らせるのは色々とマズイ気がするので……」

「ええ。そうしてちょうだい」

「あれぇ？　行っちゃうのかい、白狼。もっと僕と再会の喜びを分かち合わないかい？」

「……私に話しかけないでもらいましょうか、金狼……。では、失礼」

瑠利亜も零治の後を追うようにその場から立ち去る。

「……姉者」

「ああ。一瞬だが……瑠利亜も音無と同等の殺気を放ったな」

「余程の深い因縁があるのだろうな……」

「では私達も失礼するか。旧友の顔も見た事だしな。……貴様ら、行くぞ」

「けっ！　影狼の野郎、オレを無視しやがって……っ！」

「そんなのいつもの事だろ？」

黒狼も金狼と銀狼を連れ立って軍議の場を立ち去り、その場に奇妙な沈黙が残る。

「……ウチの者が失礼したわね。麗羽、続きを」

「えっ？　あ、ああ、そうですわね。……では、最後はこのわたくし……」

「それは皆知っているのだから、いいのではなくて？」

「だな。有名人だし」

華琳の言葉に公孫賛も同意する。

「そ、それはそうですけれど……っ！」

「軍議を円滑に進めるための名乗りだろう？　なら、必要ないんじゃないか？」

馬超もこう言っている。袁紹は不服な顔をしながらも、しぶしぶ名乗るのを諦める。

「うぅ……三日三晩考えた名乗りですのに……。まあ、仕方ありませんわね。有名人なのですもの、わたくしの事は皆、とっくに熟知しているという事で」

零治がこの場に居たら間違いなくこう言っていただろう。コイツはバカだ、と。

「では、軍議を始めさせていただきますわ。僭越ながら、進行はこのわたくし！　このわ、た、く、し、袁本初が行わせていただきますわ！　おーっほっほっほ！」

「早く始めなさい」

華琳が苛立ちを交えて先を促す。

「では、最初の議題ですが……このわ」

「現状と目的の確認だろ？」

「え……ええ、そうですわ。このわたくしが集めた、反董卓連合軍の目的ですが……」

「都で横暴を働いているという董卓の討伐、でいいのよね。ただ、董卓という人物を私はよく知らないのだけれど、誰か知っている人間は居るのかしら？」

「妾も知らんのじゃ。どこぞの新参者か小領主と思うておったが、聞いた覚えのある者はおるか？」

「私も同じだ。本初は？」

「わ……っ、わたくし！？　そんなどこの身分とも知らない者を、わたくしがいちいち知っているとお思いですの？」

「知らないんだな。なら、そいつの事は逐次情報を集めるって事で。異議のある奴は？」

公孫賛が周りの諸侯を達を見回しながら聞くが、誰も何も言わない。

「……特に無いようね」

「つっ、次は……」

「都までどうやって行くかじゃな」

「……そ、そうですわ。この大軍団をわたくしがどうやって率いるかですが……」

「後でクジか何かで順番を決めようぜ。その順で行軍すればいい。どうせ戦闘になれば配置は変えるんだから、問題ないだろ？」

「良いのではなくて？　経路は？」

「け……経……」

「七乃。どういう道程になるのじゃ。皆に説明してたもれ」

「はい。この大人数ですから、街道に沿った移動になりますねー。間の大きな関所はシ水関と虎牢関になりますから、この辺り、もしくはその前後の広い土地で戦闘が起こると予想されまーす」

「そ、そうですわ。きっと、その辺りで戦闘になるはずですわ！それで……」

「関所の将は？」

「シ水関は華雄と張遼、虎牢関は呂布と報告が入っていますが、この連合が出来る前の調査ですから、間者を放って改めて調べる必要があるかと思いますけどー……」

「あのね、白蓮ちゃん。調査くらいなら私達でやるよ？　朱里ちゃ

んが、まずはこの辺りの小さな任務を引き受けて、様子を見た方がいいって言ってるし……」

「そうか？　じゃあシ水関の偵察は私の所でやろう。機動力の高い兵も居るしな」

「なら、シ水関の調査は公孫賛達でいいわね。さしあたり必要なものは、そんなものかしら」

「ま、まだ、大事な議題が残っていますわ！」

「何だ？」

「シ水関を誰が攻めるか……かの？」

「それは調査のついでに白蓮さんの手勢で攻め落とせばいいんですわ」

「おいおい、そんな無茶な……！」

「あら。白馬長史の白馬軍団は、砦の一つも落とせない仰いますの？　所詮、蛮族を相手に野原を駆け回るの精一杯ですのねぇ……。おーっほっほっほ！」

袁紹に煽られ、公孫賛は悔しげな表情で袁紹を睨み付ける。その姿を見かねた劉備は必死に公孫賛をなだめる。

「白蓮ちゃん、落ち着いて……」

「……むー！　分かった！　やればいいんだろ、やれば！」

一見軍議は何の問題もなく進んでるように見えるが、一同が袁紹に余計な事を喋らせたくないからか、協調性が無くグダグダに進行してるようにしか見えない。

「なら決定ですわね。白蓮さん、せいぜい頑張ってちょうだいな。というか、そんな事はどうでもいいんですわ」

「……で、何」

「この連合を誰が取りまとめ、仕切るかですわ！」

袁紹に他の諸侯から呆れた視線が向けられる。その視線が、それこそどうでもいい事だと、語ってるのは火を見るよりも明らかである。

「はいはい。麗羽でいいわよ」

「もう何でもいいよ。他にやりたい奴は居るか？」

「なら、妾が……っ！」

袁術が名乗りを上げるが、周りからは完全に無視される。

「なら決まりね。麗羽、貴方がやれば？」

「そ、そうですか！　皆がそこまで言うのであれば、不肖この袁本初が務めさせていただきますわ！　おーっほっほっほ！」

「……なら、大事な議題とやらも終わったし、これで解散という事でいいわね」

「そうですわね。なら、かい……」

「解散！」

袁紹の代わりに春蘭が解散の号令をかける。最後の最後まで袁紹は蚊帳の外の扱いであった。

「孫策！」

諸侯たちが解散する前に、春蘭は孫策を呼び止める。

「あら……久しぶりね。どうしたの？」

「うむ。我が主が挨拶したいと……」

「……陳留の曹操が？」

「私の名、知ってくれているのね。光栄だわ」

「黄巾の首謀者を討った曹孟徳の名くらいは、流石に知っているわよ」

「なら、話が早いわ。先日はウチの部下が随分と借りを作ってしまったようね」

「借りねぇ。……盗賊退治も手伝ってもらったし、楽させてもらったから別にいいんだけど」

孫策は苦笑する。本人にはそう言うつもりは無いようだ。

「そうもいかないわ。この借りは折りを見て、必ず返させてもらう。よく覚えておいて」

「……この戦いで？」

「さあ。この戦いか、この先の別の機会か……」

「そ。まあ、期待しないで待っておくわ」

「孫策！　何をしておる！　早よう来やれ！」

「ちっ……うるさいわねぇ……。……それじゃ、袁術が呼んでるから行くわ」

「ええ」

「華琳様……」

「流石は江東の虎の娘ね。春蘭の言った通りの人物だわ。良い眼をしている……。さて、陣に戻るわよ。零治達から話を聞かないと」

華琳達は零治から話を聞くため、自分達の陣へ足を運ぶ。

「あっ！　華琳様っ！」

「ん？　凪、そんなに慌ててどうかしたの？」

「いえ、その……。あの、華琳様、隊長と瑠利亜様……どうかしたんですか？」

「……軍議でちょっと、ね……。ところで、二人はどこに？」

「……あそこの天幕に……」

凪がすぐそばに立てられてる天幕を指差すのだが、なぜか天幕の入り口からもうもうと煙が立ち昇っていた。それこそ、中で焚き火でもしているのではないかと思ってしまうほどの勢いで。

「凪……」

「……はい」

「二人は……中で何をしてるのかしら……？」

「多分……たばこを吸ってるんじゃないかと……」

「……煙の量から察するに、相当吸っているんじゃないのか……？」

「はい。戻ってきてから、ずっとあの調子なんです」

と、その時。

「げほ、げほっ！　いい加減にしてくださいよ！　いくらイライラしてるからって、こんな狭い天幕の中で何本も連続でタバコを吸うなんて！」

煙でむせ返りながら、瑠利亜が天幕から姿を現す。

「うるせぇ！　お前も吸ってただろうが！」

「はぁ……もう……」

「……瑠利亜」

「あ、華琳。……いや、すみません。お見苦しい所を……」

「気にしないで。それより、零治は……中に？」

「ええ。ですが、話をするんなら……中には入らない方が良いかと」

「そうね……。これじゃあ、天幕の中ではまともに話も出来そうに無いわね」

「でしょう？　今呼び出しますね。……零治、華琳が来ましたよ」

「聞こえてる。今出る……」

それからすぐに、零治も天幕から出てくる。

「……」

「……相当苛立ってるみたいね……」

「分かってるんなら聞くな……」

「……零治、あの三人について聞かせてくれるかしら」

「……ここじゃマズイ。人払いを頼む」

「分かったわ。なら、私の天幕に行きましょう。……凪、悪いけど入り口の見張りを頼めるかしら？」

「分かりました」

「春蘭、秋蘭。貴方達も来なさい。構わないわね、零治」

「ああ」

「なら、行きましょう」

一同は華琳の天幕に移動し、凪を入口の前に見張りとして立たせ、華琳達は中で話し合いを始める。

「では零治、聞かせてもらおうかしら。あの三人について」

「ああ。だが、こっちも何を話すべきか分からんのでな、悪いが質疑応答形式で頼む」

「分かったわ。……まずは、彼らとの関係を教えてくれるかしら」

「それは初めて会った時に言っただろ、敵同士だと……」

「それは分かってるわ。どうしてそうなったのかを聞きたいのよ」

「……以前話したよな。オレが元の世界で軍関係の仕事をしていて、そこの特殊部隊に所属していた事は」

「ええ」

「その部隊を立ち上げたのは黒狼だった……」

「そう。つまり、以前までは味方同士だったのよね？」

「ああ。奴は……オレ達の世界で続いている戦争を終わらせると、そう言ってた……」

「……」

「実際そうなるはずだったんですよ。彼のおかげで膠着状態だった戦況は一気にこちら側に傾きましたからね」

「ああ。だが、最後の方法があまりにも極端すぎたんだ……」

「……どういう事？」

「華琳、憶えてるよな？　オレ達の世界にある、巨大都市の事は」

「ええ。ちなみにその事は春蘭と秋蘭にも話してあるわ。……二人とも憶えてるわよね？」

二人は無言で頷く。

「それで、その極端な方法というのは一体何だったの？」

「……その巨大都市の力を使って……世界を滅ぼす事だ」

「なっ！？」

「世界を……！」

「滅ぼすだと……っ！？」

「大まかに言えばこうです。……彼は私達が所属してる軍を裏切り、その都市を占拠したんです。そして、その都市の力を使って一度世界を滅ぼし、もう一度一から再生する。……細かい部分は省いてますが、こういう事なんですよ……」

「音無、あの黒狼という男は本気でそれを実行しようとしてたのか……？」

「奴は任務に失敗して逃げ帰ってきた味方も平然と殺すような男だぞ。世界を滅ぼすぐらい、何とも思っちゃいないさ」

「では、お前達が奴らと敵同士というのは……」

「ああ。黒狼の考えに賛同せず、反旗を翻したからだ」

「そう。……零治」

「ん？」

「話してくれて、ありがとう」

「別に礼を言われるほどの事じゃない」

零治はそっぽを向き、ぶっきらぼうに答える。

「そう。……春蘭、秋蘭、貴方達は何か聞きたい事は無いの？」

華琳にそう言われ、春蘭が零治に質問をする。

「……では、音無」

「何だ？」

「先程、あやつらはお前達の事を影狼だの白狼だのと呼んでいたが、アレは一体何なのだ？」

「ああ、アレは私達の秘匿名ですよ」

「……ひとくめい？」

春蘭は聞いた事のない単語に首を傾げる。

「オレ達が所属してる部隊内の人間にしか判らない暗号名の事だ。元の世界じゃオレ達の経歴は極秘扱いだったからな。こっちの世界と違って、オレ達の世界では名前を人に知られるのはあまり良い事じゃないんでな……」

「つまり……偽名みたいなものか？」

「まあ、厳密に言うと違いますが、分かりやすく言えばそうなりますかね」

「という事は、あの三人の名も……？」

「ああ。本名じゃない。まあ大した問題ではないだろう。あの三人は存在自体が目立つからな」

「そうね」

「音無、私も質問しても構わないか？」

「ああ」

「お前達が持っている武器なのだが……やはりあの三人も？」

「ああ。持っている」

「やはりそうか。では、能力についてはどうなんだ？　知っているのか？」

「ああ」

「そう。なら、聞かせてもらえるかしら」

「ああ。まずは……銀狼の持っている村正から説明するか」

「銀狼？　……あの眼つきが悪く、お前に敵意をむき出しにしていた男の事か？」

「そうだ。……銀狼が持っている村正は、奴が視認してる場所を斬る事が出来るんだ」

「視認してる場所？　一体どういう事だ？」

零治の今の説明だけでは理解できないので、秋蘭は首を傾げる。

「つまりこういう事だ」

零治はその場から立ち上がり、二、三歩後ろに下がり身振り手振りを交えて説明する。

「オレが今居る位置で……例えば春蘭が居る所を見ているとする」

「おう」

「で、この位置から剣を降ると、それに連動して見ている場所に太刀筋が光の筋となって現れて相手を斬り殺す事が出来るのさ」

「なっ！？　そんな事が出来るのか！？」

「ああ」

「零治、それは射程距離はどれぐらいあるの？」

「一概にはなんとも言えんな……。強いて言うなら、視界内に入る場所すべてになるかな……」

「だとしたら、かなり厄介な能力ね……」

「そうですな。位置に関係なく相手を斬れるのですから、確かに厄介ですな」

「そうでもないですよ」

「どうして？」

「先程も言ったように、視認してる場所が斬れるという事は、視界内に入らなければ安全という事ですから」

「それにその能力を使うには一つ条件があってな、眼に特殊な術を発動しないと使えないんだ」

「更に、本来その術は両眼に発動するんですが、銀狼は右眼にしか発動しないんですよ。それにその術自体も眼にかなりの負担がかかるので長時間は使えないんです。彼の場合、両眼に来る負担が右眼に集中してしまってるので尚更ですね」

「無理に使い続けると……どうなるの？」

「視力の低下……最悪の場合、失明する危険もあるな」

「なるほど。……では、金狼という男の武器は？」

「奴の武器は槍なんだが……コイツも凶悪でな……」

「というと？」

「奴の槍は穂先の刃が細くて小さいから、突き刺すのが主な戦法になる」

「ええ」

「だから刺す場所によっては致命傷にはならない」

「そうね」

「だが……穂先から三十もの棘が飛び出したらどうなると思う？」

「棘が……飛び出す……？」

「ああ」

「どういう事だ？」

華琳達は話が理解できず首を傾げる。

「言葉通りですよ。槍の穂先から四方八方に棘が飛び出すんです。……例えば、槍を相手の足に突き刺して、そこから棘が飛び出したら……」

「……足は一瞬で内部からズタズタにされてしまうな」

「更に棘は意図的にいつでの出すことが出来るから、初撃をワザと外して、そこから棘の食らわせる……なんて事も出来る」

「ちなみに能力はもう一つあります」

「何っ!?　まだあるのか!?」

「ええ。まあ、これは使い所が難しいという欠点があるんですが…
…まず、槍に魔力を溜めてですね……」

「うむ」

「その槍を標的に投げつけるんです」

「……それだけか？」

「話は最後まで聞いてください。……で、投げつけた槍は三十もの
鏃に変化して相手に向かって降り注ぐんです」

「ふむ。瑠利亜が以前使ったあの巨大な矢に似ているな」

「まあ、似てはいますが、殺傷能力は彼の槍の方が上ですよ。それ
に私のあの矢は標的が複数いないと使えないんで。彼のは単体だろ
うが複数だろうが関係ありませんから」

「なるほどな。所で、その槍を投げた本人はその間はどうなるんだ
？」

「完全な丸腰状態だな」

「なるほど。確かにそれだと使い所はかなり難しいわね」

「ああ。ちなみに投げた槍は自身の手元で元に戻るんだが、これに
も時間がかかるからな」

「そう。……なら、黒狼は？」

「奴の神器は、同じ神器使いであるオレ達にとっては厄介な能力だな」

「零治達にとって？」

「ああ。奴の神器の能力は、ある種の結界を張る事が出来るんだが……」

「ええ」

「結界の範囲はどれぐらいかは分からんが、その結果以内に入ると……他の神器の能力が一切使用不可になる」

「それは、つまり……」

「ああ。オレ達の神器は使い物ならなくなる。結界に入らなければ問題ないんだが……」

「更に黒狼の神器は、私達の神器よりも身体能力の強化の恩恵が大幅に高いんです。だから単純な力の押し合いでも勝負になるかどうか……」

「……零治」

「何だ？」

「もしも……貴方と、あの黒狼が戦ったら……勝てる可能性は……？」

「……現時点では無いに等しいな。神器の能力だけに限らず、戦闘の技量においても奴の方が上だからな……」

「……」

華琳は衝撃を受け、言葉を失う。

彼女は過去に、零治と春蘭が鍛錬目的で何度も刃を交えていた所を見ていたので、零治の強さは十分に知っていた。事実、春蘭は未だに零治に一度も勝った事が無い。

その零治が敵わないと断言するような相手の存在を知らされる。その時、心に受けた衝撃は相当のものであろう。

「……音無」

「なんだよ？」

「お前……そんな奴を相手に、よく反旗を翻す気になったな……」

「まあ、あの男の考え全てを否定してる訳ではないが、戦争終結のために世界を一度破壊するなんて極端な選択をするほどオレは狂っちゃいない……」

「……とまあ、連中に関する事はこんな所ですかね」

「そうだな。他に何か聞きたいことはあるか？」

「私は特に無いわ」

「私も無いな」

「私もだ」

「そうですか。……しかし、面倒な事になりましたね……」

「ああ。奴らが劉備の下に付いたとなると、劉備軍の動きには常に細心の注意を払っておく必要があるな」

「そうね。この事は桂花にも伝えておきましょう。後は……」

「華琳様、今よろしいでしょうか？」

「ええ。構わないわよ」

凪が一礼して天幕の中に入ってくる。

「失礼します。華琳様、連合軍が移動を始めるそうですので、撤収作業を始めたいのですがよろしいでしょうか？」

「ええ。頼むわ」

「はっ。では、失礼します」

「なら、私達も手伝いに行きますかね」

「ああ」

零治達は作業の手伝いをするため、外に出始める。

「そうだ。三人とも……」

「なに？」

「さっきの話を聞いたから理解してると思うが……間違っても奴らと闘おうなどとは思うなよ……」

「ええ。分かってるわ」

「春蘭、お前もだぞ？」

「……」

零治は釘を刺すように、春蘭に言い聞かせるが彼女は何も言わない。やはり、武人として闘いを放棄するような真似はしたくないのだろう。

「姉者」

「……ああ、分かった」

「それと、華琳……」

「ん？　まだ何か？」

「……軍議の場ではすまなかった。つい頭に血が上ってしまって……」

「ええ、まったくよ。おかげで恥をかいてしまったわ」

華琳は厳しく零治を咎める。

「返す言葉も無い」

「でも……さっきの話を聞いて、あの時の貴方の気持ちは理解したつもりよ。だから特別に許してあげるわ」

「すまん」

「華琳様」

「あら、凪。今度はどうしたの？」

「はっ。劉備軍の者が華琳様に面会を求めているのですが」

「面会？　相手は誰なの？」

「はっ。黒狼と名乗っていましたが……」

その名を聞き、一同の顔に緊張が走る。

「なんだとっ！？」

「隊長？」

「零治、気持ちは分かりますが、ここは落ち着いて」

「……ああ」

「どうなさいますか？　華琳様……」

「……零治、罠の可能性は？」

「恐らく無いだろう」

「なぜそう言い切れるんだ？」

「奴はそんな回りくどい事はしませんよ。私達を本気で潰すつもりなら、正面から向かってくれば済む話ですからね……」

「つまり……あの男にはそれだけの実力が有るという事か……」

「そうだ」

「分かったわ。……凪、その者をこちらに通しなさい」

「はっ」

凪は一礼し、その場を後にする。それからしばらくして。

「華琳様。お連れいたしました」

凪に連れられて、黒狼がやってくる。

「お目通りしていただき感謝する。曹操よ」

「凪。貴方は下がっていいわ。他の者の作業を手伝いなさい」

「はい」

「……」

「フッ。そう睨むな影狼。私はお前達と事を起こすために来たわけではないぞ？」

「そうだろうな。少なくとも……今はな……」

「零治……」

「ああ。話の邪魔をして悪かった」

「それで、私に一体何の用かしら？」

「何、そんな難しい話をしに来たのではない。ただ、シ水関の攻略で提案があってな」

「提案？」

「そうだ。私は一部の諸侯達の下らん権力争いに付き合っていられるほど暇ではない。それは貴公も同じであろう？　曹操……」

「……」

華琳は黙って黒狼の言葉に耳を傾け、黒狼は淡々と話を続ける。

「貴公も気付いているはずだ。この戦いの裏に袁紹が絡んでいる事に……」

「そうね。しかし、それがさっきの話とどう関わってくるというの？」

「この戦いで董卓自身がどうなろうが私の知った事ではないが、袁紹のバカが提案する作戦に付き合うつもりも無い……。あの関の攻略を、公孫賛の軍に任せるには荷が重すぎるのでな。そこでだ、シ水関の攻略は私達が引き受けようと思ってな……」

「貴方も劉備軍の一員なのだから、それだと大して変わらないのでは？」

「いや、攻略に当たるのは正確には劉備軍ではない。……我ら、五色狼だ」

「五色狼……？　零治、一体何の事なの？」

「オレ達が所属していた部隊名の総称だ……」

「なるほど。……それはつまり、シ水関の攻略に、零治と瑠利亜を貸してほしいという事かしら？」

「そうだ」

「……もし断ったら？」

「別にどうもせん。その時は私と金狼、銀狼の三人で事に当たるさ。ただ、攻略時間の短縮のためにその二人を貸してもらいたいだけなのでな。他意は無い……」

「一つ聞いてもいいかしら？」

「何だ？」

「そちらはどの程度の兵力で攻略に当たるのかしら？」

「……なぜ兵を使う必要があるのだ？」

「なんですって？」

「兵など居ても邪魔なだけだ。シ水関の攻略は、文字通り我らだけで行う……」

「それは……仮に零治と瑠利亜を貸した場合、たったの五人で戦うつもり……？」

「そうだが？」

「……」

「はんっ！　貴様どうかしてるんじゃないか？　たったの五人で水関が落とせると本気で……」

「夏侯惇、貴公には聞いていない。話の邪魔をしないでもらおうか……」

それまで黙っていた春蘭が会話に割り込むが、黒狼が凄まじい威圧感を放ち春蘭を黙らせる。

（くっ！　何だ、この威圧感はっ！？）

（普通に話しているだけなのに、どうやったらこれほどの覇気が纏えるのだっ！？）

「……大したものね。口だけで春蘭を黙らせるなんて……」

「さて、なんの事かな？」

「……先程の話だけど、麗羽にはこの事は？」

「ああ、袁紹の事なら心配はいらん。既に私が話をつけてきてる」

「へえ～……一体どうやってあの麗羽を納得させたのかしら？」

「そんな事はどうでもよかろう。して、返答は？」

「……」

「フッ。まあ、そう結論を急ぐ必要もないが、シ水関に着くまでには返答を聞かせてもらいたいな」

「分かったわ」

「話は終わりだ、私は失礼する。……ああ、見送りは不要だぞ」

黒狼は一人、落ち着いた足取りでその場を去って行った。

「ぷはぁっ！」

「ふぅ……」

黒狼が立ち去り、春蘭と秋蘭はようやく息が詰まりそうな空気から解放されたように大きく息を吐く。

「二人とも大丈夫か？」

「ああ……なんとかな……」

秋蘭は青ざめた表情で声を絞り出しながら答える。

「……恐ろしい覇気だった。音無、奴は本当に人間か……？」

「さあな？　それはこっちが知りたいぐらいだ。……しかし、大したものだな、華琳。黒狼のあの威圧感に臆することなく、淡々と話を続けるなんて」

「当然よ。でなければ王は務まらないわ。……でも、内心では私も恐怖を感じていたわ……」

「それでも大したものですよ。それを表に出さなかったんですから」

「出来て当然の事で褒められても嬉しくないわね。……それよりも零治、さっきの話、貴方はどう思う？」

「シ水関の事か？」

「ええ。あの男は本気で兵も使わずにシ水関を落とせると思ってるの……？」

「……奴なら出来るさ」

「断言するのね」

「少なくとも、この場に居る人間で奴の事を一番よく知っているつもりなんでな」

「で、どうするんです？　黒狼の提案を受けるんですか？」

「……零治、瑠利亜。貴方達はどうしたい？　敵同士の人間と共同戦線を張りたいの？」

「個人的には嫌だが……華琳の判断に従うさ。それに仮に共闘するのなら、奴の真意を確かめる事が出来るかもしれないしな……」

「私も同意見ですね」

「分かったわ。とにかく、この事を桂花にも話して、それからどうするか決めましょう」

「ああ」

のちにこの話は連合の諸侯全員に広まり、誰もが思った。そんな事は不可能だ、と。だがこの後、全員が知る事になる。五色狼の実力と、その恐怖を……

第２４話　反董卓連合軍結成（後書き）

作者「……」

零治「お前、あんな事して大丈夫なのか？」

作者「何が？」

瑠利亜「何がって、次の話、かなりの大事になりそうなんですが……」

作者「問題ないね。これは前々から考えていた事だからな」

奈々瑠「そうですか。ならいいんですが……」

作者「何だよ？」

臥々瑠「なんでそんなに不機嫌なの……？」

作者「オレはいつも通りだぞ……」

瑠利亜「いや、どう見ても不機嫌でしょう」

零治「……ああ、ひょっとしてこの前来た感想で言われた事気にしてんのか？」

作者「あれは削除した」

瑠利亜「削除って……」

作者「感想を送って来た人の言ってた事を全否定する訳じゃないが、言い方がバカにされてたようで不愉快だったんでな……」

奈々瑠「まあ……確かに……」

作者「まだ何か？」

臥々瑠「別に何も……」

作者「あっそ。じゃ、続き書くので忙しいんで」

零治「……荒れてるな」

瑠利亜「ですね……」

第２５話　理想を目指す者、否定する者（前書き）

今回の話も前の話と同時進行で書いていたので早く完成しました。
決して作者の執筆速度が早いからではありませんので、勘違いしないようにお願いします。

第２５話　理想を目指す者、否定する者

「華琳様、その話は本当なんですか……？」

華琳から黒狼とのやり取りの話を聞き、桂花は訝しげの表情で華琳に聞く。

「ええ。桂花、貴方はどう思う？」

「正直に申しますと、バカとしか言いようがないですね。シ水関をたったの五人、それも兵も率いずに攻略するなんて……」

「まあ、その気持ちは分かりますが、奴は本気ですからね……」

「だな。で、シ水関の総兵数はどれぐらいなんだ？」

「総兵数は五万で、華雄と張遼の部隊、それぞれの兵数は二万五千ずつね」

「それは確定情報なのか？」

「さっき戻ってきた斥候の情報だから、今のところ最新情報よ」

「ならその情報、後で公孫賛と劉備の所にも送ってやりなさい」

「……よろしいので？」

「公孫賛は小物だけれど、麗羽と違って借りを借りと理解できる輩よ。劉備というのはよく分からないけれど……公孫賛が信用する人物のようだし、問題無いでしょう。あまり意味は無いかもしれないけど、彼女達が黙って黒狼達の戦いを見ているとは思えないし、追撃の手助けぐらいはするのではなくて？」

「承知いたしました」

「軍議中、失礼いたします。華琳様、報告が……」

「何？　また麗羽が無理難題でも言いだしたの？」

華琳は眉をひそめながら訊くが、凪は首を横に振り答える。

「いえ、そうではなく……袁術殿が先行して勝手に軍を動かしたそうです」

「先鋒は誰だ？」

「先鋒は孫の旗。恐らく孫策殿かと……」

「……孫策の考えではないでしょうね」

「功を焦ったか、袁紹に張り合ったか……ともかく、袁術の独走と見るべきでしょう」

「華琳様！　今こそ過日の借りを……！」

「今はまだ返す時ではないわ。それを孫策も望んではいないでしょう。……自制なさい」

「しかし！」

春蘭は今すぐに借りを返したいのか、なお食い下がる。

「孫策を助けるには軍を動かす事になる。そうなれば我々も麗羽から不興を買うし、助けられた孫策も袁術から不興を買う事になる。それこそ借りを返すどころか、貸しの上積みよ」

「……むぅ」

「今は自制なさい。彼女の力が本物ならいずれ十倍……いや、百倍にして返せる時が来るでしょう」

「……承知いたしました」

春蘭はしぶしぶ承知する。

「桂花。この戦の結果も、一緒に公孫賛に送ってやりなさい。共有して損のない情報は遠慮なくね」

「御意」

「それから……零治、瑠利亜」

華琳は申し訳なさそうな顔で二人を見つめる。

「……オレはお前の判断に従うまでだ」

「ええ。あの時そう言いましたよね？」

二人は華琳が何を言わんとしてるかすぐに察し、そう言う。

「二人とも……嫌な思いをさせてしまって、ごめんなさい」

「気にしなくていい」

「そう言ってくれると助かるわ。……桂花」

「はっ」

「劉備軍に居る黒狼に言伝を。……そちらの提案を受け入れると。それから、零治と瑠利亜をそちらに向かわせる事も伝えなさい」

「承知いたしました」

「じゃ、オレ達も行くか？」

「ええ」

「兄さん、姉さん……くれぐれも気を付けて……」

「何かあったらすぐ助けに行くからねっ！」

「ああ」

零治達は二人に背を向けたまま手を軽く振り、劉備軍の下に移動を始める。華琳はその後ろ姿を黙って見つめる。

「……」

「華琳様、本当によろしいのですか？」

「私もあまり気は進まないけど、あの三人の実力を見極めるいい機会でもあるわ」

「それはそうですが……」

「これは決定事項よ。春蘭と秋蘭も連中の戦いぶりはしっかりと眼に焼き付けておきなさい。零治の言っていた事が本当なら、遅かれ早かれ、いずれ連中とは戦う事になるでしょうからね……」

「……はっ」

「御意」

……

……

…

ここは劉備軍の陣営。現在首脳陣が、華琳が提供した情報について話し合いをしている。

「曹操から情報が流れてきた？」

「連中、桃香の所にも行くって言ってたから、どうなのかなと思ってさ……ちょっと来てみたんだけど」

「うん。丁度私達も、その話をしてたんだけど……どう思う？　みんな」

「罠ではないのですか？　この同盟軍、どうにも胡散臭い事が多すぎる……」

長い黒髪が特徴の女性、関羽が訝しげな表情で言う。

「やれやれ……。愛紗は疑心暗鬼が過ぎるのではないか」

関羽とは対照的に、かつて零治と刃を交えた女性、趙雲こと星が涼しげな顔で言う。

「朱里ちゃんはどう思う？」

「罠ではないでしょうね……。曹操さんは野心の塊ですし、敵には容赦しないでしょうが……味方の足を引っ張って、自らの評判を落とすような人でもありません。それに孫策さんがシ水関の攻略に失敗した情報はこちらでも確認してます」

「華雄って、そんなに強いのか？」

「どうも袁術さんの側も一枚岩ではないようで……。孫策さんの隊に、袁術さんからの糧食の補充が無かったそうです」

「……はぁ？」

諸葛亮の話を聞き、公孫賛が呆れた表情でポカンと口を開く。

「お腹が空いたら戦えないのだ！」

「なら虎牢関の情報も正しいと？」

「恐らく、こちらに貸しを作っておきたいのと……こちらが本命だと思いますが、我々の実力を測りたいのだと」

「まあ、桃香達は新参だしな……。どの程度の実力があるのかは、みんな気になると思うぜ」

「そっか……。じゃ、この情報は正しいと思ってよさそうだね～」

「はい。……それから、黒狼さん」

「何だ？」

黒狼は両腕を組み、劉備達に背を向けたまま静かに返事をする。

「先程、曹操さんの使いの者から言伝を預かっています。……黒狼さんの提案を受け入れる、だそうです」

「そうか……」

「あの、黒狼さん……本当に大丈夫なんですか？」

劉備は心配そうに黒狼に声をかける。黒狼は相変わらず背を向けたままである。

「何がだ？」

「何がって、その……黒狼さん達だけで戦うなんて……」

「問題ない」

「でも……」

「曹操も承諾し、袁紹にも話は付けたのだ。今更変更する訳にはいかん……」

「……分かりました。もし危なくなったら、必ず助けに行きますから」

「そのような事態になるなど、あり得んと思うがな」

「桃香様。曹操さんの所から御遣いのお二人が来ましたが、お通ししてもよろしいでしょうか？」

「あ、うん。通してあげて」

「御意です」

諸葛亮はその場を小走りで後にする。

「……」

「どうしたのだ？　愛紗」

「いや、曹操の所に居る御使いが信用できるのかと思ってな」

「どういう事だ？」

「朱里から聞いたのだが、黒狼が軍議の場に顔を出した時に、男の方の御使いが凄まじい剣幕で黒狼に向かって怒鳴り散らしたそうでな……」

「……あの男を相手に怒鳴るとは大したものだな。そやつ、名は何

と言うのだ？」

「名は確か……音無と」

「なっ！？　音無だとっ！？」

星は関羽から憶えのある名を聞かされ、驚きの表情を浮かべる。

「どうした、何か知っているのか？　星」

「ああ。確信があるわけではないが……もしかしたら私の知っている人物かもしれん……」

「そうなのか？」

（音無……。まさか、零治殿なのか？）

「桃香様。お連れしました」

諸葛亮が零治と瑠利亜の二人を連れて、陣に戻ってくる。

（……やはり零治殿であったか。それに瑠利亜殿も）

黒狼はゆっくりと振り返り、二人の下に歩み寄る。

「二人とも、よく来てくれたな」

「……」

零治は黙ったまま苛立った表情でタバコを取り出し火を点け、煙を吹かし始める。

「フーー……」

「まだそんな物を吸っていたのか？　いい加減やめたらどうなんだ？」

「黙れ。貴様にそんな事を言われる筋合いは無い……」

「まあそんなに寿命を縮めたいのなら止めはせんが、人の忠告には素直に耳を傾けたらどうだ？」

「そうだな。貴様の面を見る事が無くなったら考えてやってもいいが？」

「零治、これから協力するのにそんな喧嘩腰でどうするんですか……」

零治と黒狼の間にピリピリした空気が張り詰め、少し離れた位置で、このやり取りを劉備達はハラハラした表情で見守る。

「は、はわわ……」

「お、おい、桃香。アイツら大丈夫なのか？　どう見ても仲が悪そうだぞ……」

「だ、大丈夫だよ……多分……」

「あの赤毛のお兄ちゃん、なんとなく雰囲気が銀狼に似てるのだ……」

そこへ事態を更に悪化させかねない二人、金狼と銀狼が姿を現す。

「ああ、ホントに居たよぉ。話には聞いていたけど、よく協力する気になったね、白狼？」

「同感だぜ。どういう風の吹き回しだぁ？　影狼……」

「……」

「おい。シカトしてんじゃねぇよ……」

「うるさい、黙れ……」

「何だとぉ！　テメェっ！」

銀狼は怒鳴りながら零治に掴みかかろうとするが……

「フッ！」

「っ！？」

零治は一瞬早く反応し、眼にも止まらぬ速さで鞘から叢雲を引き抜き、刃を銀狼の首筋にピタリと押し当てる。

「喧嘩を売る相手を間違ってないか？　銀狼……。まあ、そっちがその気ならいくらでも買ってやるぜ？」

「ぐ……っ！」

銀狼は悔しげな表情で歯軋りをしながら零治を睨みつけてる。

「ったく。貴様のせいでタバコを地面に落としちまったぜ……」

「わーっ！　二人とも！　どんな事情があるかは知りませんが、喧嘩はダメですよっ！！」

劉備が慌てて二人の間に割って入り仲裁する。

「フッ。劉備の顔に免じて特別に見逃してやるよ。命拾いしたな、

クズ野郎……」

零治はそう言って叢雲の刃を銀狼の首筋から引き、鞘に収めた。

「影狼……テメェ、そうやっていつもオレを見下しやがって……っ！」

「オレも人の事を言える立場ではないが、貴様が救いようのないクズなのは事実だろう？　見下して何が悪い……」

「テメェ……いつか必ず殺してやるからな。覚悟しとけよ……」

「寝言は寝てから言うモノだって知ってるか？　銀狼……」

「ケッ！　……黒狼！　オレは先に予定地点に行ってるぜっ！」

「勝手にしろ……」

「クソがっ！　……邪魔だぞガキがっ！　道を空けろ！！」

「ひゃ、ひゃい！　しゅみましぇんっ！」

銀狼は目の前に居る諸葛亮に怒鳴り散らし、諸葛亮は噛み噛み言葉で謝りながらぴょんと飛び跳ね道を空ける。

銀狼はズボンのポケットに手を突っ込み、シ水関攻略の開始地点に向かってズンズンと歩いていった。

「あーあ……。勘弁してよね、影狼。銀狼を怒らせるなんてさぁ。アイツが気に食わない事があると周りに当り散らすのは知ってるだろう？　僕も例外じゃないんだよ」

「なら、二度とオレの前に面を見せるなと、お前から言っとけ。もしくはお前が奴を殺せ。それで事は丸く収まる……」

「なんで僕がそんな面倒な事をしなきゃいけないのさ？　冗談じゃないよ。……じゃあ、僕も予定地点に行ってるよ、黒狼」

「ああ」

「じゃあ白狼、また後でね」

「……」

金狼はお得意の愛想笑いを浮かべながら瑠利亜に話しかけるが、瑠利亜は何も言わずに金狼を殺気の籠った視線で睨みつける。

「そんな怖い顔しないでよぉ。何もしないって」

「『今は』、が抜けてますよ……」

「ああ、そうだったね。それじゃあね」

金狼もそう言って、スタスタと予定地点に足を進める。

「では、私も行くとしよう。細かい打ち合わせはそこで行うから、お前達も遅れないようにな？」

「オレに指図するなと言ったはずだぞ……」

「やれやれ。……白狼、影狼共々、遅れないようにしろ」

「……分かってますよ」

「まあ、劉備達にも挨拶ぐらいはしとくといい。では先に行ってるぞ……」

黒狼はそう言ってコートを翻し、落ち着いた足取りで予定地点に足を運ぶ。

「……フンっ！」

零治は苛立ちをあからさまに表に出しながら鼻を鳴らし、二本目のタバコを取り出し火を点ける。

「はぁ……零治、貴方の気持ちも分かりますが、ここには黒狼達だけじゃなく劉備軍の方々も居るんですから、もう少し抑えてくださいよ……」

「それは無理な相談だ」

「無理でもやってください」

「はいはい……。……フーー……」

「……」

先程のやり取りを見ていた関羽は何か考え込むように黙りながら零治を見つめている。

「どうしたのだ？　愛紗」

「いや、あの男の先程の動きがな……」

「ああ、銀狼とのやり取りの時のか。愛紗、先程の動き、お主には見えたか？」

「いや、全く見えなかった。そう言うお前はどうなんだ？」

「私も見えなかった……」

「そうか。……あの男、強いな……」

「ああ、強いぞ。お主や鈴々、そして私よりもな」

「にゃ？　星、どうしてそう言い切れるのだ？」

「白蓮殿の所に厄介になる前に、一度彼と刃を交えた事があってな、その時は手も足も出なかったのだよ」

「……そうなのか。だが、なぜそんな事に？」

「なに、ほんの些細なすれ違いがあっただけだ。……どれ、せっかくだし挨拶をしてくるとしよう」

星はそう言って、スタスタと零治達の方に歩み寄っていく。

「零治殿、瑠利亜殿、お久しぶりですな」

「ん？」

「おや、星じゃないですか。久しぶりですね。元気にしてましたか？」

「ええ。お二人もお変わりないようで」

「そうでもありませんがね。……ほら零治、こういう時はタバコの火は消してくださいよ」

「はいはい」

瑠利亜に言われ、零治はタバコを携帯灰皿の中に捨てる。

「零治殿も相変わらずのようですな」

「そう言うお前もな。……ん？」

零治は誰かを捜すように辺りをきょろきょろと見回す。

「どうかなさいましたか？」

「いや、あの二人……風と戯志才は一緒じゃないのか？」

「ああ、あの二人はまだ旅を続けたいと言ってましたので途中で別れましてな」

「……あの二人だけで大丈夫なんですか？」

「だな。あの二人、どう見ても武闘派じゃなかったし……」

「心配は無いでしょう。あの二人は中々知恵が働きますので」

「そうか。まあ、星がそう言うんならそうなんだろうな」

「そう言うそちらも、奈々瑠と臥々瑠の姿が見当たりませんな」

「ああ、彼女達は後方でお留守番ですよ」

「左様ですか」

「ねえ、星ちゃん。この二人と知り合いなの？」

星が零治達と親しげに話すので、劉備が不思議そうに尋ねる。

「だな。真名も許してるみたいだし、親しいのか？」

公孫賛も、うんうんと頷きながら、劉備の言葉に同意する。

「親しいと言えるほどそこまで長い時間は過ごしてませんが、知らない仲ではありませんよ」

「そうなんだぁ」

「……」

「あ、挨拶が遅れましたね。私の名は劉備、字は玄徳です」

劉備は丁寧にお辞儀をし、零治達に挨拶をする。

「ああ。音無だ。よろしくな……」

「神威です。よろしく」

「はい。……あの、音無さん。質問してもいいですか？」

「何だ？」

「音無さん、どうして黒狼さん達と仲が悪いんですか？　あんなに良い人なのに」

「……良い人？　黒狼が？　それ本気で言ってるのか……？」

劉備の質問に対して、零治は冷ややかな視線を劉備に向けながら言う。

「えっ？　あの……」

「零治っ！」

「……」

瑠利亜が零治を一喝したので、零治はすぐに表情を元に戻し、黙り込んだ。

「あの……私、何か気に障る事を言っちゃいましたか？」

「いや、何でもない。それと先程の質問の答えだが……奴との仲の悪さは個人的な理由なので答える気はない。……劉備、オレも一つ質問してもいいか？」

「あ、はい。どうぞ」

「お前は何の理由があって黒狼達と一緒に戦っているんだ？」

「それは……私の理想を実現するためにです！」

「その理想とは？」

「私の理想、それは……この大陸に生きる全ての人々が笑って過ごせる国を作る事です！」

「……黒狼にその事は？」

「言いましたよ。そしたら黒狼さん、叶うと良いなって言ってくれました！」

「そうか。確かに立派な理想だから叶うと良いな」

零治はそう言って劉備の前を横切る。その際、一言ボソッと呟く。

「……無理だろうがな」

「えっ？」

「貴様っ！」

零治の呟きが聞こえたのか、関羽は自身が使用してる槍、青龍偃月刀を零治の首筋に突き付け行く手を阻む。

「おい、オレはこの先に用があるんだ。その槍を退けろ……」

零治は眼を細め、関羽を睨み付けながら槍をトントンと指で叩く。

「ならば我が義姉の理想を愚弄した言を訂正しろ！」

「義姉……？　なるほど、その槍の外観……お前が関羽か？」

「愛紗、落ち着け。お主の気持ちも分からんでもないが、やめた方がいいぞ」

「星は黙っていろ！」

「……訂正するまでコレを退ける気は無いんだな？」

「当然だ！」

「……」

「零治、頼みますから荒事は……」

瑠利亜は懇願するが、この状況で零治がその言葉に耳を貸すはずがなかった。

「……フッ！」

「なっ！？」

零治は叢雲を右手で抜刀し、そのまま勢いをつけ関羽の偃月刀に刃を打ち込む。あまりに突然の事だったため関羽は衝撃を受け止めきれずに槍を上空に弾き飛ばされてしまい、槍は彼女の背後に落下して深々と地面に突き刺さる。

「……」

零治は無言で叢雲を鞘にしまい、関羽には眼もくれずに何事も無かったかのように再び歩き出す。

「はぁ……」

瑠利亜は零治の行動に溜め息を一つ吐き、右手で顔を覆いながら俯く。

「どうして……」

「ん？」

「どうして無理だと言い切れるんですかっ！」

「……」

劉備は零治をキッと睨み付けながらハッキリと大声で言う。零治は振り返り、その姿を黙って見つめ、口を開く。

「劉備。お前の掲げる理想は幻想でしかないのだよ……」

「そんな事ありません！」

「では聞くが、お前は自分の語る理想に矛盾が生じてる事に気付いているのか？」

「え？　矛盾……？」

「その反応だと気付いていないようだな。気付いてる上でその理想を語るなら、その姿勢は大いに立派だが……気付いていないのなら、お前はただのバカだ……」

「貴様っ！　言うに事欠いて、桃香様の理想だけでなく桃香様をも愚弄するか！」

「フッ、威勢の良い事だな、関羽。だが、お前ではオレには勝てん……」

「く……っ！」

関羽は悔しげに歯を食いしばりながら零治を睨み付ける。

「お前は確かに強い。だが所詮その強さは『人の枠内での強さ』でしかない。『人の枠から外れた強さ』を持つオレに敵う訳がないんだよ……」

「零治、もう十分でしょう？　行きますよ……。これ以上連合内で問題を起こすと、本当に華琳の立場を危うくしてしまいかねません」

「ああ。……劉備、オレが今言った言葉、よく憶えておけ。なぜお前の語る理想が幻想なのか、そしてその理想に生じている矛盾が一体何なのか、一度よく考えるんだな……」

零治は劉備にそう告げ、瑠利亜と一緒に黒狼達が待つ予定地点に足を運んだ。

「はわわ……。この先の戦い……正直言って不安ですぅ」

「ああ、全くだぜ……」

「やれやれ。零治殿は相変わらず口の悪いお方だ……」

「私の理想に生じてる……矛盾……？」

「桃香様、あの男の言う事など気にする必要はありません」

「そうなのだ。桃香お姉ちゃんの言ってる理想は立派なのだ。だか

ら気にする事無いのだ」

「あ、うん。そう……だよね……」

劉備はそうは言うものの、零治の言葉は彼女の心の奥に引っかかり、深く考え込むのだった。

第２５話　理想を目指す者、否定する者（後書き）

零治「なんだ、ここで終わりか？」

作者「どういう意味だ？」

瑠利亜「いや、このまま私達の無双劇が始まると思っていたんですが……」

作者「それは次の話に先送りだ」

奈々瑠「珍しいですね。貴方がそんな判断をするなんて」

作者「あのままシ水関攻略の話まで書いたら字数がとんでもない事になるのが目に見えたからな」

臥々瑠「……ようやく学習したの？」

作者「ようやくとか言うな……」

零治「まあ、せいぜい頑張れや」

瑠利亜「ええ。まあ、次は確実に長い話になるでしょうがね」

奈々瑠「ですね」

臥々瑠「うんうん」

作者「くっ！　反論できない……」

第２６話　五色狼の実力と恐怖（前書き）

ようやく出来ました……。
今まで書いてた話でもそうでしたが、書いては消して書いては消してを繰り返していたので中々完成させる事が出来ませんでした。
お待たせしてしまってすみません。

第２６話　五色狼の実力と恐怖

「まったく何を考えてるんです、貴方は。劉備軍に喧嘩を売ってどうするんですか……」

「……」

瑠利亜は零治の先程の行動を咎めるが、騒ぎを起こした当の本人は何も言わない。

「はぁ……」

二人はしばらくの間、果てしない荒野を無言で練り歩く。やがて、シ水関の巨大な城壁が見え、予定地点で待つ黒狼達が二人を出迎える。

「……来たか」

「あれがシ水関ですか……。大きいですね」

瑠利亜は目の前に聳え立つ巨大な城壁を見上げながら呟く。

「では作戦を説明するぞ」

「作戦だぁ？　どうせ皆殺しにするだけだろうが」

「流石は殺人鬼の発想だな。いかにもクズのお前らしい発言だ」

「んだとぉ！？　テメェも同類だろうが！」

「何だと……？」

同類呼ばわりされた事が癇に障ったのか、零治の眼つきが殺気を帯びた物に変わる。

「……話を続けても構わんか？」

「ああ……」

「ケッ！」

「言うまでも無いが、私達の目的はシ水関の攻略だ。関に籠もってる守備隊の将を引きずり出し、これを殲滅する……」

「引きずり出すって……どうやってです？　こっちはたったの五人しか居ないんですよ。連中が兵を連れてもいない私達を相手にするとは思えないんですがね」

「それは問題無いんじゃない？　情報によれば、華雄は自分の武に誇りを持った猪武者で有名だからね。ちょっと挑発してやれば張遼はともかく、華雄は出てくるんじゃないか？」

「そう上手くいきますかね……？」

「なんだい、僕の言ってる事が信用できないの？」

「貴方の性格を考えれば信用しろって方が無理でしょう？」

「酷い事を言うなぁ。情報元は諸葛亮だから間違いないはずだよ」

「なら良いんですがね……」

瑠利亜はそう答えるが、あからさまに金狼に疑惑の視線を向ける。

「なら基本方針はそれで決りだな。配置はどうするんだ？」

「配置は私が正面、影狼と白狼は右翼、金狼と銀狼は左翼から潰しにかかれ」

「えー？　僕は出来れば白狼と一緒がいいんだけど？」

「ああ。オレも影狼と楽しみたいんだがなぁ？」

「ふざけるな……」

「お断りします」

「やれやれ。つれないなぁ」

「そんな事言って、オレが怖いんだろう？　影狼」

「今日のお前はやけに寝言を抜かすな。寝てもいないのに、一体どうやったらそんな器用な真似が出来るんだ？」

「ああ？　何だと……？」

「銀狼、いい加減にしろ。話が進まんだろう……」

「チッ！　分かったよ……」

「次に、神器についてだが……スキルの使用は禁止だ。いいな？」

「ああ？　ふざけんなよ。そんなことしたら戦闘に無駄な時間を食うじゃねぇか」

「やれやれ。分かってないなぁ、銀狼」

「何がだよ？」

「……風評、ですね」

「そうだ。この世界の人間から見れば、私達の術は仙術や妖術の類いに見られる。互いに仕えている主がそんなものに頼っている……などと民に知られたら……」

「場合によっては劉備と曹操の評判はおろか、オレ達の立場も危うくなると……そう言いたいんだろ？」

「そういう事だ。……分かったな？　銀狼」

「何だよ……以前、盗賊を始末する時とかは普通に使っていたじゃねぇか……」

「今回は規模が違いすぎる。ここには他国の諸侯達も居るんだ。どこから情報が流れるか分からん以上は自制するに越した事はない……」

「チッ！　分かったよ……」

「それともう一つ、向かってくる兵はともかく、逃げる兵は出来る限り殺さないようにしろ。これもやり過ぎると風評に関わってくるからな。いいな？　銀狼……」

「なんでオレばっかりに聞くんだよ！」

「……日頃の行いのせいだろ？」

「んだとぉ！？」

「影狼、あまりコイツを怒らせないでくれないか？　後で苦労するのは僕なんだからさぁ……」

「お前がどうなろうがオレの知った事ではない……」

「……で？　他には何かあるんですか？」

「いや、無いな。誰か異論はあるか？」

黒狼が周りに尋ねるが誰も何も言わない。

「無いようだな。華雄への挑発は私が行う。では全員、配置に付け」

「ああ……」

「クックック。影狼、テメェと一緒に戦えないのが残念だが、せいぜい楽しもうぜ」

「言ってろ……」

「そういえば、こうして五色狼のメンバー全員が同じ戦場に立つのは初めてじゃないの？」

「そうですね。まあ、これが最初で最後でしょうがね……」

「貴様ら、無駄話をしてないでさっさと持ち場に向かえ……」

「おー、怖い怖い」

黒狼を除く五色狼のメンバーはそれぞれの持ち場に足を運んでいった。

「では、私も行くとするか」

黒狼もゆっくりと、シ水関の正面を目指し足を運び出す。

……

……

…

「華雄将軍。連合の先陣が現れましたが……」

シ水関の城壁の上で街道の様子を伺っていた華雄の副官が報告する。

「そうか。相手の数は？」

「……五人です」

「五人？　兵を率いてる将が五人という事か？」

「いえ、文字通りです。相手はたったの五人しか居ません……」

「何っ！？　それは何かに間違いではないのか？」

「嘘だと思うのでしたら、そこの城壁からご自分の眼で確認してみてください」

「う、うむ……」

華雄は部下の兵に言われ、シ水関の城壁から入口に続く街道に眼を

やり、そこに展開する黒狼達の姿を確認する。

「……」

「言った通りでしょう？」

「あ、ああ……」

「いかが致しましょう？」

「連中の正体は？」

「斥候の情報によりますと、劉備と曹操の下に降り立った天の御遣い達だそうです」

「曹操は知ってるが……劉備は聞いた事のない名だな」

「最近売り出し中の人間らしいんですが、どうしますか？　華雄将軍」

「ふ、ふふふ……。我らも舐められたものだな。いくら天の御遣いとはいえ、たったの五人でこのシ水関に挑むとは……連合軍の総大将は余程の大バカらしいな」

「では？」

「ああ。総員、出撃準備！　たったの五人で我らに挑む身の程知らずの御遣いどもを粉砕し、敵軍中央にそびえる袁家の牙門旗を堕とすぞ！」

「はっ！」

華雄の掛け声とともに、華雄が率いる軍勢が出撃準備のため慌ただしく動き始める。

「ちょ……待ちぃや華雄！　賈駆っちの命令はシ水関の死守やで！？　出撃してどないすんねん！」

「ふん！　相手はたったの五人だぞ。我らの敵ではない！」

張遼は華雄を戒めるが、華雄は聞く耳を持とうとしない。

「いやまあ、気持ちは分かるけどよ、あんなん無視しときゃええやん」

「これほどの屈辱を前にして、無視を決め込むなど私には出来んな」

「……どうしても出撃するんか？」

「くどい！」

「分かった。ならウチはここで待機する。構わんな？」

「勝手にしろ」

「華雄将軍！　出撃準備、完了ですっ！」

「よし！　門を開けろ！　総員、出撃せよっ！」

シ水関の門が解放され、華雄の部隊は出撃する。外に居る五人組が恐ろしい相手とも知らずに……

「あんの猪が……」

張遼は一人、その場に居ない華雄に向かって一言毒づいた。

……

……

…

「ん……？　門が開いただと？　旗印は……『華』……華雄か。……フッ、前の外史でもそうだったが、こちらでもあの性格は変わらんようだな。まあいい、余計な手間が省けたというものだ……」

黒狼はそう言いながら、右手をゆっくりと前にかざし、自身の神器（ディバイン・アームズ）、魔王剣（ディスキャリバー）を呼び出す。

「では、始めるか……」

……

……

…

「……あれ？」

「どうした？」

「いや……シ水関から華雄が出てきたんだけど」

「ああ？　黒狼がそいつを挑発したから出てきたんだろ？」

「いや、黒狼はまだ何もしてないよ。……ひょっとして、こっちが五人しか居ないから舐められてると思って飛び出したのかも」

「何だそりゃ？　そいつバカじゃねぇのか？」

（その点については同感だけど、華雄も君にだけは言われたくないと思うんだけど……）

金狼は銀狼に意味深な視線を向けながら心の中でそう言う。

「あん？　何だよ？　何か言いたげだな」

「いや、なんでもないよ。それより始めるよ、銀狼。あの勢いなら

すぐに接触するからね」

「へッへッへ。分かってるさ。……さーて、楽しい殺し合いを始めるとするか……」

（はぁ……これだからコイツと一緒に戦うのは嫌なんだよ……）

……

……

…

「ん？　零治、シ水関に動きがありましたよ」

「何？　随分早いな？」

「どうも華雄の奴、黒狼が挑発する前に飛び出してきたようで……」

「はぁ？　何だそりゃ？　そいつ守備隊としての自覚があるのか？」

「自覚があるんならあんなバカな事はしないでしょう？　それより奴らを迎え撃ちますよ。あの速度ならすぐに接触しますからね」

「ああ。……華雄の奴、春蘭以上の猪だな……」

……

……

…

「へ……へ～っくしょんっ！」

後方で待機している春蘭が大きなくしゃみをする。

「どうしたの、春蘭？　風邪でも引いたの？」

「ずずっ……。さあ？　私は風邪など引いた事は一度も無いのですが」

「そう。まあ、体調管理には十分に注意をしときなさいね」

「はい」

「華琳様、前方の凪達から報告が入りました。シ水関に動きがあり、音無達が戦闘を開始したとの事です」

「戦況は？」

「今の所は目立った動きはないそうです」

「そう。まあ零治達なら大丈夫でしょうけど……零治達だけじゃなく、あの三人……黒狼達からは眼を離さないように伝えておきなさい」

「はっ」

「春蘭、劉備達の反応は？」

「今の所は静観しているようです」

「そう」

華琳はそう返事をし、すぐ隣、と言ってもそれなりに離れた位置に展開している劉備軍に視線をやる。

「桃香様、黒狼さん達が戦闘を開始しました」

「どんな状況？」

「今の所は異常は無いそうです」

「そっか。あの人達なら大丈夫だと思うけど、万が一のためにいつでも動けるようにしといてね」

「御意です」

「春蘭、秋蘭。ここは構わないから、貴方達も黒狼達の戦いぶりを見てきなさい」

「よろしいのですか？」

「ええ。ついでに、シ水関が破られたら敵に追撃をかけるように凪達に伝えておきなさい」

「承知いたしました」

彼女達がそんな会話をしている時であった。黒狼達の居る戦場に変化が表れ始めたのは……

……

……

…

「でえええいっ！」

華雄の部隊の兵士の一人が黒狼に斬りかかる。

「フッ……弱者に用は無い……」

黒狼は向かってきた兵の攻撃をいとも簡単に捌き、魔王剣を兵士の胸に深々と突き刺す。

「ごふっ！？」

兵士は血反吐を吐きながら息絶え、それを確認した黒狼は魔王剣を兵士の胸から引き抜き、近くにいた別の兵士の首に目掛けて斬りか

かり、首を刎ね飛ばされた兵はその場で噴水のような勢いで血を吹き上げながら地面に倒れこんだ。

「何とも他愛ない……」

「くっ！　ひ、ひるむなぁ！　敵は一人だ！　複数で攻撃に当たれえええええっ！」

「「「おおおおおっ！！」」」

兵の一人が周りの味方に激を飛ばし、それに応じた兵士達は群がる蟻のように黒狼に突撃する。

「フッフッフ。相手の力量も量れんとは愚かな連中だ。まあいい。……来る者は拒まず。刃向う者には死と絶望を与えん……」

黒狼は向かってくる兵達を嘲笑うかのような冷笑を浮かべながら一人、また一人と兵達を地面に斬り伏せていく。

……

……

…

「オラァァァっ！　死ねやあぁぁぁっ！」

「ぎゃあぁぁぁっ！」

銀狼は力任せに村正を振り回しながら兵たちを斬り倒していき、斬り付けられた一人の兵士が体から鮮血を噴出しながら断末魔を上げ、地面に倒れ息絶える。

「ケッ！　こんなもんかよ？　つまらねぇ連中だなぁ」

「あー……銀狼といい、周りの兵達といい、うるさいったらありゃしない……」

「くっ！　こ、このぉ！」

「黙りなよ。僕は騒がしい人間が嫌いなんだよ……」

金狼は向かってきた目の前の兵士の胸に目掛け高速の突きを放ち、風穴を空ける。

「がはっ！？」

兵士は血反吐を吐き、そのまま地面に崩れ落ちる。

「なっ！？　くそっ、よくも……っ！」

「おい、三人でいっぺんにかかるぞ！」

「おう！　いくら強くても三人がかりならっ！」

「はぁ……バカな連中だな。それが何だって言うんだい？」

金狼は溜め息を一つ吐き、先程と同じように高速の突きを連続で放ち、兵達の胸を刺し貫く。

「ごふっ！」

「がっ！？」

「ぐがっ！」

兵達は血反吐を吐き、自分の胸を押さえながら地面倒れ、物言わぬ屍と化した。

「おい金狼！　テメェ、何オレより目立とうとしてやがんだぁ！」

「うるさいなぁ。目立ちたくてやってるんじゃないんだよ。それよりも目の前の仕事に集中しなよ……」

「ケッ！　テメェに言われるまでもねぇ！」

金狼、銀狼の激しい攻撃により、その場に次々と死体の山が出来上がっていく。

……

……

…

「フッ！」

「ぎゃあっ！」

「せいっ！」

「ぐあっ！」

零治達の担当区域も凄まじい攻防戦が繰り広げられ、兵達は次々と二人の手によって地面に斬り伏せられていく。

二人は互いに背を預け、自分達の周りを取り囲みながら向かってくる兵士だけを確実に倒していく。

「瑠利亜、お前ホントに前に出て大丈夫なのか？」

「ご心配なく。この程度の相手なら近接戦でも大丈夫ですから。伊達に貴方にしごかれてきたわけじゃないんですよ？」

「それなら良いんだが、危なくなったらすぐに言えよ？」

「分かってますよ」

シ水関攻略戦の戦況は一気に五色狼側の優勢……と言うより一方的な虐殺の展開になり、勝敗はもはや決したも同然だろう。

……

……

…

「……」

張遼は一人城壁に背を預け、無言で空を見上げている。

「張遼様っ！」

その時、張遼の副官が慌てながら張遼の下にやってくる。

「ん？　どないしたんや、そんなに慌てて？　華雄がまたなんかやらかしたんか？」

「違いますっ！　アレを見てください！！」

副官が城壁の下の戦場を指差しながら言う。

「んー？　……なっ！？」

「……」

二人の視線の先には、五色狼のメンバーに一方的に責め立てられ次々と兵を失っていく華雄の部隊が眼に飛び込んでくる。

「な、なんやあれはっ！？　ひょっとして、こっちが押されとるんか！？」

「押されてるどころか、こっちが一方的にやられています！　このままでは華雄様の部隊は持ちませんよ！」

「……」

張遼は無言で下の戦場を睨み付けながら思案する。だが、考えるまでも無く、結論は一つしか無かった。

「張遼様、ご指示を！」

「くっ！　しゃあない。シ水関を放棄すんで！　アンタはウチの隊

を纏めて、動けるもんから順に虎牢関に撤退せえっ！」

「張遼様はいかがなさるのですかっ！？」

「ウチは華雄を連れ戻してくる！　分かったらはよ撤退の準備にかかるんや！」

「はっ！　張遼様、お気をつけて！」

「おう！」

副官は部隊を纏め撤退の準備のために奥へ、張遼は華雄を連れ戻すために城門から単身で戦場に飛び出し、華雄の下に大急ぎで走り出す。

「華雄、死ぬんやないでっ！」

……

……

…

「くぅっ！　一体どういう事だ！？　たった五人を相手に何をやっているのだっ！」

華雄は苛立ちを露わにしながら周りの兵達に怒鳴り散らす。まさか

五人の敵を相手に、自身の部隊が劣勢に立たされるなどとは夢にも思っていなかっただろう。
だが、相手が悪すぎたのだ。この結果は必然としか言いようがない。

「華雄将軍！　前曲、及び中曲、右翼、左翼、共に壊滅状態！　これ以上の戦線維持は不可！　撤退の指示の要請が出ています！」

華雄の副官が戦況状況を報告する。その内容に華雄は驚愕する。

「なっ！？　……バカな！　これは何かの間違いだ！　こんな事があるはずが……っ！」

「ですが、我が部隊の兵は既に半数以上がやられています！　このままでは全滅してしまいます！　華雄将軍、撤退の指示をっ！」

「……」

華雄は突きつけられた目の前の現実を受け止める事が出来ず放心状態になってしまう。と、そこへ。

「華雄っ！」

「……張遼！」

「お前、何をボーっとしとるんやっ！？　早く撤退の指示を出さん

かい！」

「なっ！？　ふざけるな！　たった五人の敵を相手に背を向けろと言うのか！？」

「どアホ！　状況見てモノ言えや！　あの五人が手に負えん相手ぐらい分かりきっちゅうやろうがっ！」

「くっ！」

華雄は悔しげの表情で下唇を噛みながら目の前の戦場を睨み付ける。

「張遼、お前の隊は？」

「ウチの隊の連中は既に虎牢関に向けて撤退させとる」

「判った。……総員、シ水関を放棄する！　撤退だ！　虎牢関に向けて撤退しろーーーっ！！」

「はっ！」

華雄の部隊は虎牢関に向けて撤退を開始。だが、それを黙って見逃すほど五色狼のメンバーは甘くはなかった。

「ん？　兵が退いていく……フッ、撤退するか。これだけ痛めつけてやったのだから恐らくシ水関は放棄するつもりなんだろうが……

どうせやるのなら、徹底的に叩いてやろうではないか」

そう言って、黒狼は華雄の部隊の追撃を開始する。

……

……

…

「ん？　連中、撤退を始めたようだね」

「ああ？　何だよ、もう終わりかぁ？　つまらねぇ奴らだぜ……」

「黒狼は……追撃するみたいだね」

「だったらオレも行くぜ。正直まだ殺し足りねぇからな」

「やれやれ。なら僕も付き合うよ」

「あん？　珍しいな。お前がオレの意見に同意するなんてよ」

「……ただの気まぐれだよ」

（と言っても、本音は君がバカをやらないように眼を光らせなきゃならないんでね……。まったく、嫌な役回りを押し付けられたものだよ……）

「おい、何やってんだ金狼。さっさと行くぞ！」

「はいはい……」

金狼、銀狼の二人も黒狼に続き、追撃を開始する。

……

……

…

「ん？　零治、連中、撤退していきますよ」

「そうか。黒狼達の反応は？」

「……どうも追撃するつもりみたいですね。私達はどうしますか？」

「勝敗はもう決しているから、これ以上奴らに付き合う義理は無いが……黒狼達に手柄を取られるのも癪だ。オレ達も追撃するぞ」

「分かりました」

そう言い、零治達も追撃を開始。今この瞬間、シ水関の陥落が確定した。

……

……

…

「信じられんな……」

後方で五色狼の戦いぶりを見ていた春蘭が、愕然とした様子で呟く。

「ああ。あれだけの数の大部隊が全く相手になっていないからな……」

秋蘭も姉の言葉に頷く。流石の彼女達も、ここまで一方的な展開になるなどとは予想も出来なかっただろう。

「あれではもはや一方的な虐殺ですね……」

「アレが……隊長の本気なんやろうか……？」

「分かんないのー。春蘭様、どうなんですかー？」

「分からん。私もあいつが本気を出した所は見た事が無いからな」

春蘭達は改めて、零治達の強さを思い知らされる。

「ん……？　春蘭様、秋蘭様。隊長達が追撃を始めたようです」

「そうか。ならば予定通り我らも追撃し、シ水関に一気になだれ込むぞ」

「はっ」

「先頭は私が行く。秋蘭達は私の動きに合わせながら後に続け」

「分かった」

「総員、移動開始だ！　あの門が閉まるまでに無理矢理ねじ込むぞ！」

春蘭の号令と共に、魏の軍勢が五色狼に続き移動を開始。こうしてシ水関は連合の手に落ちたのだった。

……

……

…

連合がシ水関を落とし、それからすぐに今後の方針を決める軍議が開かれた。当然ながら、華琳は零治と瑠利亜にも来るように言っている。

しかし、二人は出来る事なら参加はしたくなかった。なぜなら……

「ちょっと黒狼さん！　一体どういう事ですの！」

軍議を開いた張本人の第一声がこれである。袁紹のヒステリック叫び声が辺りに響く。

「何の事だ？」

黒狼は涼しげな顔で答える。

「話が違うではありませんか！　予定では貴方達は戦闘が終わったら退いて、追撃は他の者たちに任せる手はずだったはずでしょうに！」

「当初の予定ではそのつもりだったが、あまりにも事が上手く運び過ぎたのでな。追撃も私達で行おうと現場判断したまでだが……問題でもあったか？　確かに連絡がそちらに行き届いてなかったのはこちらの不備だが、連絡しようにも兵を連れていなかったのでな……」

「キーッ！　上手い事言って！　どうせ、シ水関を一番で抜けたかっただけなのでしょう！」

（あー……ウゼェなコイツ……。てか、よく黒狼を相手にここまで言い合えるものだな。ある種の大物だな、コイツ……）

「……シ水関に一番乗りしたのは影狼だから、その事は私に言われても困るのだが。それにだ、状況によっては現場の判断に任せると、

貴公も言っていたではないか。私はその指示に従っただけにすぎんぞ……」

「ま、まあ、二人とも、落ち着いて……。結果的にシ水関は落とせたんですからいいじゃないですか」

「劉備もこう言ってるのだし、それでいいんじゃないかしら？」

「ぐ、ぐぬぬぬぬぬぬぬ……っ！」

華琳と劉備はそう言って袁紹をなだめるが、袁紹は納得出来ていないようで、唸り声を上げながら黒狼を睨み付けるが、黒狼はそれを無言でどこ吹く風と受け流す。

「どうしてもと言うのなら、次の虎牢関攻略は私達が指揮を執っても構わないけれど？」

「良いでしょう。なら、追撃はわたくしが引き受けますわ！　虎牢関の一番乗りは譲ってもらいますからね！」

「……分かったわ。なら、それでいいわね」

（やれやれ。まるで学級会ですね……）

瑠利亜は華琳達のやり取りを見て呆れながら思う。これを軍議と言っていいのだろうか、と。

……

……

…

それからすぐに、華琳は自分の陣地で虎牢関攻略の細かい打ち合わせをするため首脳陣を集め軍議を開く。

「予定通り、虎牢関攻略の指揮権は引き受けてきたわよ。これで良いのよね、桂花」

「はい。ここで呂布と張遼を破れば、華琳様の名は一気に高まるでしょう。それは華雄如きの比ではありません」

「ただ……そのぶん強敵なんですよね？」

奈々瑠が不安げに訊く。

「呂布の武勇は天下無双。飛将軍の名は伊達では無いな。それに張遼の用兵は神出鬼没と聞く。恐らく、董卓の軍で最強の武将は奴ら二人だろう」

「……欲しいわね、その強さ」

「また悪い癖が……華琳様」

春蘭が、またかと言わんばかりに困った顔になり、秋蘭も華琳を諫める。

「今回ばかりはお控えください。張遼はともかく、呂布の強さは人知を越えております」

「ほお。そうなんですか？」

「用兵はともかく、個人の武では桁が外れていると聞いている。中央に現れた黄巾党の半分、約三万は、呂布一人に倒されているそうだ」

「一人？　それって一部隊でって事なの？」

臥々瑠が首を傾げながら訊く。普通ならそう思うだろう。だが、秋蘭は首を横に振る。

「いや、文字通りの一人、だ」

「秋蘭、それは確かなんですか？」

「情報元は人和よ。中央で一番有力な武将の名を聞いたとき、一番に出て来た名前が呂布だったもの。その次が張遼だったわね」

「へえ、こっちの世界にもそんな事が出来る奴が居たとはな」

零治は桂花の話を聞いて、感心したように言う。

「……零治、貴方なら呂布を倒せるのではなくて？」

「華琳様っ！」

「春蘭は黙っていなさい。私は零治に聞いてるのよ」

「……はい」

華琳に言われ、意見しようとした春蘭はしぶしぶ黙る。

「どうなのかしら？　シ水関での戦いぶりは報告で聞いてるから、貴方なら可能ではないの？」

「……出来なくはない。ただ……」

「ただ？」

「秋蘭のさっきの話が本当なら、仮に戦うとなると、本気を出す事になるかもしれんぞ……」

「何が言いたいの？」

「華琳、貴方なら分かるでしょう？　私達が本気で戦うと言う事は、神器の力を全て使うと言う事です。ですが、この世界の人間から見

れば私達の術は仙術や妖術の類いに見られます。そんなものを他国の諸侯が集まってる連合内で使ったりしたら……」

「間違いなく、お前の風評に影響を及ぼす。それでも良いと言うのならやるが？」

「……分かったわ。……呂布は諦めましょう。でも張遼だけならどうなのかしら？」

「張遼の強みは個人の武よりも用兵に有ります。兵を奪い取った上で捕らえろという命であれば、兵は桂花が。張遼は姉者が何とかしてくれるでしょう」

「お任せください！」

「わ……私か！？　また無茶を……」

「あら、してくれないの？　春蘭。桂花はしてくれるようだけれど？」

「……ふふん」

桂花はバカにしたような眼で春蘭を見ながら軽く鼻を鳴らす。

「くぅぅ……っ！　張遼如き、物の数ではありません！　十人でも二十人でも、お望みの数だけ捕らえて参りましょう！」

（おいおい……。数が増えていないか？）

「音無、何だその眼は！　何か言いたい事でもあるのか？」

「いや、別に無いけどよ」

「けど何だ！　言いたい事があるならハッキリ言えばいいだろう！」

「いや、お前は華琳が本当に大好きなんだなぁ、と思ってな」

「当たり前だ！　既にこの身も心も華琳様に捧げているのだぞ。これ以上何をもって華琳様への忠誠を示せと言うのか！」

「なら、張遼は春蘭と桂花に任せるわ。見事、捕らえて見なさい」

「はっ！」

「お任せを」

「……気をつけろよ、春蘭」

「貴様に心配されるまでもない。華琳様の信頼を頂いたこの私に……敵などおらん！　そう！　今の私は無敵！」

「分かった、分かったから。鼻息を荒げながら詰め寄るな、暑苦しい」

「ふふ、楽しみにしてるわよ、春蘭」

「はっ！」

「では桂花。全体の動きの指示を」

「はっ！」

一同は軍議を終え、虎牢関に向け移動を開始。まもなく、連合の第二戦の火蓋が切って落とされようとしていた。

第２６話　五色狼の実力と恐怖（後書き）

作者「うー……今回の話はマジで疲れたぞ……」

零治「いや、お疲れさん」

瑠利亜「内容は……まあサブタイトルがアレですから言うまでも無いですかね」

奈々瑠「兄さん達の無双劇ですね」

臥々瑠「でも……なんか地味じゃない？」

作者「あそこでお前らのスキルを使わせる訳にはいかなかったんだよ、その事は劇中でも説明してただろ」

零治「お前にしては随分と考えたんだな」

作者「当然だ。お前らがスキルを使って派手に暴れるのはまだ先の話だ」

瑠利亜「……そういう事ですか」

奈々瑠「それとですね」

作者「ん？」

臥々瑠「アタシ達の出番が最近全然ないんだけど！」

作者「お、落ち着け！　大丈夫だ、次の話ではもっと出番を増やすから！」

奈々瑠「本当ですか……？」

作者「……何とかしてみせる」

臥々瑠「……約束だよ」

作者「……ああ」

零治「いいのかねぇ、あんな事言っちゃって」

瑠利亜「さあ？　その場の勢いで言ってるのでは？」

第２７話　虎牢関攻略戦（前書き）

お久しぶりです、皆さん。
まず始めに、私の身勝手により長い間更新を滞らせてしまった事を、心よりお詫び申し上げます。
そして、この作品をお気に入り登録していただき、再開をずっと待っていた読者の皆様には心より感謝いたします。
これからは心機一転し、改めて頑張りますのでよろしくお願いします。

第27話　虎牢関攻略戦

――――――虎牢関城壁。
シ水関陥落から数日後。撤退を余儀なくされた張遼達は、現在城壁の上から迫りくる連合軍の軍勢の様子を窺っている。

「来たな……。例の五人組は……今回は前には出とらんみたいやけど……油断は出来んな……」

「むぅぅ……」

華雄はシ水関での戦闘を思い出し、右手をぎゅっと握りしめ、悔しげに唸る。

「これも華雄がシ水関を放棄するような事態を招いたからなのです！　まったく、軍師のねねの事も少しは考えてほしいのですっ！」

「ぐぬぬ……」

華雄は険しい表情で唸りながら、自身を非難した陳宮の胸ぐらを両手で掴み、持ち上げてそのまま締め上げる。
おかげで背の低い陳宮は、空中に宙ぶらりんの状態である。

「りょ、呂布どのぉ……。けだものが、いじめるのですぅ……」

「……なかよく」

「わ、分かっているっ！　……ううっ、兵の確認をしてくるっ！」

華雄は陳宮からパッと手を離し、バツが悪そうにその場を小走りに後にした。

「悪い奴やないねんけどなぁ。ねねも、ちょっと言い過ぎやで」

「うぅ……。ねねは悪くないのです……」

「ま、ええわ。恋、何とかなりそうか？」

「……なんとかする」

「せやねぇ……。何とかせんと、月も賈駆っちも守れんか……。それに、あんたの王国もな」

呂布は張遼の言葉に無言で頷く。

「んー。陣形の展開もなかなかやな。この手の定石は籠城やし、向こうもそのつもりなんやろうけど……あんまり時間を掛ける訳にもいかんしなぁ」

張遼が下の街道で展開している連合軍の部隊を観察しながら思案を巡らせている時、一人の兵士が駆けつけて声を張り上げる。

「申し上げます！」

「何や？　敵の状況ならちゃーんと見えとるで！」

「はっ。あの……華雄殿が出撃されるようです」

「……はぁっ！？　何やそれ！」

「そ、そんなの聞いていないのですっ！」

「前言撤回や！　あんの猪……！」

「……出る」

呂布は方天画戟を肩に担ぎ、出撃態勢を取る。

「呂布どのっ！」

「……しゃあないやろ！　せめて華雄を引きずり戻さんと、月に合わせる顔が無いわ！　陳宮は関の防備、しっかり頼むで！」

「分かったのですっ！」

……

……

……

「……出て来たわね。シ水関の時と言い、連中は籠城戦を知らないのかしら？」

虎牢関から飛び出してきた華雄の部隊を見つめ、華琳は呆れ果てながら呟く。

「旗印は華。……先日の失態を取り戻そうと思って、華雄が独走したのではないかと」

「春蘭でもしないわよ。そういう事は」

「華琳様、どうして私を引き合いに……」

春蘭は口をへの字にして不満を露わにする。

「華琳、後続の部隊も出て来たぞ。旗は呂と張だそうだ」

「華雄の独走に引きずり出された、と言った所でしょうね。まあいいわ、零治達は他の部隊にも通達の指示。本作戦は、敵が関を出て来た場合の対応で行う」

「了解した。お前ら、行くぞ」

「ええ」

「はっ！」

「分かった！」

「はーい」

零治と瑠利亜は、凪達三人を連れてその場を後にする。

「……さて、流琉」

華琳は流琉に視線を移し、名を呼ぶ。

「お側に」

「確かこれが初陣になるのよね……。この間は遠巻きに見ているだけだったけれど、実際に相手を目の前にして、どうかしら？」

「正直……ちょっと怖いです。熊や虎を退治した事はありますけど……」

「……そちらの方が凄くない？」

華琳は頬を引きつらせる。
武装した人間と野生の熊や虎。どちらが怖いかなど考えるまでも無いだろう。

「大丈夫だよ！　ボクも一緒に戦うから、頑張ろうね！」

「季衣……」

「それに、奈々瑠と臥々瑠も一緒だから心配ないよ。この二人、すっごく強いから！」

「うんうん、どーんと任せといて！」

「はい。危なくなったらすぐに助けに行ってあげますから、安心してくださいね」

「皆さん……はいっ！　よろしくお願いしますね！」

「さて、流琉が大丈夫なら行動を開始するわよ」

華琳は満足げに頷き、ゆっくりと後方に控えてる兵達に、力強く声を発する。

「聞け！　曹の旗に集いし勇者達よ！　この一戦こそ、今まで築いた我ら全ての風評が真実である事を証明する戦い！　黄巾を討ったその実力が本物である事を、天下に知らしめてやりなさい！」

華琳の激に、兵士達は手に持ってる各々の武器を天に掲げ、力強い雄叫びを上げる。

「総員突撃！　敵軍全てを飲み干してしまえ！」

号令と共に華琳の軍勢が、虎牢関を飛び出してきた華雄の軍勢に一斉に突撃を開始する。
それに呼応するかの如く華雄の部隊も突撃する。
街道には大量の砂煙が巻き上がり、やがて双方の部隊が激突。辺りに鉄と鉄のぶつかり合う金属音と、双方の兵達の雄叫びが木霊する。

「クックック。華雄……どこまでも愚かしい奴だ……」

後方でその戦いを眺め、嘲笑うかのように黒狼は冷笑し、喉を鳴らす。

「黒狼。僕達は後方で眺めているだけでいいのかい？」

「まったくだぜ。オレ達も行って、今度こそ完膚なきまでに叩き潰してやろうぜ」

「結果の見えている戦いに参加して何の意味がある……」

「ふーん。まあ、僕はあんな泥臭い事、進んで参加する気は無いから別にいいけどね」

「ああ？　二人して腑抜けやがったのかぁ？　だったらオレ一人で行かせてもらうぜ」

銀狼は村正を手に、前方の戦場へ向かおうとする。だが……

「銀狼……」

「っ！？　な、何だよ……？」

「貴様、先日私が言った事を忘れたのか……？」

黒狼は眼を細めながら低い声で銀狼を呼び止める。
銀狼は何も言いこそしないが、不満を露わにする。

「私の命令が聞けないのなら、その体に分からせてやった方がいいのか？」

「……チッ！　分かったよ……」

「ククク、バカだなぁ、銀狼。黒狼に逆らおうとするなんてさぁ」

「何だとぉ！」

「貴様ら、揉め事なら向こうでやれ。……ん？　華雄の軍勢が劣勢に立たされ始めたか。勝敗は決したな」

……

……

…

「くぅぅ……っ！」

次々と兵を失い、劣勢に立たされてる華雄は忌々しげに歯ぎしりをする。

「あーっ！　やっとおった！　この、どあほう！　とっとと帰るで！」

その場に駆け付けた張遼が毒づきながら華雄の首根っこを掴み、ズルズルと引っ張り始める。

「張遼！　離せ、私はまだ戦える……っ！」

「どんだけアホ晒しゃあ気ぃすむねん！　せめてそういう事は、虎牢関の上からにしとき！」

「はーなーせー！」

ジタバタと暴れる華雄をよそに、張遼は周りの兵士達にも大声で呼びかける。

「撤退や！　撤退！　虎牢関に戻れば、まだ十分戦えるわ！　皆もはよ戻り！」

「……霞」

「いま取り込み中や！」

「……ねねから連絡」

「何や。手短にな」

張遼に促され、呂布が連れてきた兵が報告を始める。

「報告です！　先程賈駆様より連絡があり、非常事態あり。虎牢関を放棄し、至急戻られたしとの事！」

「何やて……！？　誤報とちゃうやろうな」

「印は董卓様の物だったそうです。陳宮様は、既に撤退の準備を始めておいでです！」

「十常侍のヒヒジジイどもめ……。都に誰も残しとらんかったのは

失敗やったか。詠のアホ、全然大丈夫やないやないか……！」

「……霞」

「次から次に何や！　ウチ、一人やねんぞ！」

「……関に人」

「人って……ちょっ！　やばいっ！　あの軍、劉備のとこか！　奴らに突入されたら、ウチら帰る所が無くなるで！」

「……先に行く」

「任せた！　ほら、華雄もさっさと戻る！」

「う、うぅ……」

呂布は単身、虎牢関の突入しようとしている劉備軍目掛けて走り出した。

「おらぁ！　総員駆け足ー！　ここで突入すれば、虎牢関はあたいらのもんだぞっ！」

「皆さん、急いでくださーい！」

「……そうはさせない」

顔良と文醜の前に、呂布が立ちはだかる。

「きゃっ！」

「お、呂布じゃんか！　勝負だっ！」

「……時間無いから本気でいく」

呂布は方天画戟をゆっくりと肩に担いだかと思いきや、眼にも止まらぬ速さで顔良と文醜の二人に斬撃を浴びせる。

「どわぁっ！？」

「きゃあああっ！」

「く……っ！　遅かったか……！　大丈夫か、二人とも！」

そこへ、関羽と張飛が駆けつける。

「な、何とか……。ありがとうございます」

「ひゃー！　死ぬかと思ったぁ……！」

「愛紗！　鈴々が行くのだ！」

「待て鈴々！　一人では無理だ！」

「大丈夫なのだ！　でえええええいっ！」

張飛は高速の突きを呂布に放つ。だが……

「……当たらない」

呂布は戟を片手で振り上げ、いとも簡単にその突きを捌く。

「にゃにゃーっ!?　こいつ、強いのだ……っ！」

「だから無理だと言ったろう！」

「……あら、劉備の軍も来ていたのね」

「……お主、孫策……」

「これが呂布？　強いって聞いているけれど……こんなぼーっとした子が、そんなに強いの？」

「……桁違いだ。すまんが助力を頼めるか？」

「ふふっ。高いわよ？」

「この場の一番乗りなら譲ってやる」

「あら、気前が良い事。……気に入ったわ」

「よし！　ならば、三方より一斉にかかるぞ！」

「分かったのだ！」

「ええ！」

関羽、張飛、孫策の三人は呂布を取り囲み、一斉に攻撃を仕掛けようとする。しかし……

「……遅い」

それよりも早く、呂布が三連撃を浴びせ、三人を押しのける。

「くぅっ！」

「うひゃあっ！」

「ぐっ！」

「恋！　ようやった！　アンタもはよ戻りっ！」

「ぐむむー！」

「……分かった」

呂布と合流した張遼は、華雄を引きずりながら呂布と共に虎牢関内に撤退した。

「ちっ！」

「待つのだー！　勝負するのだー！」

「今は退け、鈴々。相手も状況も悪い。無理をしてこちら傷付けば、桃香様が悲しむぞ？」

「うぅ……分かったのだ」

「……こっちも潮時みたいね。残念。一番乗りを貰い損ねちゃったかしら」

「すまんな、借りは返せそうにない」

「私一人でも状況は変わらなかったでしょうよ。ま、そのうち返してくれればいいわ」

「ならば退くぞ！　せめて、殿は務めさせてくれ」

「そこまで気前よく払わなくてもいいのに……。総員退け！　作戦は失敗した！」

「総員、下がるのだ！　撤退なのだ！」

「撤退！　撤退ー！　砦の上から矢が来るぞ！」

連合軍の虎牢関攻略の初戦は失敗に終わり、撤退を余儀なくされる。
だがその翌日、虎牢関内に異変が起こった。

「……虎牢関が、無人？」

秋蘭からの報告を受けた華琳は驚きの表情で言う。

「はい。袁紹が偵察を放ったところ、中には呂布どころか猫の子一匹居なかったそうで」

「何の罠かしら」

「分かりません。呂布も張遼も健在な現状、虎牢関を捨てる価値はどこにもありませんし」

桂花も困惑の表情を浮かべながら言う。

「んー？　他所で挙兵があったから、そっちの対応に向かった……とかじゃないのか？」

と、零治が口をはさむ。

「そんな報告は入っていないわ。そもそも挙兵したい諸侯が集まったのがこの連合軍なのだから」

「ですよねぇ。仮にあったとしても、義勇軍程度の規模が相手なら虎牢関の全戦力は必要ないでしょうし……」

瑠利亜が桂花の言葉に同意しながら頷く。

「やはり罠か……？」

「そうとしか思えない……のだけれどね」

「いっその事、どこかの馬鹿が功を焦って関を抜けに行ってくれれば良いのですが……」

「流石にそんな馬鹿は居ないでしょう。春蘭もそこまでしないわよ」

「だから華琳様、どうしてそこで私を引き合いに出すのですか……」

当然ながら理由は言うまでもない。

「華琳様ー。今連絡があって、袁紹さんの軍が虎牢関を抜けに行ったみたいなのー」

沙和の報告を聞き、その場の空気がしらける。

「やれやれ。シ水関の時は散々言ったくせに、今度は自分が抜け駆けとはね」

「まあ、袁紹が無事に抜けられたら、罠は無いって事だから、それでいいんじゃないか？」

「そうね。たまには馬鹿に感謝するのも悪くないかもね。……袁紹が無事に関を抜け次第、私達も移動を開始するわよ」

……

……

…

――――――ここは洛陽の都に設けられた城。そして、その城の中庭に集まり話し合いをしている董卓軍の首脳陣たち。

「……そう。虎牢関は連中の手に落ちたのね」

董卓軍を支える軍師の一人、賈駆が渋面を作り、呟く。

「まあ虎牢関の件は間が悪かったのですよ。それより、月殿に何事も無く、何よりなのですよ」

「……ありがとうございます」

上等な衣装を身に纏った、あどけない少女が陳宮に礼を言う。
月と呼ばれてるこの少女こそが、権力を欲する一部の諸侯たちの手によって暴君に仕立て上げられた董卓である。

「気にせんでええよ。みんな、月の事が好きでやっとんやから。それに月は偉いんやから、もっとこうどーんとしとったらええねん」

「……はい」

「せや。詠、ちょっと見てほしい件があるんやけど……来てもろうてええか？」

「いいわよ。恋、月を見ていてもらっていて……」

「……ぐぅ」

「おーい、れーん。ちょっと起きてぇな。月の膝枕とか、なに全力で役得満喫しとんねん！」

張遼は董卓の膝の上でグースカ寝てる呂布を揺さぶるが、呂布は気持ちよさそうに寝息を立てるばかりで、起きる気配は全くない。

「……きもちいい」

「そりゃこんなに若くてかーいい子の膝枕やから、柔らかくてええ匂いなのは分かるけどな……ウチもしてほしいわ」

「あの……霞さん？」

「ねね。何かあったら、恋を叩き起こしなさいよ」

「いちいち言わなくても分かってるのですよ。さっさと行ってくるのですよ」

張遼と賈駆は、人に聞かれないよう城壁の上に場所を変え、話を始める。

「で、何？」

「ああ。あんたの言いつけ通り、月に手ぇ出そうとしとった十常侍……」

「報告は聞いたわ。ありがとね」

「けど、お偉いさんっちゅうのも難儀なもんやなぁ。自分の身を守るためとはいえ……」

「霞には悪かったと思ってるわよ」

「ウチの事なんぞどうでもええねん。けど、ここまで来たら……後には引けへんで？」

「分かってるわよ。分かってる……けど」

賈駆は悲痛な表情で俯きながら、両手をぎゅうっと握りしめる。

「月んとこみたいな弱小貴族がこの世界いで食いモンにされんためには、のし上がって、勝ち残るしかない……か」

賈駆の心中を察するように、張遼は言う。

「そうよ！　だからボクは月をこの大陸の王にする。董卓……月に、ずっと笑っていてほしいから！」

「ま、ええわ。アンタの気持ちはよう分かる。ウチも出来るところまでは手伝うたるわ」

「頼むわね。こちらも、出来るだけの事はするつもりだから……」

「ああ、賈駆様、張遼様！　こちらにおいでしたか！」

一人の兵士が、慌てた様子で駆けつけてくる。

「何かあったん？」

「はっ。地平の向こう、虎牢関の方角より大軍団が迫っている様子。恐らく、連合軍かと……」

「相変わらず早いなぁ……。総員に戦闘準備を通達！　今度は籠城戦やし、長期戦になるで！　……後、華雄は！」

「出撃準備を……」

「阿呆ぅ！　止めさせい！」

「はいっ！」

張遼はまたかと言わんばかりの表情で、兵士に怒鳴り散らす。

「……ま、そういうこっちゃ。賈駆っち、もし隙があったら、アンタは月連れてとっとと逃げぇよ？」

「……霞」

「ウチも華雄も……恋は何考えとるかよう分からんけど、戦場で死ぬ覚悟なんぞとっくに出来とる。けど月はああいう所で死なしたらあかん子や……」

「あんた、まさか……」

「アホ。死ぬくらいやったら逃げるに決まっとるやろ」

張遼は勘違いしてる賈駆を安心させるため、ポンポンと軽く頭を叩く。

「それより自分、月のためならどんな事もするって言うたよな？　なら、戦場を逃げ出した卑怯者の汚名くらい、ばーっと被ってみせや？」

「……アンタ達が頼りなかったらね」

賈駆は先程までの悲痛な表情とは打って変わり、余裕のある不敵な笑みを浮かべながら言う。
その姿に、張遼は満足げに頷く。

「くははっ！　ようやくらしくなってきたやないの。ほな、ウチは行くで！」

張遼は、羽織っている外套を翻し、戦闘準備をするためにその場を後にする。
間もなく、連合軍と董卓軍の決戦の火蓋が切って落とされる。

第27話　虎牢関攻略戦（後書き）

作者「皆さん、お久しぶりです」

零治「ああ。ホント久しぶりだな……」

瑠利亜「ええ。約二ヵ月ぶりですかね」

臥々瑠「そうだねぇ。まさかあんな事があるとはねぇ……」

奈々瑠「で、何か言う事は無いんですか？」

作者「詫びの言葉なら前書きで書いただろ？」

瑠利亜「ま、今回は苛めないであげましょう。ところで……」

作者「ん？」

零治「この作品をゴミ呼ばわりした輩はどうしたんだ？」

作者「あんなの速攻でブロックユーザーに指定してやったが？」

奈々瑠「え？　あんなの……？」

作者「何だよ？」

臥々瑠「そこは普通、あんな奴とかって言うんじゃないの……？」

作者「人としてやっちゃいけない事を平気でするようなＤＱＮを人

として扱う必要があるとでも？」

零治「無いな」

瑠利亜「ありませんね」

奈々瑠「そ、そうなんですか……？」

瑠利亜「ええ。心無い言葉を投げかけたら、相手がどんな気持ちになるかなんて小学校高学年でも分かる事ですよ？」

零治「それが分からん奴は人として扱われる資格すら無いな」

臥々瑠「そ、そうなんだ……」

作者「ああ、そうなんだよ」

零治「じゃあ、今日はこの辺で終わらせるか？」

瑠利亜「そうですね。そして……次回からはまたこの作者の悪ふざけに付き合わなきゃいけないんですがね……」

作者「悪ふざけとか言うな……」

第２８話　反董卓連合終結（前書き）

まさか、次の話を投稿するまでに一か月も間が開いてしまうとは……
時間に余裕があったあの頃が懐かしい……

第２８話　反董卓連合終結

連合軍による攻城戦が開始して数日が過ぎた。
未だ進展が無いので、華琳は自軍の首脳陣達を集め、軍議を開いている。

「状況はどう？」

「……あまり芳しくありませんね。袁紹や袁術も攻城戦を繰り返してはいますが、都の城壁は高く、一進一退の状況です」

華琳の問いに、桂花が渋面を作りながら答える。
次に華琳は、秋蘭に視線を移し、訊く。

「華雄は？」

「流石に今回は出て来ないようで……」

「まあ、流石に今回出て来たら、見殺しにされるでしょうね」

「私なら春蘭が出たら一度で見殺しにしますが」

「だからどうして私を引き合いに出す！」

桂花に引き合いに出され、流石にこうも立て続けに引き合いに出さ

れてしまうため、春蘭は憤慨する。
しかし、周りのメンバーは何も言わずに、ジト眼で春蘭を見つめる。

「な、何だ……」

「……いや別に」

零治はそう言って適当にお茶を濁す。
その時、攻城戦に出撃していた季衣と流琉が帰還してきた。

「ただ今戻りました」

「お帰りなさい。様子はどうだった？」

「……全然ダメでした。上からああも反撃されたら、手も足も出ないですよー」

季衣が悔しげに報告し、流琉が補足を加える。

「劉備さんの軍も攻めてましたけど、状況は同じようでした。今は袁紹さんの軍が攻めてますけど……多分、状況は変わらないんじゃないかと」

「そう。あまり時間も無いし、早く決着をつけたいところだけど……」

「そうですねぇ。このままダラダラ時間を掛けてたら士気も低下しますし、ただでさえ悪い連携が余計に悪くなりますしねぇ……」

（それどころか、史実のように内部分裂が起こり、この討伐作戦が失敗しかねんな……）

瑠利亜の言葉に同意するように、零治がそう思っている時、不意に華琳が声をかけてくる。

「零治」

「ん？　ああ、どうした？」

「それはこっちのセリフよ。どうしたのよ？　急に難しい顔をして黙り込んだりして……」

「いや、ちょっと考え事をな。で、何だ？」

「零治、確か貴方の世界には……こんびにと言うものがあったわよね？」

「あん？　そりゃあるけど……それがどうかしたのか？」

「まあ、それはこの後開かれる軍議でのお楽しみよ」

「はあ？」

零治は華琳の意図が理解できず、怪訝な顔で首を傾げる。
それからすぐに、連合に参加してる全諸侯が集められた軍議が開かれる。

「……攻め続ける？　どういう事だ？」

怪訝な顔で馬超が訊く。

「うわ……えげつないですねぇ……」

「張勲、どういう事なのじゃ！　妾にも分かるよう、説明してたも！」

「今も我が軍は間断なく攻め続けているでしょう。やり方をどう変えろとおっしゃいますの？」

「……間断なくぅ？」

公孫賛が袁紹に訝しげな表情を向ける。

「……何か文句ありますの？」

「いや、別に……」

袁紹と公孫賛のやり取りをよそに、華琳は自らが提案する作戦の概要を説明する。

「簡単な事よ。今の散発的な城攻めの方法を変えて……そうね、一日を六等分にでもしましょうか」

「……そうして、一つの隊が六分の一ずつ攻め続けると言う事ですか？」

「そうよ」

諸葛亮の問いに華琳は軽く頷く。今の言葉で他の諸侯達も華琳の提案する作戦の内容を理解した様子。

「一日の六分の一しか攻めないようでは、いつまでたっても城なんか陥ちませんわ！」

「麗羽の言う通りなのじゃ！　残りを昼寝されたら、堪らんぞ！」

しかし、例外も存在していた。袁紹、袁術の二人だ。
話の内容を理解できず、文句をブータレる二人に、他の諸侯達から呆れた視線が向けられる。

「な、何なのじゃ？」

「何ですの、その眼は……」

「あくまでも一隊が、の話ですよぅ。お嬢様、それが六隊あったらどうですか？」

話を理解できていない二人に、張勲が補足を加える。

「六分の一が、六個あるのかえ……？」

「……一日が全部埋まってしまいますわ！」

「そうよ。朝も昼も晩も攻められたら……数で劣る向こうとしては堪らないでしょうね」

「あー。それでコンビニの話を持ち出したのか」

「そう言う事。……数で圧倒的に勝る今のうちでなければ、試せない作戦でしょうしね。ここまでば、向こうもすぐに音を上げてくると思うけれど……どうする？」

華琳は集まってる諸侯達を見渡し、問いかける。だが、結論は既に出ていた。

そして、作戦はその日からすぐに実行される。

……

……

……

「うぉはよー」

玉座の間に来た張遼は、眼をゴシゴシと擦りながら気怠そうに集まってる首脳陣達に挨拶をする。

張遼だけに限らず、他のメンバーも眠そうな顔をしており、呂布に至っては立ったまま頭をコックリコックリと揺らしており、今にも寝落ちしてしまいそうなほどであった。

「ああ、おはよう」

寝不足に悩まされてる他のメンバーとは対照的に華雄だけは普段通りに挨拶をする。

「……ぐぅ」

「れ、恋殿ー！　起きてくだされー！」

「……眠い」

「賈駆っちー。月は？」

「調子が悪くて、まだ寝てるわ。流石に夜もまともに眠れていない

みたい」

「ここ数日の連中、一体何なんや……。朝も晩も延々攻めて来よって……おはようからおやすみまで仕掛けられても困るっちゅーねん！」

「それが連中の狙いなんでしょうね……ふわぁ」

「楽しい楽しい我慢比べっちゅう訳か……やられた方としちゃ、堪らんなぁ」

「ふみゃ……効果的な作戦である事は、間違いないのです……ふわわ」

「……むにゃ」

「おいこら、呂布。どこに行く気だ」

「……布団」

「寝るなー！」

「つか、華雄は元気ええなぁ……。夜もしっかり寝られとるん？」

「当たり前だろう。いつ如何なる時でも安眠できてこそ、一流の武人と言うものだ！」

「羨ましい体質やなぁ……。けど、これが続くようじゃ、ホントに保たんで」

「決戦……しかないわね」

賈駆は瞳に決意を宿らせ、呟く。

「せやなぁ……。こっちの力が残っとるうちに、仕掛けるか……」

「なら、月を起こしてくるわ」

「よしとき。ギリギリまで休ませたり」

「恋とねねは……」

賈駆は二人に視線を移す。その先には……

「……ぐぅ」

「……むにゃ……恋どのぉ……」

二人は睡魔に耐えきれず、既に半ば寝ている状態だった。

「おい、貴様ら……」

「ええって。休むんも仕事のうちや。どうせ恋の仕事は、決戦が始まってから山ほどあるんやし」

「……ふむ」

「賈駆っちはウチと作戦を考えてもらえるか？」

「了解」

「なら、私は物資の確認をしてこよう」

「頼むわ。くれぐれも……くーれーぐーれーも、勝手に出るんやないでっ！　今度出たら、見捨てたるからな！」

「分かっている。決戦と決まったのなら、今出る理由などどこにも無いわ」

……

……

…

――――連合軍本陣。

今日も諸侯達を集め軍議を開き、現在桂花が董卓軍の動向を報告している。

「……と言う訳で、敵の反抗がいつもより大人しかった事もあり、敵は今日明日中に決戦を仕掛けてくると思われます」

「なら、こちらもしっかり準備を整えて……」

袁紹の言葉に、華琳は首を横に振る。

「攻撃はこのまま続けないと意味が無いわ。ここで兵を退いては敵に休ませる時間を与えてしまうわよ」

「だったら、ハズレを引いたらどうなるのじゃ！」

「そりゃ運が悪かったらそのまま決戦に参加するか、撤退するしかないんじゃないか？」

公孫賛が袁術にそう説明する。

確かに、これぱっかりはタイミングの問題なので、ハズレを引いてしまったら運が悪かったと諦めるほかない。

「そんな不名誉な事、妾は嫌なのじゃ！」

「そうですわ！　今日からしばらく、貴方達だけで城攻めをなさい！　これは連合の総大将からの命令ですわよ！」

「なんだそりゃ！」

馬超が声を荒げる。

しかし、こんな理不尽な命令をされれば、誰だって声を荒げるというものである。

「妾も出ないのじゃ。攻撃の当番を持ってきても良いが、絶対に出ぬからの！」

「貴方達……」

華琳の米神がピクピク痙攣する。表情も険しくなり、今にも切れそうな様子だ。

「……はぁ。袁術の代わりは私がするわ」

孫策が溜め息を一つ吐き、袁術の代わりを買って出る。

「なら、わたくしの代わりには……劉備さん」

「はいっ？」

いきなり声を掛けられたので、劉備は上ずった声で返事をしてしまう。

「貴方の軍、有能な将に、天の御遣いが三人も居るようだから、隊を二つに分けても何ともありませんわよね？」

「え、そ、そんな……！　私の軍、兵の数はそんなに……」

白羽の矢が自分に立ち、劉備は困り果てる。
このやり取りを傍らで見ていた金狼と銀狼が声を潜めて話し合う。

「気に入らねぇな、あのアマ……いっちょ脅しでも掛けるか？」

「今回ばかりは僕も君に同感だね。袁紹の奴、名門の出だからって調子に乗り過ぎだね。総大将としての自覚も全く無いしさ」

「貴様ら、余計な事はするな……」

「何だよ、黒狼。このままじゃ面倒な事になるだけだろうが……」

「いいから黙って見ていろ……」

黒狼は顎をしゃくり、金狼、銀狼に前を向くように促す。

「……なら、兵は私の兵を貸しましょう」

「曹操さん……」

「関羽のような逸材に使われるのなら、私の兵も本望でしょう。それでどう？」

「桃香様……」

諸葛亮が声をかける。華琳が兵を貸すと言う後押しもしてくれた以上、断る理由は無いはずだ。

「……うん。分かりました。お引き受けします」

「なら結構。それでは華琳さん、決戦の布陣を説明してくださるかしら？」

華琳は諸侯達に決戦の布陣の説明を始める。
やがて軍議は終了し、一同は解散するが、その際に劉備は華琳に声をかけてくる。

「あ、曹操さん……」

「ああ。どうしたの？」

「あっ……」

華琳に何か言おうとしたとき、不意に零治と眼が合ってしまい、劉備は言葉に詰まる。

「……」

零治は何も言わずに踵を返し、一足先に自分の陣へと戻って行った。

「……ん？　彼がどうかしたの？」

「いえ、何でもないです。……それより、お礼が言いたかったので」

「礼を言われるほどの事をした覚えはないわ。少なくとも、この戦いの間は同盟を組んでいるのだから」

「それでも……ありがとうございます」

「……ふむ」

華琳はジッと劉備を見据える。
その視線に劉備はキョトンとする。

「はい？」

「何でもないわ。兵は後で連れて行かせるから、なるべく減らさずに返してちょうだい」

「はいっ！　ありがとうございます！」

劉備は丁寧のお辞儀をして礼を言い、諸葛亮を伴い自分の陣に戻って行った。

「……随分と気前が良いんですね」

瑠利亜は意外そうに言う。

「諸葛亮や関羽の指揮を間近で見られる良い機会だもの。その代価と見れば、高いものではないわ」

「ふむ……。では」

「桂花。兵の中に間諜を数名選んで入れておくように。人員の選定は任せるわ」

「はっ！」

（フッ、流石に抜け目ない。伊達に英雄と呼ばれていた訳ではありませんね）

「ところで、瑠利亜……」

「はい？」

「零治、劉備との間に何かあったの？」

「あっ……やっぱり気付いてましたか」

「当たり前でしょう。で、何があったの？　怒らないから正直に言

いなさい」

「その……シ水関攻略の時、劉備軍……正確に言うと、関羽と零治がひと悶着やらかしちゃいまして……それに、劉備とも軽く言い争いを……」

「はぁ……」

華琳は呆れたように溜め息を吐く。

「すみません。私も止めようとはしたんですが……」

「まったく、ここ最近の零治は問題行動が多すぎないかしら……？」

「……」

「ま、今はこの話はいったん止めにしましょう。まずは目の前の戦いに集中する事よ」

「はい」

……

……

二人は決戦の準備に備え、自分達の陣へと足を進めていった。

……

「これが最後の決戦……やな」

城の城壁から連合の軍勢を見下ろしながら、張遼は感慨深げに呟く。

「三万か……。これで、よく保ったものだ」

「どっかのバカが無茶せんかったら、もうちょっとおったんやけどなぁ……ま、今更言っても仕方ないっちゃ仕方ないけど。……恋、用意はええか？」

「……全部倒す」

「その意気や。……賈駆っち、ねね、城の守りはよろしゅうな」

「ええ。任せておいて」

「恋殿の後背はしっかりお守りするのです！」

「張遼様！　敵軍は城を四方から取り囲み、いつでも攻められる状態になっています！」

「まあ、モロバレなのは分かっとったけどな。ま、ええわ。景気づけに……お前ら、聞けぇ！」

張遼は背後に控えてる兵士達に声高らかに叫ぶが、誰も何も言おう

としない。

「……って、誰も喋らんのかい！」

「……苦手」

「かっ、かっ、かかっ！」

華雄が何か言おうとしているが、緊張してるせいで、『か』、から先の言葉が出てこようとしない。

「どもるくらいなら黙っとき！」

「皆の者！　今までよく頑張った！　ここが最後の決戦だ！　この戦いに勝てば、再びゆっくり眠れるあの日々が帰ってくるだろう！」

代表として賈駆が、声高らかに宣言する。

「しかし、もし退けば、この悪夢の日々は未来永劫続く事になる！　我らの平和を、略奪者から守るのだ！　総員、戦闘用意！」

賈駆の言葉で董卓軍の兵士達に士気は一気に高まり、全員が雄叫びを上げる。

そして、城門が開放される。

「報告っ！　城の正門が開きました！」

「見えているわ！　皆の者、聞きなさい！」

凪の報告を受け、華琳は背後に控えている兵達に声高らかに宣言する。

「ここが正念場！　この戦いに勝てば、長い遠征もおしまいよ！　けれど、もし奴らをあの城の中に押し戻してしまったら、この遠征は永劫に続いてしまうでしょう！　この戦いばかりの日々を終わらせるわよ！　総員、戦闘準備！」

「門より敵部隊出撃！　突撃して来ます！」

桂花が言うように、董卓軍の兵士達は、大量の砂塵を舞い上げながら一直線に華琳達に目掛け突撃してくる。だが、華琳は余裕の笑みを浮かべる。

「……さあ、誰が私達の相手をしてくれるのかしらね……春蘭！」

「はっ！　総員、突撃ぃっ！」

春蘭の号令と共に、戦闘開始の銅鑼が鳴らされ、兵士たちは一斉に

突撃。決戦の幕開けである。
双方の軍勢は、あっという間に激突し、辺りは激戦区と化す。
その戦場で入り乱れる兵士達の間を、零治と瑠利亜は凪達三人を率いて、立ちはだかる敵を斬り伏せながら城を目指しながら疾風の如く駆け抜けていく。

（まったく。いち早く城に侵入し、董卓を取り押さえろだなんて、華琳のヤツも無茶な命令をしやがる。だいたい、顔も知らない人間をどうやって捜せって言うんだよ……）

零治がそう思っていた時、不意に零治達を呼び止める者が現れる。

「そこの貴様！　待てっ！」

「ん？」

零治達は足を止め、声がした方向に視線を向ける。その先に居た人物は……華雄である。

「その服装……貴様、シ水関に現れた御遣いの一人だな」

「瑠利亜、アイツひょっとして……」

「ええ。恐らく華雄でしょうね」

「また厄介な奴が現れやがって……」

「おいっ！　私の質問に答えろ！」

「はぁ……だったら何なんだ？」

「やはりそうか……。あの時の雪辱を晴らすため、貴様に一騎打ちを申し込むぞっ！」

華雄は自身の使用している戦斧を零治に突き付け、声を張り上げる。

「ああ……やっぱそう来るか。メンドくせぇなぁ……」

「あれ？　兄さん、こんな所で何してるんですか？」

零治が思案している時、奈々瑠と臥々瑠が合流してきた。

「ん？　ああ、奈々瑠に臥々瑠か。そっちは片付いたのか？」

「うん。それで兄さんと合流して手伝おうと思って来たんだけど……どうしたの？」

「いや……厄介な奴に絡まれてな……」

零治は顎を華雄に向けてしゃくり、奈々瑠と臥々瑠は視線を華雄に

向ける。

「あ～……納得です……」

「兄さん、なんならアタシ達が相手しようか？」

「いや、その必要は無い。……瑠利亜」

「はい？」

「お前は凪達を連れて先に城に向かえ。華雄を片付けたら、オレも後からすぐに追いかける」

「えっ？　ですが……」

「結果の分かりきっている闘いの観戦などしても時間の無駄だ。早く行け……」

「分かりました。零治、気をつけて。……では貴方達、私達は行きますよ」

「はっ。隊長、ご武運を……」

「ああ」

瑠利亜は凪達を率いて、一直線に城を目指していった。
それを見届けた零治はゆっくりと華雄に向き直る。

「待たせたな……」

「ふんっ！　随分と余裕ではないか。己の武勇に余程の自信があるのか……？」

「ああ。お前程度の相手など、すぐに終わらせてやるさ……」

零治のその一言が引き金となり、華雄の顔に朱がさす。

「なっ！？　貴様、言わせておけばっ！！」

華雄は戦斧を振り上げ、戦闘態勢を取る。

「いいだろう。その思い上がった性根を、この私が完膚なきまでに叩き潰してくれる！」

「フッ、この程度の挑発に乗るとはな……呆れて物も言えん……」

零治はゆっくりと叢雲を鞘から引き抜く。

「さあ、かかって来い……」

「言われずとも……。我が一撃、受けてみよ！　はあああああっ！」

双方の武器がぶつかり合い、軽快な金属音を鳴り響かせ、火花を散らす。

……

……

…

「くっ……っ！　やっぱ、この戦力じゃ厳しいかっ！　恋とははぐれてもうたし、華雄の奴は勝手に独走するし……っ！」

別の戦場で張遼は奮戦こそするが、劣勢に立たされてるこの状況を歯痒そうに言う。

「待てぇっ！　張遼！」

「待てるかボケ！」

張遼は迫り来る公孫賛を無視し、馬に鞭を討ち、あっという間に公孫賛を引き離す。

「くっ、この私が馬術で追いつけんだと……！？」

公孫賛は呆気にとられながら張遼を見送る事しかできなかった。

「……やれやれ。やっと撒いたか」

張遼は後方を確認し、溜め息を吐きながら安堵する。

「けど、どう見てもこっちの負けやなぁ……。月と賈駆っち、上手く逃げられたやろうか」

張遼が二人の安否を気にしていたその時……

「待て！　見つけたぞ、張遼！」

「あちゃぁ……このクソ忙しいときに。一騎打ちの申し込みなら、もう締め切っとるぞ！」

「ふんっ！　そんな事は知らん！　私との勝負に応じるまで追いかけるまでだ！」

「その眼……ダメっちゅうても仕掛けてくる眼やな。恋や華雄っちとおんなじ眼ぇや」

「……貴様も同じ眼をしているぞ？」

「あかんなぁ、自分を殺しとるつもりやったんやけど……ええよ。どうせこの戦、ウチらの負けや。最後くらい自分の趣味に走ってもバチ当たらんやろ。名ぁ名乗りぃ！」

「我が名は夏侯元譲！」

「曹操の夏侯惇いうたら、暴れん坊で手が付けられん方か！　ええで……来ぃや！」

「良い心がけだな。ならば、行くぞ！」

「おおおおおっ！」

「でやあああああっ！」

春蘭の愛刀、七星餓狼と、張遼の持つ槍、関羽の青龍偃月刀を模して造らせた、飛龍偃月刀が火花を散らす。

……

……

…

「でやあああああっ！」

華雄は戦斧を高々と振り上げ、零治に目掛けて、渾身の力を込め振り下ろす。

「……そんな大振りの攻撃がオレに当たると思っているのか？」

零治は身体を、スゥッと横にずらし、その一撃をひらりと躱す。
華雄の一撃は地面に叩きつけられ、凄まじい轟音を響かせ、地面を陥没させる。

「……力だけは一丁前のようだな。だが、所詮それだけか……」

「ふんっ！　ただ逃げ回っているだけの奴に、そのような事を言われる筋合いは無い！」

「そうかい。ならば教えてやろう……力の差と言うものをな……」

零治は叢雲を鞘にしまい、ゆっくりと居合いの構えを取る。

「これ以上続けても時間の無駄だ。この一撃で終わらせる……」

「面白い……やってみろっ！」

華雄は戦斧を構え直し、改めて零治と対峙する。
その場に緊迫した空気が張り詰める。その刹那……

「フッ！」

零治は眼にも止まらぬ速さで、華雄の懐にまで踏み込む。

「なっ！？」

華雄はあまりの出来事に反応しきれず、咄嗟に防御の体制を取る。

「遅いな……」

零治はそのまま叢雲を振り抜き、そのまま華雄の横をすり抜け、叢雲を振りぬいた体制のまま、華雄の数メートル後ろで止まる。
華雄自身も、そして華雄が率いてる兵士達も何が起こったのか理解出来ないまま硬直する。その中、零治は無言で叢雲を鞘に納める。
その瞬間、何かが砕けるような金属音が華雄が居る場所から響く。

「ん？　……なっ！？」

華雄はその音の正体が気になり、ふと視線を自分の武器の柄の部分にやる。
その視線の先には、柄の中心部から真っ二つに折れていた自分の戦斧が飛び込んできた。

「それでお前の武器は使えん。終わりだ……」

「バカ……な……」

華雄は地面に両膝を付き、がっくりと項垂れる。

「華雄将軍が……負けた……？」

一人の兵士がそう呟く。その瞬間、その言葉が引き金となり、華雄の部隊の兵達の間に動揺が走る。

「華雄様が負けたっ！？　に、逃げろぉ！」

「うわあああっ！　こ、こんな所に居たら俺達まで殺されちまうぞぉ！」

「なっ！？　お、おいっ！　待たんか、貴様ら！」

兵達は華雄の言葉に耳も貸さずに、蟻の子を散らすようにその場から散り散りに逃げだしていく。

「フッ、指揮官が負けたら、兵達がああなる事など誰にでも予想できる事だ。もうお前の部隊は終わりだ……」

「くぅ……っ！」

「お前もさっさと逃げるんだな。じゃあな……」

零治は言う事だけ言い、華雄には眼もくれずに城を目指し、その場を走り去って行った。

「……くっ！」

華雄はその場からフラフラと立ち上がり、悔しげな表情で唇を噛み、兵士達が入り乱れる戦場の中を一人走り出した。

……

……

…

「……」

「……くっ！　呂布め、何という強さだ……！」

別の戦場では秋蘭が、季衣、流琉、張飛、文醜と共に呂布を相手取っているが、呂布の強さの前に手も足も出ない状況である。

「流琉！　いっちー、ちびっこ！　もう一度、仕掛けるよ！」

「うん！」

「おっしゃ！」

「だから、チビにチビって言われたくないのだ！」

「……何度やっても無駄」

呂布はそう呟くが、季衣と流琉は問答無用で左右から攻撃を仕掛ける。

「でえええいっ！」

「はあっ！」

「……だから、無駄」

呂布は方天画戟を素早く振り、二人の攻撃を弾き返す。

「そうかぁ？　背中ががら空き……」

「……無駄」

背後から文醜が攻撃をしようとしたが、呂布は身体を反転させ、戟を横に振り、文醜を押し返す。

「……だああっ！」

「甘いのだ！」

「……無駄」

続いて張飛が正面から高速の突きを放つが、呂布は赤子の手を捻るように、いとも簡単にそれを弾き返す。

「ひゃっ！」

「……くっ。やはり、関羽でも連れて来ねば足止めすら厳しいか……」

秋蘭が歯痒そうに呟いていたその時、一人の男が背後から一同に声をかける。

「……無様だな」

「ん……？　なっ！？　お前は……黒狼っ！？」

一同の視線の先には、魔王剣（ディスキャリバー）を手にした黒狼が佇んでいた。

「退け、貴様ら。呂布の相手は私がしてやる……」

黒狼は秋蘭達を押しのけ、呂布の前に対峙する。

「秋蘭様。あの人、誰ですか？　なんか兄ちゃんと服装が似てますけど……」

「……あの男の名は黒狼。劉備の下に降り立った天の御遣いの一人……そして、かつて音無の師だった人物、だそうだ……」

「秋蘭様。あの人って、兄様より強いんですか？」

「音無の話によると、実力は音無よりも上だそうだ……」

秋蘭達は後方に下がり、呂布と対峙する黒狼を静かに見守る。

「久しぶりだな、呂布。……と言っても、貴様は憶えてはいないだろうがな……」

「……？」

呂布は黒狼の言っている言葉の意味が理解できずに首を傾げる。

「フッ、理解する必要など無い。……呂布、貴様の力、私に見せてみろっ！」

黒狼はそう言うや否や、凄まじい速度で呂布の懐に踏み込み、死をもたらす横薙ぎの一撃を呂布の首筋に目掛けて浴びせる。

「……くぅっ！」

素早く反応した呂布は、何とかその一撃を受け止めるが、あまりにも強力な一撃だったため、後ろに追いやられる。

「ほお……よく受け止めたな。褒めてやる……」

「なっ！？　あの呂布を一撃で後ろに押しやるとはっ！」

秋蘭は驚愕する。自分達は先程まで手も足も出ない状況だったと言うのに、黒狼はいとも簡単に呂布を押し返したのだ。彼女の心に受けたその衝撃は計り知れないだろう。

「さあ、次は貴様の番だ。来い……」

黒狼は右手をだらりと下げ、左手を突き出し、手招きをして、かかって来るように呂布を挑発する。

「……」

呂布は戟を肩に担ぎ、黙って黒狼を見据え、様子を伺う。

「どうした？　来ないのか？　それとも……私が怖いのか？」

「……行く」

呂布はそう呟き、黒狼に勝るとも劣らない速度で懐に踏み込み、戟を振り下ろす。

「フッ……ふんっ！！」

しかし、黒狼はその一撃を左手であっさりと受け止め、そのまま戟を掴み取る。

「なっ！？　あの一撃を素手で掴み取るだと！？」

またもや秋蘭は驚愕する。いま目の前で繰り広げられてる闘いは互角どころか黒狼の優勢に傾いてるのだ。この場に居る人間全員がこのような展開を予想する事など出来やしなかった。

「所詮この程度か……」

「……」

呂布は黙ったまま戟を握っている右腕に力を込めるが、微動だにしない。

「これ以上は時間の無駄だな。少しでも貴様に期待した私が愚かだったようだ……」

黒狼は不意に戟を握り締めている左手で呂布を後ろに押し返し、その勢いでバランスを崩した呂布の腹に回し蹴りを叩き込み、数メートル後ろに呂布を蹴り飛ばした。

「くぅ……ぁ……っ！」

呂布は苦悶のうめき声を漏らしながら地面にうずくまる。

「つまらん。これでは退屈しのぎにもならんな……」

「……まだ……やれる……」

呂布は何とかその場から立ち上がり、改めて黒狼に対峙する。

「ほお、まだ立つか。よほど痛い目に遭いたいらしいな……」

「……」

「恋殿！　恋殿はいずこにっ！」

「……ここ」

「おお、恋殿ー……！」

その場に緊迫した空気が張り詰めた矢先、馬に乗った陳宮が駆けつける。

「……月は？」

「城は陥ち、月殿と詠殿は既にお逃げになりました。恋殿もお早くです！」

「……霞は」

「霞殿と華雄殿は行方が知れません。けれど、あの二人の事ですか

らきっと無事でしょう。今は二人で逃げるのです！」

「おお、貴様ら！　こんな所に居たか！」

「……ちっ」

華雄がその場に現れ、陳宮は不満そうな顔で小さく舌打ちをする。

「どうした、陳宮」

「なんでもないのです」

「……なら、行く」

「はいっ！」

「……」

呂布は黒狼に警戒の眼差しを向ける。

「失せろ。もはや貴様に用は無い。それに、その方が他の連中はありがたいようだしな……」

「……行こう」

「はっ」

「おう！」

呂布は陳宮と華雄を伴い、その場を走り去って行った。

「……世の中には、あんなに強い奴が居るんだなぁ……。ふー、びっくりした」

「休んでいる暇は無いぞ。呂布が居ない今、残りの勢力を一気に制圧する機会は今しかない！」

「あ、文ちゃーん」

「おお、斗詩～！　あたいが心配で探しに来てくれたのかぁ！」

「違うよぅ。華雄さん、見なかった？　追いかけてきたんだけど……」

「かゆーなら呂布と逃げたのだ」

「呂布さんと？　……それは厳しいなぁ」

「ちょうど良い。貴公も文醜と、残る兵の制圧に戻ってくれ。呂布と合流した華雄を捕まえるのはもはや不可能だ」

「ですね……そうします。文ちゃん、戻ろ」

「おう！　お前ら、それじゃな！」

「分かったのだ！　鈴々も戻るのだ！」

「もう来なくていいよ！　ちびっこ！」

「季衣、いい加減にしなさいっ！」

未だに季衣は張飛の事をチビ呼ばわりするので、見かねた流琉が季衣をたしなめる。

「では、私も戻るか。もうここに用は無い……」

黒狼も踵を返し、ゆっくりとした足取りでその場から去って行った。

「……」

秋蘭は呆然とした表情で黒狼を見送る。

「……秋蘭様、秋蘭様ってばっ！」

「あっ……ああ、季衣、どうした？」

「どうしたじゃありませんよう。早くボク達も戻りましょうよ」

「ああ、そうだな」

季衣に声を掛けられ、現実に引き戻された秋蘭は季衣、流琉と共に残りの敵の制圧に戻るため足を進める。

（あの呂布が赤子同然の扱いとは……。黒狼……恐ろしい男だ……）

黒狼の闘いぶりを目の当たりにした秋蘭は、改めて黒狼の実力と、その恐ろしさを実感した。

……

……

…

「でりゃあああああっ！」

「だあああああっ！」

裂帛の気合いと共に双方一歩も引かない様子でぶつかり合う春蘭と張遼。互いの得物の刃が激しく火花を散らす。

「ふふ……っ！　楽しいなぁ、やっぱ本気で戦える相手っちゅうのは、血が滾るわ！」

「うむ！　貴様ほどの使い手を制したとあらば、華琳様もお喜びくださるだろう！　はーっはっはっは」

お互い、命を懸けて闘っているにもかかわらず、まるで無邪気な子供のように楽しげな笑みを浮かべる。

「姉者！」

「おう、秋蘭か！　見よ、もうすぐ華琳様の御前にこやつを連れて行けそうだぞ！」

「そうか。なら、周りの敵は私が対処しよう。姉者は張遼を頼む」

「応っ！」

「気を付けてな」

「……すまんな。待たせたか？」

「ええで。それよりアンタ、後どのぐらい闘えそうや？」

「ふんっ。貴様の倍は合数を重ねて見せるわ！　そんな事は気にせず、かかって来い！」

「ええなぁ……それ、良すぎるわ……！　なら、遠慮なく行くで！」

「おう！　来るなら来……」

二人が改めて戦いを再開しようとした、その時。

「姉者っ！」

「……ぐ……っ！」

秋蘭が鋭く叫び、それと同時に、一人の無粋な兵士が放った矢が春蘭の左眼に深々と突き刺さり、春蘭は苦悶の声を漏らしながら左眼を抑え、地面に片膝をつく。

「姉者っ！　姉者ぁっ！」

「……ぐ……くぅぅ…っ！」

「ちょ……惇ちゃんっ！？」

「ぐ……あああああっ！」

「くっ、おのれぇぇっ！」

「ぐはっ！」

秋蘭は怒りを露わにしながら、春蘭に矢を射かけた兵士を一撃で射殺した。

「姉者！　大丈夫か、姉者っ！」

（く……っ。ここで張遼が号令を掛ければ、こちらの中衛は崩れ去ってしまう……。くそっ、こんな時に何を考えているのだ、私はっ！）

「くっそぉぉ……っ！　誰じゃあ！　ウチの一騎打ちに水差しおったド阿呆ぅは！　出て来ぃ！　ウチが叩き斬ったる！」

「しっかりしろ、姉者！　気を確かに持て！」

「ぐあああああ……っ！」

春蘭は苦悶の叫び声を上げながら自身の左眼に刺さっている矢を無理やり引き抜いた。

「姉者っ！」

「夏侯惇っ！」

「……天よ！　地よ！　そして全ての兵達よ！　よく聞けぇい！」

春蘭はその身を奮い立たせ、その場から立ち上がり、矢を握りしめたまま声高らかに叫ぶ。

「我が精は父から、我が血は母から頂いたもの！　そしてこの五体と魂、今は全て華琳様のもの！　断り無く捨てる訳にも、失う訳にもいかぬ！　我が左の眼……永久に我と共にあり！」

「夏侯惇……！」

「んっ、んぐ……ぐっ……がは……っ！」

春蘭は矢に突き刺さっていた自分の目玉を喰らった。

「姉者！　大丈夫か、姉者！」

「……大事ない。取り乱すな、秋蘭。私がこうして立つ限り……戦線は崩れさせん」

「姉者……！　せめて、これをその眼に……」

秋蘭はそう言って、蝶のデザインを模った眼帯を春蘭に手渡す。

「うむ。……水を差されたが……待たせたな、張遼。さあ、一騎打ちの続きと行こうではないか」

「な……」

「ん？　来んのなら、こっちから行くぞ？」

「なんや……アンタって奴は……。ええ、ええなぁ……最高や……。鬼気迫るっちゅうのは、そういうのを言うんやろうなぁ……！　まさかあの世に逝く前に修羅と戦えるなんざ、思うてもみんかったわ！」

「御託はいらん！　来るなら来い！」

「おう！　もう口上も戦場も関係ない！　ウチはアンタと闘うために、ここにおる！　征くでぇっ！」

再び二人の得物が激しくぶつかり合い、火花を散らしだす。

……

……

…

「ここが城内ですか……」

零治を置いて一足先に宮城内に突入した瑠利亜は辺りを見渡しながら一人呟く。

「もうほとんど制圧も終わっとるなぁ……」

真桜が言うように、既に城内には他国の軍勢もかなり入り込んでおり、制圧もすでに終わっているに等しい状態だった。

「……ん？　お前ら、まだこんな所に居たのか？」

「あ、隊長。ご無事でしたか」

「ああ、見ての通りピンピンしてるぞ」

「零治、随分と早かったですね」

「あんな、正面から突っ込む事しか出来ない奴の相手なんか最後までしていられるか。武器を使えなくして速攻で終わらせてやったわ。それより董卓は居たのか？」

「いえ、それらしき人物はどこにも……」

「あ、隊長。あそこに誰か居るのー」

沙和が指差すその先に居た人物は……

「……ひゃあっ！」

「きゃっ！」

コソコソと隠れるように城から逃げ出そうとしていた董卓と賈駆で

あった。
二人は逃げ出すのに夢中で零治達の存在に気付かずに、うっかり鉢合わせしてしまった。

「だ、誰っ!?」

「うぅ……」

賈駆は警戒しながら鋭く叫び、董卓は怯えきった様子で小さく呻き声を上げる。

「どうしたのー？　そんなに怯えて」

沙和が二人から事情を聴こうと優しく話しかける。
賈駆は恐る恐るの口調で尋ねる。

「アンタ達……連合軍なの？」

「詠ちゃん……」

（二人のこの反応……それにこの少女、随分と上等な衣装を身に付けている。と言う事は……）

「あれ？　みんな、どうかしたの？」

零治が思案していた時、劉備がその場に現れ、零治達に話しかけてきた。

「ああ、劉備」

「……」

瑠利亜は劉備に対して普通に挨拶をするが、零治は黙ったまま横目で劉備に視線を向けている。

「えっと……神威さん達、こんな所で何をしてるんですか？」

劉備はあの出来事以来、零治とは気まずい仲になっているので、比較的話しやすい瑠利亜に話しかける。

「えーっと……ですね……」

「どうもこの二人、董卓に仕えていた侍女か何からしくてな、城が無くなって居場所が無いようでな。ウチでは引き取る事も出来ないだろうから、どうしたものかと思ってな」

「えっ？　零治、彼女達そんな事は一言も……」

「シッ！　いいから黙ってろ……」

「そうなんですか。なら、私達が預かりましょうか？」

「頼めるか？」

「はい。ウチも人手が足りてませんし、曹操さんには兵士も貸してもらったし。みんなに相談してみます」

「……だそうだが、二人ともそういう事で構わないか？」

零治は視線を董卓と賈駆に移し、尋ねる。

「は……はい……」

「そういう事なら……」

「じゃ、こっちだよ。私について来てね♪」

劉備は董卓と賈駆の二人を連れて、その場を後にする。

当然ながら、彼女は二人の正体には気付いていない。

「零治、いいんですか？」

「何がだ？」

「あの二人の事ですよ。彼女達、どう見ても侍女って感じじゃなか

ったじゃないですか」

「ああ。メガネをかけてた方は恐らく文官か何かだろうな。そして、もう一方の少女……かなり上等な衣装を着ていたからな……恐らくアレが董卓だろうな」

「やっぱり気付いていたんですね。何だってこんな事を？」

「ただの気まぐれだ……」

「やれやれ。もしこの事が華琳にばれたら、何て言い訳をするつもりですか……？」

「黙ってりゃ分かりゃしねぇよ。……言っとくが、お前も共犯だからな」

「はいはい……」

「あっ、兄さん。来ていたんですね」

「おお、奈々瑠か。どうした？」

「兄さん、城内の制圧はほぼ完了です。後は外の残党を制圧するだけですよ」

「分かった。なら、外の連中と合流するとしよう」

零治達はその場の仕事は兵達に任せ、その場を後にした。

……

……

…

「あーあ。負けてもうた」

張遼は地面に身を投げ出し、空を眺めながら悔しそうに呟く。

「ふっ……なかなか良い闘いだったぞ、張遼」

「ウチも最高やったわぁ。生きとるうちにこんな勝負が出来るなんて、思いもせんかったで。……もう悔いは無いわ……さ、殺しぃ」

「何を馬鹿な事を……。貴様にはこれから、華琳様に会ってもらわねばならんのだ」

「曹操に？　何でぇよ？」

「華琳様が貴様の事を欲しているのだ。故に私は貴様と闘い、こうして倒してみせた。……ここで死なれては私が困る」

「……」

「張遼……我が主、華琳様に降れ」

「……ええよ、降ったる。アンタほどの鬼神がそこまで忠誠を誓う

主……。こないだはロクな挨拶も出来ひんかったしな。どんな奴やったんか、興味あるわ」

「ふっ。面白い奴だ」

「アンタほどやないで」

「……ぐっ」

と、その時、とうとう限界が来てしまったのか、春蘭はそのまま地面に倒れこみ意識を失った。

「姉者！」

「ああもう！　あないな無茶するからや！　曹操に会う前にアンタの傷の手当てや。夏侯淵、このアホ、後方に連れてくで！」

「うむ！」

……

……

…

それから、あの激しい戦いから一夜が明けて――――――

「もう復興が始まってるのか……」

「随分早いんですね。もう少し後になると思っていたんですが」

既に華琳は城内に兵を入れ、道路や倒壊した建物の片づけをさせていた。

「ええ。陛下の側近に繋がりがあってね。そちらから既に許可は貰ってあるわ」

「……また桂花か？」

「またとか言わないでよ！」

「いいえ。個人的な繋がりよ」

「ふぅん……」

「……気になる？」

「別に。聞いたって分かりゃしないだろうし……」

「あ、そう」

「あーっ！　居たのじゃ麗羽！」

「見つけましたわっ！　華琳さん！」

「……またうるさいのが」

その場に現れた袁紹と袁術を見た華琳は、心底ウンザリした顔になる。

「あ、いっちー！　元気ー？」

「おー。きょっちーも流琉も元気そうで何よりだ」

「こんにちわ、音無さん、神威さん」

「こんにちわ。……二人とも、無事だったようですね。季衣達と一緒に呂布と闘ったと聞いたので、結構心配してたんですよ」

「そんな事より、何ですの、この工事は！　またわたくし達に無断で……！」

袁紹は周りの事などお構いなしに、ヒステリックな叫び声を上げるが、華琳は涼しい顔で返す。

「大長秋を経由して、陛下の許可は頂いてある。問題があるようなら、確認してもらって構わないけれど？」

「な……っ！　大長秋……！？」

「何でお主のような奴が大長秋と繋がりを持っておるのじゃ！」

「私の祖父が何代か前の大長秋だったのよ」

「ずるいのじゃ！　それを言ったら、妾達とて三公を輩出した名門袁家の出身じゃぞ！」

「く～……っ！　点数稼ぎも良い所ですわ！」

「機を見て敏なりと言うでしょう。動きが遅い方が悪いのよ」

華琳は袁紹と袁術の文句を涼しげな顔で受け流す。

「瑠利亜、大長秋って何の事だ？」

「皇后府を取り仕切る宦官の最高位の事ですよ。華琳……曹操の祖父が任じられてた事は結構有名な話ですよ。名前は確か……曹騰でしたかな」

「なるほど。それで個人的な繋がりか……」

「ええい、猪々子さん、斗詩さん！　こんな所に居る場合ではありませんわっ！　行きますわよっ！」

「木を見て瓶なのじゃ！」

「ひゃっ、ちょっと、麗羽様ー！」

「きゃーっ！　引っ張らないでー！」

「華琳さんっ！」

「……ん？」

「この、タマ無しーっ！」

「……」

袁紹はとんでもない内容の捨てセリフを吐き捨て、袁術、文醜、顔良を連れてその場を立ち去って行った。
そのセリフを聞いた華琳は唖然としてしまう。

「……そりゃ、玉は無いでしょうよ」

「ってか、女性が玉とか言っちゃダメでしょう……」

「……何だったんだよ、アイツらは」

「さあ？　……あら？」

「どうした？」

不意に華琳の視線が、近くで炊き出しをしている人物に止まる。
その視線が気になり、季衣と流琉がその視線の先を追う。

「あれ……？」

「あっ！　ちびっこ！」

視線の先で炊き出しをしていたのは、劉備、関羽、張飛の三人であった。

「はいっ！　まだありますから、慌てないでいいですよー！」

「愛紗ー！　ご飯、足りないのだ！　もっと持ってきてほしいのだ！」

「鈴々！　お前、よもや自分で食べているのではないだろうなっ！」

「ほら二人とも、ケンカしてる場合じゃないよ！　ちゃんと手伝ってよぅ！」

「桃香様……。これ、ここで……いいですか？」

「うん。そこに置いといて！」

「月、せーので置くわよ！　せーの！」

「えいっ！」

そして、そこには劉備によって保護された、董卓と賈駆の姿もあった。

「……ああ、劉備達か」

「彼女達も早いうちから城に入っていたと聞いたけれど……あの関雲長が炊き出しとはね。……けれど、何をおいてもまずは民のため……か」

「それはお前も一緒だろ？　公共の道や橋を優先的に直させてるの、知ってるぜ？」

「……」

「あ、華琳様、照れてるー！」

「……うるさいわね」

季衣に指摘され、華琳はプイッとそっぽを向いた。

「けれど、劉備か……。その名、心の留めておきましょう。桂花、劉備にこちらの予備の糧食を届けるよう手配しておきなさい」

「それは構いませんが……華琳様。あの劉備という輩、いずれ華琳様の覇業の障害に……」

「……でしょうね。けれど、その時は正面から叩き潰せば良いだけよ。違うかしら？」

「……御意」

「ここにいらっしゃいましたか。華琳様」

「あ、秋蘭様！」

「言われた通り、ちゃんと護衛は付けているわよ。文句は無いでしょう？」

「それは構わないのですが……」

「どうだった？　事後処理とやらは終わったの？」

「はい。それから華琳様に会わせたい輩が……」

「……どもー」

秋蘭に促され、張遼が一同に小さく挨拶する。
張遼の姿を確認した華琳は満足げに頷く。

「そう、春蘭は見事に役目を果たしたのね。それで、春蘭はどうしたの？」

「それが……」

秋蘭が言葉を濁すので、華琳の表情は青ざめる。

「まさか……冗談、よね？」

「ご心配なく、至極元気です。……が、華琳様にはもはや顔を見せる訳にはいかないと」

「どうしたのっ！？」

「少々、怪我をしまして……。命に別状はないのですが……」

「っ！」

華琳は脇目も振らずにその場から走り出した。

「華琳様！　姉者は本陣の救護室におります！」

「分かったわ！」

その返事は既に通りの角の向こうから。華琳の小さな後ろ姿はあっという間に見えなくなってしまった。

「うぅ……」

「よく我慢したな、季衣」

「季衣、後でみんなでお見舞いに行こうね」

「……うん。今春蘭様に一番会いたいのは華琳様だもんね……」

「秋蘭。春蘭は本当に大丈夫なんですか？」

「それは大事ない。無傷とは言わんが、あれで怪我人と言っては、怪我人に失礼だろう」

「……」

「すまんな、霞。華琳様にはまた後で……どうした？」

周りの会話をよそに、張遼は呆気にとられた様子で、ある方向に視線が釘付けになっている。
その視線の先に居たのは……

「詠ちゃーん！」

「ほら月、遅いわよ！」

「詠ちゃん、こっちだよー。道、違うー！」

「え、ちょっと、それを先に言いなさいよ！」

「……」

張遼は、董卓と賈駆の無事な姿を確認する事が出来て、思わず瞳を

潤ませる。

「張遼、どうかしたのか？」

「いや、何でもない。ちょっと眼にゴミが入ったみたいや……」

「……そうか。なら、オレ達も本陣に戻ろうぜ」

零治は張遼の心中を察したのか、深くは聞かず、周りに本陣に戻るように声をかけ、足を進めだした。

（良かったな、月、賈駆っち。なんや、ええ居場所があったみたいで……）

……

……

…

「あ、華琳様ー。どうかしたのー？」

本陣の救護所で救護班を務めている沙和が、慌ててる様子で駆けつけてきた華琳の姿を確認し、声をかける。

「沙和！　春蘭はどこ！」

「はい。春蘭様なら、そこの寝台に……あれ？」

だが、その寝台に春蘭の姿は無かった。

「春蘭っ！」

「あ……っ！」

華琳が来るのを察知したのだろうか、春蘭はこっそりとその場から抜け出そうとしていたが、すぐに華琳に見つかってしまい、春蘭は逃げるようにその場から走り出し、華琳も大急ぎで後を追う。

「ちょっと、待ちなさいっ！」

「待てませぬっ！」

「待ちなさいと言っているのが、聞こえないの！」

「華琳様のご命令とはいえ、それだけは聞けませんっ！」

「ええい、この子ったら！」

問答しながらも追いついた華琳は背後から春蘭の手を掴み、そのま

まグイッと引っ張って春蘭を引き倒し、尻もちをつくように転んだ春蘭の正面に回り込み、その顔を確認する。

「……」

「……その眼はどうしたの」

「張遼さんと闘った時に、流れ矢に当たったの」

「おいこら、沙和っ！　それは内緒だと……！」

「あー……あははー♪」

とはいえ、もう喋ってしまったのでどうしようもない。とりあえず、沙和は笑ってごまかす。

「そう。流れ矢に当たって……」

「申し訳ありません……。このような醜い姿……もはや、華琳様に会わせる顔がありません」

「どこを失ったというの？　失ったものなど、何も無いでしょう？　いつもの春蘭と変わりないわ」

「しかし、この左眼は……！」

「その瞳は私への忠誠の証として捧げてくれたもの。春蘭の体は春

蘭の物でも、春蘭の左眼と心は、ずっと私のものよ」

華琳は慈愛の満ちた笑みを浮かべながら、優しく春蘭の頬を撫でる。

「華琳様……っ！　う……うぅ……っ！」

春蘭の残った右眼から、ぽろぽろと涙が溢れ出てくる。

「よくやってくれたわね、春蘭。これからも私の剣となって戦ってちょうだい……」

「うわあああああああんっ！」

春蘭は華琳に抱きつきながら子供の様に泣きじゃくった。

「……」

沙和はしばらく二人だけにしてやろうと気遣ったのか、無言でその場から立ち去って行った。

しばらく歩いて、救護所に向かっていた零治達と鉢合わせする。

「ん？　どうしたんだ、沙和。お前、救護所に居たんじゃなかった

のか？」

「なんだか、お邪魔みたいだから出て来たの」

「そうか。なら、オレ達ももうしばらく後にしてからの方がよさそうだな」

「……ええ主やな。アンタらの主は」

「ああ。で、逃げないのか？　霞」

秋蘭の言葉に張遼は首を横に振り、ニッと笑ってみせて答える。

「ンな必要あるかい。あの主なら、色々楽しませてもらえそうや。色々肩の荷も下りたし、当分世話ンなるで。よろしゅうな！」

こうして、大陸の諸侯達を巻き込んだ反董卓連合の戦いは終わりを告げた。

……

……

…

洛陽を立ち去り、自分の領地の帰路についてる劉備軍陣営達。

黒狼は一人思案を巡らせている。

（ようやく下らん戦いも幕を下ろしたか。これでようやく私も本格的に動く事が……ん……？）

黒狼の視線が、街道の脇に生い茂っている森に止まり、黒狼は不意に足を止める。

「……」

「黒狼さん、どうかしたんですか？」

気になった劉備が話しかけ、黒狼は目の前の森を睨み付けたまま口を開く。

「劉備、すまんがあの森を少々調べたい」

「え？　森を……ですか？」

「心配はいらん。時間は取らせん」

「分かりました」

「すまんな。……金狼、銀狼、貴様らも来い」

「はいはい……」

「ケッ！　メンドくせぇなぁ……」

二人は不満げながらも黒狼の言葉に従い、彼の後に続き、茂みの中に足を踏み入れて行った。

「……」

黒狼は終始無言のまま草木が生い茂っている獣道をズンズンと歩いていく。

「おい、黒狼。こんな森の中に一体何の用が有るって言うんだよ？」

「貴様がそれを知る必要は無い」

「何だよそりゃ……」

「いいから黙って歩け」

「やれやれ。相変わらずアンタの考えは理解できないよ」

「理解する必要は無い。貴様らは私の命令に従っていればいいんだ……」

「まったく、人使いの荒い上官殿だね」

「無駄口を叩くな」

金狼と銀狼は黒狼の行動を疑問に思いながらも彼の後に続き、しばらくの間足を進める。

やがて小川がある開けた場所に出ると、そこにはあまりにも場違いな物が存在していた。それは……

「おい、これって……」

「ああ。戦闘獣人（バイオロイド）の培養カプセルだね。しかもこれ、戦闘獣人の製造区画ではなく、神器が封印されていた地下区画に有った物だね。何でこんな物がこんな場所に？　ひょっとして、あの時の転移現象にコイツも巻き込まれたのかな？　でも、あの現象が発生したのは最上階の制御室内だったから、地下にあったはずのコレが転移するはずが……」

「この際そんな事はどうでもいい事だ。銀狼、貴様は劉備の所に戻って、ここに兵を何人か連れて来い。それと荷車も持ってこさせろ」

「ああ？　何でだよ？」

「コイツを回収するためだ。早くしろ。それとも、ここで私と邪魔な草木の除去がしたいのか？」

「チッ、分かったよ……」

銀狼は不満げに舌打ちをして、来た道を戻っていった。

「黒狼、荷車って……まさかカプセルごと回収するつもりなの？」

「そうだが？」

「それは無理なんじゃない。この世界の荷車が、こんな機械の塊の重量に耐えられるとはとても思えないんだけど……」

「その時は物質変換魔法で荷車を頑丈な物に創り変えて強化すればいい。それより金狼、貴様は私と一緒に邪魔な草木の除去を行え」

「はいはい」

二人はカプセルの周りに茂っている邪魔な草木を、自らの神器で切り払い始める。

「それにしても、よくこれがココに有るのが分かったね、黒狼。一体どうやって察知したんだい？」

「ただの勘だ……」

「ふーん……。ん……？」

不意に金狼の視線が、カプセルの底の脇の左右に取り付けられてる、ある物に止まる。

「どうした？」

「黒狼、このカプセルの脇に取り付けられてる、この手甲と具足って……神器だよね？」

金狼が指差してる、狼の頭部を模った白銀の手甲と、狼の後ろ足を模った白銀の具足は陽光を反射させながら煌いている。

「ああ、そうだな」

「でも変だな。確か戦闘獣人って、神器は使えないように調整されていたはずじゃあ……」

「量産型はな。だが、コイツは例外だ……」

「例外？」

「コイツはな、現存する戦闘獣人の原点……つまり、プロトタイプだ」

「プロトタイプ！？　コイツがっ！？」

金狼が珍しく驚きの表情を浮かべ、声を張り上げ、カプセルに視線を向ける。

「何をそんなに驚いているのだ？　量産型が存在しているのなら、試作型が存在しているのは当然だろう？」

「いや、確かにそうだけど……現存してるなんて普通は思わないだろう？　プロトタイプなんて、とっくの昔に破棄されているものだとばかり思っていたから……」

「まあ、確かにそうだな。……それより無駄話はココまでだ。早いとこ作業を終わらせるぞ」

「ああ」

二人は黙々と草木の除去作業に専念する。その時、黒狼がカプセルのすぐそばに無造作に落ちていた一冊の本を見つけ、拾い上げる。

「ん？　これは……」

「どうしたんだい？」

「いや、何でもない」

「そう」

（これは……魔導書だな。しかもこれは……フッ、丁度いい。保険としてこれも一緒に回収しておくとしよう）

黒狼はコートの下に、血のように真っ赤な表紙の禍々しい雰囲気の

ある魔導書を仕舞い込んだ。

「黒狼、銀狼が戻ってきたよ」

「ああ」

「ったく、こんな面倒事はこれっきりにしてくれよな」

（クックック。これでこの外史の下らん茶番劇にも、少しは楽しい演出が加えられるというものだ。影狼、これから先に待ち受ける血みどろの殺し合いを、共に楽しもうではないか）

黒狼はその場に居る者全員を震え上がらせるような冷たい笑みを浮かべながら、この先に待ち受ける零治達との戦いに胸を躍らせていた。

第２８話　反董卓連合終結（後書き）

作者「さあ……では……恒例……の」

零治「おい、なに頭をユラユラ揺らしてんだ。新しい遊びか？」

瑠利亜「いや、眠いんですよ。仕事が朝帰りだったから」

奈々瑠「だったら寝てればいいじゃないですか」

作者「いや……ちゃんと……寝た……ぞ」

臥々瑠「どれぐらい？」

作者「４時間……く……らい……」

零治「それは寝たとは言わん。お前、今日はもう寝てろ」

作者「いや……それ……は」

瑠利亜「いいから寝なさい」

作者「分かった……」

奈々瑠「やれやれ。今回の話、気になる事があったのに、触れる事も出来ませんでしたね」

臥々瑠「次の機会でいいんじゃない？」

零治「アイツが素直に喋るとは思えんがな」

瑠利亜「むしろ忘れてるのでは？」

零治「いや、それは流石にないだろう……」

第２９話　戦闘獣人の力（前書き）

またまた投稿が遅くなってしまいました。ホントにサーセン……
言い訳になってしまいますが、最近軽いスランプに陥ってるのでなかなか執筆が進まなくて。
どこかにいいネタはないものか……

第２９話　戦闘獣人の力

とある昼下がりの日。
城の中庭内に金属同士がぶつかり合う軽快な音が響き渡っている。

「瑠利亜、踏み込みが甘い！　そんな事では金狼とは対等には渡り合えんぞ！」

「これは手厳しい……」

「奈々瑠、お前の長所はスピードだ！　その速さを生かし、相手を翻弄するように闘え！」

「は、はいっ！」

「臥々瑠、そんな大振りの攻撃がオレに当たると思ってるのか！時にはフェイントも織り交ぜるようにしろ！」

「え～！？　ブーブー！」

「この程度の事でブーたれるな……」

零治は、瑠利亜、奈々瑠、臥々瑠の三人を相手に戦闘訓練を行っており、中庭には彼らの持つ武器同士がぶつかり合う金属音と零治の怒鳴り声が響き渡る。

「あれ？　隊長、なにしとんの？」

「……っとお、真桜か。それに、凪達に霞も一緒か」

「隙有りー！！」

零治の視線が真桜達の方に向いたので、臥々瑠が背後から攻撃を仕掛けるが。

「フンッ！」

「うわっと！？」

素早く反応した零治は叢雲を振り上げ、臥々瑠の一撃を弾き返す。

「あんな大声で叫んだら、相手が隙を見せても意味ないだろうが……」

「ブー、兄さん空気を読んでよ～」

「そう言うお前こそ空気を読めよ……」

「ブーブー」

「臥々瑠、やめなさい。みっともないわよ」

「なにさ、奈々瑠まで……」

臥々瑠はすっかりふて腐れてしまう。

「隊長、凄いねー。その三人を同時に相手出来るんだもん」

「これくらい大した事ではない。それより、なんでお前らは霞と一緒に居るんだよ？」

「えー？　別にええやん。警備隊の皆さんと仲良うしたって。なー？　真桜ちー」

「なー？　姐さん」

「あー。お姉様、私とは仲良くしてもらえないんですかー？」

霞はあっけらかんと答え、真桜、沙和といちゃつき始める。

「ん？　そんな事無いで。ウチの愛は、色々と平等やからなー。だからほら、凪っちももそっとちこう……」

「いえ、遠慮しときます……」

「ああもぅ、堅いなぁ」

「別に仲良くするのは良いんだけどよ……」

「姐さんにお姉様……とかって」

零治と瑠利亜は顔を見合わせ、彼女達のやり取りにどう反応していいか困り果てる。

「あー。隊長、ウチらと姐さんが仲良うしとるから、ヤキモチ焼いてくれとん？」

「ふふっ。それはそれで、なんだかくすぐったいですねー。お姉様ー」

「安心せえ。そういうコトする時は、零治もちゃーんと呼んだるさかい！」

「いや、何する気だよお前ら！？」

「何って……なぁ？」

「決まっとるよなぁ？」

霞と真桜は頬を赤らめながら互いに顔を見合わせ、そこから先を語ろうとしない。

「お前ら、邪魔だから帰れ」

零治は三人に、シッシッ、と言わんばかりに猫を追い払う仕草をし、言い放つ。

「えー、隊長のいけずー」

零治の素っ気ない態度に、沙和は膨れっ面をする。

「それでは隊長、よろしければ私と手合わせをしていただけないでしょうか？」

「凪が？」

「ちょっ！？　凪やめときって！　隊長の強さは知っとるやろっ！？」

「そうだよー。いくら凪ちゃんでも勝てるわけないのー」

「どうしたん二人とも？　零治ってそんなに強いが？」

霞は首を傾げながら真桜達に訊く。

「いや、強いなんてもんじゃないですよ、姐さん！　隊長には、あの春蘭様ですら勝てた事ないんですから！」

「惇ちゃんが。ウソー」

「霞様、これが実はホントなのー」

「んー。なんか信じられんなー」

霞は零治に値踏みでもするような視線を向けながら言う。

「霞様、確か霞様は反董卓連合時に、華雄と一緒にシ水関の防衛をしていましたよね」

「ん？　そりゃしちょったけど。凪、急にそんな事訊いてどないしたん？」

「では、華雄率いる二万五千の軍勢が、たった五人の人間に壊滅させられた事も」

「忘れる訳あるかい。あんな恐ろしい目に遭うのは二度とご免やで……」

シ水関の話を持ち出され、霞は心底嫌そうな表情になる。

「隊長と瑠利亜様は、その時の五人組の一人なんですよ」

「えぇっ！？　零治、それホンマ！？」

「ああ、本当だ」

「あぁ……それやったら真桜と沙和の反応も納得やわ……」

「なっ。凪、ホンマやめときやって」

真桜は必死の形相で凪を止めるが、凪は首を横に振りきっぱりと答える。

「もちろん隊長の強さは知っている。でもだからこそ、自分の力が今どの程度なのか確かめられるんじゃないか」

「まあ、オレは別に構わんが」

「じゃあ、私達は邪魔にならないように後ろに下がっておきましょう。二人とも行きますよ」

「はい」

「は～い」

「ほんなら、判定はウチがしたるわ」

凪は瑠利亜達と入れ替わりに零治の前まで移動し、戦闘体勢を整えて対峙する。

「では、お願いします」

「おう。いつでも構わんぞ」

「双方、構え……始めっ！」

「行きます、隊長！」

「フッ、いつでも来な……」

「何をしているの？」

「あ、華琳様ー」

霞の合図と共に、零治と凪がぶつかり合おうとする瞬間のタイミングに、春蘭と秋蘭と桂花を連れた華琳がその場に現れる。

「てえええええいっ！」

「おおおおおおおっ！」

凪が渾身の回し蹴りを零治に向かって放つが、零治も負けじとその一撃を叢雲で受け流す。

その場には、零治の叢雲と、凪の手甲、閻王がぶつかり合う金属音が響き渡る。

「むぅ……」

「へぇ……これは面白い組み合わせね」

「はい。凪が音無を相手に、どこまで食い下がる事が出来るか見ものですな」

「……凪に勝ってほしいわね」

「どうしてですかー？」

「そんなのもちろん、あの男が負ける姿が見たいからに決まっているじゃない」

二人が真面目に闘っている中、不純な動機を漏らす桂花。

「双方、やめっ！」

「終わったようですね」

霞のやめの一声がかかり二人は闘いの手を止める。当然ながら結果は零治の勝利である。

「ふぅ……。やはり隊長と闘うにはまだまだ力不足ですね……」

「いや、そんな事はないぞ。こっちも何度かひやひやする場面があ

ったからな。まあ凪はまだ粗削りな部分はあるが、磨けば良い拳闘士になれるぞ」

「ありがとうございます」

「凪、お疲れさん」

「おつかれなのー」

「零治～、今度ウチとも手合せしてやぁ」

「暇があったらな。……ん？　華琳達も来ていたのか」

「ええ。相変わらず見事な剣術ね、零治」

「お褒めに預かり恐悦至極」

零治は口ではそう言うが、あまり嬉しそうな反応ではなかった。

「音無、一つ疑問があるんだが、訊いても構わんか？」

「なんだよ？　秋蘭」

「お前達が鍛錬に使っているその剣なのだが……それは模造刀なのか？」

「いや、いつも使っている物……つまり本物だ」

「隊長、それって危ないんじゃないですか」

「うんうん。当たったら怪我どころじゃすまないよねー」

「せやで。隊長、訓練中に相手を殺してしもうたとか……シャレにならんやん……」

「だからそうならないように、凪との闘いでは峰を使っていたじゃないか」

「加えて言うと、私達の武器には『訓練形態』というものが存在していまして、刃の周りに特殊な結界を貼って相手に怪我を負わせないようにすることが可能ですので、その心配は有りませんよ」

「まあそれでも、当たると痛いがな……」

「よく言いますよ。いつも一方的に私達三人をボコボコにしているくせに……」

「それはお前らがオレより弱いから悪いんだ」

「むっ！　兄さん。いくら兄さんでもそのセリフは聞き捨てなりませんよ」

「そうだそうだ～！　強いからってえばるのは良くないぞ～！」

「フッ。そんなに悔しかったら、オレに勝ってみせろよ」

零治は余裕の笑みを浮かべ、奈々瑠と臥々瑠の講義をどこ吹く風と

受け流す。

「……音無」

「ん？　なんだ、春蘭」

「私と、しろ！」

「え！？」

「姉者！？」

「春蘭様！？」

「惇ちゃん！？」

「……はっ？」

春蘭の口から爆弾発言とも取れるとんでもない内容のセリフが飛び出し、その場に居る人間全員が眼を丸くして春蘭を見つめる。

「どうした？　みんなそんな顔をして」

「いえ……いきなり凄い発言が出たなぁ……と」

「……？」

沙和の言っている意味が理解できず、春蘭は首を傾げる。

「一体零治と何をするつもりなの、貴方は」

「何をと言われても……。音無に、今日こそ私が貴様より強いという事を証明してやるから、いざ尋常に勝負しろ覚悟しておけよふははははー、と言ったつもりなのですが……」

「姉者。間を全部飛ばして話すのはやめてくれ」

「……ふむ？　気をつければいいんだな？　分かった」

（いや、絶対に分かっていない顔だな、こりゃ）

とは言え、春蘭にそんな事を言っても無駄なので、零治は黙っていた。

「つーか、お前いっつも事あるごとにオレに勝負を持ちかけては負けてばかりじゃねぇか。それに今日は華琳も居るんだぞ。連敗記録を更新したい上に、また華琳の前で恥をかきたいのか？」

「なんだとぉ！？　貴様ぁ、また私が負けると言いたいのかぁ！」

「違うのか？」

「あら、随分な自信じゃないの、零治。なら、今回も貴方が勝つと

？」

「ああ」

「ふむ……春蘭っ！」

「はっ！」

「魏武の大剣の力、零治に見せてあげなさい。もし零治に勝つ事が出来たら……ご褒美として、今夜は閨でたっぷりと可愛がってあげるわよ？」

「なっ、なんとっ！？　ほ、本当ですか、華琳様っ！？」

「ええ」

「はっ！　この夏侯元譲、華琳様の愛のために必ずや貴方様に勝利を捧げて見せますっ！！」

華琳の一言で、春蘭の瞳に闘志の炎が燃え上がり、気合を充実させる。

「零治、いいんですか？　ここまで来たら後には引けませんよ？」

「構わん。どうせオレが勝つからな。……おい、春蘭」

「なんだ？　今更やめにするとでも言うつもりではないだろうな」

「それは無いから安心しろ。……どうせやるんなら実戦に近い形式が良いんでな。お前も完全武装で来いよ」

「よかろう。ならば準備をしてくる。いいか、逃げるんじゃないぞっ！」

「はいはい……」

春蘭は装備を整えるために猛スピードでその場を後にする。それから待つこと数分。

「待たせたな！　さあ、始めるぞ！」

「早っ！」

完全武装した姿の春蘭がその場に戻ってくる。

「ん？　どうした？」

（いや……まだ五分も経ってないだろ。どうしてコイツは華琳が絡むと普段以上の力を発揮するんだよ……）

「おい華琳、コイツどうして普段から……って、何やってんだお前らーーーー！！」

零治が何気なく後方を振り返る。
その視線の先には、いつの間にか大容量の観客席。そしてその最前列には、これから始まる試合を解説するための実況席まで設けられていた。

「頑張ったんやで！　褒めて！」

「そんな事で頑張るくらいなら、普段の仕事を頑張れよなぁ！」

ドリルを片手にやりきったという達成感を漂わせる笑顔の真桜。
わずか数分で、零治が気付かぬ間に見せた仕事ぶり。匠も驚きである。

「さあ始まりました世紀の一戦、我が軍最強、魏武の大剣の異名をとる夏侯惇将軍対、同じく我が軍最強、黒き閃光の異名をとる音無零治の時間無制限一本勝負！　実況はわたくし李典と……」

「曹魏三千万のみんなの歌姫、数え役満☆しすたぁずのちーほーちゃんでーーーっす！　よろしくぅ！」

（何だ黒き閃光って……？　そんな通り名初耳だぞ……。てか、おかしいだろ。黒は光が無いから黒なんだぞ。黒い光なんてあるわけないだろ……）

「なお、解説には我らが主、曹操様と、軍師の荀イク様、そして我らが警備隊の副隊長、瑠利亜様にお願いしてあります。お三方、今日はよろしくお願いいたします」

「ええ。見所のある勝負になる事を期待するわ」

「どっちも死ねばいいのに」

「何で私まで……」

「華琳、お前まで何を……」

「あら、こちらを見ていていいの？」

「あん？」

「でやあああああああっ！」

後ろを向いたままの零治に向かって、春蘭は裂帛の気合いと共に必殺の一撃を放つ。

「うおっとっ！？」

零治は慌てながら反応してバックステップでその一撃を躱し、零治が先程まで立っていた場所に、ぶぅんと春蘭の大剣が振り抜かれる。

「あーっと！　いきなり夏侯惇将軍、得意の喧嘩殺法で先制攻撃を仕掛けたーっ！　これは非道、これは極悪！　まさに問答無用の一撃だー！」

「おいっ！　春蘭、まだ試合の合図は……」

零治は視線を判定の霞に移すが、霞はもの凄く楽しそうに首を振ってる。つまりはそう言う事だ……

（ああ……どいつもコイツも……）

「そんなもの待っていられるか！　そもそもお前は、合図が無ければ喧嘩も戦も始まらんとでも思っているのか？」

「この発言、どう思われますか？　解説のお三方」

「戦でそんな事をしたら、他国からの笑いものだわ。武人としての恥を知ってほしいわね」

「まあ、あの理屈も間違ってはいないわね」

「なるほど。……瑠利亜様はどう思われますか？」

「……もうどうにでもなれ……」

瑠利亜は項垂れながら投げやりに呟く。

「そうこうする間にも夏侯惇将軍、攻めの手を緩めない！　対する音無もそれを上手く捌いてはいるが、若干押され気味かー！？

これはもしかしたらもしかするのかーっ！？」

地和も真桜同様に実況に熱が入り、ハイテンションで声を張り上げる。

「はーっはっはっは！　どうしたどうした！　押されているではないか、音無！」

「ちっ……！　言わせておけば……うらあああっ！」

零治は渾身の力を籠め、叢雲を春蘭に振り下ろす。

「ふんっ！」

「なにっ！？」

しかし春蘭はその一撃を受け止め、鍔迫り合いに持ち込む。

「……やるじゃねぇか」

「当然だ！　そういつまでもいいようにやられはせんぞ！」

「えーっと。解説の曹操様。夏候惇将軍、随分と持ちこたえてますね。それに上手く零治の動きにも対応しているような……。聞いた

話では、夏候惇将軍は零治に一度も勝った事が無いとの事でしたが……」

困惑の表情で地和が華琳に訊き、華琳は冷静に状況を分析して答える。

「恐らく、春蘭は今までの零治との模擬戦を通じて、零治の動きを徐々に覚えてきたのね。それで彼の動きにも的確に対応できるようになったのよ」

「ならもしかしたら……」

「ええ。春蘭が勝つ可能性もあるわ」

「さあ、それはどうでしょうね……」

「どういう事、瑠利亜？」

「確かにあのまま試合が進めば、春蘭が勝つ可能性もありますが……」

「瑠利亜はそうはならないと？」

「そうですねぇ。零治はああ見えて負けず嫌いな部分がありますから、もしかしたら彼は切り札を使うかもしれませんね」

「切り札？」

「ええ。それも……反則と言ってもいいほどの、ね……」

「どういう事？」

「まあ、見ていれば分かりますよ。……ほら、そろそろ決着がつきそうですよ」

瑠利亜は顎をしゃくり、華琳に試合に眼を向けるよう促す。

「はーっはっはっは！　どうやら今日こそ私の勝ちのようだなぁ！」

「くっ！」

「そろそろ終わりにさせてもらうぞ。……たあっ！」

「なっ！？」

春蘭は剣を掬い上げるように上に振り上げ、零治のガードを崩す。
零治は剣を弾き飛ばされこそしなかったが、その衝撃で腕ごと上に跳ね上げられ無防備状態になってしまう。

「もらったぁっ！！」

春蘭が零治に渾身の一撃を浴びせにかかる。

（ちっ！　このまま負けて春蘭にデカイ面をされるのも癪だ。なら……）

零治は眼を閉じ、意識を集中する。そして……

「雲の幻影（ヴォルケ・ゲシュペンスト）……発動……」

春蘭の一撃が当たる直前に零治は呟く。
次の瞬間、春蘭の一撃が零治に当たる。だが……

「へっ？」

春蘭の剣は零治の身体をすり抜け、大きく空振りをする。零治の身体の剣が当たった部位はまるで雲のようにゆらゆらと揺らめきながら霧散し、やがて元の状態に戻る。
春蘭は何が起こったのか理解できず、呆気に取られながら間抜けな声を出し、硬直してしまう。そして、その一瞬の隙を零治は見逃さなかった。

「フンッ！」

「うわっ！？」

零治は無防備な状態の春蘭に剣を打ち込み、春蘭の剣を上空に弾き飛ばし、春蘭の喉下に切っ先を突きつける。
瑠利亜、奈々瑠、臥々瑠を除く全員の観戦者達は何が起こったのか分からぬまま声を失う。

「霞、判定はどうした？」

「えっ？　……あ、ああ、し、勝者、音無零治！」

霞は零治に声をかけられ我に返り、声高らかに零治の勝利宣言をする。

「おーっ！　ここで勝負が決りました！　勝利したのは我らが隊長、音無零治です！　一体何が起こったのかはさっぱり分かりませんが、我らが隊長が見事に勝利を収めましたぁ！」

「瑠利亜、もしかして……さっきのアレが、貴方が言っていた零治の切り札なの？」

「ええ」

「一体アレは何なの？　春蘭の一撃が零治の身体をすり抜けたように見えたけど……」

「アレは叢雲の力の一つで、あの術を発動した零治には物理的攻撃が一切通用しなくなるんですよ」

「それって……つまり」

「ええ。あの時の零治は完全な無敵状態です。何をやっても彼を倒すのは不可能になるんですよ」

「なるほど。確かに反則と言ってもいい切り札ね……」

「でしょう？　まあアレには長時間使えないという欠点もありますがね。だからそうおいそれとは使えないんですよ」

「例えそうだとしても、この世界の人間から見れば十分な脅威よ。攻撃が一切通用しなくなるんだから」

「くっそーーっ！　音無！　何だ今のアレは！？　あんな術が使えるなんて聞いてないぞ！」

「そりゃ教えていなかったんだから当たり前だろうが」

納得のいかない春蘭は怒鳴り散らしながら抗議してくるが、零治は涼しい顔で受け流す。

「音無！　もう一度勝負しろっ！　次こそは勝つ！！」

「何度やっても結果は同じだ。潔く負けを認めろ」

「いいや！　次は負けん！　次は先程の術を使う間など与えはせん！　さあ、さっさと構えろ！」

「姉者。武人なら武人らしく負けを認めろ」

「うぅ……秋蘭までぇ……」

「それに、私も先程傍らで瑠利亜の話を聞いていたが、あの状態の音無には攻撃が一切通用しなくなるそうだ。音無の言うように、何度やっても結果は変わらんと思うぞ」

「むぅ……しかし……」

「見苦しいわよ、春蘭。これ以上は恥の上塗りでしかないわよ」

「か、華琳様ぁ……」

「零治」

「ん？」

「見事な闘いぶりだったわ。これからも私の覇業を支えるために、よりいっそう励みなさい」

「へいへい」

「貴方もね、春蘭」

「はい！　で、華琳様、ご褒美は……？」

「勝負に負けたんだからあるわけ無いでしょう」

「うぅ……」

「なら、勝負も終わった事だし、ここの片づけを……」

「待ってください！」

突如、奈々瑠が声を張り上げるので、何事かと全員の視線が集中する。

「あら、奈々瑠。どうかしたの？」

「兄さん、まだ疲れてはいませんよね？」

「ああ」

「なら……次は私と臥々瑠と勝負をしてください！」

「どうしたんだ突然？　訓練ならもう十分にやっただろう？」

「それはそうなんだけど……兄さんの闘いを見ていたら、なんだか身体がうずうずしてきて、闘いたいって気持ちが抑えられないんだ」

（やれやれ。どうやら春蘭との闘いで、戦闘獣人（バイオロイド）特有の闘争本能を刺激しちまったみたいだな。……まったく、叡智の城（ヴァイスハイト）を創った連中も厄介な兵士を創り上げたもんだな……）

「面白そうね。零治、付き合ってあげなさい。大事な妹達の頼みでしょう？」

「もとよりそのつもりだ」

「よろしい。……真桜、地和。そういう訳だから、引き続き実況をお願いね」

「はい、お任せを。……ではこれより、我らが隊長と、警備隊員達の癒しでもある、犬耳姉妹の奈々瑠と臥々瑠による第二試合を始めたいと思います！　実況は引き続きわたくし李典と」

「地和ちゃんでお送りいたしまーーすっ！」

（なっ！？　何だ癒しって！？　まさか警備隊の連中、あの二人に何か妙な事でもしようと……っ！　もしそうなら、吊るし上げて二度と朝日を拝めないように……！）

零治は真桜の口から出た思わぬ話に、わなわなと身体を震わせながら険しい顔つきになる。

「ん？　零治、どないしたんや？　そんな怖い顔して」

「何でもない……」

「そうか。ほんなら……双方、前へ！」

「はいっ！」

「うん！」

奈々瑠と臥々瑠は気合を充実させ、零治の前に対峙する。

「三人とも準備はええか？」

「ああ」

「いつでも」

「……」

「なら、双方、構え……始めっ！」

「行きますよ、兄さん！」

「おう。いつでも来い」

「臥々瑠っ！」

「うん、分かってる！」

「「はあああああっ！！」」

奈々瑠と臥々瑠は互いに交差するように跳躍し、正面から零治に向かって斬りかかる。

「フッ……遅い！」

しかし、零治は余裕の笑みを浮かべながら身体をゆらりと軽く揺らして、滑り込ませるように移動させながら二人の背後に回りみ、その攻撃を躱す。

「おーっと！　会戦と同時に犬耳姉妹が隊長に見事な連携攻撃を繰り出したが、我らが隊長はその一撃を余裕の笑みで躱したーっ！」

「動きが直線的過ぎる。その程度ではこのオレを捉える事は出来んぞ」

「今のはほんの小手調べですよ、兄さん」

「そうそう。勝負はこれから！」

（今日は二人ともいやにテンションが高いな。今までこんな事はなかったんだが……）

「臥々瑠っ！　アレをやるわよっ！」

「オッケーっ！　……でやあああああっ！！」

臥々瑠は鵜丸を鞘にしまい、クルクルと身体を回転させながらその場から跳躍し、零時が立っている位置より少し手前の地面に渾身の力を込めて拳を叩きつけ、中庭の地面を砕き、臥々瑠の目の前に瓦礫と化した岩盤がふわりと宙に浮かび上がる。

「ちょっ！？　お前らーーっ！　少しは加減しろーーっ！　どう考えてもやり過ぎだろ！！」

零治は二人の行動に対し怒鳴り散らすが、奈々瑠達は聞く耳を持とうとはしない。

「問答無用です！　臥々瑠っ！」

「分かってるよ！　それ、それ、それぇっ！！」

臥々瑠は目の前に浮かび上がっている瓦礫を零治に向かって次々と蹴り飛ばし始める。

「くっ！　おっとっ！？　……躱すのにも限界がある。やむを得んか……っ！」

零治は最初のうちは飛来してくる瓦礫を避け続けていたが、数が増えるにつれ厳しいと判断し、躱すのをやめて、叢雲を使い瓦礫を斬り刻み始める。

「くそっ！　おい臥々瑠っ！　もう少し手加減し……っ！」

零治が臥々瑠に向かって怒鳴り散らしながら、自身の真正面に飛来してきた一際大きな瓦礫を斬り裂いたその瞬間。

「ん？　なぁっ！？」

瓦礫の間から後ろに隠れていた奈々瑠が姿を現し、無防備な零治の懐に飛び込んでくる。

「油断大敵ですよ、兄さん！　せぇぇいっ！」

「ぐぅっ！」

奈々瑠はそのまま勢いをつけて、零治に渾身の力を込めた正拳突きを叩き込んでくる。
零治は咄嗟に防御をしてもろに喰らうのは避ける事が出来たが、勢いを受け止めきれずに瓦礫と共に後方へと吹っ飛ばされる。

「今度はアタシの番っ！」

「ちょっ！？　おま……っ！」

「でえええいっ！」

「ぐはっ！」

いつの間にか臥々瑠が零治の後方から姿を現し、無防備な零治の背に足刀蹴りを叩き込み、今度は前方へと吹っ飛ばされ、零治の目前に最後の瓦礫が迫ってくる。

「く……っ！　なろっ！」

零治はぐるりと体を一回転させ、飛来してくる瓦礫に一瞬だけ足を着け、そのまま軽く跳躍し、観戦席の前に着地して奈々瑠達から間合いを取り、体勢を立て直す。

「……えー、解説の曹操様。今のをご覧になってどう思われますか？　わたくし、もうどう実況していいか分からないんですが……」

目の前で繰り広げられてる闘いがあまりにも常識はずれなため、真桜は引きつった表情で華琳に解説を求める。

もちろん真桜だけに限らず、他の面子も目の前の闘いを見て完全に言葉を失っているが、ただ一人、瑠利亜だけは目の前の闘いを冷静に静観していた。

「そうね。少々やり過ぎな気はするけど、奈々瑠達の連携は、春蘭、秋蘭も顔負けの見事な動きとしか言いようがないわね。ただ、あの子達に関しては、私よりも瑠利亜に訊いた方が良いのではないかしら？」

下手をしたら城が壊されるかもしれない闘いぶりだというのに、華琳は至って冷静に答える。
流石に王を務めているだけあって肝が据わっている。

「なるほど。という訳で、瑠利亜様はどうご覧になりますか？」

「うーむ……どうも二人の様子が変な気がしますねぇ……」

瑠利亜は口元で両手を組んで、両肘を台の上に付きながら渋面を作り呟く。

「それはどういう事？」

「いや、二人ともやけに好戦的になってるような気がして……」

「……言われてみればそうね。でもそれは、闘いに熱が入ってるせいではないの？」

「それなら別にいいんですがね……」

瑠利亜はそうは言うものの、胸の内の不安は一向に晴れない。

「お、お前らぁ……ちょっと手加減してりゃあ調子に乗りやがって

……。もう勘弁ならん！　二人とも覚悟しろよ！」

零治は大人気も無く怒りを露わにし、霧散する雲を発動（ヴォルケ・フェアシュヴィンデット）し、その場から姿を消す。次の瞬間、奈々瑠と臥々瑠の目の前に姿を現す。

「なっ！？」

「げぇっ！？」

「さっきのお返しだぁ！　二人揃って吹っ飛べやぁ！」

零治は二人に目にも止まらぬ速さの居合いを放つ。
奈々瑠達は咄嗟にガードはするが、勢いまで止めるには至らず、二人揃って薙ぎ払われるように数メートル後方へと吹き飛ばされる。

「きゃあああああっ！」

「ふぎゃあああああっ！」

「おーっ！　一体何が起こったのでしょうか！？　突然音無零治の姿が消えたと思った瞬間、奈々瑠と臥々瑠の目の前に姿を現し、二人を勢いよく遥か後方へと吹き飛ばしたぁ！　しかしあれぐらいで怒るとは、零治は少々大人気が無さすぎるのではないでしょうかー！」

「そんな事言うんなら、お前もこの場に立ってみろ、地和ーーっ！」

「やーん。地和、闘うの苦手だもーん」

「瑠利亜、ひょっとして、今のも？」

「ええ。アレは一種の移動技です。まあ、距離に制限は有りますがね」

「アレは零治が次にどこから現れるかは分かるの？」

「いえ、現れるその瞬間まで分かりませんね」

「まったく、どれだけデタラメなのよ、彼は……」

「まあ、この世界の人間から見ればそれは仕方ないかと……。ところで真桜、試合の様子は？」

「あ、はい。……えー、見た所二人とも立ち上がる気配が有りませんねぇ。と言う事は隊長の勝利で……」

奈々瑠と臥々瑠は身体をくの字に折り曲げながら地面の上に伸びている。その場に居る人間全員が零治の勝利で終わったのだろうと思った。

「霞……」

「うーん、せやね。勝者、音無……」

「ん？　霞、待て」

「……」

「……」

霞が勝利宣言をしようとしたが、二人は無言でその場からむくりと立ち上がり、再び零治の前に対峙する。

「二人とも、もう十分だろう？　たかが模擬戦ぐらいでそんなムキになるなよ」

「いや……それはさっき大人気も無くブチ切れてた零治が言うセリフやないやろ……」

「うるさい……」

「……」

「……」

奈々瑠と臥々瑠は零治の声には反応せず、ただ零治の姿、その一点だけを、まるで野生の獣のような眼つきで見据えている。

と、その時、バチっと何かが弾けるような音がする。

「ん、何や今の音は？」

「奈々瑠の方から聞こえた気がするが……」

零治と霞は奈々瑠の方に視線をやる。
すると更にバチバチと音が鳴り響き、奈々瑠の周囲に青白い色をした無数の細長い光が走り、火花を散らしている。

「れ、零治。なんや奈々瑠の様子おかしいんやないか……？　それになんやのあの光は……？」

（アレはひょっとして……電流なのかっ！？　それにこの殺気は！？）

「ぐるるるる……」

奈々瑠は地を這うような低い唸り声を出しながら牙を剥く。それに呼応するように音は激しくなり、周囲を走る光も激しく火花を散らし始める。

「霞！　下がれ！」

「へっ？　いきなりどうしたんよ！？」

「いいから早く下がるんだっ！」

「お、おうっ！」

零治が凄い剣幕で鋭く叫ぶので、霞は慌てながら華琳達が居る観客席の方まで下がる。

「がああああっ！！」

それとほぼ同時に奈々瑠が天を仰ぎながら鋭い咆哮を上げ、周辺の空気が振動し、まるで落雷でも起きたような轟音が鳴り響き、高圧電流を帯びた青白い光を自身に纏う。

「ちょっと瑠利亜っ！　彼女、一体どうしたの！？　それにあの光はっ！？」

「分かりません！　ですが……あまりいい状況ではないのは確かですっ！　全員、何があってもここを動かないでくださいよ！」

瑠利亜は席に付いてる者達に鋭く叫び、解説席を飛び出して零治の下まで駆け寄る。

「零治っ！」

「瑠利亜、奈々瑠の奴、どうしちまったんだ……？」

「分かりません。ですが、決して穏やかな状況ではないのは確かで

す。それに今の彼女、超高圧の電流を帯電していますよ」

「なあ、アレって何ボルトあると思うよ？」

「そんなの分かるわけないでしょう。分かっているのは……食らったらただじゃすまないって事ぐらいですよ」

「やはりアレは、模造兵器（イミテーション・アームズ）の力なのか……？」

「そうとしか思えませんよ。しかし、まさかこれ程とは思いませんでしたがね……」

「流石は神器（ディバイン・アームズ）のコピーと言うべきか」

「っ！？　零治、来ますよっ！」

「うがあああああっ！」

奈々瑠は二人が居る場所まで跳躍し、電流を帯びた拳で殴りかかろうとするが、一瞬速く二人はそれぞれ左右にステップして奈々瑠の強力な一撃を躱す。

奈々瑠の拳は地面に叩きつけられ、その場に激しい電流を流し、腹の底に響くような轟音を立てながら地面を陥没させた。

「なっ！？　何て威力だっ！　瑠利亜、お前の矢で何とか出来ないのかっ！」

「無茶言わないでください！　彼女がすばしっこいのは知ってるで

しょう！　狙いを定めている間にこっちがやられちゃいますよ！」

「じゃあどうするんだよ！？　今のアイツは高圧電流を纏ってるから、下手な事するとこっちが感電しちまうぞ！」

「言われなくても分かってますよ！　とにかくどうにかして彼女の動きを……って、零治！　上っ！」

「はっ？　上？　……って、臥々瑠！？」

「ぐるるるる……」

二人は奈々瑠にすっかり気を取られ、臥々瑠の存在を失念していたようで、零治は上空を彼女に取られる。
臥々瑠の鵜丸が陽光を反射させながらその凶刃を煌かせる。

「ちょ！？　臥々瑠、冗談だろっ！？　ホントやめ……っ！」

「がああああああっ！」

「だあああああっ！！」

臥々瑠は問答無用の勢いで落下しながら零治に向かって刃を振り下ろす。
零治はその場から転がってその一撃を躱すが……

「ぐあっ！？」

臥々瑠の一撃が零治の脚をかすめ、右脚の脛の裏側に一筋の斬り傷が走り、傷口から鮮血が滴り落ちる。

「今の一撃……まさか……」

「いっつぅ……っ！」

「零治、大丈夫ですか？」

「ああ。何とか立つ事は出来る。だがどういう事だ？　確かに間合いからは出ていたはずだが……」

「零治、貴方の脚を斬ったのは正確には鵜丸の刃ではありません」

「はぁ？　なら一体……」

「水ですよ」

「水？」

「ええ。臥々瑠が鵜丸を振り下ろす瞬間に刀身から超高圧の水が噴き出したんですよ」

「つまり……水圧カッターと同じ原理って事かよ」

「ええ。その証拠に……ほら、あの地面」

瑠利亜は顎をしゃくり、零治に先程まで彼が居た場所を見るように促す。

「……おいおい。地面まで斬り裂いちまったのかよ」

「それに、斬り口の周囲が軽く濡れてるでしょう？　間違いなく水の仕業ですよ。アレだけの威力ですから、恐らくこの世界の鎧なんて紙同然ですよ」

「……なあ、オレ達って今、マジで命の危機に直面してんじゃね？」

「何を呑気な事を言ってるんですか！？　このままじゃ私達、本当に二人に殺されかねませんよっ！」

「零治っ！　大丈夫なのっ！？」

「音無、手に余るようなら私達も止めるのを手伝ってやるぞっ！」

華琳が心配そうに叫び、春蘭が剣を片手に意気込むが、零治は首を横に振る。

「大丈夫だ。心配するな」

「零治、心配するなって……何かいい案でもあるって言うんですか……？」

「瑠利亜、お前も後ろに下がってろ。下手をすると巻き込みかねんからな」

「何をする気ですか？」

「ちょっと練習中の技があってな。そいつを試すのにいい機会だ」

「……止められる確率は？」

「知るか」

「はぁ……知るかって……まあ、ここは一つその技に賭けてみましょうか」

「ああ。その代わり万が一には備えといてくれよ？」

「分かってます」

瑠利亜は華琳達の下まで後退し、静かに零治の動向を見守る。

「瑠利亜、零治は一体何をするつもりなの？」

「何でも練習中の技があるらしく、それを使って二人を止めるそうです」

「それは確実に二人を止められるの？」

「分かりません。まあここは彼を信じてみましょう」

「……ええ」

「そう心配なさらず。私も彼の万が一には備えておきますから」

瑠利亜はそう言って矢を創り出し、双龍につがえ、いつでも援護が出来るように射撃体勢を取る。

「やれやれ。よりによって、この技を最初に試す相手がお前達二人とはな……」

「ぐるるるる……」

「がるるるる……」

「そう唸るんじゃねぇよ。すぐに終わらせてやる」

零治は叢雲をベルトから鞘ごと天に掲げるように持ち上げ、柄に右手をかけて魔力を集中させる。
すると、零治の周囲に風が巻き起こり、叢雲に集中するように集まりだす。

「なに、アレ……？」

「分かりません。零治の周囲に風が吹いてるようですが、何なんで

しょうか？」

「叢雲の下に集いし風達よ。その一身を刃と化し、我が敵を打ち砕け！」

「「ぐあああああっ！！」」

奈々瑠達は零治の異変を本能的に気取ったのか、瞳をぎらつかせ、野獣のような咆哮を上げながら牙を剥いて突進する。

「巻き起これ……風よ！」

零治は叫びながら叢雲を引き抜き、刃を地面に叩きつける。その瞬間、零治の目の前に零治の身長と同じぐらいの高さのつむじ風が巻き起こり、それを確認した零治は叢雲を鞘に仕舞い込み居合いの構えを取る。
そして……

「吹き荒れろ……獰猛な嵐（アイン・ヘフティゲル・シュトゥルム）！！」

零治は渾身の力を込めて叢雲を抜刀し、目の前のに有るつむじ風を思いきり斬り上げる。
斬られた風は巨大な突風と化し、凄まじい轟音と共に砂塵を巻き上げながら奈々瑠達を目掛け一直線に地面を走る。

「「ぐぎゃあああああ！！？？」」

奈々瑠と臥々瑠は迫り来る突風を真正面からもろに受け、まるで枯葉のように空中へと舞い上がり、そのまま一直線に地面に落下。受け身を取る事も出来ず、地面に叩きつけられ意識を失った。

「ふぅー……」

二人が気絶した事を確認した零治は大きく息を吐きながら叢雲を鞘に納める。

「零治、終わったんですか？」

「多分な……。とりあえず二人を起こすぞ。瑠利亜、お前も来い」

「……気が乗らないんですが」

「おい。嫌な役回りを全部オレ一人に押し付ける気か……？」

「冗談ですよ。では行きますか」

「ああ」

二人は気絶している奈々瑠達の下まで、油断ない足取りで歩み寄り、

奈々瑠達を揺さぶり起こす。

「おい奈々瑠。いつまで寝てるんだ？　早く起きろ」

「臥々瑠、こんな所で寝てたら風邪をひきますよ。起きなさい」

「……う、うーん……」

「……うにゃ……あれ……？」

「二人とも起きたか？」

「へっ？　起きたって何の事ですか、兄さん？　それに、私達どうしてこんな所で倒れてるんですか？」

「えっ！？　奈々瑠……憶えていないんですか？」

「え？　何をですか？」

奈々瑠は瑠利亜の問いに首を傾げる。

傍らで見ていた零治は臥々瑠に先程の事を問いかける。

「臥々瑠、お前は？」

「へ？　何の話～？」

「零治……」

「ああ。どうも本当に何も憶えていないみたいだな」

「あの、二人でなんの話をしてるんですか？」

「二人とも、どこまで憶えてる？」

「何を？」

「だから、オレとの模擬戦での事だよ。どこまで憶えてるんだ？」

零治の問いに、奈々瑠と臥々瑠は宙を睨みながら考え込み、最初に奈々瑠が答える。

「えーっと……兄さんが正面から私達を吹っ飛ばした所までは憶えてるんですが……」

「その先は憶えていないのか？」

「うーん……あ、そうだ。地面に倒れた時、音が頭の中に聞こえたんです」

「音？　音って何の音だよ？」

「えっと……何と言うか、電流が流れるような、そんな感じの……」

「臥々瑠、貴方もそうなんですか？」

「ううん、アタシはそんな音じゃなかったよ」

「じゃあ何なんです？」

「うーん……水が流れるような、そんな音だったような……」

奈々瑠達の答えに、零治と瑠利亜は互いに顔を見合わせる。

「零治……これは」

「ああ。似ているな」

「へっ？　似てるって何がです？」

「私達が神器のスキルを使用できた時にですよ」

「……そうなの、兄さん？」

「まあオレ達の場合は音ではなく、そのスキルを象徴するような映像が頭の中に流れてきたんだがな」

「とりあえずその話は置いておきましょう。二人とも、音が聞こえたその後の事は？」

「……音が聞こえた後は、急に意識が遠くなって……その後の事は何も……」

「そうか。……瑠利亜、ちょっと二人がさっきの技を使えるかどう

か確かめてみるか？」

「いや、今はやめておきましょう。またさっきみたいな事になる可能性が無いとは言い切れませんから、別の機会にしましょう」

「……そうだな」

「貴方達、話は終わったのかしら？」

いつの間にか背後に立っていた華琳が零治達に話しかける。

「ん？　ああ、とりあえずは」

「そう。なら……私からも大事な話があるのだけれど」

「何だよ？」

「アレはどうするのかしら？」

華琳は普段の優雅な笑みを浮かべながら後ろ手で中庭を指差す。ただし、眼は笑ってはいなかったが……

「ん～……？　げっ！？」

零治達は華琳が指差す先を追うと、そこには零治が巻き起こした暴

風によって薙ぎ倒された庭木や、臥々瑠が蹴り飛ばして散らばった瓦礫、陥没してしまった地面などなど。
華琳が何を言わんとしてるのか察し、零治の顔に嫌な汗が流れ落ちる。

「私が言いたい事、分かるわね。零治……？」

「はい……」

「今日中に邪魔な瓦礫などは片づけておきなさい。それから園丁の手配をするわ。いいわね？」

「はい……」

「よろしい。なら、私は戻るわね」

華琳はクルリと踵を返し、城へと戻って行った。

「……なあ霞、お前も手伝って……って、いねぇし！」

辺りを見渡せば、霞どころか、凪、真桜、沙和を除く三人以外は全員その場から忽然と姿を消していた。
つまりは逃げたのだ。

「三人は逃げないのか？」

「いやー、出来ればそうしたかったんやけど、ウチらはこれをバラさないかんきよ」

真桜が急ごしらえで作り上げた観戦席をポンと叩いて答える。

「隊長、向こうが済んだら私達も手伝いますから、そう気を落とさないでください」

「うんうん。みんなでやればすぐに終わるのー」

「あぁ……ありがとな、凪、沙和」

「……」

臥々瑠は無言でコソコソとその場から逃げ去ろうとするが……

「臥々瑠、どこに行くつもりなの……？」

奈々瑠がガシっと肩を掴んで引き止める。

「えっ！？　えっと、その……」

「私達もやるのよ。いいわね？」

「……」

「い・い・わ・ね」

「は～い……」

「なら、早いとこ終わらせるとしましょうか」

「ああ……」

瑠利亜の一声で、零治達は一斉に作業に取り掛かる。

ただ、庭の被害が甚大だったのと、真桜が作った観客席があまりにもやっつけ作業で組み上げられていたせいでバラすのに手間取ってしまい、作業は夜を徹する事になり、翌日、零治達は寝不足の状態で普段の仕事をこなす羽目になってしまった。

第２９話　戦闘獣人の力（後書き）

零治「お前に言いたい事がある」

作者「聞きたくない」

零治「聞け。お前、最近投稿すんのが遅すぎないか？」

作者「ネタに困ってるんだよ。仕方ないだろ」

瑠利亜「よく言いますよ。基本的な部分は原作内容をそのまま使ってるくせに」

作者「あまり言ってくれるなよな。今回の話、かなり悩みながら書いたんだから」

奈々瑠「そんなにネタに困ってるんなら、アレを使えばいいじゃないですか」

作者「アレって？」

臥々瑠「ほら、以前の話で春蘭達に華琳用の服の案を用意した時の」

零治「ちょ！？　臥々瑠、余計な事をっ！」

作者「ああ、アレはまだ使わない」

瑠利亜「ならいつ使うんです？」

零治「使うのは確定なのかよ……」

作者「当然だ。んー、あの話は風達が参戦してからだな」

臥々瑠「じゃあ早くそこまで進めよう。気になるから」

零治「いや、全然今のままで十分だ！　そう急ぐ事も無いだろう！」

作者「そう言われると、急いで進めたくなっちゃうんだが」

奈々瑠「兄さん、もう諦めましょう？」

零治「ちくしょう……何とか妨害できる方法はないものか……」

瑠利亜「ある訳ないでしょうに」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2834q/

真・恋姫†無双　～戦乱を駆ける狼達～

2011年11月10日03時13分発行